

茨城県教育財団文化財調査報告第449集

つくば市

# 金田西坪B遺跡 2

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXXIII

令和3年3月

独立行政法人都市再生機構  
東日本都市再生本部  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第449集

つくば市

こ ん だ に し つ ほ び -  
**金田西坪B遺跡 2**

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXXIII

令和 3 年 3 月

独立行政法人都市再生機構  
東日本都市再生本部  
公益財団法人茨城県教育財団





調査区全景（平成29年度調査）



第28号掘立柱建物跡（平成29年度調査）



# 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部による中根・金田台特定土地地区画整理事業に伴って実施した、つくば市金田西坪B遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代から平安時代にかけて断続的に形成された集落跡や、奈良時代の河内郡衙を構成する施設の一部を確認しました。特に、奈良時代の四面廂建物跡や総柱建物跡などの掘立柱建物跡群は、郡司の居宅と考えられ、河内郡衙の様相を考える上で重要な資料となります。

本書を、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 柴原 宏一





# 例 言

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成28～30年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市金田字二本松台1626-1番地ほかに所在する<sup>こんだにし</sup>金田西<sup>つばびー</sup>坪B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成28年12月1日～平成29年3月31日  
平成29年 4月1日～6月30日  
平成30年 8月1日～9月30日  
整理 令和2年 4月1日～令和3年3月31日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
平成28年度  
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎  
次席調査員 木村 光輝  
次席調査員 大武 宣隆 平成28年12月1日～平成29年1月31日  
嘱託調査員 根本 康弘  
平成29年度  
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎  
次席調査員 清水 哲  
次席調査員 野内智一郎  
嘱託調査員 仙波 亨  
平成30年度  
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎  
次席調査員 三浦 裕介  
嘱託調査員 鯉沼 智彦
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長小林和彦のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員 齋藤 貴稚 令和3年3月1日～3月31日  
次席調査員 野内智一郎
- 5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。  
野内智一郎 第1章～第3章第3節4・第3章第3節6～4節  
齋藤 貴稚 第3章第3節5  
パリオ・サーヴェイ株式会社 第3章第3節3(4)
- 6 本書の作成にあたり、鍛冶関連遺物の自然科学分析、及び金属製品の保存処理については、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、石材の一部については、茨城大学名誉教授（地質学）・日立市郷土博物館特別専門職田切美智雄氏に、奈良時代の須恵器や掘立柱建物の配列については、ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター所長佐々木義則氏に、中・近世の遺物については、土浦市立上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員比毛君男氏にそれぞれご指導いただいた。
- 7 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X = + 10,760 \text{ m}$ 、 $Y = + 26,680 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図、遺構・出土遺物一覧で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット SA-柱穴列 SB-掘立柱建物跡 SD-溝跡 SF-道路跡  
SI-竪穴建物跡 SK-土坑 TP-陥し穴

土層 K-攪乱

土層解説 ローム-ロームブロック 焼土-焼土ブロック 粘土-粘土ブロック 粘-粘性 締-締まり  
サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

含有量 A-多量 B-中量 C-少量 D-微量







粘性・締まり A-強い B-普通 C-弱い

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面・黒色処理・被熱痕・	
	竈部材・粘土範囲・炭化物範囲・鉄滓附着		繊維土器	
	須恵器断面		柱痕跡・柱あたり	
●土器	○土製品	□石器・石製品	△金属製品	- - - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構・出土遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 出土遺物一覧の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告する遺構の調査年次は以下のとおりである。また、整理の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

平成 28 年度調査 (2016)

SI61 ~ 66, SB14 ~ 17, 第 2 号大型円形土坑, SK151 ~ 190, SD54 ~ 56・58, SF 3

平成 29 年度調査 (2017)

SI10 ~ 12・24・27・28・35・36・46・47・67 ~ 69・71・73 ~ 89・91 ~ 98, SB18 ~ 36, 第 1 号鍛冶工房跡,  
SK191 ~ 377・384・385, SD 5・8・59・61 ~ 64・66・67, SA 9・10, TP 4 ~ 8

平成 30 年度調査 (2018)

SK378 ~ 381, SF 3・4

遺構名変更表

旧遺構	新遺構
SI 27 P 5	SK 382
SI 28	第 1 号鍛冶工房跡
SI 73 P 7	SB 37 P 5
SB 29 P 8	SK 386
SK 171	第 2 号大型円形土坑
SK 192	SB 37 P 6
SK 205	SB 38 P 1
SK 218	SB 40 P 2
SK 219	SB 39 P 2
SK 220	SB 40 P 3
SK 221	SB 38 P 2
SK 256	SB 37 P 7
SK 265	SA 10 P 1
SK 266	SB 38 P 7

旧遺構	新遺構
SK 267	SA 10 P 2
SK 268	SB 38 P 6
SK 269	SB 39 P 6
SK 270	SB 40 P 6
SK 271	SB 38 P 5
SK 272	SB 39 P 5
SK 274	SB 40 P 5
SK 275	SB 40 P 1
SK 277	SB 39 P 1
SK 278	SB 37 P 9
SK 279	SB 37 P 8
SK 286	SB 37 P 1
SK 288	SB 37 P 2
SK 291	SB 37 P 4

旧遺構	新遺構
SK 292	SB 37 P 3
SK 305	SB 39 P 3
SK 306	SB 38 P 3
SK 310	SB 38 P 4
SK 311	SB 39 P 4
SK 312	SB 40 P 4
SK 339	SA 10 P 3
SK 367	SB 41 P 1
SK 368	SB 42 P 1
SK 369	SB 41 P 2
SK 371	SB 42 P 2
SK 372	SB 41 P 3
SK 373	SB 42 P 3

欠番遺構

SK152・155・165・167 ~ 170・183・206・207・212・223 ~ 225・228 ~ 230・232・236・248・253・  
262・281 ~ 283・295・300・303・307・309・313・317・320・322・323・325 ~ 328・330・348・350・  
356 ~ 358・363・370・383

# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

金田西坪B遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 土坑	21
(3) 陥し穴	38
2 弥生時代の遺構と遺物	41
(1) 竪穴建物跡	41
(2) 土坑	49
3 古墳時代の遺構と遺物	51
(1) 竪穴建物跡	51
(2) 鍛冶工房跡	91
(3) 土坑	96
(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析	99

4 奈良時代の遺構と遺物	118
(1) 竪穴建物跡	118
(2) 掘立柱建物跡	147
(3) 大型円形土坑	184
(4) 土坑	185
(5) 柱穴列	187
(6) 溝跡	189
5 平安時代の遺構と遺物	190
竪穴建物跡	190
6 中・近世の遺構と遺物	198
(1) 掘立柱建物跡	198
(2) 土坑	204
(3) 溝跡	206
(4) 道路跡	209
7 時期不明の遺構	210
(1) 土坑	210
(2) 溝跡	218
8 遺構外出土遺物	219
第4節 総 括	222
写真図版	PL 1～PL48
抄 録	
付 図	

# 挿 図 目 次

第1図 金田西坪B遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院25,000分の1「上郷」「常陸藤沢」「谷田部」「土浦」)	9
第2図 金田西坪B遺跡調査区設定図(つくば市都市計画図2,500分の1)	11
第3図 基本土層図	12
第4図 第36号竪穴建物跡・出土遺物実測図	13
第5図 第36号竪穴建物跡出土遺物実測図	14
第6図 第81号竪穴建物跡実測図	14
第7図 第81号竪穴建物跡・出土遺物実測図	15
第8図 第81号竪穴建物跡出土遺物実測図	16
第9図 第96号竪穴建物跡実測図	18
第10図 第96号竪穴建物跡・出土遺物実測図	19
第11図 第97号竪穴建物跡実測図	20
第12図 第97号竪穴建物跡出土遺物実測図	21
第13図 第153号土坑・出土遺物実測図	22
第14図 第181号土坑・出土遺物実測図	23
第15図 第182号土坑・出土遺物実測図	24
第16図 第182号土坑出土遺物実測図	25
第17図 第187号土坑・出土遺物実測図	26
第18図 第188号土坑・出土遺物実測図	27

第19図 第188号土坑出土遺物実測図	28
第20図 第189号土坑実測図	29
第21図 第216号土坑・出土遺物実測図	30
第22図 第216号土坑出土遺物実測図	31
第23図 第261号土坑実測図	31
第24図 第336号土坑・出土遺物実測図	32
第25図 第336号土坑出土遺物実測図	33
第26図 第352号土坑・出土遺物実測図	34
第27図 第364号土坑・出土遺物実測図	35
第28図 その他の縄文時代の土坑実測図(1)	36
第29図 その他の縄文時代の土坑実測図(2)	37
第30図 第4号陥し穴実測図	38
第31図 第5号陥し穴・出土遺物実測図	38
第32図 第6号陥し穴・出土遺物実測図	39
第33図 第7号陥し穴実測図	40
第34図 第8号陥し穴実測図	41
第35図 第12号竪穴建物跡実測図	42
第36図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図	43
第37図 第66号竪穴建物跡実測図(1)	44
第38図 第66号竪穴建物跡実測図(2)	45

第 39 图	第 66 号竖穴建物跡出土遺物実測図	45	第 104 图	第 46 号竖穴建物跡出土遺物実測図	127
第 40 图	第 69 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	46	第 105 图	第 61 号竖穴建物跡実測図	128
第 41 图	第 89 号竖穴建物跡実測図	47	第 106 图	第 61 号竖穴建物跡出土遺物実測図	129
第 42 图	第 89 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	48	第 107 图	第 63 号竖穴建物跡実測図	130
第 43 图	第 217 号土坑実測図	49	第 108 图	第 63 号竖穴建物跡出土遺物実測図	131
第 44 图	第 217 号土坑出土遺物実測図	50	第 109 图	第 64 号竖穴建物跡実測図	132
第 45 图	第 314 号土坑・出土遺物実測図	50	第 110 图	第 64 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	133
第 46 图	第 10 号竖穴建物跡実測図	51	第 111 图	第 71 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	134
第 47 图	第 10 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	52	第 112 图	第 74 号竖穴建物跡実測図	135
第 48 图	第 10 号竖穴建物跡出土遺物実測図	53	第 113 图	第 74 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	136
第 49 图	第 27 号竖穴建物跡実測図	54	第 114 图	第 77 号竖穴建物跡実測図	137
第 50 图	第 27 号竖穴建物跡出土遺物実測図	55	第 115 图	第 77 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	138
第 51 图	第 35 号竖穴建物跡実測図	56	第 116 图	第 78 号竖穴建物跡実測図	139
第 52 图	第 35 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	57	第 117 图	第 78 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	140
第 53 图	第 35 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	58	第 118 图	第 80 号竖穴建物跡実測図 (1)	141
第 54 图	第 62 号竖穴建物跡実測図	59	第 119 图	第 80 号竖穴建物跡実測図 (2)	142
第 55 图	第 62 号竖穴建物跡出土遺物実測図	60	第 120 图	第 83 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	143
第 56 图	第 65 号竖穴建物跡実測図	61	第 121 图	第 93 号竖穴建物跡実測図	144
第 57 图	第 65 号竖穴建物跡出土遺物実測図	62	第 122 图	第 93 号竖穴建物跡出土遺物実測図	145
第 58 图	第 67 号竖穴建物跡実測図	62	第 123 图	第 94 号竖穴建物跡実測図	146
第 59 图	第 67 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	63	第 124 图	第 14 号掘立柱建物跡実測図	147
第 60 图	第 68 号竖穴建物跡実測図 (1)	64	第 125 图	第 14 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	148
第 61 图	第 68 号竖穴建物跡実測図 (2)	65	第 126 图	第 16 号掘立柱建物跡実測図	149
第 62 图	第 68 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	65	第 127 图	第 17 号掘立柱建物跡実測図	150
第 63 图	第 68 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	66	第 128 图	第 18 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	151
第 64 图	第 73 号竖穴建物跡実測図	67	第 129 图	第 18 号掘立柱建物跡実測図 (1)	152
第 65 图	第 73 号竖穴建物跡出土遺物実測図	68	第 130 图	第 18 号掘立柱建物跡実測図 (2)	153
第 66 图	第 75 号竖穴建物跡実測図	69	第 131 图	第 19 号掘立柱建物跡実測図	154
第 67 图	第 75 号竖穴建物跡出土遺物実測図	70	第 132 图	第 19 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	155
第 68 图	第 79 号竖穴建物跡実測図	71	第 133 图	第 20 号掘立柱建物跡実測図	156
第 69 图	第 79 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	72	第 134 图	第 20 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	157
第 70 图	第 79 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	73	第 135 图	第 21 号掘立柱建物跡実測図	158
第 71 图	第 82 号竖穴建物跡実測図	74	第 136 图	第 21 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	159
第 72 图	第 84 号竖穴建物跡実測図	75	第 137 图	第 22 号掘立柱建物跡実測図	159
第 73 图	第 84 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	76	第 138 图	第 22 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	160
第 74 图	第 84 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	77	第 139 图	第 23 号掘立柱建物跡実測図	161
第 75 图	第 85 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	78	第 140 图	第 23 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	162
第 76 图	第 86 号竖穴建物跡実測図 (1)	79	第 141 图	第 24 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	162
第 77 图	第 86 号竖穴建物跡実測図 (2)	80	第 142 图	第 24 号掘立柱建物跡実測図	163
第 78 图	第 86 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	81	第 143 图	第 25 号掘立柱建物跡実測図	164
第 79 图	第 86 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	82	第 144 图	第 25 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	165
第 80 图	第 87 号竖穴建物跡実測図	84	第 145 图	第 26 号掘立柱建物跡実測図	166
第 81 图	第 87 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	85	第 146 图	第 27 号掘立柱建物跡実測図 (1)	167
第 82 图	第 88 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	86	第 147 图	第 27 号掘立柱建物跡実測図 (2)	168
第 83 图	第 91 号竖穴建物跡・出土遺物実測図	87	第 148 图	第 28 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	169
第 84 图	第 92・98 号竖穴建物跡実測図	88	第 149 图	第 28 号掘立柱建物跡実測図 (1)	170
第 85 图	第 92 号竖穴建物跡出土遺物実測図	89	第 150 图	第 28 号掘立柱建物跡実測図 (2)	171
第 86 图	第 98 号竖穴建物跡出土遺物実測図	90	第 151 图	第 29 号掘立柱建物跡実測図	172
第 87 图	第 1 号鍛冶工房跡実測図 (1)	92	第 152 图	第 29 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	173
第 88 图	第 1 号鍛冶工房跡掘方実測図 (2)	93	第 153 图	第 32 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	173
第 89 图	第 1 号鍛冶工房炉跡実測図 (3)	94	第 154 图	第 32 号掘立柱建物跡実測図 (1)	174
第 90 图	第 1 号鍛冶工房跡出土遺物実測図	95	第 155 图	第 32 号掘立柱建物跡実測図 (2)	175
第 91 图	第 154 号土坑・出土遺物実測図	96	第 156 图	第 33 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	175
第 92 图	第 276 号土坑実測図	97	第 157 图	第 34 号掘立柱建物跡実測図	176
第 93 图	第 276 号土坑出土遺物実測図	98	第 158 图	第 36 号掘立柱建物跡実測図	177
第 94 图	第 365 号土坑・出土遺物実測図	98	第 159 图	第 37 号掘立柱建物跡実測図	178
第 95 图	第 11 号竖穴建物跡実測図 (1)	118	第 160 图	第 37 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	179
第 96 图	第 11 号竖穴建物跡実測図 (2)	119	第 161 图	第 38 ~ 40 号掘立柱建物跡実測図 (1)	180
第 97 图	第 11 号竖穴建物跡掘方実測図 (3)	120	第 162 图	第 38 ~ 40 号掘立柱建物跡実測図 (2)	181
第 98 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	121	第 163 图	第 39 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	181
第 99 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	122	第 164 图	第 40 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	182
第 100 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)	123	第 165 图	第 41・42 号掘立柱建物跡実測図	183
第 101 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (1)	124	第 166 图	第 2 号大型円形土坑実測図	184
第 102 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (2)	125	第 167 图	第 2 号大型円形土坑・出土遺物実測図	185
第 103 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (3)	126	第 168 图	第 190 号土坑・出土遺物実測図	186

第 169 図	第 213 号土坑・出土遺物実測図	186
第 170 図	第 9 号柱穴列・出土遺物実測図	187
第 171 図	第 10 号柱穴列・出土遺物実測図	188
第 172 図	第 5 号溝跡・出土遺物実測図	189
第 173 図	第 24 号竪穴建物跡実測図	190
第 174 図	第 24 号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	191
第 175 図	第 24 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)	192
第 176 図	第 47 号竪穴建物跡実測図	193
第 177 図	第 47 号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	194
第 178 図	第 47 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)	195
第 179 図	第 76 号竪穴建物跡実測図	196
第 180 図	第 95 号竪穴建物跡・出土遺物実測図	197
第 181 図	第 95 号竪穴建物跡出土遺物実測図	198
第 182 図	第 15 号掘立柱建物跡実測図	199
第 183 図	第 30 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	200
第 184 図	第 31 号掘立柱建物跡実測図	201
第 185 図	第 35 号掘立柱建物跡実測図(1)	202
第 186 図	第 35 号掘立柱建物跡実測図(2)	203
第 187 図	第 151 号土坑実測図	204

第 188 図	第 160 号土坑実測図	204
第 189 図	第 178 号土坑実測図	205
第 190 図	中・近世のその他の土坑実測図	205
第 191 図	第 54 号溝跡実測図	206
第 192 図	第 55 号溝跡・出土遺物実測図	207
第 193 図	第 56 号溝跡実測図	208
第 194 図	第 3 号道路跡・出土遺物実測図	209
第 195 図	第 4 号道路跡実測図	210
第 196 図	時期不明の土坑実測図(1)	210
第 197 図	時期不明の土坑実測図(2)	211
第 198 図	時期不明の土坑実測図(3)	212
第 199 図	時期不明の土坑実測図(4)	213
第 200 図	時期不明の土坑実測図(5)	214
第 201 図	時期不明の土坑実測図(6)	215
第 202 図	時期不明の溝跡実測図(1)	218
第 203 図	時期不明の溝跡実測図(2)	219
第 204 図	遺構外出土遺物実測図(1)	219
第 205 図	遺構外出土遺物実測図(2)	220

## 挿 表 目 次

第 1 表	金田西坪 B 遺跡周辺遺跡一覧	10
第 2 表	第 36 号竪穴建物跡出土遺物一覧	14
第 3 表	第 81 号竪穴建物跡出土遺物一覧	17
第 4 表	第 96 号竪穴建物跡出土遺物一覧	19
第 5 表	第 97 号竪穴建物跡出土遺物一覧	21
第 6 表	縄文時代竪穴建物跡一覧	21
第 7 表	第 153 号土坑出土遺物一覧	22
第 8 表	第 181 号土坑出土遺物一覧	23
第 9 表	第 182 号土坑出土遺物一覧	25
第 10 表	第 187 号土坑出土遺物一覧	27
第 11 表	第 188 号土坑出土遺物一覧	29
第 12 表	第 216 号土坑出土遺物一覧	31
第 13 表	第 336 号土坑出土遺物一覧	33
第 14 表	第 352 号土坑出土遺物一覧	34
第 15 表	第 364 号土坑出土遺物一覧	35
第 16 表	縄文時代土坑一覧	35
第 17 表	第 5 号陥し穴出土遺物一覧	39
第 18 表	第 6 号陥し穴出土遺物一覧	40
第 19 表	縄文時代陥し穴一覧	41
第 20 表	第 12 号竪穴建物跡出土遺物一覧	43
第 21 表	第 66 号竪穴建物跡出土遺物一覧	45
第 22 表	第 69 号竪穴建物跡出土遺物一覧	46
第 23 表	第 89 号竪穴建物跡出土遺物一覧	49
第 24 表	弥生時代竪穴建物跡一覧	49
第 25 表	第 217 号土坑出土遺物一覧	50
第 26 表	第 314 号土坑出土遺物一覧	51
第 27 表	弥生時代土坑一覧	51
第 28 表	第 10 号竪穴建物跡出土遺物一覧	53
第 29 表	第 27 号竪穴建物跡出土遺物一覧	55
第 30 表	第 35 号竪穴建物跡出土遺物一覧	58
第 31 表	第 62 号竪穴建物跡出土遺物一覧	60
第 32 表	第 65 号竪穴建物跡出土遺物一覧	62
第 33 表	第 67 号竪穴建物跡出土遺物一覧	63
第 34 表	第 68 号竪穴建物跡出土遺物一覧	66
第 35 表	第 73 号竪穴建物跡出土遺物一覧	68
第 36 表	第 75 号竪穴建物跡出土遺物一覧	70
第 37 表	第 79 号竪穴建物跡出土遺物一覧	73
第 38 表	第 84 号竪穴建物跡出土遺物一覧	77
第 39 表	第 85 号竪穴建物跡出土遺物一覧	79
第 40 表	第 86 号竪穴建物跡出土遺物一覧	83

第 41 表	第 87 号竪穴建物跡出土遺物一覧	85
第 42 表	第 88 号竪穴建物跡出土遺物一覧	86
第 43 表	第 91 号竪穴建物跡出土遺物一覧	87
第 44 表	第 92 号竪穴建物跡出土遺物一覧	89
第 45 表	第 98 号竪穴建物跡出土遺物一覧	90
第 46 表	古墳時代竪穴建物跡一覧	90
第 47 表	第 1 号鍛冶工房跡出土遺物一覧	95
第 48 表	第 1 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表	95
第 49 表	第 154 号土坑出土遺物一覧	96
第 50 表	第 276 号土坑出土遺物一覧	98
第 51 表	第 365 号土坑出土遺物一覧	98
第 52 表	古墳時代土坑一覧	98
第 53 表	第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧	123
第 54 表	第 46 号竪穴建物跡出土遺物一覧	126
第 55 表	第 61 号竪穴建物跡出土遺物一覧	129
第 56 表	第 63 号竪穴建物跡出土遺物一覧	131
第 57 表	第 64 号竪穴建物跡出土遺物一覧	133
第 58 表	第 71 号竪穴建物跡出土遺物一覧	134
第 59 表	第 74 号竪穴建物跡出土遺物一覧	137
第 60 表	第 77 号竪穴建物跡出土遺物一覧	138
第 61 表	第 78 号竪穴建物跡出土遺物一覧	140
第 62 表	第 83 号竪穴建物跡出土遺物一覧	143
第 63 表	第 93 号竪穴建物跡出土遺物一覧	146
第 64 表	奈良時代竪穴建物跡一覧	146
第 65 表	第 14 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	148
第 66 表	第 18 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	151
第 67 表	第 19 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	155
第 68 表	第 20 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	157
第 69 表	第 21 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	159
第 70 表	第 22 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	160
第 71 表	第 23 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	162
第 72 表	第 24 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	164
第 73 表	第 25 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	165
第 74 表	第 28 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	169
第 75 表	第 29 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	173
第 76 表	第 32 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	173
第 77 表	第 33 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	176
第 78 表	第 37 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	179
第 79 表	第 39 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	181
第 80 表	第 40 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	182

第 81 表	奈良時代掘立柱建物跡一覧	183
第 82 表	第 2 号大型円形土坑出土遺物一覧	185
第 83 表	第 190 号土坑出土遺物一覧	186
第 84 表	第 213 号土坑出土遺物一覧	186
第 85 表	奈良時代土坑一覧	187
第 86 表	第 9 号柱穴列出土遺物一覧	187
第 87 表	第 10 号柱穴列出土遺物一覧	188
第 88 表	奈良時代柱穴列一覧	188
第 89 表	第 5 号溝跡出土遺物一覧	189
第 90 表	第 24 号竪穴建物跡出土遺物一覧	192
第 91 表	第 47 号竪穴建物跡出土遺物一覧	195
第 92 表	第 95 号竪穴建物跡出土遺物一覧	198

第 93 表	平安時代竪穴建物跡一覧	198
第 94 表	第 30 号掘立柱建物跡出土遺物一覧	200
第 95 表	中・近世の掘立柱建物跡一覧	203
第 96 表	中・近世の土坑一覧	206
第 97 表	第 55 号溝跡出土遺物一覧	207
第 98 表	中・近世の溝跡一覧	209
第 99 表	第 3 号道路跡出土遺物一覧	209
第 100 表	近世の道路跡一覧	210
第 101 表	時期不明の土坑一覧	215
第 102 表	時期不明の溝跡一覧	219
第 103 表	遺構外出土遺物一覧	220

## 写真図版目次

PL 1	平成 28 年度調査区遠景（南から）	
PL 1	平成 29 年度調査区遠景（北から）	
PL 2	平成 28 年度調査区全景	
PL 3	平成 29 年度調査区全景	
PL 4	第 18～22・32 号掘立柱建物跡	
PL 4	第 28 号掘立柱建物跡	
PL 5	第 36 号竪穴建物跡	
PL 5	第 36 号竪穴建物跡 炉	
PL 5	第 81 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL 5	第 81 号竪穴建物跡 炉	
PL 5	第 81 号竪穴建物跡	
PL 5	第 96 号竪穴建物跡	
PL 5	第 97 号竪穴建物跡	
PL 5	第 153 号土坑 遺物出土状況	
PL 6	第 153 号土坑	
PL 6	第 181 号土坑 遺物出土状況	
PL 6	第 181 号土坑	
PL 6	第 182 号土坑 遺物出土状況	
PL 6	第 182 号土坑	
PL 6	第 187 号土坑 遺物出土状況	
PL 6	第 188 号土坑 遺物出土状況	
PL 6	第 188 号土坑	
PL 7	第 189 号土坑	
PL 7	第 216 号土坑	
PL 7	第 235 号土坑	
PL 7	第 260 号土坑	
PL 7	第 261 号土坑	
PL 7	第 334 号土坑	
PL 7	第 336 号土坑 遺物出土状況 (1)	
PL 7	第 336 号土坑 遺物出土状況 (2)	
PL 8	第 352 号土坑	
PL 8	第 353 号土坑	
PL 8	第 364 号土坑	
PL 8	第 4 号陥し穴	
PL 8	第 5 号陥し穴	
PL 8	第 6 号陥し穴	
PL 8	第 7 号陥し穴	
PL 8	第 8 号陥し穴	
PL 9	第 12 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL 9	第 12 号竪穴建物跡 炉	
PL 9	第 12 号竪穴建物跡	
PL 9	第 66 号竪穴建物跡 焼土検出状況	
PL 9	第 66 号竪穴建物跡 炉	
PL 9	第 66 号竪穴建物跡	
PL 9	第 69 号竪穴建物跡	
PL 9	第 89 号竪穴建物跡 炉	
PL10	第 89 号竪穴建物跡	
PL10	第 217 号土坑	
PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (1)	
PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (2)	
PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (3)	
PL10	第 10 号竪穴建物跡	
PL10	第 27 号竪穴建物跡 竈	
PL10	第 27 号竪穴建物跡	
PL11	第 35 号竪穴建物跡 竈	
PL11	第 35 号竪穴建物跡	
PL11	第 62 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL11	第 62 号竪穴建物跡 竈	
PL11	第 62 号竪穴建物跡	
PL11	第 65 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL11	第 65 号竪穴建物跡 竈	
PL11	第 65 号竪穴建物跡	
PL12	第 67 号竪穴建物跡	
PL12	第 68 号竪穴建物跡 竈	
PL12	第 68 号竪穴建物跡	
PL12	第 73 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (1)	
PL12	第 73 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (2)	
PL12	第 73 号竪穴建物跡 竈	
PL12	第 73 号竪穴建物跡	
PL12	第 75 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL13	第 79 号竪穴建物跡 竈	
PL13	第 82 号竪穴建物跡	
PL13	第 84 号竪穴建物跡 竈	
PL13	第 84 号竪穴建物跡 遺物出土状況	
PL13	第 84 号竪穴建物跡	
PL13	第 85 号竪穴建物跡	
PL13	第 86 号竪穴建物跡 竈	
PL13	第 86 号竪穴建物跡	
PL14	第 87 号竪穴建物跡 炉	
PL14	第 87 号竪穴建物跡	
PL14	第 88 号竪穴建物跡	
PL14	第 91 号竪穴建物跡	
PL14	第 92 号竪穴建物跡 竈	
PL14	第 92 号竪穴建物跡	
PL14	第 1 号鍛冶工房跡 炉 (1)	
PL14	第 1 号鍛冶工房跡 炉 (2)	
PL15	第 1 号鍛冶工房跡 炉 (3)	
PL15	第 1 号鍛冶工房跡 炉 (4)	
PL15	第 1 号鍛冶工房跡 炉 (5)	
PL15	第 1 号鍛冶工房跡 (1)	
PL15	第 1 号鍛冶工房跡 (2)	
PL15	第 154 号土坑 遺物出土状況	

PL15	第 276 号土坑	遺物出土狀況	PL23	第 190 号土坑	遺物出土狀況
PL15	第 276 号土坑		PL24	第 213 号土坑	遺物出土狀況
PL16	第 365 号土坑		PL24	第 9 号柱穴列	
PL16	第 11 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL24	第 5 号溝跡 (1)	
PL16	第 11 号竪穴建物跡	竈	PL24	第 5 号溝跡 (2)	
PL16	第 11 号竪穴建物跡		PL24	第 24 号竪穴建物跡	遺物出土狀況
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (1)	PL24	第 24 号竪穴建物跡	
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (2)	PL24	第 47 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (1)
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (3)	PL24	第 47 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (2)
PL16	第 46 号竪穴建物跡	竈遺物出土狀況	PL25	第 47 号竪穴建物跡	竈遺物出土狀況
PL17	第 46 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 47 号竪穴建物跡	竈
PL17	第 46 号竪穴建物跡		PL25	第 47 号竪穴建物跡	
PL17	第 61 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL25	第 76 号竪穴建物跡	
PL17	第 61 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 95 号竪穴建物跡	遺物出土狀況
PL17	第 61 号竪穴建物跡		PL25	第 95 号竪穴建物跡	竈
PL17	第 63 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL25	第 95 号竪穴建物跡	
PL17	第 64 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 15 号掘立柱建物跡	
PL17	第 64 号竪穴建物跡		PL26	第 30 号掘立柱建物跡	確認狀況
PL18	第 71 号竪穴建物跡		PL26	第 30 号掘立柱建物跡	
PL18	第 74 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL26	第 31 号掘立柱建物跡	確認狀況
PL18	第 74 号竪穴建物跡	竈	PL26	第 31 号掘立柱建物跡	
PL18	第 74 号竪穴建物跡		PL26	第 31 号掘立柱建物跡	
PL18	第 77 号竪穴建物跡	竈	PL26	第 55 号溝跡 (1)	
PL18	第 77 号竪穴建物跡		PL26	第 55 号溝跡 (2)	
PL18	第 77 号竪穴建物跡		PL26	第 56 号溝跡	
PL18	第 78 号竪穴建物跡		PL26	第 54 号溝跡	
PL18	第 80 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 151 号土坑	
PL19	第 80 号竪穴建物跡		PL27	第 160 号土坑	
PL19	第 83 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 161 号土坑	
PL19	第 83 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL27	第 176 号土坑	
PL19	第 93 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 177 号土坑	
PL19	第 93 号竪穴建物跡		PL27	第 178 号土坑	
PL19	第 94 号竪穴建物跡		PL27	第 184 号土坑	
PL19	第 14 号掘立柱建物跡		PL27	第 3・4 号道路跡	
PL19	第 16 号掘立柱建物跡		PL28	第 36・81・96・97 号竪穴建物跡出土土器	
PL20	第 17 号掘立柱建物跡		PL29	第 187・188・216・336 号土坑出土土器	
PL20	第 18 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL30	第 153・181・182・188 号土坑出土土器	
PL20	第 18 号掘立柱建物跡		PL31	第 216・336・352・364 号土坑,	
PL20	第 19 号掘立柱建物跡			第 5・6 号陥し穴出土土器	
PL20	第 20 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL32	第 12・66・89 号竪穴建物跡,	
PL20	第 20 号掘立柱建物跡			第 217・314 号土坑出土土器	
PL20	第 21 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL33	第 10・27 号竪穴建物跡出土土器	
PL20	第 21 号掘立柱建物跡		PL34	第 35・65・67・68 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 22 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL35	第 73・75・79 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 22 号掘立柱建物跡		PL36	第 84 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 23・24 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL37	第 84～86 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 23 号掘立柱建物跡		PL38	第 86～88・92 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 24 号掘立柱建物跡		PL39	第 11 号竪穴建物跡, 第 1 号鍛冶工房跡,	
PL21	第 25 号掘立柱建物跡	確認狀況		第 154・276・365 号土坑出土土器	
PL21	第 25 号掘立柱建物跡		PL40	第 11・61 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 26 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL41	第 46・63・64 号竪穴建物跡出土土器	
PL22	第 26 号掘立柱建物跡		PL42	第 74・77・78・93 号竪穴建物跡,	
PL22	第 27 号掘立柱建物跡			第 19 号掘立柱建物跡, 第 190・213 号土坑,	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡	確認狀況 (1)		第 5 号溝跡出土土器	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡	確認狀況 (2)	PL43	第 24・47 号竪穴建物跡出土土器	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡		PL44	第 47・95 号竪穴建物跡, 遺構外出土土器	
PL22	第 29 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL45	第 11・73・75・79・81・84・86・89 号竪穴建物跡,	
PL22	第 29 号掘立柱建物跡			第 1 号鍛冶工房跡, 遺構外出土土製品	
PL22	第 32 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL46	第 81・96 号竪穴建物跡, 第 216 号土坑,	
PL23	第 32 号掘立柱建物跡			遺構外出土土器	
PL23	第 34 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL47	第 35 号竪穴建物跡出土土製品,	
PL23	第 34 号掘立柱建物跡			第 63・86 号竪穴建物跡, 第 37 号掘立柱建物跡,	
PL23	第 36・41・42 号掘立柱建物跡			第 182 号土坑, 第 55 号溝跡出土土器	
PL23	第 38・39・40 号掘立柱建物跡		PL48	第 27・35・46・74 号竪穴建物跡, 第 1 号鍛冶工房跡,	
PL23	第 41 号掘立柱建物跡	遺物出土狀況		第 10 号柱穴列, 遺構外出土金屬製品,	
PL23	第 2 号大型円形土坑			第 3 号道路跡出土遺物	

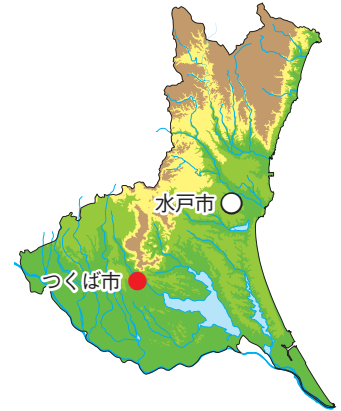


こんだにしつぽびー  
金田西坪B遺跡の概要

### 遺跡の位置と調査の目的

金田西坪B遺跡は、つくば市の北東部、桜川右岸の標高約 24 mの台地上に立地しています。

中根・金田台特定土地区画整理事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成 28 年度に 4,470 m<sup>2</sup>、平成 29 年度に 4,247 m<sup>2</sup>、平成 30 年度に 279 m<sup>2</sup>の発掘調査を行いました。



### 金田西坪B遺跡の調査の内容

当遺跡の一部は、平成 12・13 年度に確認調査が行われ、河内郡の郡庁域や正倉域が確認され、金田官衙遺跡として国の史跡に指定されました。

今回の調査はその南部にあたり、たてあなたてものあと 44 棟、ほったてほったてものあと 29 棟、か鍛冶じこうぼう工房跡 1 棟、みぞみぞあと 13 条、おとおとあな穴 5 基などを確認し、縄文時代から平安時代にかけて断続的に集落が形成されていたことが明らかになりました。



平成 29 年度調査区遠景（東から）



縄文時代の出土遺物



古墳時代の出土遺物



奈良時代の大型竪穴建物跡



第74号竪穴建物跡出土遺物

## 調査の成果

調査によって、縄文時代の連続してつくられた陥し穴からなる狩猟場や、縄文時代から平安時代にかけての当地の集落、古墳時代の鍛冶工房跡の様子などが分かりました。

なかでも、奈良時代の大型の竪穴建物跡や四面廂建物跡しめんびさしは、河内郡を治めていた郡司の居宅と考えられ、大型の竪穴建物から掘立柱建物へと移り変わっていく様子が分かりました。また、建て替えを繰り返しながら倉庫や広場を整備しており、敷地内の構造も明らかになってきました。これらは、河内郡衙の様相を知る上で大きな手掛かりとなるものです。

以上のような集落の変遷や出土遺物から、この台地上に暮らした人々の生活や社会の一端を垣間見ることができます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

つくば市では、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが、2005年に開業した「つくばエクスプレス」の沿線開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に、平成31年4月から独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部に名称を変更）が事業主体として、土地区画整理事業を進めている。金田西坪B遺跡については、平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長が茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度、現地踏査を実施した。平成12年3月6日～9日、13日～15日及び17日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年3月17日、茨城県教育委員会教育長は都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に金田西坪B遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成28年1月4日、平成30年2月5日、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成28年1月6日及び平成30年2月13日、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役あてに、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成27年2月19日、平成28年2月16日、平成29年2月20日及び平成30年2月26日に、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役は茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成27年2月20日、平成28年2月16日、平成29年2月22日及び平成30年2月27日に、茨城県教育委員会教育長は独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役あてに、金田西坪B遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部長から中根・金田台地区埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成28年12月1日から平成29年3月31日まで、平成29年4月1日から6月30日まで、平成30年8月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

金田西坪B遺跡の調査は、平成28年12月1日から平成29年3月31日までの4か月間と平成29年4月1日から6月30日までの3か月間、平成30年8月1日から9月30日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

平成28年度

工程 \ 期間	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 写真整理				
撤収				

平成29年度

工程 \ 期間	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 写真整理			
撤収			

平成30年度

工程 \ 期間	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認		
遺構調査		
遺物洗浄 写真整理		
撤収		

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

金田西坪B遺跡は、茨城県つくば市金田字二本松台 1626 - 1 番地ほかに所在している。

つくば市は、茨城県の南西部に位置し、北部は筑波山塊に接し、東側約5kmには霞ヶ浦がある。市域の多くは筑波山を北端として、その南東側に広がる標高25mほどの平坦な筑波・稲敷台地上にある。この台地は、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川によって区切られており、東から花室川、蓮沼川、谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南側に向かって流れている。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部にかけて広がる常総台地の一部であり、地質的には海成砂層の成田層を基盤として、その上に砂層・砂礫層の竜ヶ崎層、さらに泥質粘土層の常総粘土層、関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている<sup>1)</sup>。

当遺跡は、つくば市の北東部、桜川右岸の標高約24mの台地上に立地している。台地は東側の桜川、西側の花室川に挟まれ、遺跡はその西側に位置し、幅約360mほどで、ほぼ南北に延びている。沖積低地との比高差は20～23mである。当遺跡の調査前の現況は、畑地・山林であった。

### 第2節 歴史的環境

金田西坪B遺跡周辺の桜川及び花室川流域の台地には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』<sup>2)</sup>に登録されている当該地域の主な遺跡を、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は、上野古屋敷遺跡<sup>3)</sup>〈15〉、中根中谷津遺跡<sup>4)</sup>〈20〉、柴崎大堀遺跡<sup>5)</sup>〈25〉、東岡中原遺跡<sup>6)</sup>〈28〉で、石器集中地点が確認されている。中でも東岡中原遺跡では、ナイフ形石器、尖頭器、搔器、彫刻刀形石器、楔形石器、石刀、石核などが、多層位にわたって出土している。これらは県内の旧石器時代を考える上で重要な資料となっている。また、花室川左岸の北条中台遺跡<sup>7)</sup>、柴崎遺跡<sup>8)</sup>〈7〉からもナイフ形石器や尖頭器が出土しており、当該期の人々の活動の痕跡を確認することができる。花室川の川底からは、ナウマンゾウ等の化石が出土しており、旧石器時代の人々が狩猟対象としていたことが考えられている<sup>9)</sup>。

縄文時代の遺跡は、多数確認されており、柴崎遺跡では、早期の炉穴が確認されている。上野陣場遺跡<sup>10)</sup>〈14〉、上野古屋敷遺跡、東岡中原遺跡では、前期の集落跡が確認されており、当該地域の人々が定住し始めたことを示している。中期に入ると、遺跡数も増加し、集落の規模が大きくなっている。花室川下流左岸の下広岡遺跡<sup>11)</sup>は、大規模な集落跡が確認されている。後期には、周辺地域で貝塚が形成されるようになる。上境旭台貝塚<sup>12)</sup>〈19〉や桜川下流域に存在する国指定史跡の土浦市上高津貝塚<sup>13)</sup>では、後期から晩期にかけて形成された貝塚が存在する。これらの貝塚からは、土器のほか、動物の骨などの自然遺物も多量に出土しており、当該期の生業活動を推測する上で良好な資料となっている。また、柴崎大堀遺跡、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡、上境旭台貝塚、東岡中原遺跡からは、縄文時代に作られた陥し穴が確認されており、台地上が狩猟の場としても利用されていたことが分かる。

弥生時代の遺跡は、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡、やや桜川の上流にある玉取向山遺跡<sup>14)</sup>で、後期の集落跡が確認されているが遺跡数は少ない。玉取向山遺跡では、竪穴建物跡からバグマタイト産石英片が1,000g

以上出土しており、その使用目的については、以前より様々な見解が示されている<sup>15)</sup>。

古墳時代になると遺跡数が急増し、桜川周辺の微高地や台地全域に広がる。桜川右岸では、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡から前・後期、東岡中原遺跡から中期、柴崎遺跡から後期の集落跡がそれぞれ確認されている。古墳は、全長 80 m で当地域最大の前方後円墳である上野天神塚古墳〈12〉や、上野定使古墳群〈13〉が存在している。この他、栗原十日塚古墳〈10〉、栗原愛吾塚古墳〈11〉をはじめ、桜川右岸台地縁辺部に、円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境瀧の台古墳群〈18〉、埴輪片や石棺の破片が確認された横町古墳群〈21〉などが知られている<sup>16)</sup>。上境作ノ内古墳群〈17〉の 1 号墳では、発掘調査により石棺内から被葬者の骨が確認されている<sup>17)</sup>。これらの古墳群のうち、前期古墳である上野天神塚古墳以外の古墳群は、いずれも後期古墳である。

奈良・平安時代の当該地域は、河内郡菅田郷に属し、その後 12 世紀には田中荘に属していた。当該期の遺跡は、桜川と花室川に挟まれた中根、金田を中心とする台地上に集中している。金田西坪 B 遺跡や金田西遺跡〈3〉については、平成 12 年から平成 13 年に河内郡衛正倉庫・郡庁域・郡寺域確認のための確認調査が行われた。この確認調査によって、区画溝とその内部に掘立柱建物や礎石建物で構成される倉庫群が確認され、正倉庫がほぼ明確になった。九重東岡廃寺〈3〉では、平成 13 年から平成 14 年に主要伽藍と寺域溝の確認調査が行われ、主要伽藍となりうる建物跡は確認できなかったが、金田西坪 B 遺跡、金田西遺跡とともに金田官衙遺跡群として国指定を受けた<sup>18)</sup>。さらに、平成 27・28 年度に九重東岡廃寺と金田西遺跡の発掘調査を行い、奈良から平安時代の郡衙や郡寺を維持する人々の集落跡が南北に延びていることを確認した<sup>19)</sup>。また、金田官衙遺跡群の西側に位置する東岡中原遺跡からは、河内郡衙を支えた郡司層及び下級官人の居住地と考えられる大規模な集落が確認されている<sup>20)</sup>。

中世の遺跡も数多く確認されている。柴崎遺跡では、12～13 世紀の方形竪穴遺構を中心とした集落跡が、上野古屋敷遺跡では、溝で区画された掘立柱建物跡を中心とする集落跡が確認されている<sup>21)</sup>。また、金田西坪 B 遺跡では、以前の調査で 15 世紀後葉から 16 世紀中葉を中心とした屋敷跡が青白磁などの威信財とともに確認されており、屋敷地を区画する溝や、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構などが検出された<sup>22)</sup>。桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡があり、それに関連する城館跡も多い。桜川右岸には、柴崎片岡上館跡〈5〉、金田城跡〈24〉、花室城跡〈32〉、上ノ室城跡〈37〉、古来館跡〈66〉などが位置しており、戦国時代の当地域の緊張状態を伝えている。また、花室城の西には花室寺畑廃寺<sup>23)</sup>〈33〉が、古来館跡の北には阿弥陀寺跡<sup>24)</sup>〈62〉が知られており、いずれも中世瓦が採集されている。筑波山塊から霞ヶ浦西岸に偏在する中世瓦の分布は、特に小田氏領に顕著にみられ<sup>25)</sup>、檀越・外護者としての小田氏の影響力の強さを示している。室町時代から江戸時代にかけての遺跡には、柴崎大堀遺跡〈25〉があり、堀と土塁が確認され、隣接する金田城の守りも視野に入れながら街道閉鎖に主眼を置いたものと考えられている<sup>26)</sup>。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏が支配し、戦国時代には小田方と佐竹方の度重なる攻防により、その支配も変化した。柴崎地区は、中世末まで上境・中根・土器屋・松塚・横町・柴崎地区で一郷を構成し、筑波郡と境を隣接することから境郷とも呼ばれていた。

江戸時代には、堀氏玉取藩の知行地となった上野・栗原地区を除き、当該地域の多くが土浦藩に属することになり、明治 4 年（1871）の廃藩置県に至っている。当該地域は、織田信長の側近として活躍した堀秀政の弟である利重が大坂の陣での武功により立藩した玉取藩及び徳川家康の一族で早くから家康に仕え武功を立てた松平信一が立藩した土浦藩、それぞれの藩の中心地とはならなかったものの、やや花室川の下流にある大角豆代畑遺跡からは 17 世紀前半の瀬戸・美濃の志野鉄絵小皿が採集されている<sup>27)</sup>。

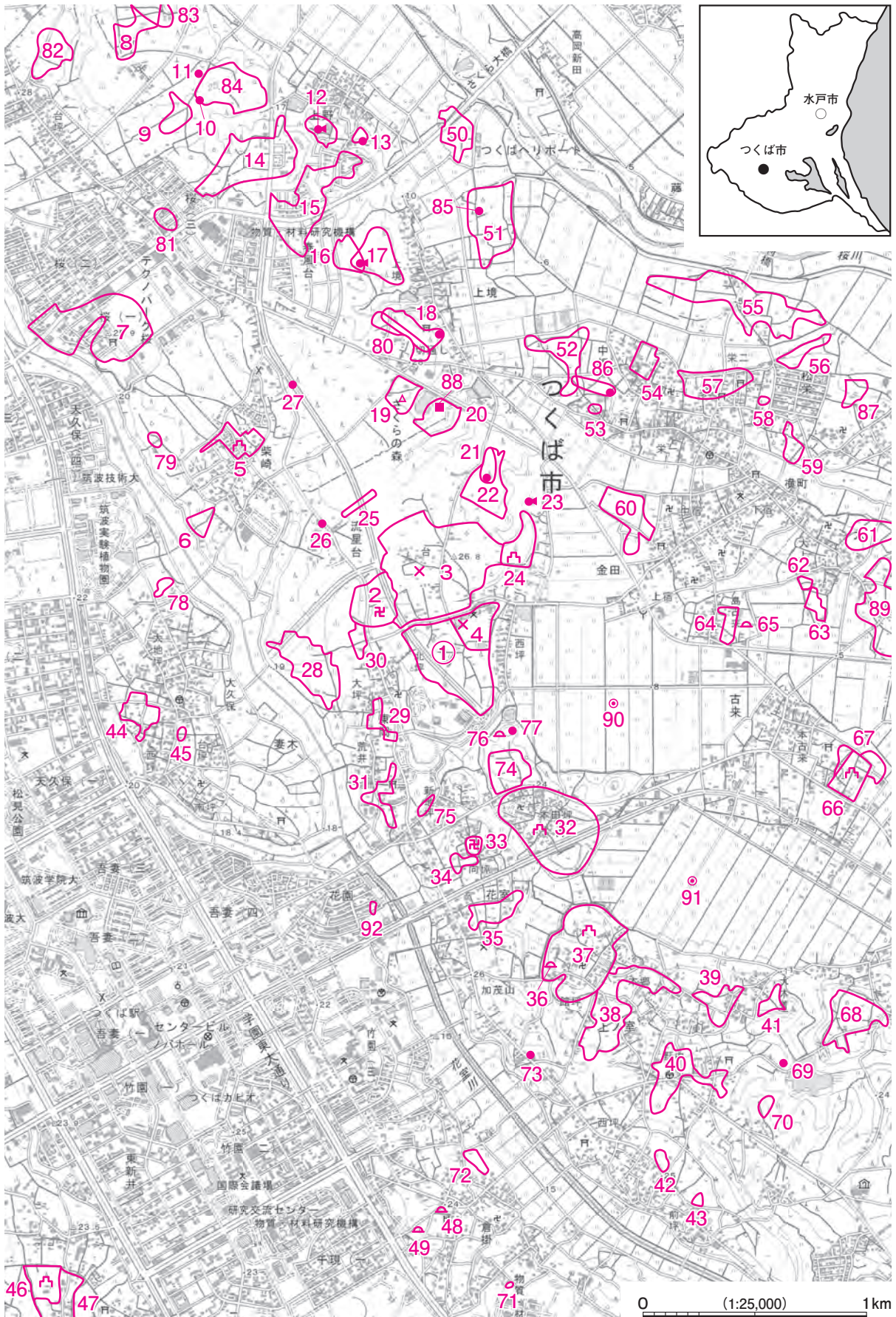
※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び第1表の当該番号と同じである。

註

- 1) a 大山年次監修『茨城県 地質のガイド』コロナ社 1977年8月  
b 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 2007年5月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) a 三谷正・大塚雅昭・桑村裕『上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX』茨城県教育財団文化財調査報告第285集 2007年3月  
b 川井正一『上野古屋敷遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X』茨城県教育財団文化財調査報告第307集 2008年3月  
c 川井正一・齋藤和浩『上野古屋敷遺跡3 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XI』茨城県教育財団文化財調査報告第324集 2009年3月  
d 櫻井完介・江原美奈子『上野古屋敷遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XII』茨城県教育財団文化財調査報告第334集 2010年3月
- 4) a 川村満博『(仮称)中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I 中谷津遺跡1』茨城県教育財団文化財調査報告第139集 1998年9月  
b 荒蒔克一郎『中根中谷津遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVI』茨城県教育財団文化財調査報告第367集 2013年3月
- 5) 盛野浩一・皆川貴之『柴崎大堀遺跡・柴崎大日塚 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XX』茨城県教育財団文化財調査報告第429集 2017年3月
- 6) a 成島一也『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告II 中原遺跡1』茨城県教育財団文化財調査報告第155集 2000年3月  
b 成島一也・宮田和男『中原遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III』茨城県教育財団文化財調査報告第159集 2000年3月  
c 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV 中原遺跡3』茨城県教育財団文化財調査報告第170集 2001年3月  
d 駒澤悦郎『東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII』茨城県教育財団文化財調査報告第251集 2005年3月
- 7) 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄『(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第102集 1995年12月
- 8) a 高村勇『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I) 柴崎遺跡I・II-1区』茨城県教育財団文化財調査報告第54集 1989年9月  
b 佐藤正好・松浦敏『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II) 柴崎遺跡II区 中塚遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第63集 1991年3月  
c 土生朗治『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(III) 柴崎遺跡III区』茨城県教育財団文化財調査報告第72集 1992年3月  
d 萩野谷悟『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 柴崎遺跡II区・III区』茨城県教育財団文化財調査報告第93集 1994年9月
- 9) 飯泉克典・国府田良樹・小池渉・西本豊弘・安藤寿男・伊達元成「茨城県霞ヶ浦西部花室川河床礫層より産出した後期更新世末期のニホンアンカ化石」『地質学雑誌』第116巻 5号 2010年5月
- 10) a 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭『上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書V』茨城県教育財団文化財調査報告第182集 2002年3月  
b 川井正一・齋藤和浩『上野陣場遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XI』茨城県教育財団文化財調査報告第323集 2009年3月
- 11) 加藤雅美・小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II 下広岡遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第10集 1981年3月

- 12) a 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和『上境旭台貝塚 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII』茨城県教育財団文化財調査報告第325集 2009年3月
- b 江原美奈子『上境旭台貝塚2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV』茨城県教育財団文化財調査報告第364集 2012年3月
- c 荒蒔克一郎『上境旭台貝塚3 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVII』茨城県教育財団文化財調査報告第368集 2013年3月
- d 小林和彦『上境旭台貝塚4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX』茨城県教育財団文化財調査報告第397集 2015年3月
- 13) a 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 1994年3月
- b 塩谷修『国指定史跡上高津貝塚E地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2000年3月
- c 石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚C地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2006年3月
- 14) a 石橋充・関口友紀『玉取遺跡-火葬場建設に伴う発掘調査報告-』つくば市教育委員会 2000年3月
- b 奥沢哲也『玉取向山遺跡 県立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第263集 2006年3月
- 15) a 江幡良夫『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書II 原田北遺跡II 西原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第85集 1994年3月
- b 小川和博・大淵敦志・鍛冶文博『六十塚遺跡』土浦市遺跡調査会 1998年3月
- c 中村哲也『野中遺跡 第2次調査報告書』美浦村教育委員会 2000年3月
- d 黒沢春彦『土浦周辺における弥生時代後期の様相』『土浦市立博物館紀要』第11号 土浦市立博物館 2001年3月
- e 関口満・窪田恵一『下郷遺跡・下郷古墳群』下郷古墳群調査会 2001年7月
- 16) 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻』桜村教育委員会 1982年3月
- 17) つくば市教育委員会「上境岡面点検 遺物抽出接合・原稿執筆作ノ内1号墳 発掘・確認調査」『つくば市内遺跡』つくば市 2001年3月
- 18) a 九重廃寺遺跡調査団『東岡遺跡-九重廃寺跡調査報告-』桜村教育委員会 1984年3月
- b 白田正子『金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII』茨城県教育財団文化財調査報告第209集 2003年3月
- c 白田正子『九重東岡廃寺確認調査報告書1』茨城県教育財団 2001年3月
- 19) 荒井保雄『九重東岡廃寺 金田西遺跡 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXI』茨城県教育財団文化財調査報告第435集 2019年3月
- 20) 註6)と同じ
- d 白田正子「東岡中原遺跡の様相」『古代地方官衙周辺における集落の様相-常陸国河内郡を中心として-』2005年2月
- 21) 註3)と同じ
- 22) 野田良直『金田西坪B遺跡 中根・金田台地区埋蔵文化財調査報告書XXII』茨城県教育財団文化財調査報告第443集 2020年3月
- 23) 橋場君男・桃崎祐輔「常陸南部における中世瓦の検討」『婆良岐考古』第17号 1995年5月
- 24) つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書-谷田部地区・桜地区-』つくば市 2001年3月
- 25) 比毛君男「常陸における中世瓦の様相」『東国の地域考古学』2011年3月
- 26) 註5)と同じ
- 27) 註23)と同じ

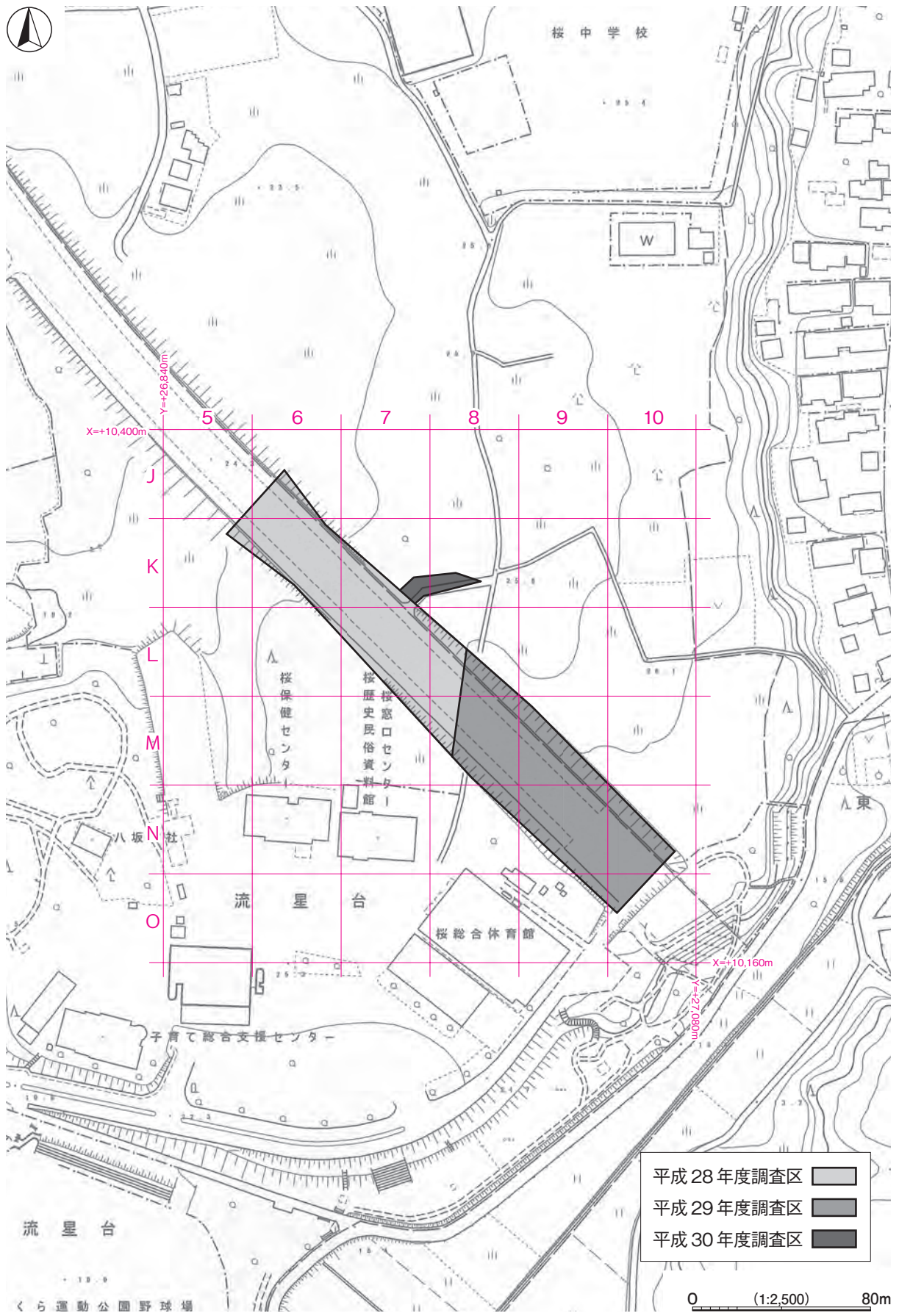




第1図 金田西坪B遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000 分の1 「上郷」「常陸藤沢」「谷田部」「土浦」)

第1表 金田西坪B遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代								
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸		
①	金田西坪B遺跡		○	○	○	○	○	○	47	小野崎宿遺跡						○	○		
2	九重東岡廃寺						○	○	○	48	倉掛天神塚						○	○	
3	金田西遺跡		○			○	○	○	○	49	倉掛千現塚							○	○
4	金田西坪A遺跡						○			50	上境北ノ内遺跡					○	○	○	
5	柴崎片岡上館跡					○	○	○		51	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○	
6	柴崎南遺跡		○			○		○	○	52	中根不葉拔遺跡		○			○	○	○	
7	柴崎遺跡	○	○			○	○	○	○	53	中根宮ノ前遺跡					○	○	○	
8	栗原五竜遺跡		○			○	○	○		54	中根屋敷附館跡					○	○	○	
9	栗原大山西遺跡						○	○	○	55	中根遺跡				○	○	○		
10	栗原十日塚古墳					○				56	松塚鷺打遺跡					○	○	○	
11	栗原愛宕塚古墳					○				57	栄土器屋遺跡					○	○	○	
12	上野天神塚古墳					○				58	栄屋敷付遺跡					○	○	○	
13	上野定使古墳群					○				59	栄尼塚遺跡						○	○	
14	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	○	○	60	金田竜宮橋遺跡					○	○	○	
15	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	61	大白畑遺跡				○	○	○	○	
16	上境作ノ内遺跡		○	○	○	○			○	62	阿弥陀寺跡						○	○	
17	上境作ノ内古墳群					○				63	大南遺跡				○	○	○	○	
18	上境滝の台古墳群					○				64	古来北ノ崎遺跡					○	○	○	
19	上境旭台貝塚		○			○				65	古来島ノ前塚						○	○	
20	中根中谷津遺跡	○	○				○			66	古来館跡		○	○	○	○	○		
21	横町古墳群					○				67	古来遺跡					○	○		
22	横町庚申塚遺跡		○			○	○	○	○	68	吉瀬清水台遺跡		○		○	○			
23	金田古墳					○				69	上ノ室大日塚古墳				○				
24	金田城跡								○	70	上ノ室大十塚遺跡					○			
25	柴崎大堀遺跡	○	○						○	71	倉掛遺跡		○						
26	柴崎稲荷前古墳					○				72	倉掛明神の門遺跡					○		○	
27	柴崎大日塚								○	73	上ノ室入定原古墳				○				
28	東岡中原遺跡	○	○			○	○	○	○	74	花室遺跡		○			○			
29	東岡南遺跡						○	○	○	75	花室溝向遺跡					○			
30	東岡中畑遺跡						○			76	花室後田塚						○	○	
31	東岡天神前遺跡						○	○	○	77	花室大日塚古墳				○				
32	花室城跡		○	○	○	○	○	○	○	78	妻木鴻ノ巢遺跡					○	○		
33	花室寺畑廃寺								○	79	柴崎ボツケ遺跡					○			
34	花室寺山前遺跡						○	○	○	80	上境滝ノ臺遺跡		○	○					
35	花室儀量台遺跡		○			○	○	○	○	81	上野中塚遺跡		○		○	○	○		
36	上ノ室タテ坪塚								○	82	栗原才十郎遺跡		○						
37	上ノ室城跡		○				○	○	○	83	栗原五竜塚古墳群				○				
38	上ノ室ハマイバ遺跡					○	○	○	○	84	栗原大山遺跡					○	○		
39	上ノ室十枚遺跡					○	○	○	○	85	上境どんどん塚古墳					○			
40	上ノ室野中遺跡		○			○	○	○	○	86	中根とりおい塚古墳群					○			
41	上ノ室薬師山遺跡						○	○	○	87	松塚高畑遺跡					○	○	○	
42	上ノ室中坪後遺跡					○	○	○	○	88	中根中谷津古墳					○			
43	上ノ室中畑遺跡		○				○	○	○	89	大寺前遺跡					○	○	○	
44	妻木坪内遺跡						○	○	○	90	金田本田遺跡					○	○		
45	妻木宮前遺跡						○	○	○	91	上ノ室条里					○			
46	小野崎館跡							○	○	92	花室大根遺跡					○			



第 2 図 金田西坪 B 遺跡調査区設定図 (つくば市都市計画図 2,500 分の 1)

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

金田西坪B遺跡は、つくば市の北東部に位置し、桜川の低地に臨む標高24mの右岸台地上に立地している。古くから河内郡衙・河内郡寺の推定地とされてきた場所であり、平成12年・13年度に確認調査が行われ、正倉院と正倉区画溝が確認されている。

今回の調査地区は、確認調査をした場所の南部にあたる。調査面積は、平成28年度4,470㎡、平成29年度4,247㎡、平成30年度279㎡である。総面積は8,996㎡となる。

調査の結果、竪穴建物跡44棟（縄文時代4、弥生時代4、古墳時代20、奈良時代12、平安時代4）、掘立柱建物跡29棟（奈良時代25、中・近世4）、鍛冶工房跡1棟（古墳時代）、大型円形土坑1基（奈良時代）、土坑146基（縄文時代22、弥生時代2、古墳時代3、奈良時代2、中・近世8、時期不明109）、溝跡13条（奈良時代1、中・近世3、時期不明9）、柱穴列2条（奈良時代）、陥し穴5基（縄文時代）、道路跡2条（近世）を確認した。

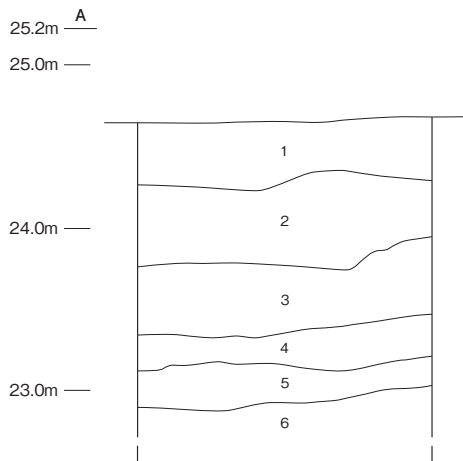
遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に86箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・高台付坏・椀・小皿・鉢・壺・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・鉢・捏鉢・甕・甑）、土製品（土玉・土器片・錘・紡錘車・羽口・円面硯）、石器（剥片・石鏃・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石・砥石）、石製品（白玉・剣型模造品・有孔円板）、金属製品（刀子・鉄鏃・釘・釵）、鍛冶関連遺物（鉄滓・椀状滓・粒状滓・鍛造剥片）などである。

## 第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面（K7f4区）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。土層は6層に分層でき、第2・3層が関東ローム層である。

第1層は、表土である。粘性・締まりとも普通で、層厚は30～40cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性は普通で締まりが強い。ロームブロックやローム粒子を少量含み、層厚は36～60cmである。



第3図 基本土層図

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は40～50cmである。

第4層は、ローム層から粘土層への漸移層で、にぶい黄褐色を呈している。粘性・締まりともに強く、層厚は14～30cmである。

第5層は、灰白色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりともに非常に強く、層厚は20～30cmである。

第6層は、浅黄橙色を呈するシルト層で、酸化鉄を含んでいる。粘性・締まりともに非常に強い。下層は未掘のため、本来の層位は不明である。

遺構は主に第2層上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟、土坑22基、陥し穴5基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 竪穴建物跡

##### 第36号竪穴建物跡（第4・5図 PL 5）

**位置** 調査区南部のM9g5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸2.75m、短軸2.38mの楕円形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は10cmで、緩やかに立ち上がっている。

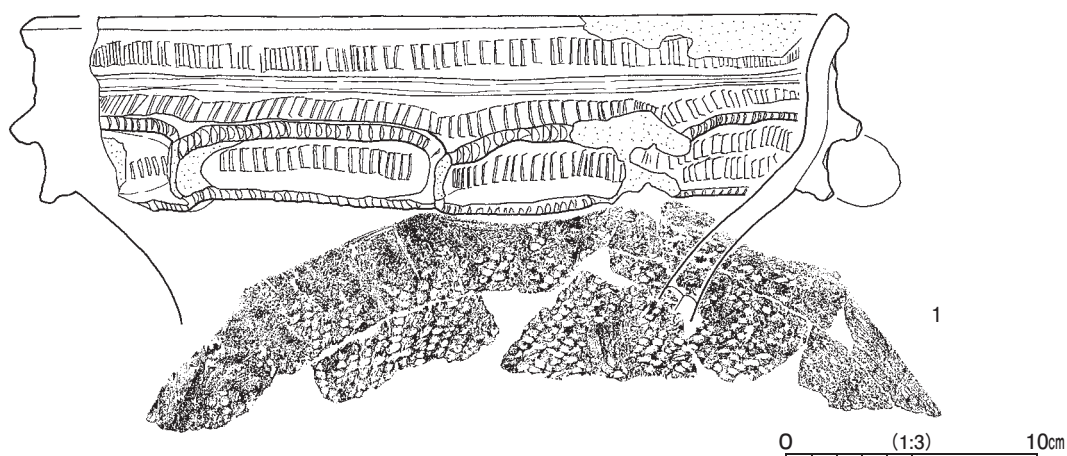
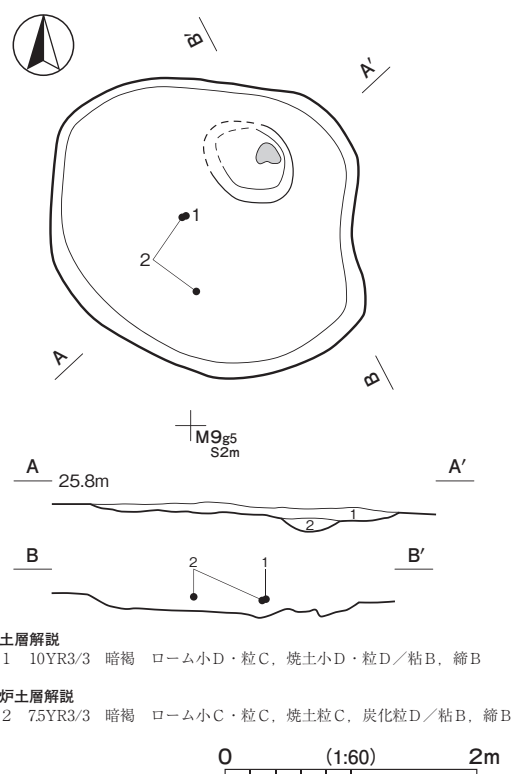
**床** 平坦で、硬化面は確認できなかった。

**炉** 北東部に付設されている。炉床面は、一部が火熱を受けて赤変硬化している。

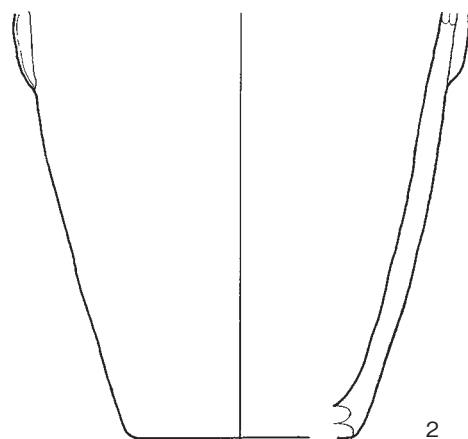
**覆土** 単一層である。上部が削平されているため、堆積の状況は不明である。

**遺物出土状況** 縄文土器片7点（深鉢）が出土している。1は中央部の覆土上層、2も接合した破片が中央部とやや南部の覆土上層から出土している。同一層からまとまって出土していることから、投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第4図 第36号竪穴建物跡・出土遺物実測図



0 (1:3) 10cm

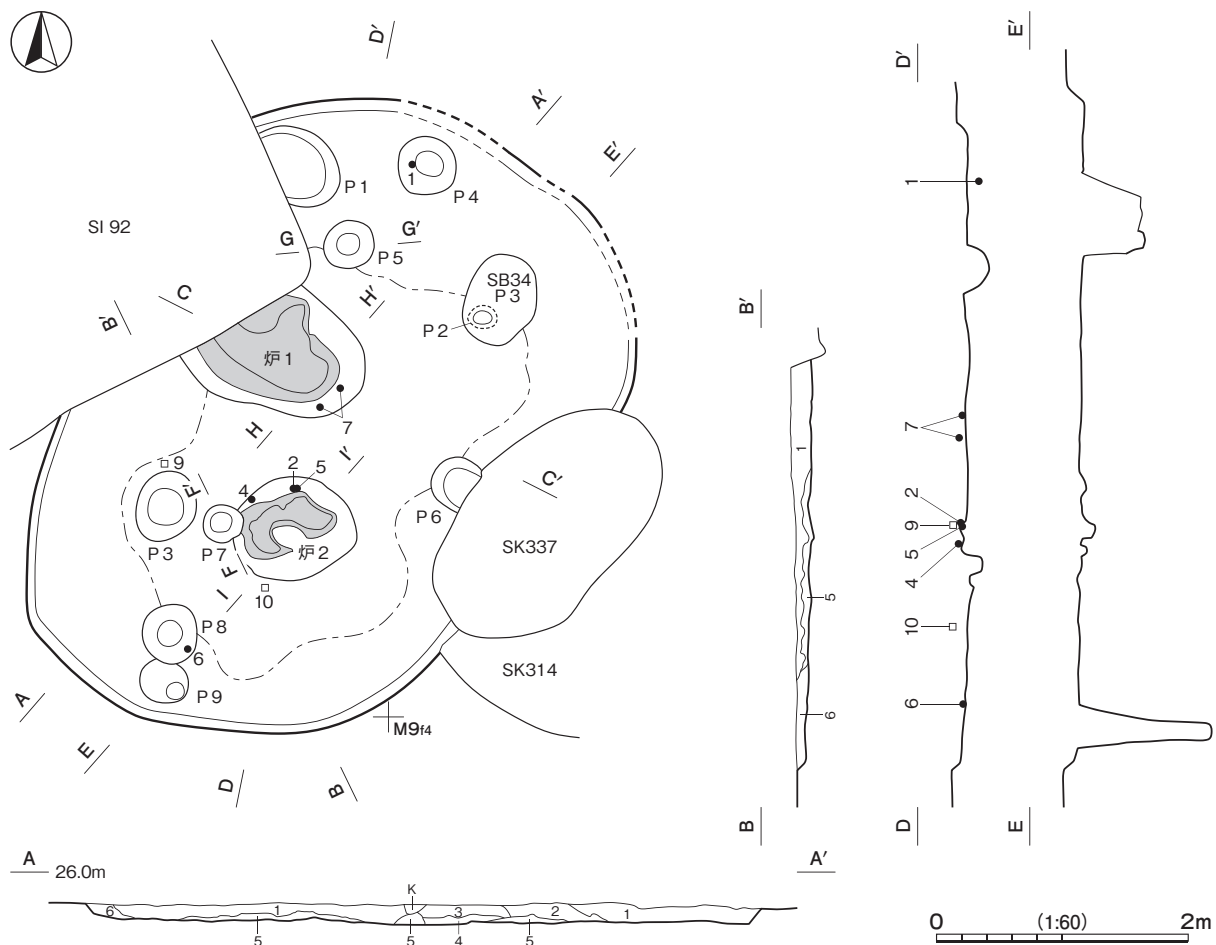
第5図 第36号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2表 第36号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[31.6]	(12.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁上端部無文 隆帯による楕円区画 区画内及び脇キャタピラ文 地文に単節縄文RL(縦)	覆土上層	20% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(16.8)	[9.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	2条の並行隆帯が垂下	覆土上層	30% PL28

第81号竪穴建物跡 (第6~8図 PL5)

位置 調査区南部のM9e3区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第6図 第81号竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第92号竪穴建物，第34号掘立柱建物，第314・337号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.42m，短軸3.54mの楕円形で，主軸方向はN-41°-Eである。壁高は7～12cmで，緩やかに立ち上がっている。

**床** 平坦で，中央部が踏み固められている。

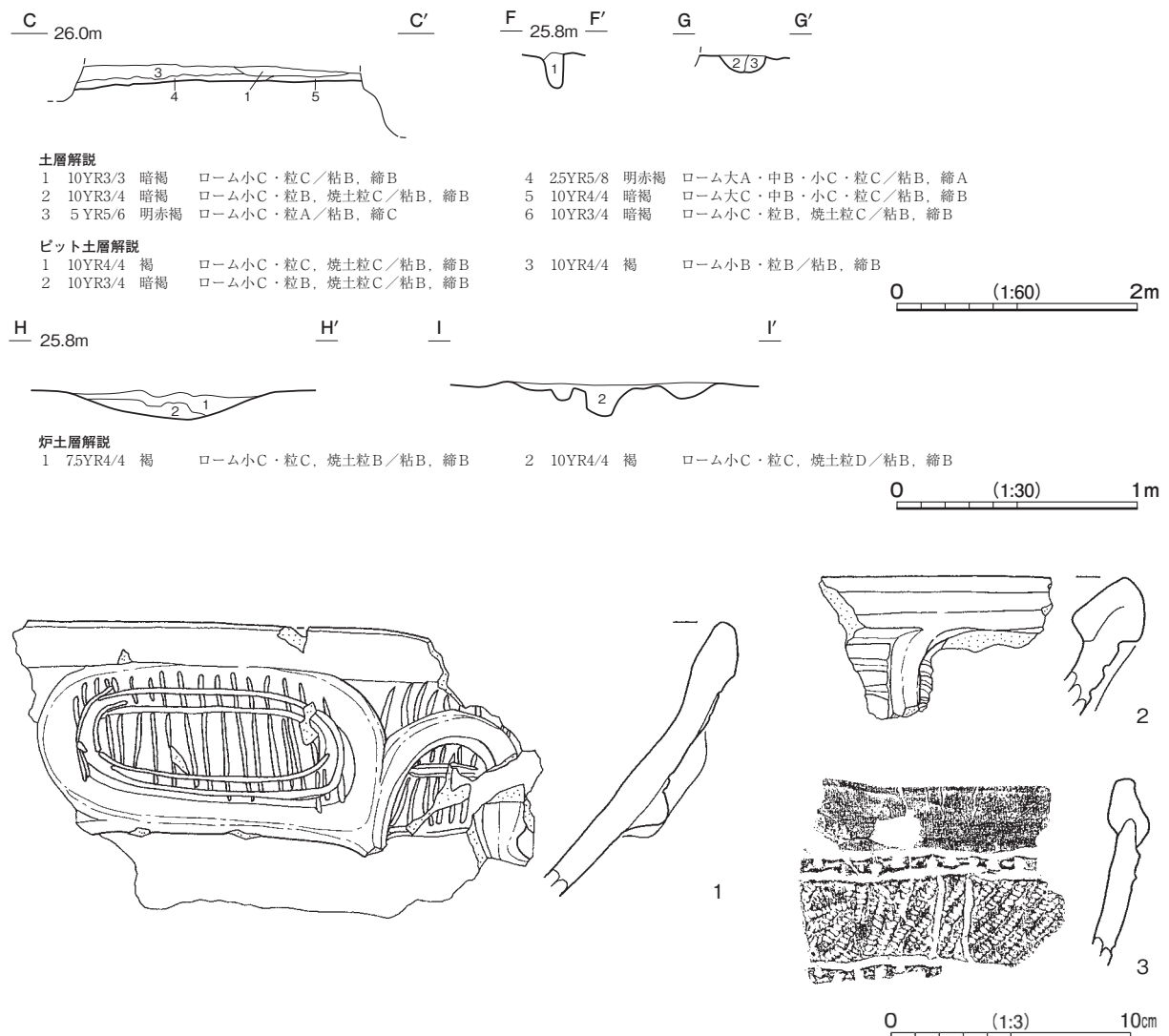
**炉** 2か所。炉1はほぼ中央部に，炉2はやや南部に付設されている。炉床面は，いずれも火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 9か所。深さは12～108cmで，性格は不明である。

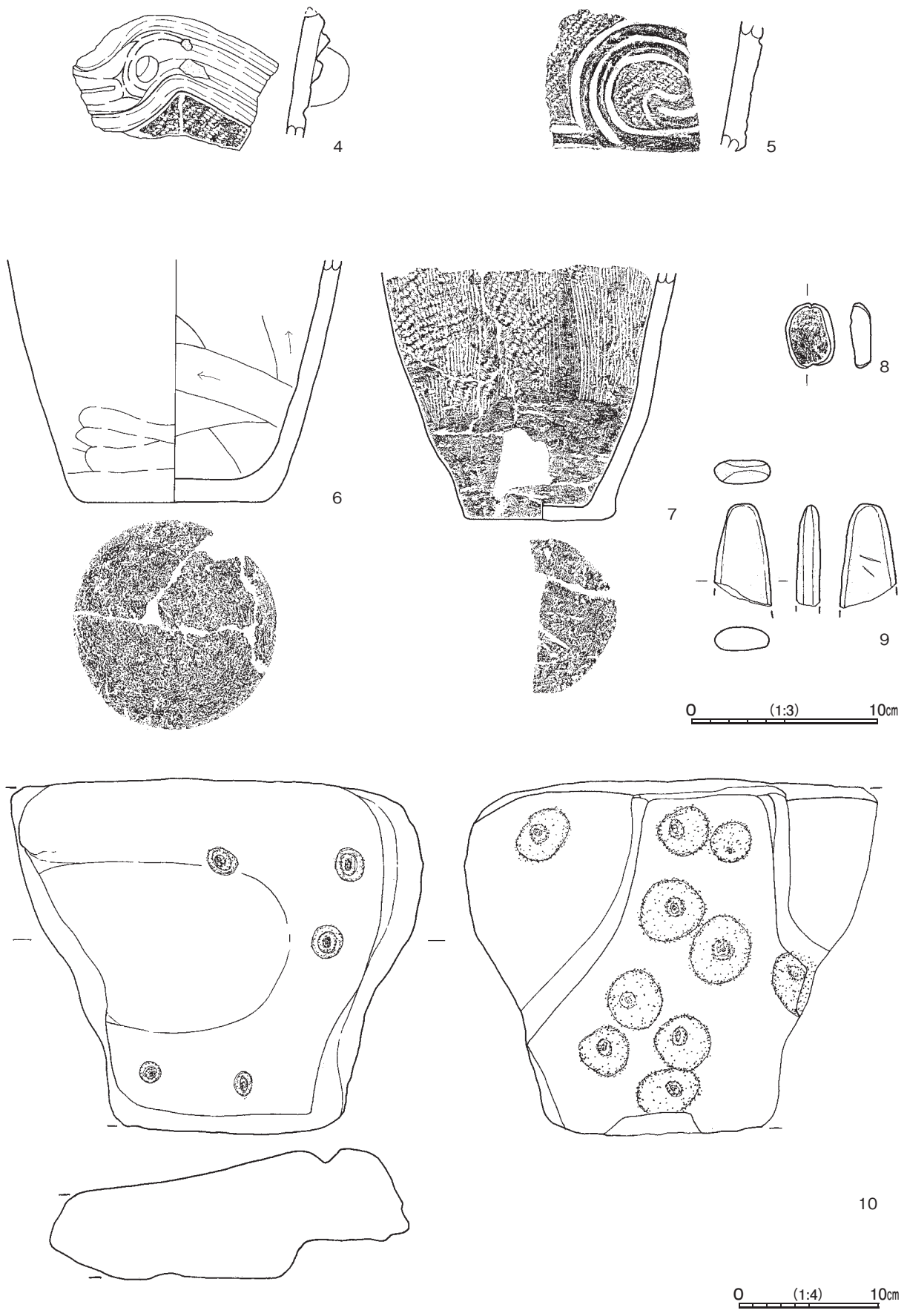
**覆土** 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片108点（深鉢），土製品1点（土器片錘），石器2点（磨製石斧，石皿・凹石）が出土している。2・4・5・7は炉1・2周辺，6は南部の床面から出土している。1はP4の覆土中層から，10は中央部の覆土上層から，3・8は覆土中からそれぞれ出土している。出土状況から，いずれも埋め戻す過程で，投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。



第7図 第81号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第8図 第81号竖穴建物跡出土遺物実測図



第3表 第81号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(11.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁上部無文 隆帯による楕円区画 区内沈線を充填 地文に単節縄文RL (縦)	覆土中層	10% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部磨き 隆帯による楕円区画 区内キョウタビラ文	炉2	
3	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁上部無文 口縁部下交互刺突 地文に単節縄文RL (横)	覆土中	PL28
4	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太沈線による渦巻文・平行線文 地文に単節縄文RL (横)	炉2	PL28
5	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	隆帯による摘み状の突起 横方向の平行沈線 地文に単節縄文RL (横)	炉2	PL28
6	縄文土器	深鉢	-	(13.1)	9.9	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面下部横位のナデ 内面横方向の削りとナデ	床面	30%
7	縄文土器	深鉢	-	(13.2)	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	櫛歯状工具による縦位の条線文 単節縄文LR (横) 底部に横位のヘラ削りとナデ	炉1	30% PL28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	土器片鏃	3.5	2.7	1.0	10.68	長石・石英	にぶい赤褐	胴部片 両端にキザミ目	覆土中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	磨製石斧	(5.6)	3.1	1.2	(33.94)	緑色岩	小型 全面研磨 側縁部に稜 刃部欠損	覆土中層	PL46
10	石皿・凹石	(29.1)	25.3	9.1	(10.15) kg	砂岩	周縁部上部研磨 中央皿状に研磨 表裏面に凹み痕	覆土上層	PL46

### 第96号竪穴建物跡 (第9・10図 PL5)

**位置** 調査区中央部のM8f3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第89号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。隅丸長方形で、主軸方向はN-44°-Wである。上段は長軸8.10m、短軸5.92mである。壁は高さ24~54cmで、緩やかに立ち上がっている。下段は長軸5.70m、短軸4.50mで、上段との高低差は24cmである。壁はほぼ直立している。

**床** 上段・下段ともにほぼ平坦で、下段の中央部が踏み固められている。上段の北壁下から東壁下にかけて壁溝が存在し、下段も南壁以外には壁溝が確認された。

**ピット** 6か所。P1~P4は深さ114~126cmで、下段の各コーナー部近くに位置しており、支柱穴と考えられる。P5・P6はそれぞれ深さ18cm・24cmで、性格は不明である。

**覆土** 8層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片29点(深鉢27, 浅鉢2), 石器1点(石鏃)が出土している。1~4は覆土中から出土しており、廃絶後、埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

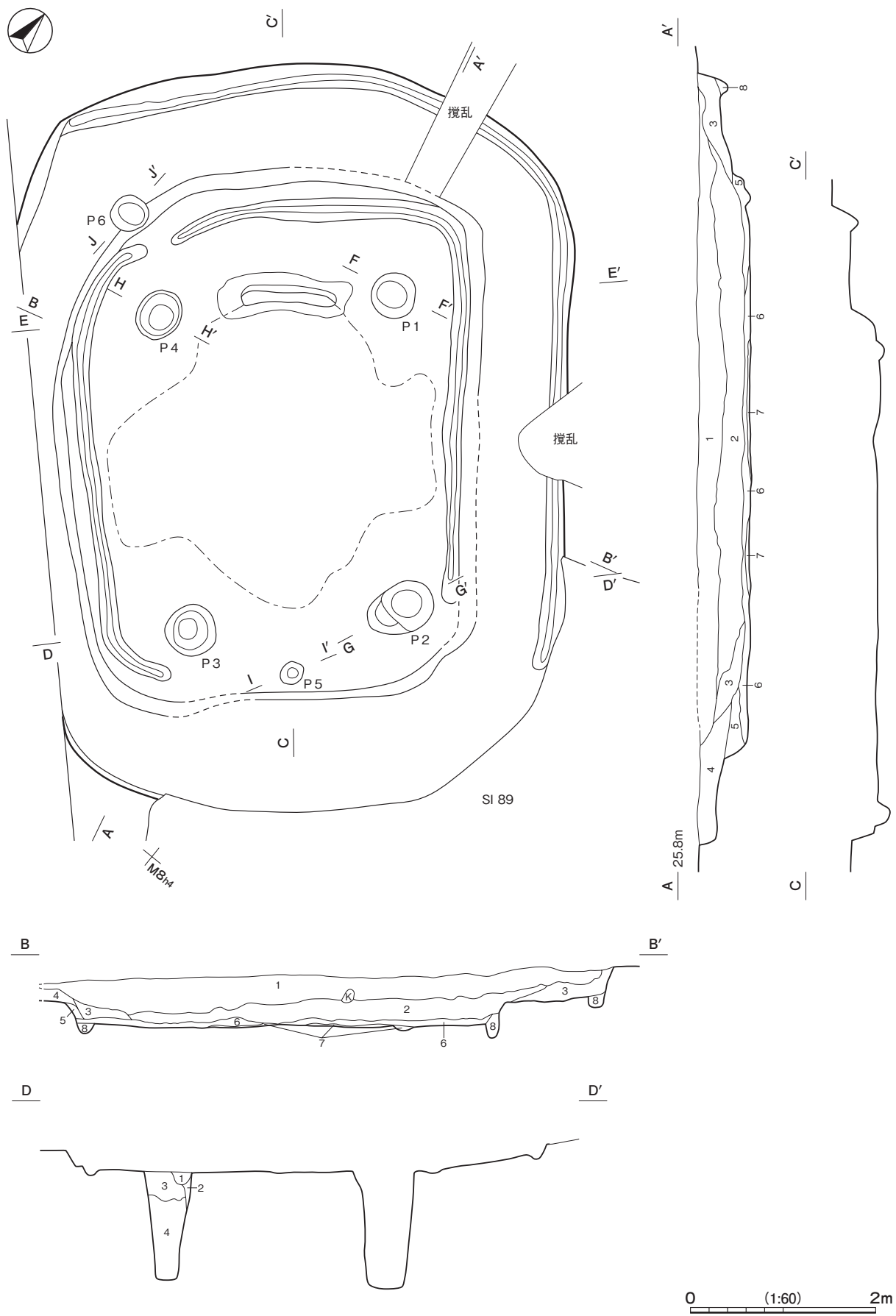
**所見** 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

#### 土層解説

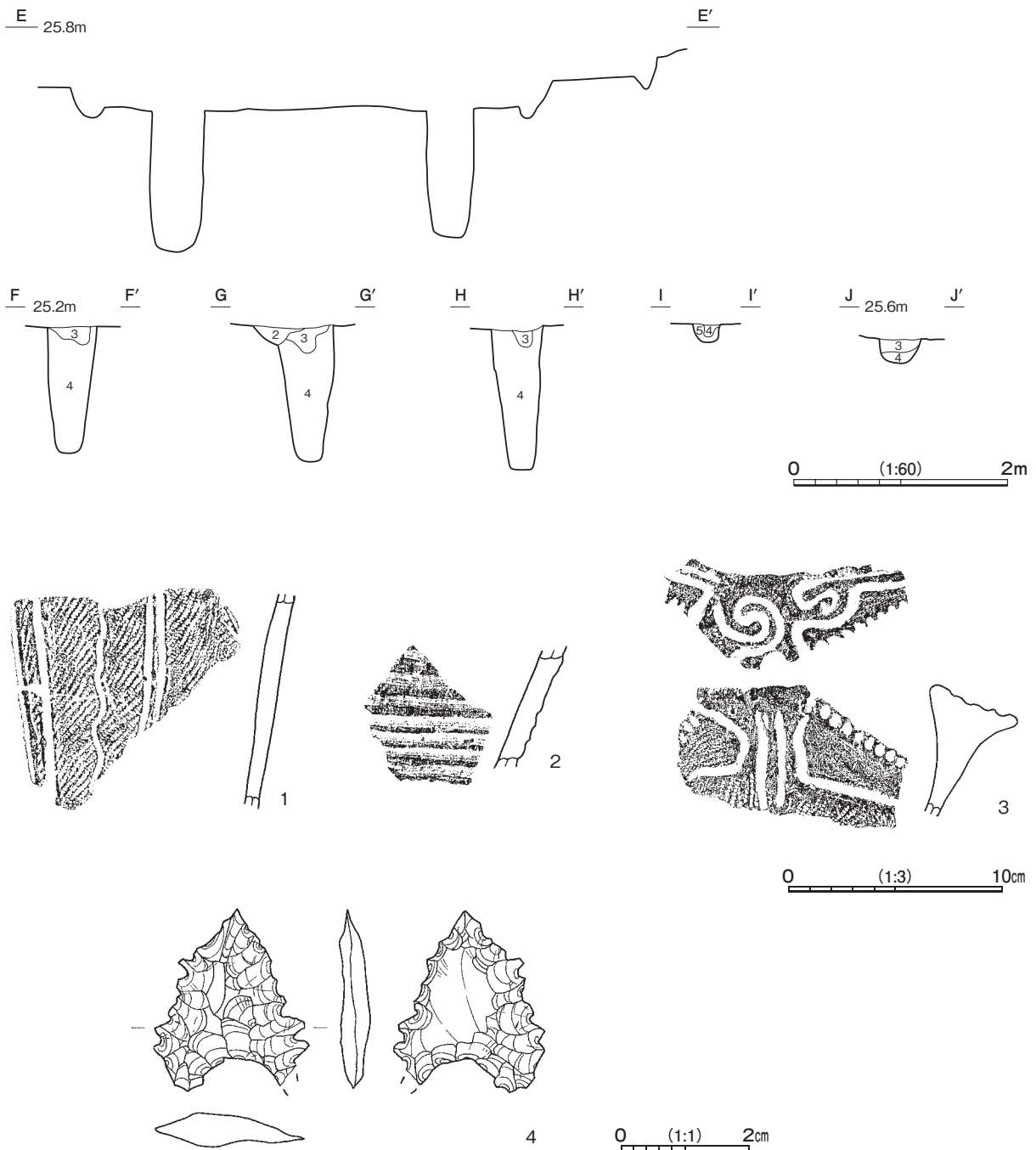
1 75YR4/3 褐	ローム粒B, 炭化粒D/粘C, 縮A	5 75YR4/3 褐	ローム粒D/粘B, 縮A
2 75YR4/3 褐	ローム中D・小C・粒B, 炭化粒D/粘C, 縮A	6 75YR5/3 にぶい褐	ローム粒D・炭化粒D/粘A, 縮A
3 75YR4/3 褐	ローム小D・粒C, 炭化粒D/粘B, 縮A	7 75YR2/2 黒褐	ローム小D・粒D/粘A, 縮A
4 75YR4/4 褐	ローム小D・粒D/粘B, 縮A	8 75YR4/3 褐	ローム小D/粘B, 縮A

#### ピット土層解説

1 75YR4/3 褐	ローム粒C/粘B, 縮A	4 75YR3/4 暗褐	ローム小D・粒D, 炭化粒D/粘A, 縮A
2 75YR4/4 褐	ローム中D・小C・粒B/粘B, 縮B	5 75YR4/3 褐	ローム小D/粘A, 縮A
3 75YR4/3 褐	ローム小D/粘B, 縮A		



第9図 第96号竖穴建物跡実測図



第 10 図 第 96 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 4 表 第 96 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(10.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	単節縄文 RL (横) 沈線による蛇行線・並行線による懸垂文	覆土中	10% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	横位の連続太沈線文	覆土中	PL28
3	縄文土器	浅鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇頂部に平坦面 三角形に張り出した渦巻文 口縁部沈線による区画 単節縄文 RL (横)	覆土中	10% PL28
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4	石鏃	2.9	2.4	0.5	(1.58)	黒曜石	茎部中央深く彎入 両面押圧剥離		覆土中	PL46	

第 97 号 竪穴建物跡 (第 11・12 図 PL 5)

**位置** 調査区南部の N10b1 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

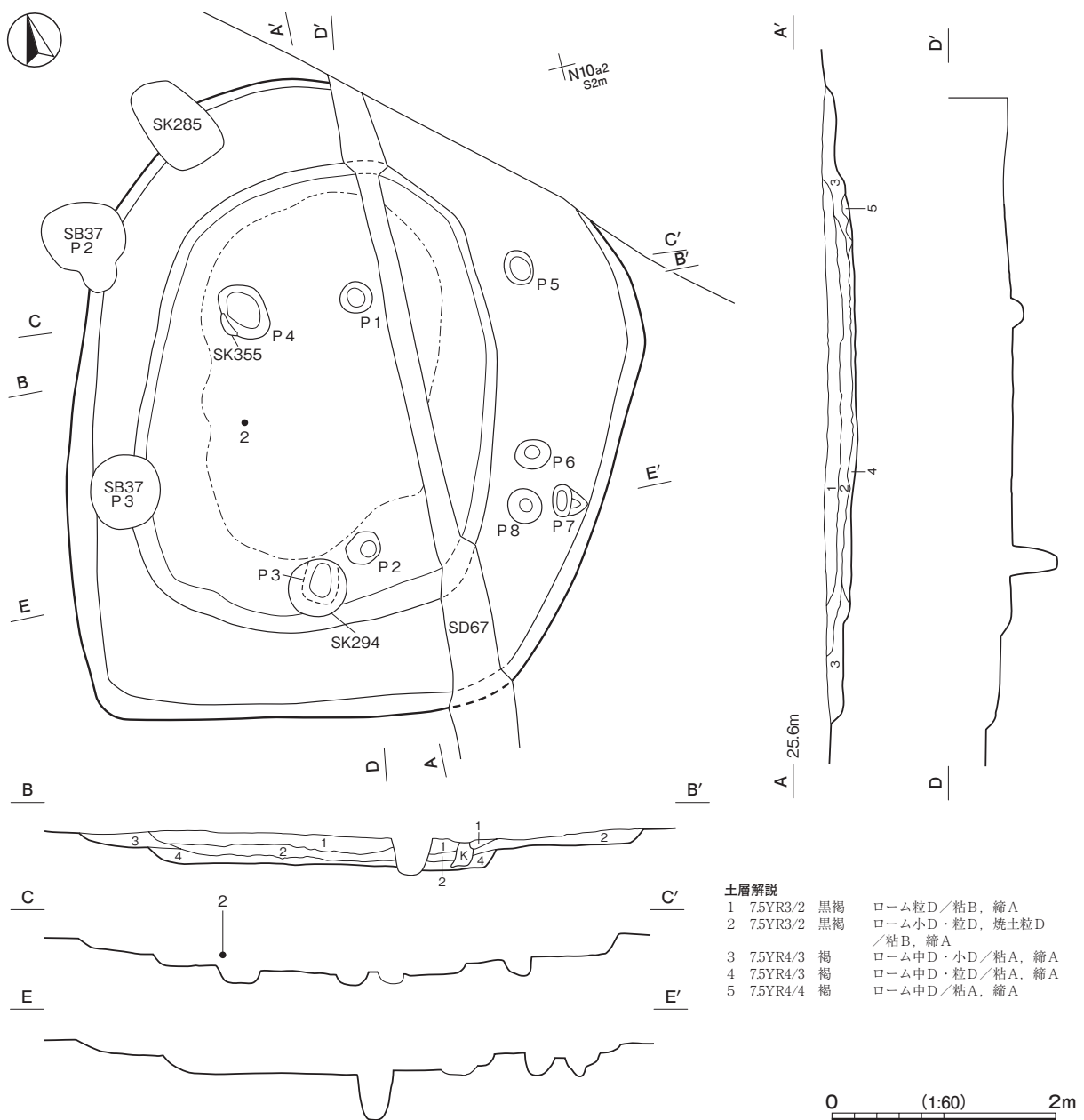
**重複関係** 第 37 号掘立柱建物, 第 285・294・355 号土坑, 第 67 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。隅丸長方形で, 主軸方向は  $N-14^{\circ}-E$  である。上段は長軸 5.70 m, 短軸 5.10 m である。壁は高さ 12~30 cm で, 緩やかに立ち上がっている。下段は長軸 4.20 m, 短軸 3.12 m で, 上段との高低差は 18 cm である。壁は外傾して立ち上がっている。

**床** 上段・下段ともにほぼ平坦で, 下段の中央部が踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

**ピット** 8 か所。ピットは深さ 12~45 cm で, 性格は不明である。

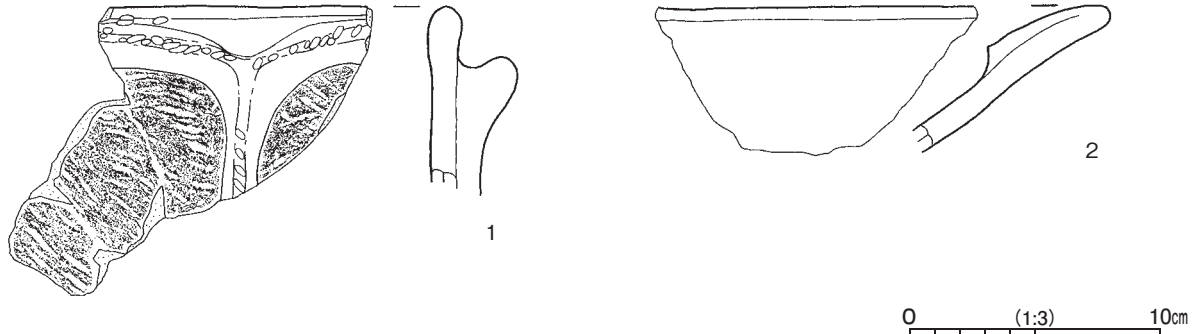
**覆土** 5 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから, 自然堆積である。



第 11 図 第 97 号 竪穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 縄文土器片 116 点（深鉢 115, 浅鉢 1）が出土している。1 は廃絶後, 埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第 12 図 第 97 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 5 表 第 97 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか		出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(11.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部無文 (縦)	隆帯をV字状に貼付 無節縄文L	覆土中	PL28
2	縄文土器	浅鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外・内面横位の丁寧な磨き		覆土中層	PL28

第 6 表 縄文時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)					主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
36	M9g5	N-45°-W	楕円形	2.75 × 2.38		10	平坦	-	-	-	-	地床炉	-	不明	縄文土器	中期中葉	
81	M9e3	N-41°-E	楕円形	5.42 × 3.54		7~12	平坦	-	-	-	9	地床炉2	-	人為	縄文土器, 石器	中期中葉	本跡→SI92, SB34, SR314・337
96	M8f3	N-44°-W	(上) 隅丸長方形 (下) 隅丸長方形	8.10 × 5.92		24~54	平坦	一部	4	-	2	-	-	自然	縄文土器, 石器	中期中葉	本跡→SI89
97	N10b1	N-14°-E	(上) 隅丸長方形 (下) 隅丸長方形	5.70 × 5.10		12~30	平坦	-	-	-	8	-	-	自然	縄文土器	中期中葉	本跡→SB37, SK285・294・355, SD67

(2) 土坑

今回の調査で, 縄文時代の土坑 22 基を確認した。形状や遺物出土状況などが特徴的な土坑 11 基については, 文章と実測図, 出土遺物一覧で解説する。その他の縄文時代の土坑については, 実測図と土層解説を掲載する。

ア) 形状や遺物出土状況などが特徴的な土坑

**第 153 号土坑** (第 13 図)

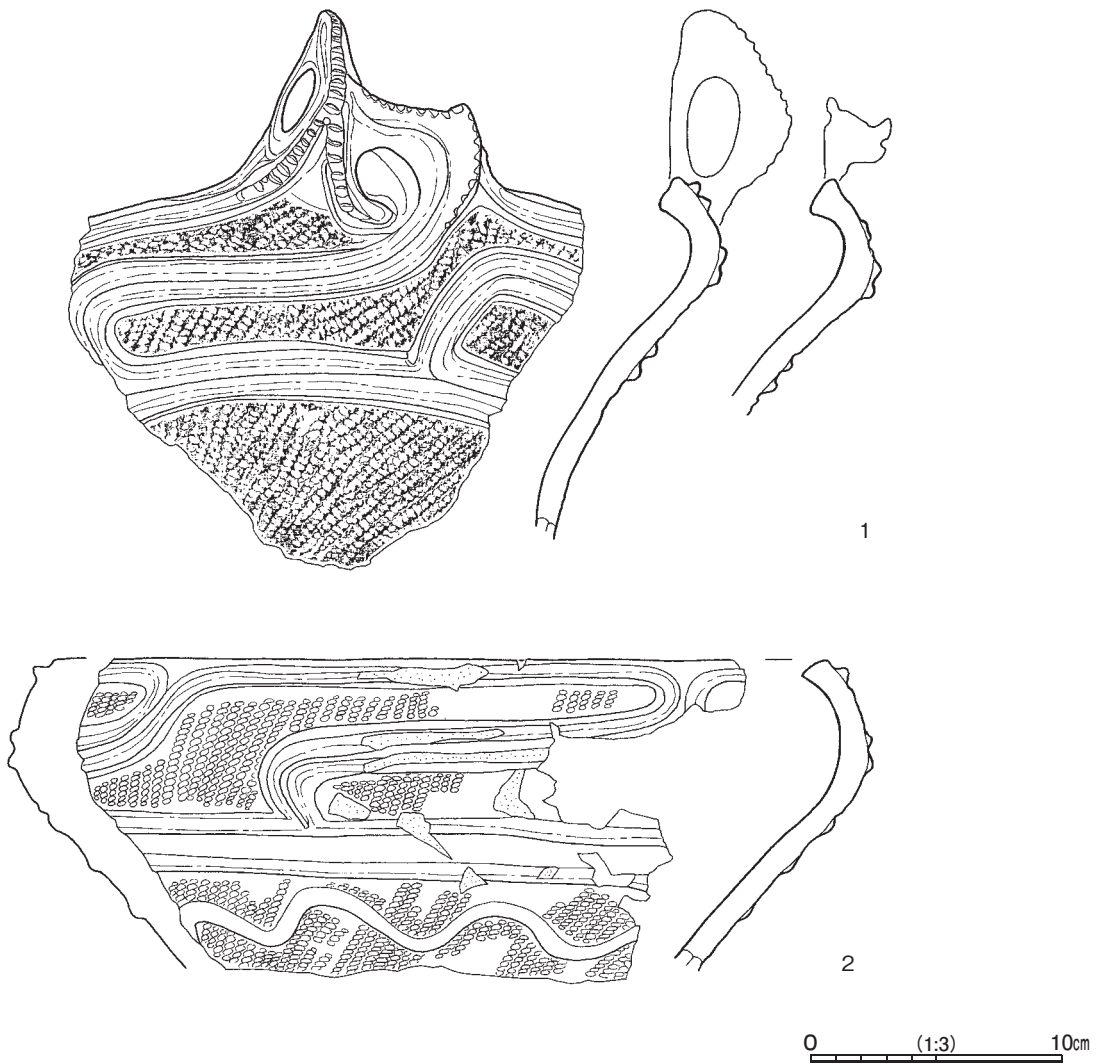
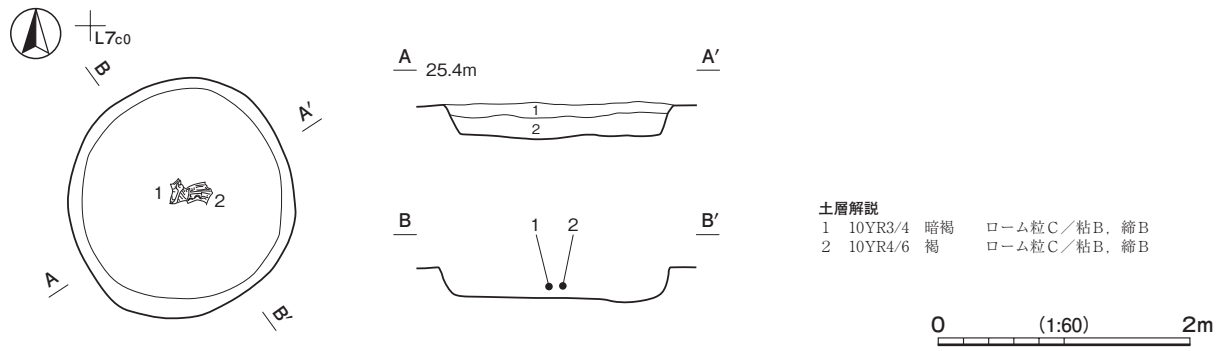
**位置** 調査区中央部の L7c0 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 径 1.82 ~ 1.94 m の円形で, 底面は平坦である。確認面からの深さは 26 cm で, 外傾している。

**覆土** 2 層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから, 自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片 28 点 (深鉢) が覆土中から出土している。1・2 共に覆土下層から出土しており, 埋没する早い段階で投棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉である。



第13図 第153号土坑・出土遺物実測図

第7表 第153号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徵ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(21.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	地文に単節縄文RL(縦)隆帯に沿って沈線を施文 隆帯上にキサミ目隆帯による区画文	覆土下層	20% PL30
2	縄文土器	深鉢	[30.8]	(12.4)	-	長石・石英・雲母・細礫	明褐	普通	地文に単節縄文RL(縦)口縁部隆帯による区画 口頸部沈線を伴う隆帯で区画隆帯による横走波状線	覆土下層	20% PL30

第 181 号土坑（第 14 図 PL 6）

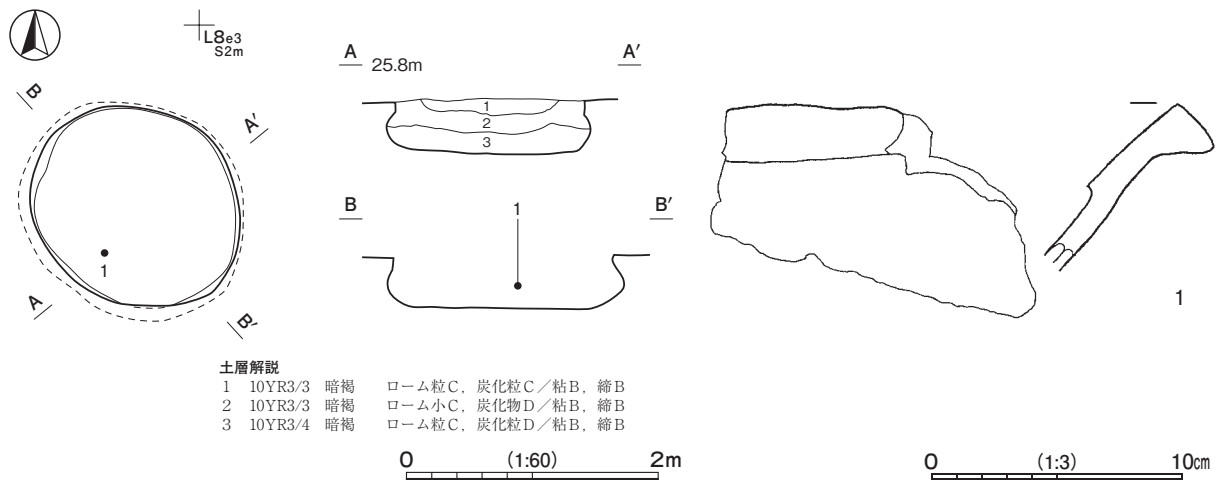
**位置** 調査区中央部の L 8 e2 区，標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 開口部は長径 1.76 m，短径 1.56 m で，長径方向が N - 47° - W の楕円形である。最大径は長径 1.88 m，短径 1.70 m で，底面は楕円形を呈し平坦である。確認面からの深さは 44 cm である。壁は中位まで内彎して袋状を呈し，底面から 30 ~ 35 cm のところでくびれ，上位は直立している。

**覆土** 3 層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから，自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片 91 点（深鉢 89，浅鉢 2）が覆土中から出土している。1 は覆土中層から出土しており，埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から，貯蔵穴と考えられる。時期は，出土土器から中期中葉である。



第 14 図 第 181 号土坑・出土遺物実測図

第 8 表 第 181 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	浅鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部肥厚 外・内面横位の磨き	覆土中層	10% PL30

第 182 号土坑（第 15・16 図 PL 6）

**位置** 調査区中央部の L 8 f3 区，標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

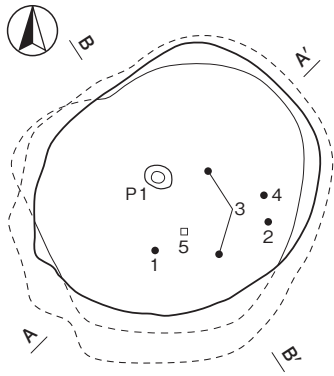
**規模と形状** 開口部は長径 2.27 m，短径 1.92 m で，長径方向が N - 45° - E の楕円形である。底面は長径 2.60 m，短径 2.40 m の楕円形で，平坦である。確認面からの深さは 82 cm である。壁は内彎し，袋状を呈している。

**ピット** 底面中央に 1 か所確認した。性格は不明である。

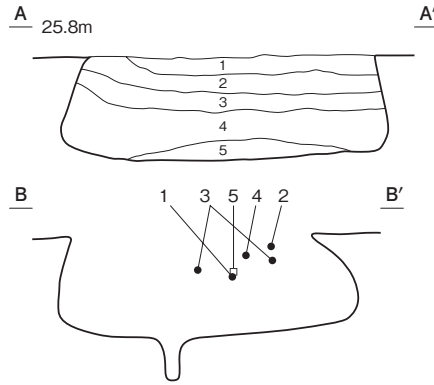
**覆土** 5 層に分層できる。覆土がレンズ状に堆積していることから，自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片 86 点（深鉢 85，浅鉢 1），石器 2 点（磨製石斧，石皿・凹石）が覆土中から出土している。1・3・5 は覆土中層から出土しており，3 は破片 2 点が接合したものである。2・4 は覆土上層から出土している。これらは埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から，貯蔵穴と考えられる。時期は，出土土器から中期中葉である。



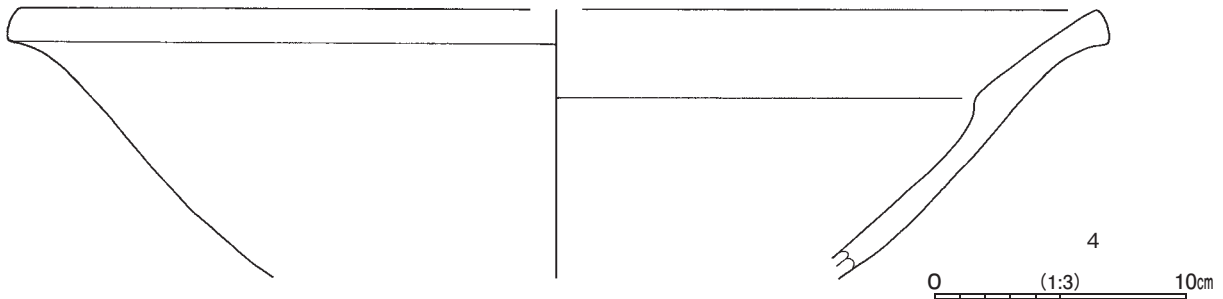
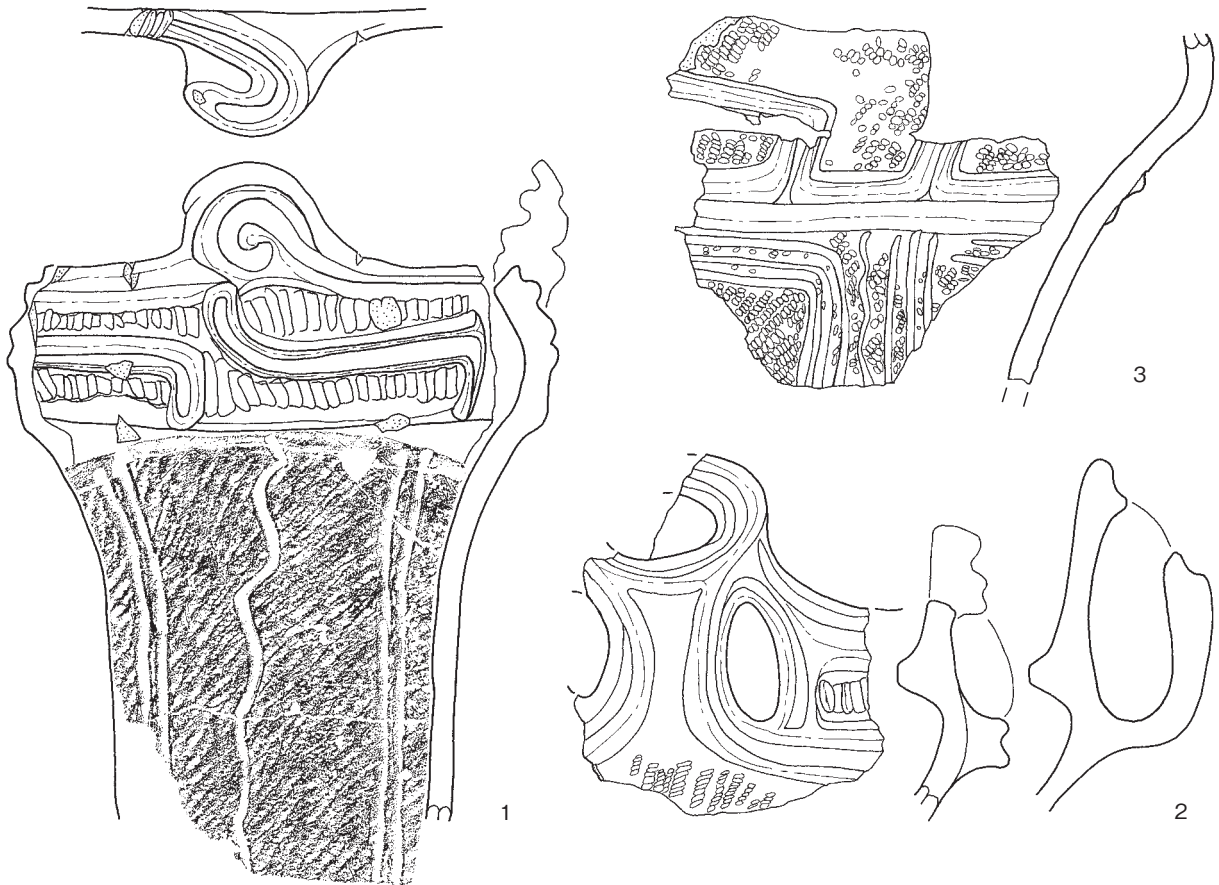
L8f4



土層解説

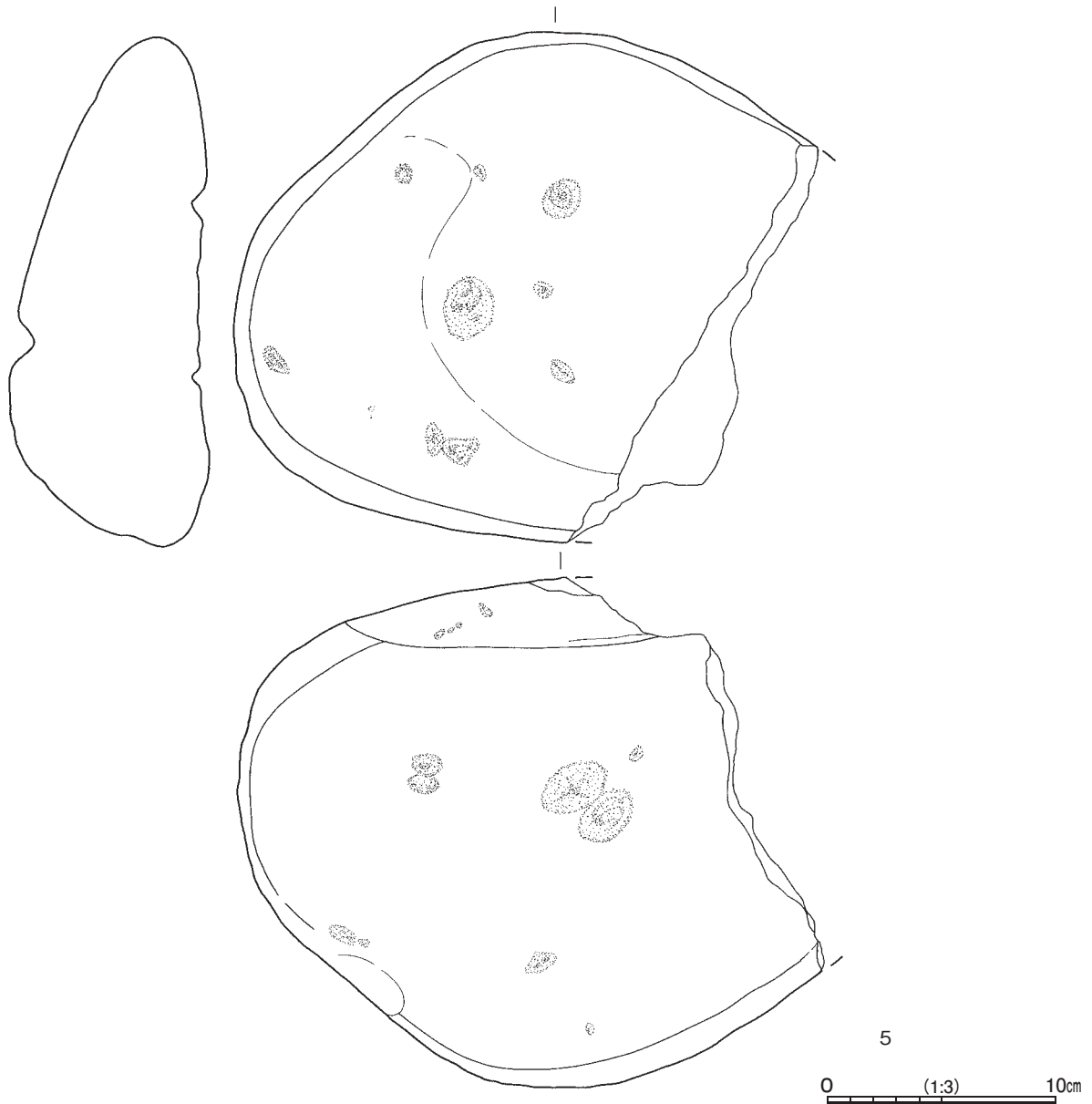
- |   |             |                          |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐  | ローム小C, 炭化物D/粘B, 締B       |
| 2 | 10YR3/3 暗褐  | ローム粒C, 炭化物D/粘B, 締B       |
| 3 | 10YR3/3 暗褐  | ローム粒C, 炭化粒D/粘B, 締B       |
| 4 | 10YR4/3 灰黄褐 | ローム中C・小C・粒D/粘B, 締B       |
| 5 | 10YR4/2 灰黄褐 | ローム粒B, 烧土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A |

0 (1:60) 2m



第15図 第182号土坑・出土遺物実測図





第 16 図 第 182 号土坑出土遺物実測図

第 9 表 第 182 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[20.6]	(26.3)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆帯による渦巻文・区画文 区画内キャタピラ文 地文に単節縄文 RL (縦) 並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土中層	30% PL30
2	縄文土器	深鉢	-	(14.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	把手に沿って太沈線で凹文 隆帯による方形区画 地文に単節縄文 RL (縦)	覆土上層	PL30
3	縄文土器	深鉢	-	(13.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 逆 L 字状の並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土中層	PL30
4	縄文土器	浅鉢	[42.6]	(10.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	外・内面横位の丁寧な磨き	覆土上層	20% PL30

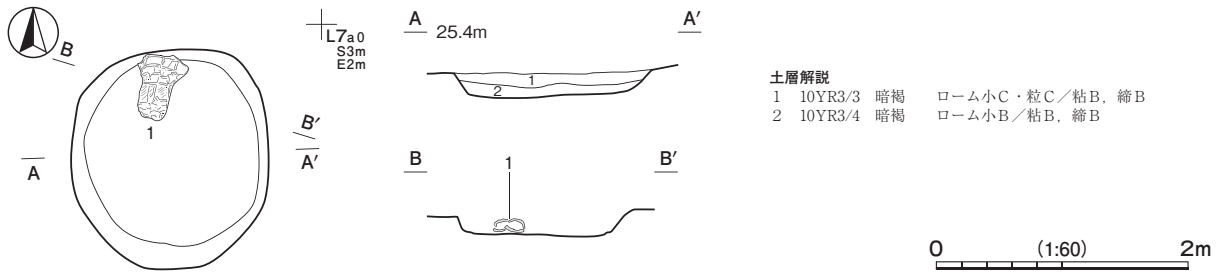
  

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	石皿・凹石	(22.2)	(25.5)	8.8	(5.25) kg	安山岩	中央部研磨 表裏面に凹み痕	覆土中層	PL47

第 187 号土坑 (第 17 図 PL 6)

位置 調査区中央部の L 7a0 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 1.80 m, 短径 1.64 m の円形で, 底面は平坦である。確認面からの深さは 22 cm で, 壁は外傾している。



第 17 図 第 187 号土坑・出土遺物実測図

**覆土** 2層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片1点（深鉢）が覆土下層から完形に近い形でまとまって出土した。埋没する早い段階で遺棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。

第10表 第187号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[26.7]	44.4	13.2	長石・石英・雲母	橙	普通	地文に単節縄文RL(縦)隆帯による渦巻文・区画文 胴部に蛇行沈線が垂下	覆土下層	80% PL29

**第188号土坑（第18・19図 PL6）**

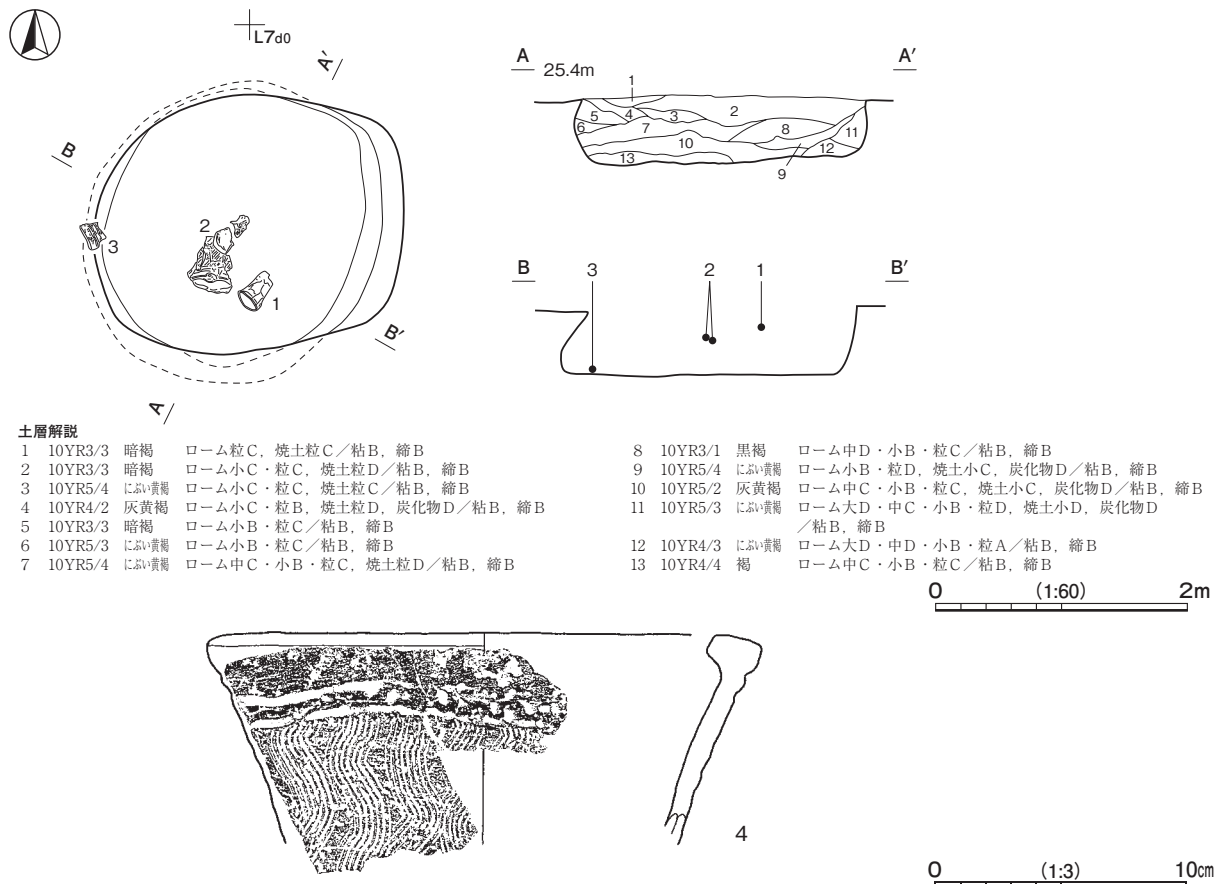
**位置** 調査区中央部のL7d0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 開口部は長径2.60m、短径2.12mで、長軸方向がN-89°-Eの楕円形である。最大径は長径2.68m、短径2.24mで、底面は平坦で楕円形を呈する。確認面からの深さは56cmで、西壁は内彎、東壁は外傾している。

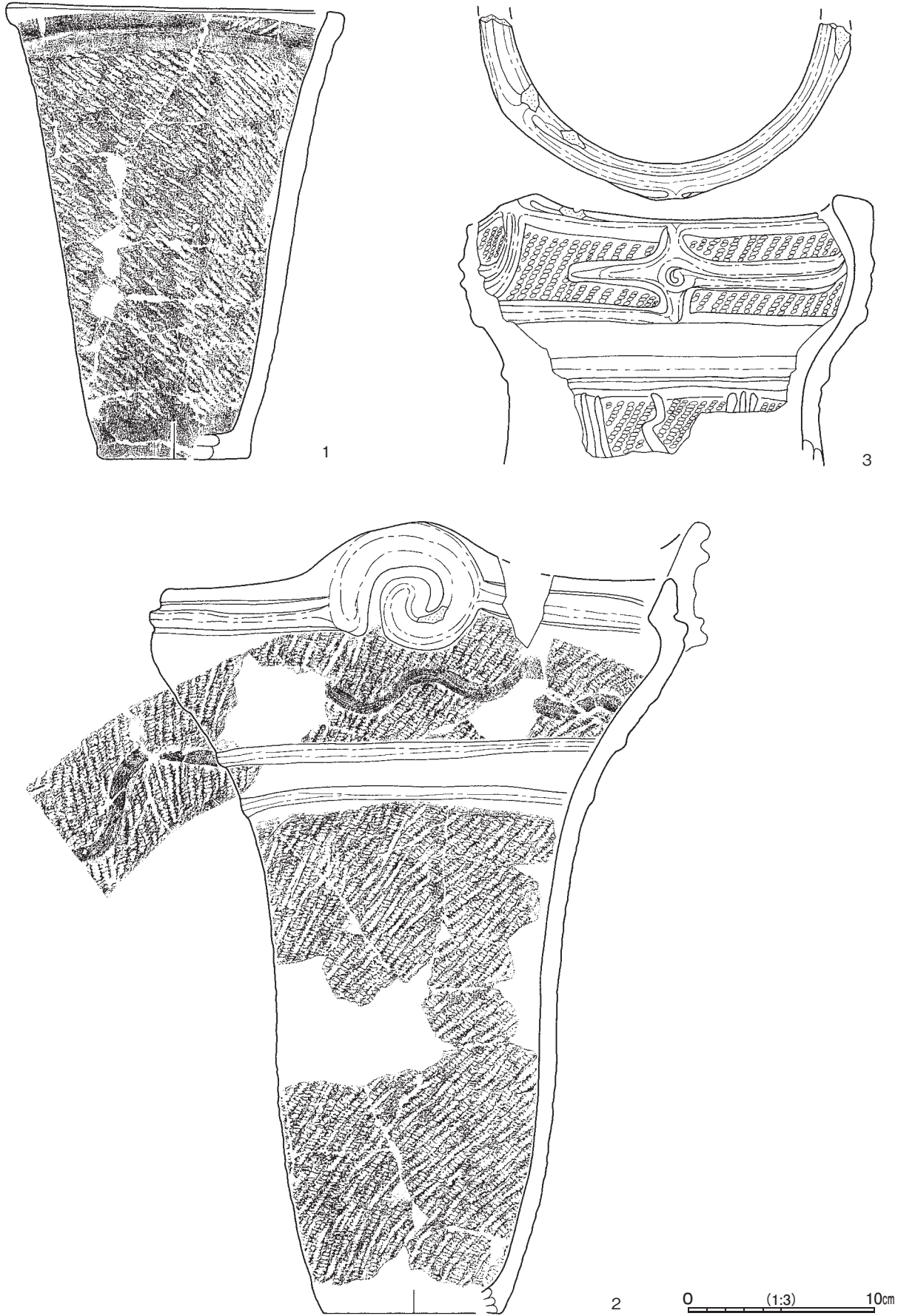
**覆土** 13層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片57点（深鉢56、浅鉢1）が覆土中から出土している。1は覆土上層から、2は覆土中層から、3は覆土下層からそれぞれ出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第18図 第188号土坑・出土遺物実測図



第19图 第188号土坑出土遺物実測図

第 11 表 第 188 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	17.0	24.5	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	地文に単節縄文 LR (縦) 口唇部肥厚 口縁部沈線が一巡	覆土上層	90% PL29
2	縄文土器	深鉢	27.0	42.7	[9.5]	長石・石英・雲母	橙	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 波頂部太沈線による渦巻文 口頸部沈線を伴う隆帯で区画 隆帯による横走波状線	覆土中層	80% PL29
3	縄文土器	深鉢	[19.6]	(14.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 口唇部に太沈線が一巡 隆帯による渦巻文・区画文 並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土下層	20% PL30
4	縄文土器	深鉢	[18.6]	(8.4)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	地文に単節縄文 RL (横) 並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土中	10% PL30

第 189 号土坑 (第 20 図 PL 7)

**位置** 調査区中央部の L 7e9 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

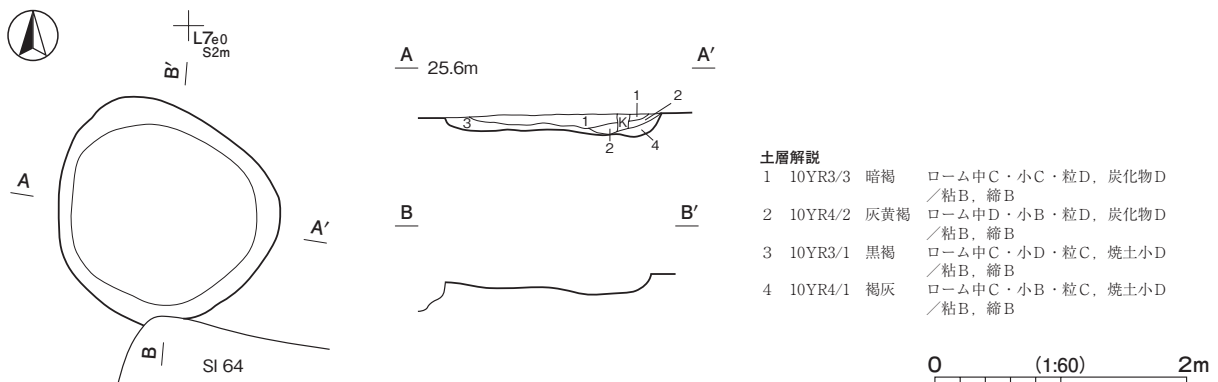
**重複関係** 第 64 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径 1.84 m, 短径 1.74 m の円形で, 底面は平坦である。確認面からの深さは 18 cm で, 壁は外傾している。

**覆土** 4 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片 5 点 (深鉢) が覆土中から出土している。いずれも細片で, 図示できなかった。

**所見** 後世の削平により全体像が分からないが, 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第 20 図 第 189 号土坑実測図

第 216 号土坑 (第 21・22 図 PL 7)

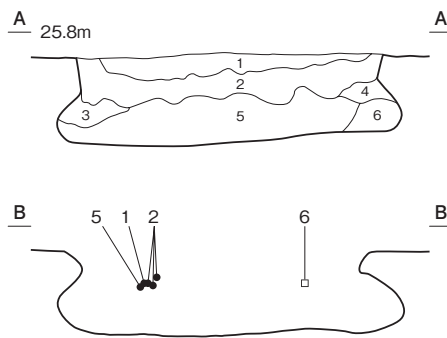
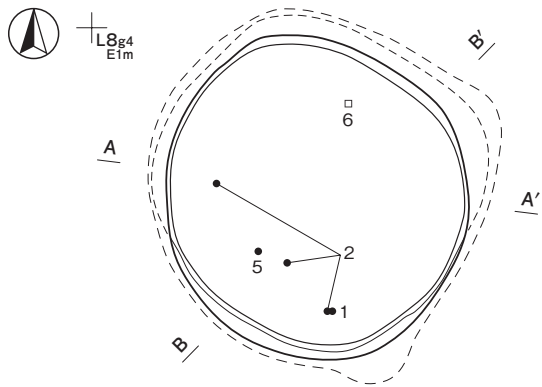
**位置** 調査区中央部の L 8g4 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 開口部は径 2.40 ~ 2.62 m の円形である。最大径は長径 3.08 m, 短径 2.88 m の不整形円形で, 底面は平坦である。確認面からの深さは 66 cm で, 壁は中位まで内彎して袋状を呈し, 底面から 40 cm のところでくびれ, 上位はほぼ外傾している。

**覆土** 6 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片 95 点 (深鉢 92, 浅鉢 3), 石器 5 点 (磨製石斧 1, 磨石 2, 敲石 2) が出土している。2 は覆土中層の第 2 層から散乱した状態で出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

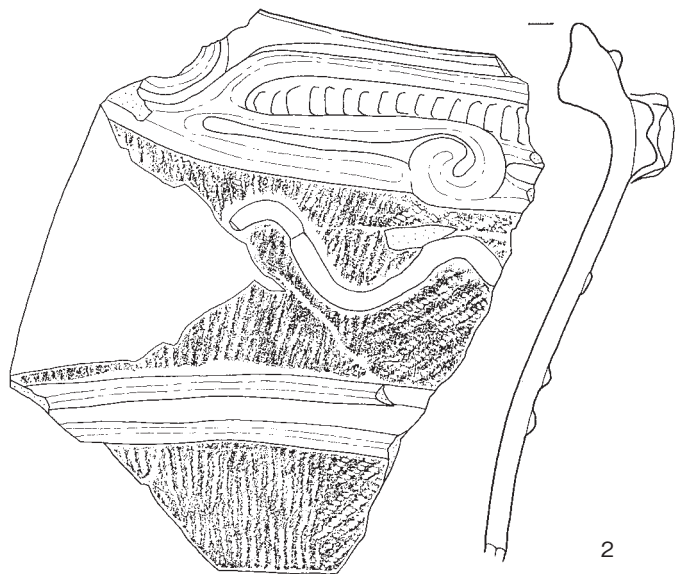
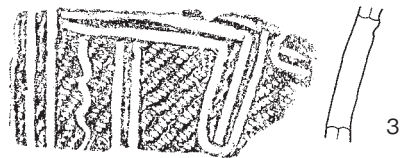
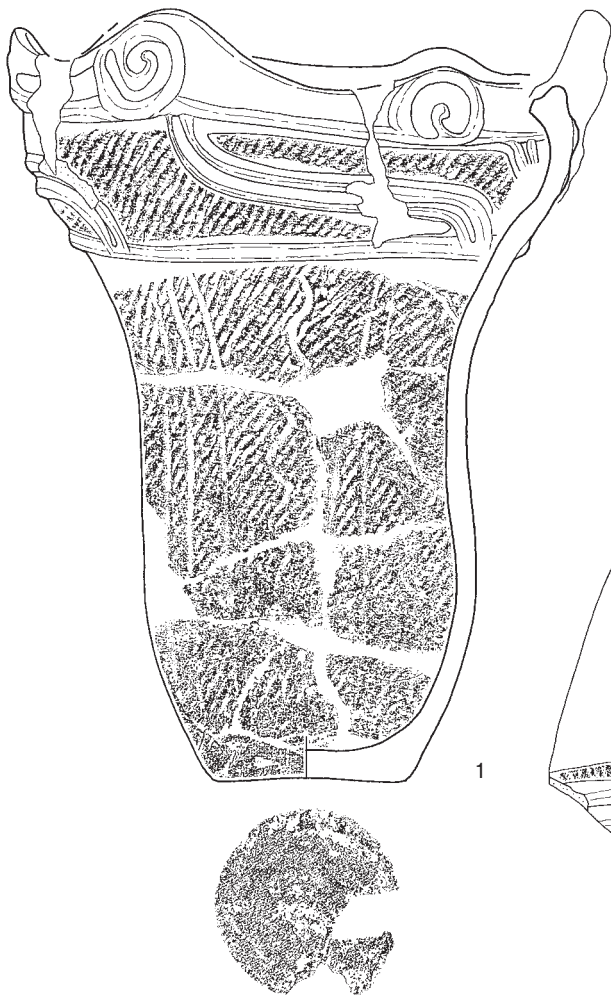
**所見** 規模と形状から, 貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉である。



土層解説

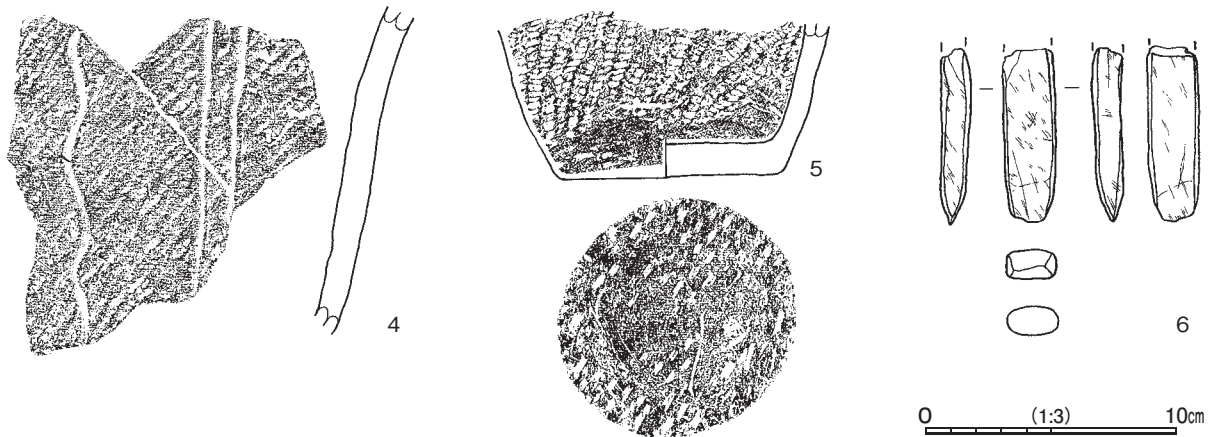
- |              |   |              |                                   |
|--------------|---|--------------|-----------------------------------|
| 1 75YR4/6 褐  | ローム小D・粒B, 焼土中D・小D・粒B, 炭化材B・粒B<br>粘B, 締A | 4 75YR3/3 暗褐 | ローム小D・粒B, 焼土小D・粒D, 炭化粒D<br>粘B, 締B |
| 2 75YR5/6 明褐 | ローム小B・粒B, 焼土小D・粒B, 炭化材D・粒D<br>粘B, 締B    | 5 75YR5/8 明褐 | ローム中D・小D・粒B/粘A, 締B                |
| 3 75YR3/4 暗褐 | ローム小D・粒B, 焼土小D・粒B, 炭化物D・粒B<br>粘B, 締B    | 6 75YR4/3 褐  | ローム小B・粒B, 焼土粒D, 炭化物D・粒D<br>粘A, 締B |

0 (1:60) 2m



0 (1:3) 10cm

第21図 第216号土坑・出土遺物実測図



第 22 図 第 216 号土坑出土遺物実測図

第 12 表 第 216 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	22.6	30.8	[7.5]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	地文に単節縄文 RL (縦) 隆帯による渦巻文・区画文 胴部に並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土中層	90% PL29
2	縄文土器	深鉢	-	(22.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	地文に単節縄文 RL (横) 口縁部厚みのある隆帯貼付隆帯上に渦巻文沈線 楕円形区画内キョウピラ文	覆土中層	10% PL31
3	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	地文に単節縄文 RL (横) 並行沈線・蛇行沈線が垂下 逆し字状の並行沈線	覆土中	PL31
4	縄文土器	深鉢	-	(12.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	地文に単節縄文 RL (横) 並行沈線・蛇行沈線が垂下	覆土中	10% PL31
5	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	8.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤	普通	単節縄文 RL (横) 底面に網代痕	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	磨製石斧	(7.0)	2.1	1.2	(30.81)	ホルンフェルス	小型 表裏面粗雑に研磨 側縁部に稜 基部欠損 刃は表裏から研ぎ出す	覆土中層	PL46

第 261 号土坑 (第 23 図)

**位置** 調査区中央部の M 8 b6 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

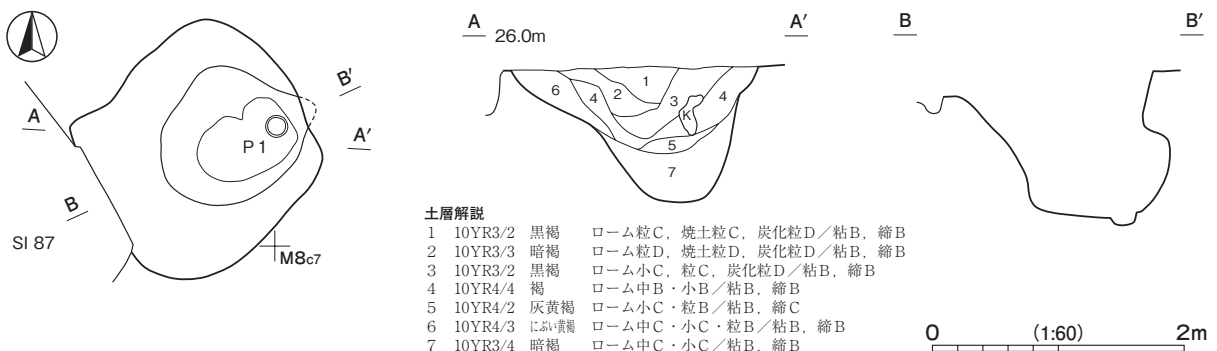
**重複関係** 第 87 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 1.72 m、短軸 1.65 m の隅丸方形で、長軸方向は N - 64° - E である。底面は長径 0.78 m、短径 0.52 m の楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 120 cm で、東壁は中位まで内彎して袋状を呈し、底面から 70 cm のところでくびれ、上位は外傾している。

**ピット** 底面東側に 1 か所確認した。性格は不明である。

**覆土** 7 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片 4 点 (深鉢) が覆土中から出土している。いずれも細片で、図示できなかった。



第 23 図 第 261 号土坑実測図

所見 規模と形状から、貯蔵穴と思われる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 336 号土坑 (第 24・25 図 PL 7)

位置 調査区南部の N 9 b9 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 73 号竪穴建物、第 194 号土坑に掘り込まれている。

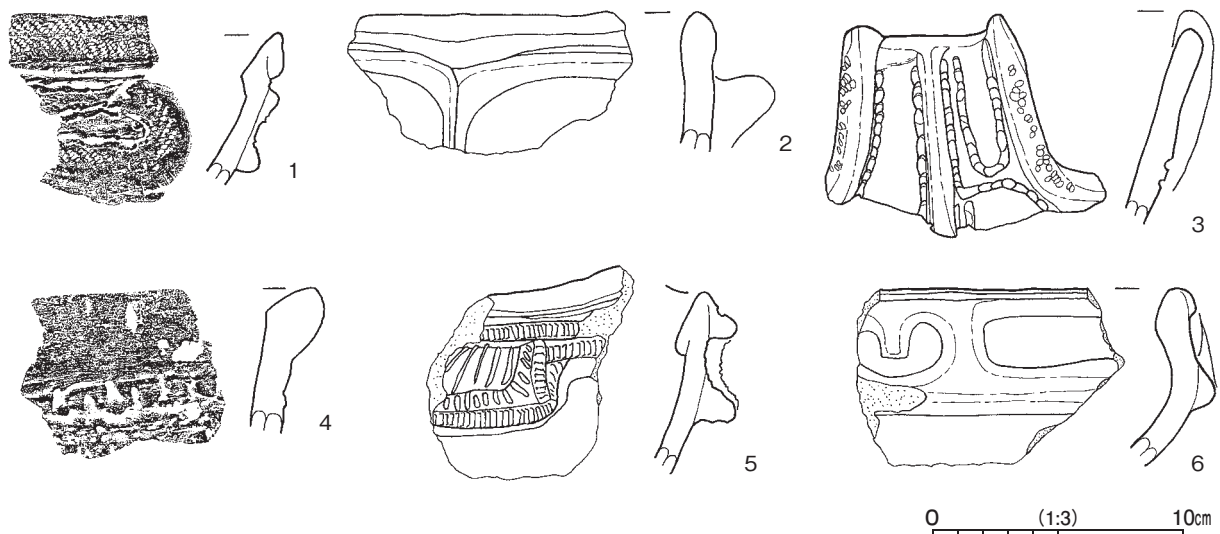
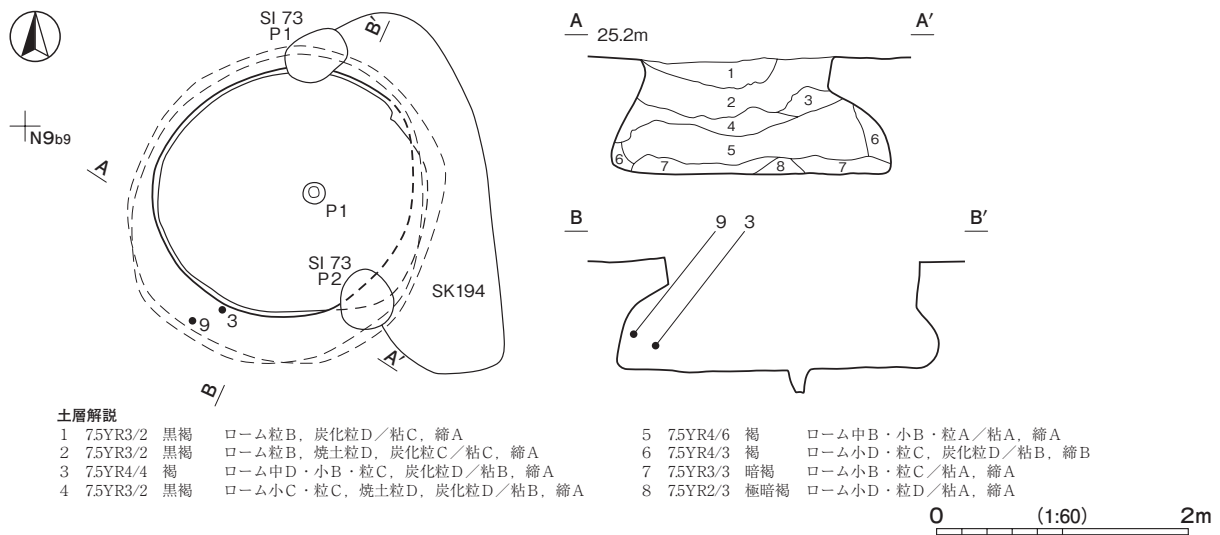
規模と形状 開口部は径 2.00 ~ 2.04 m の円形と推定できる。底面は長径 2.64 m、短径 2.44 m の円形で、平坦である。確認面からの深さは 88 cm で、壁は内彎して袋状を呈し、底面から 62 ~ 80 cm のところでくびれ、上位は直立している。

ピット 底面はほぼ中央に 1 か所確認した。性格は不明である。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、第 3 層までは埋め戻され、その後、自然堆積したものと考えられる。第 7 層は壁の崩落土と思われる。

遺物出土状況 縄文土器片 71 点 (深鉢) が出土している。3・9 はいずれも覆土下層から出土しており、9 は完形に近い形で出土した。どちらも埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第 24 図 第 336 号土坑・出土遺物実測図





第 25 図 第 336 号土坑出土遺物実測図

第 13 表 第 336 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部肥厚 肥厚部に単節縄文 LR (縦) 隆帯上に多方向からの単節縄文 LR	覆土中	
2	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	隆帯による摘み状の突起	覆土中	
3	縄文土器	深鉢	-	(8.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	隆帯に沿って押し引き刺突文 把手頂部から1条の断面 三角形の隆帯が垂下隆帯上に単節縄文 LR (縦)	覆土下層	
4	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部肥厚 頸部に交互刺突文	覆土中	
5	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆帯による区画 区画内条線文 (縦) 隆帯上条線で文様描画	覆土中	
6	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部厚みのある隆帯貼付 外・内面丁寧なナデ	覆土中	
7	縄文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	沈線により渦巻文描写	覆土中	
8	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	[11.0]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	外・内面丁寧なナデ 底面に網代痕	覆土中	
9	縄文土器	深鉢	[17.0]	(28.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部交互刺突による波状文 口縁部肥厚 隆帯上条線と沈線で文様描画 口縁下に中空把手	覆土下層	80%

第 352 号土坑 (第 26 図 PL 8)

**位置** 調査区南部の M 9f6 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

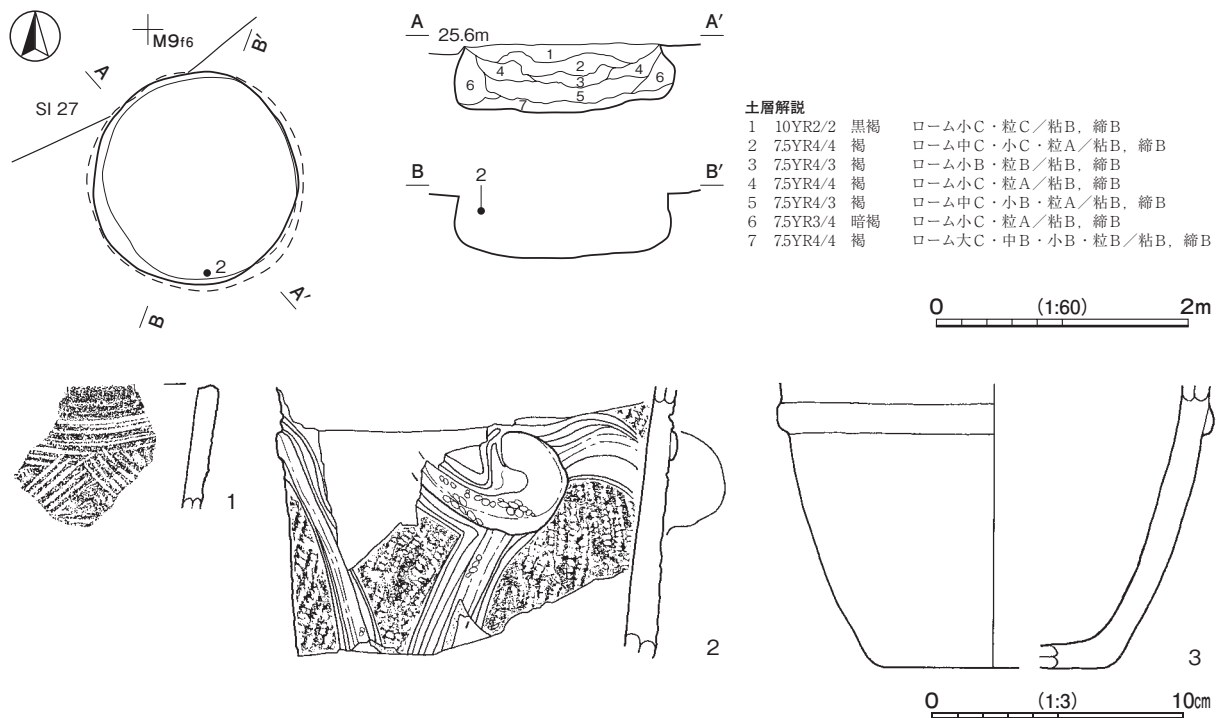
**重複関係** 第 27 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 開口部は径 1.55 ~ 1.70 m の円形である。最大径は長径 1.76 m, 短径 1.72 m で, 底面は平坦である。確認面からの深さは 52 cm で, 壁は内彎して袋状を呈している。

**覆土** 7 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片 11 点 (深鉢) が覆土中から出土している。2 は南側覆土中層から出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 上層が削平されているが, 規模と形状から貯蔵穴と考えられる。時期は, 出土土器から中期中葉である。



第 26 図 第 352 号土坑・出土遺物実測図

第 14 表 第 352 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英	橙	普通	沈線による文様描画	覆土中	PL31
2	縄文土器	深鉢	-	(10.8)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	隆帯上に突起, 隆帯脇を二重沈線により区画 地文に単節縄文 RL (縦)	覆土中層	10% PL31
3	縄文土器	深鉢	-	(11.3)	[8.6]	長石・石英・雲母	赤褐	普通	外・内面丁寧なナデ 体部に隆帯	覆土中	10%

第 364 号土坑 (第 27 図 PL 8)

**位置** 調査区南部の M 9d2 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

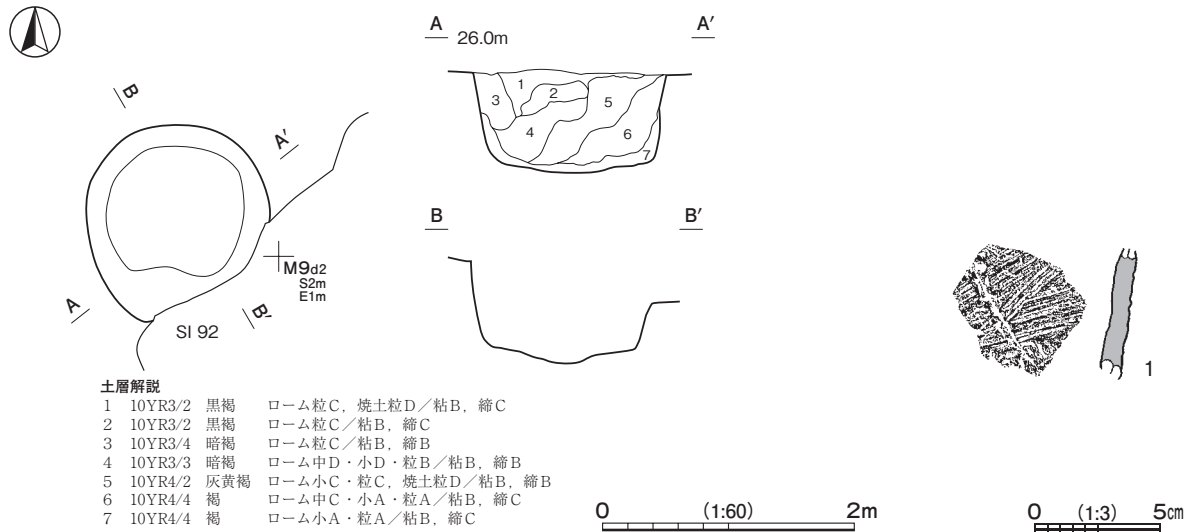
**重複関係** 第 92 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径 1.60 m, 短径 1.46 m で, 長径方向が N - 16° - E の楕円形である。底面は径 1.2 m のほぼ円形で, 平坦である。確認面からの深さは 80 cm で, 壁は直立している。

**覆土** 7 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 縄文土器片 1 点 (深鉢) が, 覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から早期末葉と考えられる。



第 27 図 第 364 号土坑・出土遺物実測図

第 15 表 第 364 号土坑出土遺物一覧

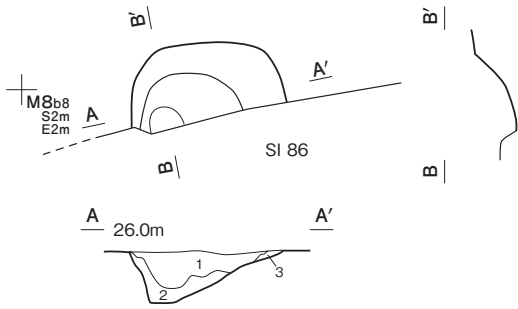
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石	にぶい黄橙	普通	胎土に植物繊維を含む 外・内面貝殻による施文	覆土中	PL31

第 16 表 縄文時代土坑一覧

番号	位置	主軸方向	開口部 平面形	規模 (m)		深さ (cm)	底面	壁面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部 長径×短径	最大径 長径×短径							
153	L 7 c0	-	円形	1.94 × 1.82	-	26	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	
181	L 8 e2	N - 47° - W	楕円形	1.76 × 1.56	1.88 × 1.70	44	平坦	直立 内彎	-	自然	縄文土器	
182	L 8 f3	N - 45° - E	楕円形	2.27 × 1.92	2.60 × 2.40	82	平坦	内彎	1	自然	縄文土器, 石器	
187	L 7 a0	N - 22° - E	円形	1.80 × 1.64	-	22	平坦	外傾	-	自然	縄文土器	
188	L 7 d0	N - 89° - E	楕円形	2.60 × 2.12	2.68 × 2.24	56	平坦	内彎 外傾	-	人為	縄文土器	
189	L 7 e9	N - 21° - W	円形	1.84 × 1.74	-	18	平坦	外傾	-	人為	縄文土器	本跡→SI64
216	L 8 g4	-	円形	2.62 × 2.40	3.08 × 2.88	66	平坦	外傾 内彎	-	人為	縄文土器, 石器	
235	M 8 b8	N - 80° - E	[楕円形]	1.22 × (0.64)	-	40	皿状	緩斜	-	人為	縄文土器	本跡→SI86 PL 7
260	M 8 e8	N - 11° - E	楕円形	1.96 × 1.40	-	48	皿状	緩斜 外傾	-	人為		本跡→SB19 PL 7
261	M 8 b6	N - 64° - E	隅丸方形	(1.72) × 1.65	-	120	平坦	外傾 内彎	1	人為	縄文土器	本跡→SI87
263	L 8 g5	N - 34° - E	楕円形	3.06 × 1.64	-	80	平坦	外傾	1	自然	縄文土器	SK301, TP 5 →本跡
301	L 8 g6	N - 40° - W	楕円形	1.78 × [1.36]	-	68	皿状	外傾 緩斜	1	自然		SK302 →本跡 →SK217・263
333	N 9 b7	N - 70° - W	楕円形	1.32 × 1.12	-	28	凹凸	緩斜	-	不明		SK334 →本跡 →SI46, SK276
334	N 9 b7	N - 70° - W	[隅丸長方形]	(1.04) × 0.76	-	20	皿状	緩斜	-	自然		本跡→SI46, SK276・333 PL 7
336	N 9 b9	-	[円形]	2.04 × [2.00]	2.64 × 2.44	88	平坦	直立 内彎	1	自然 人為	縄文土器	本跡→SI73, SK194
337	M 9 e4	N - 44° - E	楕円形	2.18 × 1.25	-	69	平坦	ほぼ直立	1	自然	縄文土器	SI81 →本跡 →SI27, SK314
352	M 9 f6	-	円形	1.70 × 1.55	1.76 × 1.72	52	平坦	内彎	-	人為	縄文土器	本跡→SI27
353	M 9 e3	N - 35° - E	楕円形	1.80 × 0.90	-	31	傾斜	外傾 緩斜	-	自然		本跡→SI92・ 98 PL 8
364	M 9 d2	N - 16° - E	楕円形	1.60 × 1.46	-	80	平坦	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SI92
366	M 8 b9	N - 67° - E	不整楕円形	0.56 × 0.30	-	52	有段	外傾	-	自然	縄文土器	本跡→SI86
378	K 8 h2	N - 75° - E	[円形・ 楕円形]	2.20 × (1.24)	-	122	平坦	ほぼ直立	-	自然	縄文土器	
379	K 8 g4	N - 10° - E	楕円形	0.44 × 0.32	-	44	有段	外傾	-	自然	縄文土器	

イ) その他の縄文時代の土坑 (第 28・29 図 PL 7・8)

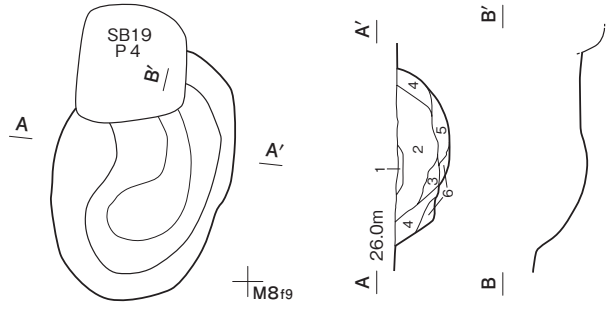
SK235



SK235 土層解説

- |   |              |                                |
|---|--------------|--------------------------------|
| 1 | 75YR2/3 極暗褐色 | ローム粒C, 焼土小D・粒C, 炭化粒D/粘B, 縮B    |
| 2 | 75YR4/4 褐色   | ローム粒C, 焼土粒D/粘A, 縮A             |
| 3 | 75YR3/3 暗褐色  | ローム中D・小C・粒C, 焼土粒D, 炭化粒C/粘A, 縮B |

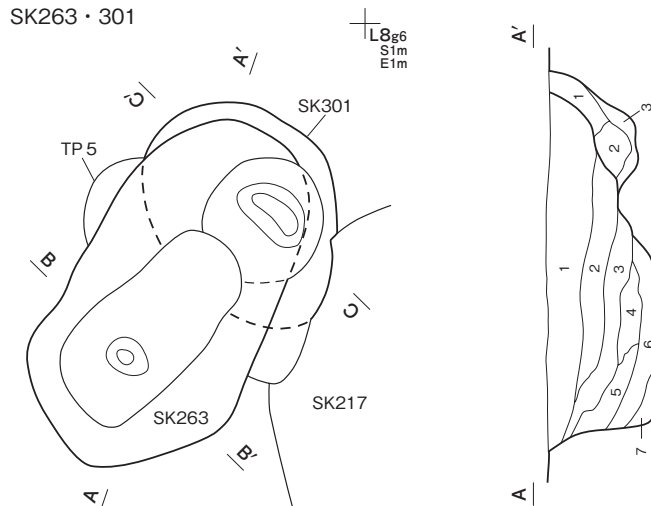
SK260



SK260 土層解説

- |   |              |                    |
|---|--------------|--------------------|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色  | ローム小D/粘B, 縮B       |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色  | ローム粒D, 炭化粒D/粘B, 縮C |
| 3 | 10YR4/3 灰黄褐色 | ローム小B・粒D/粘B, 縮C    |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色 | ローム小C・粒A/粘B, 縮C    |
| 5 | 10YR3/4 暗褐色  | ローム小C・粒B/粘B, 縮C    |
| 6 | 10YR4/4 褐色   | ローム小B・粒A/粘B, 縮B    |

SK263・301



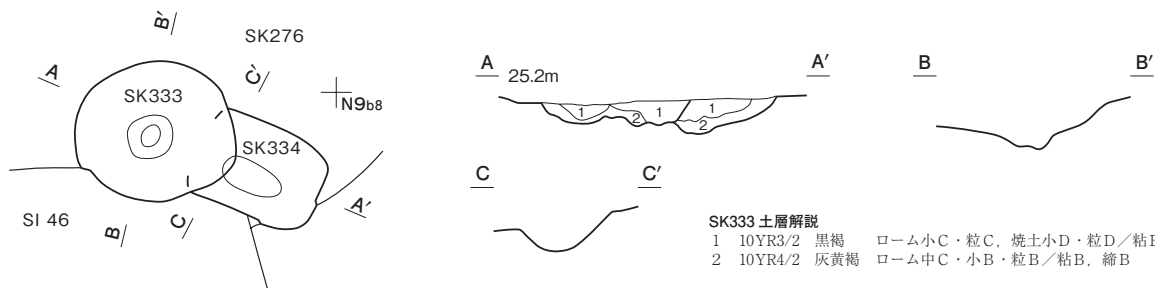
SK263 土層解説

- |   |              |                          |
|---|--------------|--------------------------|
| 1 | 75YR3/3 暗褐色  | ローム粒B, 焼土粒C, 炭化粒D/粘C, 縮A |
| 2 | 75YR2/3 極暗褐色 | ローム粒B, 焼土粒B/粘B, 縮B       |
| 3 | 75YR4/4 褐色   | ローム粒C, 焼土小D, 炭化粒C/粘B, 縮B |
| 4 | 75YR3/3 暗褐色  | ローム粒C, 焼土粒C/粘B, 縮B       |
| 5 | 75YR4/4 褐色   | ローム粒B, 焼土粒D/粘B, 縮B       |
| 6 | 75YR4/3 褐色   | ローム粒C, 焼土粒C/粘B, 縮A       |
| 7 | 75YR4/3 褐色   | ローム粒C/粘A, 縮B             |

SK301 土層解説

- |   |             |                          |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 75YR3/2 黒褐色 | ローム中C・小C・粒C, 焼土粒D/粘B, 縮B |
| 2 | 75YR4/3 褐色  | ローム粒C, 焼土粒D/粘B, 縮A       |
| 3 | 75YR4/4 褐色  | ローム粒D/粘A, 縮A             |

SK333・334



SK333 土層解説

- |   |              |                          |
|---|--------------|--------------------------|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色  | ローム小C・粒C, 焼土小D・粒D/粘B, 縮C |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | ローム中C・小B・粒B/粘B, 縮B       |

SK334 土層解説

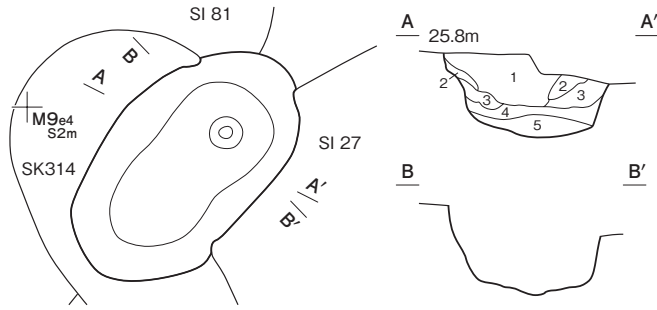
- |   |              |                       |
|---|--------------|-----------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色  | ローム小D・粒C, 焼土粒D/粘B, 縮B |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | ローム小C・粒B/粘B, 縮B       |

0 (1:60) 2m

第 28 図 その他の縄文時代の土坑実測図 (1)



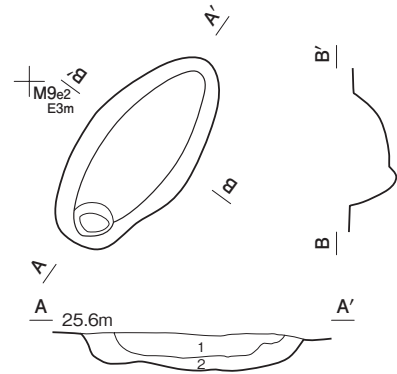
SK337



SK337 土層解説

- |   |            |                     |
|---|------------|---------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐 | ローム小C・粒C、焼土粒C/粘B、締B |
| 2 | 10YR3/4 暗褐 | ローム小C・粒C、焼土粒C/粘B、締B |
| 3 | 10YR4/4 褐  | ローム小C・粒B、焼土粒C/粘B、締B |
| 4 | 10YR4/4 褐  | ローム小B・粒C/粘B、締B      |
| 5 | 10YR3/4 暗褐 | ローム小C・粒C/粘B、締B      |

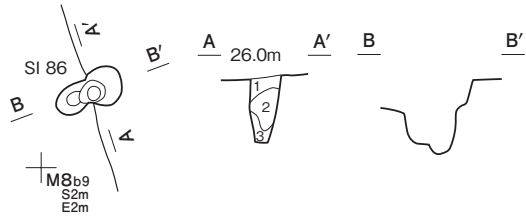
SK353



SK353 土層解説

- |   |            |                |
|---|------------|----------------|
| 1 | 75YR3/3 暗褐 | ローム小C・粒C/粘B、締B |
| 2 | 75YR3/4 暗褐 | ローム小B・粒B/粘B、締B |

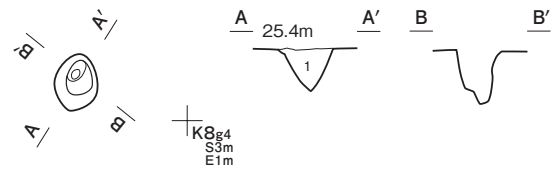
SK366



SK366 土層解説

- |   |            |                        |
|---|------------|------------------------|
| 1 | 10YR4/4 褐  | ローム粒B、焼土粒C/粘B、締B       |
| 2 | 10YR3/2 黒褐 | ローム小D・粒B/粘C、締B         |
| 3 | 10YR3/2 黒褐 | ローム中D・小B・粒C、炭化粒D/粘C、締A |

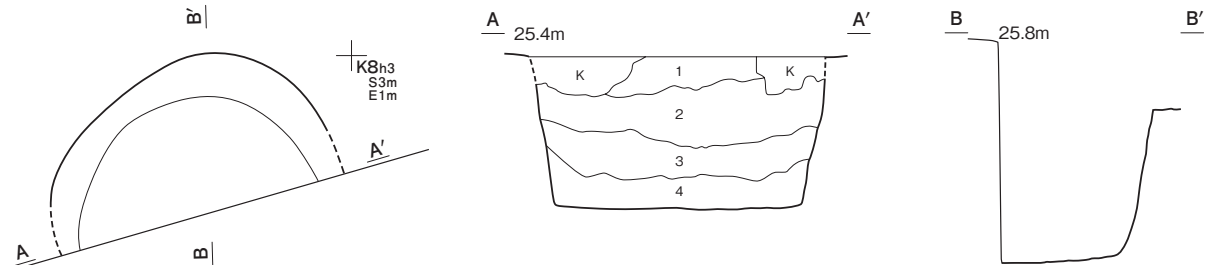
SK379



SK379 土層解説

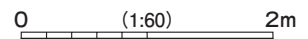
- |   |           |                |
|---|-----------|----------------|
| 1 | 10YR2/2 黒 | ローム小D・粒C/粘B、締B |
|---|-----------|----------------|

SK378



SK378 土層解説

- |   |            |                |
|---|------------|----------------|
| 1 | 10YR2/2 黒褐 | ローム粒C/粘B、締B    |
| 2 | 10YR2/2 黒褐 | ローム小D・粒C/粘B、締B |
| 3 | 10YR2/3 黒褐 | ローム小D・粒B/粘B、締B |
| 4 | 10YR2/3 暗褐 | ローム小B・粒B/粘B、締B |



第 29 図 その他の縄文時代の土坑実測図 (2)

(3) 陥し穴

第4号陥し穴 (第30図 PL 8)

**位置** 調査区中央部のM 9b1区, 標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

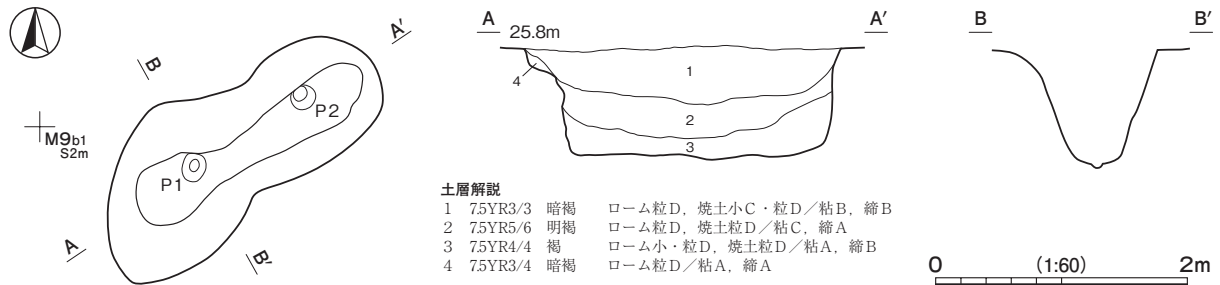
**規模と形状** 長径2.52 m, 短径1.12 mの不整楕円形で, 長径方向はN - 56° - Eである。深さは100 cmで, 底面はほぼ平坦である。短径方向の断面形はV字状で, 壁は外傾している。

**ピット** 底面に2か所確認した。P 1・P 2は径25 cm・21 cmで, 深さ4 cm・8 cmである。いずれも規模が小さいため, 性格は不明であるが, 逆茂木のピットの可能性がある。

**覆土** 4層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから, 自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片4点(深鉢)が覆土中から出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 出土土器が細片のため明確ではないが, 覆土の色調や他の陥し穴との関係から, 早期から前期と考えられる。



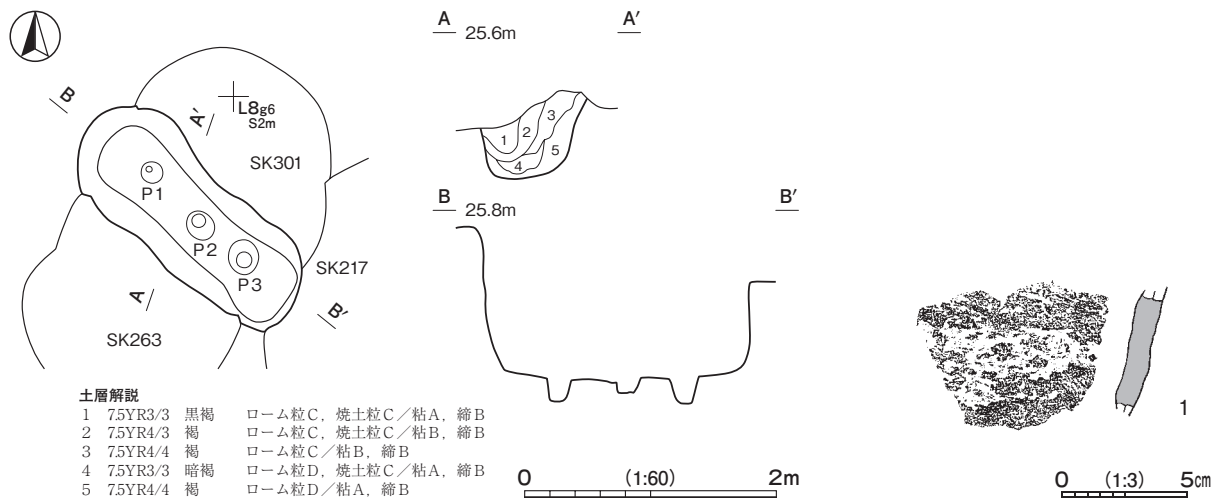
第30図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (第31図 PL 8)

**位置** 調査区中央部のL 8g5区, 標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第217・263・301号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 第217・263・301号土坑に掘り込まれているため, 長径2.16 m, 短径0.92 mしか確認できなかった。平面形は楕円形で, 長径方向はN - 43° - Wである。深さは120 cmで, 底面はほぼ平坦である。遺存する短径方向の断面形はU字状で, 壁はほぼ直立している。



第31図 第5号陥し穴・出土遺物実測図

**ピット** 底面に3か所確認した。P 1～P 3は径18～29 cmで、深さ10～25 cmである。規模と形状から逆茂木のピットと考えられる。

**覆土** 5層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片15点(深鉢)が覆土中から出土している。1は陥し穴が埋まる過程で流れ込んだものと考えられる。

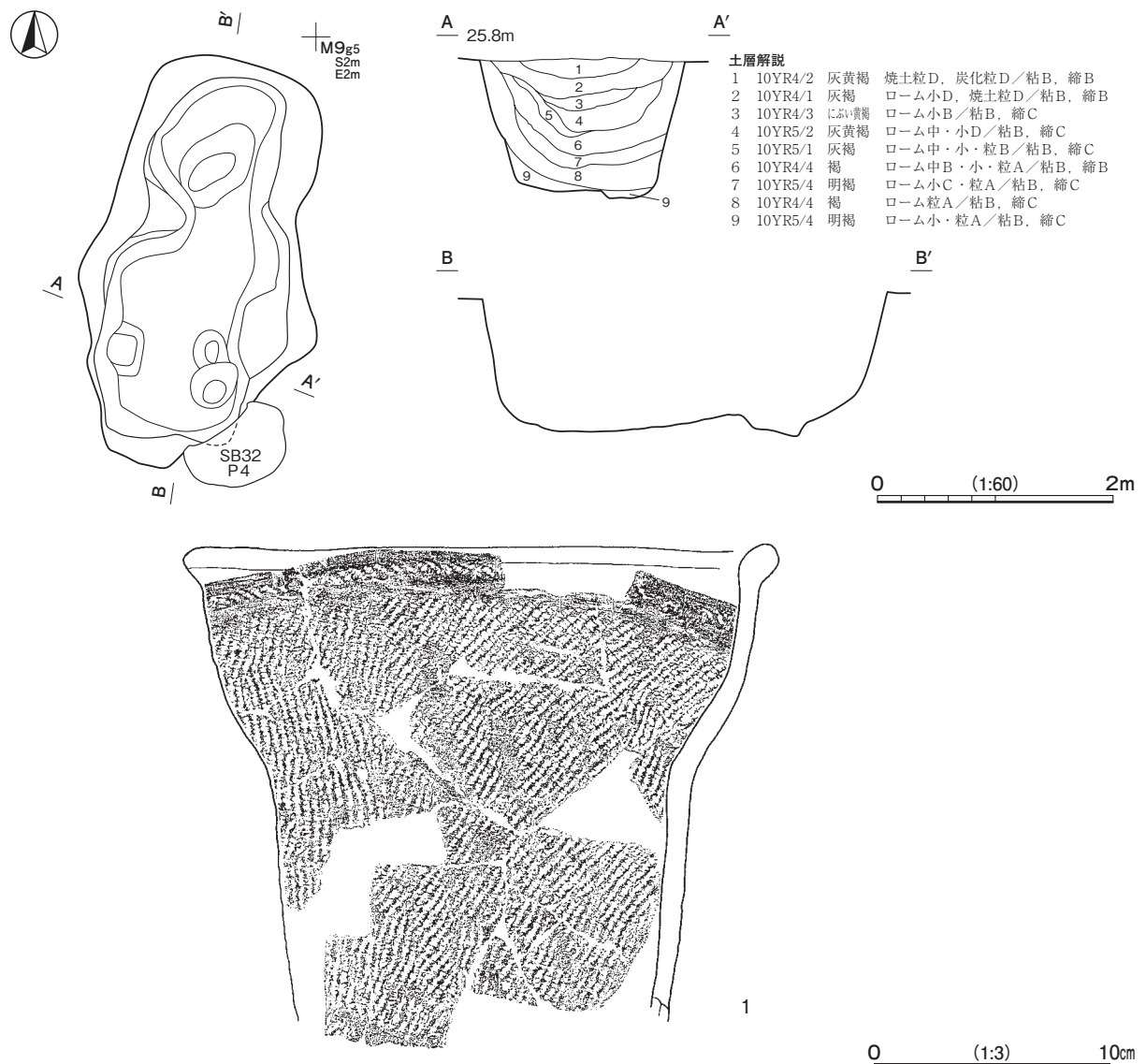
**所見** 時期は、出土土器から早期から前期と考えられる。

第17表 第5号陥し穴出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英	黒褐	普通	胎土に繊維を多く含む 外面脆く剥離	覆土中	PL31

**第6号陥し穴 (第32図 PL 8)**

**位置** 調査区中央部のM 9 g5区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第32図 第6号陥し穴・出土遺物実測図

**重複関係** 第32号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径3.52 m，短径2.12 mの不整楕円形で，長径方向はN - 16° - Eである。深さは120 cmで，底面はほぼ平坦である。短径方向の断面形はU字状で，壁はほぼ直立している。

**覆土** 9層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

**遺物出土状況** 縄文土器片16点（深鉢）が覆土中から出土している。1は覆土中からの出土で，破片が接合したものである。いずれも埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器及び周辺の陥し穴との関係から，前期から中期と考えられる。

第18表 第6号陥し穴出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	23.0	(20.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部肥厚 肥厚部・地文に単節縄文RL(縦)	覆土中	30% PL31

**第7号陥し穴（第33図 PL 8）**

**位置** 調査区南部のM 9i3区，標高27 mほどの平坦な台地上に位置している。

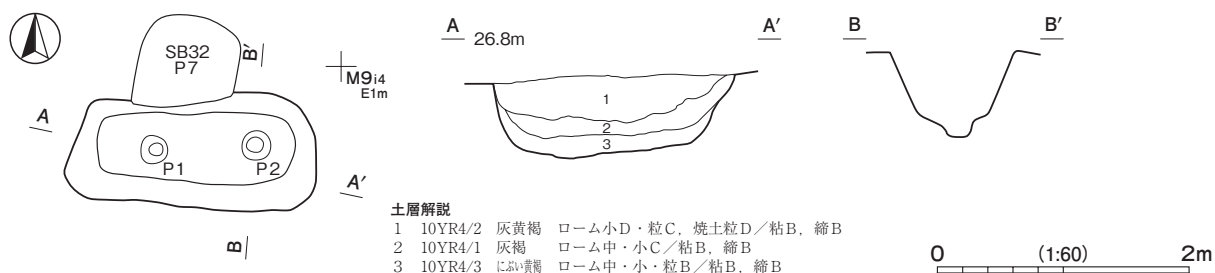
**重複関係** 第32号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.93 m，短軸0.94 mの長方形で，長径方向はN - 87° - Wである。深さは66 cmで，底面はほぼ平坦である。短軸方向の断面形はU字状で，壁は緩やかに外傾している。

**ピット** 底面に2か所確認した。P 1・P 2は径22 cm・25 cmで，深さ8 cm・10 cmである。いずれも規模が小さいため，性格は不明であるが，逆茂木のピットの可能性がある。

**覆土** 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

**所見** 遺物は出土していない。時期は，形状や周辺の陥し穴との関係から，早期から前期のものと考えられる。



第33図 第7号陥し穴実測図

**第8号陥し穴（第34図 PL 8）**

**位置** 調査区中央部のL 8j8区，標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

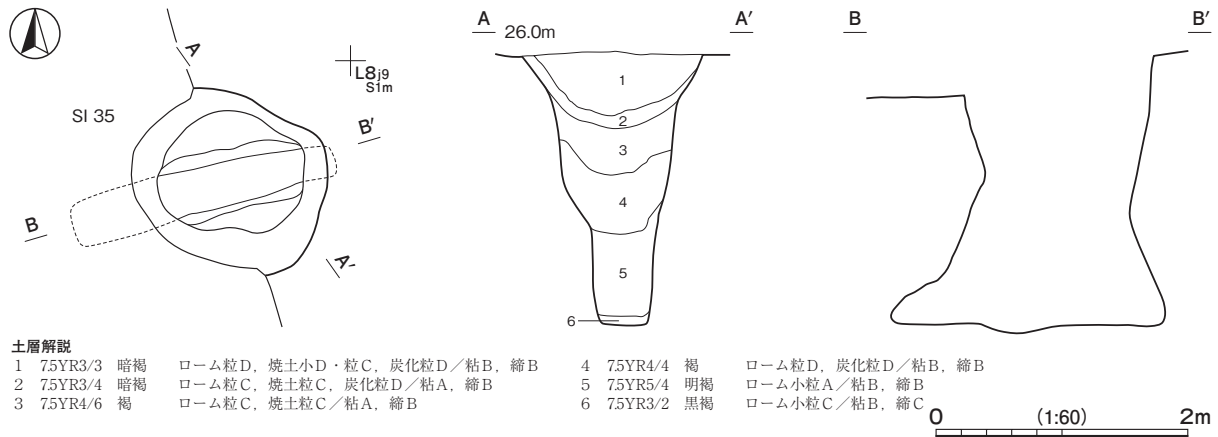
**重複関係** 第35号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 開口部は長径1.60 m，短径1.48 mの楕円形で，長径方向はN - 29° - Wである。深さは220 cmで，底面は平坦である。長径方向の断面形はV字状で，底面から直立し，上位は緩やかに外傾している。短径方向の断面形は袋状を呈し，壁は内傾して底面から80～120 cmのところできびれ，上位は外傾している。

**覆土** 6層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

**所見** 遺物は出土していない。時期は，形状や周辺の陥し穴との関係から，早期から前期のものと考えられる。





第 34 図 第 8 号陥し穴実測図

第 19 表 縄文時代陥し穴一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m) (軸) (軸)	深さ (cm)					
4	M 9 b1	N - 56° - E	不整楕円形	2.52 × 1.12	100	外傾	平坦	自然	縄文土器	
5	L 8 g5	N - 43° - W	楕円形	(2.16 × 0.92)	120	ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK217・263・301
6	M 9 g5	N - 16° - E	不整楕円形	3.52 × 2.12	120	ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	本跡→SB32
7	M 9 i3	N - 87° - W	長方形	1.93 × 0.94	66	外傾	平坦	自然		本跡→SB32
8	L 8 j8	N - 29° - W	楕円形	1.60 × (1.48)	220	内傾 ほぼ直立	平坦	自然		本跡→SI35

## 2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 4 棟，土坑 2 基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

### (1) 竪穴建物跡

#### 第 12 号竪穴建物跡 (第 35・36 図 PL 9)

**位置** 調査区中央部の M 8 c0 区，標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 5 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 5.56 m，短軸 5.04 m の隅丸長方形で，主軸方向は N - 48° - W である。壁高は 36 ~ 56 cm で，外傾している。

**床** 平坦で，中央部が踏み固められている。

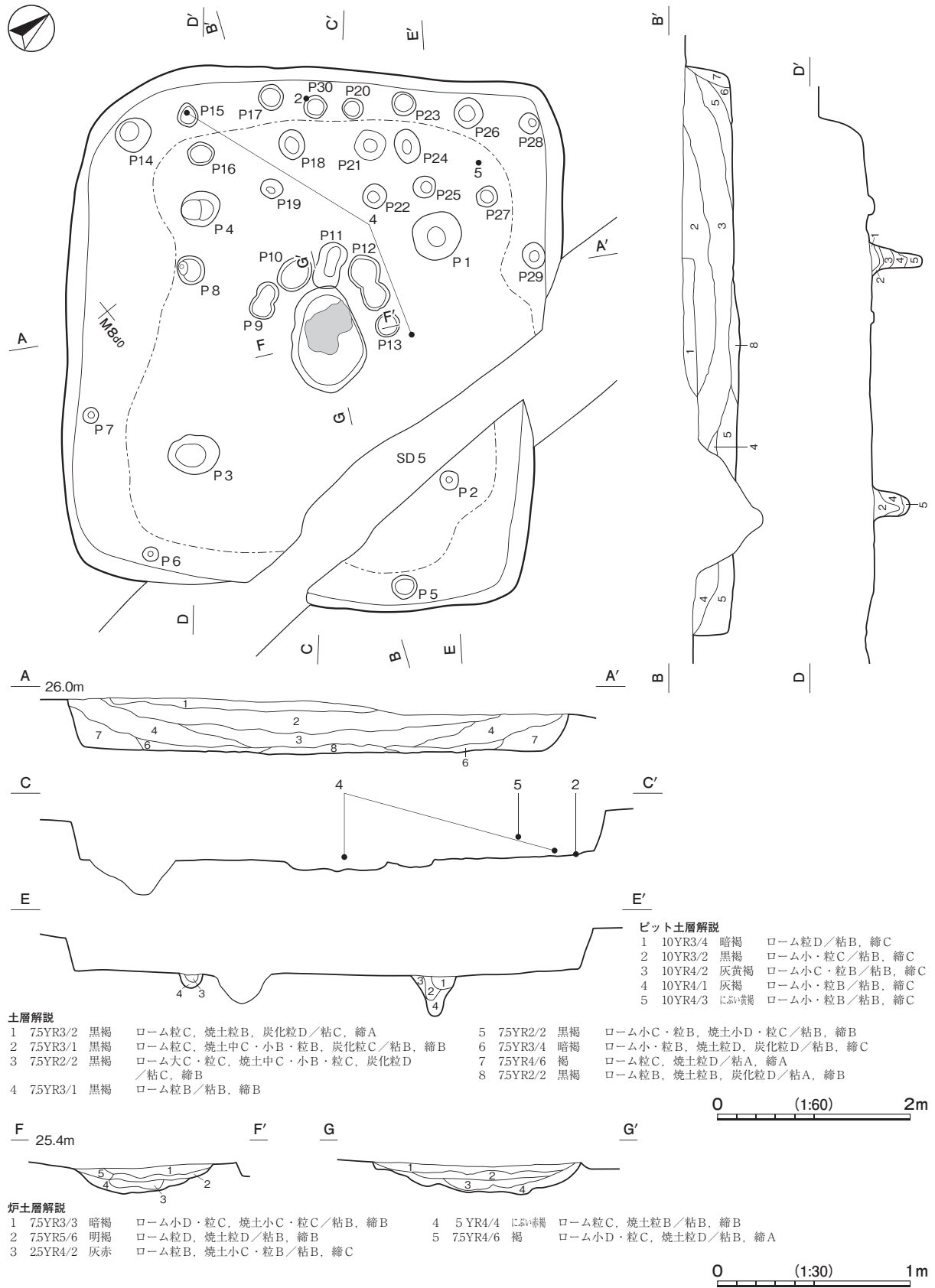
**炉** 中央部に付設されている。床面を浅く皿状に掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 30 か所。P 1・P 3・P 4 は深さ 40 ~ 55 cm で，配置から主柱穴と考えられる。その他のピットは，深さ 4 ~ 53 cm とばらつきがある。特に北西に集中して確認したが，性格は不明である。

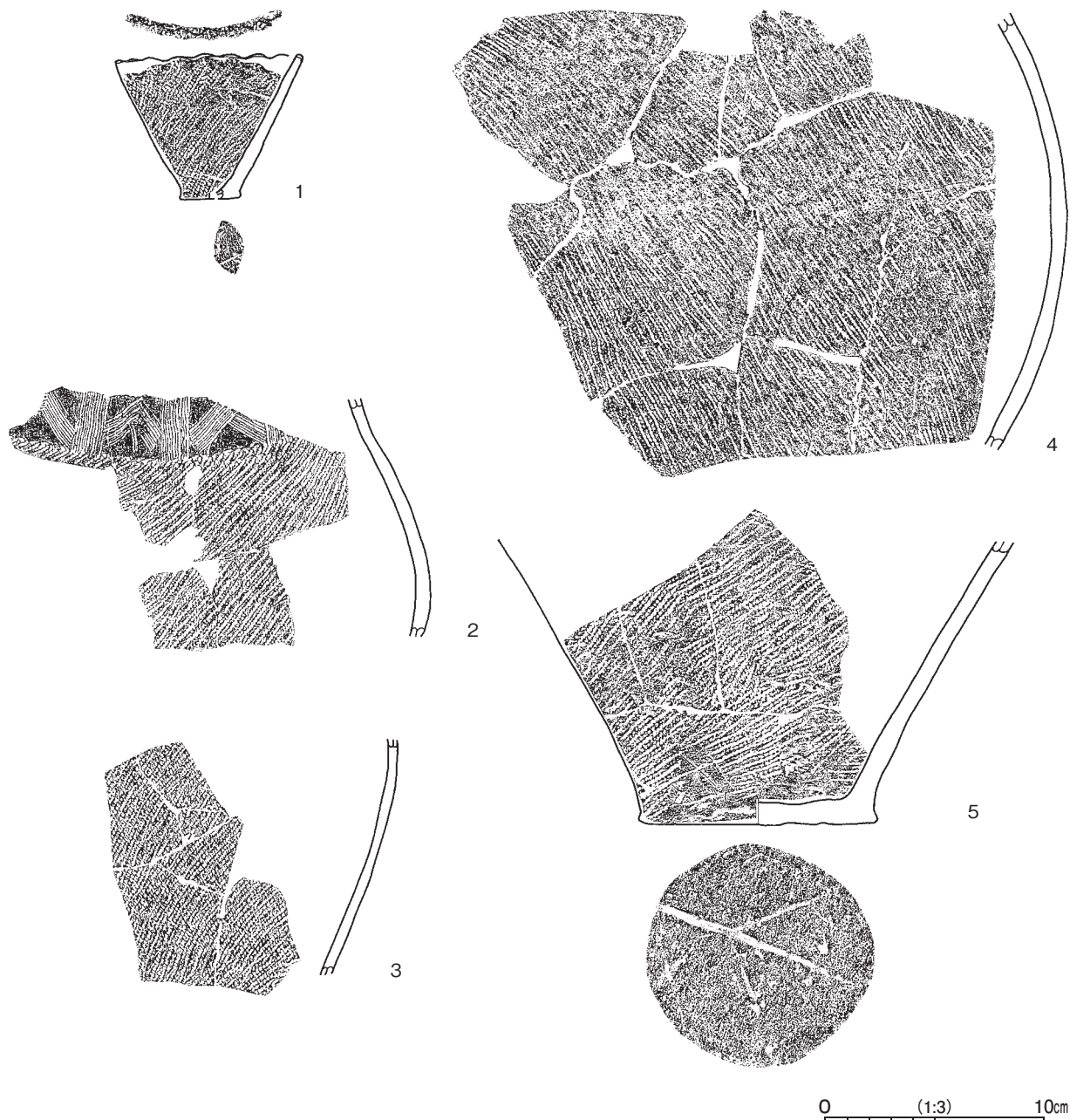
**覆土** 8 層に分層できる。各層に焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 弥生土器片 43 点 (壺 42, 鉢 1)，石器 1 点 (敲石)，石英片 3 点 (64.54 g) が出土している。2 は北部の床面から出土しており，本跡が廃絶された際に遺棄されたものと考えられる。4 は西コーナー部と中央の覆土下層から出土した破片 2 点が接合したものである。5 は覆土中層から，1・3 は覆土中からそれぞれ出土しており，埋め戻される過程で混入したものと思われる。

所見 覆土中から石英片がまとまって出土しており，当時の人々が石器・石製品の製作等，何らかの形で使用していた可能性が考えられる。時期は，出土土器から後期前半と考えられる。



第35図 第12号竪穴建物跡実測図



第 36 図 第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図

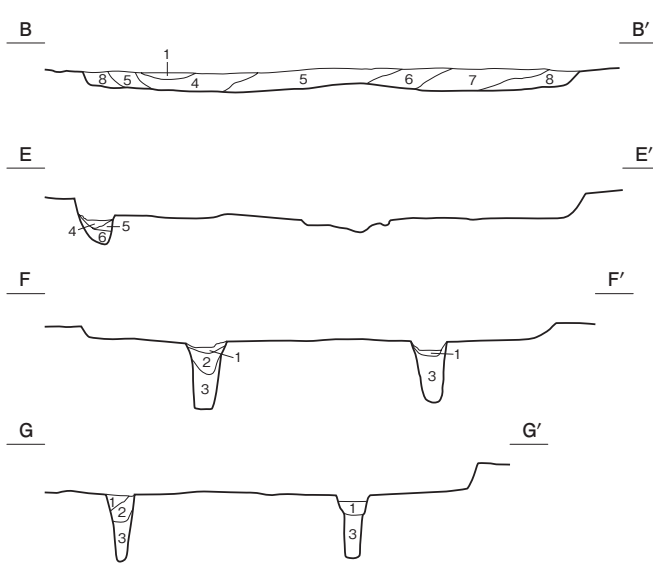
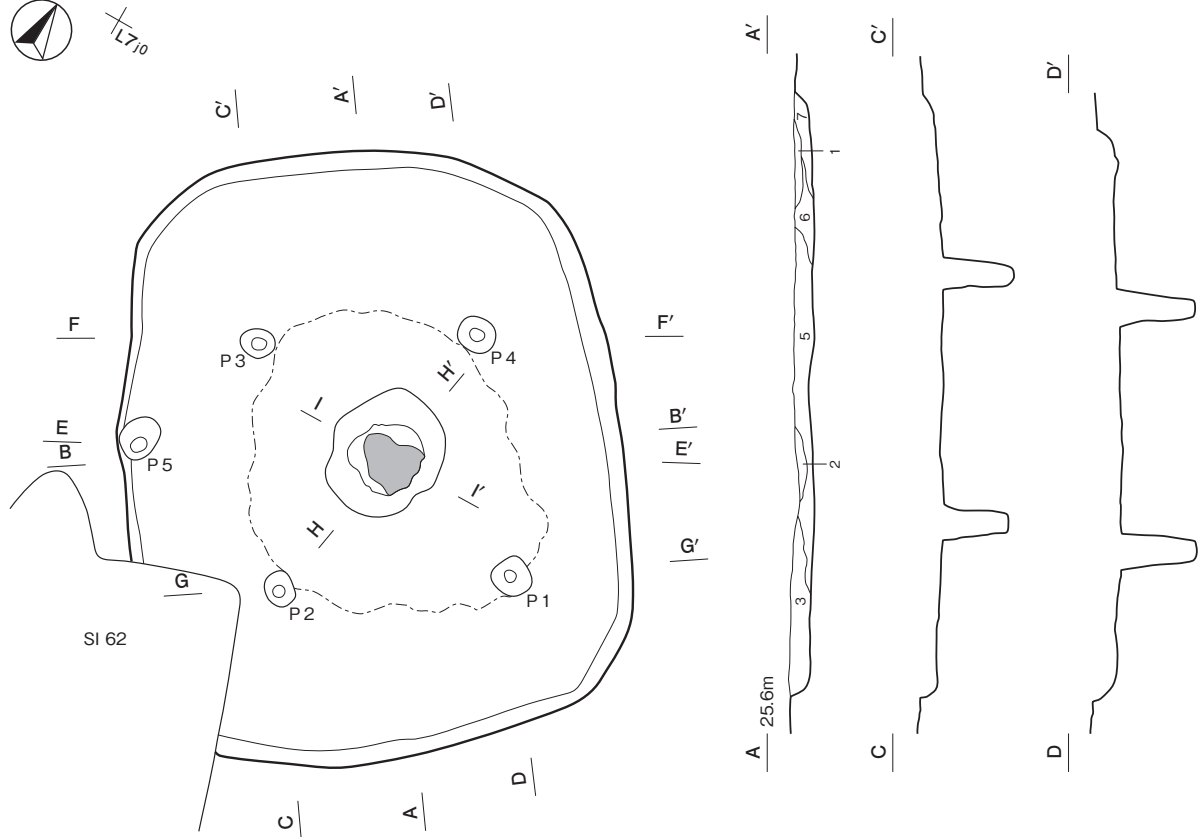
第 20 表 第 12 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	鉢	[8.8]	6.5	[2.8]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部交互刺突による波状口縁 内面横位のナデ 体部附加状1種付加2条	覆土中	30% PL32
2	弥生土器	壺	-	(10.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部10条1単位の櫛歯文 縦位区画施文後山形文 内面丁寧なナデ 体部附加状1種付加2条	床面	10% PL32
3	弥生土器	壺	-	(10.8)	-	長石・石英	褐	普通	体部附加状1種付加2条	覆土中	5% PL32
4	弥生土器	壺	-	(19.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外・内面劣化 体部附加状1種付加2条	覆土下層	20% PL32
5	弥生土器	壺	-	(13.0)	10.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面斜位のナデ 体部附加状1種付加2条 底部木炭痕	覆土中層	20% PL32

第 66 号竪穴建物跡 (第 37 ~ 39 図)

位置 調査区中央部の L 7j0 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 62 号竪穴建物に掘り込まれている。

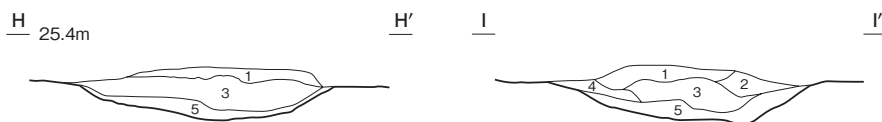
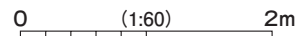


**土層解説**

- |   |         |    |   |
|---|---------|----|---|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐 | ローム小D・粒D/粘C, 締B                               |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐 | ローム中D・小D・粒C, 焼土小D・粒C, 炭化物D・粒C/粘B, 締B          |
| 3 | 10YR2/1 | 黒褐 | ローム中D・小B・粒B, 焼土中D・小C・粒C, 炭化物D・粒B/粘B, 締B       |
| 4 | 5 YR4/6 | 赤褐 | ローム大D・中C・小C・粒A, 焼土中D・小C・粒B, 炭化材D・物C・粒B/粘B, 締C |
| 5 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム中D・小C・粒C, 焼土小D・粒C, 炭化物D・粒D/粘B, 締B          |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐 | ローム中D・小B・粒B, 焼土中D・小D・粒B, 炭化物D・粒C/粘B, 締B       |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐 | ローム中D・小B・粒B, 焼土粒D, 炭化物D・粒C/粘B, 締A             |
| 8 | 10YR3/4 | 暗褐 | ローム大C・中C・小A・粒A/粘A, 締A                         |

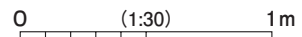
**ピット土層解説**

- |   |         |       |                                |
|---|---------|-------|--------------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐    | ローム中C・小C, 焼土小C・粒B, 炭化物C/粘B, 締B |
| 2 | 10YR4/4 | 褐     | ローム中D・小B, 焼土小D/粘B, 締B          |
| 3 | 10YR4/5 | にがい黄褐 | ローム大D・中C・小B/粘B, 締C             |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐    | ローム中C・小C, 焼土小C・粒C, 炭化物D/粘B, 締B |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐    | ローム小C, 焼土小C・粒D, 炭化物D/粘B, 締B    |
| 6 | 10YR4/5 | にがい黄褐 | ローム小B/粘B, 締C                   |

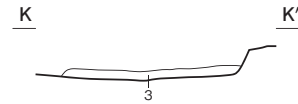


**炉土層解説**

- |   |         |       |                             |   |         |       |                             |
|---|---------|-------|-----------------------------|---|---------|-------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐    | ローム粒C, 焼土小C・粒B, 炭化粒D/粘B, 締B | 4 | 10YR5/4 | にがい黄褐 | ローム中C・小D, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 締B |
| 2 | 25YR3/1 | 暗赤褐   | ローム小D・粒B, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 締B | 5 | 25YR5/6 | 明赤褐   | ローム小C, 焼土大D・中C・小B/粘C, 締A    |
| 3 | 25YR4/4 | にがい赤褐 | ローム粒D, 焼土小C・粒B, 炭化粒D/粘B, 締B |   |         |       |                             |

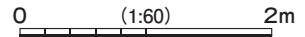


第 37 図 第 66 号 竪穴建物跡実測図 (1)



**焼土土層解説**

- 1 25YR4/6 赤褐 ローム小C、焼土大C・中B・小B・粒C、炭化物C  
粘B、縮B
- 2 10YR3/3 暗褐 ローム中C・小C・粒D、焼土中D・小C、炭化材C  
粘B、縮B
- 3 10YR3/2 黒褐 ローム小C・粒D、焼土中D・小C、炭化材D・物C・  
粒D粘B、縮B



第 38 図 第 66 号竪穴建物跡実測図 (2)

**規模と形状** 長軸 4.80 m、短軸 3.94 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 37° - W である。壁高は 12 ~ 18 cm で、外傾している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。

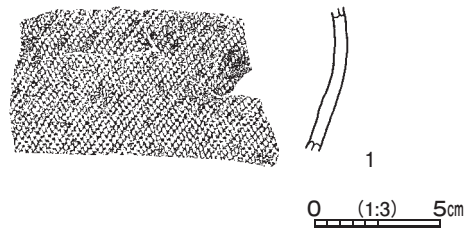
**炉** 中央部に付設されている。炉面を 30 cm ほど掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 50 ~ 65 cm で、配置から支柱穴と考えられる。P 5 は深さ 25 cm で、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 8 層に分層できる。覆土が薄く、堆積の状況は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器片 14 点 (壺), 石英片 2 点 (46.04 g) が出土している。1 は覆土中から出土している。

**所見** 焼土と炭化材が広範囲で検出されたことから、焼失住居である。時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第 39 図 第 66 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 21 表 第 66 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(58)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	附加状 1 種付加 2 条 内面劣化により不明	覆土中	5% PL32

第 69 号 竪穴建物跡 (第 40 図 PL 9)

**位置** 調査区南部の N 9 g0 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 23・24 号掘立柱建物, 第 222 号土坑に掘り込まれている。

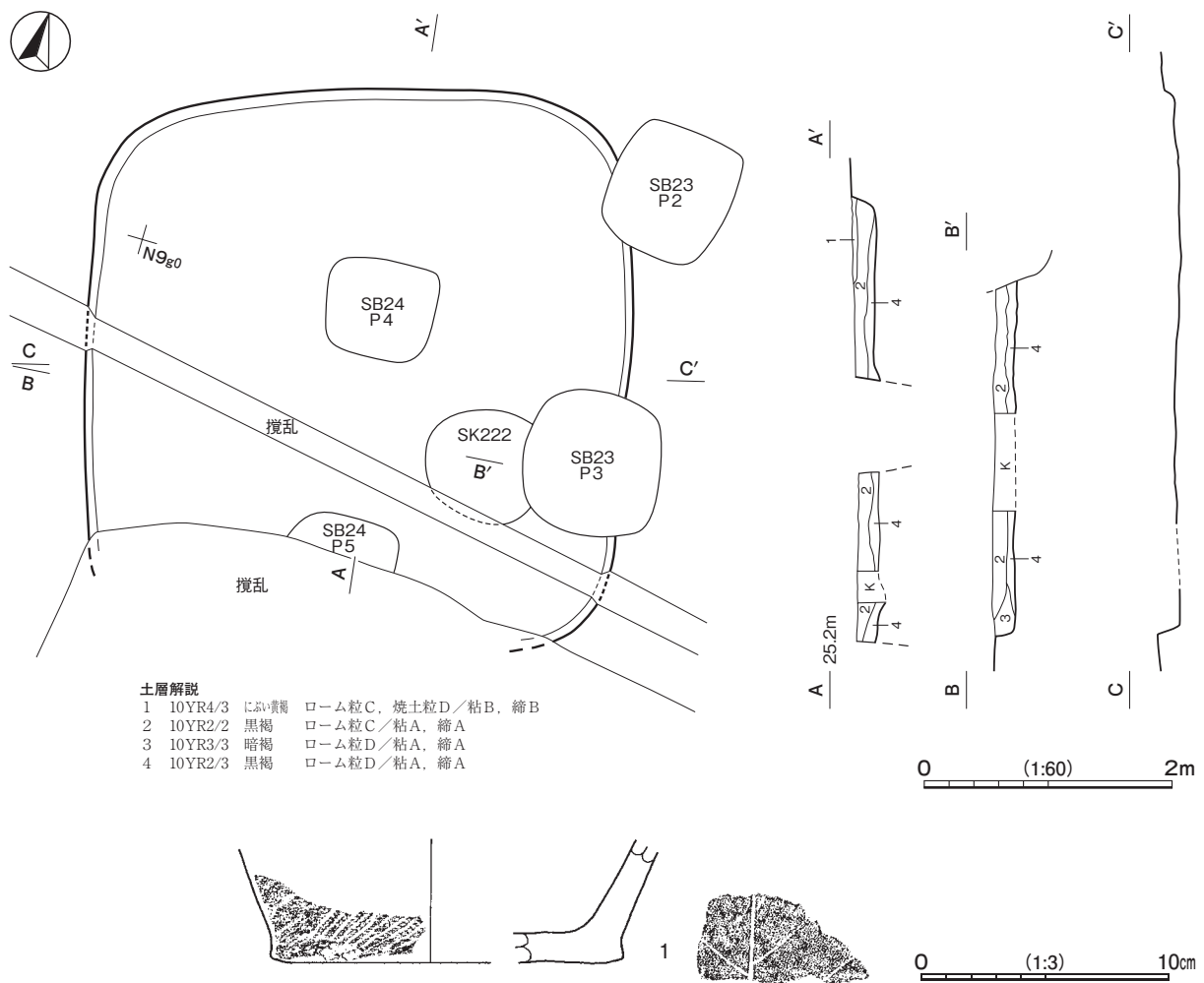
**規模と形状** 南部が攪乱を受けており, 東西軸は 4.38 m で, 南北軸は 4.34 m しか確認できなかった。形状は隅丸方形と推定され, 主軸方向は N - 18° - W である。壁高は 16 ~ 20 cm で, 外傾している。

**床** 平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。

**覆土** 4 層に分層できる。不規則な堆積の状況から, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 弥生土器片 2 点 (壺) が出土している。1 は覆土中から出土しており, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から後期前半と考えられる。



第 40 図 第 69 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 22 表 第 69 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

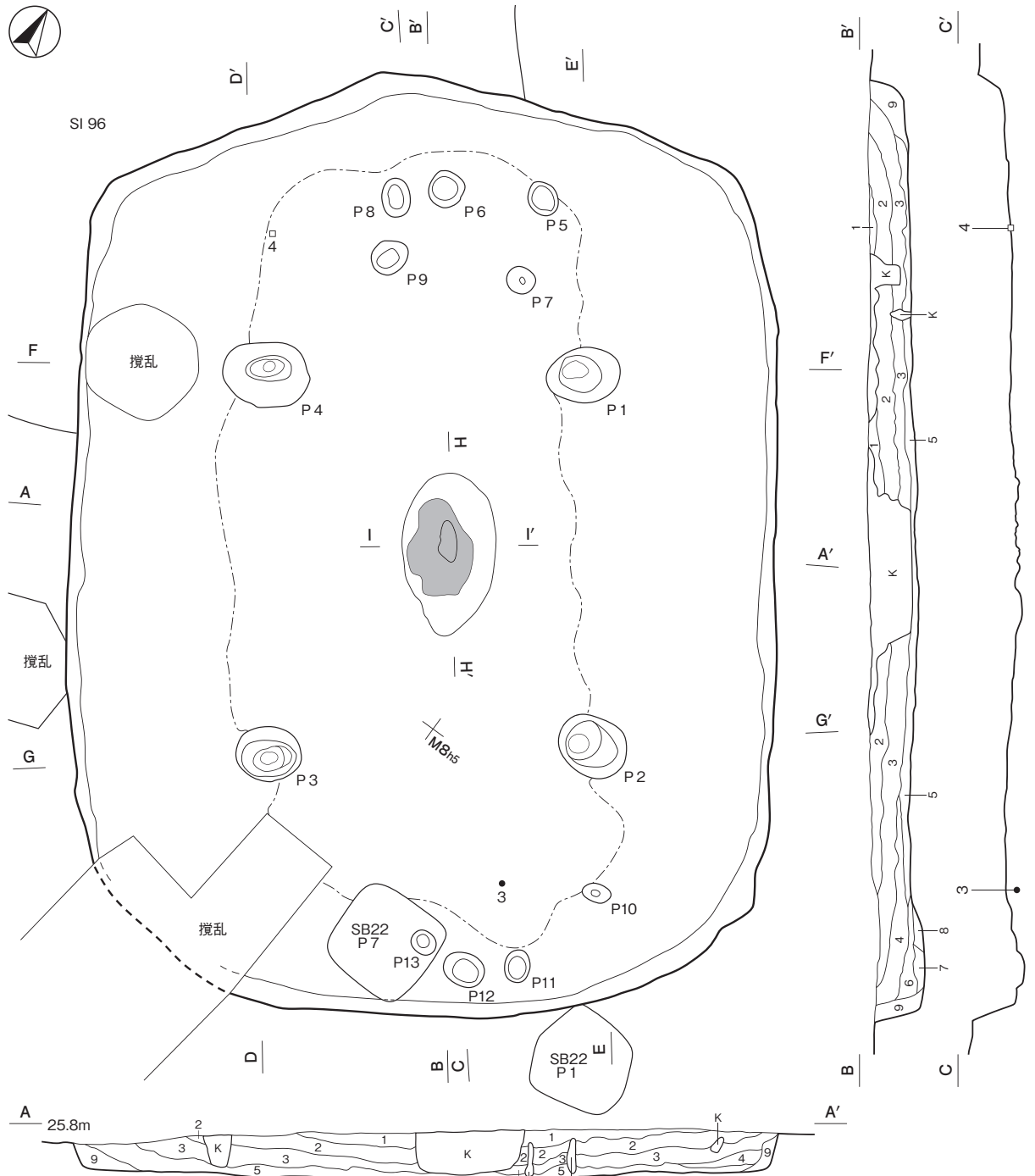
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(38)	[108]	長石・石英・雲母	橙	普通	附加状 1 種付加 2 条 底部木葉痕	覆土中	10%

第 89 号 竪穴建物跡 (第 41・42 図 PL 9・10)

位置 調査区中央部の M 8g4 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 96 号 竪穴建物跡を掘り込み, 第 22 号 掘立柱建物に掘り込まれている。

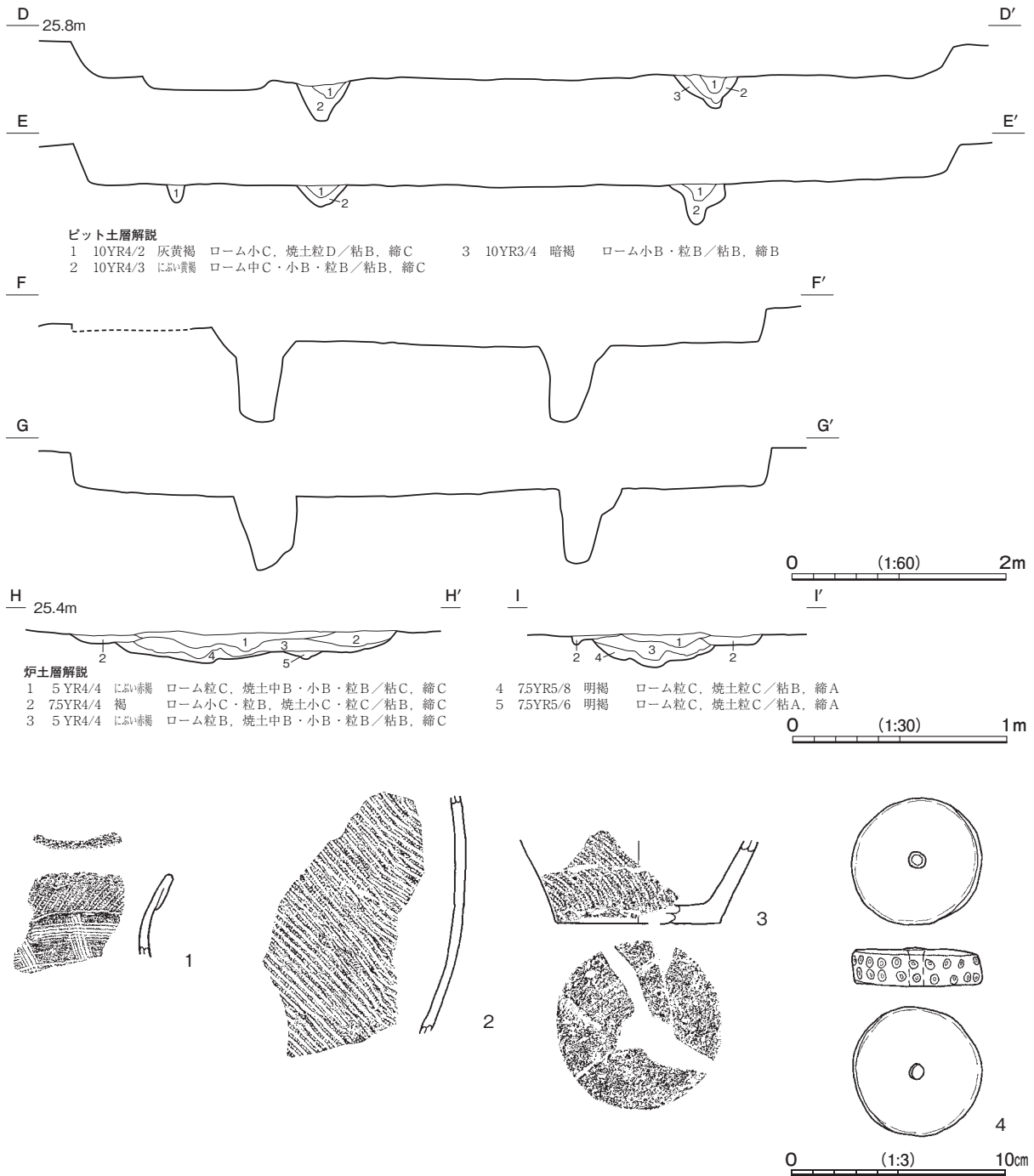
規模と形状 長軸 8.80 m, 短軸 6.60 m の隅丸長方形で, 主軸方向は N - 37° - W である。壁高は 24 ~ 38 cm



土層解説

1	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒D/粘C, 締B	6	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小B・粒B, 焼土中D・小D・粒B, 炭化物D・粒C/粘B, 締B
2	10YR3/1	黒褐	ローム中D・小D・粒C, 焼土小D・粒C, 炭化物D・粒C/粘B, 締B	7	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小B・粒B, 焼土粒D, 炭化物D・粒C/粘B, 締A
3	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小B・粒B, 焼土中D・小C・粒C, 炭化物D・粒B/粘B, 締B	8	10YR4/3	に灰噴	ローム大C・中C・小A・粒A/粘A, 締A
4	10YR3/2	黒褐	ローム中D・小C・粒C, 焼土小D・粒C, 炭化物D・粒D/粘B, 締B	9	10YR4/3	に灰噴	ローム中D・小B・粒A, 炭化粒D/粘B, 締C
5	10YR3/4	暗褐	ローム大D・中C・小C・粒A, 焼土中D・小C・粒B, 炭化材D・物C・粒B/粘B, 締C				

第 41 図 第 89 号 竪穴建物跡実測図



第42図 第89号竪穴建物跡・出土遺物実測図

で、外傾している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。

**炉** 中央部に付設されている。床面を浅く皿状に掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 13か所。P1～P4は深さ105～120cmで、配置から支柱穴と考えられる。P11～P13は深さ5～9cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは深さ5～17cmで、性格は不明である。

**覆土** 9層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**遺物出土状況** 弥生土器片50点（壺），土製品1点（紡錘車），石英片1点（77.21g）が出土している。3・



4は床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。1・2は覆土中から出土しており、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。

第23表 第89号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	複合口縁 附加状1種付加2条 頸部6条1単位の櫛歯文 縦位区画施文後横走文	覆土中	5% PL32
2	弥生土器	壺	-	(11.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	附加状1種付加2条 内面劣化により不明	覆土中	5% PL32
3	弥生土器	壺	-	(3.9)	[7.7]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	附加状1種付加2条	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
4	紡錘車	6.0	1.85	0.7	78.58	長石・石英・雲母	にぶい橙	両面ナデ 側面部竹管による刺突文	床面	PL45

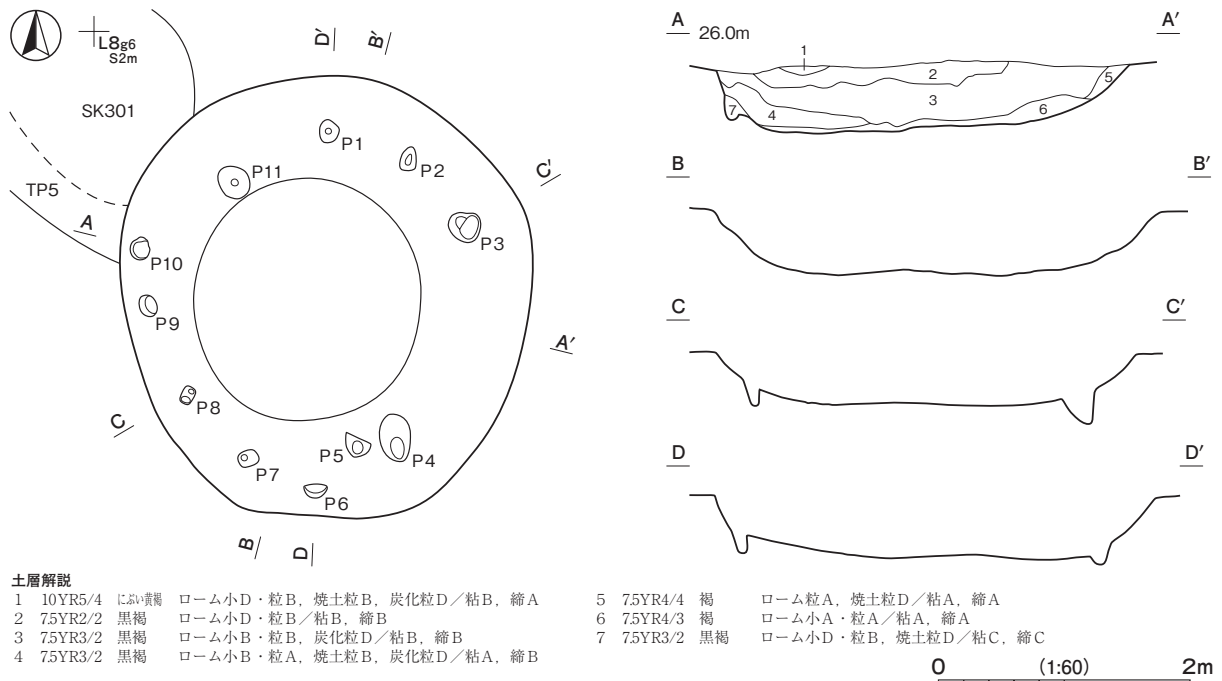
第24表 弥生時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
12	M8c0	N-48°-W	隅丸長方形	5.56×5.04	36~56	平坦	-	3	-	27	地床炉	-	人為	弥生土器, 石器	後期前半	本跡→SD 5
66	L7j0	N-37°-W	隅丸長方形	4.80×3.94	12~18	平坦	-	4	1	-	地床炉	-	不明	弥生土器	後期前半	本跡→SI62
69	N9g0	N-18°-W	隅丸長方形	4.38×(4.34)	16~20	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	弥生土器	後期前半	本跡→SB23・24, SK222
89	M8g4	N-37°-W	隅丸長方形	8.80×6.60	24~38	平坦	-	4	3	6	地床炉	-	自然	弥生土器, 土製品	後期前半	SI96→本跡→SB22

(2) 土坑

第217号土坑 (第43・44図 PL10)

位置 調査区中央部のL8h6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第43図 第217号土坑実測図

**重複関係** 第301号土坑，第5号陥し穴を掘り込んでいる。

**規模と形状** 開口部は径3.24～3.48mの円形である。底面は径1.80～1.90mの円形で，平坦である。確認面からの深さは48cmで，壁は緩やかに外傾している。



0 (1:3) 5cm

第44図 第217号土坑  
出土遺物実測図

**ピット** 11か所。ピットは深さ11～24cmで，縁の部分に円形に配置されている。特にP3～P5は深さ20cm以上あり，柱穴の可能性がある。

**覆土** 7層に分層できる。多くの層にロームブロックを含むことから，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 弥生土器片15点（壺類），石英片1点（20.81g）が出土している。いずれも覆土中から出土しており，埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 規模と形状から，上屋構造の土坑と考えられる。時期は，出土土器から後期前半と考えられる。

第25表 第217号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(4.8)	4.3	長石・石英	にぶい橙	普通	軸縄不明の附加条縄文 底部木葉痕	覆土中	20% PL32

**第314号土坑（第45図）**

**位置** 調査区南部のM9e4区，標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

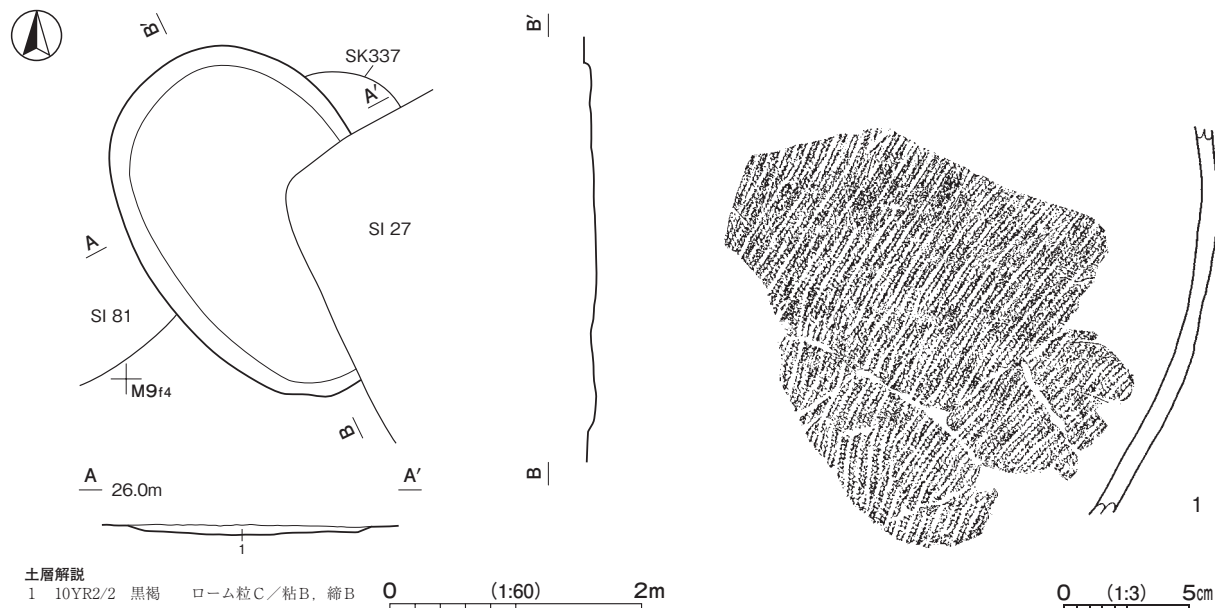
**重複関係** 第81号竪穴建物跡，第337号土坑を掘り込み，第27号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径2.94m，短径1.95mの楕円形で，長軸方向はN-28°-Wである。後世の削平を受けており，確認面からの深さは6cmである。底面はほぼ平坦で，壁は緩やかに外傾している。

**覆土** 単一層である。削平により，堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器片3点（壺）が出土している。いずれも覆土中から出土している。

**所見** 時期は，出土土器から後期前半と考えられる。



第45図 第314号土坑・出土遺物実測図

第 26 表 第 314 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(15.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	附加状1種付加2条 内面横位のナデ	覆土中	10% PL32

第 27 表 弥生時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
217	L 8h6	-	円形	3.48 × 3.24	48	緩斜	平坦	人為	弥生土器	SK302, TP 5 →本跡
314	M 9e4	N - 28° - W	楕円形	2.94 × 1.95	6	緩斜	平坦	不明	弥生土器	SI81, SK337 → 本跡 → SI27

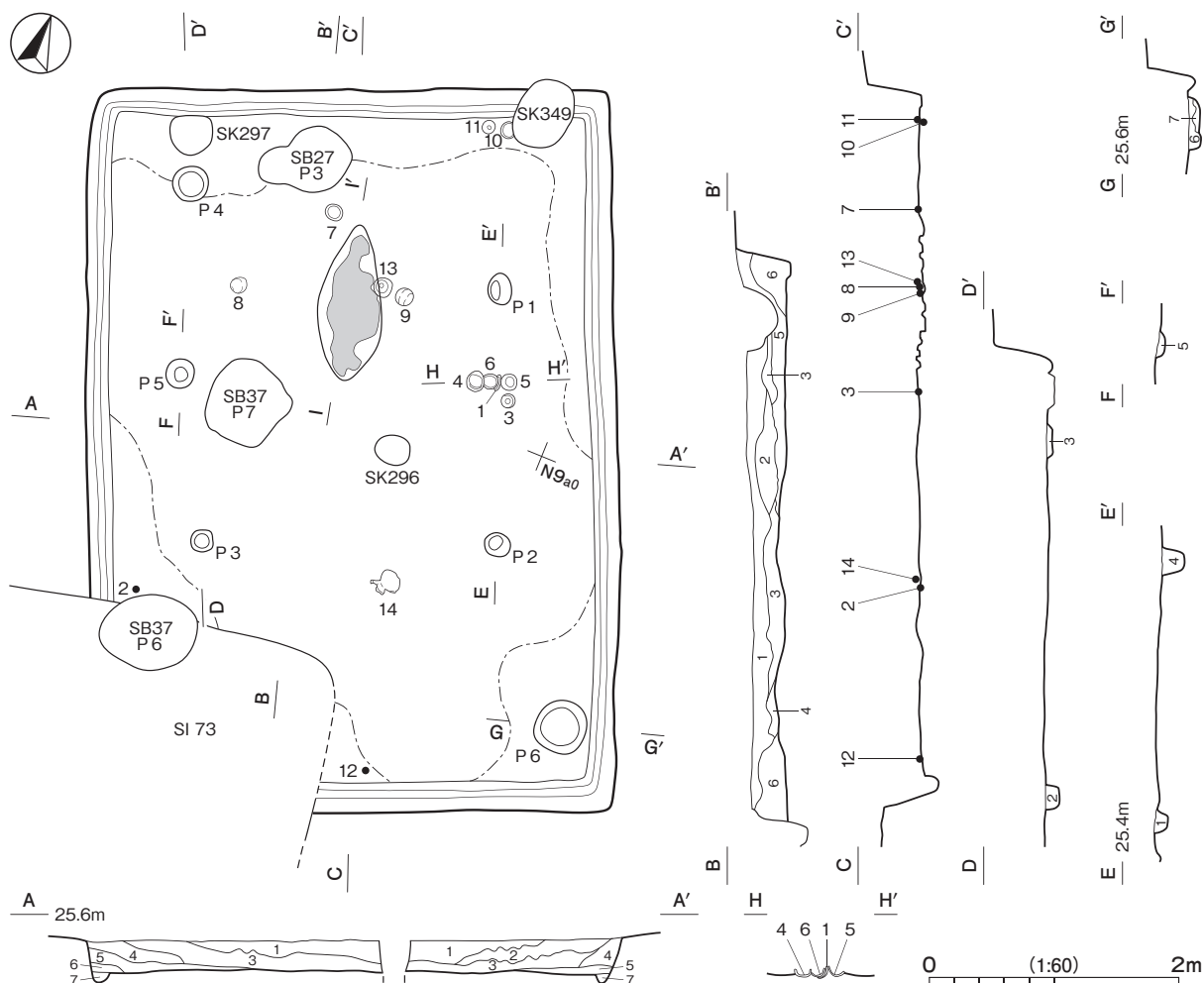
### 3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 19 棟、鍛冶工房跡 1 棟、土坑 3 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 竪穴建物跡

##### 第 10 号竪穴建物跡 (第 46 ~ 48 図 PL10)

位置 調査区南部の M 9j9 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 46 図 第 10 号竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第73号竪穴建物，第27・37号掘立柱建物，第296・297・349号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.80 m，短軸4.26 mの長方形で，主軸方向はN - 21° - Wである。壁高は28 ~ 40 cmで，ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。

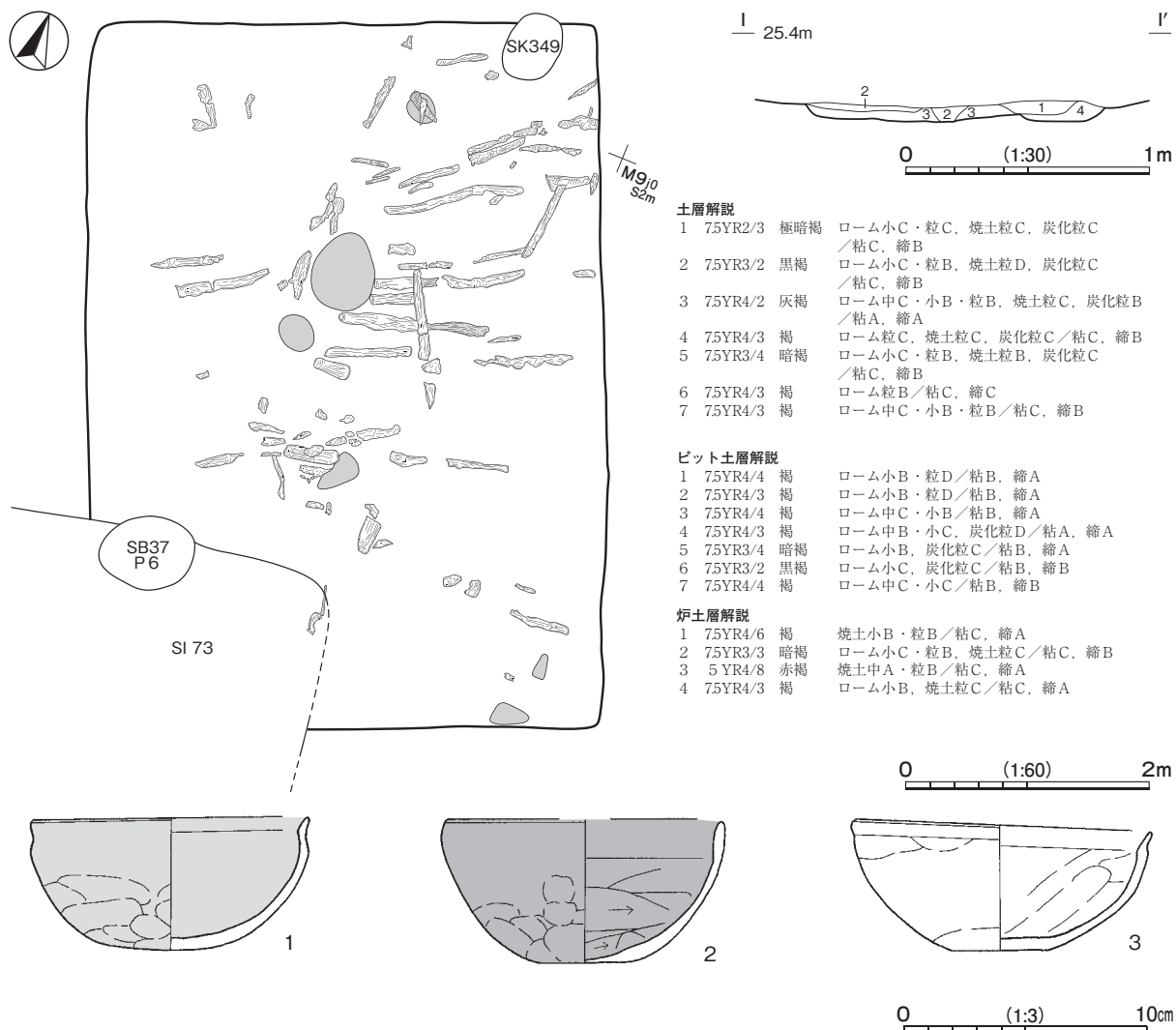
**炉** 中央部北寄りに付設されている。長径130 cm，短径50 cmほどの楕円形を呈する地床炉である。床面から20 cmほど皿状に掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

**ピット** 6か所。P1・P2・P3はそれぞれ深さ20 cm・10 cm・12 cmで，配置から支柱穴と考えられる。P4~6は深さ5~10 cmで，性格は不明である。

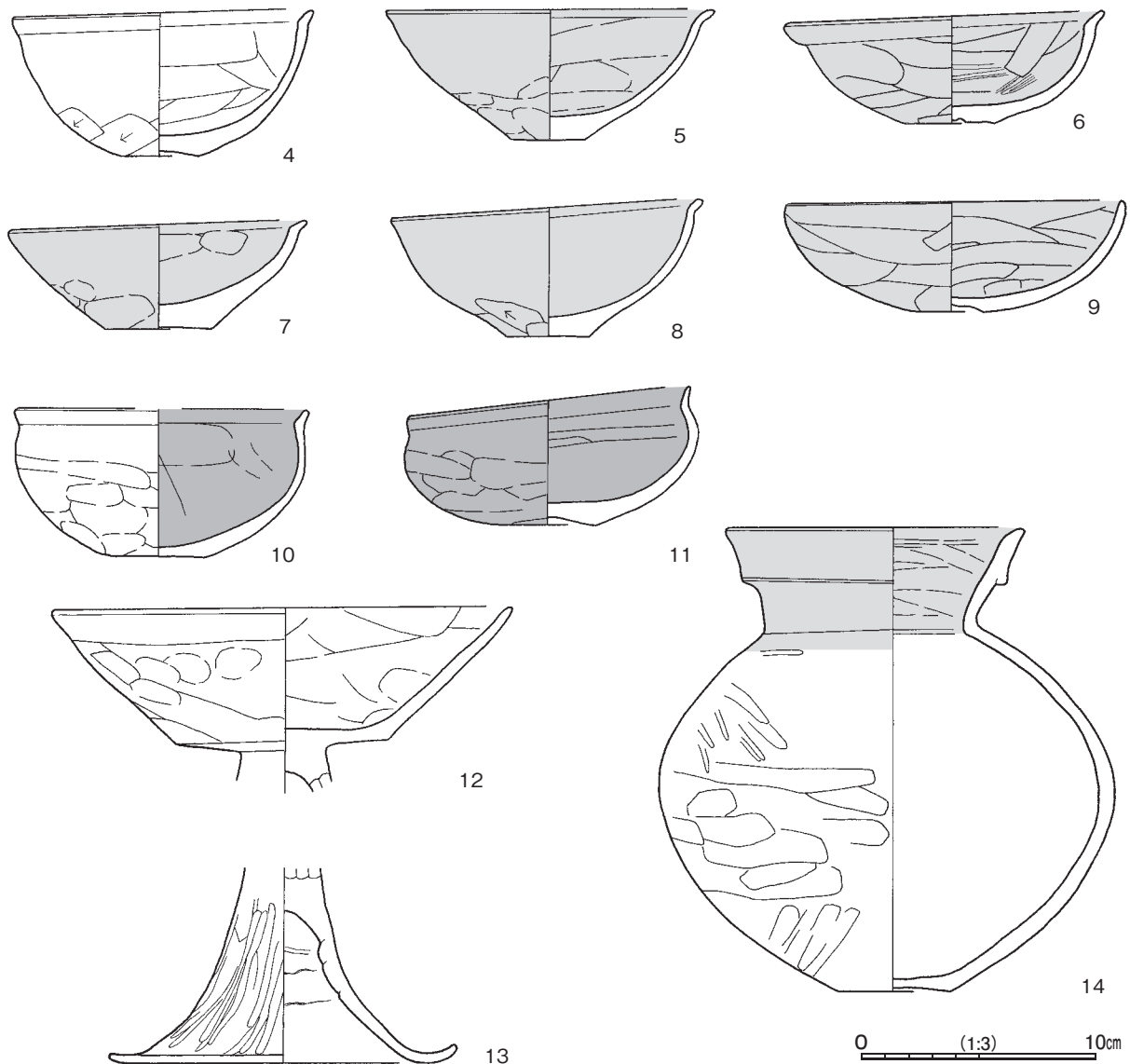
**覆土** 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていること，不規則な堆積状況から，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片59点（坏13，高坏7，壺12，甕27）が出土している。1~7・10~12・14はいずれも床面から出土しており，廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。

**所見** 床面から炭化材が多数確認され，焼失家屋と考えられる。時期は，出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第47図 第10号竪穴建物跡・出土遺物実測図



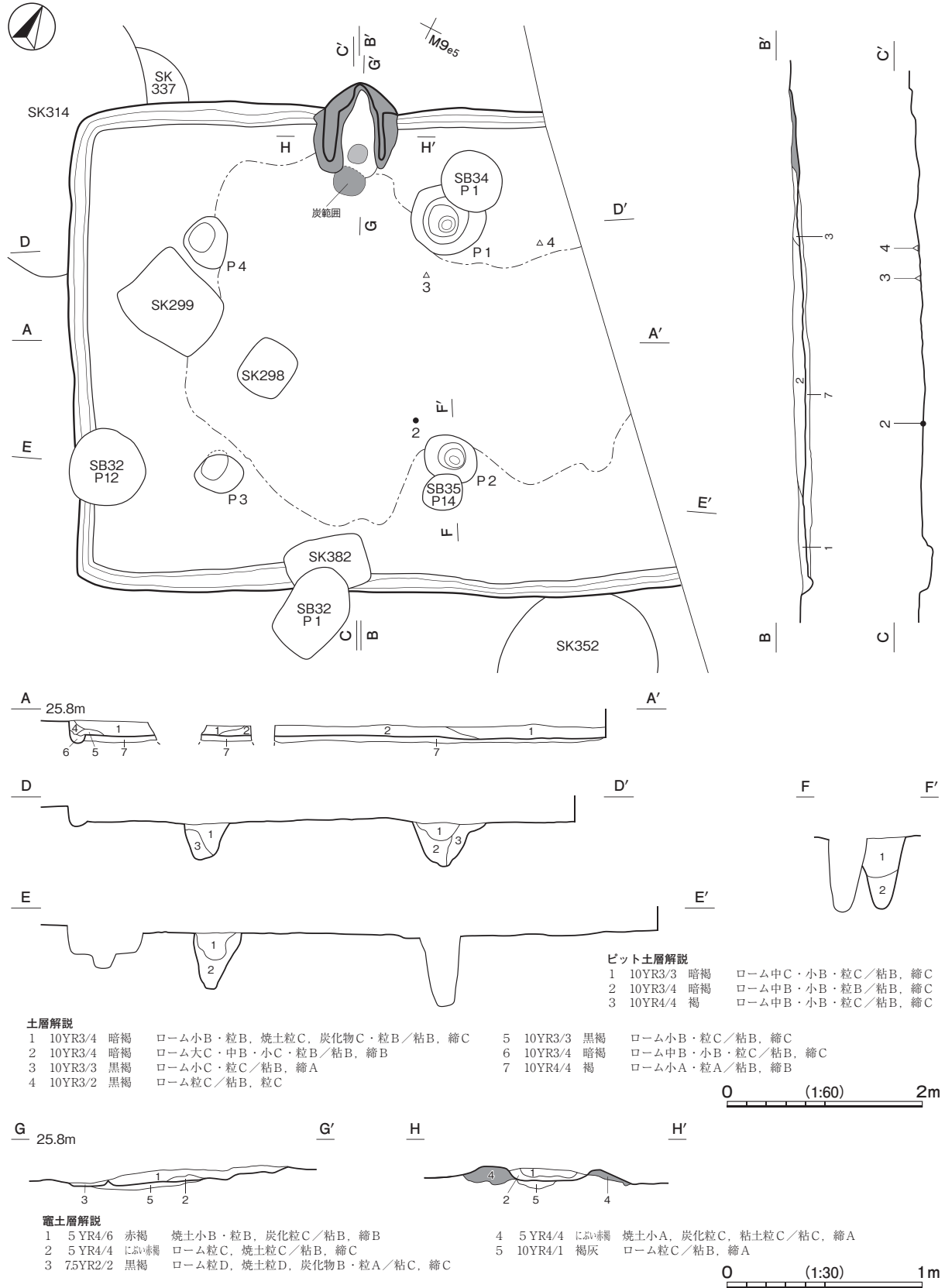
第 48 図 第 10 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 28 表 第 10 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	11.2	5.3	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 全面赤彩	床面	90% PL33
2	土師器	坏	[11.2]	5.4	3.5	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 指頭圧痕 全面黒色処理	床面	60%
3	土師器	坏	12.3	5.4	3.9	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面摩滅のため調整不 明 内面斜位のナデ	床面	90% PL33 外・内面一部煤付着
4	土師器	坏	12.6	6.2	3.3	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面下端手持ちヘラ削り 内面ナデ	床面	100% PL33 外・内面煤付着
5	土師器	坏	13.8	5.6	3.1	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ナデ 指頭圧痕 体部内面ナデ 全面赤彩	床面	90% PL33 外・内面煤付着
6	土師器	坏	13.6	4.8	3.7	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面横位のヘラ削り 内面ナデ 全面赤彩	床面	90% PL33 外・内面煤付着
7	土師器	坏	12.6	4.7	4.4	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面摩滅のため調整不 明瞭 内面ナデ 全面赤彩	床面	95% PL33 外・内面一部煤付着
8	土師器	坏	13.2	5.9	3.5	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ナデ 体部外 面下端手持ちヘラ削り 全面赤彩	覆土下層	100% PL33 外・内面一部煤付着
9	土師器	坏	14.3	4.8	2.8	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 全面赤彩	覆土下層	100% PL33 外・内面一部煤付着
10	土師器	坏	[12.3]	6.3	3.9	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 内面黒色処理	床面	70% PL33 外面煤付着
11	土師器	坏	12.0	6.0	4.0	長石・石英	黒褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内 面横位のナデ 全面黒色処理	床面	95% PL33
12	土師器	高坏	19.4	(8.1)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ナデ 指頭圧痕 内面ナデ	床面	50% 外・内面一部煤付着
13	土師器	高坏	-	(8.6)	12.6	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ磨き 内面横位のナデ	覆土下層	40% 外・内面一部煤付着
14	土師器	壺	12.4	19.7	4.7	長石・石英・ 赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り 体部上半 ヘラ磨き 下半ヘラナデ 口縁部外・内面赤彩	床面	95% PL33 外面一部煤付着

第 27 号 竪穴建物跡 (第 49・50 図 PL10)

位置 調査区中央部の M 9e5 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 49 図 第 27 号 竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第314・337・352号土坑を掘り込み、第32・34・35号掘立柱建物、第298・299・382号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びているため、長軸6.12m、短軸4.98mしか確認できなかった。平面形は長方形と推定できる。主軸方向はN-28°-Wである。壁高は3~13cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。貼床は全体に、深さ5~10cmほどをロームブロックやローム粒子を含む第7層を埋土して構築されている。壁溝は調査区域内では全周している。

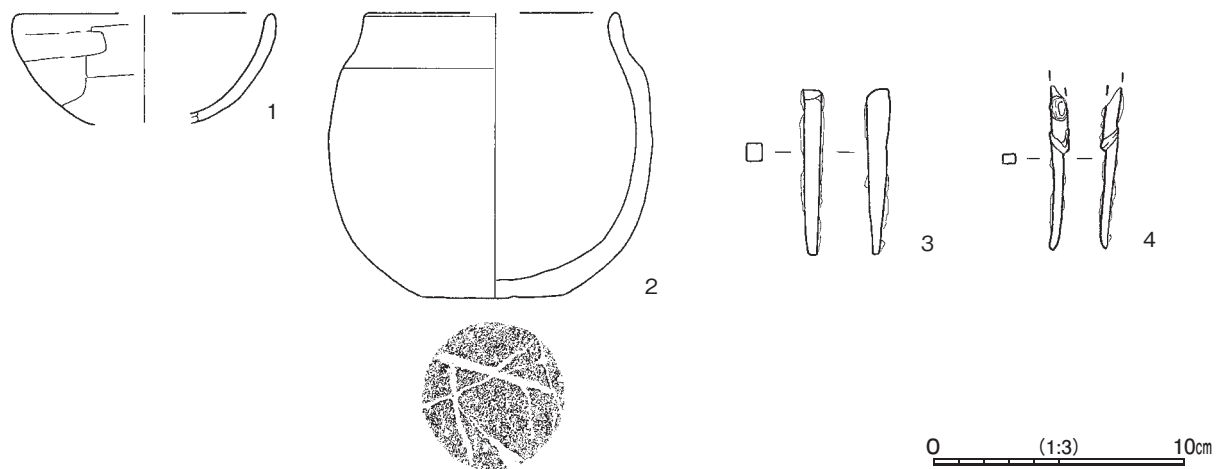
**竈** 北壁に付設されており、上部が削平されているため袖の痕跡がわずかに残っている。焚口部から煙道部まで100cmほどで、燃焼部幅は30cmである。袖部は地山の上に粘土粒子などを含む第4層を積み上げて構築されている。火床部は床面をやや掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれている。

**ピット** 4か所。P1~P4は深さ40~75cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。

**覆土** 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第7層は貼床の構築土である。

**遺物出土状況** 土師器片68点(坏9, 高坏2, 鉢3, 壺1, 小型甕4, 甕49), 金属製品4点(釘), 鉄滓19点(1,456.65g)が出土している。2~4は床面からの出土であり、廃絶の際に遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀後葉から7世紀前葉と考えられる。



第50図 第27号竪穴建物跡出土遺物実測図

第29表 第27号竪穴建物跡出土遺物一覧

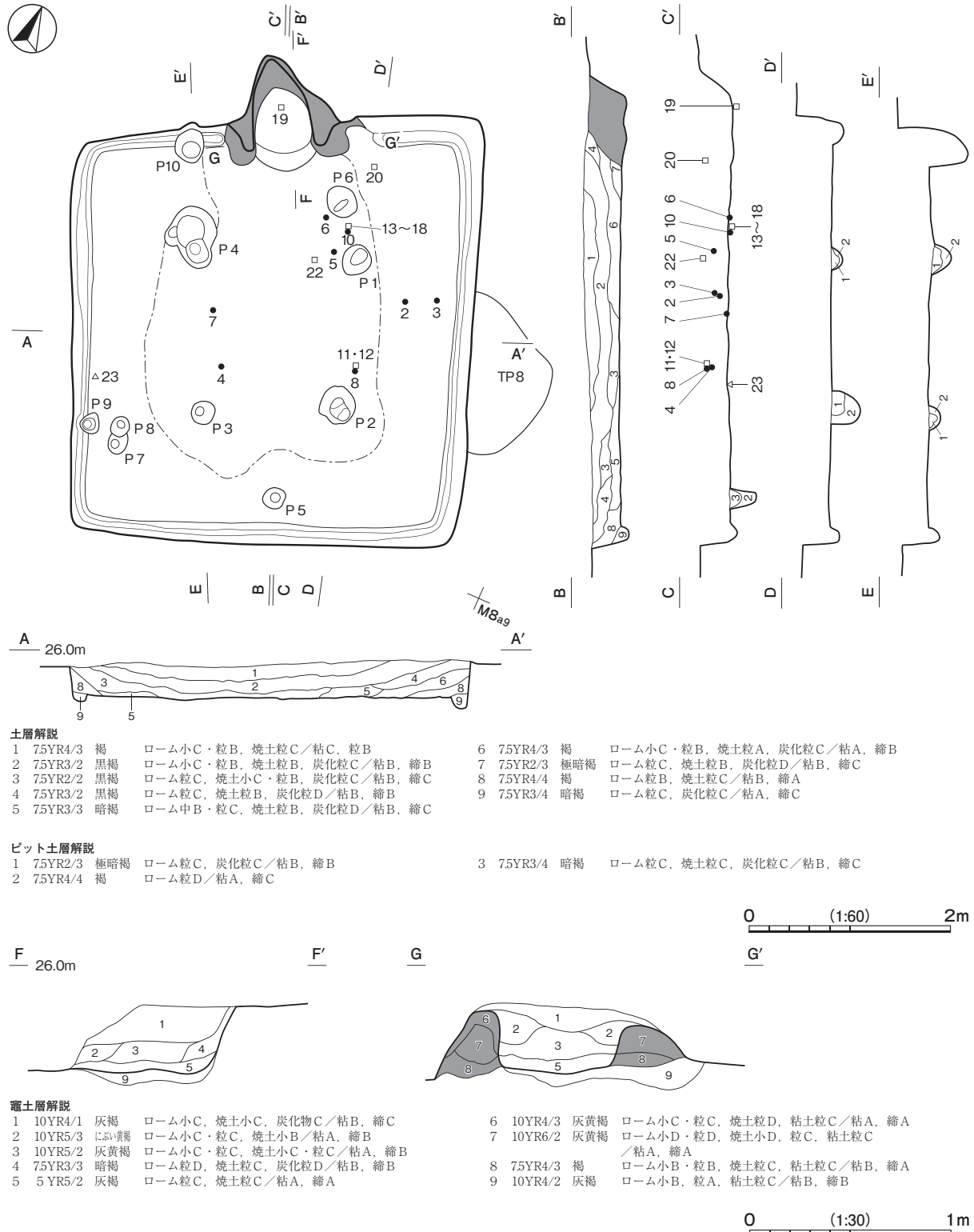
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[10.2]	(4.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ内面ナデ	覆土中	30% 口縁部外面一部煤附着
2	土師器	鉢	[10.1]	11.3	5.7	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ 体部外・内面摩滅のため調整不明 底部木葉痕	床面	60% PL33 体部外面一部煤附着
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
3	釘	6.6	0.85	0.95	13.28	鉄	断面正方形		床面	PL48	
4	釘	(6.6)	0.80	0.60	(5.53)	鉄	基部欠損 断面長方形		床面	PL48	

第 35 号 竪穴建物跡 (第 51 ~ 53 図 PL11)

位置 調査区中央部の L 8j8 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 8 号 陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.28 m, 短軸 4.05 m の方形で, 主軸方向は N - 20° - W である。壁高は 24 ~ 32 cm で, ほぼ直立している。



第 51 図 第 35 号 竪穴建物跡実測図



**床** 平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。壁溝が全周している。

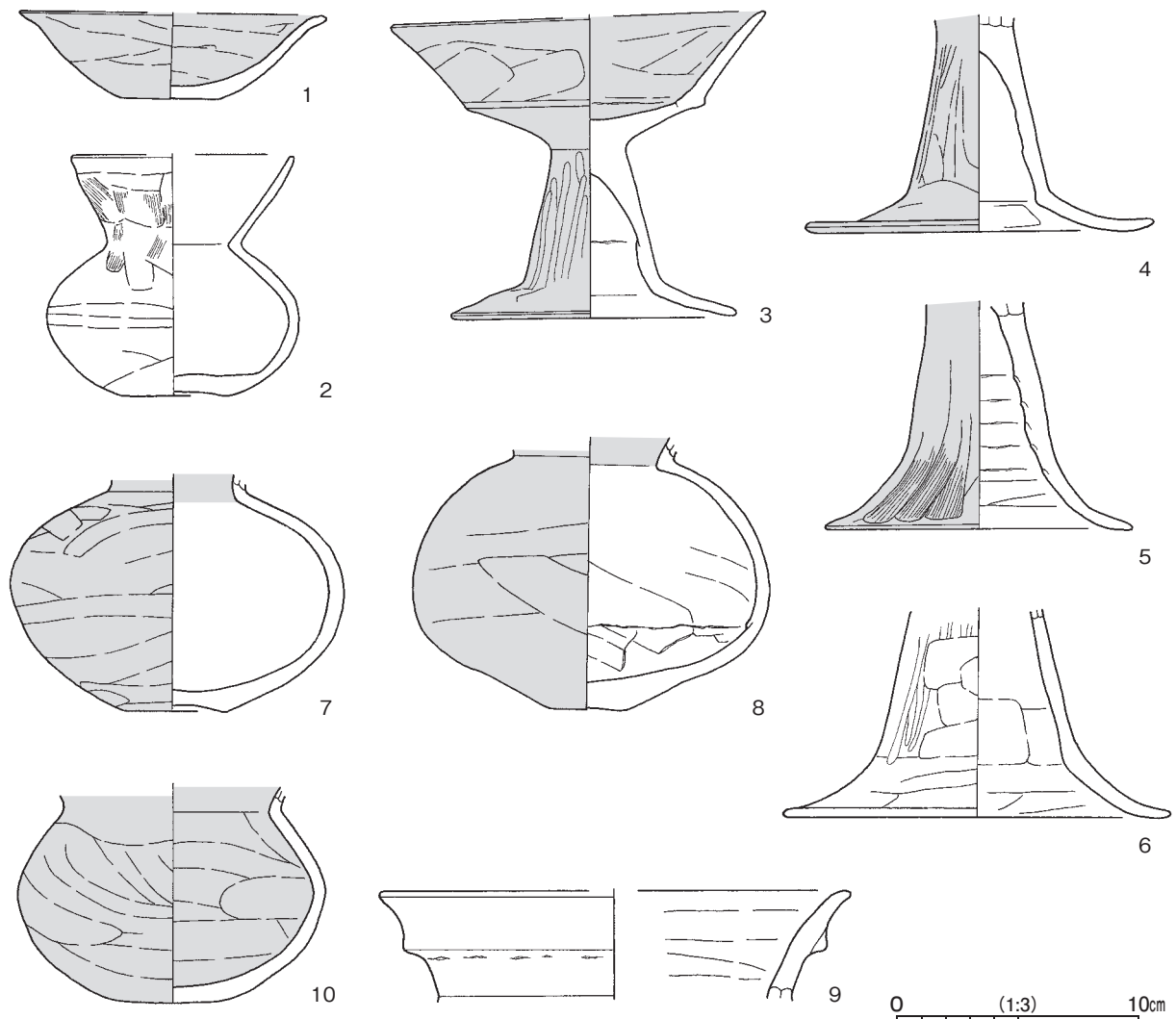
**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 120 cm で、燃焼部の幅は 55 cm である。右袖部は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第 9 層を埋土して整地した後、ロームブロックや粘土粒子を含む第 6～8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用していたと考えられるが、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に 60 cm ほど掘り込まれ、奥壁で外傾して立ち上がっている。

**ピット** 10 か所。P 1～P 4 は深さ 15～40 cm で、規模や配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 26 cm で、出入口施設に伴うピットである。P 6～P 10 は深さ 10～40 cm で、性格は不明である。

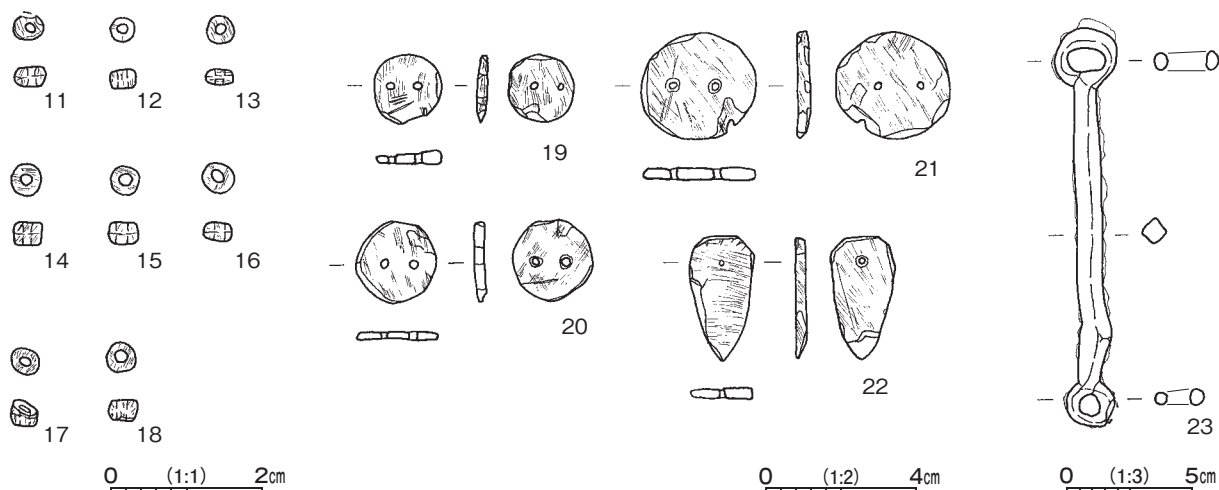
**覆土** 9 層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 629 点（坏 4, 椀 100, 卮 54, 高坏 155, 鉢 7, 壺 53, 小型甕 24, 甕 209, 甑 23）, 石製品 12 点（白玉 8, 有孔円板 3, 剣形品 1）, 金属製品 1 点（釦）が出土している。床面からは 6・7・10・13～18・23 が、19 は竈内からそれぞれ出土した。特に石製模造品はまとめて確認された。これらの遺物は廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。2～5 は覆土下層から、8・11・12・22 は覆土中層から、20 は覆土上層からそれぞれ出土した。埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 5 世紀後葉と考えられる。



第 52 図 第 35 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第53図 第35号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第30表 第35号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.6]	3.5	4.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面ナデ 全面赤彩	覆土中	40%
2	土師器	埴	[9.1]	10.0	3.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部外面ヘラナデ	覆土下層	80% PL34
3	土師器	高坏	[15.4]	12.6	[11.8]	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	坏部外・内面ナデ 脚部外面ヘラ磨き 外面・坏部内面赤彩	覆土下層	60% PL34
4	土師器	高坏	-	(8.9)	[14.3]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面縦位のナデ 外面赤彩	覆土下層	30%
5	土師器	高坏	-	(9.4)	12.5	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	外面ハケ目調整 外面赤彩	覆土下層	40%
6	土師器	高坏	-	(8.7)	15.7	長石・石英・赤色粒子・礫	橙	普通	外面ヘラ磨き後、横位のナデ 内面ナデ	床面	40% 外・内面一部煤附着
7	土師器	壺	-	(4.8)	4.2	長石・石英・赤色粒子・礫	明赤褐	普通	外面ナデ 口縁部外・内面赤彩 体部外面赤彩	床面	90% PL34 外面一部煤附着
8	土師器	壺	-	(11.8)	3.2	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	外面ナデ 内面ヘラ削り後ナデ 口縁部外・内面赤彩 体部外面赤彩	覆土中層	50% 外面一部煤附着
9	土師器	壺	[19.4]	(4.5)	-	長石・石英・赤色粒子・礫	橙	普通	口縁部外・内面ナデ	覆土中	5%
10	土師器	小型甕	[9.1]	(9.0)	4.8	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面ナデ 全面赤彩	床面	50% 外面一部煤附着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	白玉	0.40	0.25	0.10	0.05	滑石	側面に縦位の磨痕 側面にやや膨らみ	覆土中層	PL47
12	白玉	0.35	0.25	0.15	0.05	滑石	側面に縦位の磨痕 側面にやや膨らみ	覆土中層	PL47
13	白玉	0.35	0.21	0.15	0.04	滑石	側面にやや膨らみ	床面	PL47
14	白玉	0.38	0.31	0.15	0.06	滑石	側面にやや膨らみ	床面	PL47
15	白玉	0.39	0.30	0.15	0.06	滑石	側面にやや膨らみ	床面	PL47
16	白玉	0.39	0.26	0.15	0.06	滑石	側面にやや膨らみ	床面	PL47
17	白玉	0.38	0.30	0.10	0.06	滑石	側面に縦位の磨痕 側面にやや膨らみ	床面	PL47
18	白玉	0.39	0.26	0.15	0.06	滑石	側面にやや膨らみ	床面	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
19	有孔円板	1.85	1.75	0.30	1.39	滑石	全面研磨 孔2か所 孔径0.15 cm	床面	PL47
20	有孔円板	3.30	3.20	0.25	2.18	滑石	全面研磨 孔2か所 孔径0.20 cm	覆土上層	PL47
21	有孔円板	3.05	2.80	0.30	5.04	滑石	全面研磨 孔2か所 孔径0.15 cm	覆土中	PL47
22	剣形品	3.22	1.70	0.27	2.53	粘板岩	全面研磨 孔1か所	覆土中層	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
23	轡	15.9	2.50	1.05	45.53	鉄	小環銜 二連銜 捻りなし 引手	床面	PL48

第 62 号竪穴建物跡 (第 54・55 図 PL11)

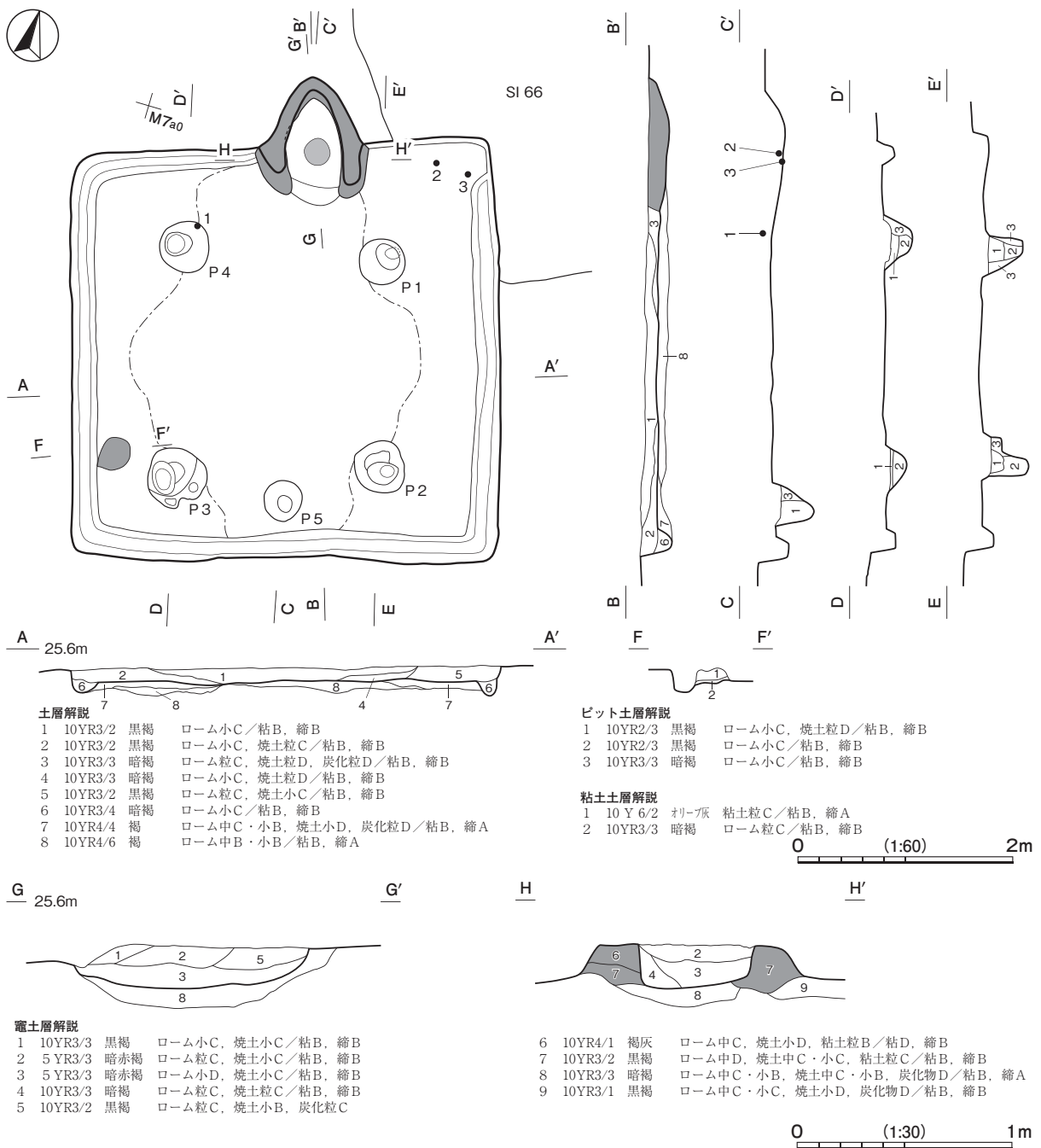
位置 調査区北部の M 7a0 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 66 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.98 m, 短軸 3.80 m の方形で, 主軸方向は N - 15° - W である。壁高は 12 ~ 16 cm で, 直立している。

床 平坦で, 竈前面から中央部を中心に入出口付近まで踏み固められている。貼床は, 深さ 10 cm ほどロームブロックを含む第 7・8 層を埋土して構築されている。壁溝は北東コーナー部を除いて回っている。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 120 cm で, 燃烧部の幅は 40 cm である。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ, ロームブロックや焼土ブロックを含む第 8・9 層を埋土



第 54 図 第 62 号竪穴建物跡実測図

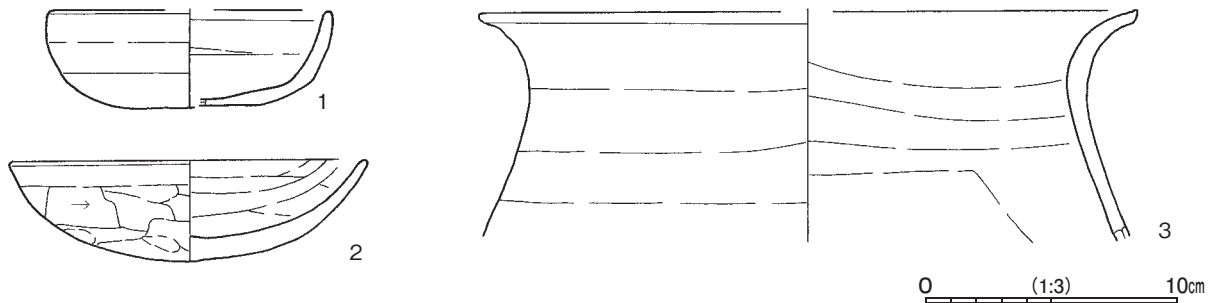
して整地した後、袖部はロームブロックや粘土ブロックを含む第6・7層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状にくぼんでいる。火床面は第8層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に65cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ50～65cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、出入口施設に伴うピットである。

**覆土** 6層に分層できる。多くの層にロームブロックや焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片136点(坏21, 碗1, 高坏4, 壺1, 小型甕5, 甕104), 須恵器片1点(甕), 金属製品1点(釘)が出土している。2・3は北東コーナー部付近の床面から、1は覆土下層からそれぞれ出土している。これらは、埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。南西部からは、覆土下層で粘土塊が確認されたが、埋め戻される過程で投げ込まれたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第55図 第62号竪穴建物跡出土遺物実測図

第31表 第62号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[11.2]	3.9	[5.2]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面に稜 内面ナデ	覆土下層	40%
2	土師器	坏	14.1	4.1	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 指頭圧痕 内面ナデ 体部外面へラ削り後ナデ	床面	70% 底部外面煤付着
3	土師器	甕	[26.0]	(9.2)	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	床面	5%

### 第65号竪穴建物跡 (第56・57図 PL11・12)

**位置** 調査区中央部のM8d2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第16号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.00m、短軸3.78mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は27～32cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。貼床は、部分的で、深さ5～15cmほどロームブロックを含む第7層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

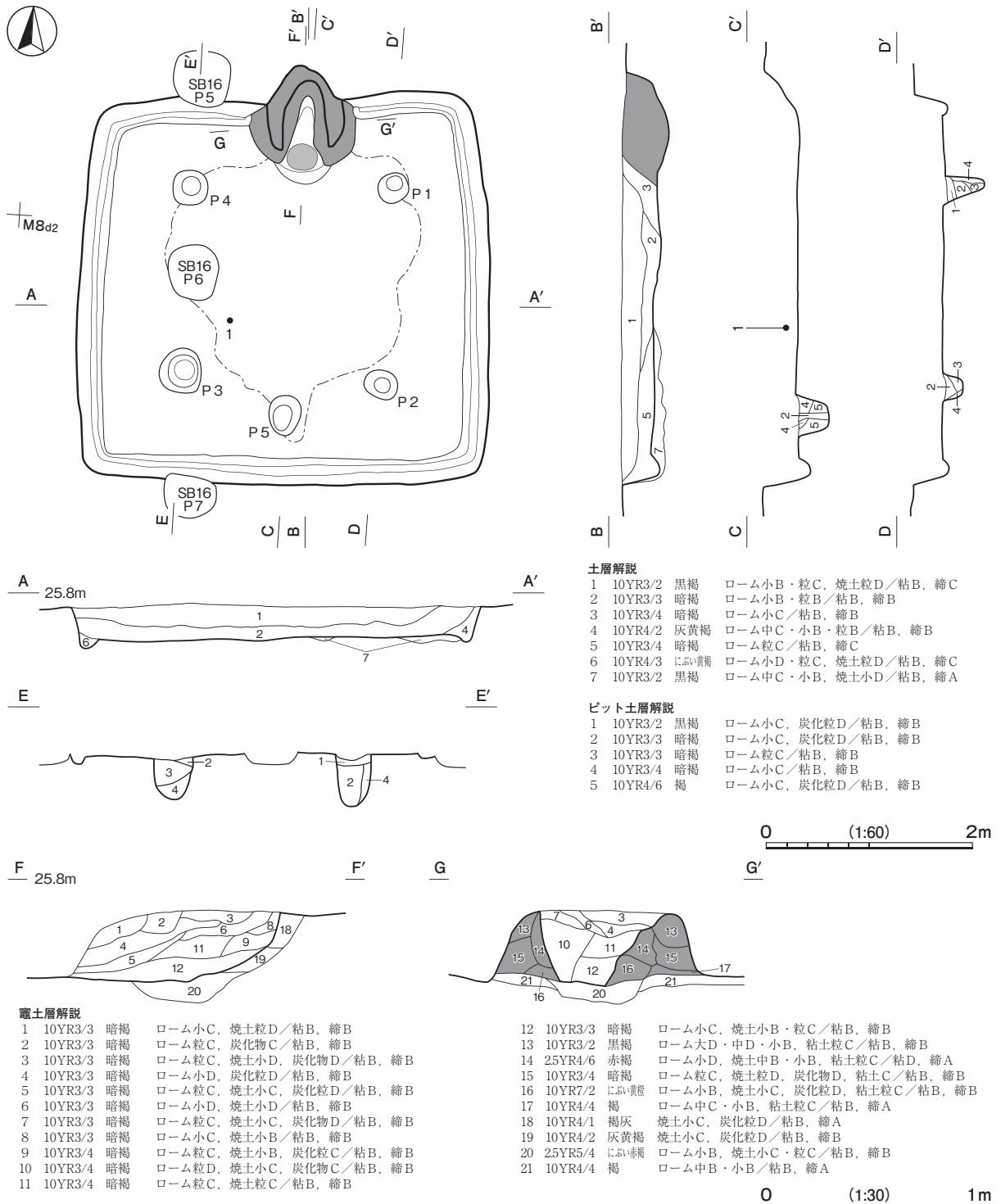
**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで115cmで、燃焼部の幅は40cmである。竈は袖部の基部をつくり、火床部から奥壁までを20cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第18～21層を埋土して整地した後、袖部はロームブロックや粘土粒子を含む第13～17層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用している。火床面は第20層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ 20～55 cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ 30 cmで、出入口施設に伴うピットである。

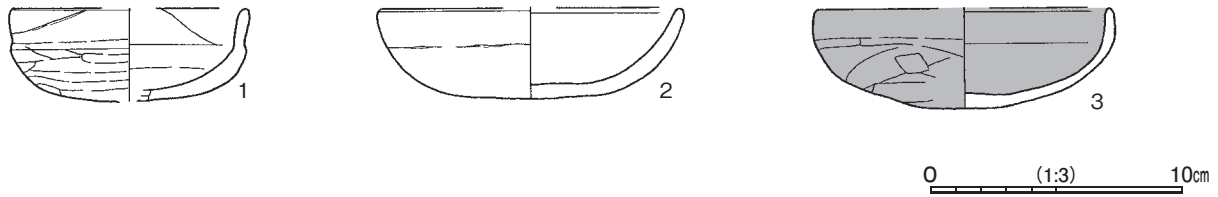
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 76点(坏 25, 高坏 5, 鉢 1, 壺 2, 甕 43)が出土している。1は覆土下層から出土しており、埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。2・3は覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第 56 図 第 65 号 堅穴建物跡実測図



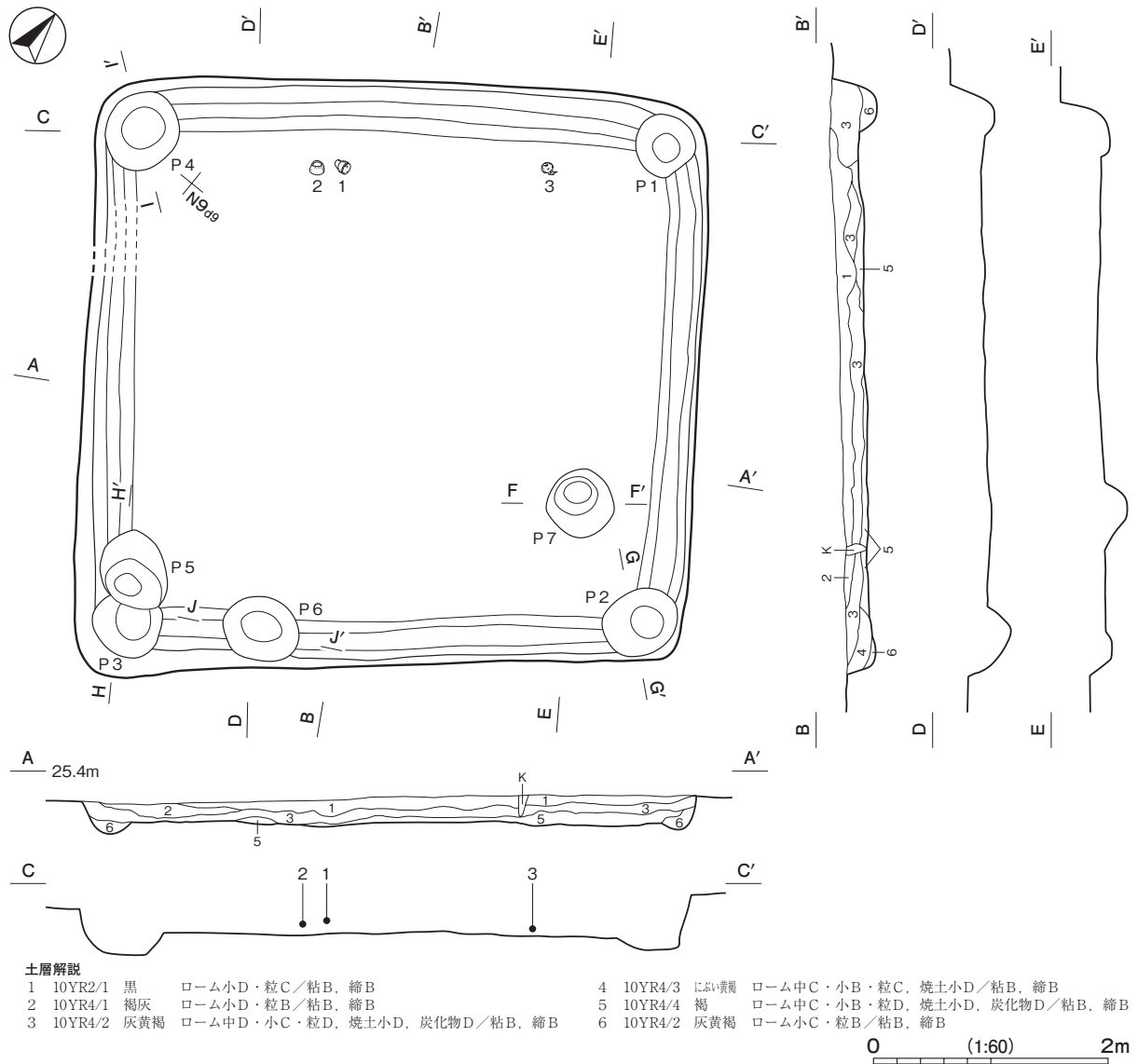
第 57 図 第 65 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 32 表 第 65 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[9.2]	3.7	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	40% PL34 内面煤付着
2	土師器	坏	[11.9]	3.6	[5.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	30%
3	土師器	坏	[11.6]	3.9	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ 全面黒色処理	覆土中	30%

第 67 号竪穴建物跡 (第 58・59 図 PL12)

位置 調査区南部の N 9 d9 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 58 図 第 67 号竪穴建物跡実測図

**規模と形状** 長軸 5.22 m，短軸 5.00 m の方形で，主軸方向は N - 51° - E である。壁高は 14 ~ 35 cm で，ほぼ直立している。

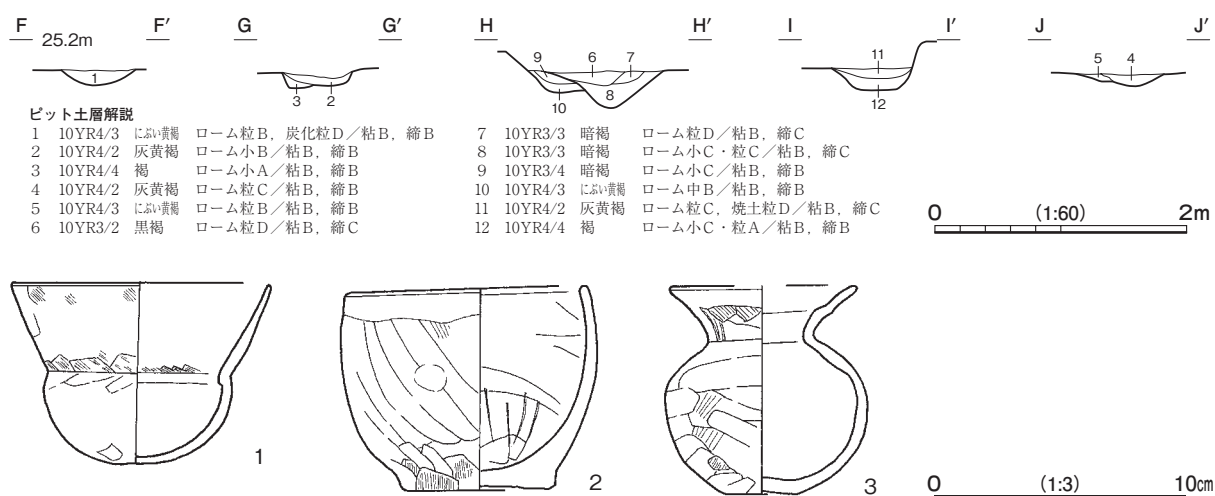
**床** 平坦で，明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

**ピット** 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 10 ~ 17 cm で，配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 30 cm で，P 3 からの柱の据え直しに伴うピットと考えられる。P 6・P 7 はそれぞれ深さが 10 cm・12 cm で，性格は不明である。

**覆土** 6 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ，不規則に堆積していることから，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 52 点（埴 5，鉢 1，小型壺 1，甕 45），須恵器片 5 点（坏 2，蓋 2，甕 1）が出土している。1 ~ 3 はいずれも覆土下層から出土しており，埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から 4 世紀後葉と考えられる。壁溝上に柱穴が確認できた以外は，炉等の屋内施設は確認できなかった。柱穴が浅く，簡易的な作業場や倉庫であった可能性が高い。



第 59 図 第 67 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 33 表 第 67 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	埴	10.1	7.3	1.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	覆土下層	95% PL34 外・内面一部煤付着
2	土師器	鉢	9.5	8.1	5.6	長石・石英・赤色粒子・礫	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハラナデ	覆土下層	100% PL34 外面一部煤付着
3	土師器	小型壺	[7.4]	8.2	2.7	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ	覆土下層	80% PL34 外・内面一部煤付着

**第 68 号竪穴建物跡**（第 60 ~ 63 図 PL12）

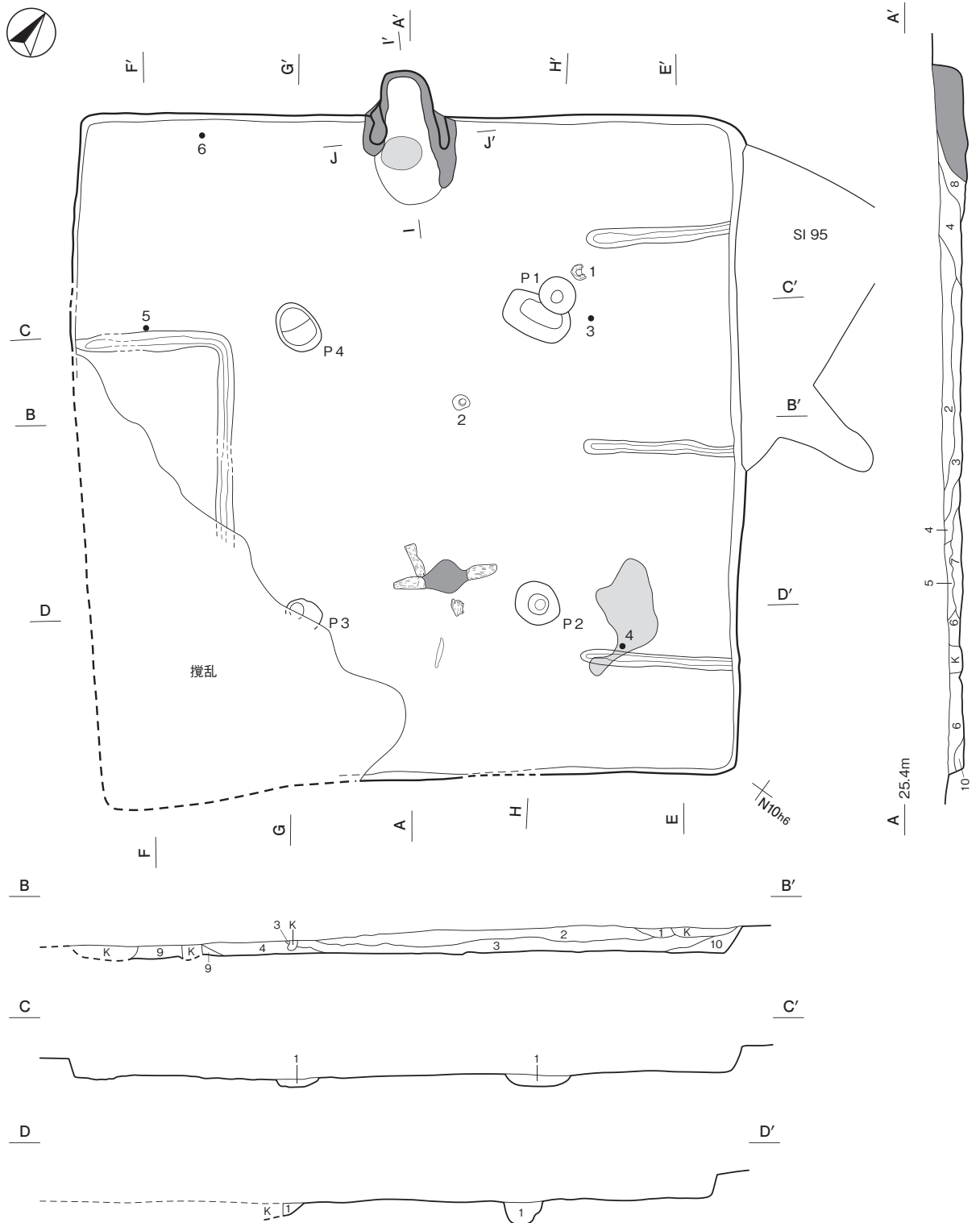
**位置** 調査区南部の N 10g4 区，標高 25 m ほどの平坦な台地上の縁辺部に位置している。

**重複関係** 第 95 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が削平されている。長軸 6.56 m，短軸 6.44 m の方形で，主軸方向は N - 36° - W である。壁は高さ 16 ~ 32 cm で，ほぼ直立している。

**床** 平坦で，全面が硬化している。壁溝は確認できず，間仕切り溝が 4 か所確認された。南部から南東部にかけて炭化材や焼土がまとまって出土した。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 130 cm で，燃烧部の幅は 50 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第 8 層を積み上げて構築されている。火床部はやや凹凸があり，火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 50 cm ほど掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。



**土層解説**

- 1 10YR3/2 黒褐 ローム小D・粒C, 焼土小D, 炭化物C/粘B, 締B
- 2 10YR3/1 黒褐 ローム小D・粒C, 焼土小C, 炭化物C/粘B, 締B
- 3 10YR3/1 黒褐 ローム中D・小C・粒D, 焼土小C, 炭化物C/粘B, 締B
- 4 10YR4/2 灰黄褐 ローム小C・粒D, 焼土小D, 炭化物C・粒B/粘B, 締B
- 5 10YR3/3 暗褐 ローム中D・小C・粒D, 焼土小C, 炭化物C/粘B, 締B
- 6 10YR4/3 に近い黄褐 ローム小B・粒D, 焼土小C, 炭化物C/粘B, 締B

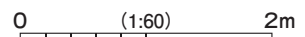
- 7 10YR3/4 暗褐 ローム中D・小C・粒D, 焼土中C・小B, 炭化材C・物B・粒B/粘B, 締B
- 8 10YR5/4 に近い黄褐 ローム中C・小B・粒C, 焼土中C・小B, 炭化物C・粒D/粘B, 締B
- 9 10YR5/4 に近い黄褐 ローム小B・粒C, 焼土小C, 炭化物C/粘B, 締B
- 10 10YR3/4 暗褐 ローム中D・小B・粒C, 焼土小D/粘B, 締B

**ビット土層解説**

- 1 75YR4/2 灰褐 ローム小C・粒B, 炭化粒D/粘B, 締B

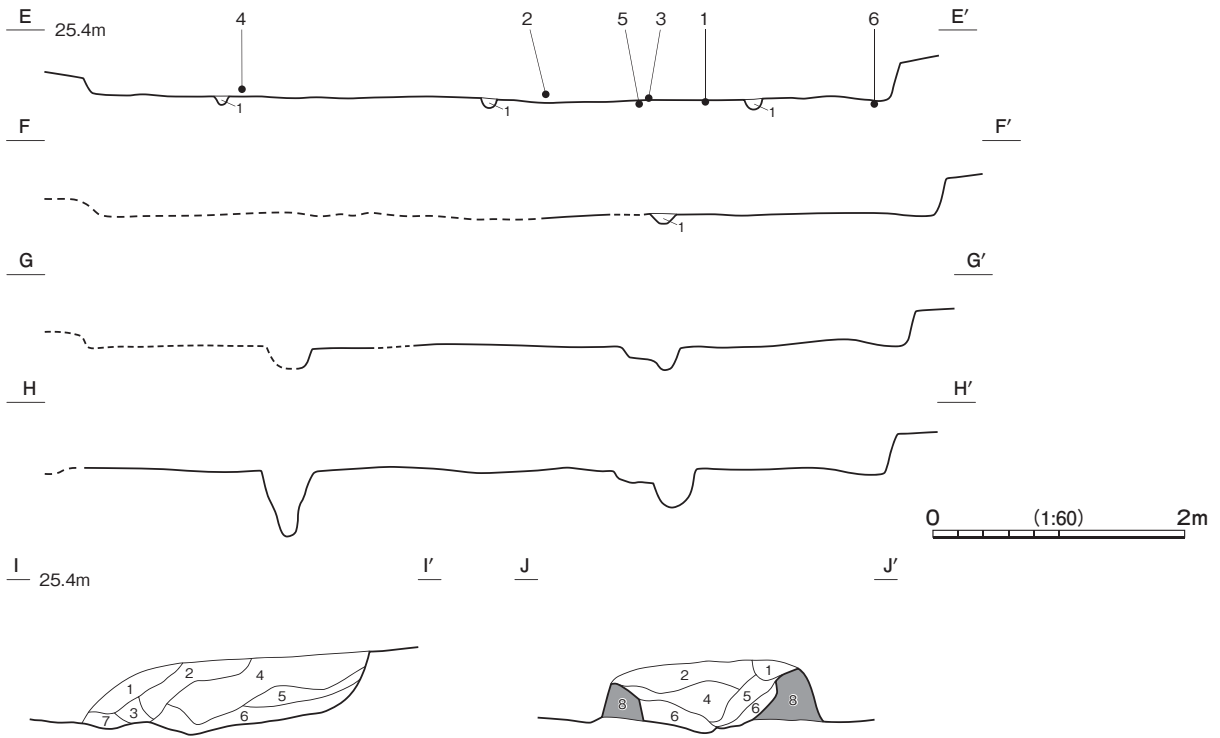
**間仕切り溝土層解説**

- 1 75YR3/3 暗褐 ローム粒B/粘B, 締B



第60図 第68号竪穴建物跡実測図(1)





**竪土層解説**

- |               |                                |              |                                |
|---------------|--------------------------------|--------------|--------------------------------|
| 1 75YR3/3 暗褐  | ローム粒C, 焼土小C・粒C, 炭化材D/粘B, 締B    | 5 75YR3/2 黒褐 | ローム粒D, 焼土小B, 炭化粒C              |
| 2 75YR3/4 暗褐  | ローム粒C, 焼土大B, 炭化粒C/粘B, 締B       | 6 75YR3/3 暗褐 | ローム小C, 焼土大C・小B・粒B, 炭化粒C/粘B, 締B |
| 3 75YR4/3 褐   | ローム中C, 焼土小B・粒B, 炭化物B/粘B, 締B    | 7 75YR3/4 暗褐 | ローム小C, 焼土中B・小C, 炭化物C/粘B, 締B    |
| 4 75YR2/3 極暗褐 | ローム小C, 焼土大C・粒B, 炭化物C・粒B/粘B, 締B | 8 75YR3/2 黒褐 | ローム小C, 焼土中B, 炭化粒C, 粘土粒C/粘B, 締B |

0 (1:30) 1m

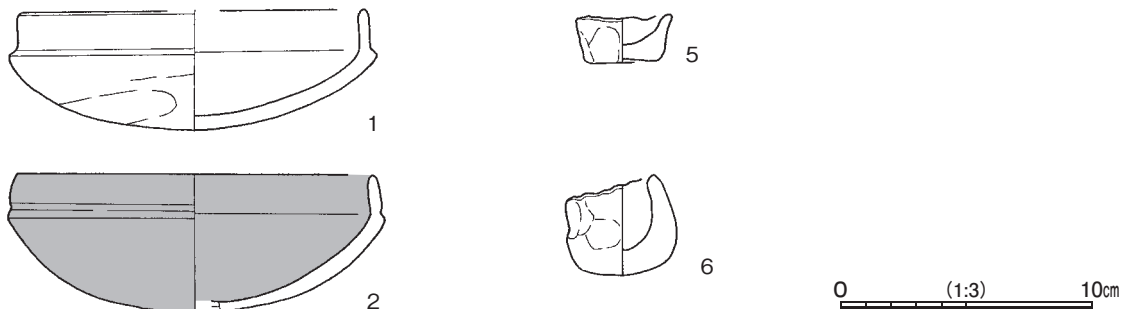
第 61 図 第 68 号竪穴建物跡実測図 (2)

**ピット** 4か所。P 1～P 4は深さ 10～22 cmで、配置から支柱穴と考えられる。

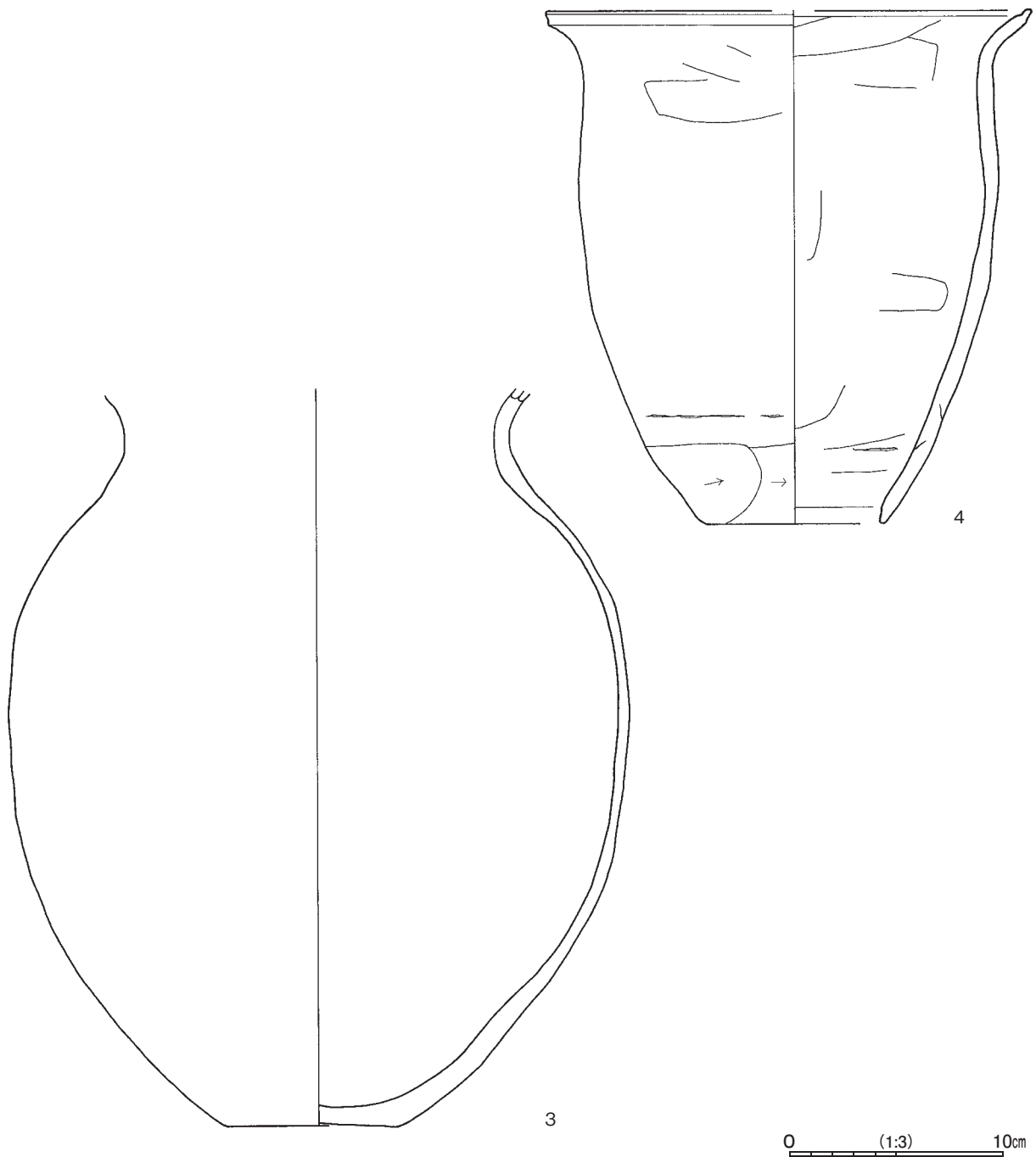
**覆土** 10層に分層できる。各層にロームブロックや焼土ブロック・炭化物が含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 201点 (坏7, 椀18, 高坏2, 小型甕3, 甕163, 甑5, ミニチュア土器1, 手捏土器2), 須恵器片5点 (坏1, 蓋1, 甕2, 甑1)が出土している。1・3・5・6は床面から出土しており, 3は中央部の床面から一括で出土した。2・4は覆土下層から出土しており, 4は焼土中から出土したものが接合した。

**所見** 時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。南東部を中心に焼土と炭化材が確認され, 焼失住居と考えられる。



第 62 図 第 68 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



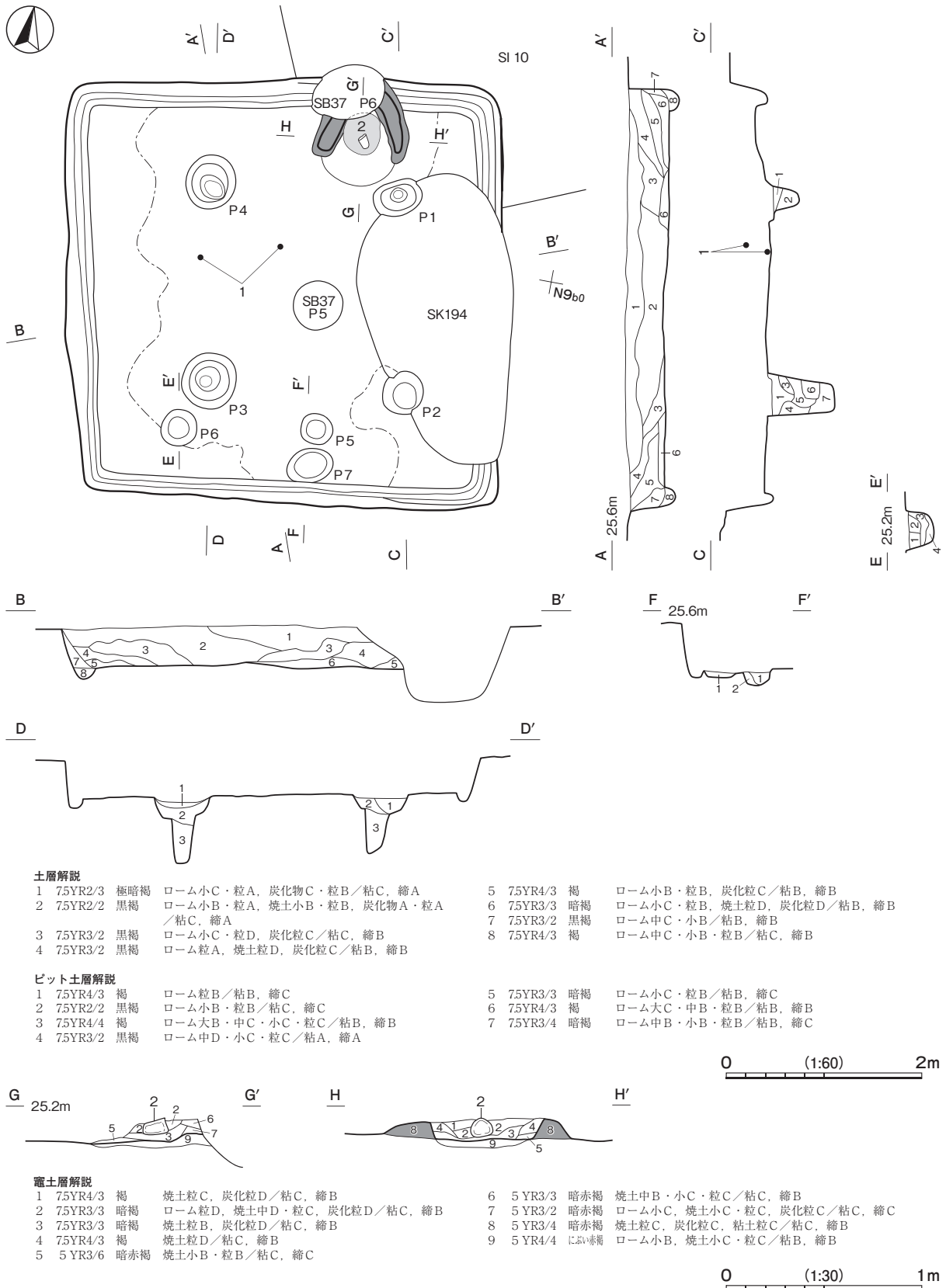
第 63 図 第 68 号 竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 34 表 第 68 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.5]	4.8	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	70%
2	土師器	坏	13.9	5.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面摩滅のため調整不明 全面黒色処理	覆土下層	90% PL34
3	土師器	甕	-	(34.6)	8.0	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面摩滅のため調整不明	床面	40%
4	土師器	甌	[22.6]	24.1	8.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	30% PL34 外面煤付着
5	土師器	手捏土器	3.5	1.9	2.9	長石・石英	橙	普通	外・内面指頭圧痕	床面	100% PL34
6	土師器	手捏土器	3.4	4.0	2.1	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	外・内面指頭圧痕	床面	100% PL34

第 73 号竪穴建物跡 (第 64・65 図 PL12)

位置 調査区南部の N 9b9 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 64 図 第 73 号竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第10号竪穴建物跡を掘り込み、第37号掘立柱建物、第194号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.46m、短軸4.30mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は32~38cmで、直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部を中心に硬化している。壁溝が全周している。

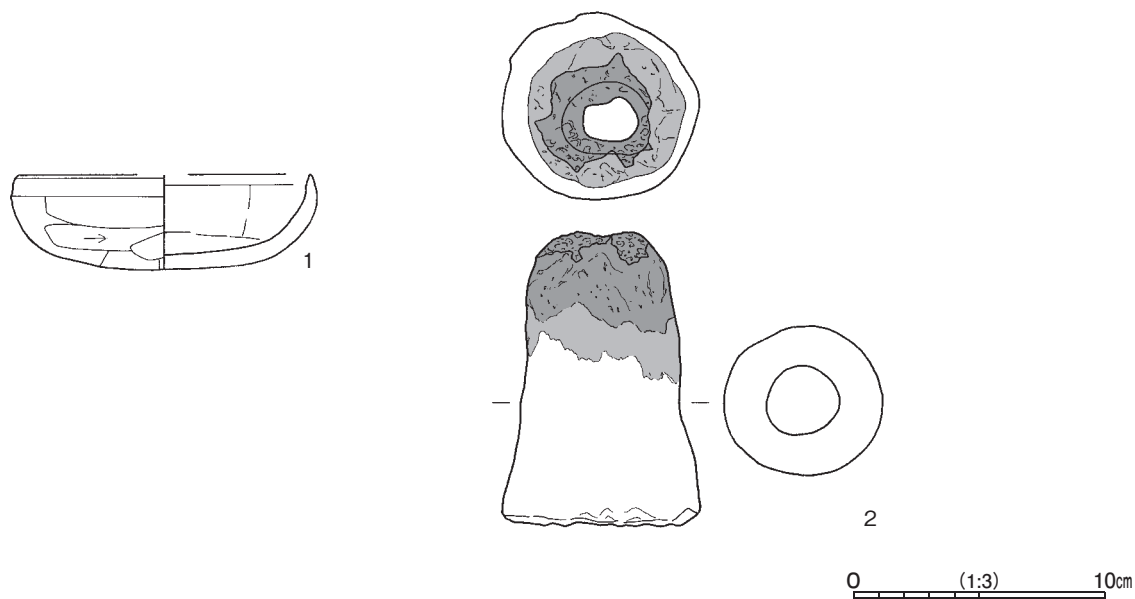
**竈** 北壁のやや東寄りに付設されている。第37号掘立柱建物に掘り込まれているため確認できた規模は、焚口部から火床部まで58cmで、燃焼部幅は65cmである。袖部は地山の上に焼土粒子や粘土粒子を含む第8層を積み上げて構築されている。火床部は床面を浅く掘りくぼめている。火床面は第9層上面で、赤変硬化している。

**ピット** 7か所。P1~P4は深さ35~70cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5・P7は、深さ5・14cmで、出入口施設に伴うピットである。P6は深さ30cmで、性格は不明である。

**覆土** 8層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片197点(坏18, 椀1, 高坏8, 壺1, 甕169), 須恵器片6点(蓋1, 瓶2, 甕3), 土製品2点(羽口)が出土している。1は、中央部の覆土下層と中層から出土した破片2点が接合したもので、住居廃絶時の埋土に混入したものと考えられる。2の羽口は、竈内の中央部火床面上から出土している。下部を平坦に再加工しており、羽口が支脚として転用されたものである。焚口部に向かって倒れて確認されており、据えられていた場所は特定できない。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第65図 第73号竪穴建物跡出土遺物実測図

第35表 第73号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[11.6]	3.7	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層・中層	30% PL35
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
2	支脚	11.8	7.8	7.4	457.09	長石・石英・雲母・細礫	橙	径7.8 孔径2.9 被熱痕	羽口を転用 先端部滓化	灰色 床面	PL45

第 75 号竪穴建物跡 (第 66・67 図 PL12)

位置 調査区南部の N 9e7 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 23 号掘立柱建物に掘り込まれている。

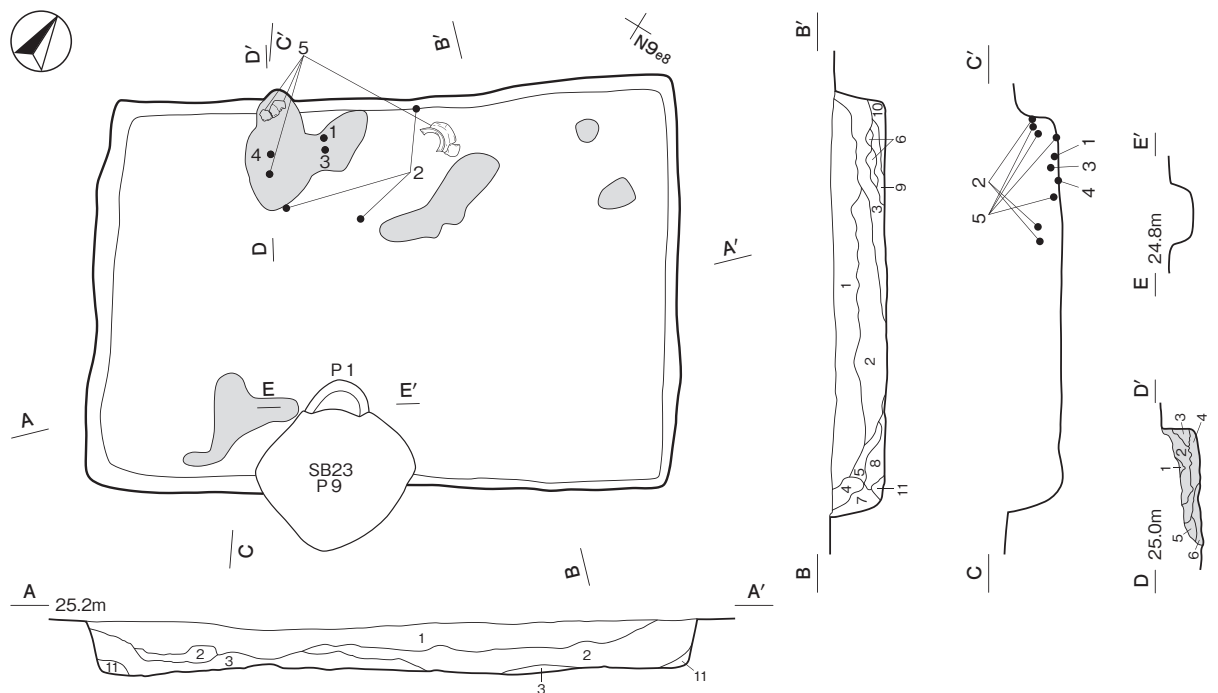
規模と形状 長軸 4.64 m, 短軸 3.16 m の長方形で, 主軸方向は N - 31° - W である。壁高は 36 ~ 44 cm で, 直立している。

床 ほぼ平坦で, 全面が硬化している。北壁際で焼土塊を確認した。

ピット P1 は深さ 25 cm で, 性格は不明である。

覆土 11 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ, 不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 117 点 (坏 15, 椀 1, 埴 13, 高坏 19, 壺 4, 小型甕 1, 甕 62, ミニチュア土器 1, 手捏土器 1), 須恵器片 2 点 (坏, 甕), 土製品 1 点 (土玉) が出土している。1・4 は北部焼土下の床面から出土している。これらは廃絶時に遺棄されたものと考えられる。3 は北部焼土中の覆土下層から出土している。5 は焼土の上, 覆土中層から下層にかけて出土した破片と床面から出土した破片が接合したものである。2 は北部の覆土中層から出土した破片 3 点が接合したものである。6 ~ 8 は覆土中からそれぞれ出土している。これらは, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

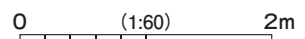


土層解説

1	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム粒B/粘B, 縮A	7	7.5YR3/2	黒褐色	ローム小C・粒B/粘A, 縮B
2	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム小B・粒B/粘B, 縮B	8	10YR2/2	黒褐色	ローム粒C/粘A, 縮A
3	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム粒B, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 縮A	9	5YR3/2	暗赤褐色	焼土小B・粒A/粘A, 縮A
4	7.5YR2/2	黒褐色	ローム粒D, 炭化粒D/粘A, 縮A	10	7.5YR3/3	暗褐色	ローム小B・粒B, 炭化物D・粒D/粘A, 縮B
5	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム小B・粒B/粘B, 縮B	11	7.5YR4/3	褐色	ローム小A・粒B/粘A, 縮A
6	7.5YR2/2	暗褐色	ローム粒C/粘A, 縮A				

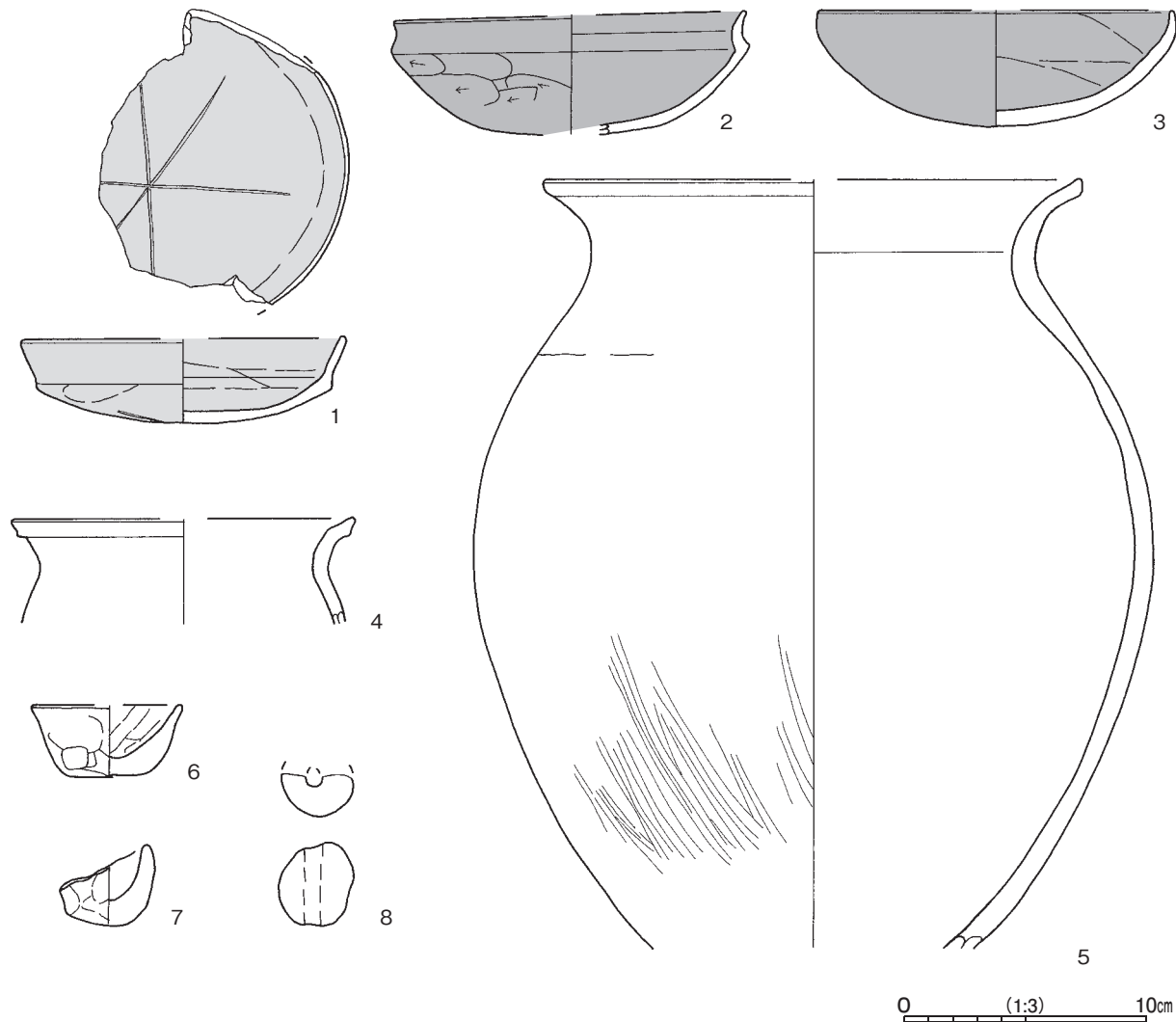
焼土土層解説

1	5YR2/2	黒褐色	焼土小B, 炭化粒C/粘D, 縮C	4	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム小C・粒B, 焼土中D・粒C/粘B, 縮B
2	5YR3/3	暗赤褐色	焼土大B・中B・小A・粒A/粘D, 縮A	5	5YR4/3	暗赤褐色	ローム粒C, 焼土大C・粒B/粘B, 縮B
3	5YR3/2	暗赤褐色	焼土粒C/粘D, 縮C	6	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム粒C, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 縮A



第 66 図 第 75 号竪穴建物跡実測図

所見 ピットが1か所確認できた以外は、主だった施設は確認できなかったことから、簡易な作業場や倉庫の可能性が高い。北壁際で確認した焼土塊は、床面まで火熱を受けていることと、出土土器にも被熱痕が見られることから、建物廃絶後に火を焚いたものと考えられる。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



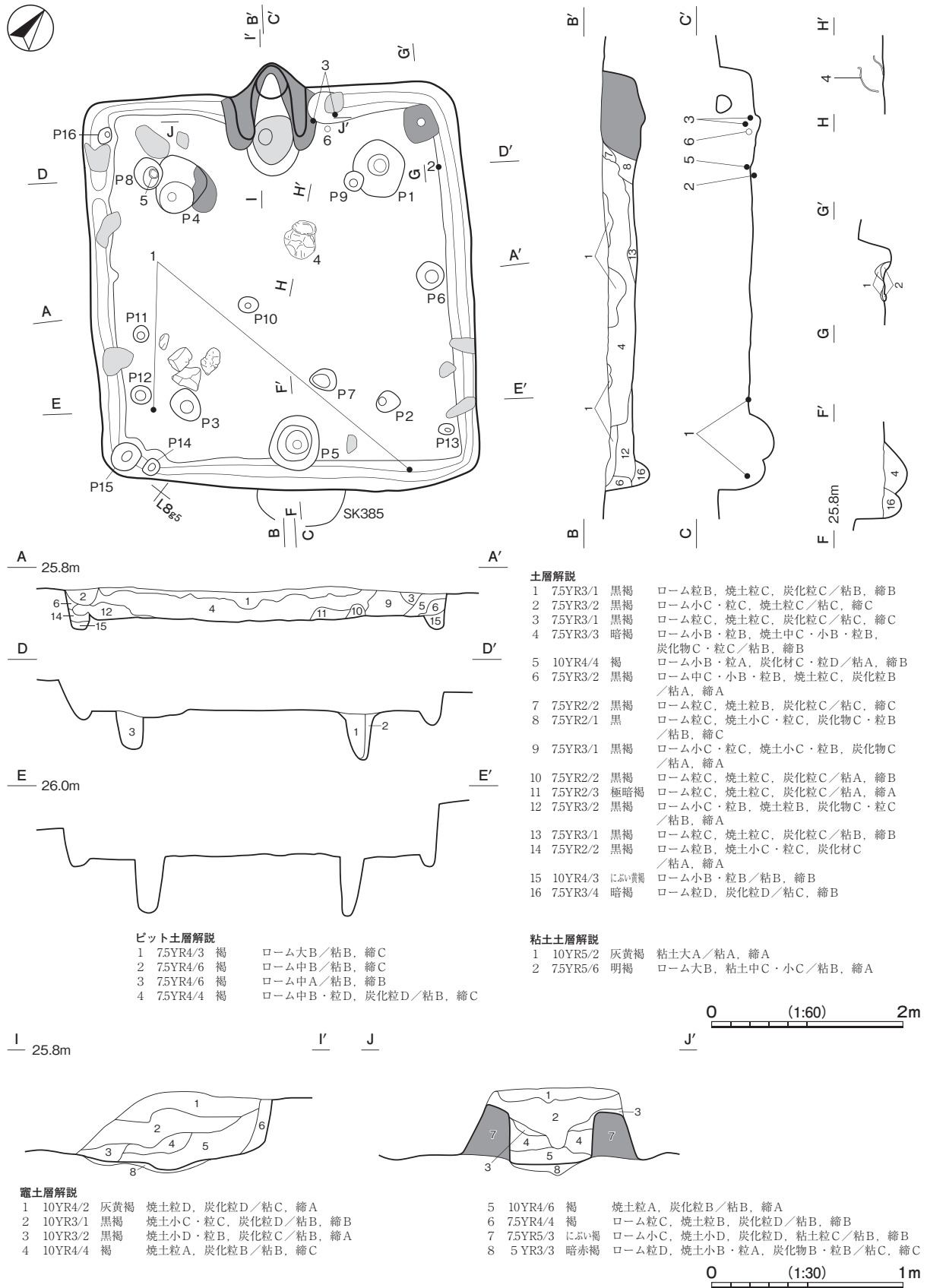
第 67 図 第 75 号 竪穴建物跡出土遺物実測図

第 36 表 第 75 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.2]	3.5	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 内面底部線刻あり 全面赤彩	床面	40% PL35 外面煤付着
2	土師器	坏	[14.5]	5.1	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ 全面黒色処理	覆土中層	30% PL35
3	土師器	坏	[14.4]	4.8	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	80% PL35
4	土師器	小型甕	[14.0]	(4.4)	-	長石・石英	赤橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面摩擦により調整 不明 体部内面ナデ	床面	5%
5	土師器	甕	[22.0]	(31.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下位に縦位のへら磨き 内面ナデ	覆土中層 ～下層	40% 外面煤付着
6	土師器	ミニチュア土器	[6.2]	3.0	3.8	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	50% PL35
7	土師器	手捏土器	3.9	3.3	-	長石	にぶい橙	普通	外・内面指頭圧痕	覆土中	100% PL35
番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
8	土玉	3.0	3.4	0.8	(16.71)	長石・赤色粒子	にぶい褐	外面ナデ 穿孔		覆土中	PL45

第 79 号 竪穴建物跡 (第 68 ~ 70 図 PL13)

位置 調査区中央部の L 8 f4 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 68 図 第 79 号 竪穴建物跡実測図

**重複関係** 第385号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸4.20m、短軸3.96mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ22~52cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。壁際の覆土下層で焼土を確認した。

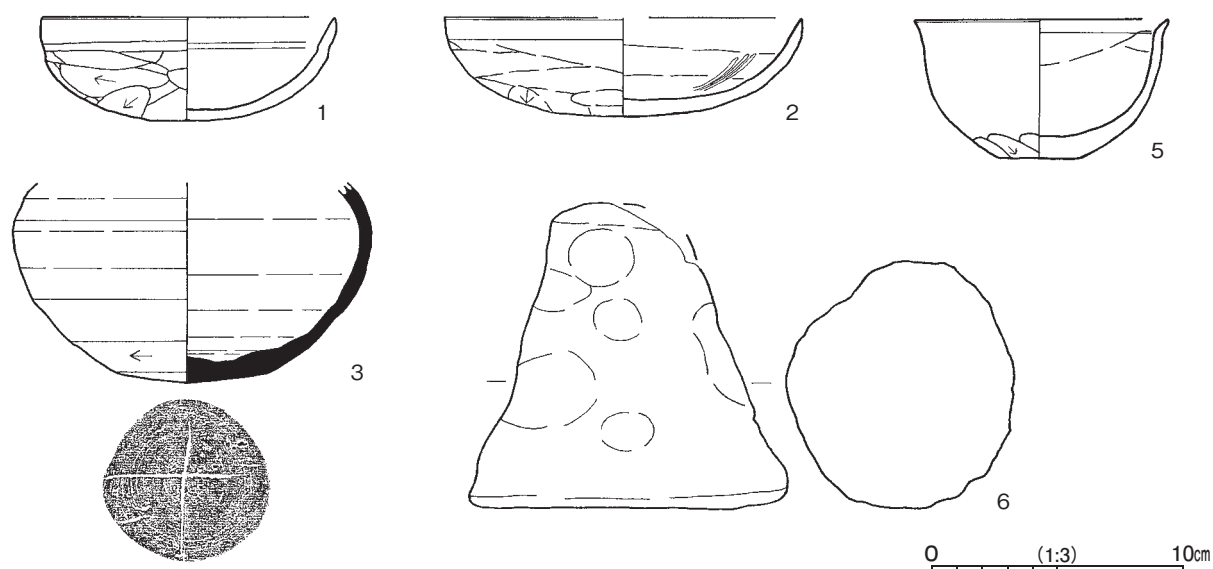
**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部の幅は44cmである。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、焼土ブロックや炭化物を含む第8層を埋土して整地した後、袖部はロームブロックや粘土粒子を含む第7層を積み上げて構築されている。火床部はやや凹凸があり、火床面は第8層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に27cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、奥壁ではほぼ直立している。

**ピット** 16か所。P1~P4は深さ35~65cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、出入口施設に伴うピットである。P6~P16は深さ9~22cmで、性格は不明である。

**覆土** 16層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

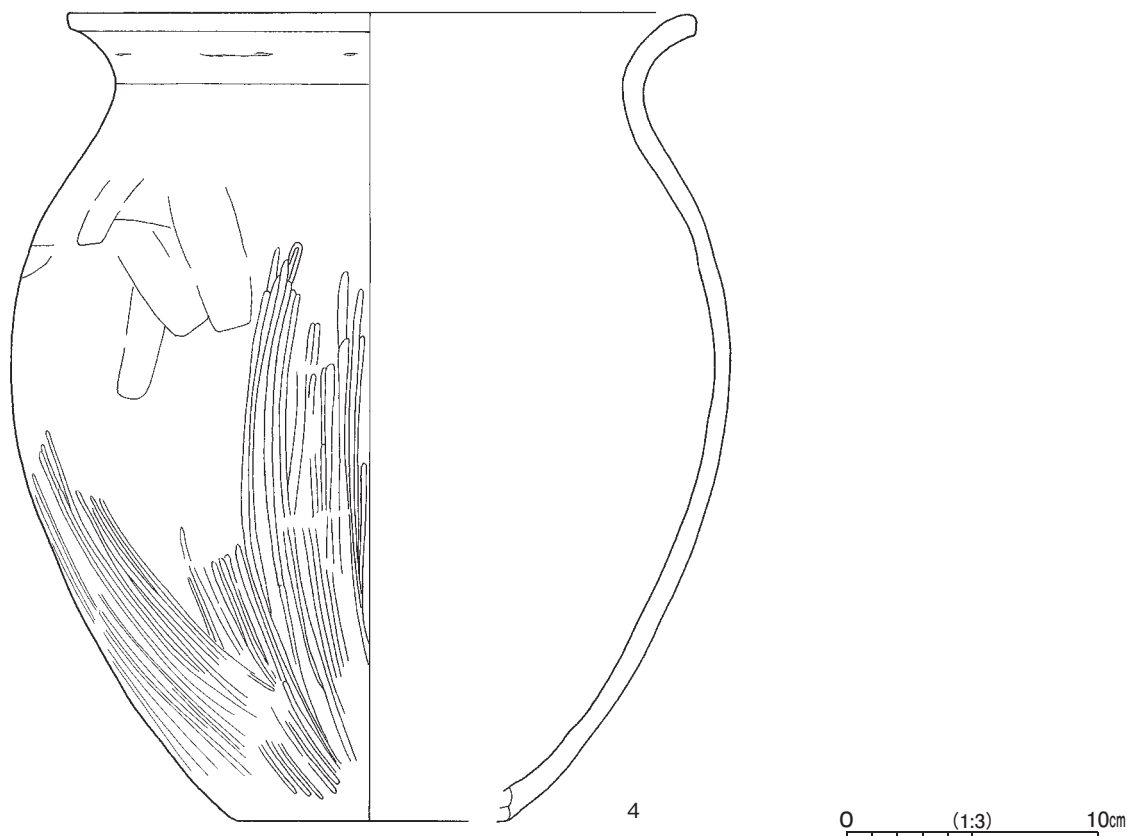
**遺物出土状況** 土師器片183点(坏28, 埴1, 高坏3, 鉢1, 壺8, 甕140, 甑1, ミニチュア土器1), 須恵器片2点(短頸壺), 土製品1点(支脚), 金属製品1点(釘)が出土している。1は南コーナー部と東コーナー部の床面と壁溝から出土した破片2点が接合したものである。2は北コーナー部, 4は竈前面の床面から出土しており, 建物が廃絶した際に遺棄されたものと考えられる。3・5・6は覆土下層から, 3・6は竈の右袖の東からそれぞれ出土している。いずれも埋め戻される過程で混入したものと思われる。北コーナー部及びP8付近の床面から粘土塊を, また, 中央部では火熱を受けた礫群を確認した。床面が火熱を受けていないことから, これらは廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第69図 第79号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)





第 70 図 第 79 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 37 表 第 79 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	11.6	4.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	床面	90% PL35 口縁部外・内面煤付着
2	土師器	坏	[14.1]	3.9	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 一部ヘラ磨き	床面	70% PL35
3	須恵器	短頸壺	-	(8.0)	6.2	長石	灰	普通	外・内面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底面ヘラ書き	覆土下層	30% PL35
4	土師器	甕	24.8	32.1	[11.0]	長石・石英・雲母・礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 体部内面ナデ	床面	90% PL35 外面一部煤付着
5	土師器	ミニチュア土器	10.0	4.1	3.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	95% PL35 外・内面一部煤付着
番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
6	支脚	12.1	(4.4)	12.6	(1.08) kg	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	指頭痕 被熱痕	覆土下層	PL45	

### 第 82 号竪穴建物跡 (第 71 図 PL13)

**位置** 調査区南部の M9f1 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 5 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 4.45 m, 短軸 3.46 m の長方形で, 主軸方向は N - 62° - E である。上面が削平を受けているため, 壁の高さは 4 cm である。

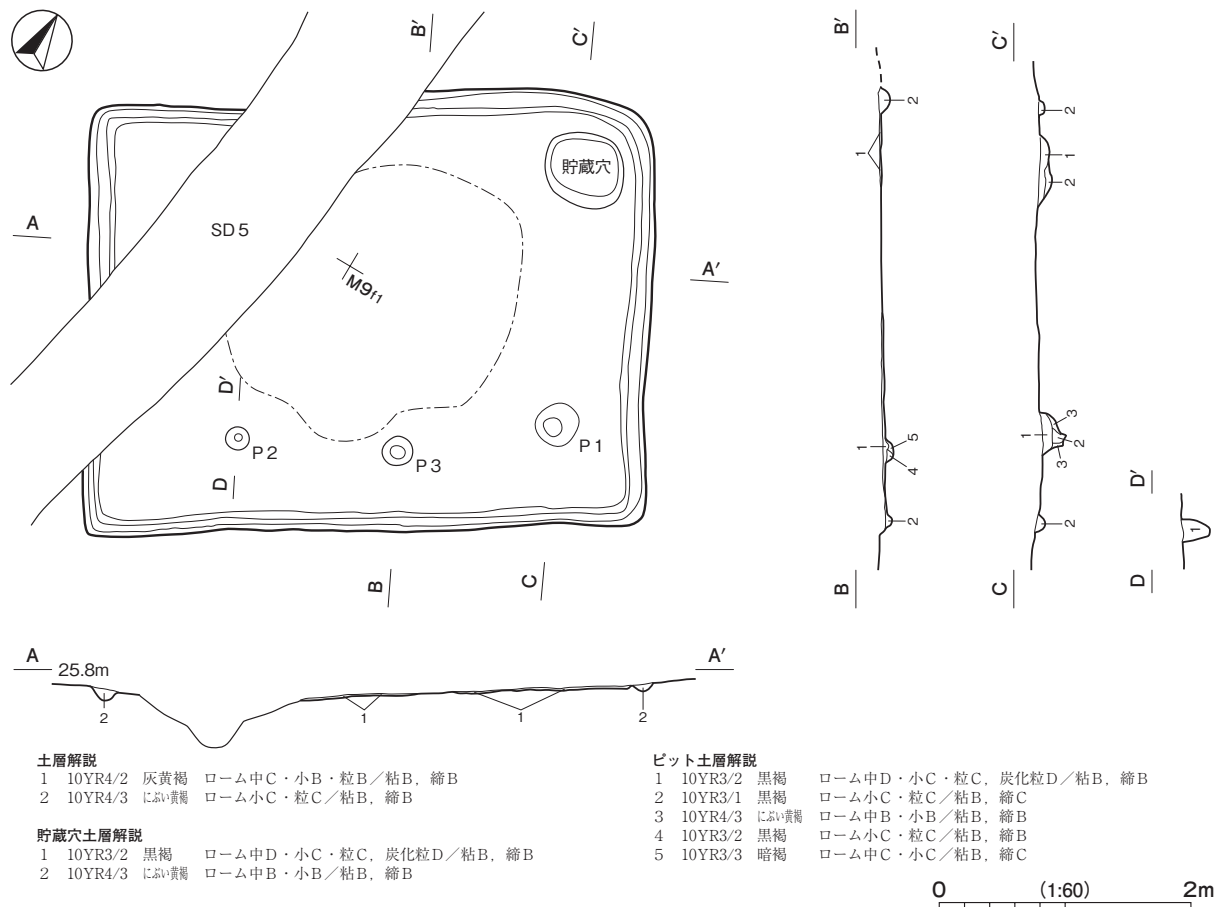
**床** 平坦で, 中央部が硬化している。壁溝が全周している。

**ピット** 3 か所。P 1・P 2 は深さ 20 cm・22 cm で, 規模や配置から主柱穴と考えられる。P 3 は深さ 10 cm で, 性格は不明である。

**貯蔵穴** 北東コーナー部に位置している。長径 70 cm, 短径 60 cm の楕円形で, 深さは 11 cm である。底面は凹凸があり, 壁は外傾している。

**覆土** 確認できた覆土が薄く、堆積状況は不明である。

**所見** 遺物は出土していないが、主軸方向や内部施設の状況が5世紀前葉の第75号竪穴建物跡に近似しており、同時期と考えられる。



第71図 第82号竪穴建物跡実測図

### 第84号竪穴建物跡 (第72～74図 PL13)

**位置** 調査区中央部のM8d9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第19号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.64m、短軸3.60mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は20～28cmで、直立している。

**床** 平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。壁溝は西壁の一部を除いて回っている。

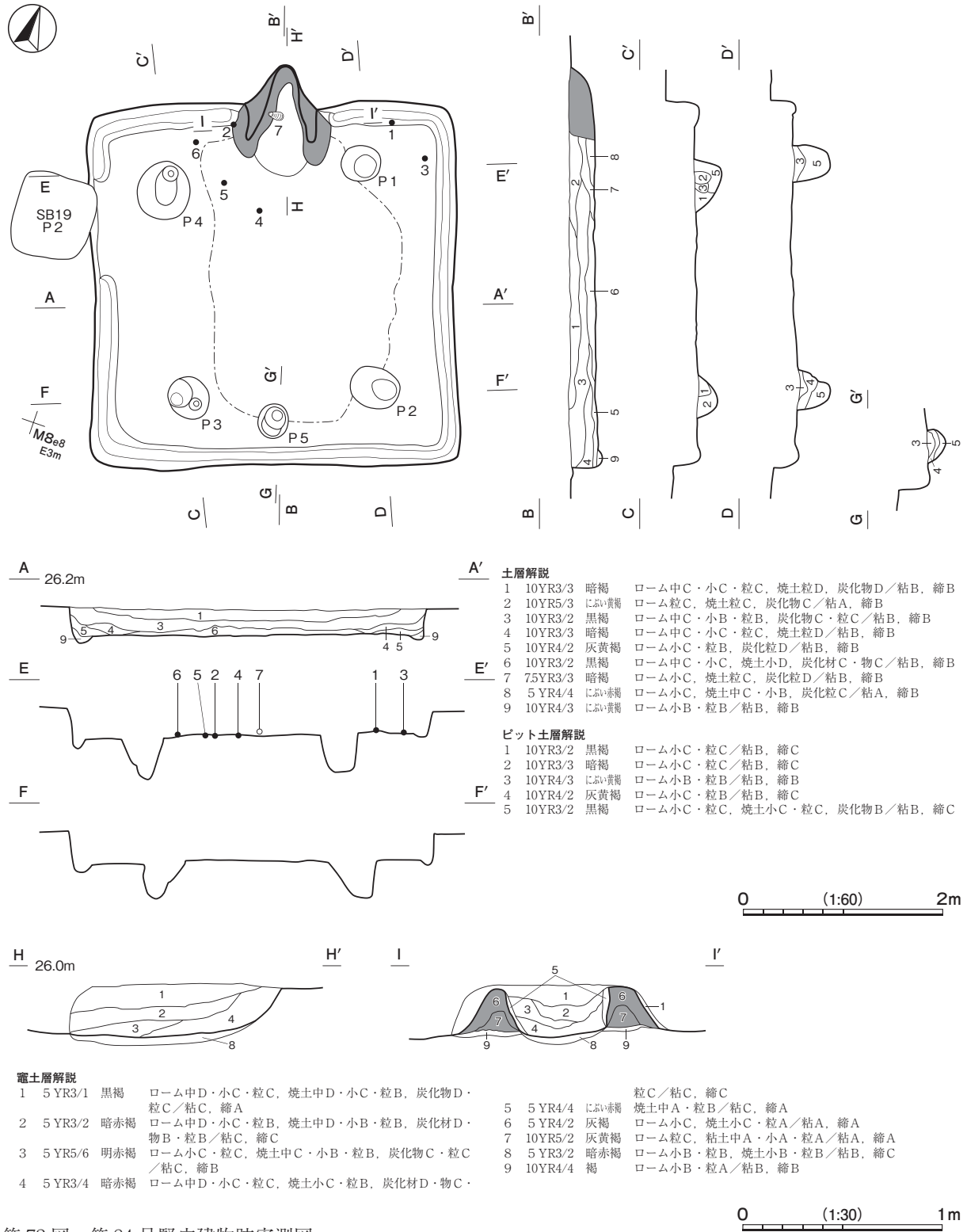
**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで110cmで、燃烧部幅は55cmである。竈は袖部の基部を作った後、焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第8・9層を埋土して整地し、袖部をロームブロックや粘土ブロックを含む第6・7層を積み上げて構築している。火床部は床面と同じ高さを使用したと考えられるが、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に42cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ34～42cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、出入口施設に伴うピットである。第1層から第5層は抜きとり後の覆土である。

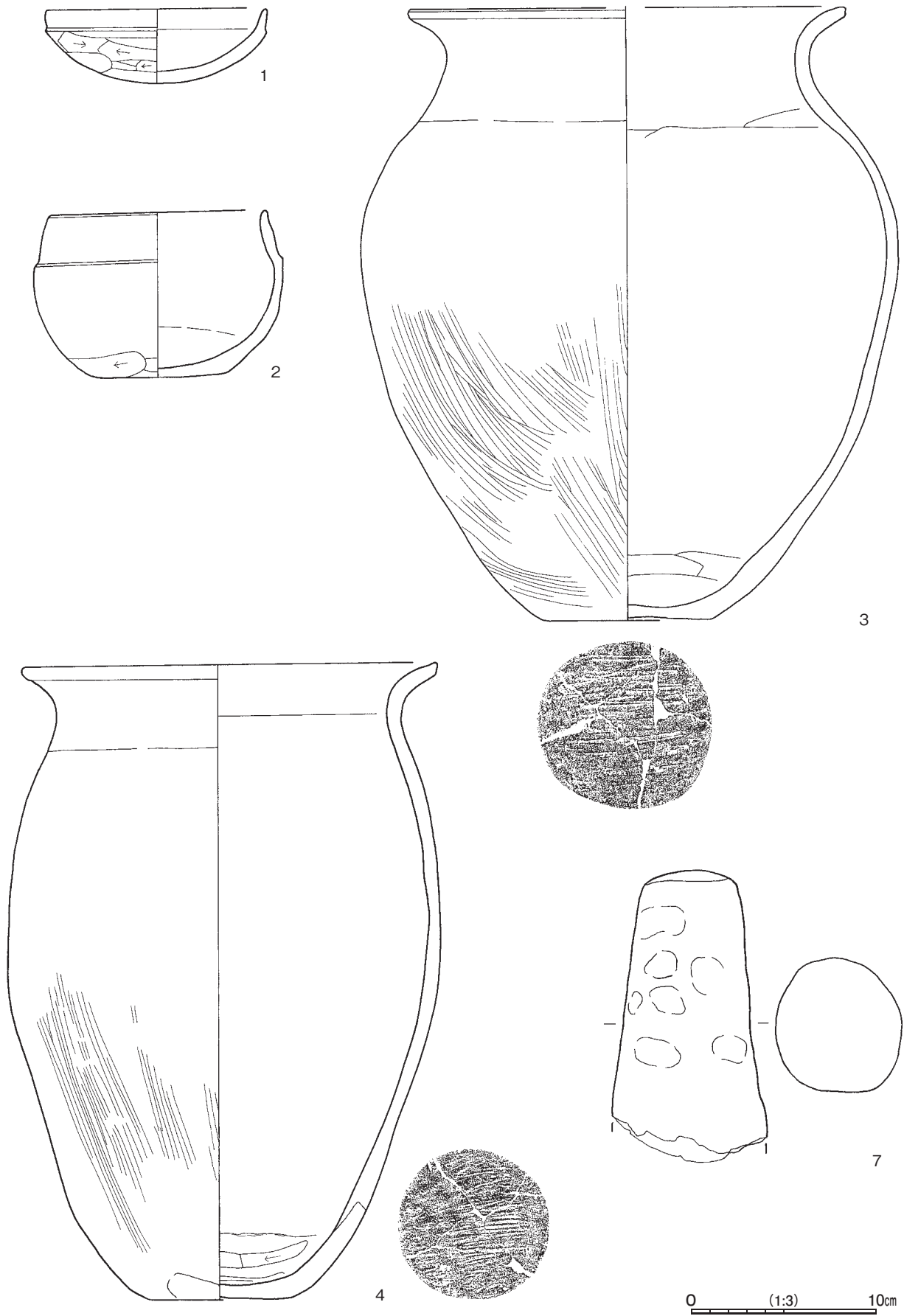
**覆土** 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 35 点 (坏 4, 椀 1, 高坏 4, 甕 24, 甌 2), 土製品 1 点 (支脚) が出土している。1・3 は覆土下層から出土しており, 建物が埋没する過程で廃棄されたものと考えられる。2・4~6 は床面から, 7 は竈に据えられた状態で出土している。これらの遺物は残存率が高いものが多く, 建物の廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

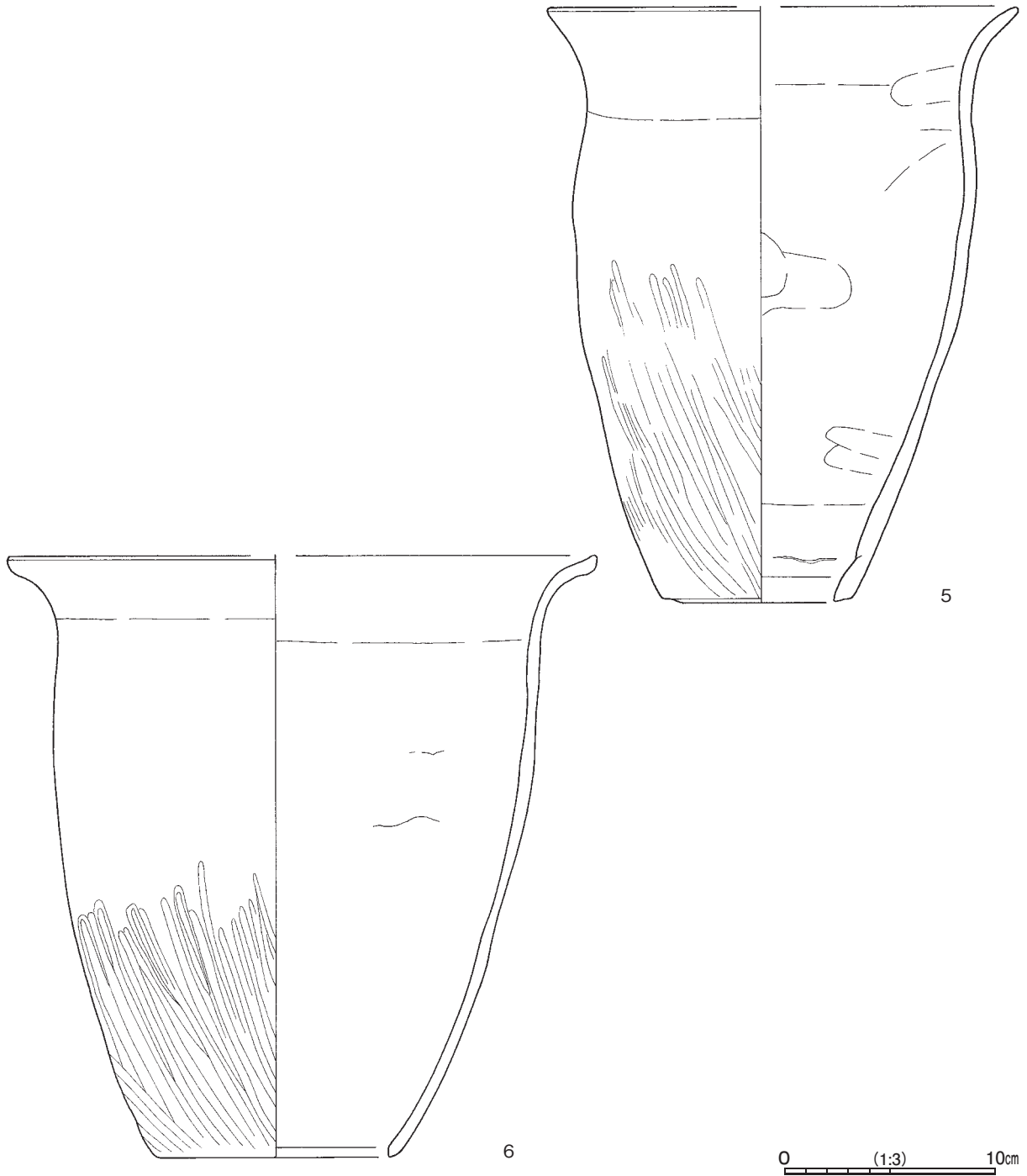
**所見** 時期は, 出土土器から 6 世紀中葉と考えられる。



第 72 図 第 84 号竈穴建物跡実測図



第73图 第84号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 74 図 第 84 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 38 表 第 84 号竪穴建物跡出土遺物一覽

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	11.8	4.0	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	70% PL37 口縁部外・内面煤付着
2	土師器	椀	11.7	9.0	6.7	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	80% PL37
3	土師器	甕	[23.5]	33.1	8.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 体部内面ナデ	覆土下層	60% PL36 外面一部煤付着
4	土師器	甕	22.3	34.4	7.8	長石・石英・雲母・礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 内面上位ナデ 下位ヘラ削り後ナデ	床面	90% PL36 外・内面煤付着
5	土師器	甕	[21.9]	28.2	[7.5]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 体部内面ナデ	床面	60% PL36 外面一部煤付着
6	土師器	甕	[27.5]	28.5	11.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 体部内面ナデ	床面	80% PL36 外・内面一部煤付着

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	支脚	(15.7)	5.4	(8.4)	(73&1)	長石・石英・赤色粒子	橙	指頭痕 被熱痕	竈火床面	PL45

### 第85号竪穴建物跡 (第75図 PL13)

**位置** 調査区中央部のM 8 d7区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第19号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.26m, 短軸3.08mの長方形で, 主軸方向はN-35°-Wである。壁高は8~17cmで, 外傾して立ち上がっている。

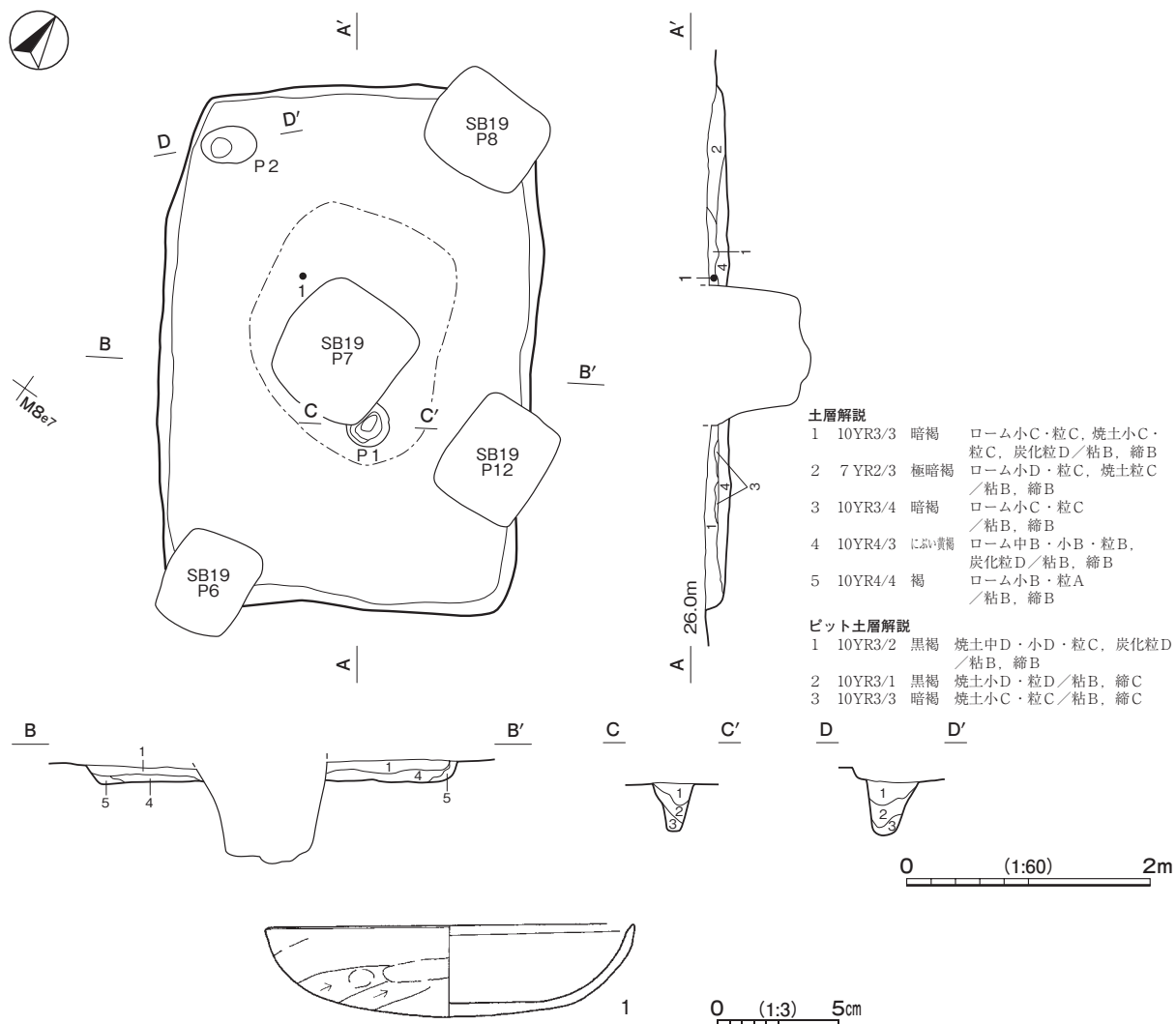
**床** 平坦で, 中央部が硬化している。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ40cm・45cmで, 性格は不明である。

**覆土** 5層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ, 不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片10点(坏4, 甕6), 須恵器片1点(坏)が出土している。1は覆土中層から出土しており, 埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 簡易的な作業場か倉庫であった可能性が高い。時期は, 出土土器から6世紀後半と考えられる。



第75図 第85号竪穴建物跡・出土遺物実測図

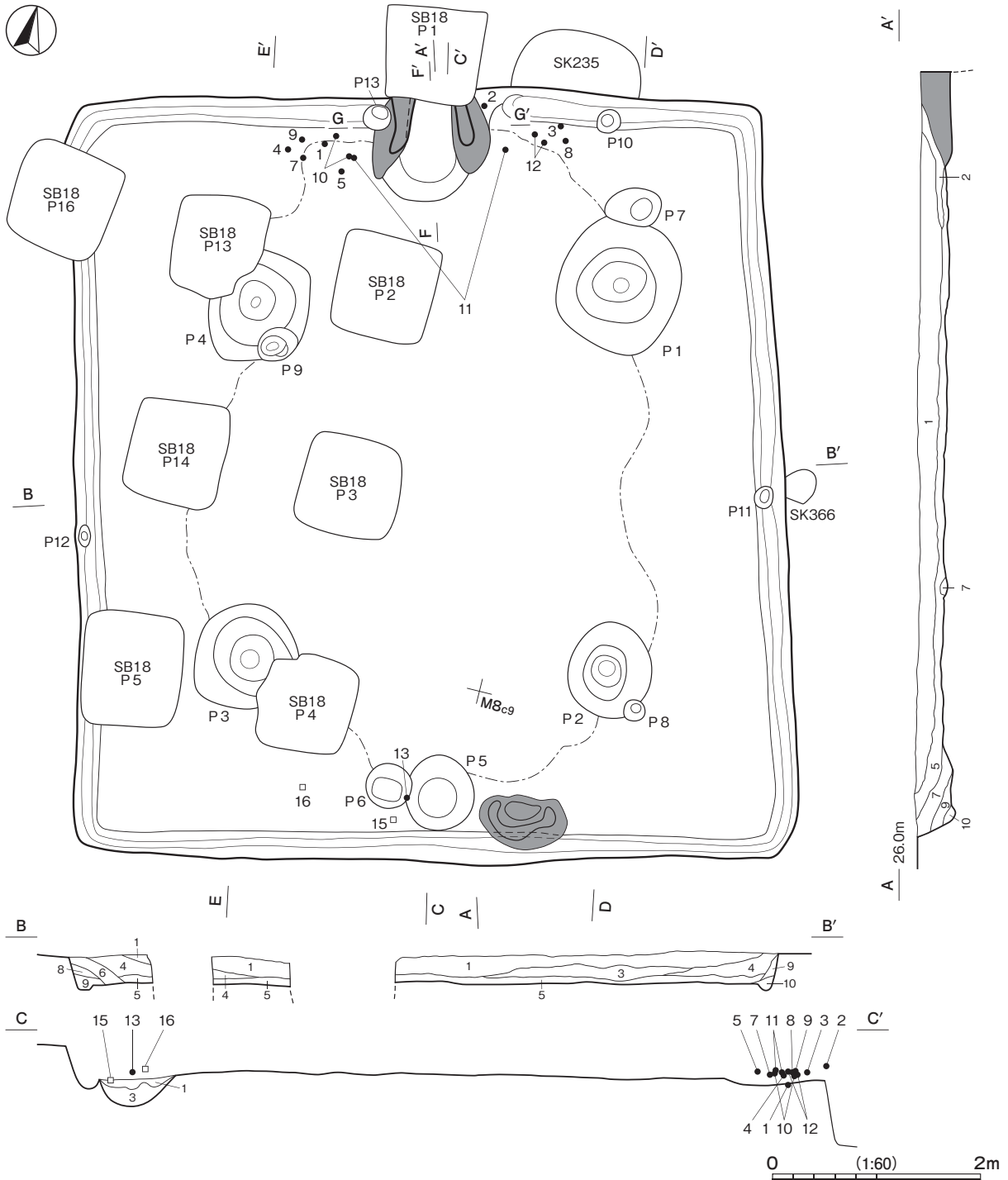
第 39 表 第 85 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.1	3.9	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土中層	70% PL37

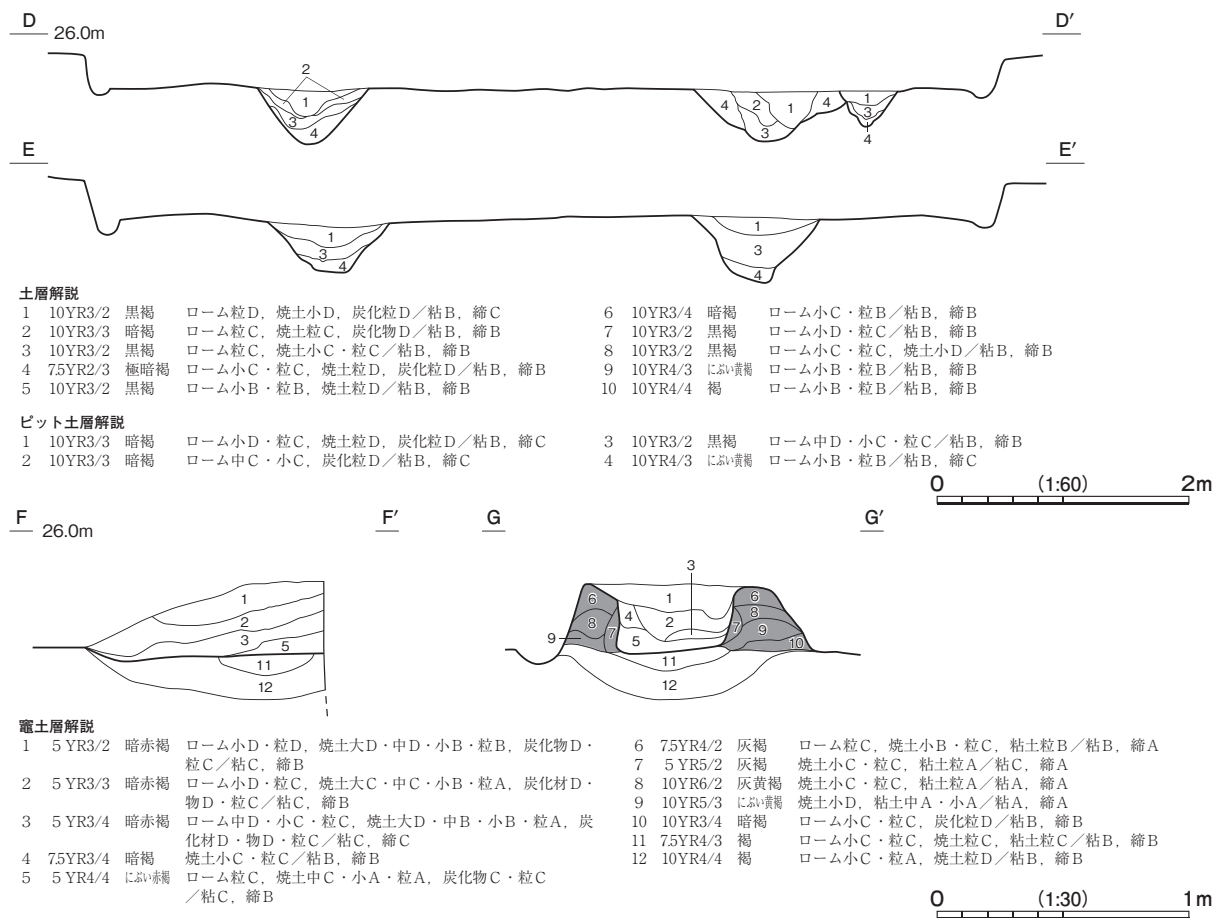
第 86 号竪穴建物跡 (第 76 ~ 79 図 PL13)

位置 調査区中央部の M 8 b 8 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 235・366 号土坑を掘り込み, 第 18 号掘立柱建物に掘り込まれている。



第 76 図 第 86 号竪穴建物跡実測図 (1)



第 77 図 第 86 号 竪穴建物跡実測図 (2)

**規模と形状** 長軸 7.24 m, 短軸 6.76 m の方形で, 主軸方向は N - 15° - W である。壁の高さは 24 ~ 28 cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦で, 竈前面から中央部を中心に出入口付近まで踏み固められている。壁溝が全周している。出入口ピット東側の床面で粘土塊を確認した。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。第 18 号掘立柱建物の P 1 によって掘り込まれ, 北半分が壊されている。燃烧部幅は 50 cm である。焚口部から掘りくぼめ, 第 11・12 層を埋土して整地した後, 袖部はロームブロックや粘土ブロックを含む第 6 ~ 10 層を積み上げて構築されている。明確な火床部は確認できなかった。

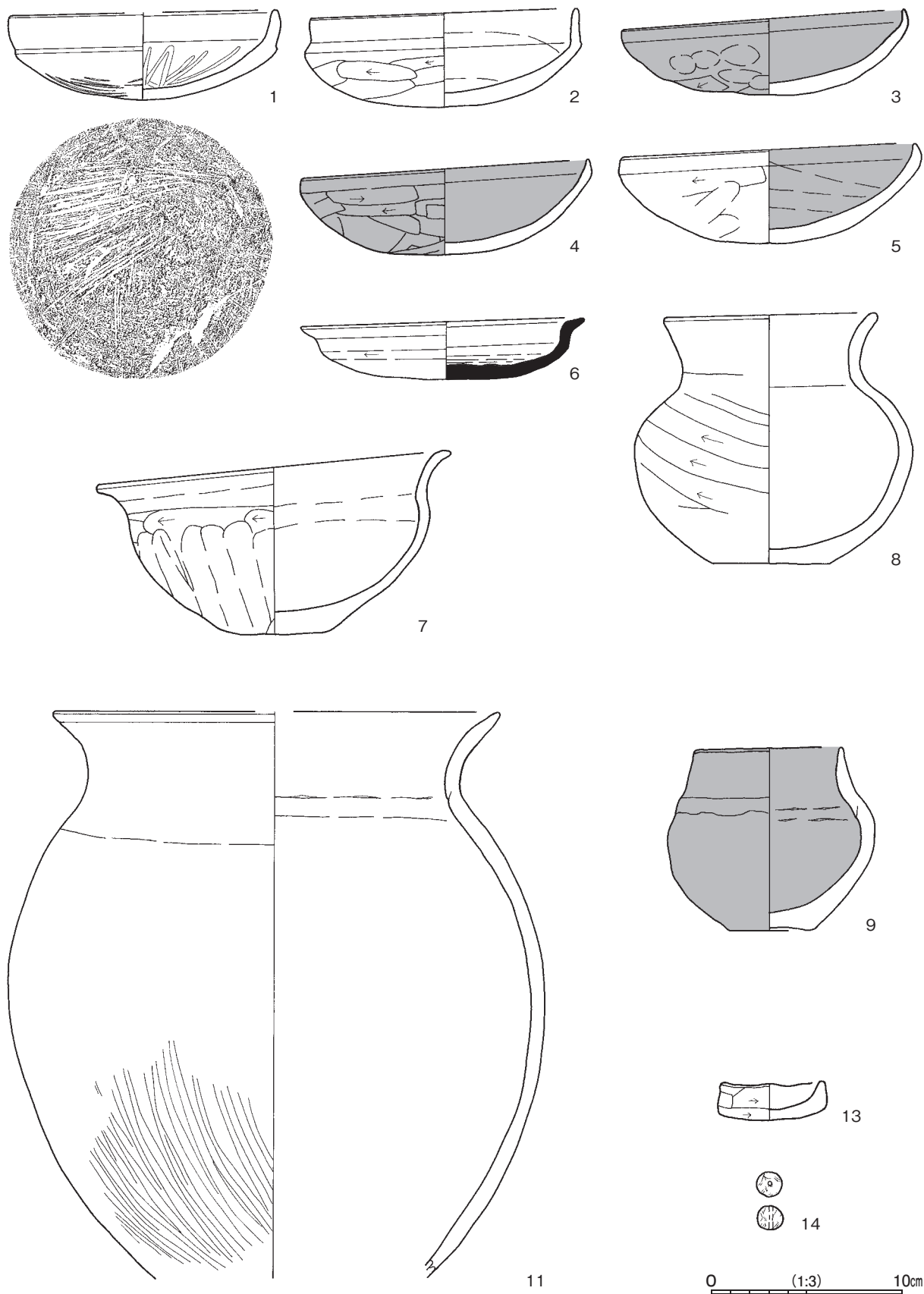
**ピット** 13 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 40 ~ 51 cm で, 規模や配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6 はいずれも深さ 25 cm で, 出入口施設に伴うピットである。P 7 ~ P 13 は深さ 12 ~ 49 cm で, 性格は不明である。

**覆土** 10 層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており, 自然堆積である。

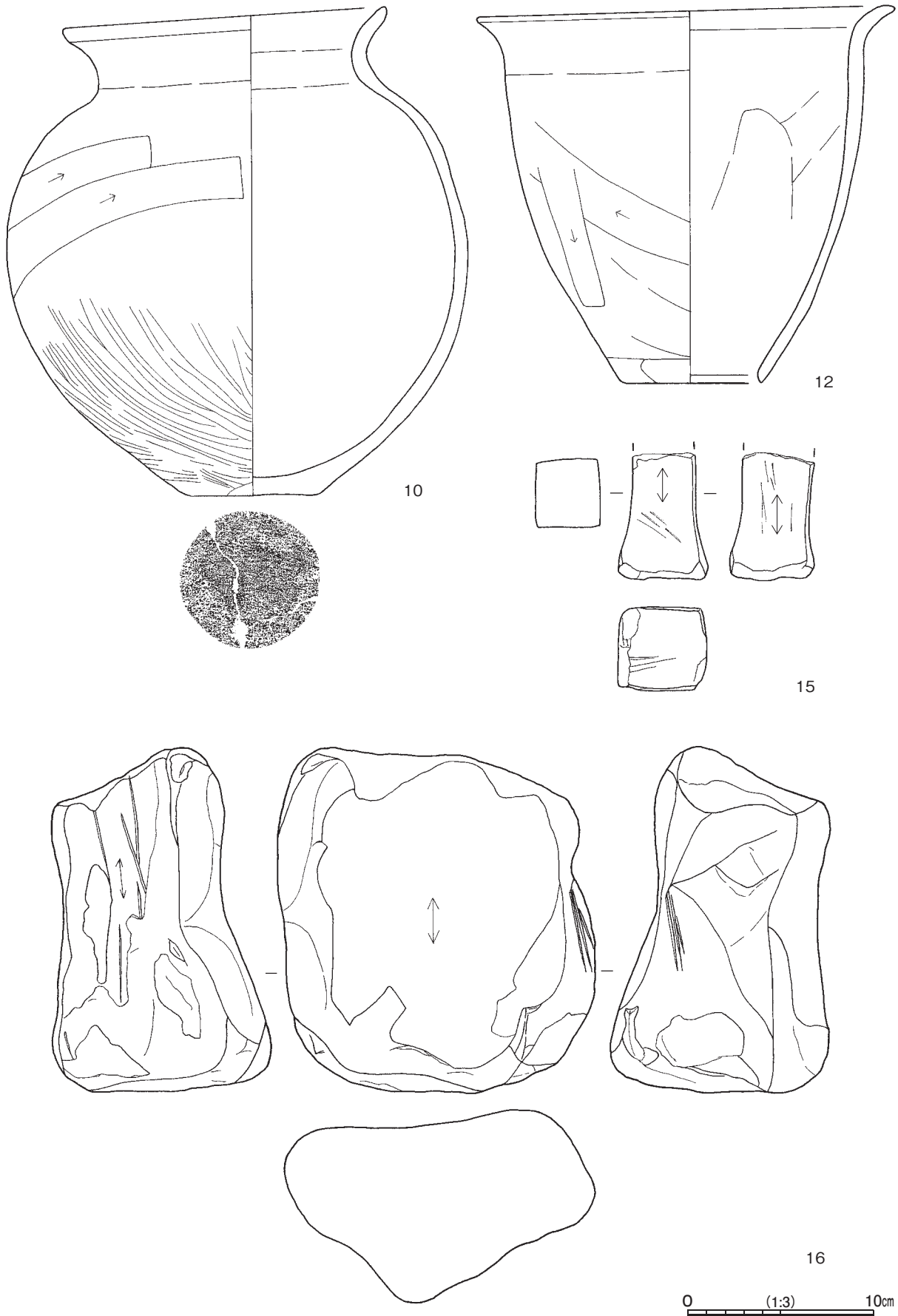
**遺物出土状況** 土師器片 159 点 (坏 57, 埴 1, 高坏 22, 鉢 1, 壺 14, 小型甕 1, 甕 57, 甌 4, 手捏土器 2), 須恵器片 1 点 (坏), 土製品 1 点 (土玉), 石器 2 点 (砥石), 鉄滓 1 点 (19.10 g) が出土している。1 は床面から出土しており, 建物が廃絶した際に遺棄されたものと考えられる。3 ~ 5・7 ~ 13・15・16 は覆土下層から, 2 は覆土中層から, 6・14 は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも埋没する過程で投棄されたものと思われる。

**所見** 時期は, 出土土器から 6 世紀後半と考えられる。出入口ピット東側の粘土塊は, 建物廃絶に際して遺棄されたものと考えられるが, 性格は不明である。





第 78 图 第 86 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第79图 第86号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 40 表 第 86 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.0]	4.7	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ後ヘラ磨き 底部砥石として利用	床面	95% PL37 外面一部煤付着
2	土師器	坏	13.8	5.2	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土中層	90% PL37 外・内面一部煤付着
3	土師器	坏	14.8	4.5	-	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 指頭圧痕 内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	100% PL37
4	土師器	坏	14.9	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	95% PL37 外面一部煤付着
5	土師器	坏	15.3	5.3	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 内面黒色処理	覆土下層	100% PL37 外面一部煤付着
6	須恵器	坏	15.0	3.3	-	長石	灰	普通	外・内面クロコナデ	覆土中	80% PL37
7	土師器	鉢	18.2	9.5	4.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後縦位のナデ 内面ナデ	覆土下層	90% PL37 外・内面一部煤付着
8	土師器	壺	11.0	13.2	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL37 内面煤付着
9	土師器	小型甕	7.6	9.6	4.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	95% PL37
10	土師器	甕	17.1	26.3	6.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ヘラ削り後ナデ 下位縦位のヘラ磨き 内面上位ナデ	覆土下層	80% PL37 外面一部煤付着
11	土師器	甕	[23.2]	(29.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位縦位のヘラ磨き 内面ナデ	覆土下層	50% 外面一部煤付着
12	土師器	甗	22.1	20.4	7.4	長石・石英・赤色粒子・礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL38 外・内面一部煤付着
13	土師器	手捏土器	5.2	2.1	5.3	長石	浅黄橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	100% PL37 外・内面煤付着

番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
14	土玉	1.4	1.2	0.2	(2.16)	砂粒	灰黄褐	外面ナデ 穿孔	覆土中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	砥石	(6.9)	4.8	4.5	(202.19)	硬質砂岩	砥面5面	覆土下層	PL47
16	砥石	18.7	17.1	11.7	4.31kg	砂岩	砥面3面	覆土下層	

第 87 号竪穴建物跡 (第 80・81 図 PL14)

**位置** 調査区中央部の M 8 b5 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 261 号土坑を掘り込み, 第 308 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 7.44 m, 短軸 7.40 m の方形で, 主軸方向は N - 40° - W である。壁の高さは 20 ~ 40 cm で, 外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で, 硬化面は南コーナー付近に確認した。壁溝が全周している。

**炉** 中央部北寄りに付設されている。長径 115 cm, 短径 65 cm ほどの楕円形を呈する地床炉である。床面から 10 cm ほど皿状に掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて, 赤変硬化している。

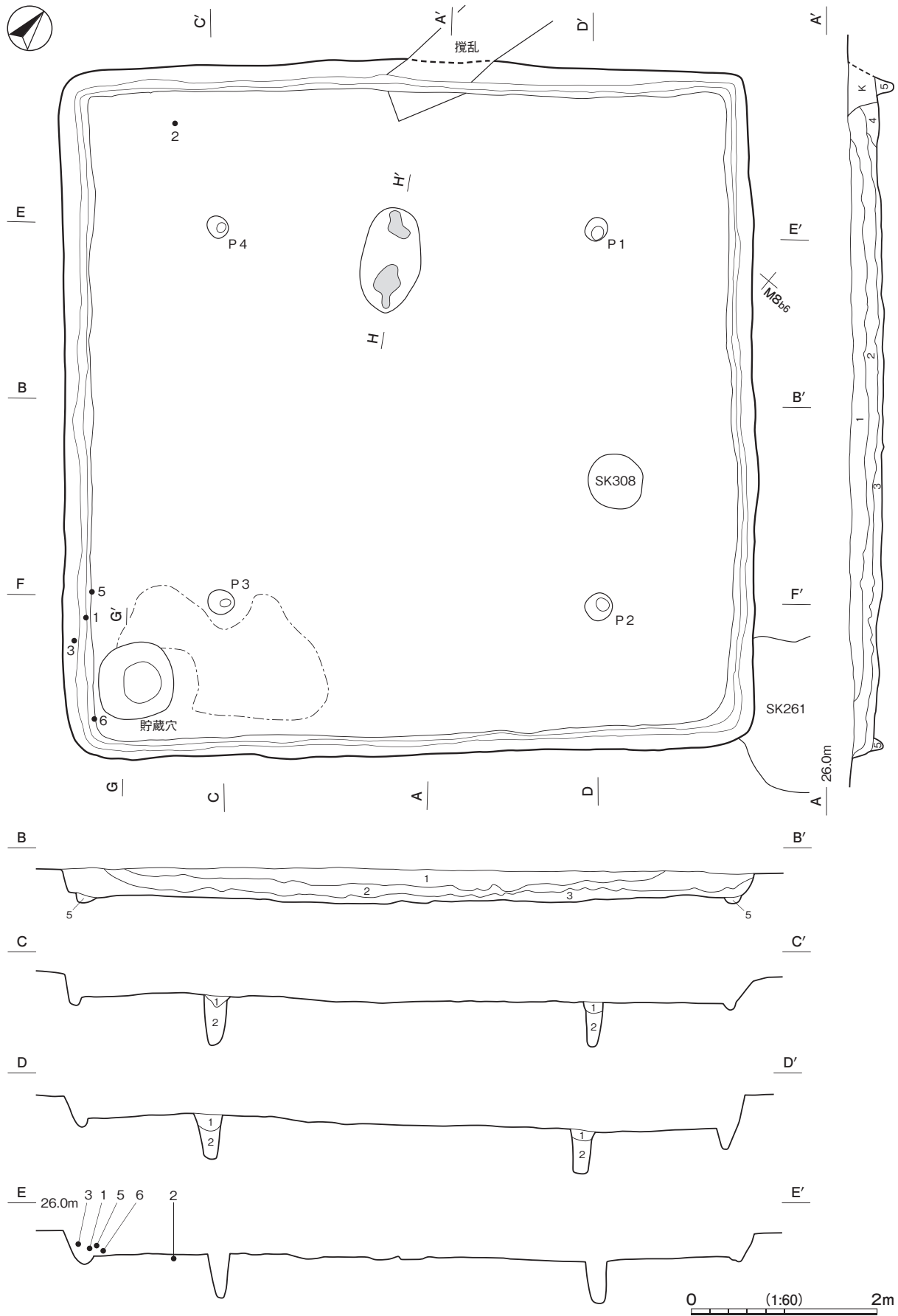
**ピット** 4 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 45 ~ 53 cm で, 規模や配置から主柱穴と考えられる。

**貯蔵穴** 南コーナー部に付設されている。長径 85 cm, 短径 80 cm の円形で, 深さは 70 cm である。底面は平坦で, 壁はほぼ直立している。

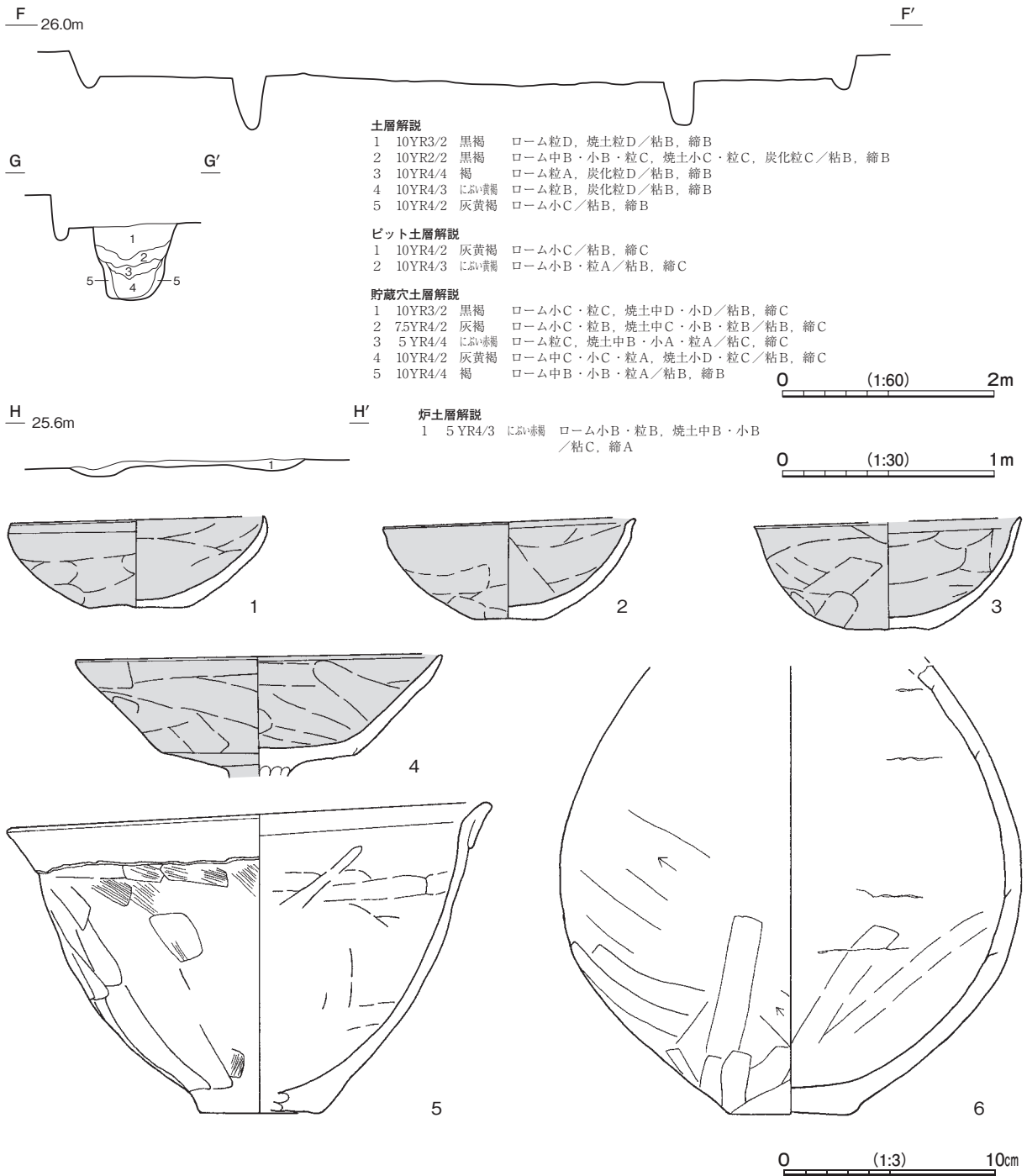
**覆土** 5 層に分層できる。多くの層にロームブロックや炭化粒子が含まれており, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 116 点 (坏 10, 碗 26, 高坏 46, 鉢 1, 壺 3, 小型甕 3, 甕 27) が出土している。2 は西コーナー付近の床面から出土している。1・3・5・6 はいずれも南コーナー付近の覆土下層から, 4 は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも床面や, 床面やや上位から出土しており, 建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。



第80図 第87号竪穴建物跡実測図



第 81 図 第 87 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 41 表 第 87 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	椀	11.9	4.3	4.4	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土下層	100% PL38 外・内面一部煤付着
2	土師器	椀	11.8	4.8	3.3	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	床面	95% PL38
3	土師器	椀	[12.4]	5.2	3.5	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土下層	95% PL38
4	土師器	高坏	17.3	(5.6)	-	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	坏部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土中	50%
5	土師器	鉢	22.5	14.7	5.3	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部折り返し後外・内面横ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	70% PL38 外面一部煤付着
6	土師器	壺	-	(21.2)	5.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	60% 外・内面煤付着

第 88 号 竪穴建物跡 (第 82 図 PL14)

**位置** 調査区中央部の M 8 f5 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 西部が削平を受けており, 確認できた長軸は 3.56 m, 短軸は 3.04 m である。平面形は長方形で, 主軸方向は N - 58° - W と推定できる。壁の高さは 10 ~ 16 cm で, 外傾して立ち上がっている。

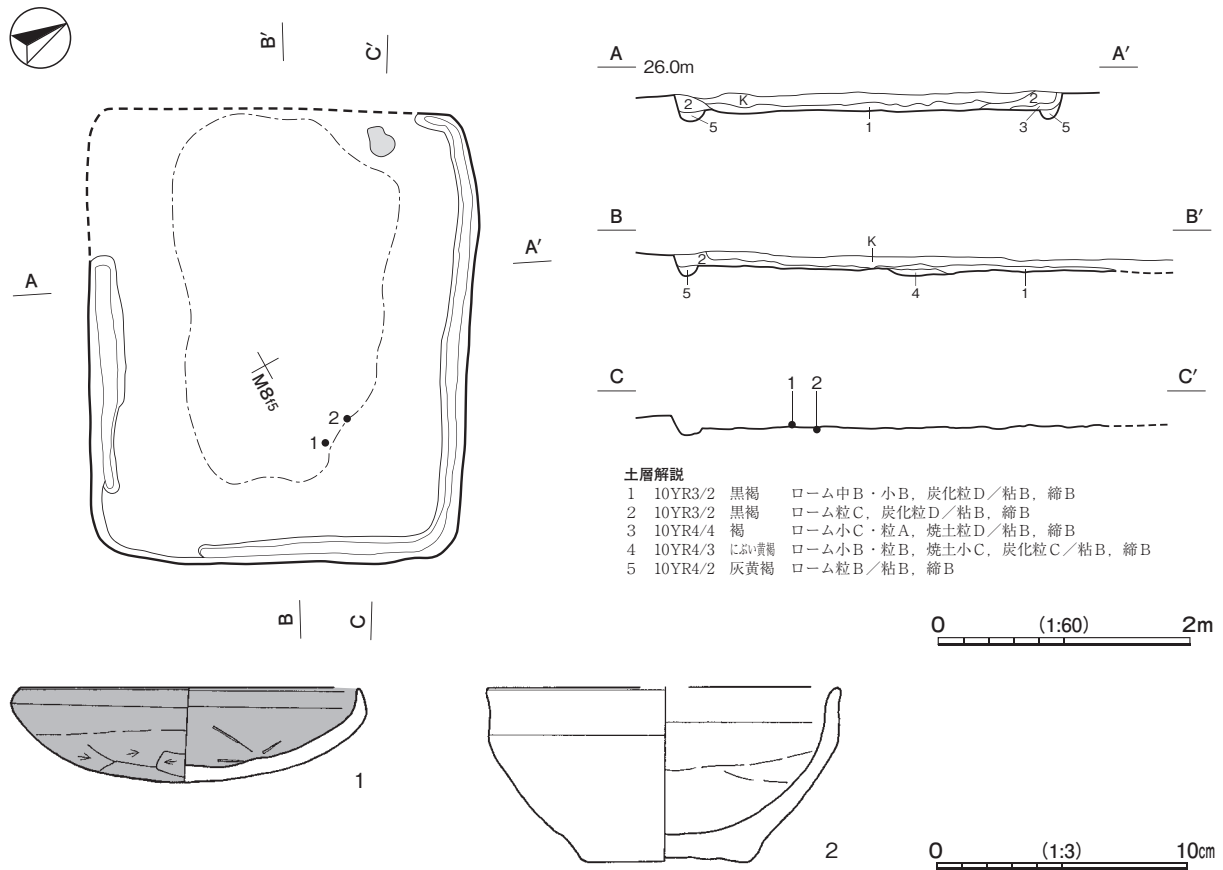
**床** ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周していると推定できる。

**竈** 北壁の東コーナー付近で, 火床部のみを確認した。煙道部や袖部は削平により検出できなかった。

**覆土** 5 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから, 自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 28 点 (坏 10, 高坏 2, 鉢 1, 小型甕 2, 甕 13) が出土している。1・2 共に中央部の床面から出土しており, 建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。



第 82 図 第 88 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 42 表 第 88 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.4	4.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ 全面黒色処理	床面	95% PL38 外面一部煤付着
2	土師器	鉢	[13.8]	6.9	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	30% 外面一部煤付着

第 91 号 竪穴建物跡 (第 83 図 PL14)

**位置** 調査区南部の M 9 b2 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 38 号掘立柱建物, 第 264 号土坑, 第 10 号柱穴列に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部の大半が調査区域外に延びており、長軸 1.76 m、短軸 1.26 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向は N - 23° - W と推定できる。壁は高さ 27 cm で、直立している。

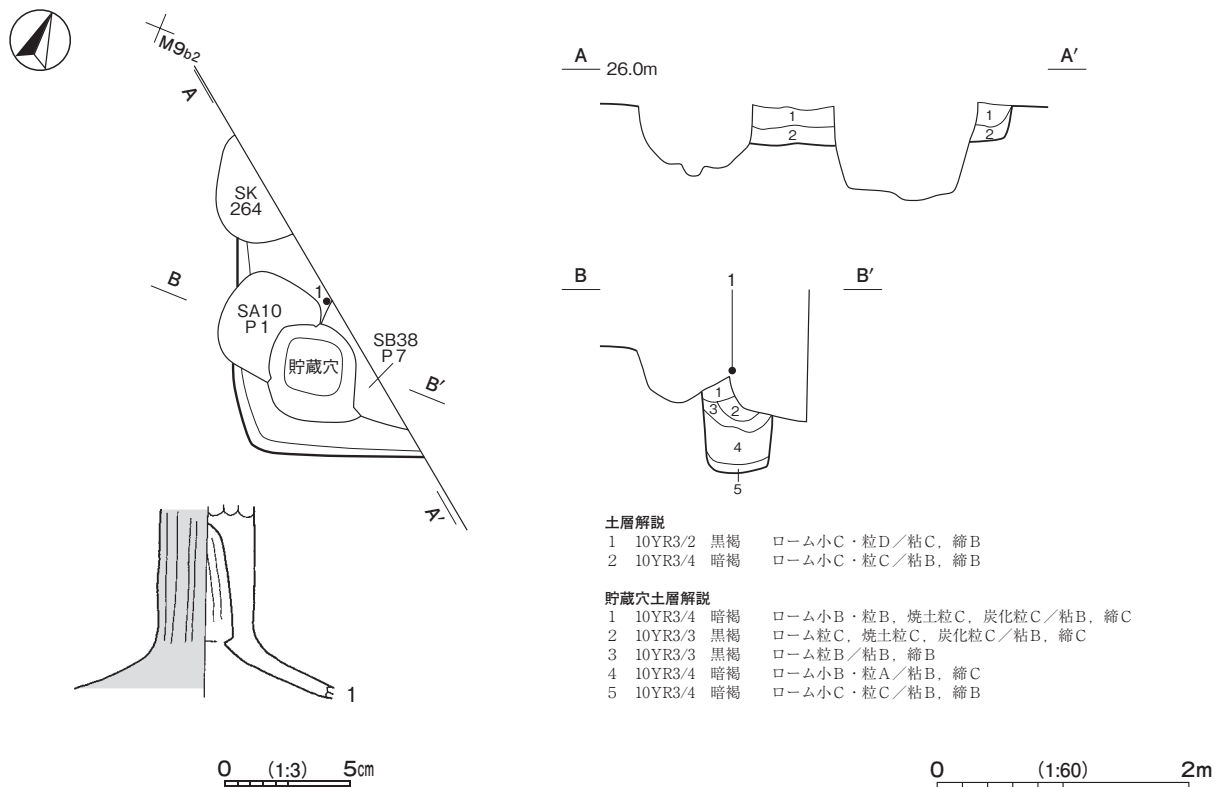
**床** 確認できた範囲は平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

**貯蔵穴** 南西コーナー部に付設されている。長軸 80 cm、短軸 71 cm の隅丸方形で、深さは 84 cm である。底面は平坦で、壁は直立している。

**覆土** 2 層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 2 点（高坏，甕）が出土している。1 は床面から出土している。建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。



第 83 図 第 91 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 43 表 第 91 号竪穴建物跡出土遺物一覧

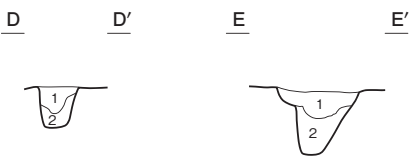
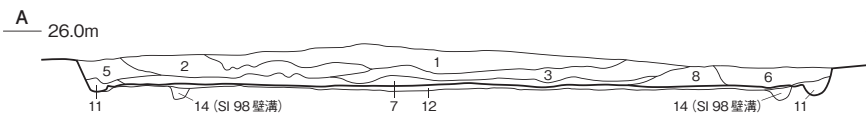
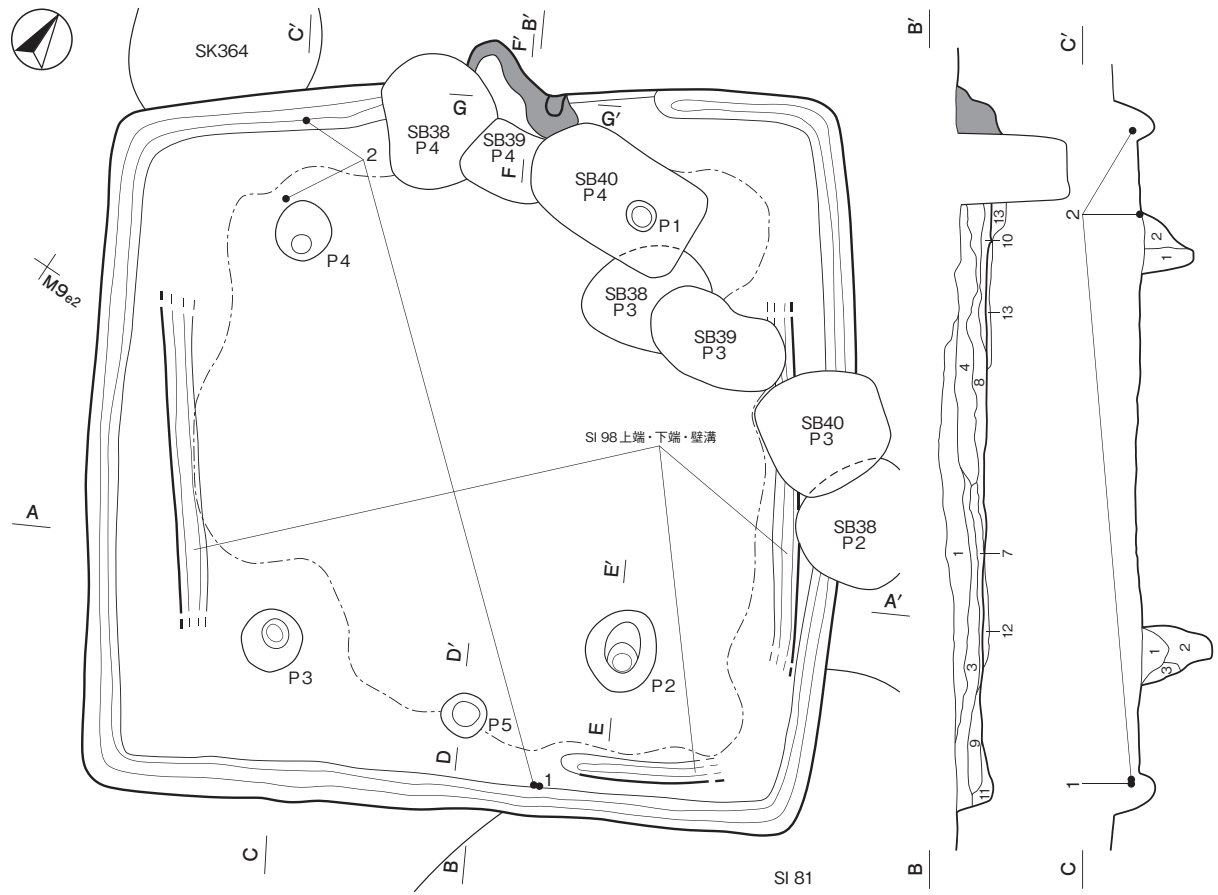
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高坏	-	(7.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面縦位のナア 外面赤彩	床面	20%

**第 92 号竪穴建物跡** (第 84・85 図 PL14)

**位置** 調査区南部の M 9 d2 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 81・98 号竪穴建物跡、第 364 号土坑を掘り込み、第 38～40 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 5.91 m、短軸 5.85 m の方形で、主軸方向は N - 30° - W である。壁は高さ 15～20 cm で、ほぼ直立している。

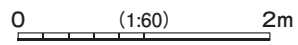


**ビット土層解説**

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 10YR3/3 暗褐 | ローム中B・小C・粒C/粘B, 縮C |
| 2 10YR3/4 暗褐 | ローム中B・小D・粒C/粘B, 縮B |
| 3 10YR4/4 褐  | ローム中B・小C・粒C/粘B, 縮B |

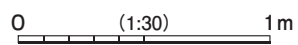
**土層解説**

- |                   |                                |
|-------------------|--------------------------------|
| 1 75YR3/2 黒褐      | ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化物D/粘C, 縮B    |
| 2 75YR3/2 黒褐      | ローム小C・粒C, 炭化粒B/粘C, 縮B          |
| 3 75YR3/3 暗褐      | ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮A    |
| 4 75YR3/3 暗褐      | ローム小C・粒B, 焼土粒B, 炭化物C/粘B, 縮B    |
| 5 75YR3/3 暗褐      | ローム粒C, 焼土粒D/粘C, 縮B             |
| 6 75YR3/4 暗褐      | ローム粒C, 焼土粒C, 炭化物D・粒D/粘C, 縮B    |
| 7 75YR4/3 褐       | ローム小B・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 縮B    |
| 8 75YR3/3 暗褐      | ローム小D・粒C, 焼土小C, 炭化粒D/粘C, 縮B    |
| 9 75YR3/4 暗褐      | ローム粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮B       |
| 10 75YR3/4 暗褐     | ローム粒D, 焼土小C・粒C, 炭化粒C/粘B, 縮A    |
| 11 75YR4/6 褐      | ローム中D・粒C/粘C, 縮B                |
| 12 10YR4/3 に近い黄褐色 | ローム中A・粒A/粘B, 縮A                |
| 13 10YR4/3 に近い黄褐色 | ローム小B・粒B, 焼土中C・小C, 炭化物C/粘B, 縮B |
| 14 10YR4/2 灰黄褐    | ローム小B・粒B/粘B, 縮B                |



**電土層解説**

- |               |                                |
|---------------|--------------------------------|
| 1 10YR5/1 褐灰  | 焼土小C・粒C, 粘土粒A/粘C, 縮A           |
| 2 10YR5/1 褐灰  | 焼土小C・粒C, 粘土粒B/粘C, 縮A           |
| 3 5YR4/8 赤褐   | 焼土中C・小C・粒B, 粘土粒C/粘C, 縮A        |
| 4 10YR4/1 褐灰  | 粘土粒A/粘C, 縮A                    |
| 5 10YR4/4 褐   | ローム小C・粒A, 焼土粒C, 粘土粒C/粘B, 縮B    |
| 6 10YR3/3 暗褐  | ローム粒C, 焼土粒C, 粘土粒C/粘B, 縮B       |
| 7 10YR3/4 暗褐  | ローム粒C, 焼土粒C, 粘土粒B/粘B, 縮B       |
| 8 10YR3/4 暗褐  | ローム小C・粒B, 焼土小C・粒C, 粘土粒C/粘B, 縮B |
| 9 10YR5/1 褐灰  | 粘土粒A/粘A, 縮A                    |
| 10 10YR4/1 褐灰 | 粘土粒B/粘A, 縮A                    |
| 11 10YR3/4 暗褐 | ローム中C・粒C, 焼土中C, 粘土粒C/粘B, 縮A    |



第 84 図 第 92・98 号 竪穴建物跡実測図



**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に均一に確認され、ロームブロックを含む第12・13層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

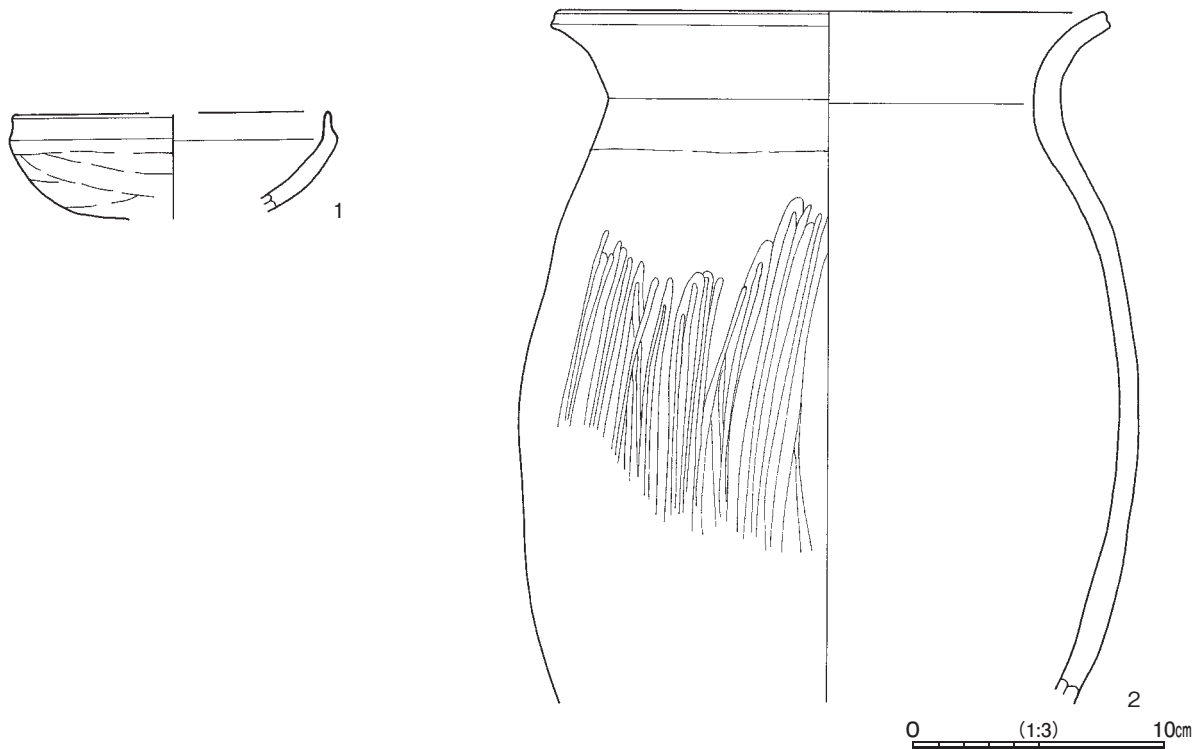
**竈** 北壁の中央部に付設されている。後世の掘立柱建物により掘り込まれており、焚口部及び左袖部は確認できなかった。袖部は、地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第9～11層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、奥壁で直立し、出口で外傾している。

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ40～60cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ32cmで、出入口施設に伴うピットである。

**覆土** 11層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片228点（坏1，碗37，高坏1，壺1，甕188），須恵器片8点（坏1，甕7），土製品1点（羽口），鉄滓4点（499.85g）が出土している。1・2共に床面近くから出土しており、いずれも埋め戻される早い段階で投棄されたものと考えられる。2は南北それぞれの壁溝から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第85図 第92号竪穴建物跡出土遺物実測図

第44表 第92号竪穴建物跡出土遺物一覧

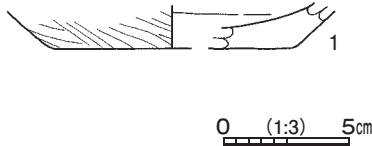
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	124	(42)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	70% PL38 外面一部煤付着
2	土師器	甕	216	(275)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ磨き 内面ナデ	床面	60% PL38 外面一部煤付着

第 98 号 竪穴建物跡 (第 84・86 図)

位置 調査区南部の M 9 d2 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 92 号 竪穴建物, 第 38 ~ 40 号 掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 第 92 号 竪穴建物により大規模な削平を受けており, 壁溝の痕跡を残すのみの形で検出した。東西軸は 5.00 m で, 南北軸は不明である。



第 86 図 第 98 号 竪穴建物跡  
出土遺物実測図

床 平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。壁溝は全周していたものと考えられる。

覆土 壁溝の土層 1 層のみ確認した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片 1 点 (甕) が出土している。

所見 時期は, 出土土器の特徴や周囲の竪穴建物跡との関係などから, 6 世紀中葉と考えられる。

第 45 表 第 98 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	(1.8)	[9.4]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端ヘラ磨き 内面ナデ	覆土中	5% 外面一部煤付着

第 46 表 古墳時代 竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴					
10	M 9 j9	N - 21° - W	長方形	5.80 × 4.26	28 ~ 40	平坦	[全周]	3	-	3	地床炉	-	人為	土師器	5 世紀中葉	本跡 → SI73, SB27・37, SK296・297・349	
27	M 9 e5	N - 28° - W	長方形	6.12 × 4.98	3 ~ 13	平坦	[全周]	4	-	-	北壁	-	人為	土師器, 金属製品	6 世紀後葉 ~ 7 世紀前葉	SK314・337・352 → 本跡 → SB22・34・38, SK286・289・302	
35	L 8 j8	N - 20° - W	方形	4.28 × 4.05	24 ~ 32	平坦	全周	4	1	5	北壁	-	人為	土師器, 石製品, 金属製品	5 世紀後葉	TP 8 → 本跡	
62	M 7 a0	N - 15° - W	方形	3.98 × 3.80	12 ~ 16	平坦	ほぼ全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	7 世紀前葉	SI66 → 本跡	
65	M 8 d2	N - 3° - W	方形	4.00 × 3.78	27 ~ 32	平坦	全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器	6 世紀後葉	本跡 → SB16	
67	N 9 d9	N - 51° - E	方形	5.22 × 5.00	14 ~ 35	平坦	全周	4	-	3	-	-	人為	土師器, 須恵器	4 世紀後葉		
68	N10g4	N - 36° - W	方形	6.56 × 6.44	16 ~ 32	平坦	-	4	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7 世紀前葉	本跡 → SI95	
73	N 9 b9	N - 10° - W	方形	4.46 × 4.30	32 ~ 38	平坦	全周	4	2	1	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	7 世紀中葉	SI10 → 本跡 → SB37, SK194	
75	N 9 e7	N - 31° - W	長方形	4.64 × 3.16	36 ~ 44	平坦	-	-	-	1	-	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	7 世紀前葉	本跡 → SB23	
79	L 8 f4	N - 40° - W	方形	4.20 × 3.96	22 ~ 52	平坦	ほぼ全周	4	1	11	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	6 世紀中葉	SK385 → 本跡	
82	M 9 f1	N - 62° - E	長方形	4.45 × 3.46	4	平坦	全周	2	-	1	-	1	不明		5 世紀前葉	本跡 → SD 5	
84	M 8 d9	N - 21° - W	方形	3.64 × 3.60	20 ~ 28	平坦	ほぼ全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 土製品	6 世紀中葉	本跡 → SB19	
85	M 8 d7	N - 35° - W	長方形	4.26 × 3.08	8 ~ 17	平坦	-	-	-	2	-	-	人為	土師器, 須恵器	6 世紀後半	本跡 → SB19	
86	M 8 b8	N - 15° - W	方形	7.24 × 6.76	24 ~ 28	平坦	全周	4	2	7	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	6 世紀後半	SK235・366 → 本跡 → SB18	
87	M 8 b5	N - 40° - W	方形	7.44 × 7.40	20 ~ 40	平坦	全周	4	-	-	地床炉	1	人為	土師器	5 世紀中葉	SK261 → 本跡 → SK308	
88	M 8 f5	N - 58° - W	長方形	3.56 × 3.04	10 ~ 16	平坦	[ほぼ全周]	-	-	-	西壁	-	自然	土師器	6 世紀後葉		
91	M 9 b2	[N - 23° - W]	[方形・長方形]	(1.76 × 1.26)	27	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	土師器	5 世紀中葉	本跡 → SB38, SK264, SA10	
92	M 9 d2	N - 30° - W	方形	5.91 × 5.85	15 ~ 20	平坦	全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7 世紀前葉	SI81・98, SK364 → 本跡 → SB38 ~ 40	
98	M 9 d2	[N - 38° - W]	[方形]	5.00 × -	-	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	不明	土師器	6 世紀中葉	本跡 → SI92, SB38 ~ 40	

## (2) 鍛冶工房跡

微細な鍛冶関連遺物を採取するため、50 cmのグリッドを設定し、グリッドごとに土壌を取り上げた。土壌は、5 mm, 3 mm, 1 mmの篩を用いて水洗作業を行い、微細遺物を採取した。篩作業で採取された微細遺物については、滓の成分分析を行った。この成果については、(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析で示した。

### 第1号鍛冶工房跡 (第87～90図 PL14・15)

**位置** 調査区中央部のM 9g6区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第33・35号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が調査区域外に延びているため、確認できた規模は南北軸5.37 m、東西軸4.73 mの方形または長方形で、主軸方向はN - 29° - Wである。壁高は5～13 cmで、ほぼ直立している。

**床** やや凹凸があり、硬化面は認められない。貼床は、深さ10 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第5～10層を埋土して構築されている。壁溝は、確認出来た範囲で回っている。

**竈** 北壁に付設されている。焚口部から煙道部まで110 cmで、燃焼部幅は45 cmである。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第6～8層を埋土して構築した後、袖部は粘土粒子などを含む第5層を積み上げて構築されている。火床部は床面をやや掘りくぼめて浅い皿状を呈しており、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に30 cmほど掘り込まれている。

**炉** 5か所。炉1は西部に位置し、長径70 cm、短径60 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ12 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第2・3層を埋土して構築されている。第1層は鍛冶炉内の覆土である。第2層は火熱を受けて赤変硬化している。炉2は西コーナー部付近に位置し、長径60 cm、短径50 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ30 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第5・6層を埋土して構築されている。第1層は鍛冶炉内の覆土である。第2～4層は火熱を受けて赤変硬化している。炉3は北部に位置している。第35号掘立柱建物に掘り込まれており、焼土が一部確認できたのみであった。炉4は南壁付近に位置し、長径90 cm、短径70 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ18 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第3・4層を埋土して構築されている。第1・2層は鍛冶炉内の覆土である。第3層は火熱を受けて赤変硬化している。炉5は東部に位置し、長径50 cm、短径40 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ20 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第3・4層を埋土して構築されている。第1・2層は鍛冶炉内の覆土である。第3・4層は火熱を受けて赤変硬化している。

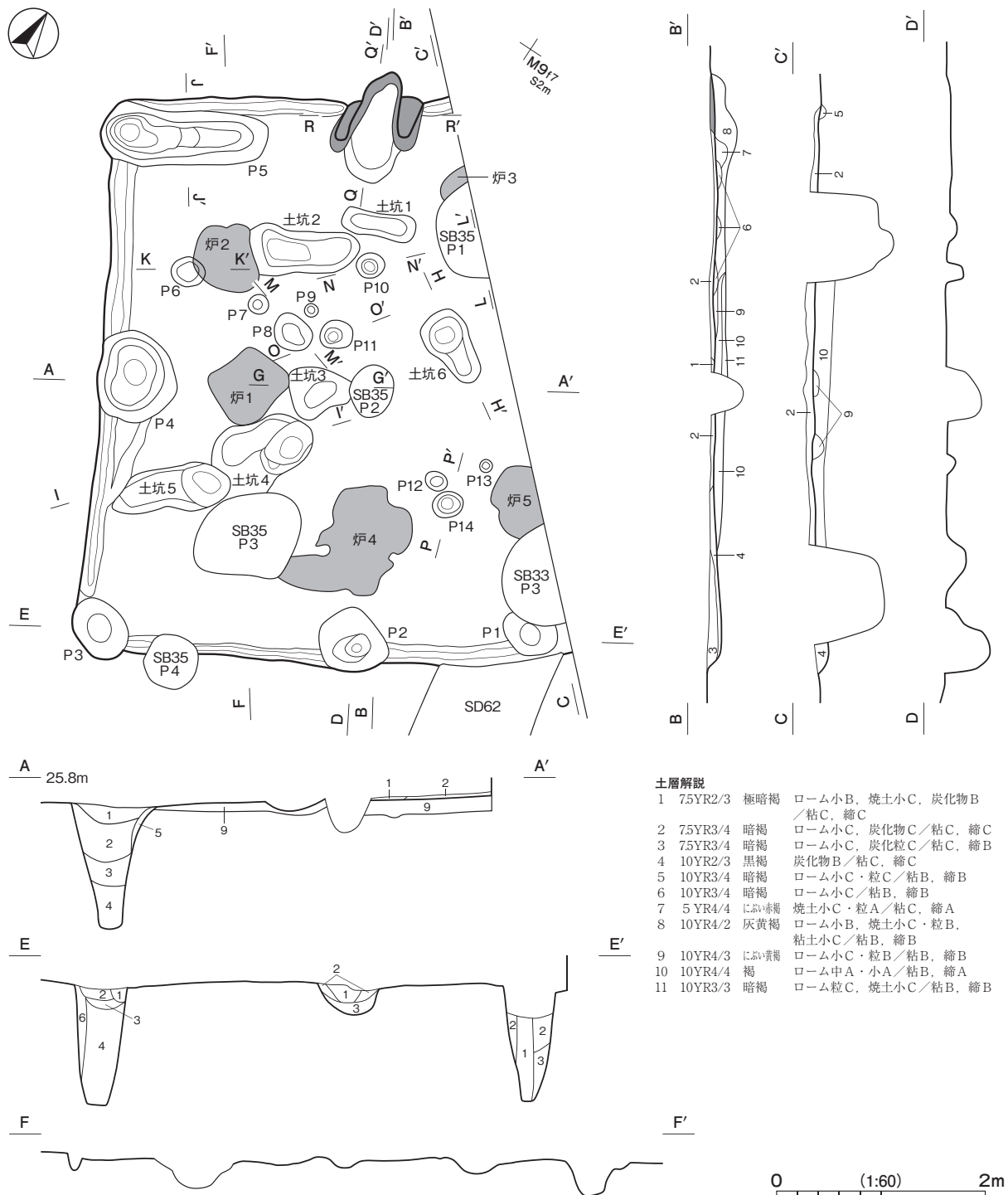
**土坑** 6基。土坑1は、覆土中に粒状滓、鍛造剥片が含まれており、炉3に伴う作業用土坑と考えられる。土坑2は、炉2に近接していることから、これに伴う作業用土坑と考えられる。土坑3は、炉1に近接していることから、これに伴う作業用土坑と考えられる。土坑5は土坑4を掘り込んでいる。いずれも鉄滓が出土しており、廃滓土坑と考えられる。土坑6も土坑1同様、覆土中に粒状滓、鍛造剥片が含まれており、作業用の土坑と考えられる。

**ピット** 23か所。P 1～P 5は深さ32～136 cmで、規模や配置から壁柱穴と考えられる。P 6～P 14は深さ6～25 cmで、性格は不明である。さらに掘方調査に伴って9か所確認した。P 15～P 18は深さ55～76 cmで、支柱穴と考えられる。P 19は深さ40 cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 20～P 23は深さ12～18 cmで、性格は不明である。

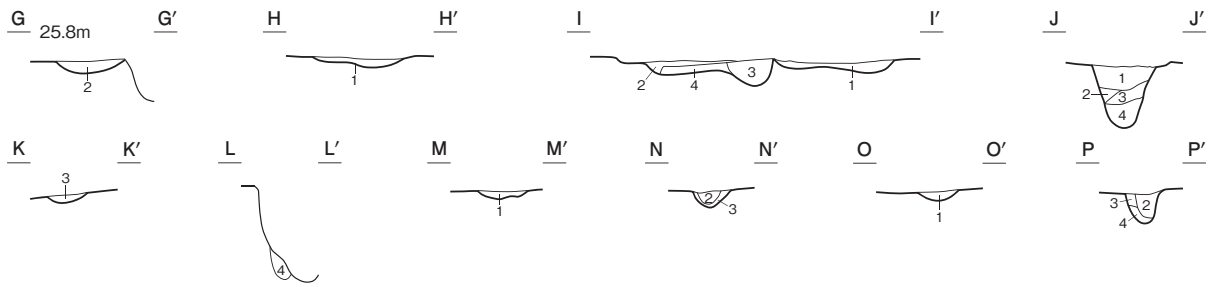
**覆土** 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 37 点 (坏 5, 高坏 1, 甕 31), 須恵器片 2 点 (蓋), 土製品 2 点 (羽口), 礫 3 点 (花崗岩 1, 砂岩 2) のほか, 鍛冶関連遺物が出土している。1~4 はいずれも覆土中からの出土であり, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。5・6 は P 6 覆土中から出土しており, 炉 2 から廃棄されたと考えられる。

**所見** 微細遺物についての分類・集計を試みた。結果は第 48 表 出土鉄滓集計表のとおりで, 鉄滓のほか, 粒状滓や鍛造剥片が出土した。本跡からは鞆の羽口も出土しており, 精錬鍛冶と鍛錬鍛冶を行った鍛冶工房跡と考えられる。本跡の時期は, 出土土器から 7 世紀中葉と考えられる。また, 時期を大きく違えずに四本柱の建物から壁柱穴へと作りかえ, 作業面積を広げて本格的に操業したものと考えられる。



第 87 図 第 1 号鍛冶工房跡実測図 (1)

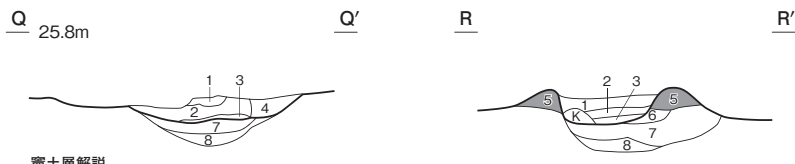
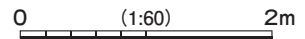


**土坑土層解説**

- |   |               |                                    |
|---|---------------|------------------------------------|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐   | ローム小B・粒B, 焼土小C, 炭化物A・粒B<br>/粘B, 締B |
| 2 | 10YR3/4 暗褐    | ローム小C・粒C, 炭化粒C/粘B, 締B              |
| 3 | 10YR4/3 におい黄褐 | ローム小B・粒B, 焼土小C, 炭化物C<br>/粘B, 締C    |
| 4 | 10YR4/2 におい黄褐 | ローム小B・粒A/粘B, 締B                    |

**ビット土層解説**

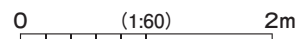
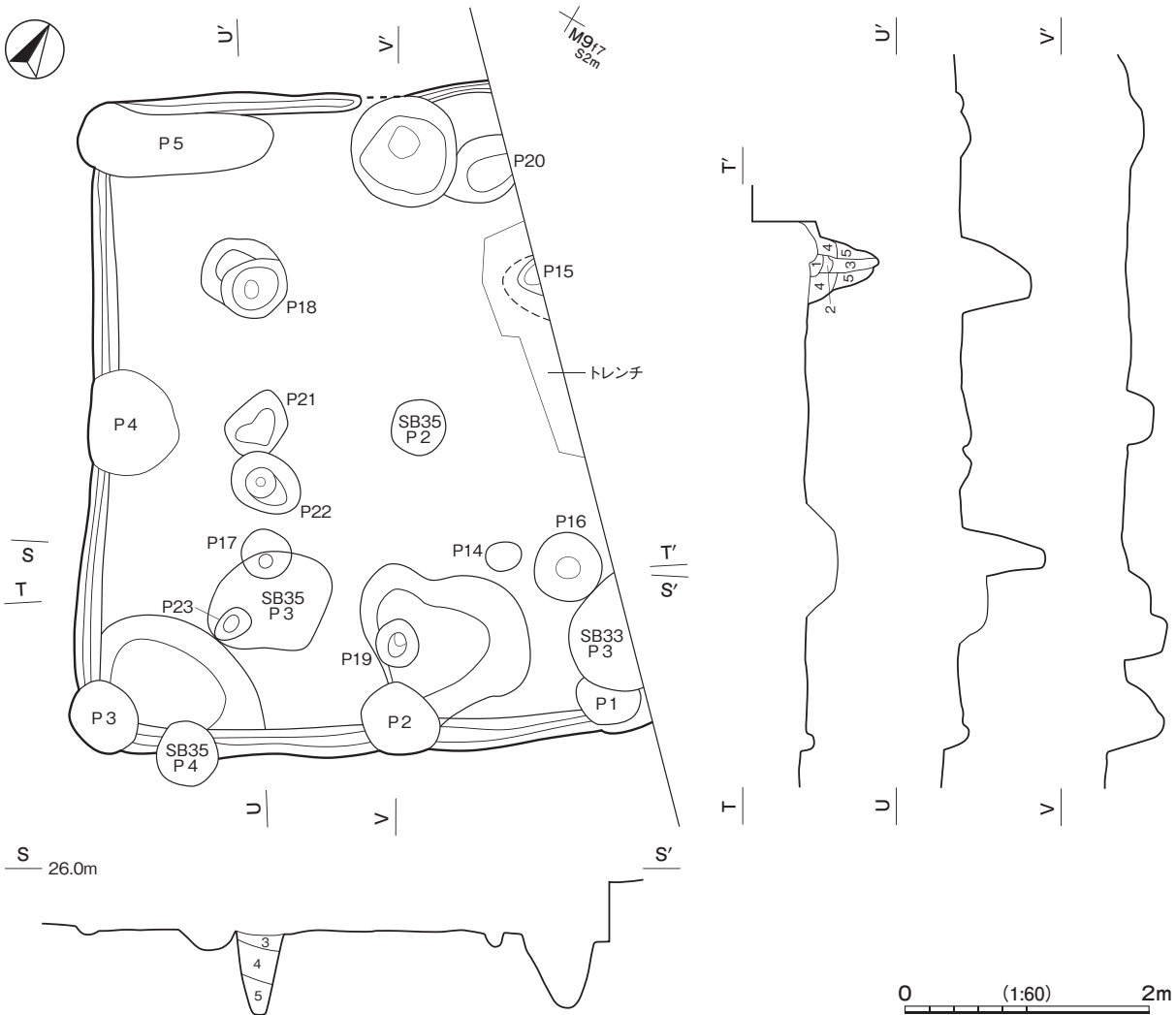
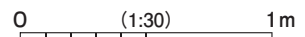
- |   |            |                             |
|---|------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐 | ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締B |
| 2 | 10YR3/3 暗褐 | ローム粒D/粘B, 締B                |
| 3 | 10YR3/2 黒褐 | ローム粒C, 炭化粒D/粘B, 締B          |
| 4 | 10YR3/3 暗褐 | ローム小D・粒C, 炭化粒D/粘B, 締B       |
| 5 | 10YR4/4 褐  | ローム小B・粒A/粘B, 締B             |
| 6 | 10YR4/4 褐  | ローム小A・粒A/粘B, 締B             |



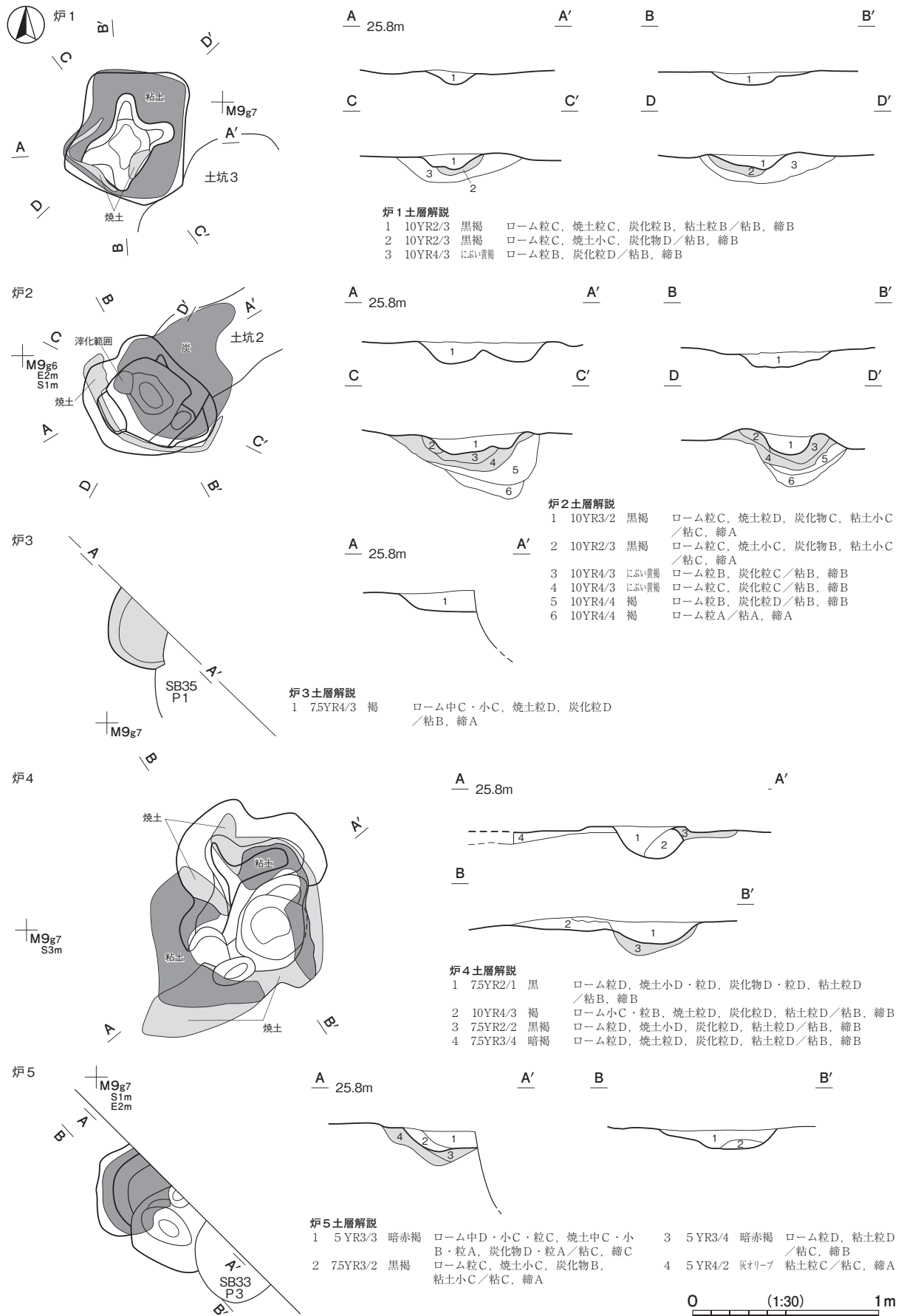
**竈土層解説**

- |   |               |                    |
|---|---------------|--------------------|
| 1 | 5 YR4/3 におい黄褐 | 焼土粒B, 炭化粒D/粘C, 締C  |
| 2 | 5 YR4/6 赤褐    | 焼土小C・粒A/粘C, 締B     |
| 3 | 7.5YR4/3 褐    | 焼土粒C/粘C, 締B        |
| 4 | 7.5YR3/4 暗褐   | ローム粒D, 粘土粒D/粘B, 締B |

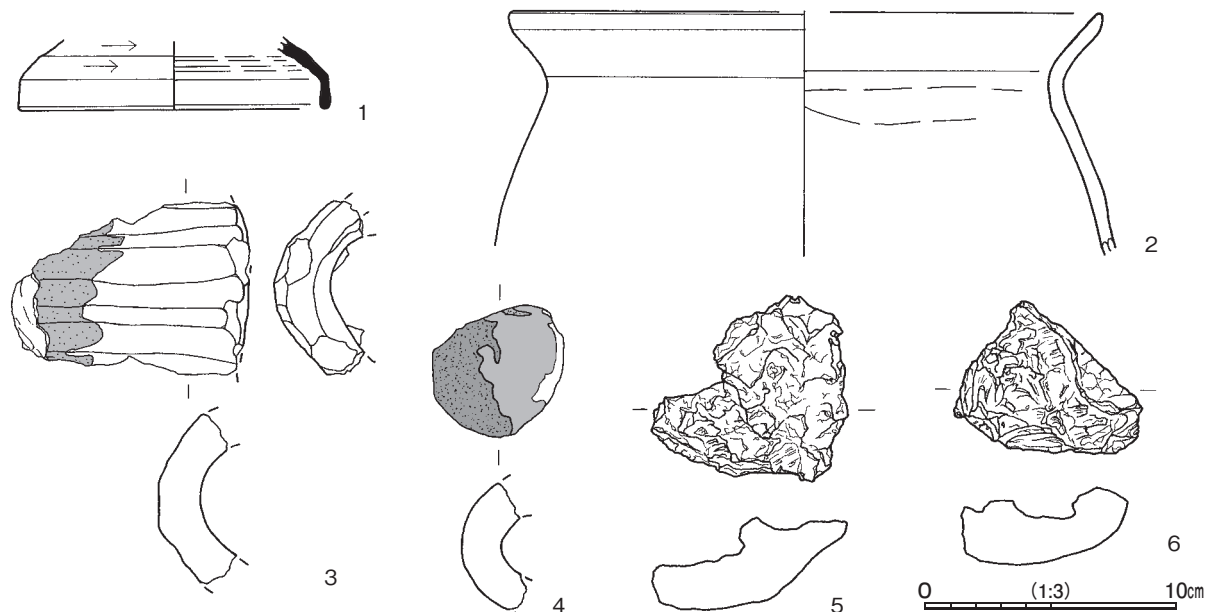
- |   |               |                       |
|---|---------------|-----------------------|
| 5 | 10YR6/2 灰黄褐   | ローム粒C, 粘土粒B/粘A, 締A    |
| 6 | 5 YR3/2 黒褐    | 焼土小C・粒B, 炭化粒C/粘B, 締C  |
| 7 | 10YR4/3 におい黄褐 | ローム小C・粒B, 炭化粒C/粘B, 締B |
| 8 | 10YR4/4 褐     | ローム粒A/粘B, 締B          |



第 88 図 第 1 号鍛冶工房跡掘方実測図 (2)



第 89 図 第 1 号鍛冶工房炉跡実測図 (3)



第90図 第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図

第47表 第1号鍛冶工房跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	(2.8)	[12.2]	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	5%
2	土師器	甕	[23.4]	(9.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	10% PL39 外面一部煤付着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
3	羽口	[7.0]	(3.6)	4.7	(142.13)	長石・石英・細礫	橙	先端部滓化 灰褐色	覆土中	PL45
4	羽口	[5.0]	(2.5)	2.2	(51.27)	長石・石英・雲母・細礫	橙	先端部滓化 褐灰色	覆土中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	椀形滓	7.4	7.8	3.7	154.19	鉄	破面アリ 底面砂付着	P 6 覆土中	PL48
6	椀形滓	6.1	7.5	3.1	244.57	鉄	破面アリ 底面砂付着	P 6 覆土中	PL48

第48表 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表

区・遺構	椀型鍛冶滓 (g)	不定形滓 (g)	鉄塊系遺物 (g)	粒状滓	鍛造剥片	全体合計重量 (g)
1区		56.90		3.49	31.12	91.51
2区		186.79	5.44	1.32	11.70	205.25
3区	96.44	99.35	8.38	20.11	209.85	434.13
4区		93.84		1.86	29.43	125.13
P 3		140.47				140.47
P 6		441.37		15.17	206.93	663.47
P 7		87.71				87.71
P 8				0.69	4.27	4.96
P 9				0.37	1.24	1.61
P11				0.02	0.12	0.14
P12				0.20	1.06	1.26
P13				0.06		0.06
P15				0.09	0.84	0.93
土坑1				0.01	0.35	0.36
土坑4		40.12		1.00	4.22	45.34
土坑5		19.51		2.62	4.65	26.78
土坑6				0.20	0.26	0.46

区・遺構	椀型鍛冶滓 (g)	不定形滓 (g)	鉄塊系遺物 (g)	粒状滓	鍛造剥片	全体合計重量 (g)
炉1		108.73		4.31	71.79	184.83
炉2		319.41		10.38	248.64	578.43
炉3		8.85		0.83	2.20	11.88
炉4		49.14	26.05	8.39	5.17	88.75
炉5	117.11			1.70	1.76	120.57
総計	213.55	1652.19	39.87	72.82	835.60	2814.03

### (3) 土坑

第276号土坑からは、第1号鍛冶工房跡同様、鍛冶関連遺物が出土した。そのため、5mm、3mm、1mmの篩を用いて水洗作業を行い、微細遺物を採取した。篩作業で採取された微細遺物については、滓の成分分析を行った。この成果については第1号鍛冶工房跡同様、(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析で示した。

### 第154号土坑 (第91図 PL15)

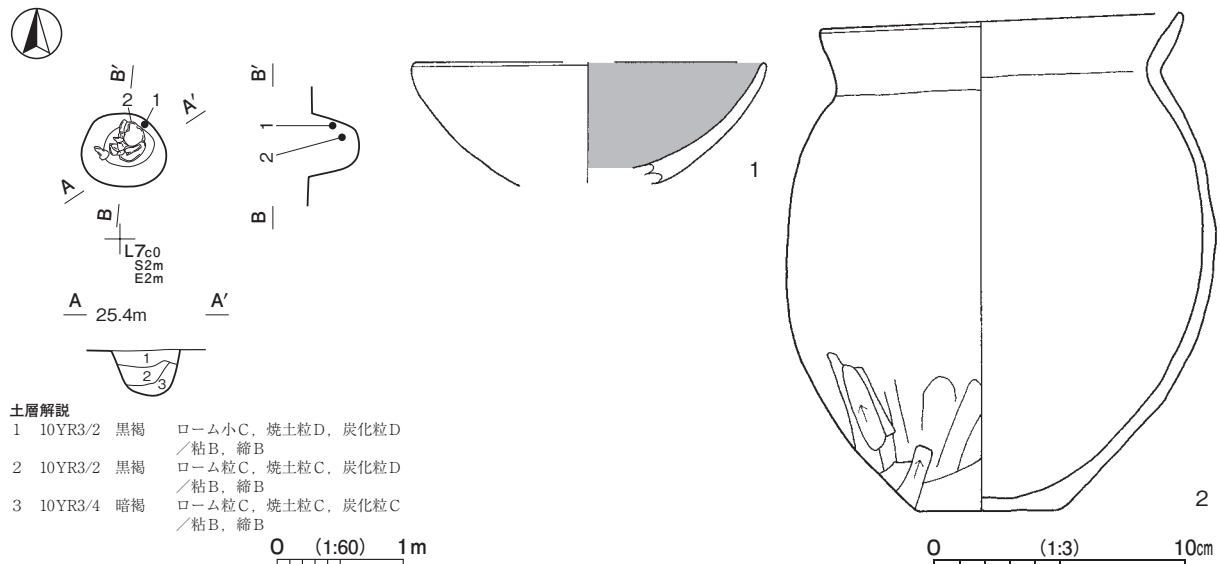
**位置** 調査区中央部のL7c0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径0.69m、短径0.52mの楕円形で、長軸方向はN-72°-Wである。確認面からの深さは38cmである。底面は皿状で、壁はほぼ直立している。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片17点(坏1、椀3、甕13)が出土している。いずれも最下層の第3層から出土している。埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第91図 第154号土坑・出土遺物実測図

第49表 第154号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	土師器	坏	[13.9]	4.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ・黒色処理	体部外面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	20%
2	土師器	甕	14.3	19.8	5.8	長石・石英・雲母	におい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	体部外面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	70% PL39



第 276 号土坑 (第 92・93 図 PL15)

**位置** 調査区南部の N 9a7 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

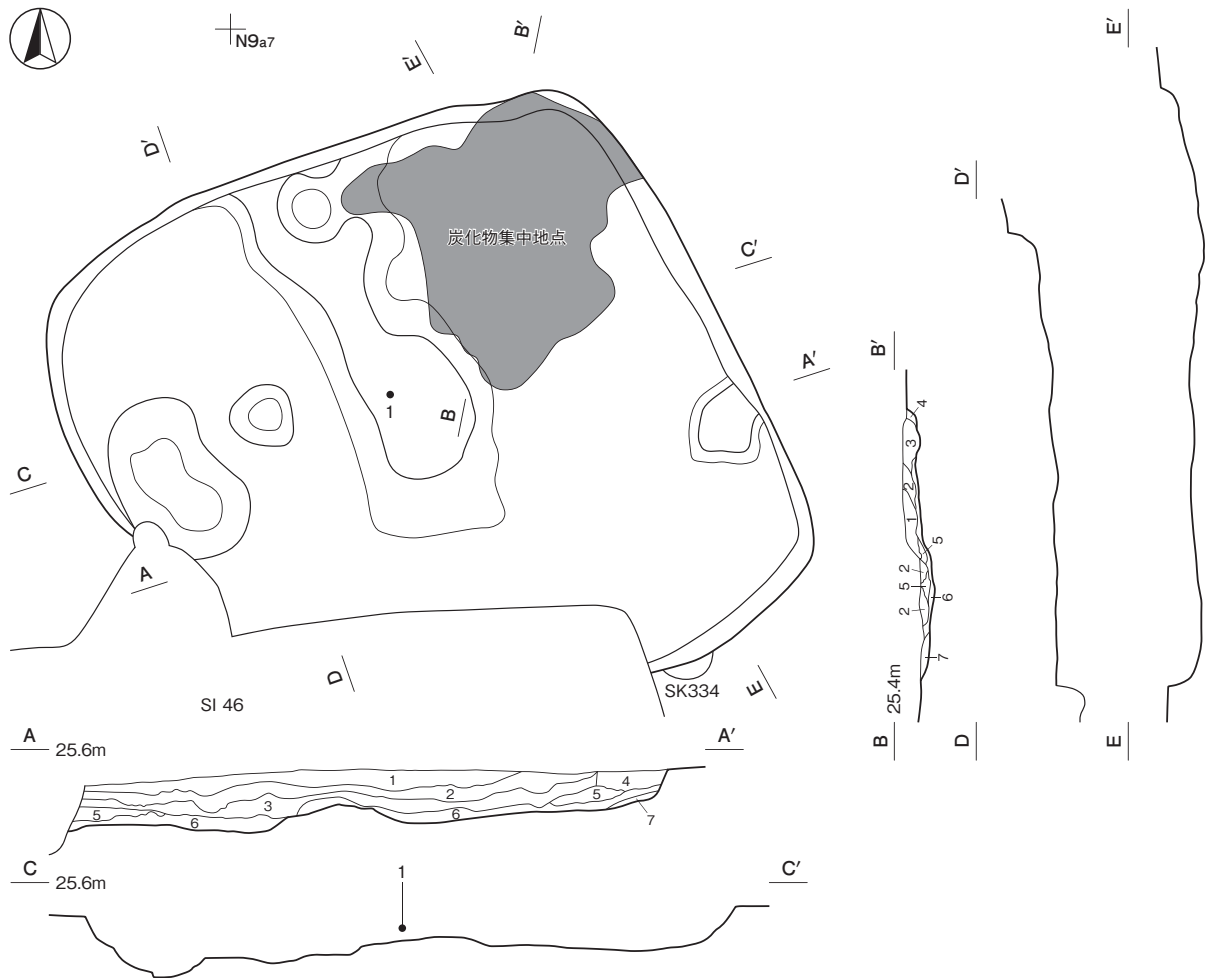
**重複関係** 第 334 号土坑を掘り込み, 第 46 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 5.08 m, 短軸 4.82 m の隅丸方形で, 長軸方向は N - 68° - E である。底面は凹凸がある。確認面からの深さは 48 cm で, 壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 7 層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 22 点 (坏 2, 椀 1, 甕 16, 手捏土器 3), 土製品 3 点 (羽口), 鍛冶関連遺物は鉄滓 87 点 (1,623.75 g), 粒状滓 (11.84 g), 鍛造剥片 (7.18 g) が出土している。1 は, やや盛り上がった底面の覆土下層から, 2~4 は覆土中から出土している。

**所見** 鍛冶関連遺物が出土しており, 第 1 号鍛冶工房跡に伴う廃棄土坑と考えられる。形状が隅丸長方形を呈しており, 廃棄土坑として利用される前は, 鍛冶工房として操業していた可能性がある。時期は, 第 1 号鍛冶工房跡と同じ 7 世紀中葉と考えられる。



**土層解説**

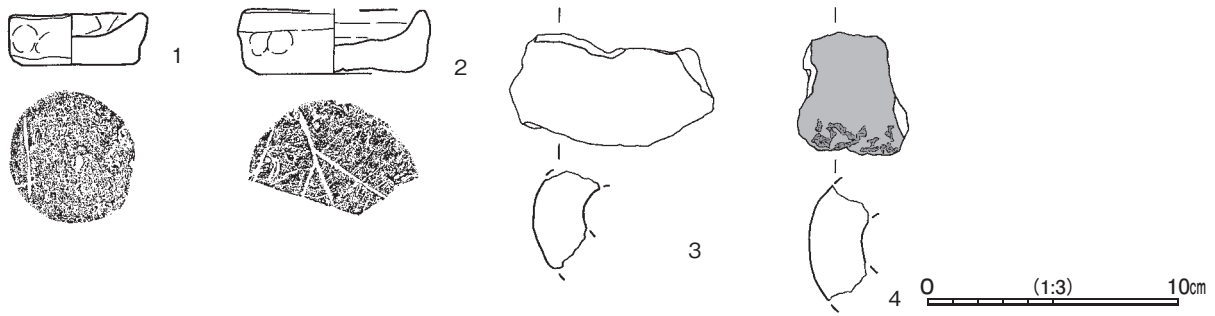
- |   |         |     |                          |
|---|---------|-----|--------------------------|
| 1 | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム粒D/粘C, 縮A             |
| 2 | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム中D・小C・粒B, 炭化粒D/粘C, 縮A |
| 3 | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム小C・粒B/粘B, 縮A          |
| 4 | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム粒D/粘C, 縮B             |
| 5 | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム小D・粒B/粘B, 縮B          |
| 6 | 75YR4/3 | 褐   | ローム中B・小C・粒C, 炭化粒D/粘B, 縮A |
| 7 | 75YR4/3 | 褐   | ローム中B・小C・粒C/粘B, 縮A       |

**炭化物集中地点土層解説**

- |   |         |    |                             |
|---|---------|----|-----------------------------|
| 1 | 75YR2/1 | 黒  | 焼土粒D, 炭化材B・物A・粒A/粘C, 縮C     |
| 2 | 75YR3/2 | 黒褐 | 焼土粒C, 炭化粒C/粘C, 縮B           |
| 3 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム小C・粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B       |
| 4 | 75YR4/4 | 褐  | ローム小C・粒C/粘C, 縮B             |
| 5 | 75YR4/3 | 褐  | ローム粒C, 焼土粒D, 炭化物B・粒B/粘C, 縮B |
| 6 | 75YR4/3 | 褐  | ローム小B/粘B, 縮A                |
| 7 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム粒C, 炭化粒C/粘C, 縮B          |

0 (1:60) 2m

第 92 図 第 276 号土坑実測図



第93図 第276号土坑出土遺物実測図

第50表 第276号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	手捏土器	5.0	2.1	4.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面指頭圧痕 内面ヘラナデ	覆土下層	90% PL39
2	土師器	手捏土器	[6.8]	2.5	[6.0]	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面指頭圧痕 ヘラナデ 内面ナデ 底部木葉	覆土中	50% PL39

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
3	羽口	[6.0]	(2.6)	[2.4]	(73.24)	長石・石英・細礫	明赤褐	外面硬化 褐灰色	覆土中	
4	羽口	[7.0]	(2.3)	[3.0]	(49.70)	長石・石英・細礫	橙	外面硬化 灰白色 鉄滓附着	覆土中	

第365号土坑 (第94図 PL16)

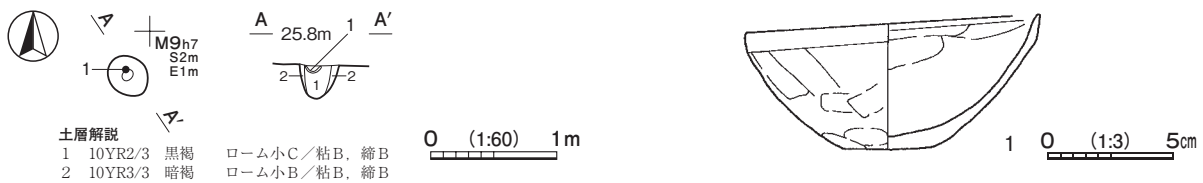
**位置** 調査区南部の M 9h7 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径 0.35 m, 短径 0.30 m の楕円形で, 長軸方向は N - 34° - W である。確認面からの深さは 26 cm である。底面は U 字状で, 壁はほぼ直立している。

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 2 点 (碗, 甕) が出土している。1 は覆土上層から出土した。

**所見** 時期は, 出土土器から 5 世紀後葉と考えられる。



**土層解説**  
 1 10YR2/3 黒褐 ローム小C/粘B, 締B  
 2 10YR3/3 暗褐 ローム小B/粘B, 締B

第94図 第365号土坑・出土遺物実測図

第51表 第365号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	碗	11.6	5.4	3.6	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 指頭圧痕 内面ナデ	覆土上層	95% PL39

第52表 古墳時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
154	L 7 c0	N - 72° - W	楕円形	0.69 × 0.52	38	ほぼ直立	皿状	人為	土師器	
276	N 9 a7	N - 68° - E	隅丸方形	5.08 × 4.82	48	緩斜	凹凸	人為	土師器, 土製品, 鍛冶関連遺物	SK334 → 本跡 → SI46
365	M 9 h7	N - 34° - W	楕円形	0.35 × 0.30	26	ほぼ直立	U 字状	人為	土師器	

(4) 金田西坪 B 遺跡出土鉄滓の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、古墳時代後期の第 28 号鍛冶工房跡と第 276 号土坑より出土した鉄滓 11 点について顕微鏡組織分析・化学組成分析を実施し、当時の鍛冶工程に関わる資料を得る。

1 試料

試料は古墳時代後期の第 28 号鍛冶工房跡より出土した鉄滓 8 点（試料番号 1～8）と第 276 号土坑より出土した鉄滓 3 点（試料番号 9～11）の計 11 点である（表 1）。

表 1 資料一覧と調査項目

番号	遺構名	遺物番号	名称	推定年代	計測値		金属探知機 反応	顕微鏡	化学分析		
					大きさ (mm)	重量 (g)					
1	第 1 号 鍛冶工房跡	覆土中	No.3	椀形鍛冶滓	古墳時代 後期	64 × 60 × 30	132.6	×	（錆化）	○	○
2			No.45	炉壁		96 × 77 × 25	148.9	×		○	○
3		炉 1	No.52	鍛冶滓		35 × 28 × 24	31.4	×		○	○
4				微細遺物 （鍛冶滓片・粒状滓・金属鉄粒・鍛造 剥片）		—	—	×		○	○
5				椀形鍛冶滓		102 × 75 × 28	181.5	×		○	○
6		炉 2	No.37	粒状滓・金属鉄粒・鍛造 剥片		—	—	×		○	○
7				鍛冶滓（流動状）		46 × 38 × 6	32.8	×		○	○
8-1		炉 4	No.46	椀形鍛冶滓		47 × 44 × 15	23.9	×		○	○
8-2～6				粒状滓・金属鉄粒・鍛造 剥片		—	—	×		○	—
9				椀形鍛冶滓（含鉄）		82 × 58 × 34	131.0	○		○	○
10		第 276 号土坑	No.35	炉壁		87 × 50 × 18	66.7	×		○	○
11	No.71		製錬滓	58 × 29 × 43	94.7	×		○	○		

2 分析方法

(1) 肉眼観察

遺物の外観の特徴など、調査前の所見を記載した。

(2) 顕微鏡組織

鉱物組成や金属部の組織観察を目的とする。外観の特徴から断面観察位置を決めて、試料を切り出し、エメリー研磨紙の #150, #240, #320, #600, #1000, 及びダイヤモンド粒子の 3 μm と 1 μm で順を追って研磨した。その後金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。また金属鉄部の組織観察には 3% ナイタル（硝酸アルコール）液を腐食に用いた。

(3) 化学組成分析

定量分析を以下の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。  
 二酸化珪素（SiO<sub>2</sub>）、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

### 3 結果

#### (1) 肉眼観察

##### ・ 椀形鍛冶滓 (試料番号 1 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.3)

やや小形で完形の椀形鍛冶滓 (132.6g) である。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が目立つ。表面は黄～茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また気孔は少なく緻密な滓である。

##### ・ 炉壁 (試料番号 2 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.45)

強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁片 (148.9g) である。内面表層には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着するが、着磁性はない。外面側には灰褐色の炉壁粘土がごく薄く残存する。粘土中には砂粒が多量に混和されている。

##### ・ 鍛冶滓 (試料番号 3 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1 No.52)

ごく小形の鍛冶滓破片 (31.4g) である。側面 4 面は破面。色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。滓中の気孔は少なく緻密である。

##### ・ 微細遺物 (試料番号 4 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1)

第 1 号鍛冶工房跡の炉 1 の覆土から回収された微細な鍛冶関連遺物である。微細な鍛冶滓片や、数 mm 大の金属粒 (またはその錆化物)、粒状滓<sup>(注1)</sup> や鍛造剥片<sup>(注2)</sup> が多数混在する。

#### 1) 粒状滓

やや大形で断面楕円状 (長径 3.5 mm) の粒状滓である。地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面に若干茶褐色の鉄錆が付着する。また表面は平滑であるが、微細な棘状の突起が点在する。

#### 2) 粒状滓

僅かに歪な球状 (1.8 mm) である。地の色調は黒灰色で、表面は比較的平滑である。

#### 3) 金属鉄粒

やや歪な球状の金属鉄粒 (3.3 mm) である。表面は茶褐色の土砂に覆われる。金属探知器反応があり、内部に金属鉄が残存すると推定される。

#### 4) 金属鉄粒 (錆化)

歪な形状の鉄粒 (2.2 mm) と推測される。表面は茶褐色の鉄錆で覆われる。金属探知器反応はなく、全体が錆化していると考えられる。

#### 5) 鍛冶滓片

大形で厚手 (5.2 × 3.6 × 0.6 mm) の剥片様遺物である。色調は暗灰色で、片面の表層には薄く茶褐色の鉄錆が付着する。

#### 6) 鍛造剥片

大形でやや薄手の (5.1 × 2.4 × 0.25 mm) 平坦な剥片である。表面は光沢の強い銀灰色、裏面側は光沢のない暗灰である。

##### ・ 椀形鍛冶滓 (試料番号 5 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 2 No.37)

やや大形で完形の椀形鍛冶滓 (181.5g) である。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面には茶褐色の鉄錆が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しく、木炭破片も複数付着している。気孔は少なく緻密な滓である。

・微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

第28号鍛冶工房跡の炉2の覆土から回収された微細な鍛冶関連遺物である。炉1から回収された微細遺物（試料番号7）と同様に、微細な鍛冶滓片、数mm大の金属粒（またはその錆化物）、粒状滓や鍛造剥片が多数混在する。

1) 粒状滓

1箇所突起がみられるが、比較的きれいな球状（2.8mm）の粒状滓である。色調は暗灰色で着磁性がある。

2) 金属鉄粒

大形でやや歪な球状（5.0mm）の金属鉄粒である。表面全体が茶褐色の鉄錆で覆われる。金属探知器反応があるため、内部に金属鉄が残存すると考えられる。

3) 金属鉄粒

やや歪な球状（4.8mm）の金属鉄粒である。表面全体が茶褐色の鉄錆で覆われ、両端には2箇所錆瘤がみられる。しかし金属探知器反応があるため、内部に金属鉄が残存すると考えられる。

4) 粒状滓（含鉄）

やや歪な球状（3.8mm）の粒状滓と推定される。表面は茶褐色の鉄錆で覆われるが、金属探知器反応はなく着磁性も弱い。

5) 鍛造剥片

大形（7.5 × 5.5 × 0.3mm）でやや平坦な鍛造剥片である。表裏面とも光沢のない暗灰色で、茶褐色の鉄錆が薄く付着する。

6) 鍛造剥片

やや小形で平坦（3.8 × 3.0 × 0.25mm）な鍛造剥片である。表裏面とも光沢のない暗灰色である。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

やや小形で不定形の鍛冶滓破片（32.8g）と推測される。滓の色調は黒灰色で着磁性はごく弱い。複数条の細い流動状の滓が接した状態で凝固したものと考えられる。全体に気孔は少なく緻密である。

・椀形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

1) 椀形鍛冶滓

完形でごく小形の椀形鍛冶滓（23.9g）である。表面には薄く茶褐色の鉄錆が付着する。着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しい。

2) 粒状滓

やや歪な球状（2.5mm）の粒状滓であった。表面に薄く茶褐色の鉄錆が付着するが着磁性は弱く、まとまった鉄部はみられない。

3) 粒状滓（含鉄）

歪な球状（2.3mm）の粒状滓であった。滓の色調は黒灰色で、表面は平滑である。また端部に1箇所茶褐色の錆瘤が付着するが、金属探知器反応はみられない。

4) 粒状滓

比較的きれいな球状（1.7mm）の粒状滓である。色調は暗灰色で、表面には微細な気孔が点在する。また表面には部分的に茶褐色の鉄錆が付着する。

5) 鍛冶滓片

やや厚手で平坦な剥片様遺物（3.7 × 1.6 × 0.5mm）である。表裏面とも光沢のない暗灰色で、ごく薄く茶褐色の鉄錆が付着する。

## 6) 鍛冶滓片

表裏面とも微細な凹凸のある剥片様遺物 (3.8 × 3.5 × 0.3 mm) である。表面には茶褐色の鉄錆が付着する。

### ・ 椀形鍛冶滓 (含鉄) (試料番号 9 : 第 276 号土坑 No.23)

やや小形で完形の椀形鍛冶滓 (131.0g) である。表面には広い範囲で茶褐色の鉄錆が付着する。金属探知器反応もあるため、内部に金属鉄が残存する可能性が高い。一方滓の色調は黒灰色で、上下面とも微細な木炭痕による凹凸が著しい。気孔は少なく緻密な滓である。

### ・ 炉壁 (試料番号 10 : 第 276 号土坑 No.35)

強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁片 (66.7g) である。内面表層には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着しており、弱い着磁性がある。一方、外面側には灰褐色の炉壁粘土がごく薄く残存する。粘土中には小礫や砂粒が多量に混和されている。

### ・ 製錬滓 (試料番号 11 : 第 276 号土坑 No.71)

やや小形の製錬滓 (炉内滓) の破片 (94.7g) と推定される。上面と側面は全面破面である。色調は灰褐色で着磁性は弱い。内部には中小の気孔が散在するが、緻密な滓である。

## (2) 顕微鏡組織

### ・ 椀形鍛冶滓 (試料番号 1 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.3)

図版 1 ①～③に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト (Wustite : FeO) が晶出する。鉄酸化物主体の鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。また滓中の微小明白色粒は金属鉄、不定形青灰色部は錆化鉄である。

### ・ 炉壁 (試料番号 2 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.45)

図版 1 ④～⑥に示す。炉壁内面表層部の素地 (灰色部) はガラス質滓 (非晶質珪酸塩) である。内部には微細な石英等の砂粒が多数混在する。また滓中の灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite:FeO·Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), 微細な淡灰色結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>) である。鉄材の酸化に伴う反応副生物と推測される。

### ・ 鍛冶滓 (試料番号 3 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1 No.52)

図版 2 ①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO·TiO<sub>2</sub>), 白色粒状結晶ウスタイト, 淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

### ・ 微細遺物 (試料番号 4 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1)

## 1) 粒状滓

図版 2 ④⑤に示す。素地 (暗灰色部) はガラス質滓 (非晶質珪酸塩) で、白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

## 2) 粒状滓

図版 2 ⑥⑦に示す。素地 (暗灰色部) はガラス質滓 (非晶質珪酸塩) で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル, 白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

## 3) 金属鉄粒

図版 3 ①②に示す。全体に腐食 (錆化) が進んでいるが、内部に若干金属鉄が残存する (①の左側。②はその拡大)。金属鉄部の素地は層状のパーライト (Pearlite) で、白色針状のセメンタイト (Cementite : Fe<sub>3</sub>C) および黒色片状の黒鉛 (Graphite:C) が析出する。ねずみ鑄鉄組織が確認された。

## 4) 金属鉄粒 (錆化)

図版 3 ③④に示す。全体が錆化しているが、蜂の巣状のレデブライイト (Ledeburite) が残存する。この特徴から亜共晶組成白鑄鉄と推定される。

## 5) 鍛冶滓片

図版3⑤⑥に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鉄材の吹き減り（酸化に伴う損失）による鍛錬鍛冶滓と推定される。

## 6) 鍛造剥片

図版3⑦⑧に示す。表層（写真上側）に部分的に確認される明白色層はヘマタイト（Hematite:Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、中間の灰褐色層はマグネタイト（Magnetite:FeO·Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、内側の灰色層はウスタイト（Wustite）である。

今回断面観察を実施した微細遺物6点のうち、粒状滓2点はそれぞれ精錬鍛冶（試料番号4-1）～鍛錬作業（試料番号4-2）で生じた反応副生物と推定される。また鉄粒2点はともに鑄鉄粒（試料番号4-3,4）であった。これは炭素含有量の高い銑（鑄鉄）を脱炭して鍛打可能な鍛冶原料としていたことを示す遺物といえる。さらに微細な板状の鍛冶滓（試料番号4-5）や鍛造剥片（試料番号4-6）も1点ずつ確認された。

・ 椀形鍛冶滓（試料番号5：第1号鍛冶工房跡 炉2 No.37）

図版4①～③に示す。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel:2FeO·TiO<sub>2</sub>）、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

・ 微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

### 1) 粒状滓

図版4④⑤に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

### 2) 金属鉄粒

図版4⑥⑦に示す。亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。

### 3) 金属鉄粒

図版5①②に示す。内部に金属鉄が残存しており、過共析～亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。

### 4) 粒状滓（含鉄）

図版5③④に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓で、滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel:2FeO·TiO<sub>2</sub>）が晶出する。一方青灰色部は銹化鉄で、亜共晶組成白鑄鉄組織痕跡が残存する。鍛冶原料（砂鉄製錬滓が付着した鑄鉄塊）を熔融して不純物を除去する際に生じた微細遺物と推定される。

## 5) 鍛造剥片

図版5⑤⑥に示す。写真上側の明白色層はヘマタイト、中間の灰褐色層はマグネタイト、内側の灰色層はウスタイトである。

## 6) 鍛造剥片

図版5⑦⑧に示す。写真上側の明白色層はヘマタイト、中間の灰褐色層はマグネタイト、内側の灰色層はウスタイトである。

今回断面観察を実施した微細遺物6点のうち、粒状滓2点（試料番号6-1,4）は精錬鍛冶作業で生じた反応副生物と推定される。このうち1点（試料番号6-4）は滓中に微細な鑄鉄粒が確認された。さらに鉄粒2点のうち1点（試料番号6-2）は鑄鉄粒で、もう1点（試料番号6-3）も過共析～亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。これは炭素含有量の高い銑（鑄鉄）を脱炭して鍛打可能な鍛冶原料としたことを示す遺物である。また鍛造剥片（試料番号6-5,6）も2点確認された。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

図版6①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。また③中央の青灰色粒は銹化鉄である。内部には過共析組織の痕跡が残存する。

・椀形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

#### 1) 椀形鍛冶滓

図版6④～⑥に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄，不定形の青灰色部は銹化鉄である。

#### 2) 粒状滓

図版7①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

#### 3) 粒状滓（含鉄）

図版7④～⑥に示す。素地（灰色部）はガラス質滓（非晶質珪酸塩）で，内部の微細な明白色粒は金属鉄である。これは炉表面や羽口先端，または鉄材表面の酸化防止や鍛接剤に用いた粘土の溶融物と推定される。一方写真右側の青灰～黒灰色部は銹化鉄である。内部には黒鉛が残存しており，ねずみ鑄鉄であったことが確認された。

#### 4) 粒状滓

図版7⑦⑧に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄，不定形の青灰色部は銹化鉄である。

#### 5) 鍛冶滓片

図版8①②に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓（非晶質珪酸塩）で，白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。熱間での鍛打に伴う吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

#### 6) 鍛冶滓片

図版8③④に示す。ウスタイトが凝集して晶出する。また内部の微細な明白色部は金属鉄，④右下の暗灰色部はガラス質滓（非晶質珪酸塩）である。

微細遺物5点（試料番号8-2～6）を選択して，断面観察を実施した。粒状滓3点は，1点（試料番号8-2）が精錬鍛冶作業に伴う遺物であった。1点は粘土溶融物（ガラス質滓）で，ねずみ鑄鉄（銹化）が溶着することから，銹（鑄鉄）の脱炭作業に伴う遺物と判断される。1点は鉄材の酸化による鉄酸化物主体の遺物（試料番号8-4），鍛錬鍛冶作業に伴う遺物であった。また板状の2点（試料番号8-5，6）は，鉄酸化物主体の鍛錬鍛冶滓と推定される。

・椀形鍛冶滓（含鉄）（試料番号9：第276号土坑 No.23）

図版8⑤～⑦に示す。滓中にはやや歪な粒状（約15×9mm）の金属鉄が確認された。鉄部は過共析～亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。また⑥中央は滓部で，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

・炉壁（試料番号10：第276号土坑 No.35）

図版9①～③に示す。不定形青灰色部は銹化鉄である。一方炉壁内面表層の素地（灰色部）は，ガラス質滓（非晶質珪酸塩）である。内部には微細な石英等の砂粒が多数混在する。また滓中には淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。酸化雰囲気での鉄材と炉材粘土の反応副生物と推測される。



・製鍊滓（試料番号 11：第 276 号土坑 No.71）

図版 9④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色針状結晶イルメナイト（Ilmenite： $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製鍊滓の晶癖である。また滓中には，外周にウルボスピネルが晶出した被熱砂鉄（含チタン鉄鉱）<sup>(注3)</sup>が複数点在する。

### (3) 化学組成分析

・椀形鍛冶滓（試料番号 1：第 1 号鍛冶工房跡 No.3）

表 2 に示す。全鉄分（Total Fe）の割合が 59.67% と高い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.07%，酸化第 1 鉄（FeO）が 34.53%，酸化第 2 鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）46.84% であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ）は 9.14% と低めで，このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）は 1.50% であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）は 0.75%，酸化バナジウム（ $\text{V}_2\text{O}_5$ ）が 0.07% と低値であった。

当鉄滓は鉄酸化物主体で，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（ $\text{TiO}_2$ ， $\text{V}_2\text{O}_5$ ）の低減傾向が顕著であった。この特徴から，鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた反応副生物（鍛鍊鍛冶滓）と推定される。

・炉壁（試料番号 2：第 1 号鍛冶工房跡 No.45）

表 2 に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は 13.67% であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.17%，酸化第 1 鉄（FeO）が 8.47%，酸化第 2 鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）9.89% の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ）の割合は 75.47% で，このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）は 5.52% であった。二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）1.12%，酸化バナジウム（ $\text{V}_2\text{O}_5$ ）は 0.05% であった。これは炉壁粘土中の砂粒（含チタン鉄鉱）の影響があると考えられる

当炉壁は鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。内面表層のガラス質滓中には被熱砂鉄や製鍊滓は溶着していない。

表 2 化学組成分析結果

番号	遺構名	名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第 1 鉄 (FeO)	酸化第 2 鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )	二酸化珪素 ( $\text{SiO}_2$ )	酸化 アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)	二酸化 チタン ( $\text{TiO}_2$ )	酸化 バナジウム ( $\text{V}_2\text{O}_5$ )
1	覆土中	椀形鍛冶滓	59.67	0.07	34.53	46.84	4.90	2.74	1.03	0.47	0.75	0.07
2		炉壁	13.67	0.17	8.47	9.89	51.06	18.89	3.91	1.61	1.12	0.05
3	第 1 号 鍛冶工房跡	鍛冶滓	50.58	0.06	52.97	13.36	16.16	5.52	3.24	1.06	2.30	0.12
4		微細遺物	62.61	0.42	43.14	40.97	5.11	2.73	1.15	0.94	3.20	0.20
5	第 1 号 鍛冶工房跡	椀形鍛冶滓	46.24	0.17	43.88	17.10	15.86	4.85	2.86	1.89	10.06	0.32
6		微細遺物	61.8	0.33	47.88	34.68	6.11	3.18	0.95	0.64	2.00	0.11
7	第 1 号 鍛冶工房跡	鍛冶滓（流動状）	45.95	0.25	51.55	8.05	20.87	7.51	3.01	1.37	3.53	0.16
8-1		椀形鍛冶滓	67.03	0.06	52.79	37.08	2.62	1.31	0.27	0.33	1.00	0.05
9	第 276 号土坑	椀形鍛冶滓（含鉄）	60.71	7.29	30.51	42.47	7.05	2.41	0.72	0.33	0.97	0.05
10		炉壁	12.53	0.13	6.24	10.79	55.31	19.24	1.59	1.49	1.60	0.07
11		製鍊滓	29.09	0.30	28.22	9.80	23.74	5.85	4.07	3.01	20.96	0.55

・鍛冶滓（試料番号3：第1号鍛冶工房跡 炉1 No.52）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）50.58%に対して、このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.06%、酸化第1鉄（FeO）が52.97%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）13.36%の割合であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO）25.98%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.30%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は2.30%、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）が0.12%であった。

滓中に製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO<sub>2</sub>、V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）の影響が残ることから、当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。

・微細遺物（試料番号4：第1号鍛冶工房跡 炉1）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は62.61%と高い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.42%、酸化第1鉄（FeO）が43.14%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）は40.97%であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO）の割合は9.93%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は2.09%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は3.20%、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）が0.20%であった。

以上の化学分析結果から、当遺物中の微細な鍛冶滓や粒状滓には、砂鉄起源の鉄チタン酸化物を含むものが一定量混在すると考えられる。

・椀形鍛冶滓（試料番号5：第1号鍛冶工房跡 炉2 No.37）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）46.24%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.17%、酸化第1鉄（FeO）が43.88%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）17.10%の割合であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO）25.46%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.75%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は10.06%、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）が0.32%と高値であった。

当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。鍛冶滓としては砂鉄起源の脈石成分（TiO<sub>2</sub>、V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）の割合が非常に高い。金属鉄と製錬滓の分離が悪い鉄塊が鍛冶原料で、その不純物（砂鉄製錬滓）の除去作業（精錬鍛冶）に伴う反応副生物と考えられる。

・微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）61.80%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.33%、酸化第1鉄（FeO）が47.88%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）34.68%の割合であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO）は10.88%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は1.59%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は2.00%、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）が0.11%であった。

以上の化学分析結果から、炉1出土遺物（試料番号4）と同じく、当遺物中の微細な鍛冶滓や粒状滓にも砂鉄起源の鉄チタン酸化物を含むものが一定量混在すると考えられる。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）45.95%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.25%、酸化第1鉄（FeO）が51.55%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）8.05%の割合であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO）32.76%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.38%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は3.53%、酸化バナジウム（V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）が0.16%であった。

滓中に製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO<sub>2</sub>、V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）の影響が残ることから、当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。

・椀形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

1) 椀形鍛冶滓

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合が 67.03% と高い。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.06%, 酸化第 1 鉄 (FeO) が 52.79%, 酸化第 2 鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 37.08% であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO) の割合は 4.53% と低く、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 0.60% であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 1.00%, 酸化バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が 0.05% と低値であった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓 (試料番号 1) と同様、鉄酸化物主体で製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>, V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) の低減傾向が顕著であった。この特徴から、鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた反応副生物 (鍛錬鍛冶滓) と推定される。

・椀形鍛冶滓 (含鉄) (試料番号 9 : 第 276 号土坑 No.23)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 60.71% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 7.29%, 酸化第 1 鉄 (FeO) が 30.51%, 酸化第 2 鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 42.47% の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO) の割合は 10.51% と低く、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 1.05% であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 0.97%, 酸化バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が 0.05% と低めであった。

当鉄滓中にはウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO·TiO<sub>2</sub>) が晶出する。この特徴から、滓部は精錬鍛冶滓と推定される。また滓中には小形の (過共析～亜共晶組成白鉄組織の) 金属鉄が確認された。鍛打加工前の鍛冶原料が滓中に取り残されたものと考えられる。

・炉壁 (試料番号 10 : 第 276 号土坑 No.35)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 12.53% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.13%, 酸化第 1 鉄 (FeO) が 6.24%, 酸化第 2 鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 10.79% の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO) の割合は 77.63% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 3.08% であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 1.60%, 酸化バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が 0.07% であった。これは炉壁粘土中の砂粒 (含チタン鉄鉱) の影響があると考えられる。

当炉壁は鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。内面表層のガラス質滓中には被熱砂鉄や製錬滓は溶着していない。

・製錬滓 (試料番号 11 : 第 276 号土坑 No.71)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は 29.09% と低い。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.30%, 酸化第 1 鉄 (FeO) が 28.22%, 酸化第 2 鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 9.80% の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO) は 36.67% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 7.08% であった。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 20.96%, バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が 0.55% と高値であった。

当鉄滓は砂鉄製錬滓に分類される。滓中には熱影響を受けた砂鉄粒子が複数確認され、砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>, V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) も高値傾向が顕著であった。

#### 4 考察

金田西坪 B 遺跡から出土した鍛冶関連遺物を調査した結果、当遺跡には高チタン砂鉄を製錬してつくられた鍛冶原料鉄 (未加工の製錬鉄塊系遺物) が搬入され、精錬～鍛錬鍛冶作業が行われていたことが明らかとなった。この特徴から鍛冶工房跡 (第 1 号鍛冶工房跡) は、地域周辺も含む東日本の広い範囲で鉄生産が行われるようになった、7 世紀後半以降の遺構の可能性が高いと考えられる。詳細は以下の通りである。

(1) 今回調査を実施した鉄滓のうち 1 点 (試料番号 11) は、チタニアの割合が高く砂鉄製錬滓に分類される (TiO<sub>2</sub> : 20.96%)。茨城県内かすみがうら市 (旧千代田村) 粟田かなくそ山製鉄遺跡の炉に伴う出土鉄滓もチタニアの割合が高く (TiO<sub>2</sub> : 10.14 ~ 23.39%)<sup>(註4)</sup>、同様の高チタン砂鉄を製鉄原料とした鉄産地から、鍛冶原

料鉄が搬入されていたと推定される。

(2) 鉄滓4点(試料番号3, 5, 7, 9)は, チタニアの影響が残ることから, 精錬鍛冶滓に分類される。また粒状滓中にもウルボスピネル(Ulvöspinel:  $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ )が晶出するものが複数(試料番号4-2, 6-1・4, 8-2)確認された。これも遺跡内で鍛冶原料の不純物除去(精錬鍛冶)が行われたことを示す遺物といえる。

(3) 鉄滓2点(試料番号1, 8-1)は鉄酸化物主体で, 鉄材を熱間で加工した時の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。同様の鉄酸化物主体の微細遺物も複数(試料番号4-1・5・6, 6-5・6, 8-4~6)確認された。これらは遺跡内で鍛造鉄器が製作されたことを示唆する遺物群である。

(4) 椀形鍛冶滓(試料番号9)中には, ごく小形の金属鉄部が確認された。精錬鍛冶作業中に滓中に取り残されたものと推定される。金属組織は過共析~亜共晶組成白鑄鉄組織と高炭素材であった。

さらに微細遺物中に鉄粒も複数確認された。(試料番号4-3・4, 6-2・3)。これらも鑄鉄の割合が高く, 銑(鑄鉄)を鍛冶炉で脱炭して鍛打加工可能な状態にする際, 熔融状態の銑(鑄鉄)表面から飛散した微細な粒が, 炉周辺で冷却・凝固したものと推測される。こうした遺物の報告例は少ないが, 奈良県明日香村檜隈寺周辺遺跡の鍛冶関連遺物の調査<sup>(注5)</sup>で報告されている。以上の調査結果から, 当遺跡には鍛冶原料として銑(鑄鉄)が相当量搬入されていたと考えられる。

(5) 炉壁2点(試料番号2, 10)は, 内面表層のガラス質滓中に被熱砂鉄や製錬滓は溶着していない。鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。

(注)

(1) 粒状滓は熱間での鍛打作業に伴って生じる, 微細な球状の遺物である。鉄酸化物主体のものや, 粘土溶融物(ガラス質滓)主体のものがある。

(2) 鍛造剥片は, 熱間で鍛打したときに剥離・飛散した, 鉄素材の表面の鉄酸化膜を指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は, 外層は微厚のヘマタイト(Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ), 中間層マグネタイト(Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ), 大部分は内層ウスタイト(Wustite:  $\text{FeO}$ )の3層から構成される。

(3) J.B. Macchiesney and A. Murau: American Mineralogist, 46 (1961), 572

[イルメナイト(Ilmenite:  $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ), シュードブルッカイト(Pseudobrookite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$ )の晶出は $\text{FeO}-\text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高温化操作が推定される。]

(4) 高塚秀治「栗田かなくそ山遺跡出土鉄滓の分析結果について」『栗田かなくそ山製鉄遺跡調査報告』千代田村教育委員会 1990

(5) 大澤正己・鈴木瑞穂「檜隈寺周辺出土鍛冶関連遺物の分析調査」『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村教育委員会 2013

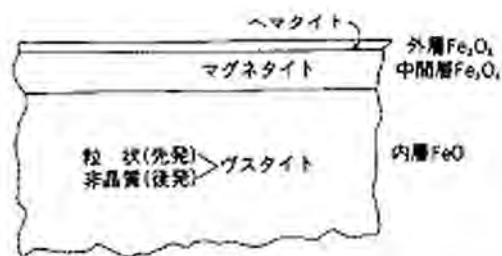


図1 鍛造剥片3層分離型模式図

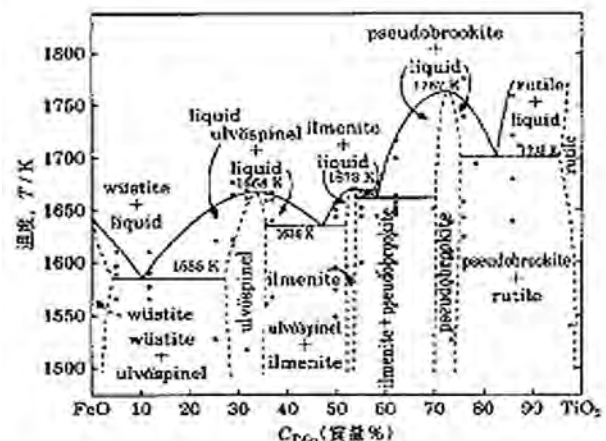
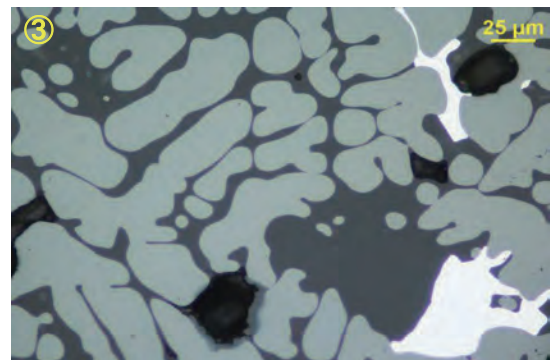
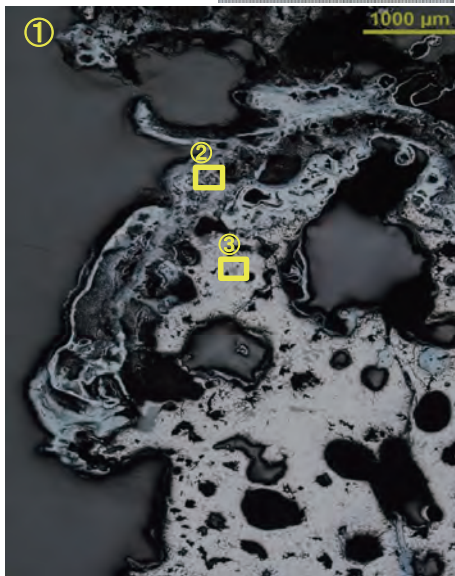
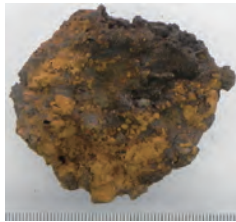


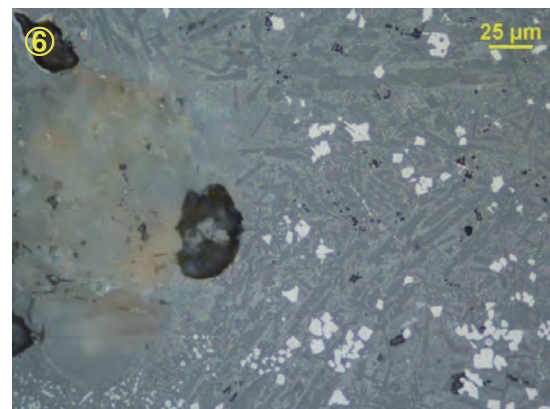
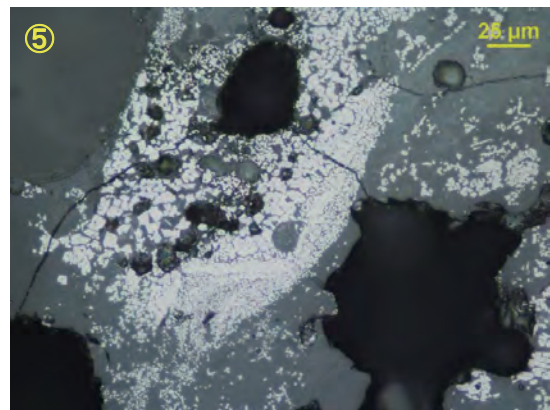
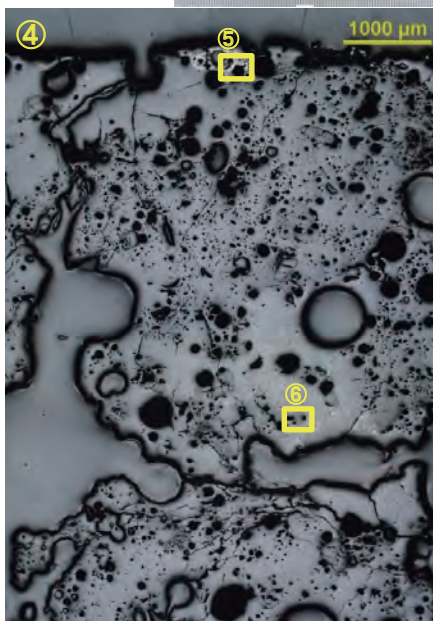
図2  $\text{FeO}-\text{TiO}_2$  二元平衡状態図

図版1 椀形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織

No.1 椀形鍛冶滓  
 ①～③滓部：ウスタト、  
 青灰色部：錆化鉄、  
 微小明白色粒金属鉄



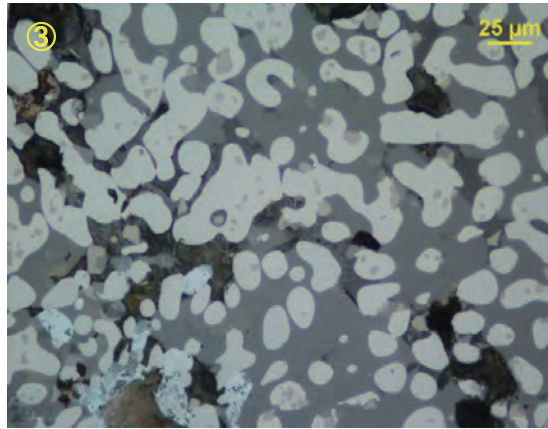
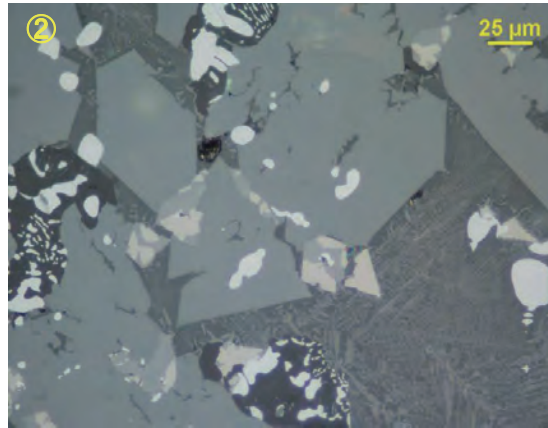
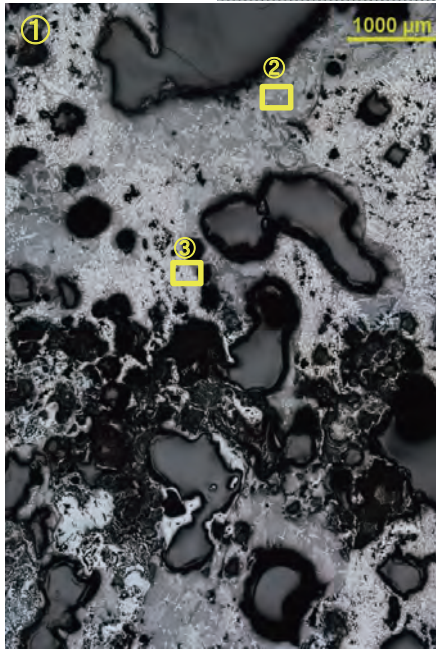
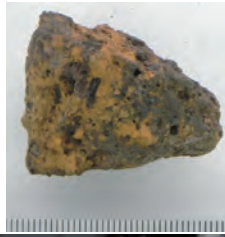
No.2 炉壁  
 ④～⑥内面表層ガラス  
 質滓（石英粒混在）、  
 滓部：マグネシウム・フェライト



図版2 鍛冶滓・粒状滓の顕微鏡組織

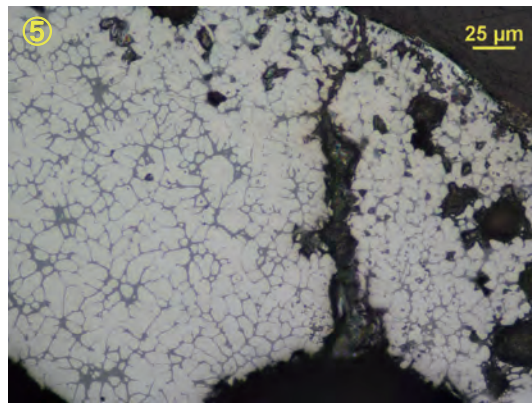
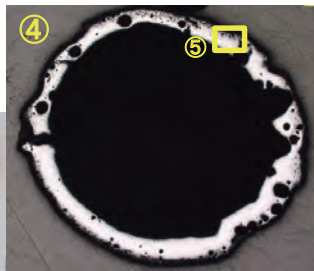
No.3 鍛冶滓

①～③滓部：ウスタト・  
 ウルホスピル・ファイラト、  
 不定形青灰色部：銹化鉄



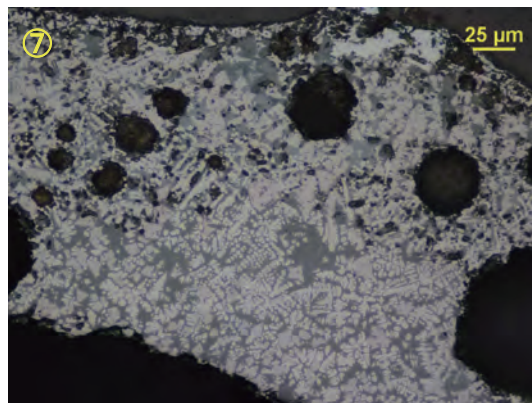
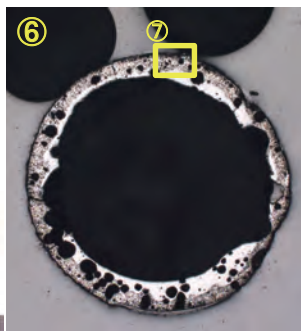
No.4-1 粒状滓

④⑤滓部：ウスタト

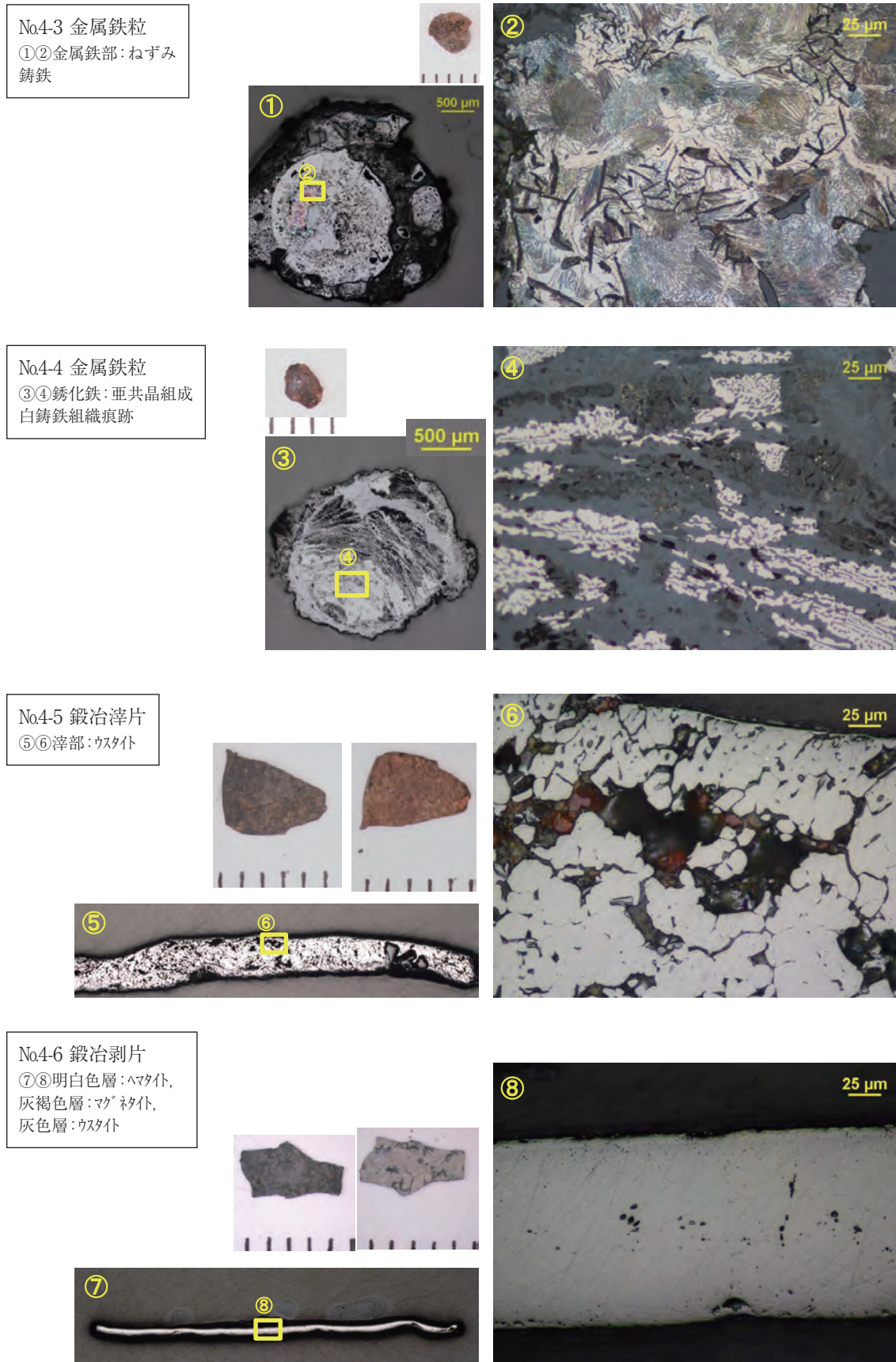


No.4-2 粒状滓

⑥⑦滓部：ウルホスピル  
 ・ウスタト



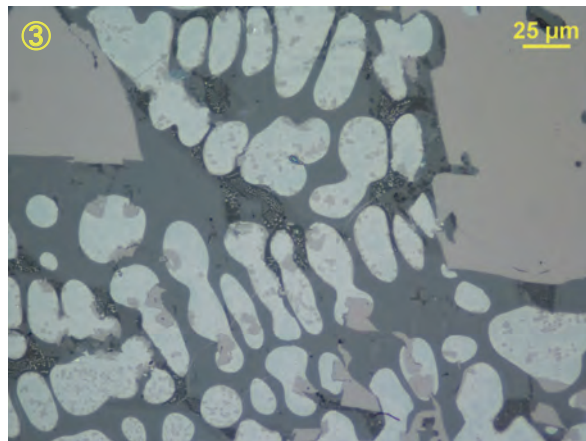
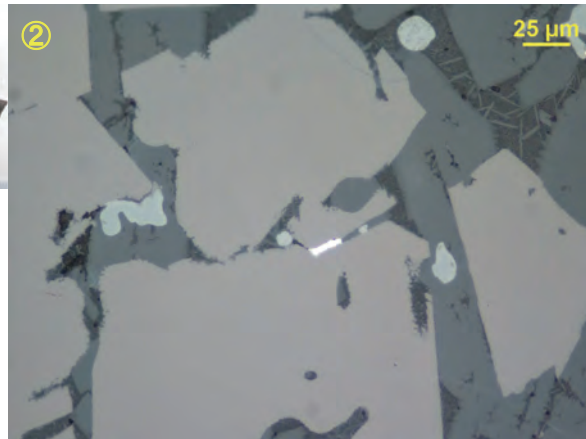
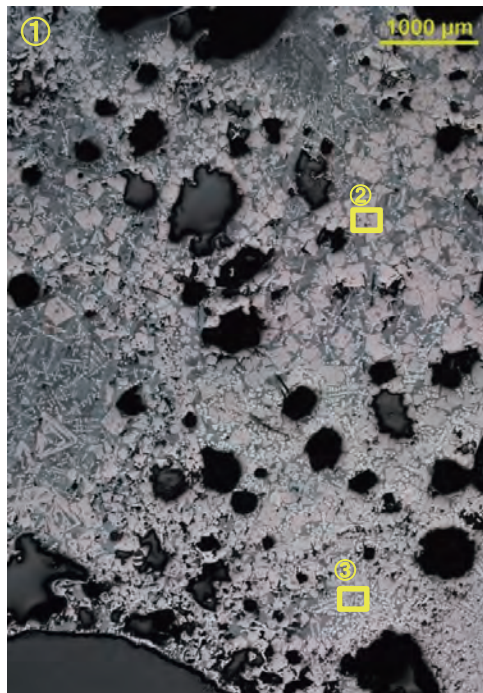
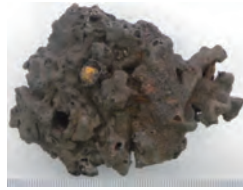
図版3 金属鉄粒・鍛冶剥片の顕微鏡組織



図版4 梔形鍛冶滓・粒状滓・金属鉄粒の顕微鏡組織

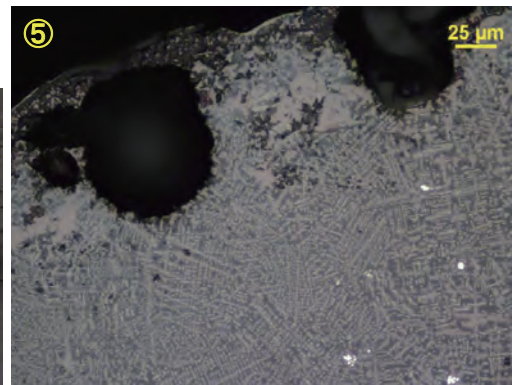
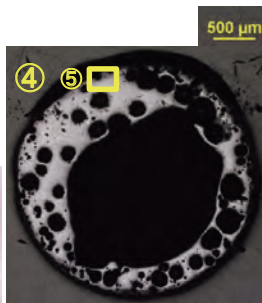
No5 梔形鍛冶滓

①～③滓部：ウスタト・ウルホスピ  
ル・ファヤライト、  
微小白色粒：金属鉄



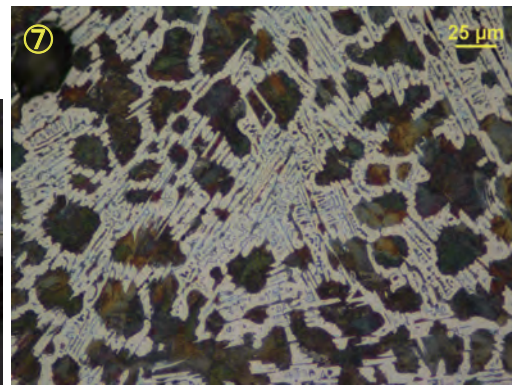
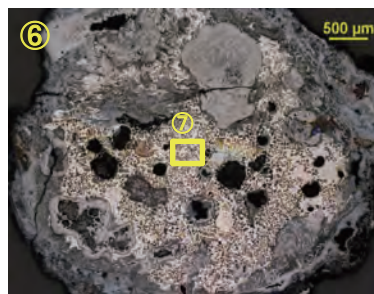
No6-1 粒状滓

④⑤滓部：ウスタト・ウルホスピル、  
微小白色粒：金属鉄



No6-2 金属鉄粒

⑥⑦金属鉄部：亜共  
晶組成白鑄鉄組織

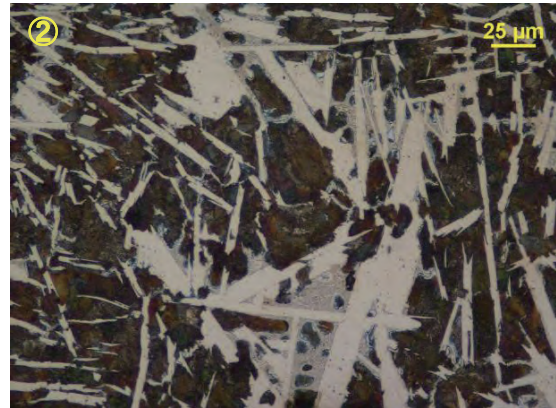
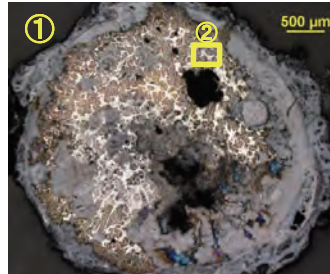




図版5 金属鉄粒・粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織

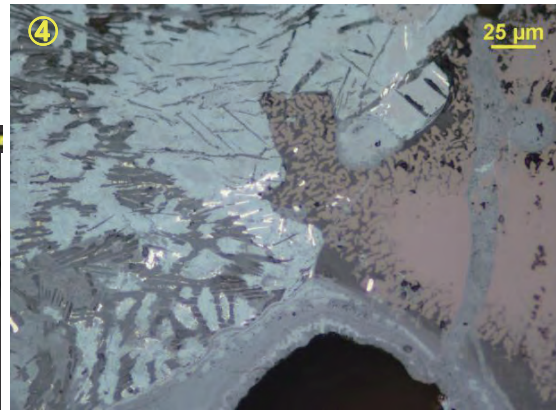
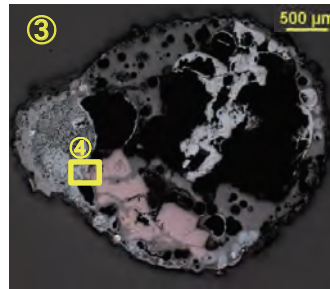
No6-3 金属鉄粒

①②金属鉄部：過共析組織～亜共晶組成  
白鑄鉄組織



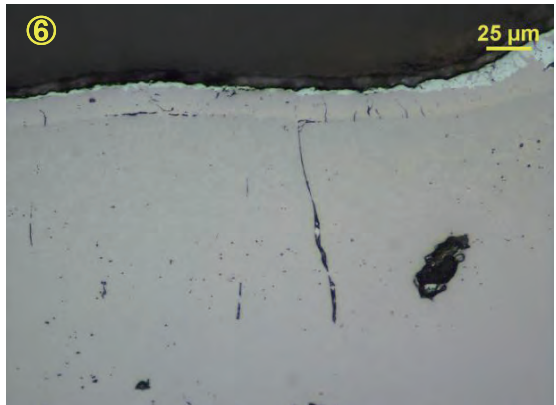
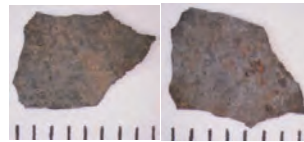
No6-4 粒状滓

(含鉄) ③④錆化鉄部：亜共晶組成白鑄鉄組織，滓部：ウルボスピネル



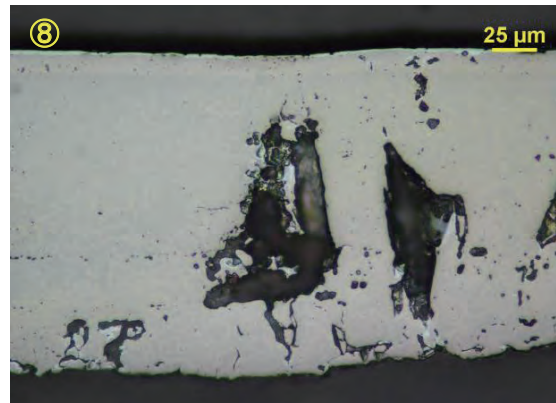
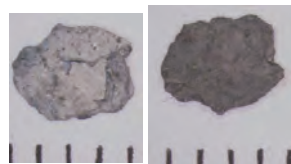
No6-5 鍛造剥片

⑤⑥明白色層：ハマタイト，  
灰褐色層：マグネタイト，  
灰色層：ウスタイト



No6-6 鍛造剥片

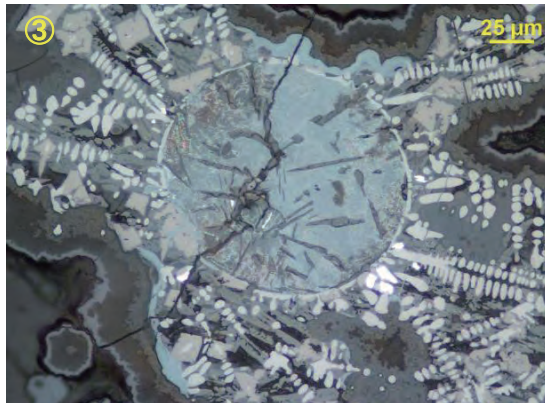
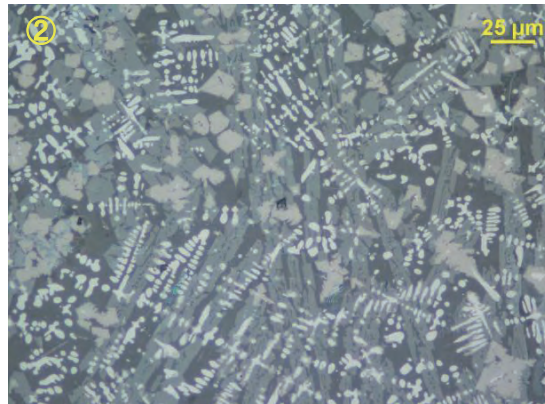
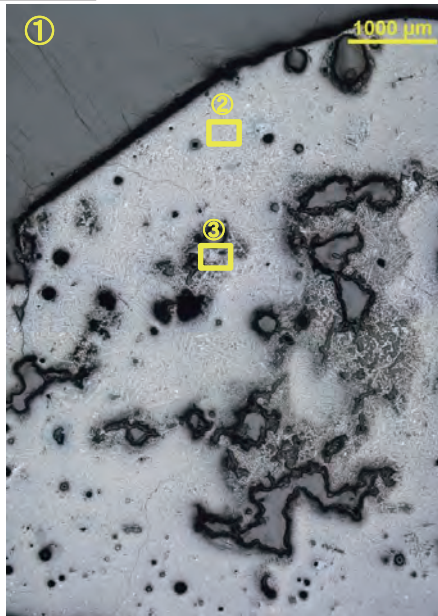
⑦⑧明白色層：ハマタイト，  
灰褐色層：マグネタイト，  
灰色層：ウスタイト



図版6 鍛冶滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

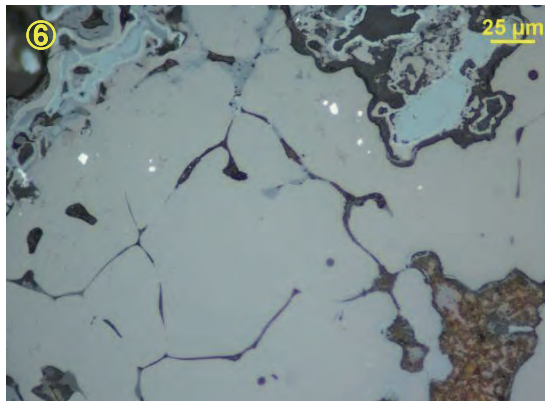
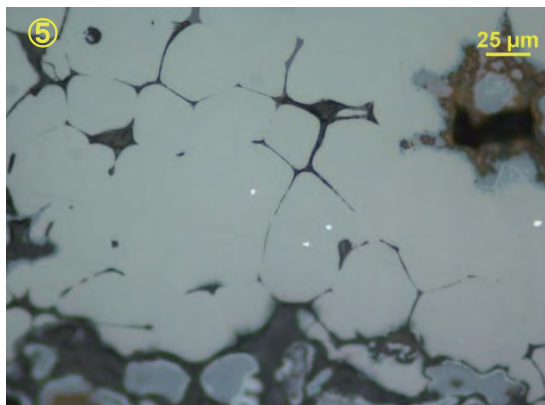
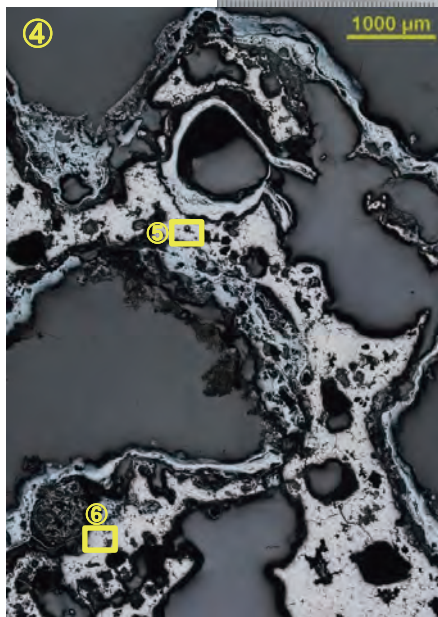
No.7 鍛冶滓

①～③滓部：ウスタト・ウルホスピル・ファライト、  
微小明白色粒：金属鉄  
③ 錆化鉄粒：過共析組織痕跡



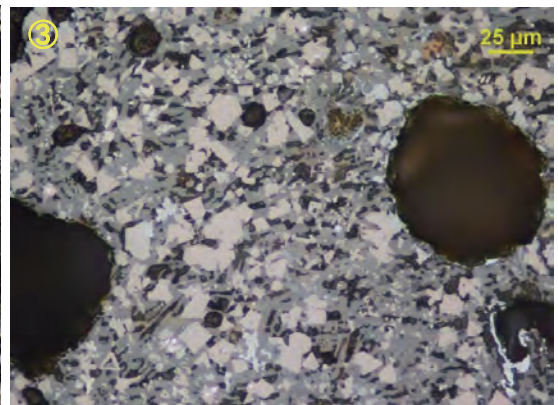
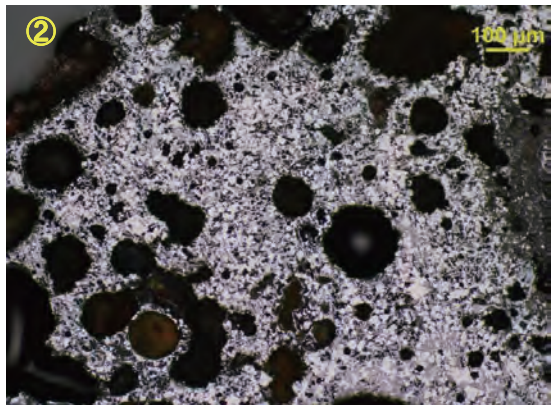
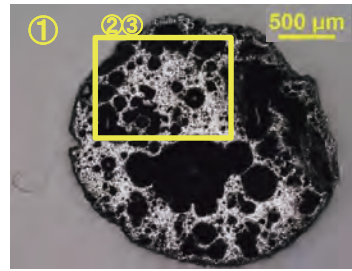
No.8-1 椀形鍛冶滓

④～⑥滓部：ウスタト、青灰色部：  
錆化鉄（金属組織痕跡不明瞭）、  
微小明白色部：金属鉄

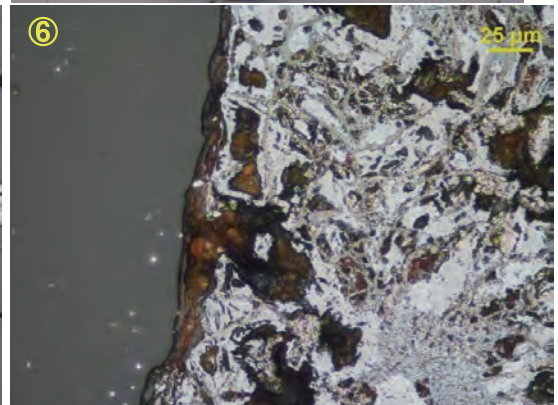
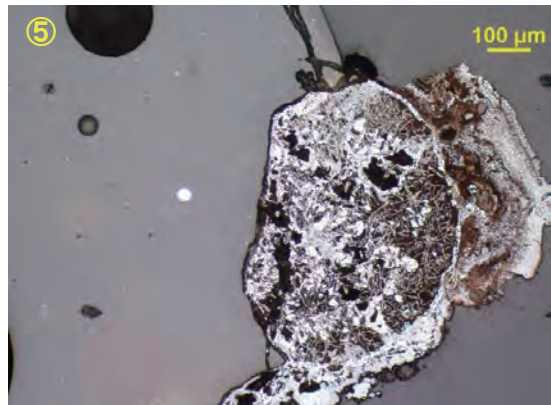
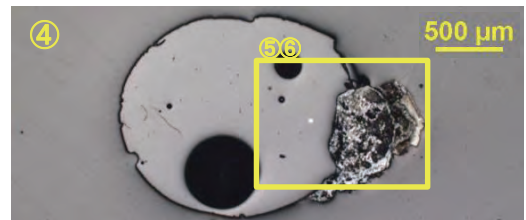
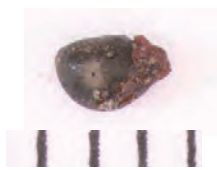


図版7 粒状滓の顕微鏡写真

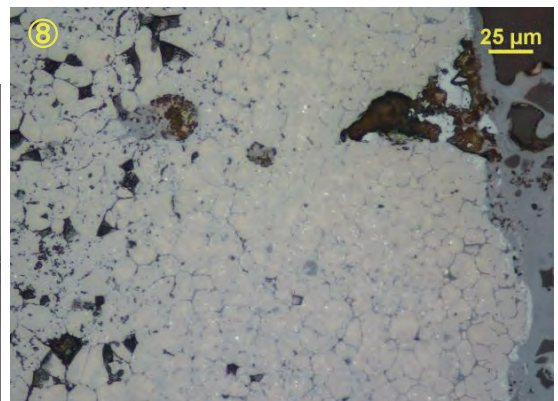
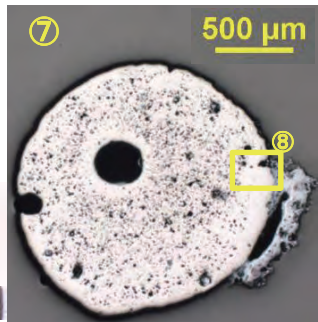
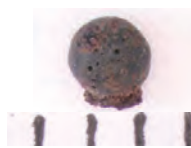
No8-2 粒状滓  
 ①～③滓部：ウルホスビネ  
 ル・ウスタト・フェライト



No8-3 粒状滓  
 ④～⑥滓部：ガラス質滓、  
 微小金属鉄粒、錆化鉄  
 部（ねずみ鑄鉄組織痕  
 跡）

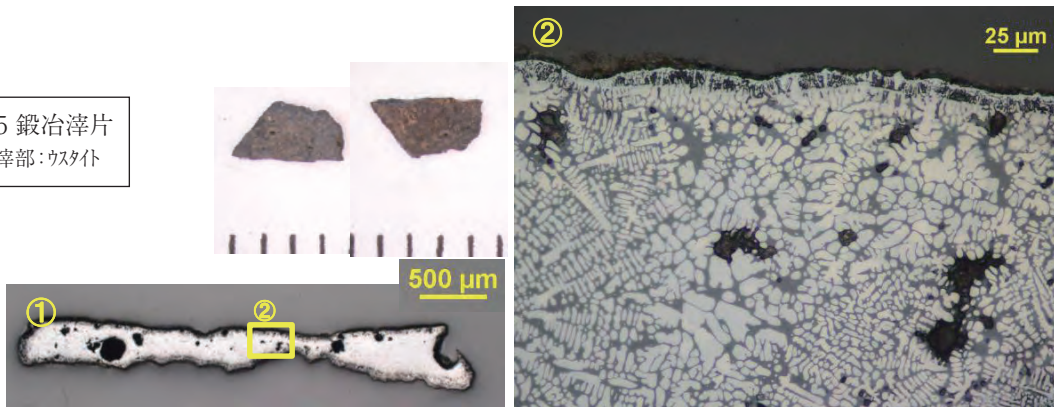


No8-4 粒状滓  
 ⑦⑧滓部：ウスタト

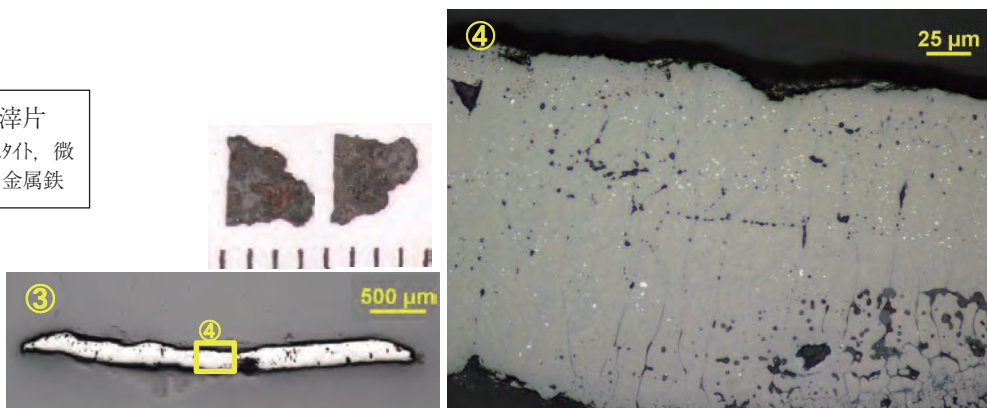


図版8 鍛造剥片・椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

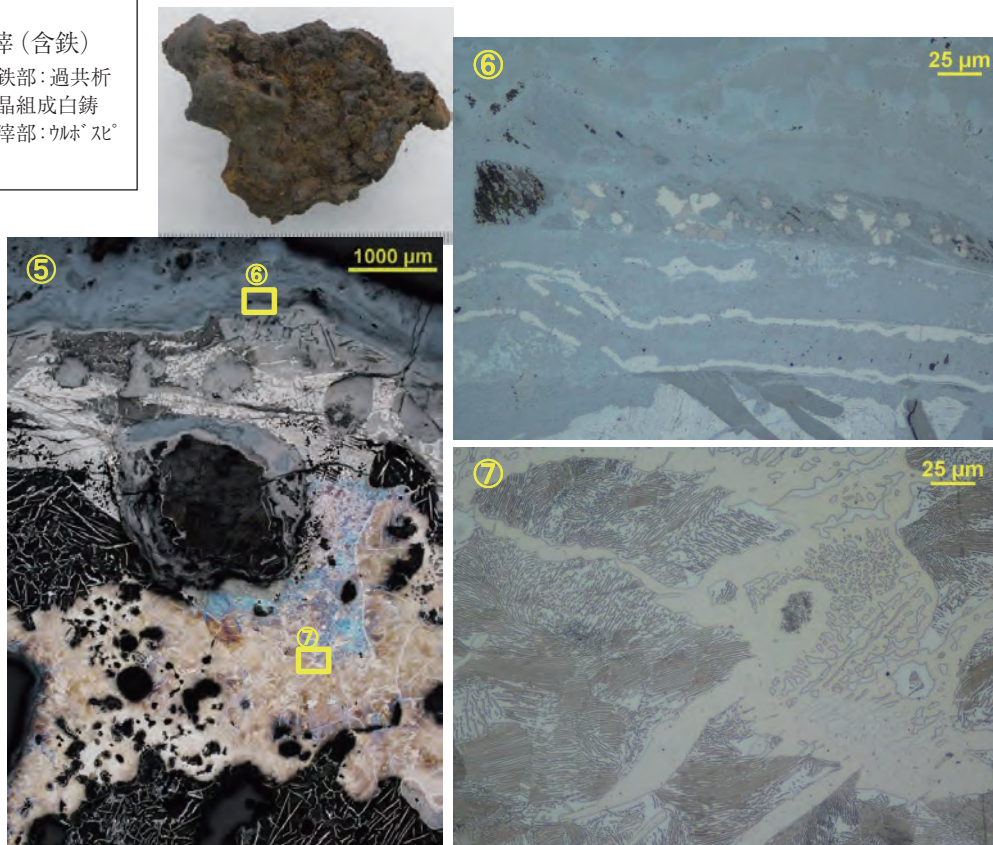
No.8-5 鍛冶滓片  
①②滓部:ウスタイト



No.8-6 鍛冶滓片  
③④滓部:ウスタイト, 微小明白色粒:金属鉄

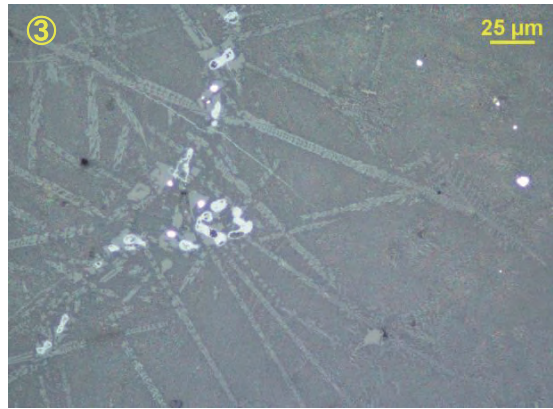
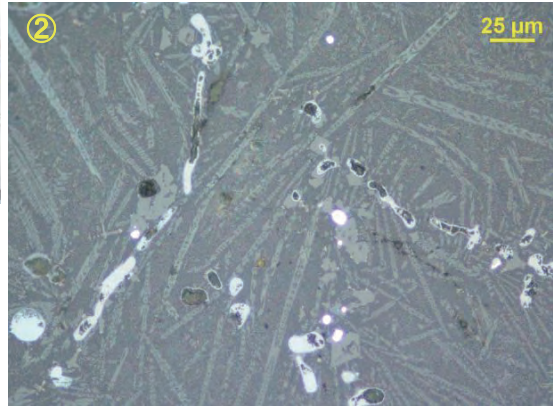
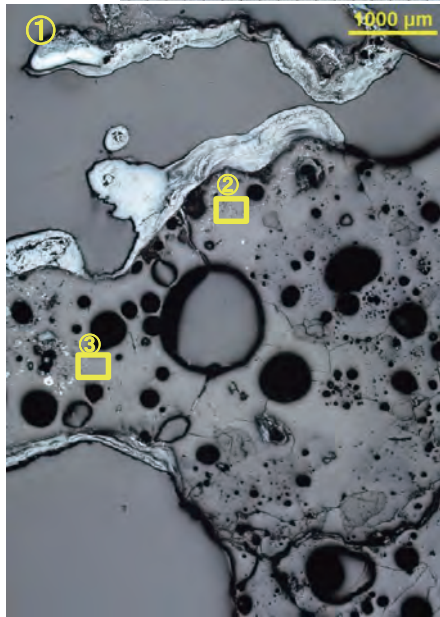
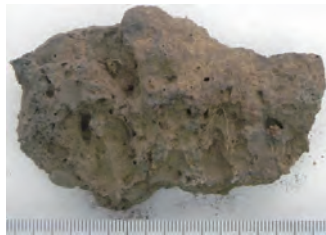


No.9  
椀形鍛冶滓(含鉄)  
⑤~⑦金属鉄部:過共析組織~亜共晶組成白鑄鉄, ⑥表層滓部:ウホノスビ  
ル・ウスタイト

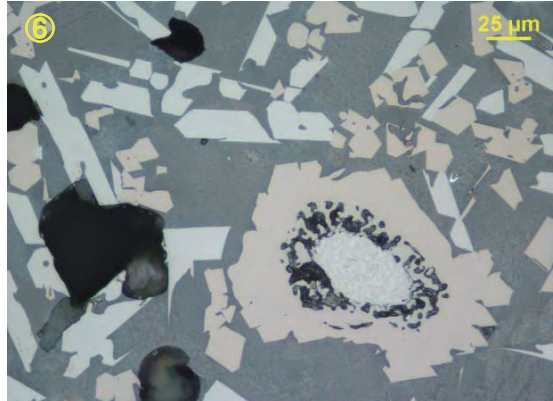
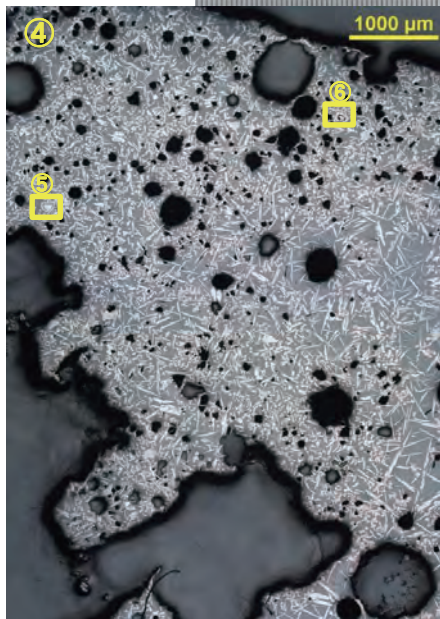
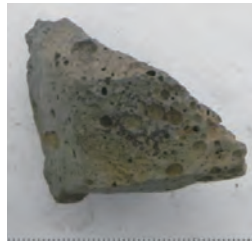


図版9 炉壁・精錬滓の顕微鏡組織

No.10 炉壁  
 ①～③内面表層がラ  
 質滓(石英粒混在),  
 滓部:ファヤライト



No.11 製錬滓  
 ④～⑥滓部:ウルホスピ  
 ル・イル対付, 被熱砂  
 鉄(含マン鉄鉱)



#### 4 奈良時代の遺構と遺物

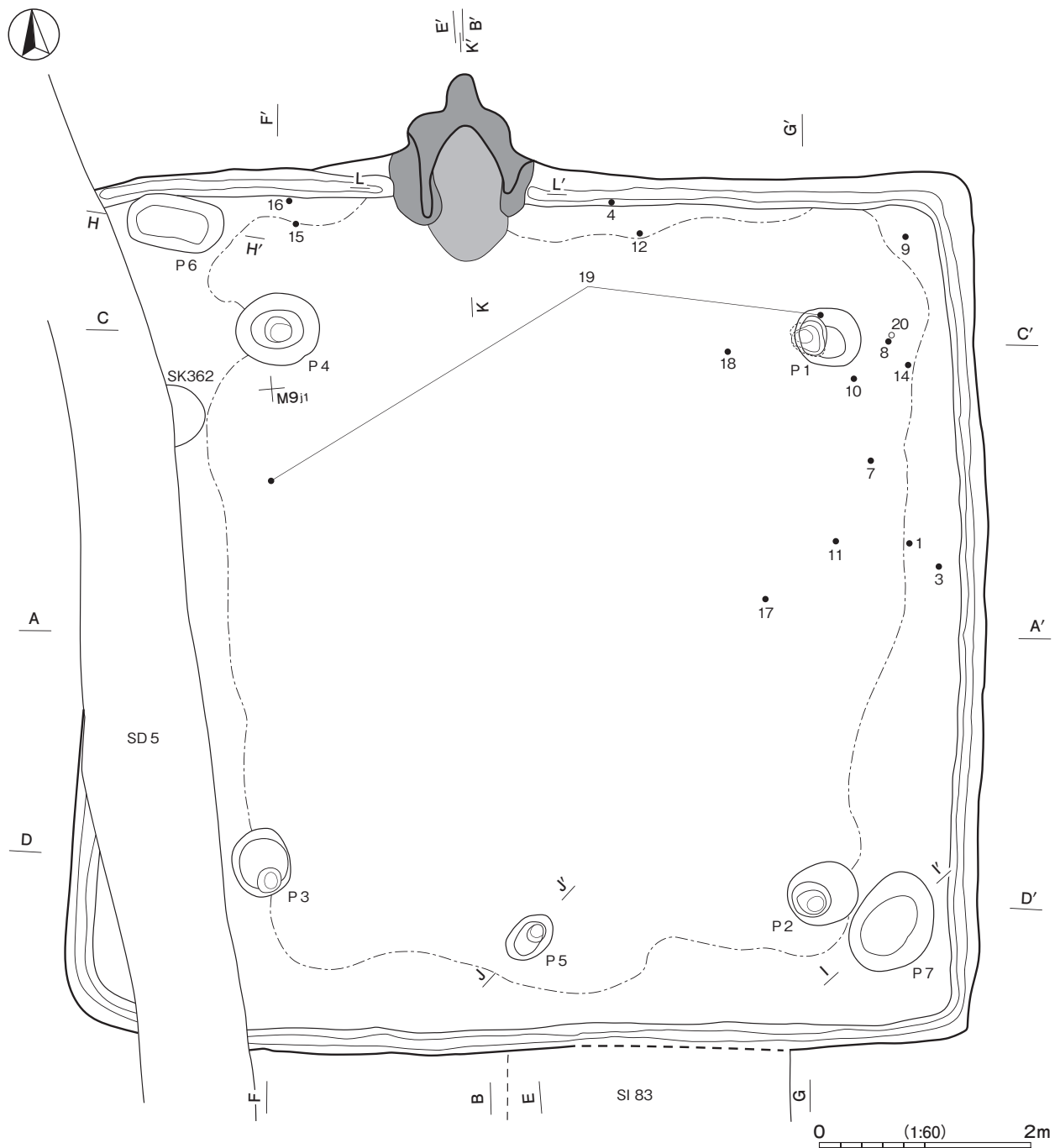
当時代の遺構は、竪穴建物跡 13 棟、掘立柱建物跡 25 棟、大型円形土坑 1 基、土坑 2 基、柱穴列 2 条、溝跡 1 条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 竪穴建物跡

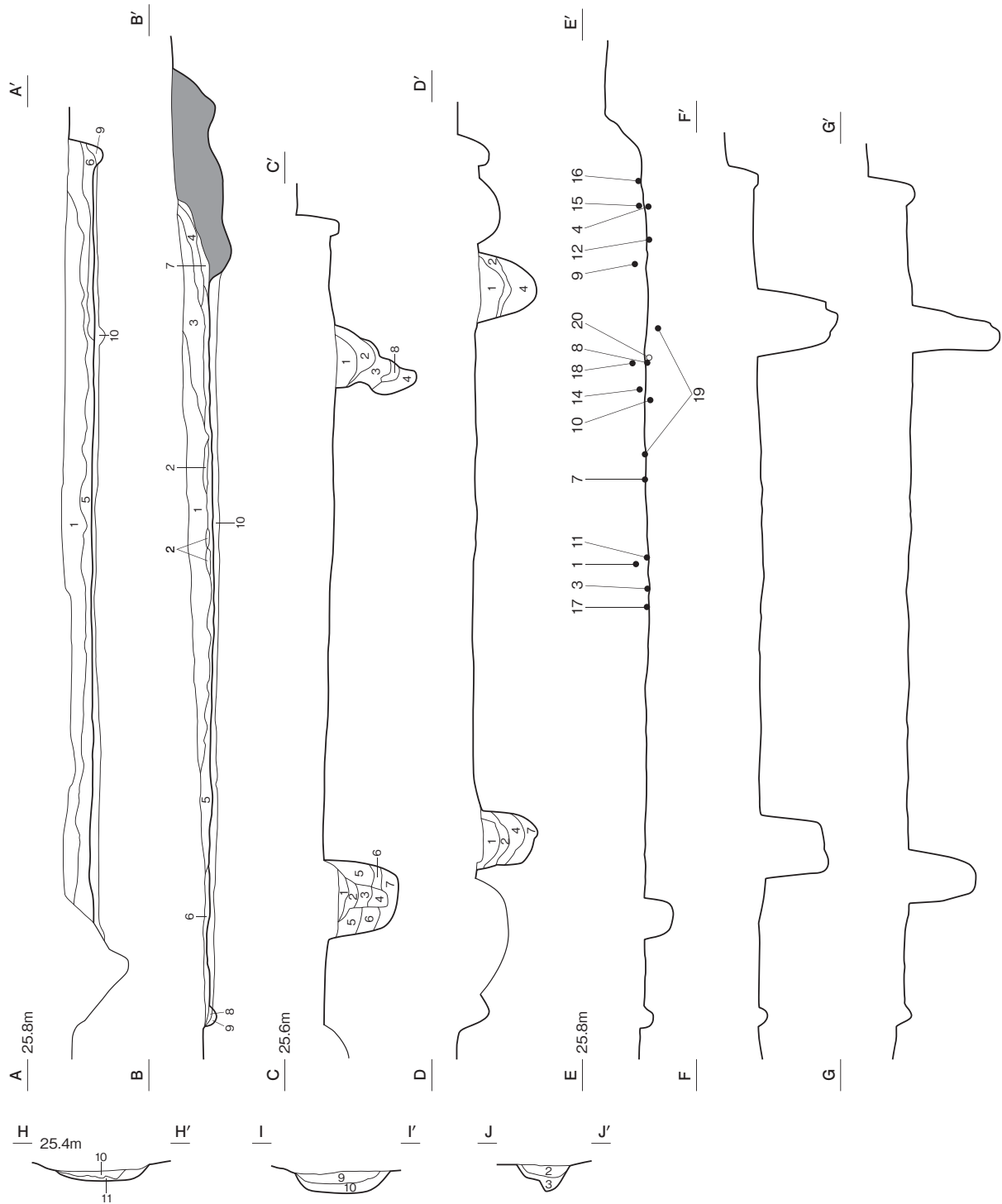
##### 第 11 号竪穴建物跡 (第 95 ~ 100 図 PL16)

**位置** 調査区南部の M 9j1 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 83 号竪穴建物、第 362 号土坑、第 5 号溝に掘り込まれている。



第 95 図 第 11 号竪穴建物跡実測図 (1)



**土層解説**

- |    |               |                                       |
|----|---------------|---------------------------------------|
| 1  | 10YR4/2 灰黄褐   | ローム中D・小C・粒B, 焼土小D・粒D, 炭化粒D<br>/粘B, 締B |
| 2  | 10YR4/3 におい黄褐 | 焼土中C・粒C, 炭化粒D, 粘土小B/粘B, 締B            |
| 3  | 10YR3/3 暗褐    | ローム小B, 焼土中C, 炭化粒D, 粘土小C/粘B, 締B        |
| 4  | 10YR3/4 暗褐    | ローム小C・粒B, 焼土小C・粒C, 炭化粒C/粘B, 締B        |
| 5  | 10YR3/2 黒褐    | ローム中C・小B・粒C, 焼土小D, 炭化粒D/粘B, 締B        |
| 6  | 10YR3/2 黒褐    | ローム中C・粒C, 炭化粒D/粘B, 締B                 |
| 7  | 10YR3/2 黒褐    | ローム小D・粒C, 焼土小C・粒C, 炭化物C/粘B, 締B        |
| 8  | 10YR4/1 褐灰    | ローム小B, 焼土粒D/粘B, 締C                    |
| 9  | 10YR4/2 灰黄褐   | ローム小B・粒B/粘B, 締B                       |
| 10 | 75YR4/2 灰褐    | ローム粒C/粘B, 締B                          |

**ビット土層解説**

- |    |               |                                |
|----|---------------|--------------------------------|
| 1  | 10YR3/3 暗褐    | ローム小C・粒C, 焼土粒D/粘B, 締C          |
| 2  | 10YR3/4 暗褐    | ローム小B・粒B/粘B, 締C                |
| 3  | 10YR4/2 灰黄褐   | ローム小A/粘B, 締A                   |
| 4  | 10YR4/3 におい黄褐 | ローム中A・小A/粘B, 締C                |
| 5  | 10YR4/4 褐     | ローム小B・粒A/粘B, 締B                |
| 6  | 10YR4/4 褐     | ローム中A・小A/粘B, 締B                |
| 7  | 10YR5/6 黄褐    | ローム小C・粒A/粘B, 締B                |
| 8  | 10YR4/1 褐灰    | ローム中B・小B/粘B, 締C                |
| 9  | 75YR3/3 暗褐    | ローム小C・粒C, 焼土小C・粒C, 炭化粒D/粘B, 締B |
| 10 | 5YR4/4 におい赤褐  | ローム小C・粒B, 焼土中C・小B・粒A/粘C, 締B    |
| 11 | 10YR4/4 褐     | ローム小C・粒A, 焼土粒C/粘C, 締B          |

0 (1:60) 2m

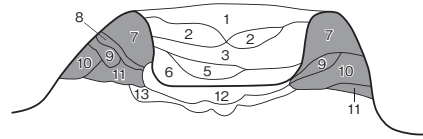
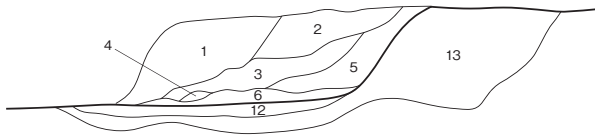
第 96 図 第 11 号壁穴建物跡実測図 (2)

K 25.8m

K'

L

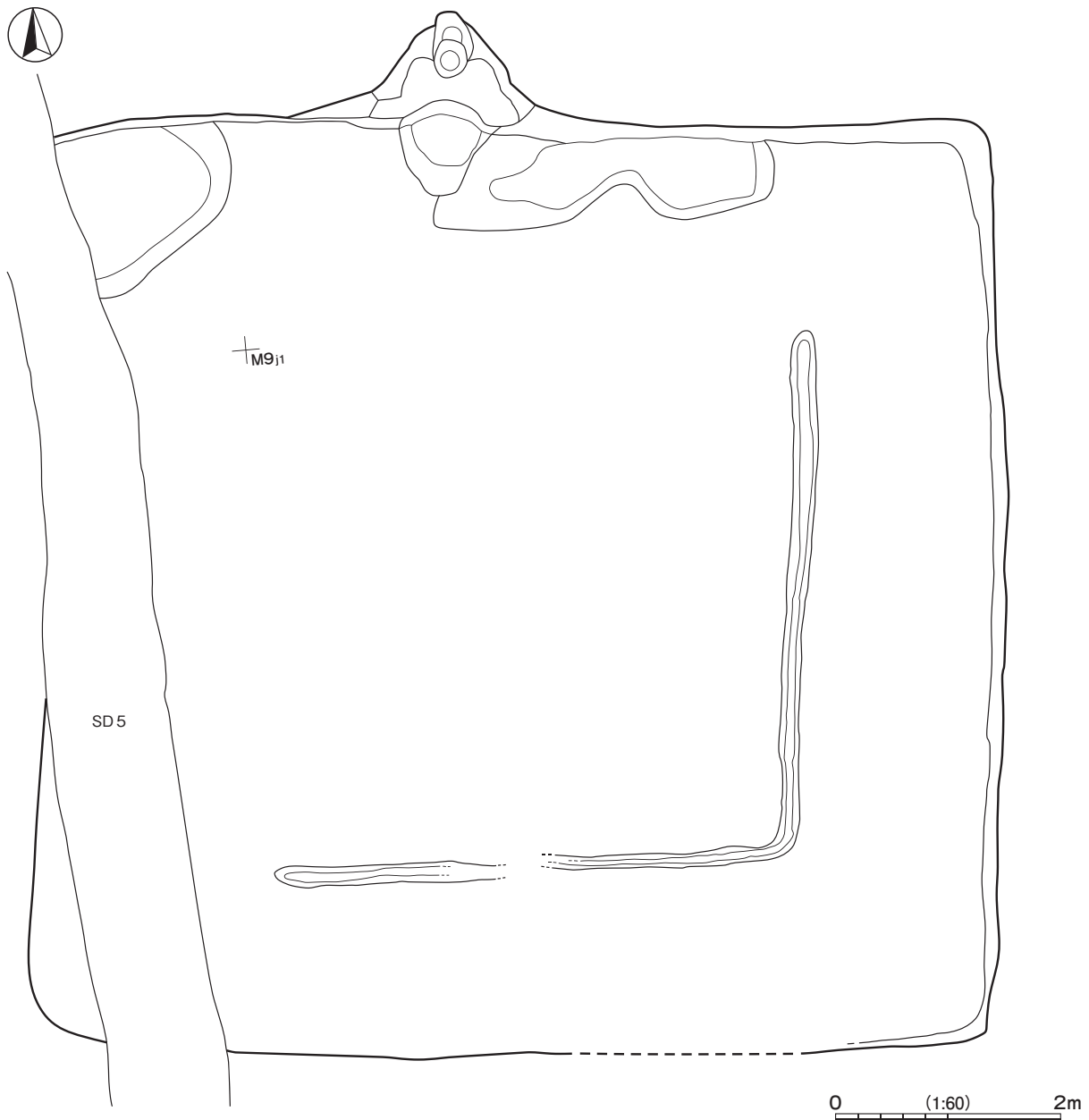
L'



電土層解説

- |   |          |       |                                |    |          |       |   |
|---|----------|-------|--------------------------------|----|----------|-------|---|
| 1 | 10YR3/4  | 暗褐    | ローム小C・粒B, 焼土小C・粒C, 炭化粒C/粘B, 締B | 9  | 5YR5/4   | にぶい赤褐 | ローム大D・粒C, 焼土中B・小B・粒A, 炭化粒D, 粘土小D/粘B, 締A |
| 2 | 10YR6/3  | にぶい黄褐 | ローム小D・粒D, 粘土大A/粘A, 締B          | 10 | 5YR6/2   | 灰黄褐   | ローム小C, 焼土粒D, 粘土小A/粘A, 締A                |
| 3 | 10YR5/3  | にぶい黄褐 | 焼土中C・小B, 炭化物C/粘B, 締B           | 11 | 10YR5/3  | にぶい黄褐 | ローム小C・粒B, 焼土粒C, 炭化物D・粒D, 粘土小B/粘A, 締A    |
| 4 | 7.5YR5/1 | 褐灰    | 焼土小B/粘B, 締C                    | 12 | 2.5YR4/4 | にぶい赤褐 | 焼土中C・粒A/粘A, 締A                          |
| 5 | 7.5YR5/2 | 灰褐    | 焼土小B・粒C, 炭化物C, 粘土小B/粘A, 締C     | 13 | 7.5YR5/4 | にぶい褐  | ローム中B・小B・粒A, 焼土小C・粒B/粘B, 締B             |
| 6 | 5YR4/1   | 褐灰    | 焼土小B・粒C, 粘土小C/粘B, 締C           |    |          |       |   |
| 7 | 10YR5/3  | にぶい黄褐 | ローム粒C, 焼土小C, 炭化粒C, 粘土小A/粘A, 締A |    |          |       |   |
| 8 | 10YR6/2  | 灰黄褐   | 粘土小A/粘A, 締A                    |    |          |       |   |

0 (1:30) 1m



第97図 第11号竪穴建物跡掘方実測図(3)



**規模と形状** 第5号溝により竪穴建物の西側が掘り込まれているが、規模は南北軸 8.35 m、東西軸 8.25 m の方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は3～34 cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた範囲では壁溝が全周している。貼床は床面の下層に均一に確認され、ロームブロックを含む第10層を埋土して構築されている。

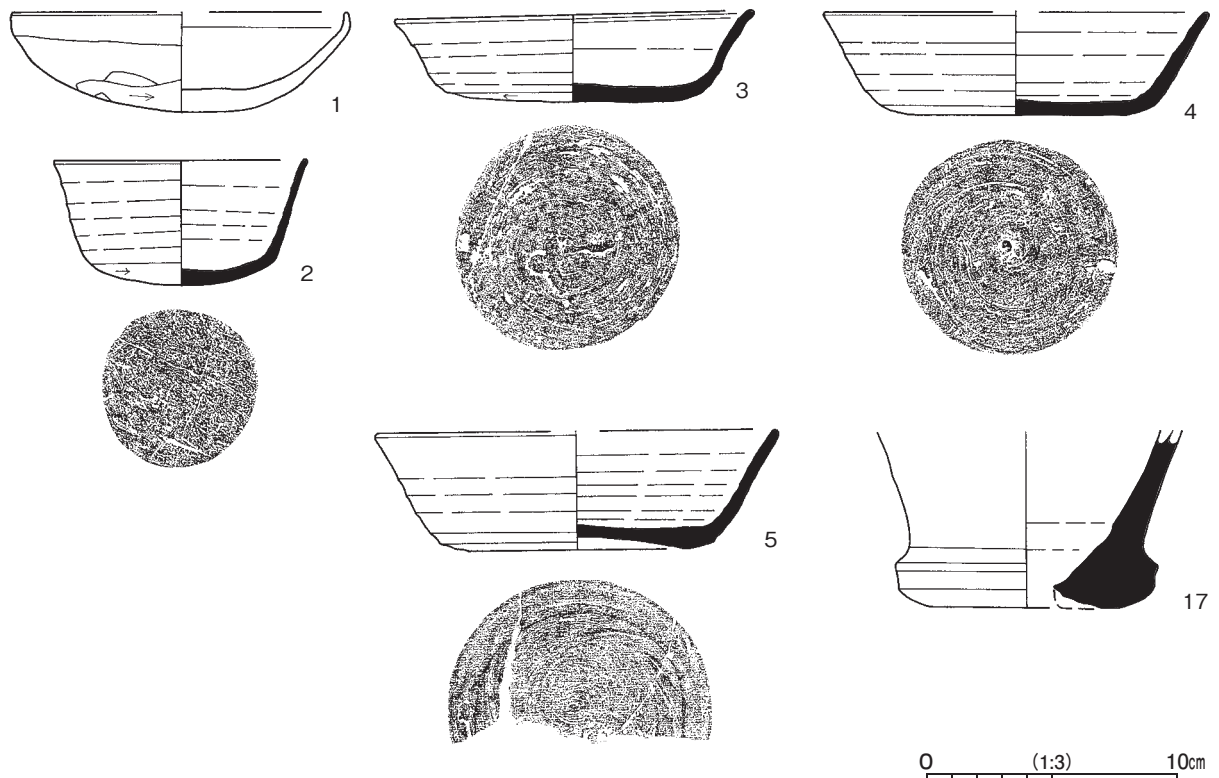
**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで180 cmで、燃焼部の幅は65 cmである。竈は、10 cmほど掘りくぼめ、第12・13層で整地している。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第7～11層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は第12層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に80 cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 7か所。P1～P4は深さ55～80 cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ25 cmで、配置から出入口に伴うピットと考えられる。P6・P7はそれぞれ深さ10 cm・25 cmで、性格は不明である。

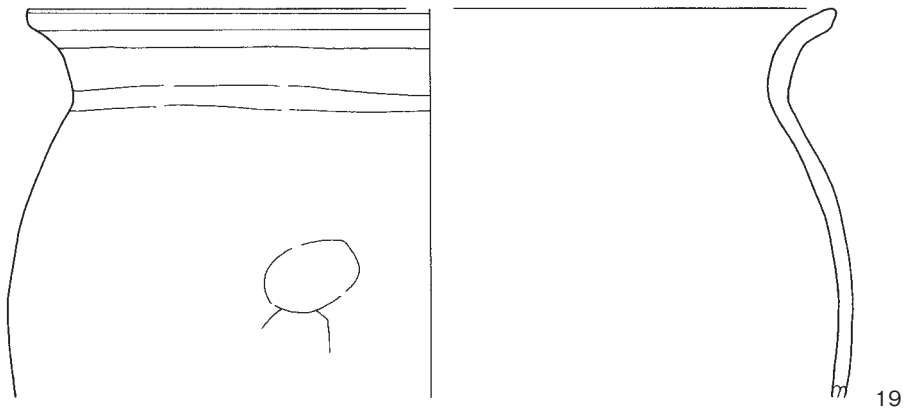
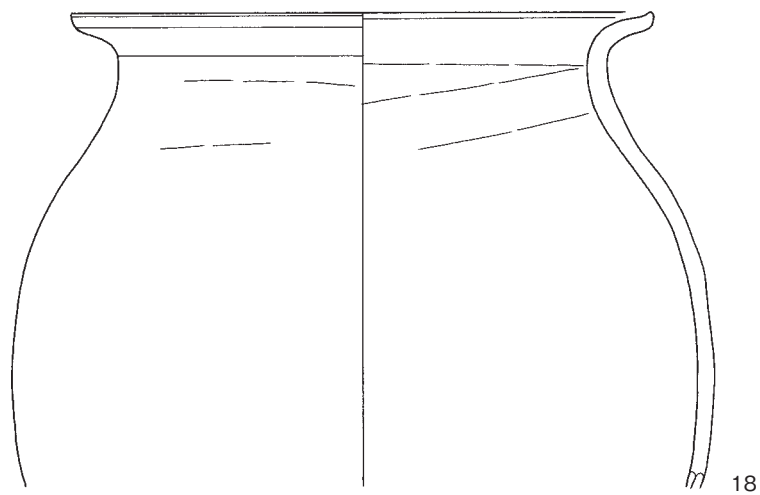
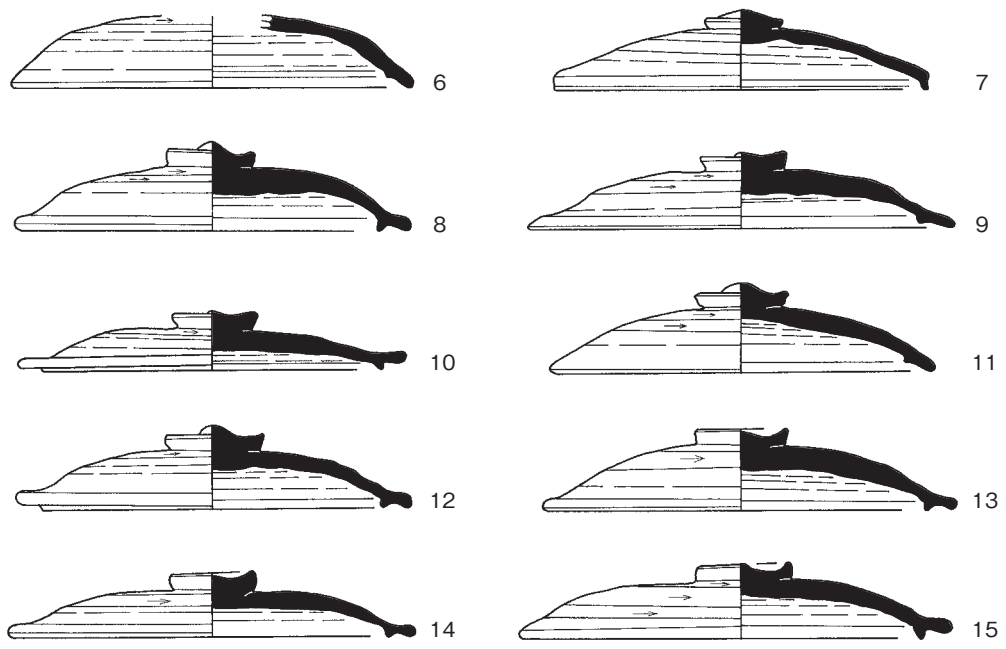
**覆土** 9層に分層できる。不規則な堆積状況を示すことから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片1,071点(坏206, 壺1, 甕861, 甑3), 須恵器片415点(坏196, 蓋187, 盤2, 鉢3, 捏鉢2, 壺1, 瓶類1, 甕23), 土製品2点(土玉, 羽口), 石器2点(砥石), 金属製品3点(刀子1, 不明2)が出土している。3・4・7・8・10～12・16・17・19・20はいずれも床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。19はP1出土の破片と床面から出土した破片が接合したものである。1・9・14・15・18は覆土下層から出土している。2・5・6・13は覆土中から出土している。いずれも建物の埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。本跡の掘方調査の際、床面下より溝状の掘り込みを確認した。本跡に先行する建物跡の壁溝の可能性はあるが、遺物がなく、ピットや竈など他の内部施設の痕跡は確認できなかった。

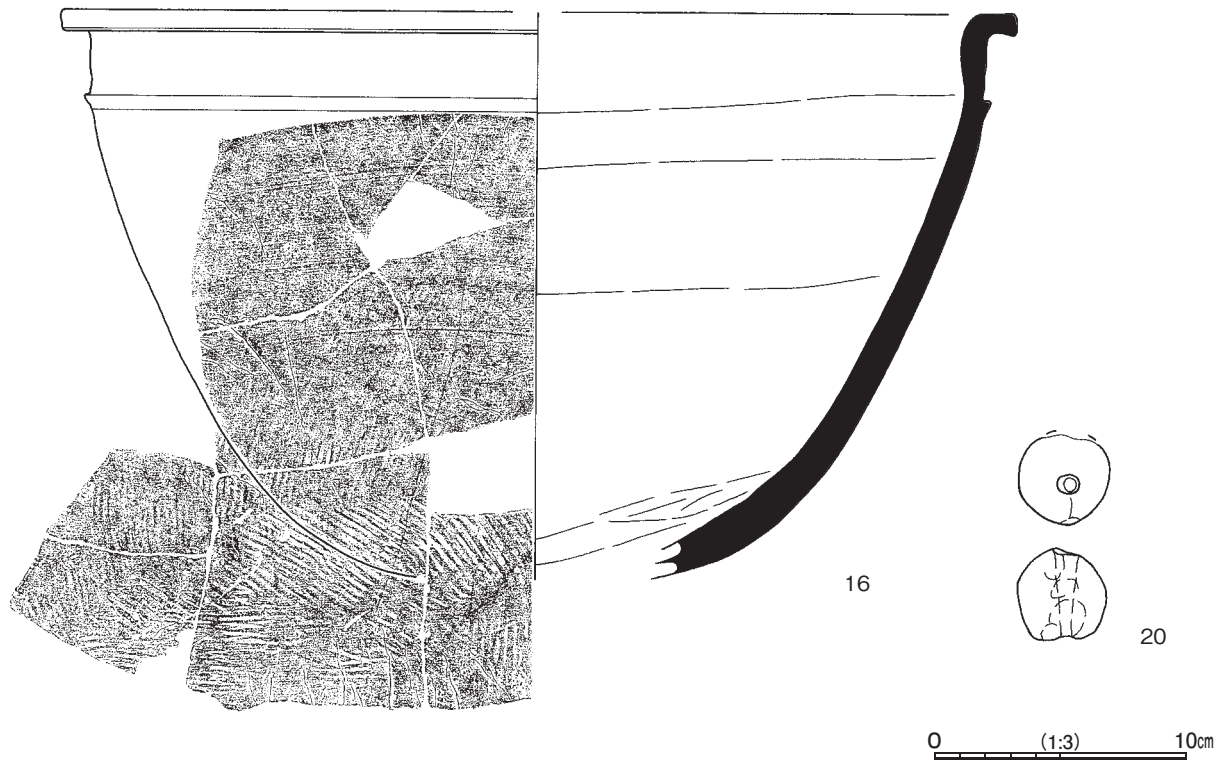


第98図 第11号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



0 (1:3) 10cm

第99图 第11号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第 100 図 第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (3)

第 53 表 第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧

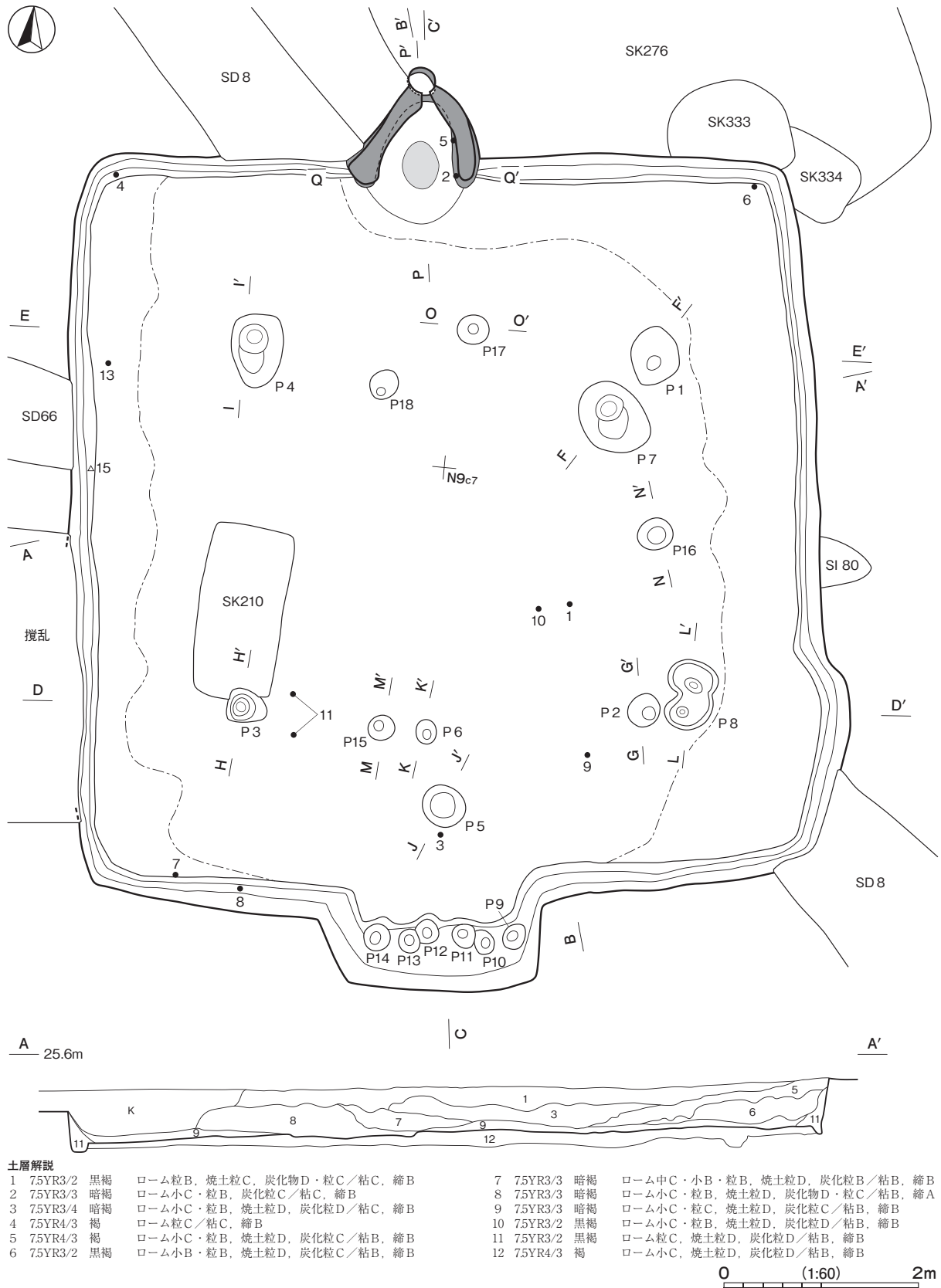
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.3]	4.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL39 外面一部煤付着
2	須恵器	坏	9.9	5.0	6.3	長石・石英・細礫	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端回転へら削り 底部回転へら削り後ナデ	覆土中	80% PL39
3	須恵器	坏	14.3	3.7	9.2	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端・底部回転へら削り	床面	70% 新治窯
4	須恵器	坏	[15.2]	4.1	8.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端・底部回転へら削り	床面	60% 新治窯 PL39
5	須恵器	坏	[15.7]	4.7	[8.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端・底部回転へら削り 底部中央凹み	覆土中	40% 新治窯 PL39
6	須恵器	蓋	[16.0]	(2.9)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転へら削り	覆土中	50%
7	須恵器	蓋	14.8	3.2	-	長石・石英	灰白	普通	天井部回転へら削り	床面	80% PL40
8	須恵器	蓋	15.8	3.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	天井部回転へら削り	床面	70% 新治窯
9	須恵器	蓋	[16.9]	3.0	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転へら削り	覆土下層	60% 新治窯
10	須恵器	蓋	15.4	2.4	-	長石・石英・雲母・礫	灰白	普通	天井部回転へら削り	床面	90% 新治窯 PL40
11	須恵器	蓋	14.9	3.5	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転へら削り	床面	90% 新治窯 PL40
12	須恵器	蓋	15.7	3.3	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転へら削り	床面	100% 新治窯 PL40
13	須恵器	蓋	16.2	3.3	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	天井部回転へら削り	覆土中	70%
14	須恵器	蓋	16.2	2.6	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	天井部回転へら削り	覆土下層	90% 新治窯 PL40
15	須恵器	蓋	17.2	3.1	-	長石・石英・雲母・礫	灰黄	普通	天井部回転へら削り	覆土下層	100% 新治窯 PL40
16	須恵器	鉢	[38.0]	(22.5)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面ナデ	床面	30% 新治窯 PL39
17	須恵器	捏鉢	-	(7.0)	10.1	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外・内面ナデ	床面	20% 新治窯 PL40
18	土師器	甕	23.0	(18.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 内面ナデ	覆土下層	30%
19	土師器	甕	[31.8]	(15.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	20%

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
20	土玉	3.6	3.7	0.9	(40.97)	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ 穿孔	床面	PL45

第 46 号竖穴建物跡 (第 101 ~ 104 図 PL16・17)

位置 調査区南部の N 9 b6 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

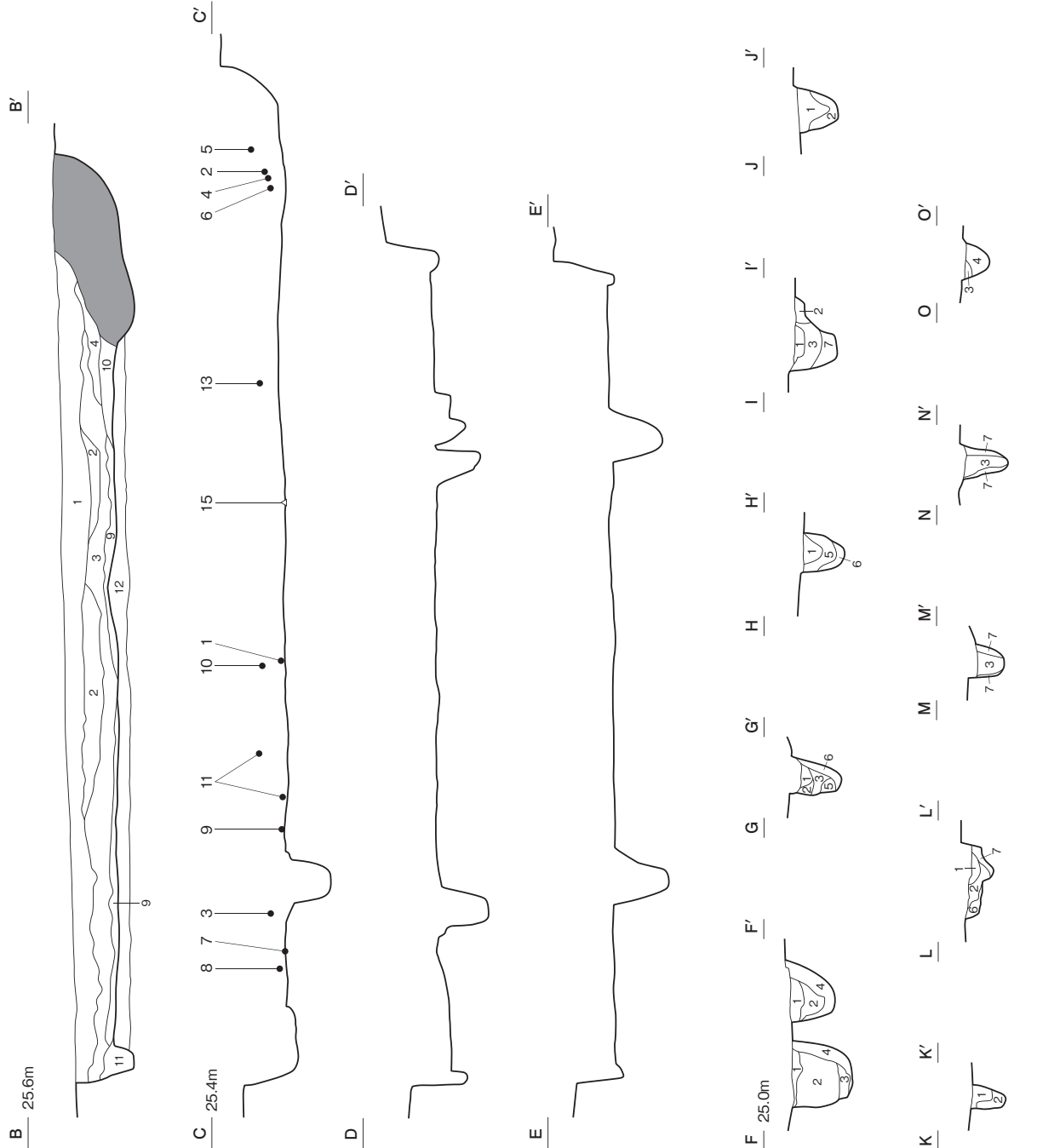


第 101 図 第 46 号竖穴建物跡実測図 (1)

**重複関係** 第 80 号竪穴建物跡, 第 276・333・334 号土坑を掘り込み, 第 210 号土坑, 第 8・66 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 7.68 m, 短軸 7.64 m の方形で, 主軸方向は N-7° - W である。壁高は 32 ~ 48 cm で, ほぼ直立している。南壁中央部には出入口施設に伴う張り出しが設けられている。

**床** 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。貼床は床面の下層に均一に確認され, ロームブロックを含む第 12 層を埋土して構築されている。



**ビット土層解説**

- 1 75YR4/4 褐
- 2 75YR4/3 褐
- 3 75YR4/3 褐
- 4 75YR4/3 褐

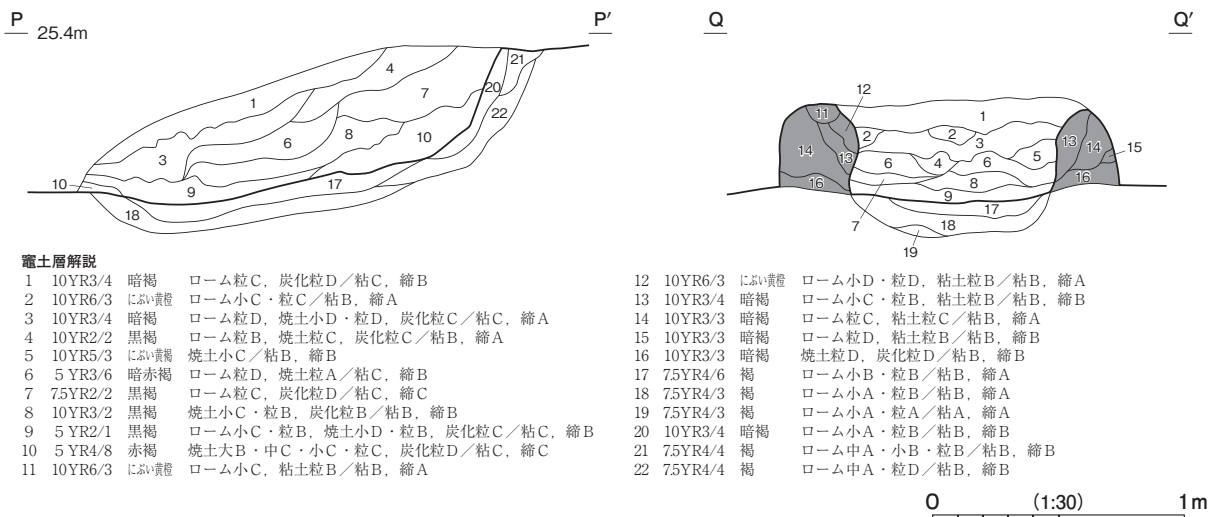
- ローム中B・小B・粒B, 炭化粒C/粘A, 締A
- ローム粒B, 焼土粒C, 炭化粒B/粘B, 締B
- ローム中C・小B・粒A, 炭化粒D/粘B, 粒C
- ローム粒B, 炭化粒D/粘B, 締B

- 5 75YR4/2 灰褐
- 6 75YR4/4 褐
- 7 75YR3/3 暗褐

- ローム粒B/粘B, 締B
- ローム小A・粒C/粘B, 締B
- ローム小C・粒B/粘B, 締C

0 (1:60) 2m

第 102 図 第 46 号竪穴建物跡実測図 (2)



第 103 図 第 46 号 竪穴建物跡実測図 (3)

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 160 cm で、燃烧部の幅は 80 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第 11～16 層を積み上げて構築されている。火床部から煙道部にかけては 14 cm ほど掘り込み、ロームブロックを含む第 17～22 層を埋土して構築されている。床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は第 17 層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に 110 cm ほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 18 か所。P 1～P 4 は深さ 40～50 cm で、配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 9～P 14 は深さ 15～38 cm で、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 8・P 15～P 18 は深さ 22～42 cm で、性格は不明である。

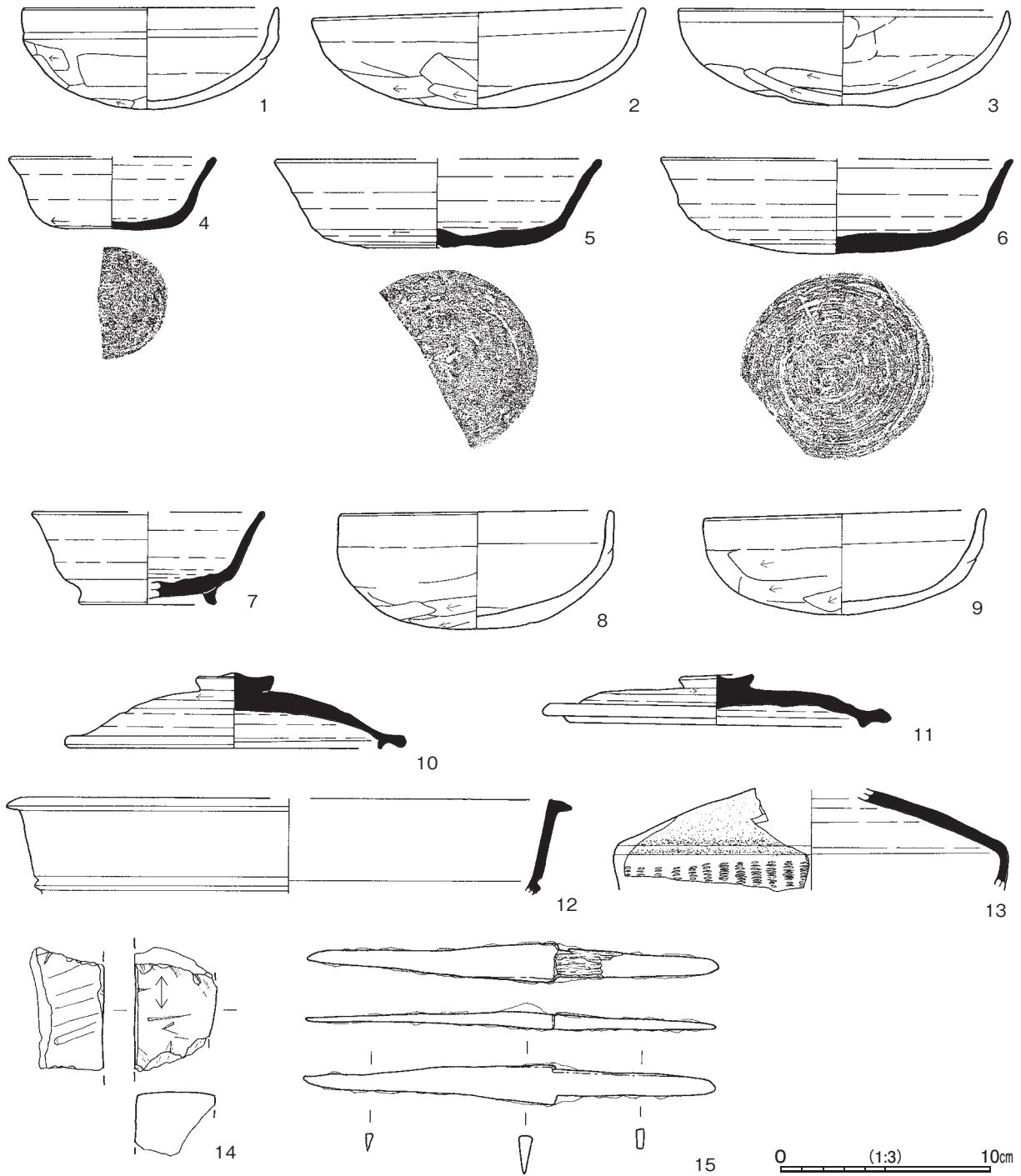
**覆土** 11 層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 917 点 (坏 164, 椀 7, 甕 746), 須恵器片 184 点 (坏 68, 高台付坏 2, 蓋 67, 盤 1, 鉢 7, 壺 2, 甕 37), 金属製品 3 点 (鉄鍋, 鍬, 釘) が出土している。1・7・9・15 は床面から出土しており、廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。4・6・8 は覆土下層から、2・3・5・10・13 は覆土中層からそれぞれ出土している。11 は覆土下層と中層から出土した破片が接合したものである。12・14 は覆土中から出土している。これらは埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀初頭と考えられる。

第 54 表 第 46 号 竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.0	4.9	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ	床面	95% PL41
2	土師器	坏	15.8	4.8	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ 底部内面凹み	覆土中層	95% PL41
3	土師器	坏	15.6	4.6	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ	覆土中層	95% PL41
4	須恵器	坏	[9.7]	3.5	[5.6]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端回転へら削り 底部回転へら削り後多方向のナデ	覆土下層	40% 新治窯
5	須恵器	坏	[15.4]	4.3	9.8	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転へら削り	覆土中層	40% 新治窯 PL41
6	須恵器	坏	[16.7]	4.5	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端・底部回転へら削り	覆土下層	60% 新治窯 PL41
7	須恵器	高台付坏	[10.9]	4.4	[6.4]	長石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転へら削り後高台貼付	床面	40% PL41



第 104 図 第 46 号竪穴建物跡出土遺物実測図

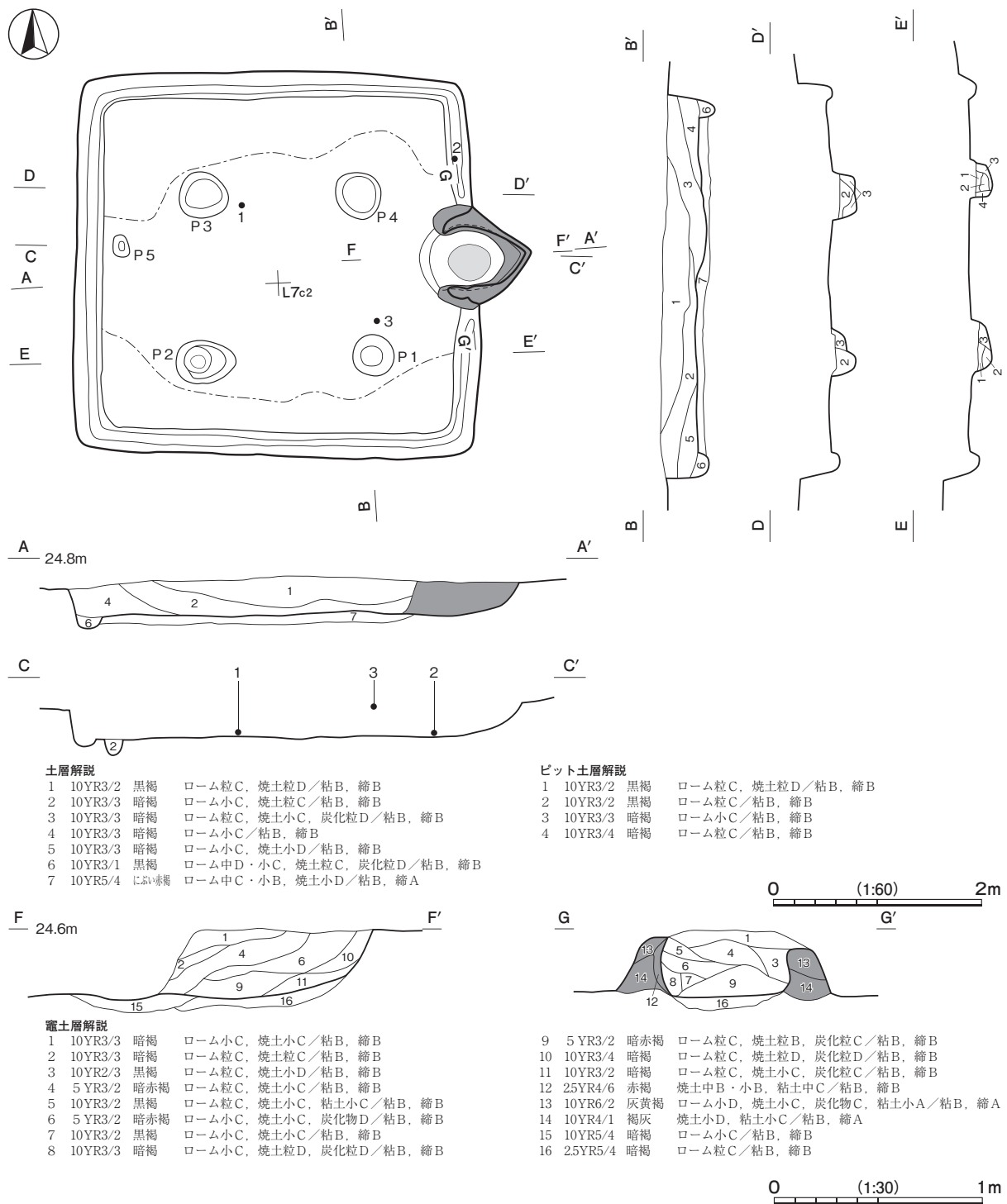
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	土師器	椀	12.8	5.7	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 底部内面凹み	覆土下層	100% PL41
9	土師器	椀	13.3	5.0	-	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	100% PL41
10	須恵器	蓋	[15.8]	3.6	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	40% 新治窯 PL41
11	須恵器	蓋	[16.5]	2.4	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層～中層	30% 新治窯
12	須恵器	鉢	[25.0]	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5% 新治窯
13	須恵器	長頸壺	-	(4.8)	-	長石	灰白	普通	自然釉	覆土中層	5% PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	砥石	(5.9)	(3.9)	(3.5)	(94.83)	硬質砂岩	砥面2面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	刀子	19.6	1.9	0.8	39.11	鉄	刃部断面三角形 茎部断面四角形 両関 木質付着	床面	PL48

第 61 号 竪穴建物跡 (第 105・106 図 PL17)

位置 調査区中央部の L 7b2 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 105 図 第 61 号 竪穴建物跡実測図



**規模と形状** 長軸 3.92 m, 短軸 3.68 mの方形で, 主軸方向はN - 92° - Eである。壁高は 28 ~ 32 cmで, ほぼ直立している。

**床** やや凹凸があり, 竈の前方から出入口に向かって中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に均一に確認され, ロームブロックを含む第7層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

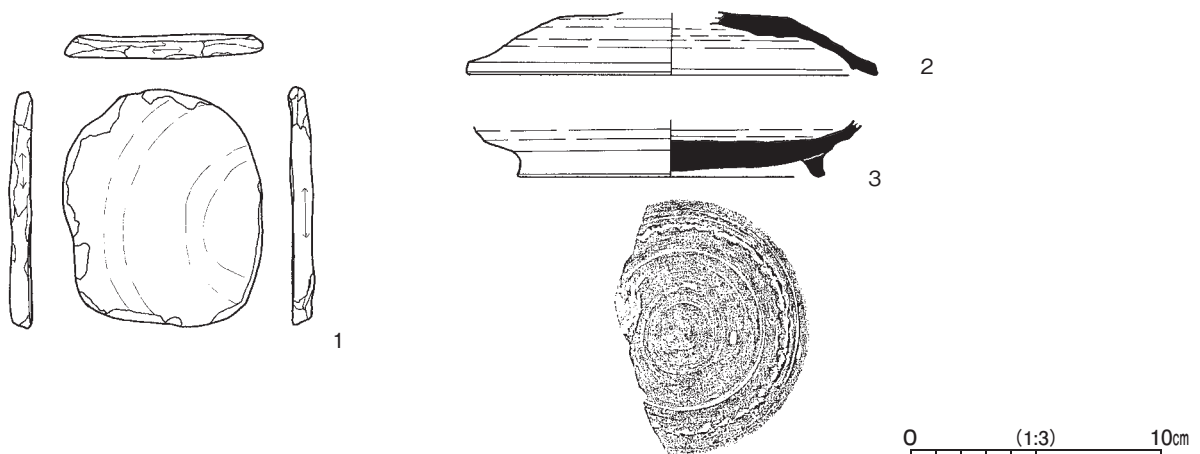
**竈** 東壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで 110 cmで, 燃烧部の幅は 50 cmである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第 12 ~ 14 層を積み上げて構築されている。火床部は全体に 6 cmほど掘り込み, ロームブロックを含む第 15・16 層を埋土して構築されている。床面とほぼ同じ高さを使用しており, 火床面は第 16 層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に 65 cmほど掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 5か所。P 1 ~ P 4は深さ 25 ~ 30 cmで, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さは 15 cmで, 配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており, 自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 252 点 (坏 3, 椀 3, 甕 246), 須恵器片 25 点 (坏 4, 蓋 12, 盤 1, 壺 2, 甕 5, 転用砥石 1) が出土している。1は床面から, 2は覆土下層から, 3は覆土上層から出土している。1は床面のほぼ中央から確認され, 廃絶に際して遺棄されたものである。2・3は建物が埋まる過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。



第 106 図 第 61 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 55 表 第 61 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	須恵器底部を転用 割れ口を砥面として使用	床面	砥石転用 新治窯 PL40
2	須恵器	蓋	[16.2]	2.5	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	20% 新治窯
3	須恵器	盤	-	(2.3)	12.0	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後 高台部貼付	覆土上層	30% PL40 新治窯

第 63 号 竪穴建物跡 (第 107・108 図 PL17)

**位置** 調査区中央部の L7d8 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 56 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.82 m, 短軸 3.78 m の方形で, 主軸方向は N-3°-E である。壁高は 6 cm で, ほぼ直立している。

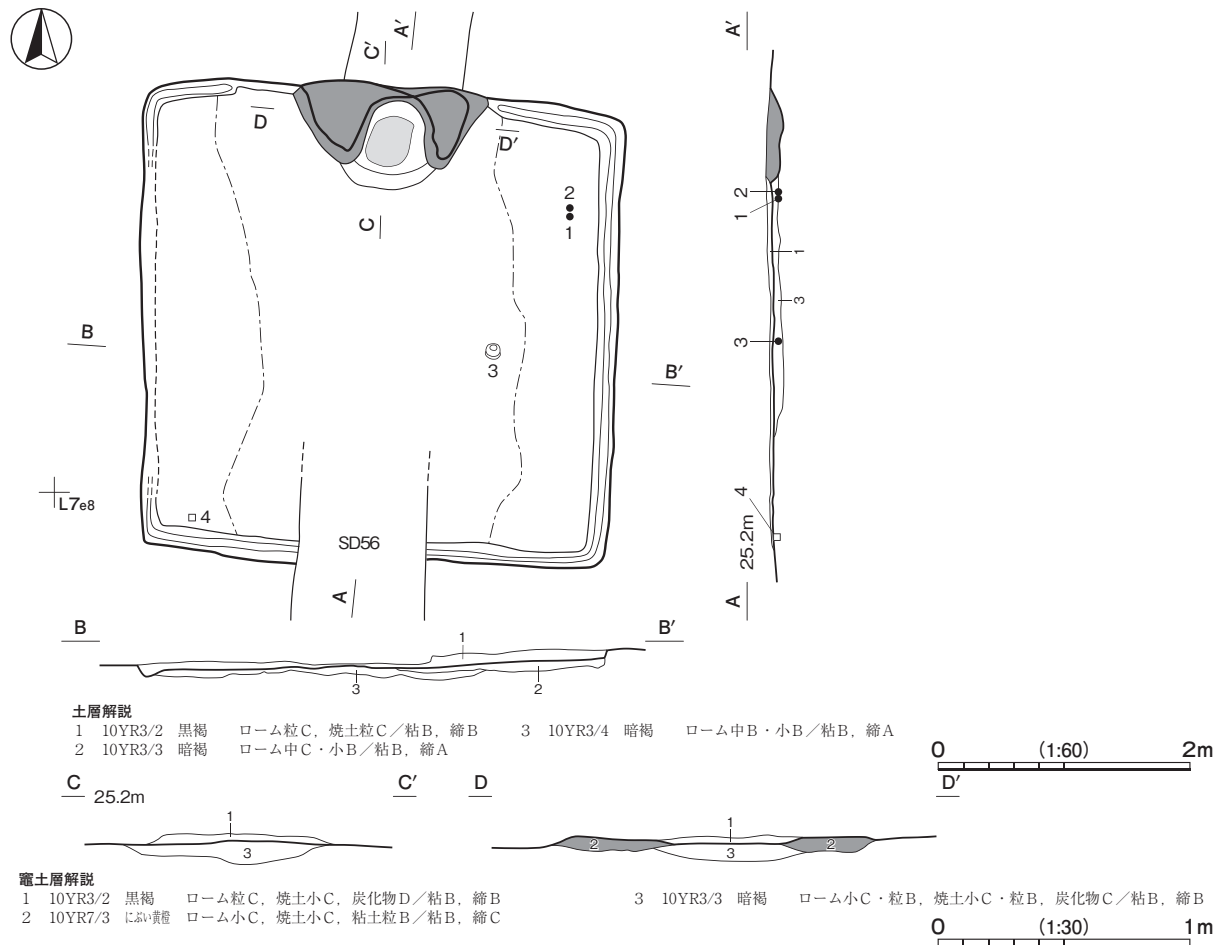
**床** 平坦で, 中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に 8 cm ほど確認され, ロームブロックを含む第 2・3 層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。第 56 号溝により掘り込まれており, 焚口部から煙道部までの 135 cm しか確認できなかった。燃烧部の幅は 55 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第 2 層を積み上げて構築されている。火床部は全体に 4 cm ほど掘り込み, ローム粒子や焼土粒子を含む第 3 層を埋土して構築し, 床面と同じ高さを使用しており, 火床面は第 3 層上面で赤変硬化している。煙道部は第 56 号溝によって掘り込まれているため, 火床部からの立ち上がりは確認できなかった。

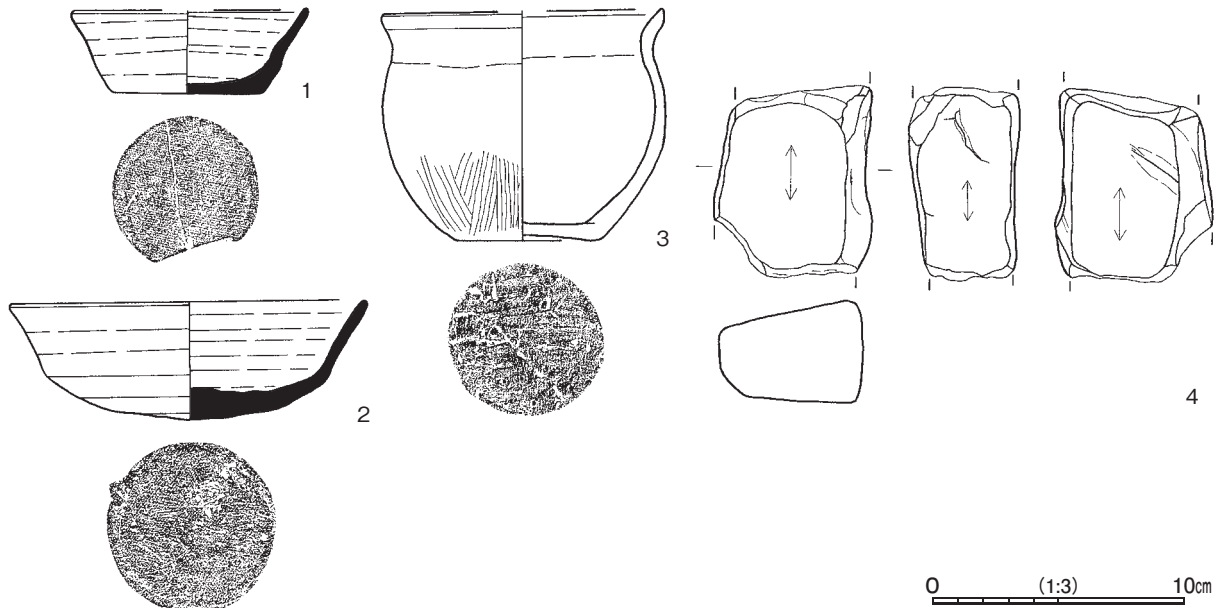
**覆土** 単 1 層である。層厚が薄いことから, 堆積状況は不明である。

**遺物出土状況** 土師器片 9 点 (椀 3, 小型鉢 1, 鉢 1, 甕 4), 須恵器片 2 点 (坏), 石器 1 点 (砥石) が出土している。1~4 は全て床面から出土しており, 廃絶時に遺棄されたものとみられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 8 世紀初頭と考えられる。



第 107 図 第 63 号 竪穴建物跡実測図



第 108 図 第 63 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 56 表 第 63 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[9.2]	3.4	5.8	長石・石英・雲母	にふい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部多方向のナデ	床面	50% PL41 新治窯
2	須恵器	坏	14.2	4.7	6.5	長石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のナデ	床面	70% PL41
3	土師器	小型鉢	[11.0]	9.2	5.9	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下半縦位のヘラ磨き 内面ナデ 底部ヘラ磨き	床面	80% PL41
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
4	砥石	(7.7)	6.2	4.4	(314.03)	砂岩	砥面 3 面			床面	PL47

#### 第 64 号竪穴建物跡 (第 109・110 図 PL17)

**位置** 調査区中央部の L 7 f0 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 189 号土坑を掘り込み、第 14 号掘立柱建物、第 190 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 5.22 m、短軸 5.20 m の方形で、主軸方向は N - 10° - E である。壁高は 16 ~ 22 cm で、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は全体に 5 ~ 10 cm ほど掘り込まれ、ロームブロックを含む第 9・10 層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

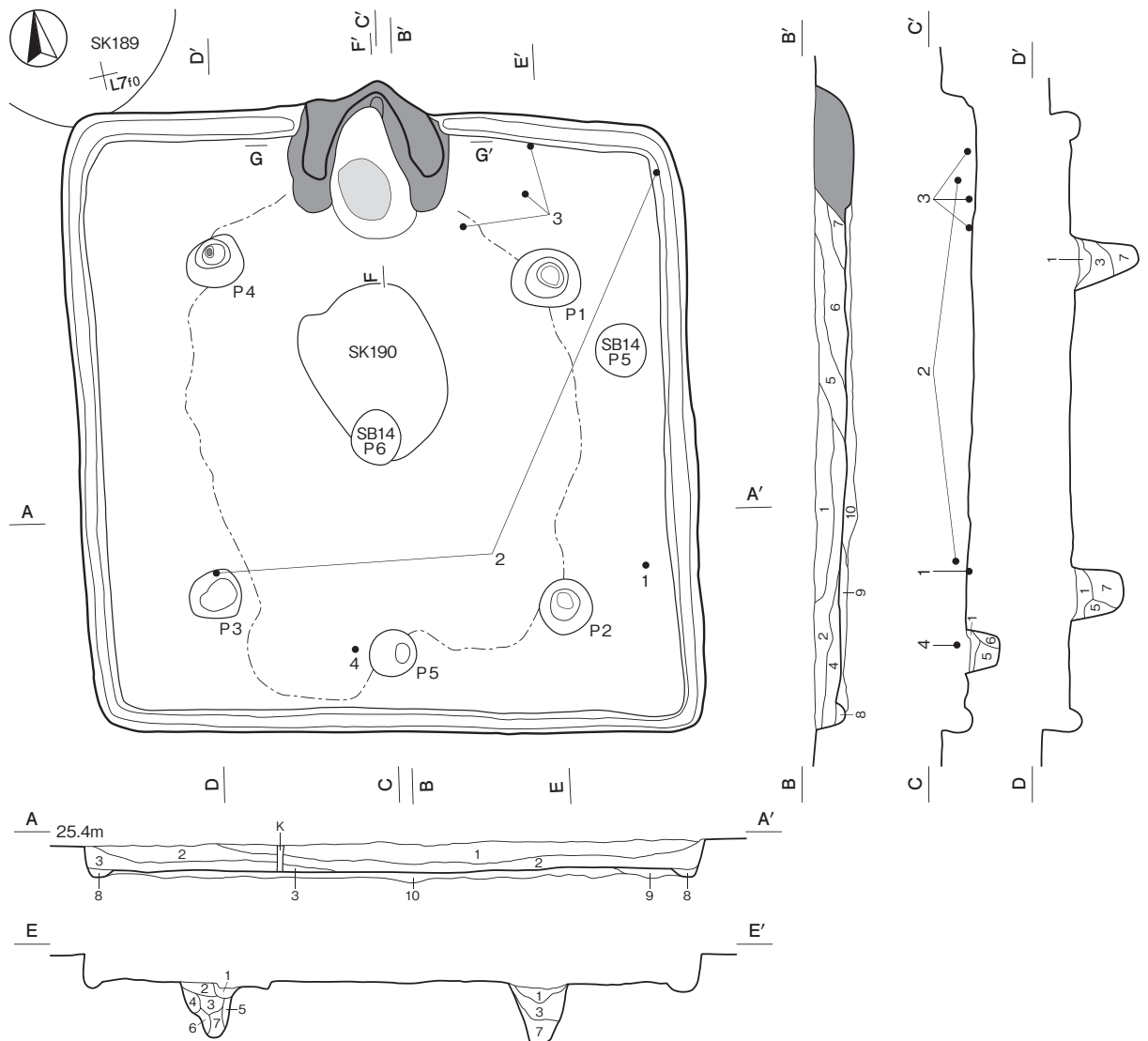
**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 135 cm で、燃焼部の幅は 67 cm である。竈は 15 cm ほど掘りくぼめ、第 17 ~ 19 層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第 13 ~ 16 層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は第 17 層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に 25 cm ほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がり、奥壁で直立している。

**ピット** 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 45 ~ 55 cm で、配置から支柱穴と考えられる。P 5 は深さ 30 cm で、南壁際中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットである。

**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 171点（坏40，碗1，鉢10，小型甕7，甕113），須恵器片 31点（坏10，蓋4，甕14，甑3）が出土している。1は床面から出土しており，廃絶時に遺棄されたものである。3・4は覆土下層から，2は覆土中層から確認され，2と3はそれぞれ離れて出土した破片が接合したものである。これらは埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀初頭と考えられる。



**土層解説**

- |    |            |                       |
|----|------------|-----------------------|
| 1  | 10YR3/2 黒褐 | ローム小C，焼土小D/粘B，締B      |
| 2  | 10YR3/3 暗褐 | ローム小C，焼土小D，炭化粒D/粘B，締B |
| 3  | 10YR3/4 暗褐 | ローム粒C，焼土粒D，炭化粒D/粘B，締B |
| 4  | 10YR3/3 暗褐 | ローム小D，炭化粒C/粘B，締B      |
| 5  | 10YR3/2 黒褐 | ローム粒D，焼土小D/粘B，締B      |
| 6  | 10YR3/2 黒褐 | ローム粒C，焼土小C/粘B，締B      |
| 7  | 10YR3/3 暗褐 | ローム粒C，焼土粒C/粘B，締B      |
| 8  | 10YR3/2 黒褐 | ローム小C，焼土小D，炭化粒D/粘B，締B |
| 9  | 10YR3/3 暗褐 | ローム中C・小B・粒D/粘B，締A     |
| 10 | 10YR3/4 暗褐 | ローム中C・小C/粘B，締A        |

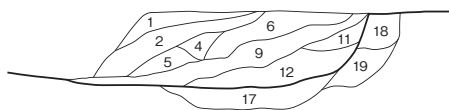
**ピット土層解説**

- |   |              |                        |
|---|--------------|------------------------|
| 1 | 10YR3/1 黒褐   | ローム小C・粒C，焼土小D/粘B，締B    |
| 2 | 10YR3/3 暗褐   | ローム中C・小D・粒D，焼土小D/粘B，締B |
| 3 | 10YR3/4 暗褐   | ローム中C・小B/粘B，締C         |
| 4 | 10YR5/3 泥い黄褐 | ローム中C・小B/粘B，締B         |
| 5 | 10YR5/8 黄褐   | ローム大B・中B・小A・粒D/粘B，締A   |
| 6 | 10YR6/4 泥い黄褐 | ローム中B・小C/粘B，締B         |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐  | ローム大D・中B・小C/粘B，締C      |

0 (1:60) 2m

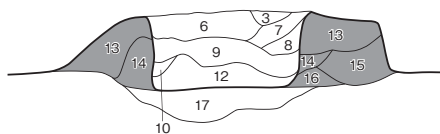
第109図 第64号竪穴建物跡実測図

F 25.4m



F'

G



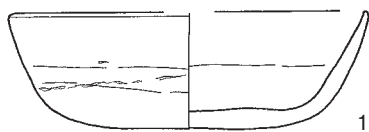
G'

竈土層解説

- 1 10YR4/2 灰黄褐 ローム粒C, 焼土粒D/粘B, 締B
- 2 10YR3/4 暗褐 ローム小D・粒C, 焼土粒D/粘B, 締B
- 3 10YR3/3 暗褐 ローム粒C, 焼土小D/粘B, 締B
- 4 10YR3/2 黒褐 ローム小B, 焼土粒D/粘B, 締B
- 5 10YR3/4 暗褐 ローム粒C, 焼土小B・粒B, 炭化粒C/粘B, 締B
- 6 10YR4/1 褐灰 ローム粒D, 焼土粒C/粘B, 締B
- 7 10YR3/4 暗褐 ローム小C, 焼土小C・粒C/粘B, 締B
- 8 10YR4/2 灰黄褐 ローム小C・粒C, 焼土小B/粘B, 締B
- 9 10YR6/2 灰黄褐 焼土小B, 炭化物D/粘B, 締B
- 10 10YR3/3 暗褐 ローム小B, 焼土粒B/粘B, 締B

- 11 10YR3/1 黒褐 ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締B
- 12 25YR4/6 赤褐 ローム小D, 焼土中C・小B, 炭化物C・粒D/粘B, 締B
- 13 10YR7/2 におい黄 におい黄 ローム中C・小C, 焼土中C・小C, 粘土中C/粘B, 締B
- 14 10YR5/2 灰黄褐 焼土中B・小B, 粘土中C/粘B, 締B
- 15 10YR5/1 褐灰 焼土中D・小D, 炭化粒D, 粘土中B/粘B, 締B
- 16 10YR4/1 褐灰 焼土中B・小B, 粘土中C/粘B, 締B
- 17 10YR6/2 灰黄褐 ローム中C・小B, 焼土小C・粒D/粘B, 締B
- 18 10YR3/4 暗褐 ローム小C・粒B/粘B, 締B
- 19 10YR3/3 暗褐 ローム小B・粒B/粘B, 締B

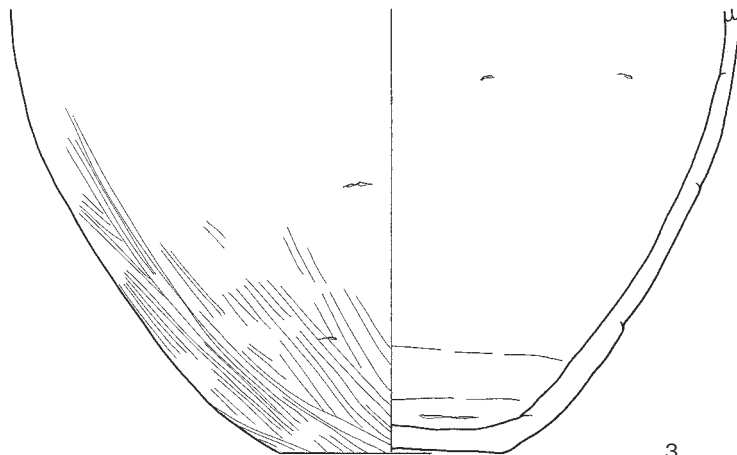
0 (1:30) 1m



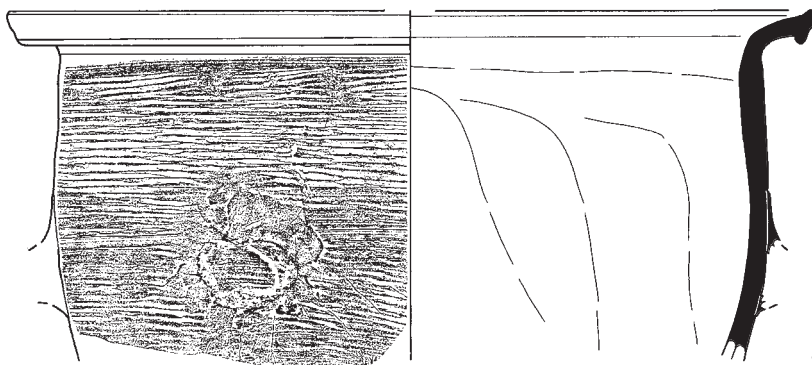
1



2



3



4

0 (1:3) 10cm

第110図 第64号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第57表 第64号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.0]	4.7	6.5	長石・石英・雲母	におい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	60% PL41
2	須恵器	坏	[14.2]	7.1	6.1	長石・石英・雲母	灰褐	普通	体部ロクロナデ 底部多方向のナデ 底部外面ヘラ記号	覆土中層	60% PL41 新治窯

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師器	甕	-	(17.6)	9.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面下端縦位のヘラ磨き 内面ナデ 輪積痕 底部木葉痕	覆土下層	50%
4	須恵器	甗	[32.0]	(13.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	20% PL41 新治窯

### 第71号竪穴建物跡 (第111図 PL18)

**位置** 調査区南部のN10c3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第63号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部が調査区域外に延びているため、東西軸2.76m、南北軸2.32mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-5°-Eと推定できる。壁高は20~40cmで、ほぼ直立している。

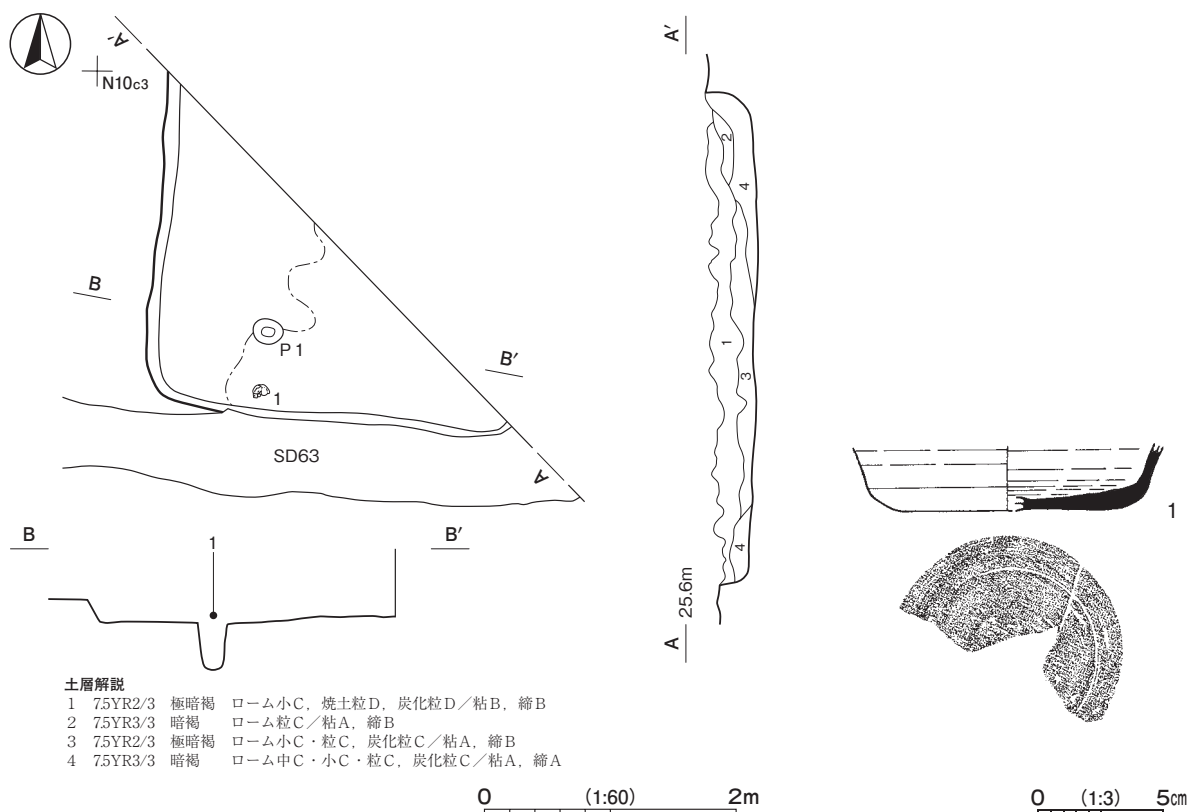
**床** 平坦で、南壁際から中央部にかけて踏み固められている。

**ピット** P1は深さ40cmで、配置と形状から支柱穴の可能性がある。

**覆土** 4層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片11点(坏2, 甕9), 須恵器片3点(坏, 蓋, 甕)が出土している。1は床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第111図 第71号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第58表 第71号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(2.6)	[9.0]	長石・石英	灰白	普通	体部ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	30%

第 74 号竪穴建物跡 (第 112・113 図 PL18)

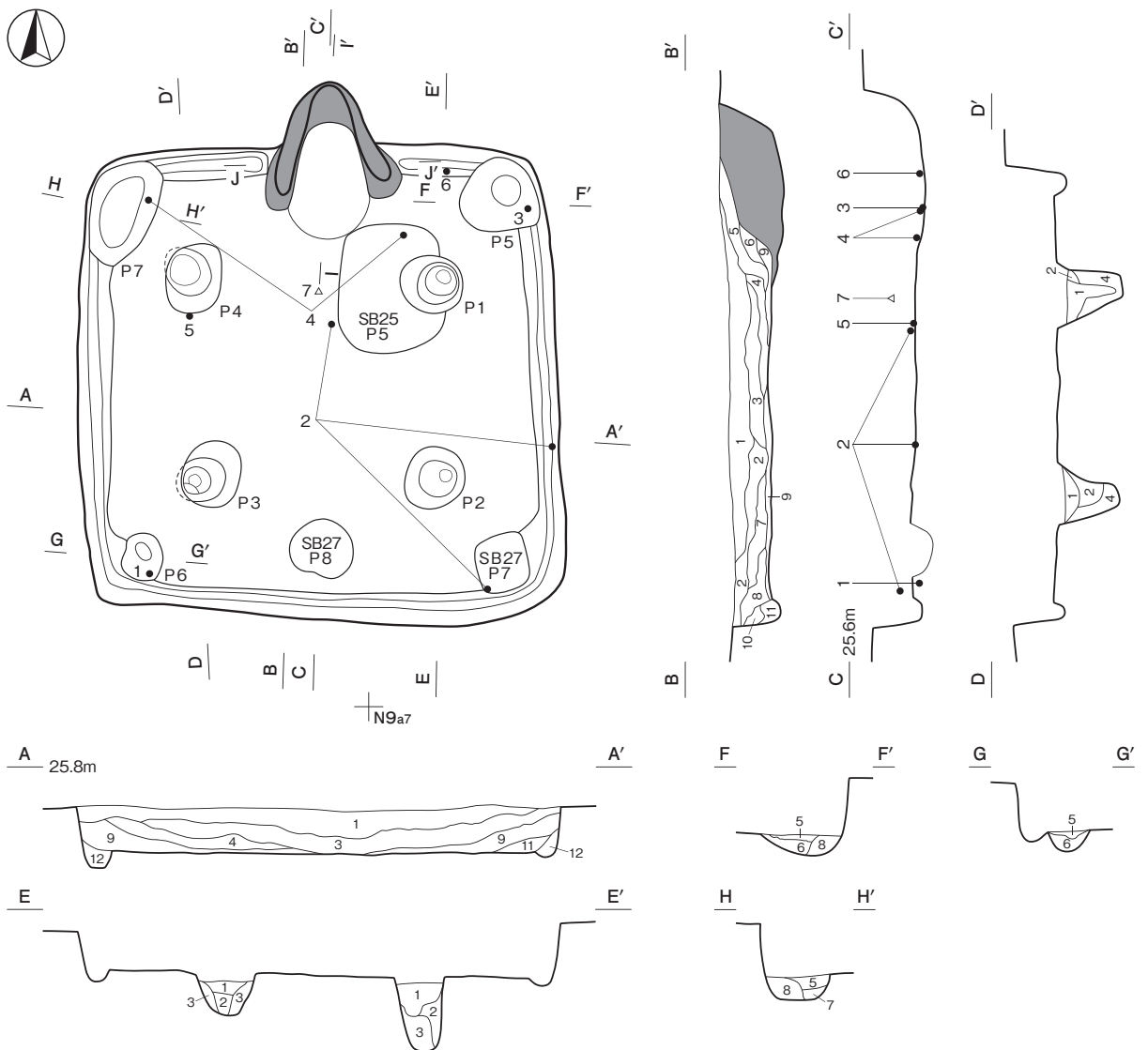
位置 調査区南部のM9j6区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 25・27 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.06 m, 短軸 4.00 m の方形で, 主軸方向は  $N-1^{\circ}-W$  である。壁高は 34 ~ 44 cm で, ほぼ直立している。

床 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 135 cm で, 燃焼部の幅は 70 cm である。竈は煙道部を 5 ~ 20 cm ほど掘り込み, 第 13 ~ 16 層を埋土している。袖部は地山の上にローム粒子や粘土粒子



土層解説

1	75YR3/3 暗褐	ローム粒C, 焼土粒C, 炭化物D・粒C/粘B, 縮A
2	75YR4/3 褐	ローム小B・粒C, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B
3	75YR3/2 黒褐	ローム粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮B
4	75YR4/3 褐	焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B
5	75YR3/2 黒褐	焼土粒C, 炭化物D・粒D/粘B, 縮B
6	75YR3/4 暗褐	ローム小C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 縮B
7	75YR4/2 灰褐	ローム小C・粒C, 炭化粒D/粘C, 縮B
8	75YR3/2 黒褐	ローム粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮B
9	75YR3/3 暗褐	ローム粒C, 炭化粒D/粘B, 縮A
10	75YR3/2 黒褐	ローム粒D/粘B, 縮B
11	75YR3/3 暗褐	ローム小C・粒C, 炭化粒D/粘B, 縮B
12	75YR4/6 褐	ローム小B・粒B/粘C, 縮C

ピット土層解説

1	75YR3/3 暗褐	ローム粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B
2	75YR2/2 黒褐	ローム粒C, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B
3	75YR4/2 灰褐	ローム小B・粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘C, 縮C
4	75YR4/6 褐	ローム小B・粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘C, 縮C
5	75YR4/4 褐	ローム粒B/粘B, 縮A
6	75YR3/2 黒褐	ローム小B・粒B, 焼土粒D/粘B, 縮B
7	75YR4/3 褐	ローム小C・粒B/粘B, 縮B
8	75YR3/3 暗褐	ローム粒B, 炭化粒D/粘C, 縮C

0 (1:60) 2m

第 112 図 第 74 号竪穴建物跡実測図

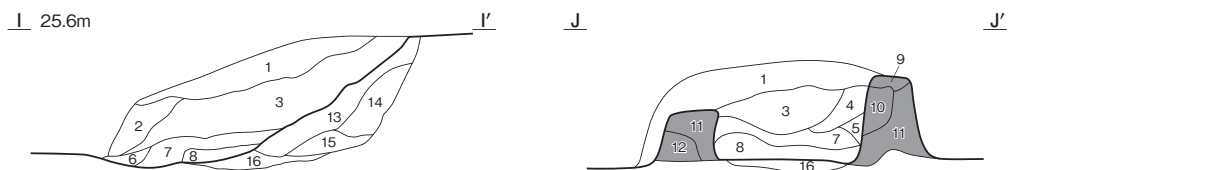
を含む第9～12層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に55cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 7か所。P1～P4は深さ35～60cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5～P7は深さ15～20cmで、性格不明である。

**覆土** 12層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化物を含んでいることから、埋め戻されている。

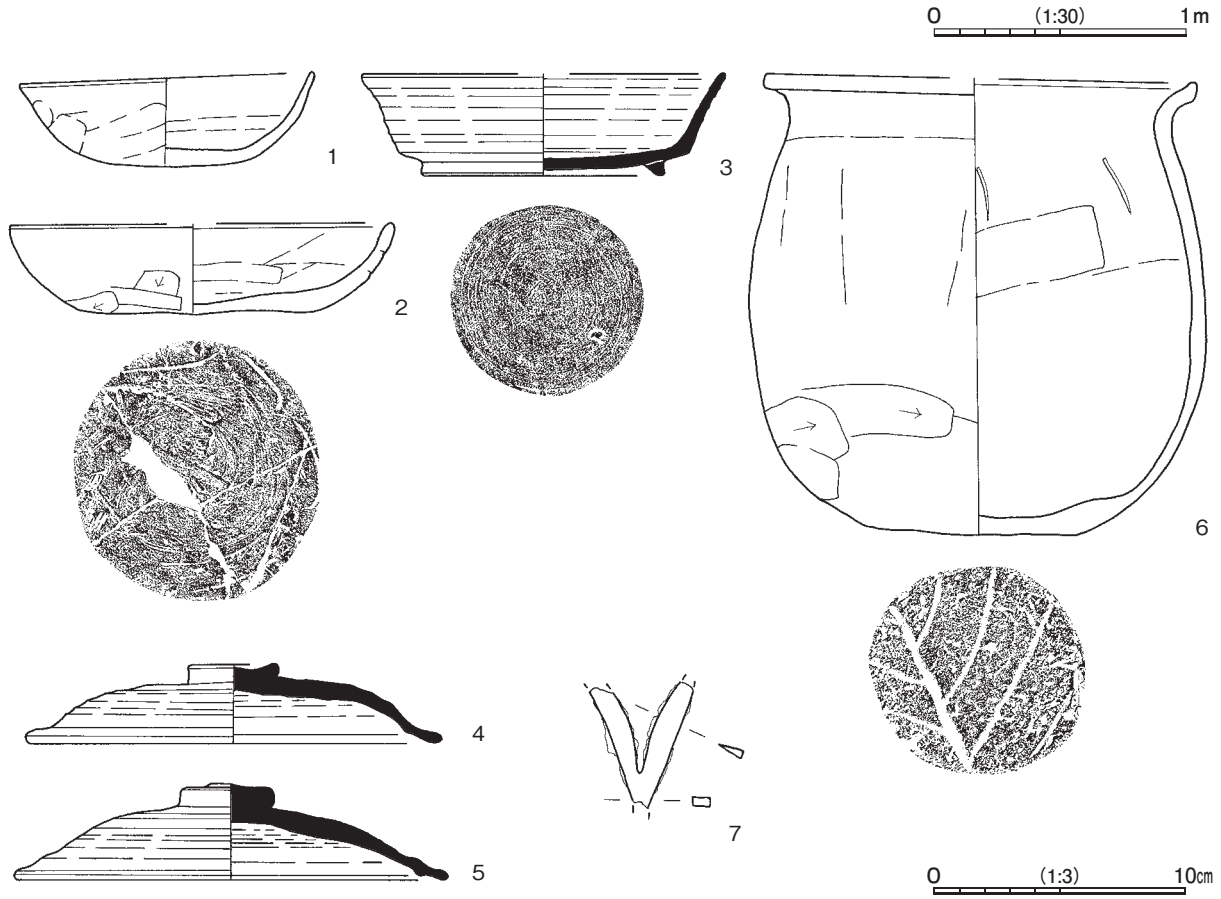
**遺物出土状況** 土師器片144点(坏17, 甕127), 須恵器片37点(坏17, 蓋8, 瓶1, 甕11), 金属製品4点(鉄鏃1, 釘2, 不明1)が出土している。3・5は床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。その他の遺物は埋め戻しに際して投棄されたものであり, 2は破片3点, 4は破片2点が接合したものである。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



**覆土層解説**

1	10YR4/3	にふい黄褐色	焼土粒D/粘C, 縮B	9	5YR3/4	暗赤褐色	焼土大C・小B・粒B, 粘土粒B/粘C, 縮B
2	10YR4/3	にふい黄褐色	焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮B	10	10YR5/2	灰黄褐色	ローム粒D, 焼土粒D, 粘土粒B/粘B, 縮B
3	10YR3/4	暗褐色	焼土粒C/粘C, 縮B	11	7.5YR6/6	橙	ローム粒D, 焼土小A・粒A, 粘土粒C/粘C, 縮B
4	10YR3/4	暗褐色	ローム粒C, 焼土粒C/粘C, 縮B	12	7.5YR5/2	灰褐色	ローム粒D, 粘土粒C/粘B, 縮A
5	10YR3/3	暗褐色	焼土粒C, 炭化粒D/粘C, 縮B	13	7.5YR4/2	灰褐色	ローム粒D, 粘土粒B/粘B, 縮A
6	10YR3/4	暗褐色	ローム小D・粒D, 焼土粒D/粘C, 縮A	14	5YR4/4	にふい赤褐色	焼土小B・粒B/粘C, 縮B
7	5YR4/4	にふい赤褐色	焼土大B・小B・粒B, 炭化粒B/粘C, 縮B	15	7.5YR3/3	暗褐色	ローム粒C, 焼土粒B/粘C, 縮B
8	5YR3/4	暗赤褐色	焼土小B・粒B, 炭化粒D/粘C, 縮B	16	7.5YR4/3	褐色	焼土中D・粒B/粘B, 縮B



第113図 第74号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 59 表 第 74 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	11.6	3.8	5.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL42
2	土師器	坏	[15.2]	3.6	9.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 底部手持ちヘラ削り 内面凹み	覆土下層	60%
3	須恵器	高台付坏	[14.4]	4.1	9.5	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼付	床面	50% PL42
4	須恵器	蓋	16.6	3.2	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL42 新治窯
5	須恵器	蓋	[16.9]	3.8	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	70% PL42 新治窯
6	土師器	甕	[17.0]	18.5	8.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 体部下端横位のヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土下層	70% PL42

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	鉄鎌	(5.1)	(4.1)	(0.4)	(9.96)	鉄	鎌身部雁股式 鎌身部断面三角形 頸部断面四角形 茎部欠損	覆土下層	PL48

第 77 号竪穴建物跡 (第 114・115 図 PL18)

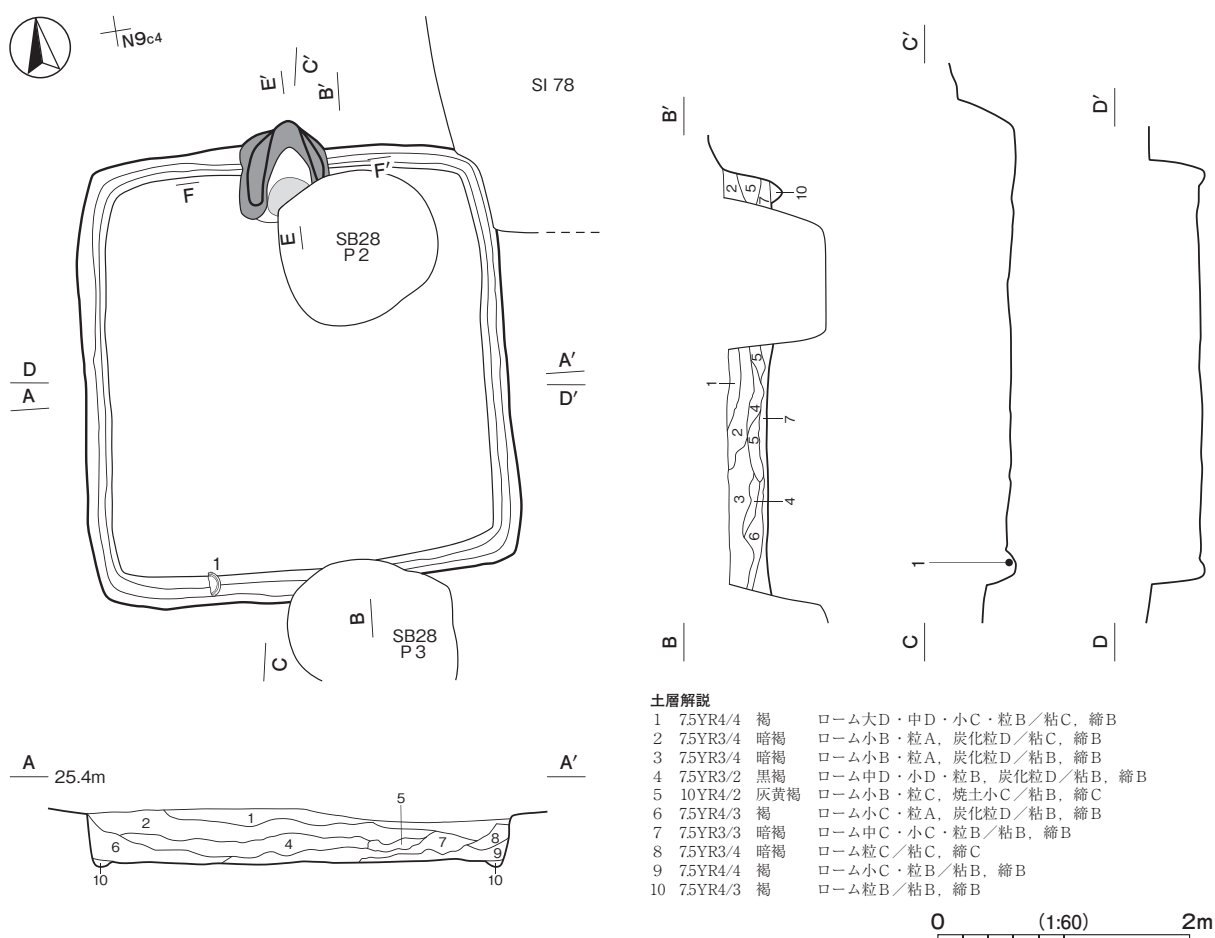
**位置** 調査区南部の N9c4 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 78 号竪穴建物, 第 28 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸 3.56 m, 短軸 3.32 m の方形で, 主軸方向は N-6°-E である。壁高は 16~40 cm で, ほぼ直立している。

**床** 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。第 28 号掘立柱建物 P2 に掘り込まれているため, 確認できた燃焼部の



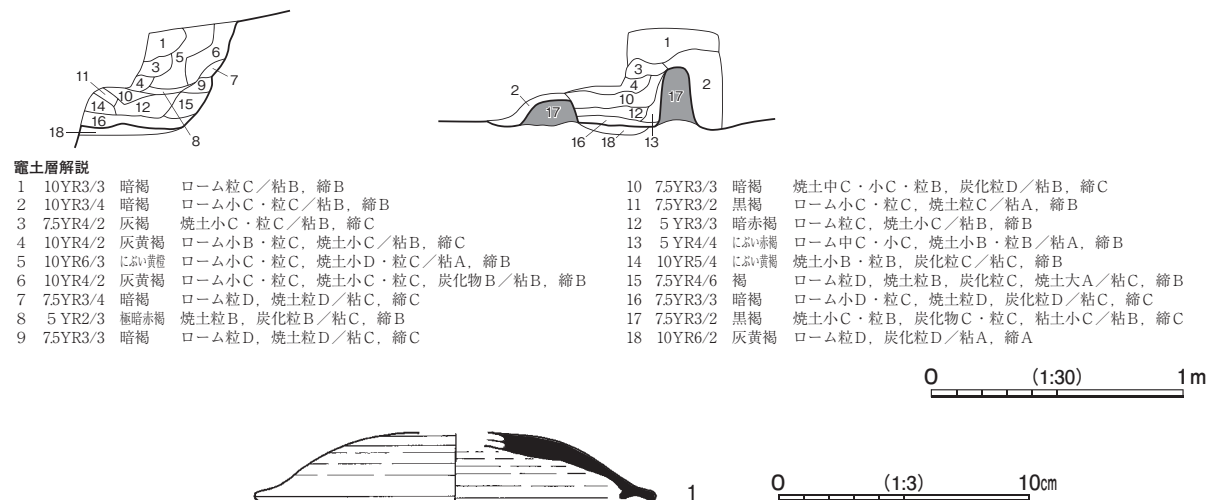
第 114 図 第 77 号竪穴建物跡実測図

E 25.4m

E'

F

F'



第115図 第77号竈穴建物跡・出土遺物実測図

幅は40cmである。袖部は地山の上に焼土ブロックや粘土ブロックを含む第17層を積み上げて構築されている。火床部は床面を浅く掘りくぼめ、第18層を埋土して整地している。火床面は第18層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に25cmほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

**覆土** 10層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子を含んでいることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片39点(坏7, 甕32), 須恵器片7点(坏1, 蓋4, 甕2)が出土している。1は壁溝床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。それ以外の小片は、埋め戻しに際して投棄されたものである。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第60表 第77号竈穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[15.9]	(2.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	30% PL42 新治窯

### 第78号竈穴建物跡 (第116・117図 PL18)

**位置** 調査区南部のN9b5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

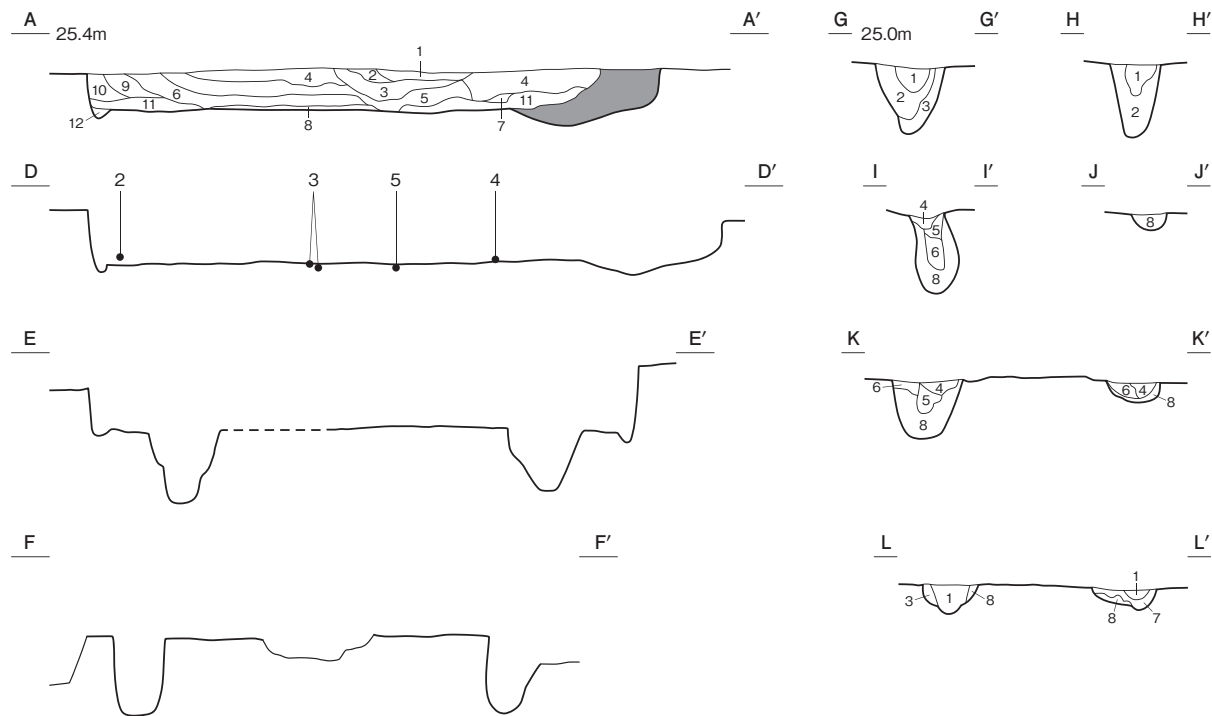
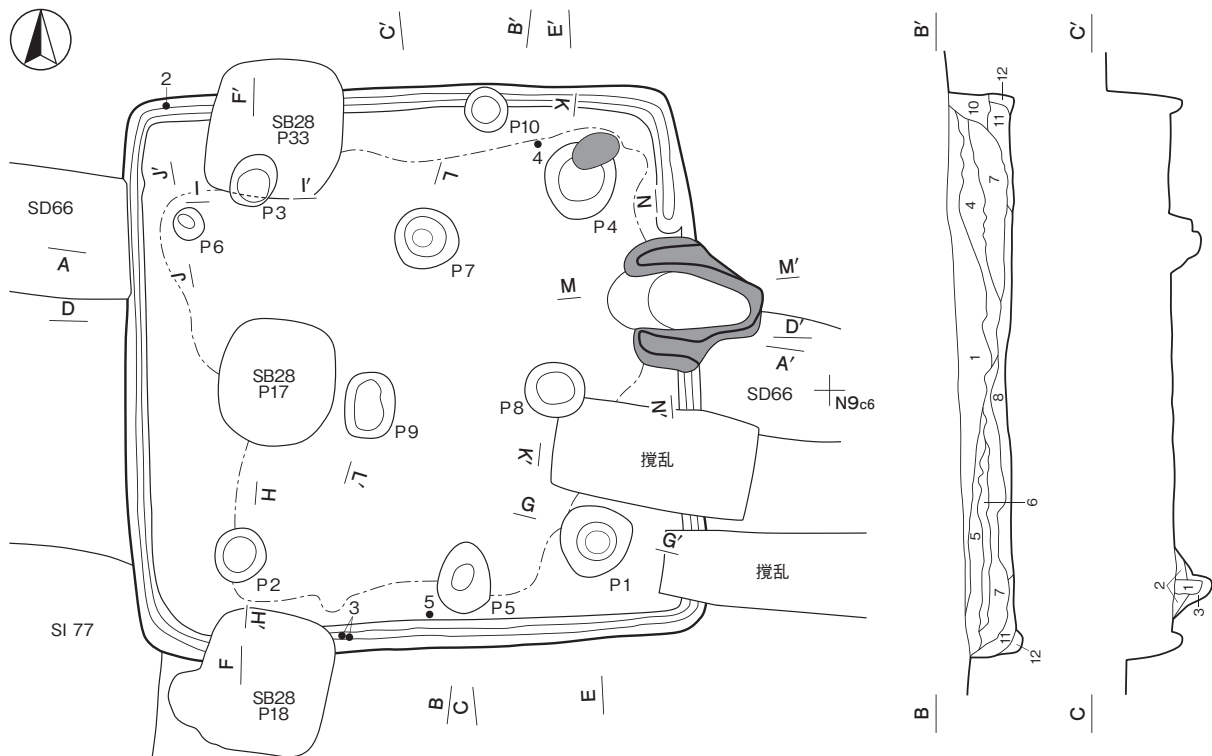
**重複関係** 第77号竈穴建物跡を掘り込み、第28号掘立柱建物、第66号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.56m, 短軸4.45mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は32~48cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められている。壁溝が全周している。

**竈** 東壁のやや北寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cmで、燃烧部の幅は45cmである。竈は地山を削り出して整地されている。袖部は整地面上にロームブロックや粘土ブロックを含む第17~20層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりややくぼんでおり、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に55cmほど掘り込まれ、奥壁で直立している。

**ピット** 10か所。P1~P4は深さ50~65cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5~P10は深さ12~28

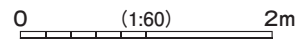


**土層解説**

- |    |         |     |                             |
|----|---------|-----|-----------------------------|
| 1  | 75YR3/4 | 暗褐  | ローム小B, 焼土粒D/粘C, 締A          |
| 2  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム粒C/粘C, 締B                |
| 3  | 75YR4/4 | 褐   | ローム中D・粒B/粘B, 締A             |
| 4  | 75YR4/3 | 褐   | ローム中D・小C・粒B/粘C, 締A          |
| 5  | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム小D・粒B, 炭化粒D/粘B, 締A       |
| 6  | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム中D・小C・粒B/粘C, 締A          |
| 7  | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム中D・小C・粒B, 炭化粒D/粘B, 締A    |
| 8  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム中D・小D・粒B/粘B, 締A          |
| 9  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化物C/粘B, 締A |
| 10 | 75YR4/4 | 褐   | ローム小C・粒A/粘C, 締A             |
| 11 | 75YR4/6 | 褐   | ローム小B・粒A, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 締B |
| 12 | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム粒A/粘C, 締B                |

**ピット土層解説**

- |   |         |    |                                |
|---|---------|----|--------------------------------|
| 1 | 75YR4/3 | 褐  | ローム中D・小C・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 締C |
| 2 | 75YR4/4 | 褐  | ローム中C・小C・粒C/粘B, 締C             |
| 3 | 75YR4/4 | 褐  | ローム大B・中C/粘B, 締A                |
| 4 | 75YR3/2 | 黒褐 | ローム中B・小D・粒C/粘B, 締B             |
| 5 | 75YR3/2 | 黒褐 | ローム粒B/粘B, 締C                   |
| 6 | 75YR4/3 | 褐  | ローム小C・粒A/粘B, 締C                |
| 7 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム小C・粒B/粘C, 締B                |
| 8 | 75YR4/4 | 褐  | ローム中B・小B・粒B/粘B, 締B             |



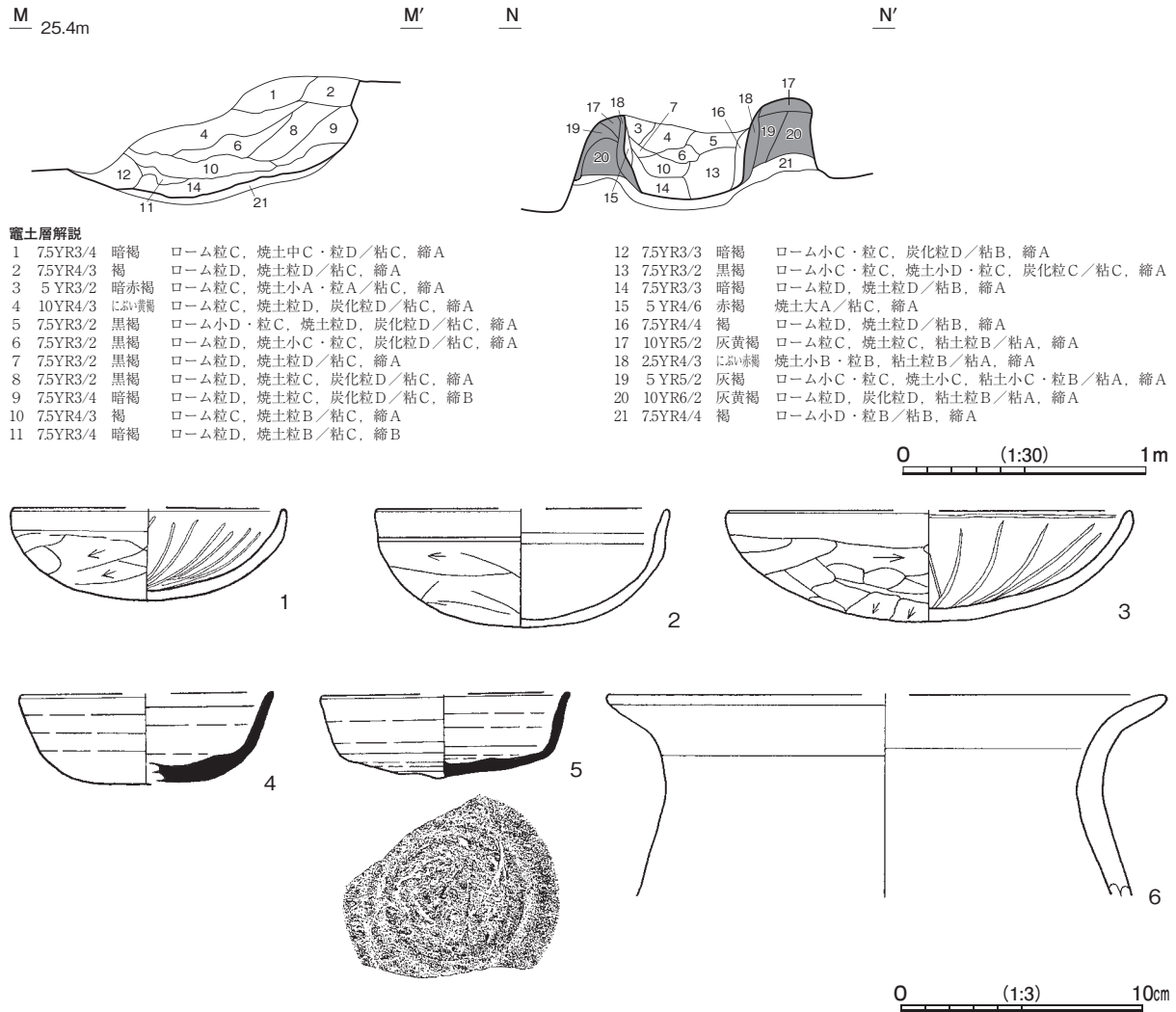
第 116 図 第 78 号 竪穴建物跡実測図

cmで、性格は不明である。

**覆土** 12層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 91点（坏 28, 碗 1, 甕 62）、須恵器片 4点（坏 2, 甕 2）が出土している。3～5は床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。3は南側壁溝床面から出土しており、破片2点が接合したものである。2は埋め戻しに際して投棄されたものである。

**所見** 時期は、出土土器から7世紀末葉と考えられる。



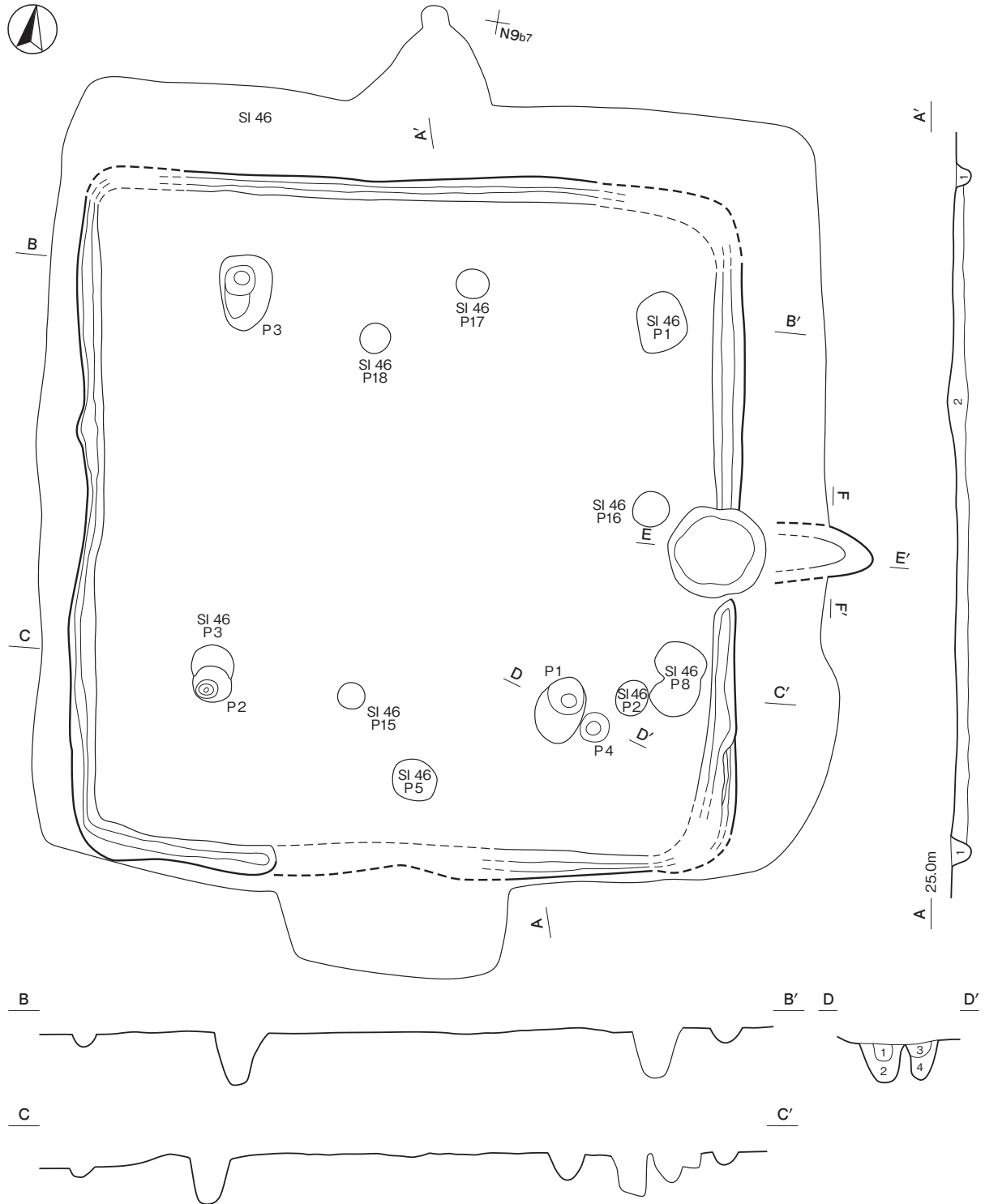
第117図 第78号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第61表 第78号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[11.2]	3.7	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面放射状の磨き	覆土中	50%
2	土師器	坏	[12.0]	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面劣化により不明	覆土下層	40%
3	土師器	坏	[16.4]	4.6	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り 内面放射状の磨き 口縁部内面に沈線	床面	60% PL42
4	須恵器	坏	[10.4]	3.7	[6.0]	長石・石英	橙	普通	体部ロクロナデ 底部回転へラ切り後多方向のナデ 底部内面凹み	床面	40%
5	須恵器	坏	[10.2]	3.5	7.5	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ 底部回転へラ切り後多方向のナデ	床面	40%
6	土師器	甕	[22.8]	(8.3)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	10%

第 80 号竪穴建物跡 (第 118・119 図 PL18・19)

位置 調査区南部の N 9 c7 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。



土層解説

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 75YR3/4 暗褐 | ローム中D・小C・粒C/粘B, 締B |
| 2 75YR4/3 褐  | ローム小C・粒B/粘B, 締A    |

ピット土層解説

- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 75YR4/4 褐  | ローム中D・小B・粒B/粘B, 締B |
| 2 75YR4/3 褐  | ローム中B・小C・粒B/粘B, 締B |
| 3 75YR3/4 暗褐 | ローム粒B/粘B, 締C       |
| 4 75YR4/4 褐  | ローム中D・小D・粒B/粘B, 締C |

0 (1:60) 2m

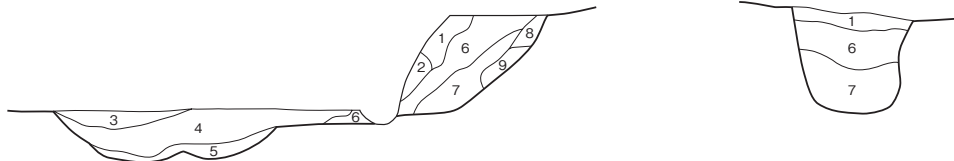
第 118 図 第 80 号竪穴建物跡実測図 (1)

E 25.4m

E'

F

F'



**電土層解説**

- |   |         |      |                                      |
|---|---------|------|--------------------------------------|
| 1 | 75YR2/2 | 黒褐   | ローム粒C, 焼土中D・小B・粒B, 炭化粒C/粘B, 縮A       |
| 2 | 75YR5/4 | にぶい褐 | ローム粒C, 焼土大D・中B・小B・粒B, 炭化物C・粒B/粘B, 縮A |
| 3 | 5 YR3/4 | 暗赤褐  | ローム粒C, 焼土粒B/粘C, 縮A                   |
| 4 | 75YR4/3 | 褐    | ローム粒D, 焼土粒B/粘C, 縮A                   |
| 5 | 75YR4/4 | 褐    | ローム小B・粒C/粘B, 縮A                      |
| 6 | 75YR5/4 | にぶい褐 | ローム小D, 焼土中B・小B・粒B, 炭化粒B/粘B, 縮A       |
| 7 | 75YR6/4 | にぶい橙 | ローム粒C, 焼土中B, 炭化粒C/粘B, 縮A             |
| 8 | 75YR4/4 | 褐    | ローム中B・小A・粒A, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮A       |
| 9 | 75YR4/6 | 褐    | ローム小B・粒A, 焼土粒C, 炭化粒C/粘A, 縮A          |

第 119 図 第 80 号竪穴建物跡実測図 (2)

**重複関係** 第 46 号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認できた規模は、長軸 6.80 m、短軸 6.54 m の方形で、主軸方向は N - 83° - E である。第 46 号竪穴建物に掘り込まれているため、壁の立ち上がりは確認できなかった。

**床** 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝がほぼ全周し、土層一層のみを確認した。

**竈** 東壁の中央部に付設されている。竈は遺存状態が悪く、煙道部の一部を確認したのみである。火床部は床面より 20 cm ほどくぼんでおり、明確な火床面は認められない。煙道部は壁外に推定で 130 cm ほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

**ピット** 4 か所。P 1 ~ P 3 は深さ 40 ~ 55 cm で、配置から主柱穴と考えられる。P 3 は第 46 号竪穴建物の主柱穴と共通するものと考えられる。P 4 は深さ 35 cm で、性格不明である。

**遺物出土状況** 土師器片 53 点 (坏 13, 甕 40), 須恵器片 8 点 (坏 1, 蓋 2, 鉢 1, 甕 4) が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀初頭と考えられる。本跡を掘り込んでいる第 46 号竪穴建物と床面の高さがほぼ一致する。二つの竪穴建物に時期差があまりないことや第 46 号竪穴建物と本跡の柱穴の配置などから、本跡は第 46 号竪穴建物へ建て替える前の竪穴建物跡の可能性はある。

**第 83 号竪穴建物跡 (第 120 図 PL19)**

**位置** 調査区南部の N 9 a1 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 11 号竪穴建物跡を掘り込み、第 66 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 西側半分は削平を受け、南側は第 66 号溝に掘り込まれており、確認できた規模は南北軸 3.46 m、東西軸 2.08 m のみである。平面形は長方形で、主軸方向は N - 3° - E と推定できる。壁高は 7 cm で、ほぼ直立している。

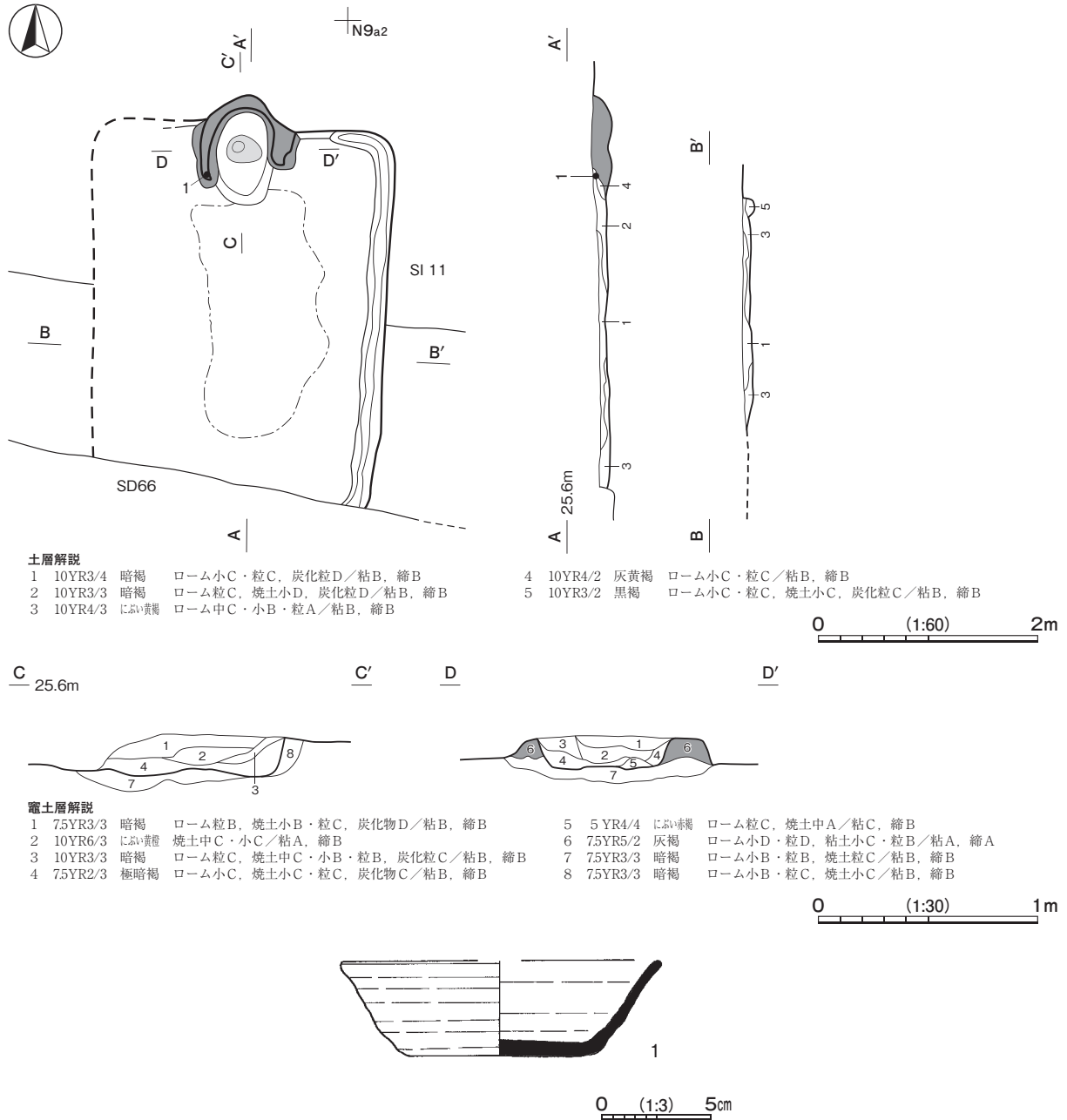
**床** 平坦で、中央部が硬化している。壁溝は確認できた範囲で回っている。

**竈** 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100 cm で、燃焼部の幅は 50 cm である。竈は全体を浅く掘りくぼめ、第 7・8 層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第 6 層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は第 7 層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に 30 cm ほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

**覆土** 5 層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子を含んでおり、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 22 点（坏 5，甕 17），須恵器片 3 点（坏）が出土している。1 は竈の左袖上から出土している。廃絶の際に遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土遺物から 8 世紀後葉と考えられる。



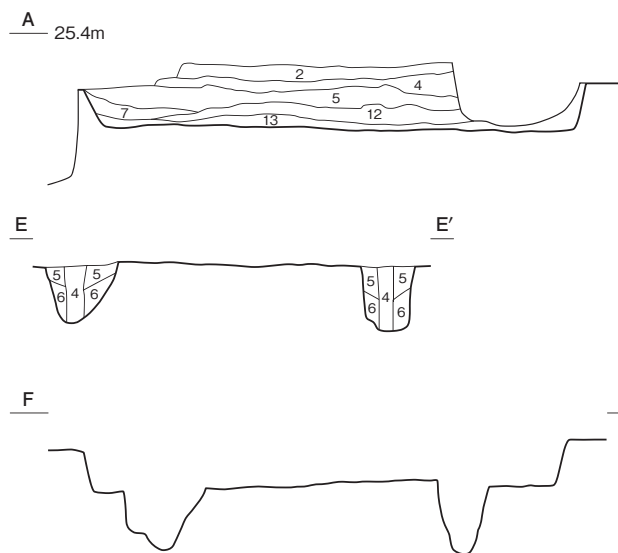
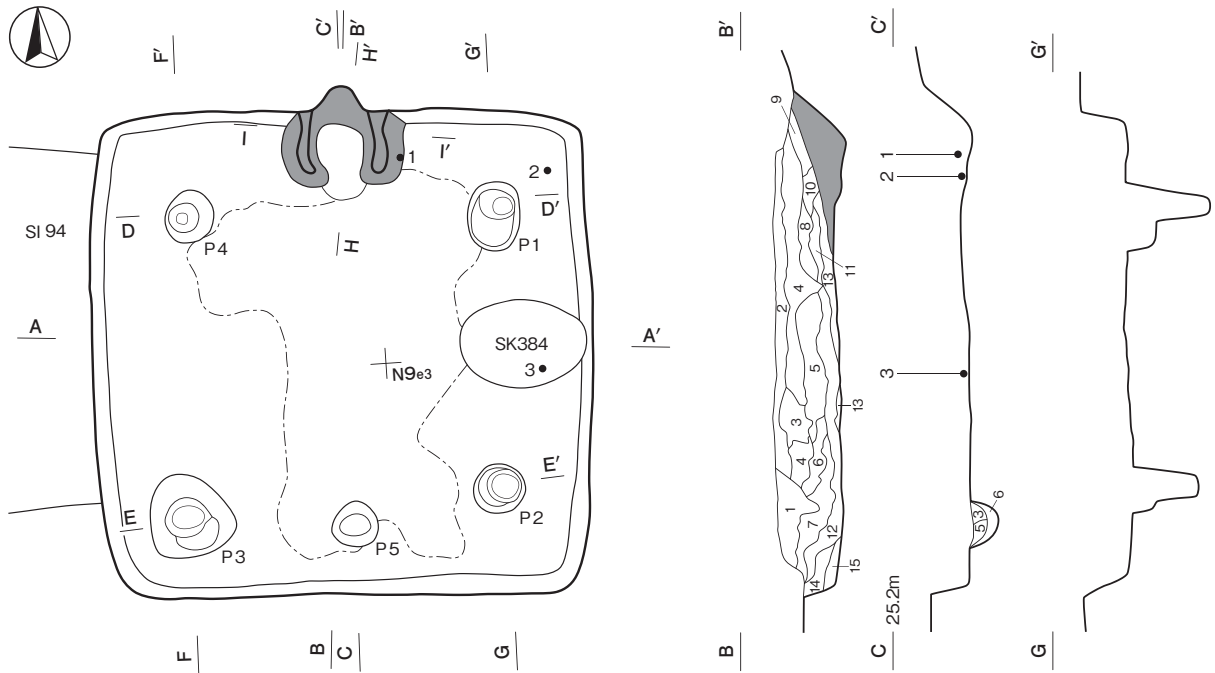
第 120 図 第 83 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 62 表 第 83 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[14.4]	4.4	8.5	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部ロクロナデ 底部多方向のナデ	覆土上層	50% 新治窯

**第 93 号竪穴建物跡**（第 121・122 図 PL19）

**位置** 調査区南部の N 9 d 2 区，標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

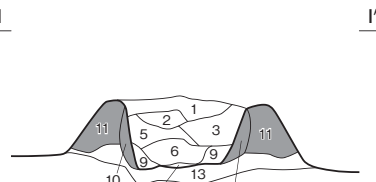
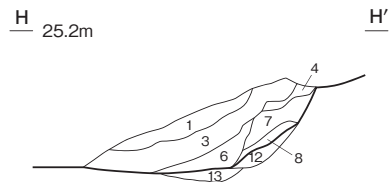
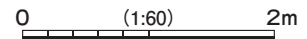


**土層解説**

- |    |         |     |                                   |
|----|---------|-----|-----------------------------------|
| 1  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム粒D/粘C, 締B                      |
| 2  | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 締A          |
| 3  | 5 YR4/8 | 赤褐  | ローム粒D, 焼土大B・中C・小C・粒C, 炭化粒D/粘C, 締A |
| 4  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム粒C, 焼土粒C, 炭化粒C/粘C, 締A          |
| 5  | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム小D・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A       |
| 6  | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム中D・小D・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A    |
| 7  | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム小D・粒C/粘C, 締B                   |
| 8  | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム中C・小C・粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A    |
| 9  | 75YR2/3 | 極暗褐 | ローム粒D, 焼土中D/粘C, 締A                |
| 10 | 75YR4/2 | 灰褐  | ローム小C・粒C, 焼土粒D/粘C, 締A             |
| 11 | 75YR3/2 | 黒褐  | ローム小C・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 締B       |
| 12 | 75YR3/4 | 暗褐  | ローム中C・小C・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A    |
| 13 | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム小C・粒C/粘B, 締A                   |
| 14 | 75YR2/2 | 黒褐  | ローム粒D/粘C, 締B                      |
| 15 | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム小C・粒C, 焼土粒D/粘B, 締A             |

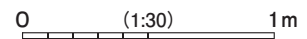
**ピット土層解説**

- |   |         |    |                    |   |         |    |                 |
|---|---------|----|--------------------|---|---------|----|-----------------|
| 1 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム粒C/粘C, 締C       | 4 | 75YR3/3 | 暗褐 | ローム小C・粒A/粘C, 締C |
| 2 | 75YR4/3 | 褐  | ローム中C・小B・粒B/粘B, 締C | 5 | 75YR4/3 | 褐  | ローム中C・粒D/粘B, 締B |
| 3 | 75YR4/4 | 褐  | ローム中C・小D/粘B, 締A    | 6 | 75YR4/3 | 褐  | ローム中C・小C/粘A, 締A |



**竈土層解説**

- |   |         |     |                       |    |         |       |                             |
|---|---------|-----|-----------------------|----|---------|-------|-----------------------------|
| 1 | 75YR2/3 | 極暗褐 | 焼土粒C, 炭化粒D/粘C, 締A     | 8  | 75YR4/4 | 褐     | 焼土中D・小C・粒B, 炭化粒D/粘C, 締B     |
| 2 | 75YR4/2 | 灰褐  | 焼土粒D/粘C, 締B           | 9  | 5 YR4/4 | にじみ赤褐 | ローム粒C, 焼土小A・粒B, 炭化物C/粘A, 締A |
| 3 | 5 YR3/6 | 暗赤褐 | 焼土中D・小C・粒B/粘C, 締B     | 10 | 75YR6/2 | 灰褐    | ローム小C, 焼土粒C, 粘土粒A/粘C, 締B    |
| 4 | 5 YR3/4 | 暗赤褐 | 焼土小C・粒B/粘C, 締B        | 11 | 75YR4/4 | 褐     | ローム小C・粒C, 粘土粒B/粘C, 締A       |
| 5 | 75YR4/4 | 褐   | 焼土小D・粒C/粘C, 締C        | 12 | 75YR3/3 | 暗褐    | ローム粒C, 炭化粒D/粘B, 締B          |
| 6 | 75YR4/4 | 褐   | ローム小C, 焼土小C・粒C/粘C, 締C | 13 | 75YR4/4 | 褐     | ローム粒C, 焼土粒D/粘C, 締C          |
| 7 | 75YR3/3 | 暗褐  | ローム小C・粒A/粘C, 締C       |    |         |       |                             |



第 121 図 第 93 号 竪穴建物跡実測図



**重複関係** 第94号竪穴建物跡を掘り込み、第384号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.92m、短軸3.84mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は32~40cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部の幅は30cmである。竈は全体に5cmほど掘りくぼめ、第12・13層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土粒子を含む第10・11層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に20cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

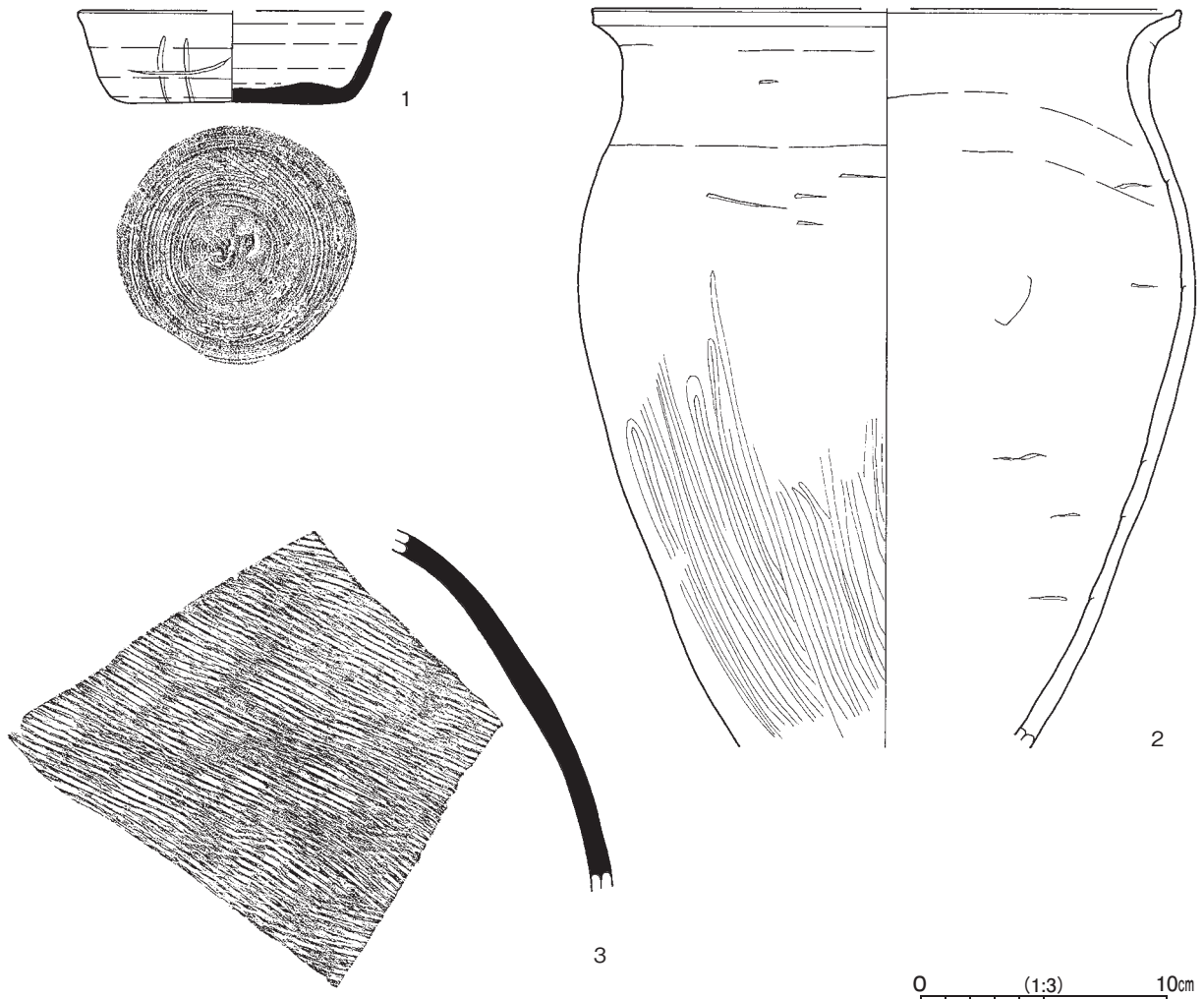
**ピット** 5か所。P1~P4は深さ45~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。第1~3層は抜き取り後の覆土、第4層は柱痕、第5・6層は掘方への埋土である。P5は深さ25cmで、南壁際付近に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

**覆土** 15層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片58点(坏3, 甕55), 須恵器片21点(坏4, 蓋1, 壺1, 甕15)が出土している。

1~3はいずれも覆土下層から出土しており、廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第122図 第93号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 63 表 第 93 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.5]	3.8	9.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部ロクロナデ 外面ヘラ記号 底部回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL42 新治窯
2	土師器	甕	[23.7]	(29.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ヘラ削り後ナデ 中位から下位縦方向のヘラ磨き 内面ナデ	覆土下層	40%
3	須恵器	甕	-	(15.6)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	5% 内面一部煤付着 新治窯

第 94 号竪穴建物跡 (第 123 図 PL19)

位置 調査区南部の N 9 d2 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 93 号竪穴建物, 第 28 号掘立柱建物, 第 335 号土坑に掘り込まれている。

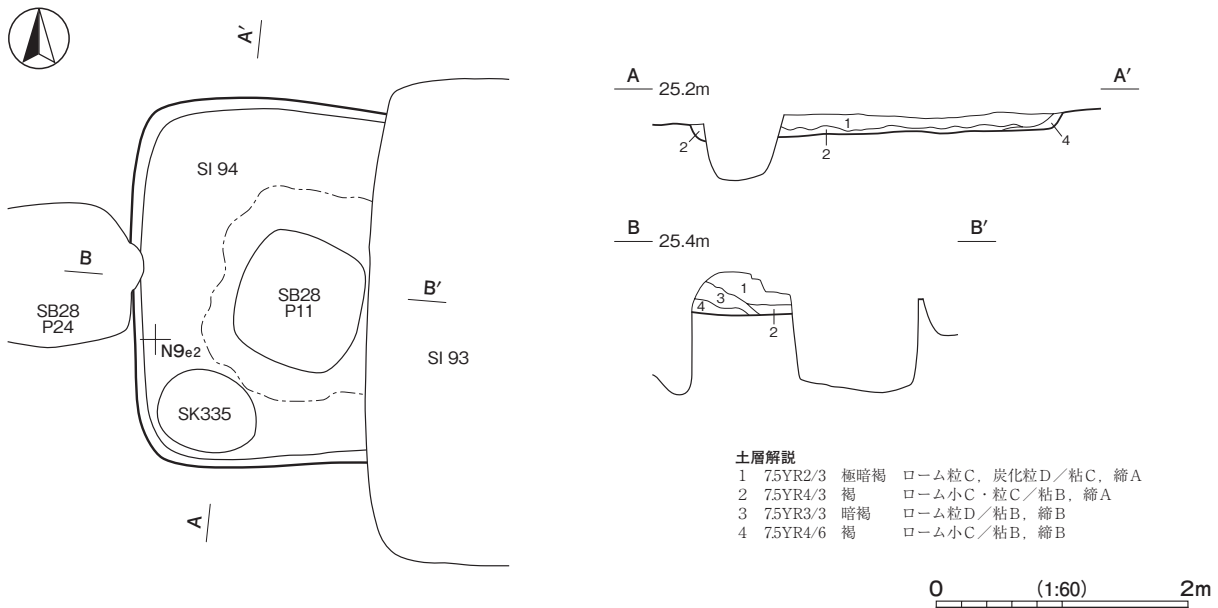
規模と形状 確認できた規模は南北軸 2.92 m, 東西軸 1.90 m のみである。平面形は方形または長方形で, 主軸方向は N - 3° - E と推定できる。壁高は 12 ~ 16 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

覆土 4 層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており, 自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 9 点(甕), 須恵器片 1 点(甕)が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

所見 時期は, 主軸方向や 8 世紀前葉の第 93 号竪穴建物との重複関係から, 7 世紀末葉と考えられる。



第 123 図 第 94 号竪穴建物跡実測図

第 64 表 奈良時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
11	M 9 j1	N - 0°	方形	8.35 × 8.25	3 ~ 34	平坦	全周	4	1	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 金属製品	8世紀前葉	本跡→SI83, SK362, SD 5
46	N 9 b6	N - 7° - W	方形	7.68 × 7.64	32 ~ 48	平坦	全周	4	7	7	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	8世紀初頭	SI80, SK276・333・334 → 本跡→SK210, SD 8・66
61	L 7 b2	N - 92° - E	方形	3.92 × 3.68	28 ~ 32	やや凹凸	全周	4	1	-	東壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀前葉	
63	L 7 d8	N - 3° - E	方形	3.82 × 3.78	6	平坦	全周	-	-	-	北壁	-	-	土師器, 須恵器, 石器	8世紀初頭	本跡→SD56
64	L 7 f0	N - 10° - E	方形	5.22 × 5.20	16 ~ 22	平坦	全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀初頭	SK189 → 本跡 → SB14, SK190
71	N10c3	N - 5° - E	[方形・長方形]	(2.76 × 2.32)	20 ~ 40	平坦	-	1	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀前葉	本跡→SD63

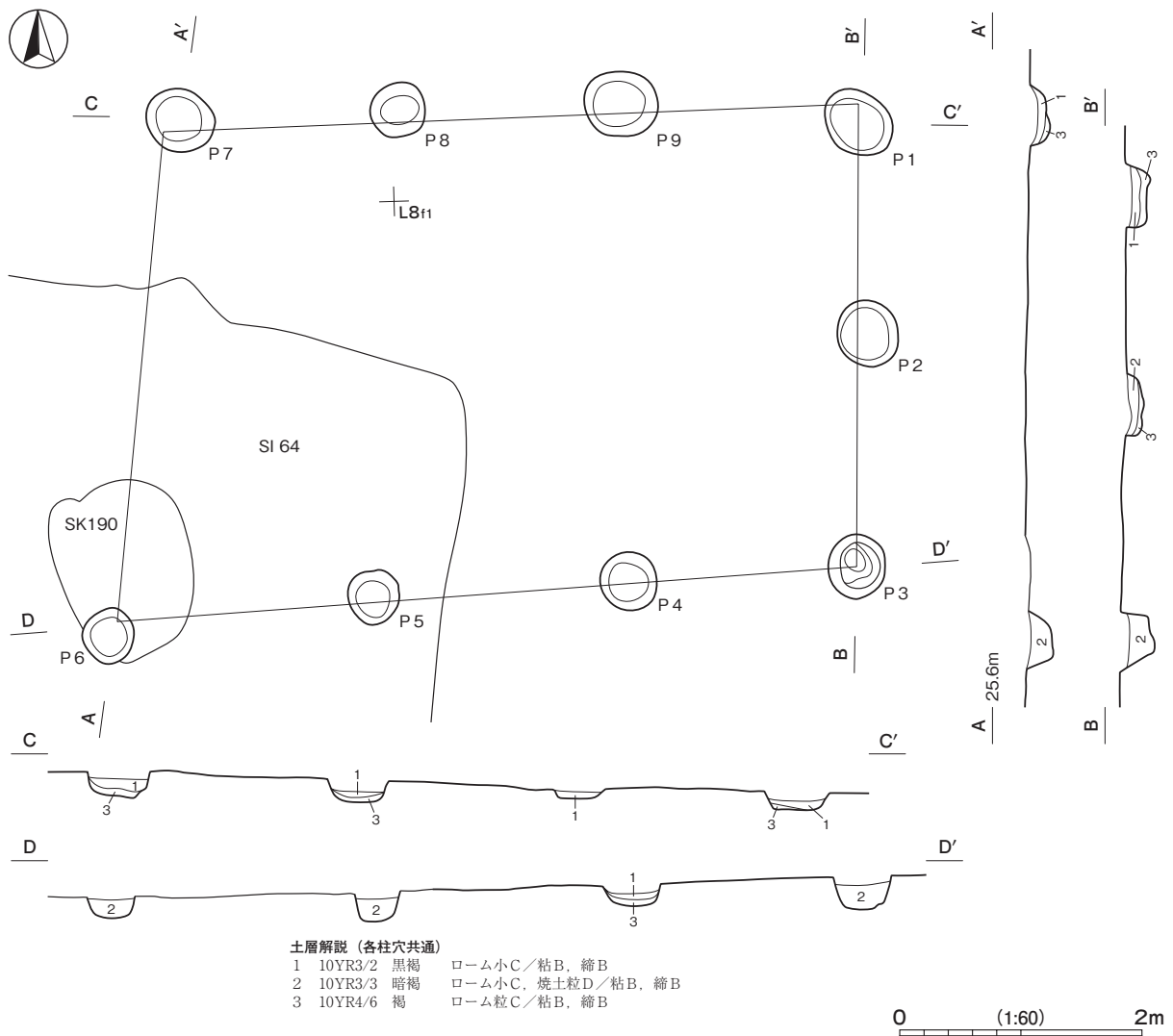
番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
74	M9j6	N-1°-W	方形	4.06 × 4.00	34 ~ 44	平坦	全周	4	-	3	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	8世紀前葉	本跡→SB25・27
77	N9c4	N-6°-E	方形	3.56 × 3.32	16 ~ 40	平坦	全周	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀前葉	本跡→SI78, SB28
78	N9b5	N-90°-E	方形	4.56 × 4.45	32 ~ 48	ほぼ平坦	全周	4	-	6	東壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀末葉	SI77→本跡→SB28, SD66
80	N9c7	N-83°-E	方形	6.80 × 6.54	-	平坦	[全周]	3	-	1	東壁	-	-	土師器, 須恵器	8世紀初頭	本跡→SI46
83	N9a1	N-3°-E	[長方形]	(3.46 × 2.08)	7	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀後葉	SI11→本跡→SD66
93	N9d2	N-3°-E	方形	3.92 × 3.84	32 ~ 40	平坦	-	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI94→本跡→SK384
94	N9d2	N-3°-E	[方形・長方形]	2.92 × (1.90)	12 ~ 16	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器, 須恵器	7世紀末葉	本跡→SI93, SB28, SK335

(2) 掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡 (第124・125図 PL19)

位置 調査区中央部のL8f1区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第64号竪穴建物跡, 第190号土坑を掘り込んでいる。



第124図 第14号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向がN - 88° - Eの東西棟である。規模は桁行6.16 m，梁行4.28 mで，面積は26.36 m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行が2.00 m（7尺），梁行が2.00 m（7尺）である。西妻側はP 6とP 7の間の柱穴が確認できなかったため，P 6 - P 7間が4.00 m（13尺）である。柱筋はP 6がやや南西側に寄っているものの，それ以外は概ね揃っている。

**柱穴** 9か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径45～65 cm，短径45～50 cmである。深さは8～28 cmで，掘方の壁はほぼ直立している。第1～3層はいずれもロームブロックやローム粒子が微量に含まれ，抜き取り後の堆積土と考えられる。

**遺物出土状況** 土師器片2点（坏，埴），須恵器片2点（蓋，甕）が出土している。1はP 5の覆土中から出土している。

**所見** 時期は，7世紀末葉の第64号竪穴建物跡，8世紀前葉の第190号土坑との切り合い関係や主軸方向，出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第125図 第14号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第65表 第14号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[12.2]	(0.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り	P 5覆土中	5%

#### 第16号掘立柱建物跡（第126図 PL19）

**位置** 調査区中央部のM 8a1区，標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

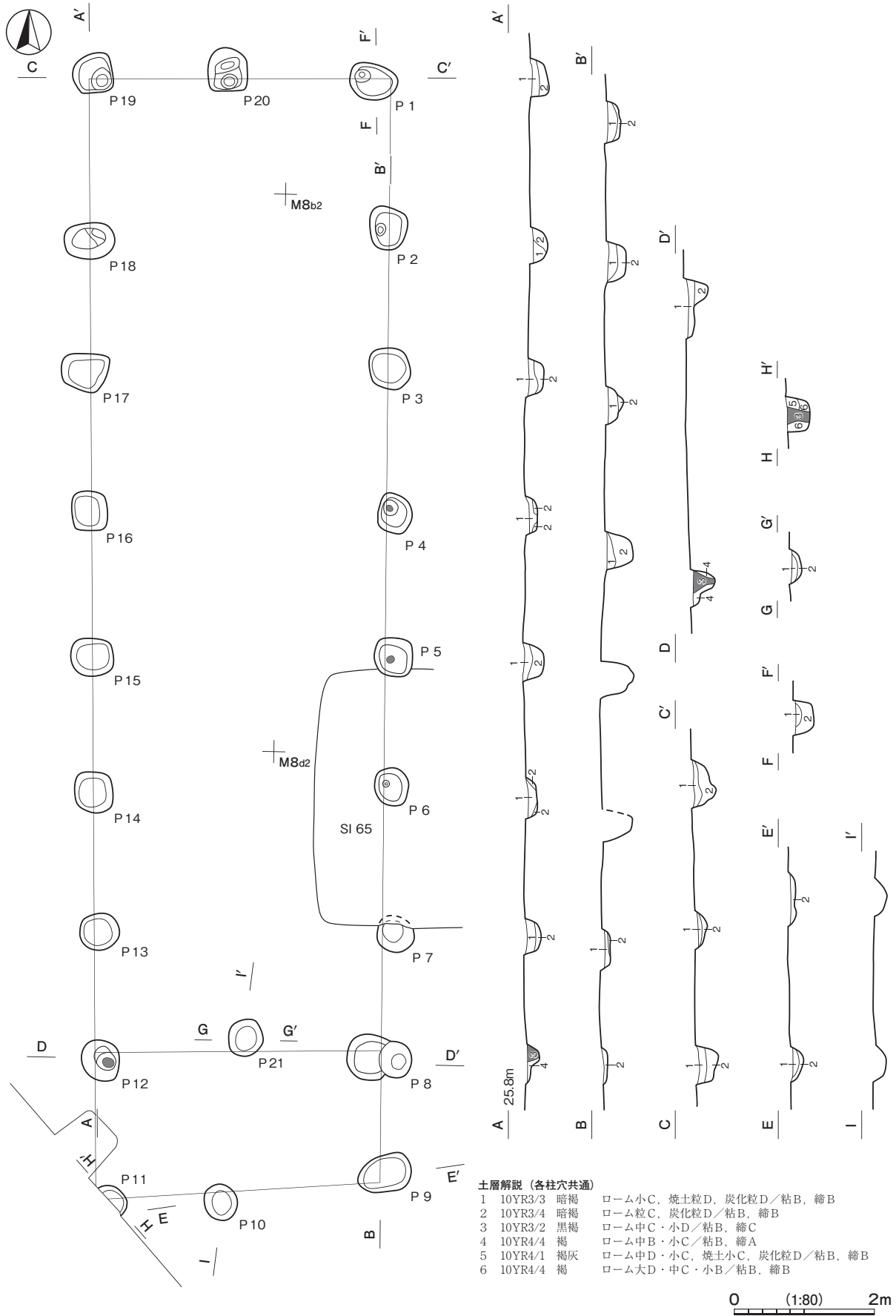
**重複関係** 第65号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行8間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向がN - 2° - Wの南北棟である。南妻から1か所目の側柱の柱筋状に間仕切柱穴1か所が配置されている。規模は桁行16.12 m，梁行4.08 mで，面積は65.77 m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行が北妻から2.10 m（7尺）を基本とし，ほぼ揃っている。梁行も2.10 m（7尺）を基本とし，ほぼ揃っている。間仕切柱穴は柱間がいずれも2.10 m（7尺）である。

**柱穴** 21か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で，長軸（径）50～76 cm，短軸（径）48～56 cm，深さは4～48 cmで，掘方の断面はほぼ直立または外傾している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土，第3層は柱痕跡，第4～6層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片4点（坏2，甕2）が出土している。いずれも細片のため，図示できなかった。

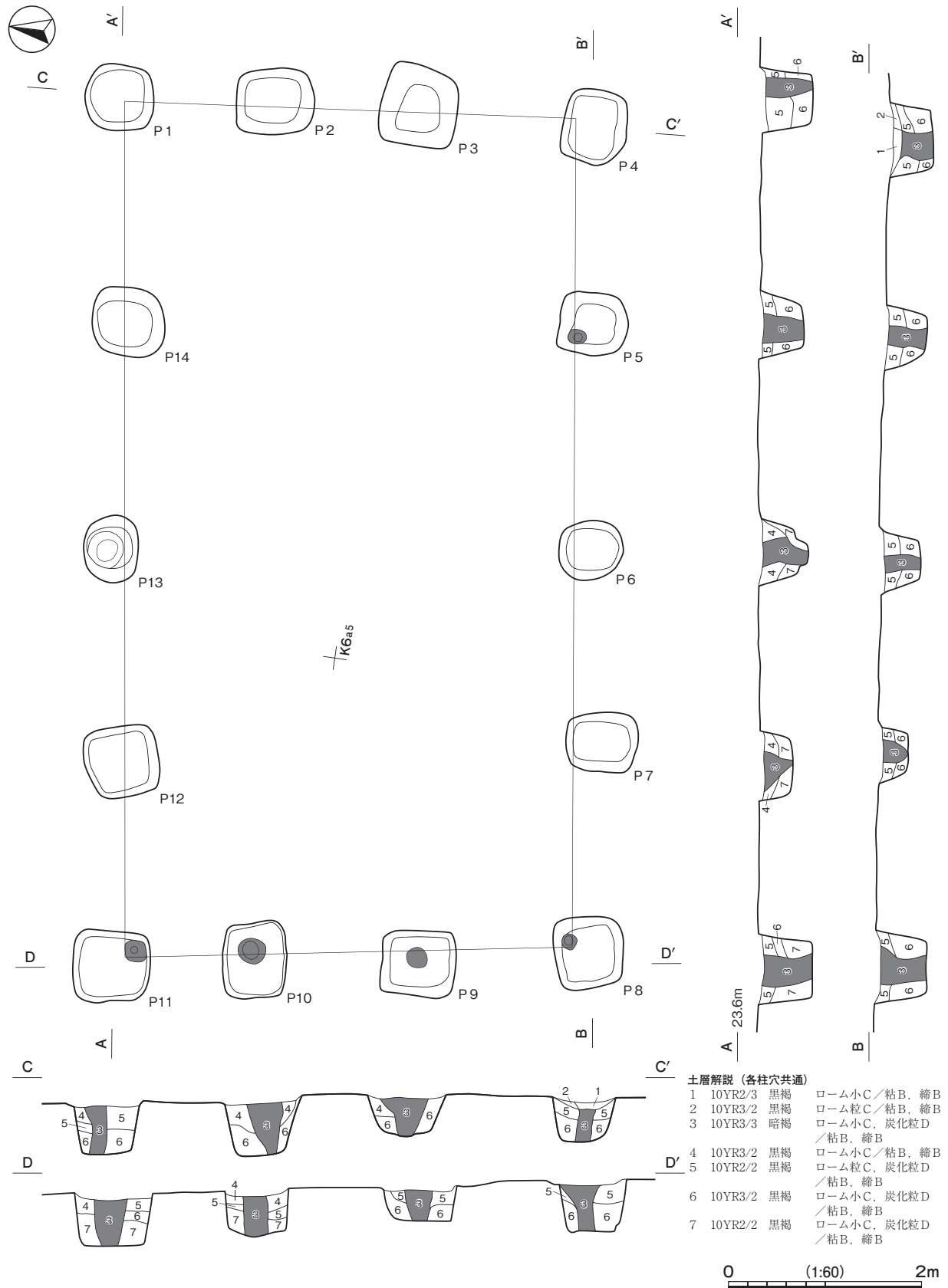
**所見** 時期は，主軸方向や出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第 126 図 第 16 号掘立柱建物跡実測図

第17号掘立柱建物跡 (第127図 PL20)

位置 調査区北部のJ6j4区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第127図 第17号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 桁行4間，梁行3間の側柱建物跡で，桁行方向がN - 85° - Eの東西棟である。規模は桁行8.92 m，梁行5.04 mで，面積は44.96 m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行が2.10 m（7尺）を基本とし，揃っている。梁行は1.60 m（5尺）を基本とし，概ね揃っている。

**柱穴** 14か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で，長軸（径）70～85 cm，短軸（径）55～80 cmである。深さは30～55 cmで，掘方の断面はほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土，第3層は柱痕跡，第4～7層は掘方への埋土と考えられる。

**遺物出土状況** 土師器片2点（壺，甕）が出土している。いずれも細片のため，図示できなかった。

**所見** 時期は，重複関係や主軸方向及び出土土器から，8世紀初頭と考えられる。

### 第18号掘立柱建物跡（第128～130図 PL20）

**位置** 調査区南部のM8b7区，標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

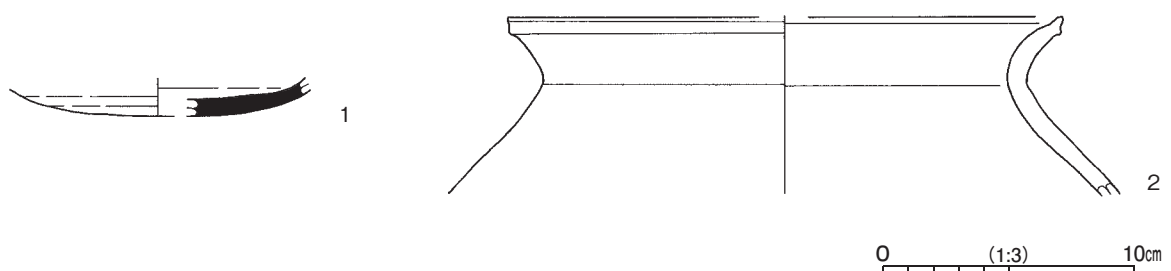
**重複関係** 第86号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行3間，梁行3間の総柱建物跡で，桁行方向がN - 5° - Wの南北棟である。規模は桁行6.40 m，梁行4.80 mで，面積は30.72 m<sup>2</sup>である。柱間寸法は，桁行が北妻から2.10 m（7尺），梁行が1.60 m（5尺）で，柱筋は揃っている。全てのピットの底面で，柱のあたりを確認した。

**柱穴** 16か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で，長軸90～115 cm，短軸85～105 cmである。深さは60～97 cmで，掘方の断面は直立している。第1～4層は柱抜き取り後の覆土，第5層は柱痕跡，第6～20層は掘方への埋土で，版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片108点（坏22，高坏3，甕83），須恵器片4点（坏3，蓋1），土製品1点（羽口），石器2点（磨製石斧，砥石），鉄滓1点（14.78 g）が出土している。1はP16の掘方埋土中，2はP11の掘方埋土中から出土している。

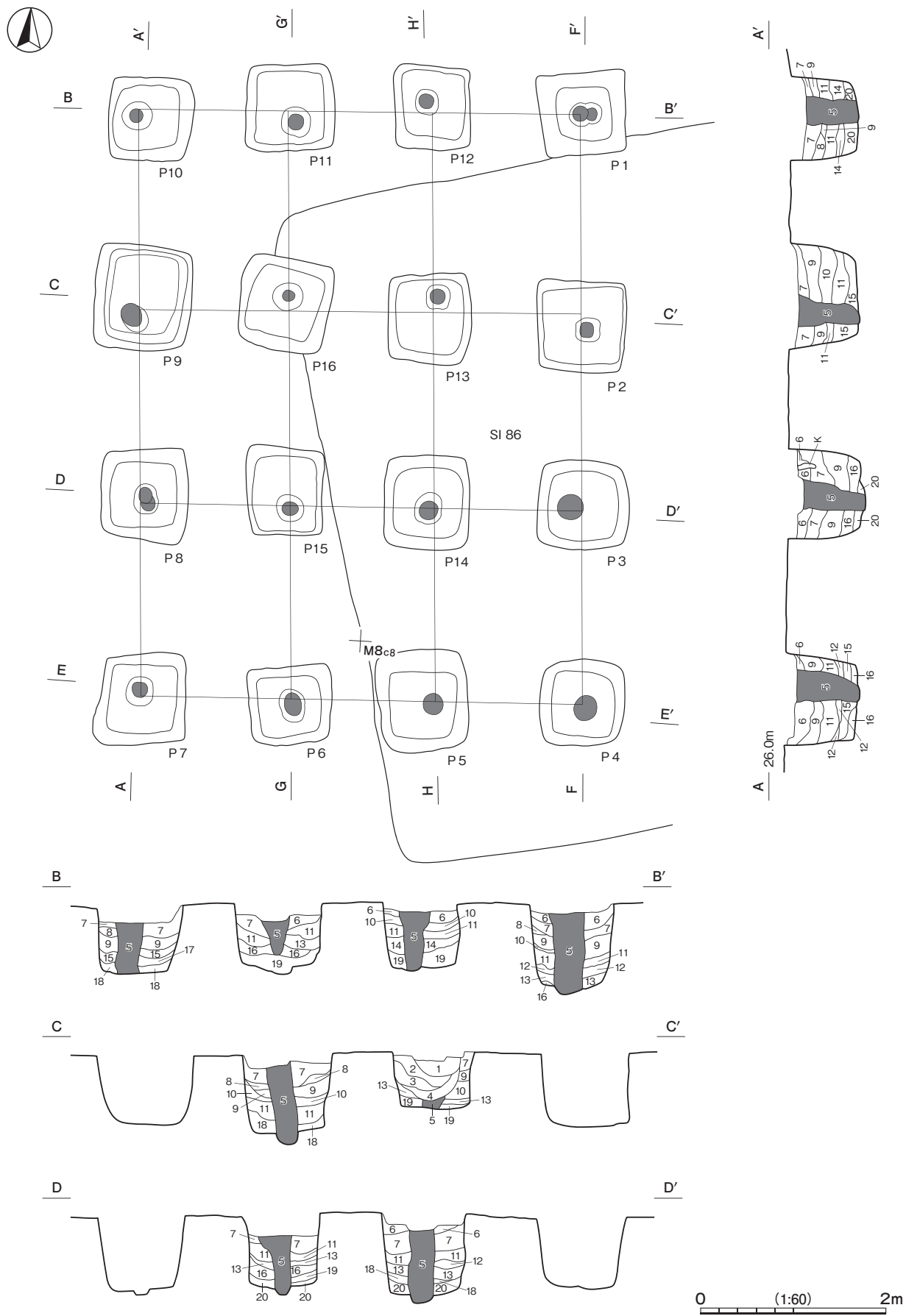
**所見** 時期は，重複関係や主軸方向及び出土土器から，8世紀前葉と考えられる。



第128図 第18号掘立柱建物跡出土遺物実測図

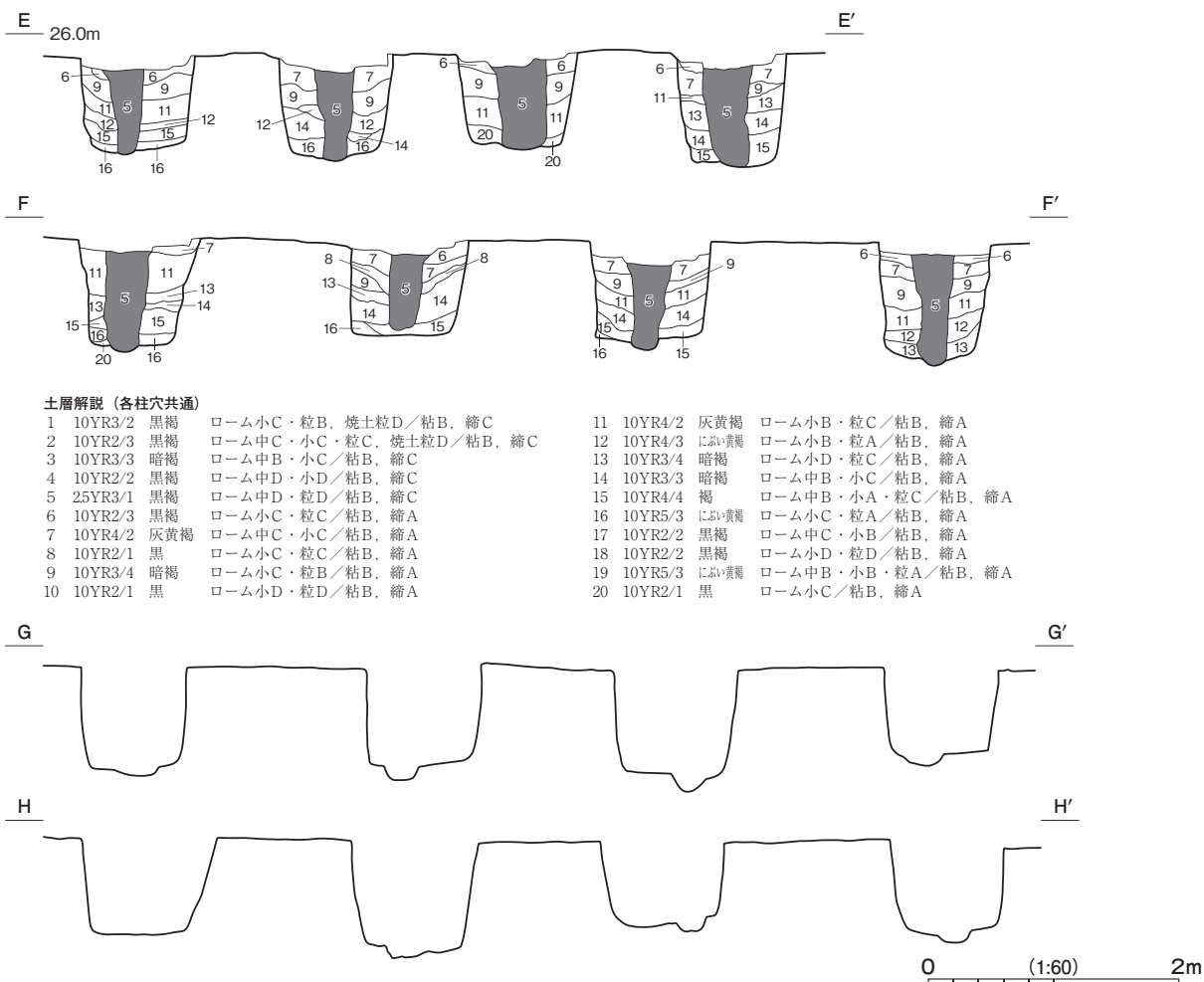
第66表 第18号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(1.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のナデ	P16埋土中	10% 新治窯
2	土師器	甕	[22.0]	(7.1)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ナデ	P11埋土中	5%



第 129 图 第 18 号掘立柱建物跡実测图 (1)





第130図 第18号掘立柱建物跡実測図(2)

### 第19号掘立柱建物跡 (第131・132図 PL20)

**位置** 調査区南部のM8d8区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

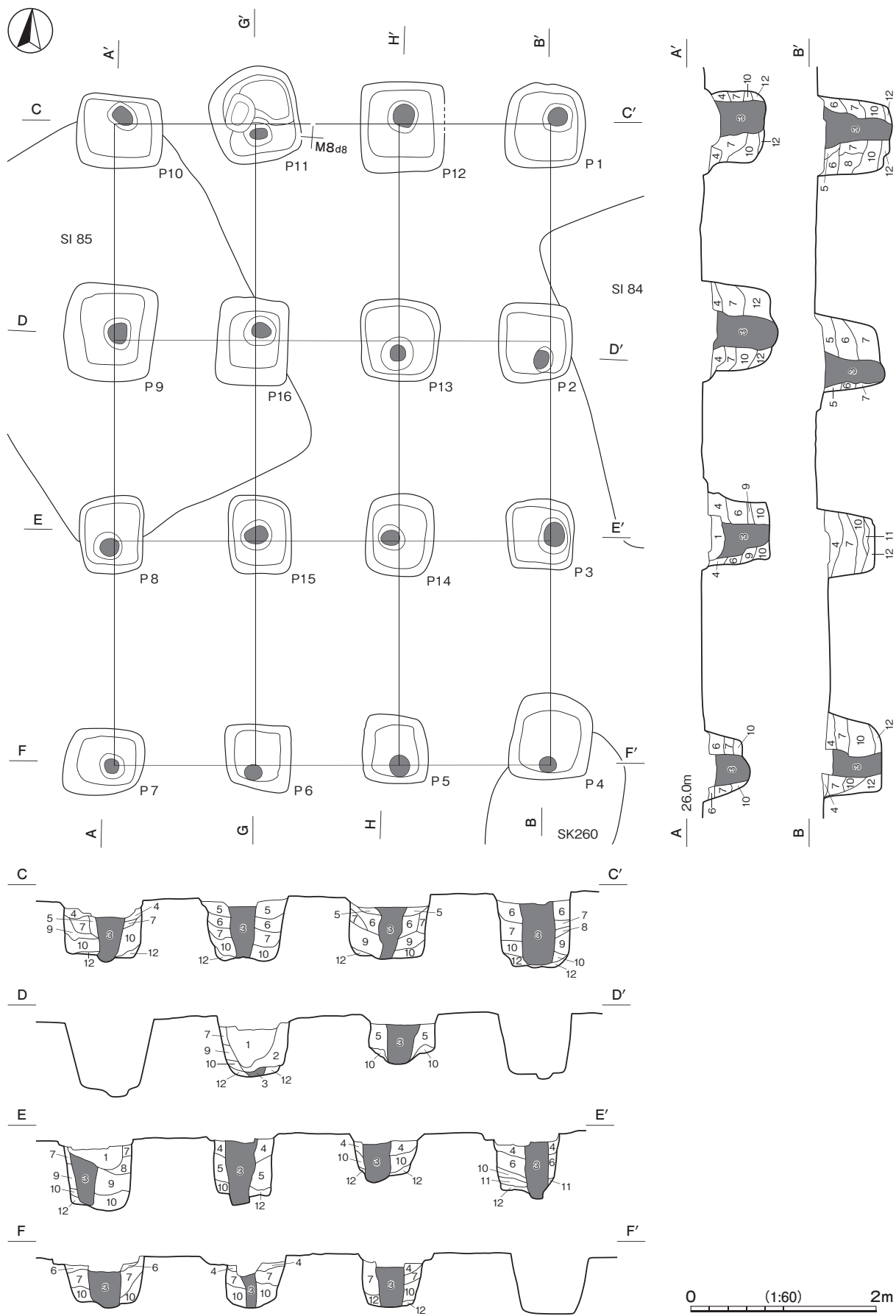
**重複関係** 第84・85号竪穴建物跡, 第260号土坑を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行3間, 梁行3間の総柱建物跡で, 桁行方向がN-3°-Wの南北棟である。規模は桁行7.00m, 梁行4.68mで, 面積は32.76㎡である。柱間寸法は, 桁行が北妻から2.40m(8尺)を基本とし, 揃っている。梁行は1.60m(5尺)を基本とし, 柱筋は揃っている。全てのピットの底面で, 柱のあたりを確認した。

**柱穴** 16か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で, 長軸75~105cm, 短軸65~100cmである。深さは52~72cmで, 掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土, 第3層は柱痕跡, 第4~12層は掘方への埋土で, 版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片67点(坏18, 高坏1, 甕48), 須恵器片5点(坏1, 蓋2, 甕2), 金属製品1点(不明), 鉄滓1点(34.96g)が出土している。1・2はそれぞれP7・P4の掘方埋土中から出土している。3はP8の覆土中から出土している。

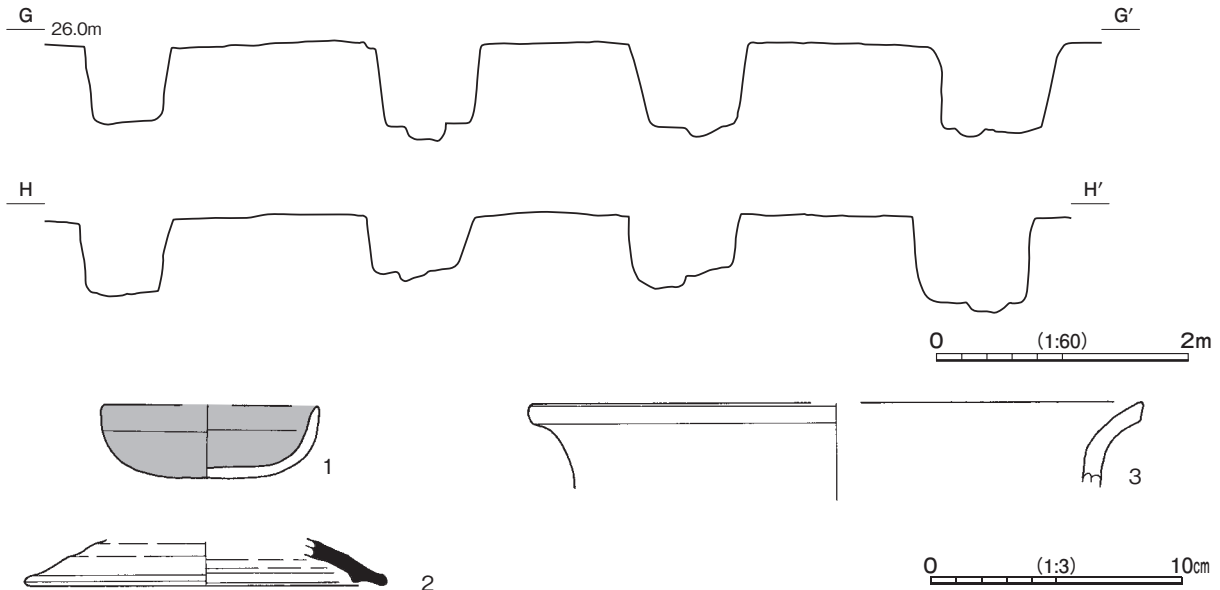
**所見** 時期は, 重複関係や主軸方向及び出土土器から, 8世紀前葉と考えられる。



第 131 图 第 19 号掘立柱建物跡实测图

土層解説 (各柱穴共通)

1	25 Y 3/2	黒褐	ローム小D・焼土粒D/粘B, 締C	7	75YR4/2	灰褐	ローム中C・小B・粒B/粘B, 締A
2	25 Y 3/3	暗褐	ローム中B・小B/粘B, 締C	8	10YR2/2	黒褐	ローム小C・粒C, 焼土粒D/粘B, 締A
3	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒C/粘B, 締C	9	10YR2/1	黒	ローム中D・小D/粘B, 締A
4	10YR3/2	黒褐	ローム中C・小C/粘B, 締A	10	10YR4/4	褐	ローム中B・小B・粒C/粘B, 締A
5	10YR3/3	暗褐	ローム中C・小C/粘B, 締A	11	10YR3/2	黒褐	ローム小C・粒D/粘B, 締C
6	10YR4/4	褐	ローム中B・小A・粒B/粘B, 締A	12	10YR5/3	にじみ黄	ローム小A・粒A/粘B, 締A



第 132 図 第 19 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 67 表 第 19 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[8.5]	2.9	3.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 全面黒色処理	P 9埋土中	40% PL42
2	須恵器	蓋	[14.1]	(1.8)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P 4埋土中	5%
3	土師器	甕	[24.4]	(3.4)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナデ	P 8覆土中	5%

第 20 号掘立柱建物跡 (第 133・134 図 PL20)

**位置** 調査区南部の M 8 g 8 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

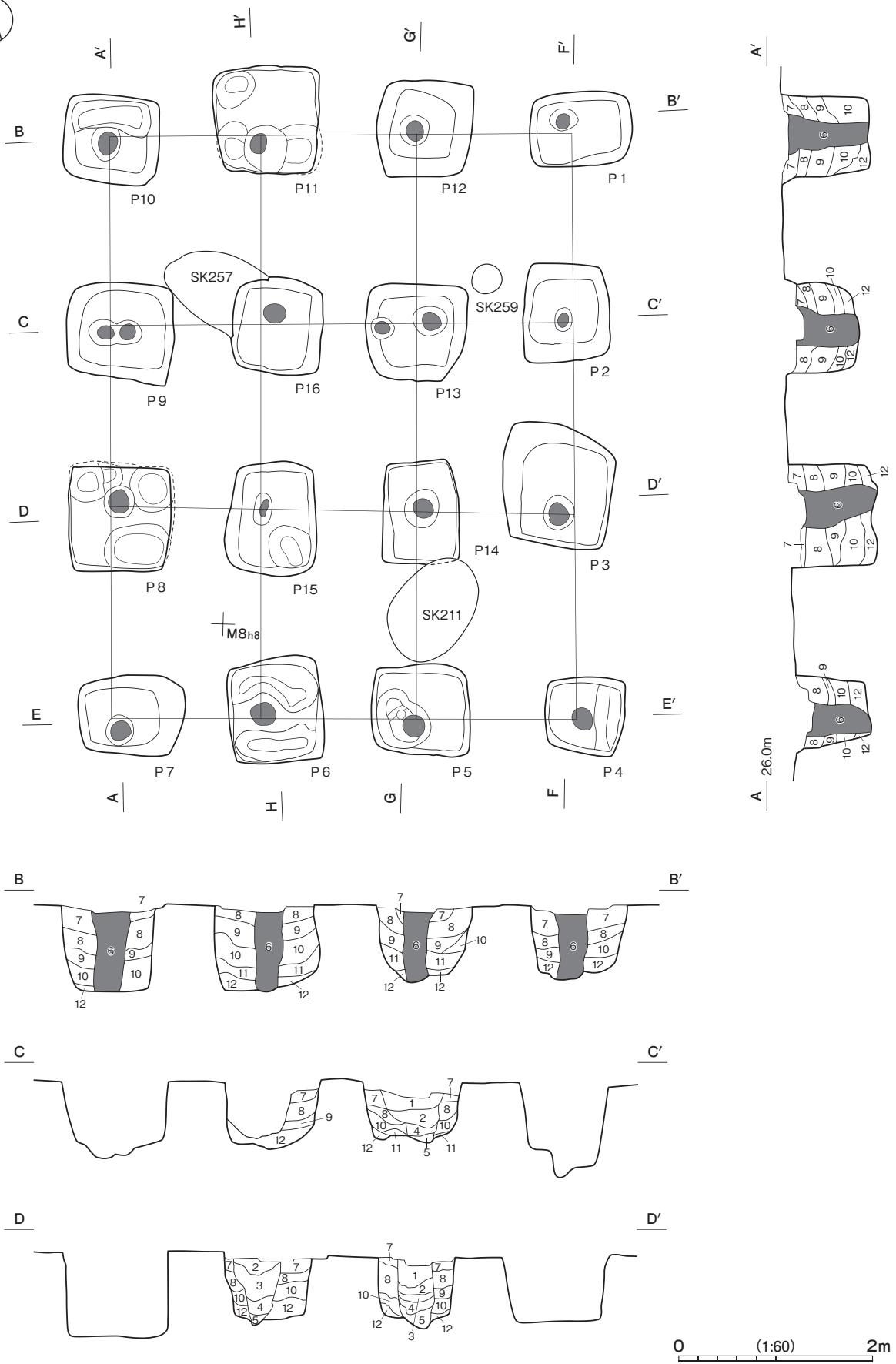
**重複関係** 第 211・257 号土坑に掘り込まれている。また, 本跡の範囲内に第 259 号土坑が位置しているが, 新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行 3 間, 梁行 3 間の総柱建物跡で, 桁行方向が N - 2° - W の南北棟である。規模は桁行 6.16 m, 梁行 4.76 m で, 面積は 29.32 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行が北妻から 2.00 m (7 尺), 2.00 m (7 尺), 2.20 m (7 尺) とほぼ揃っている。梁行は 1.80 m (6 尺) を基本とし, 柱筋は揃っている。全てのピットの底面で, 柱のあたりを確認した。

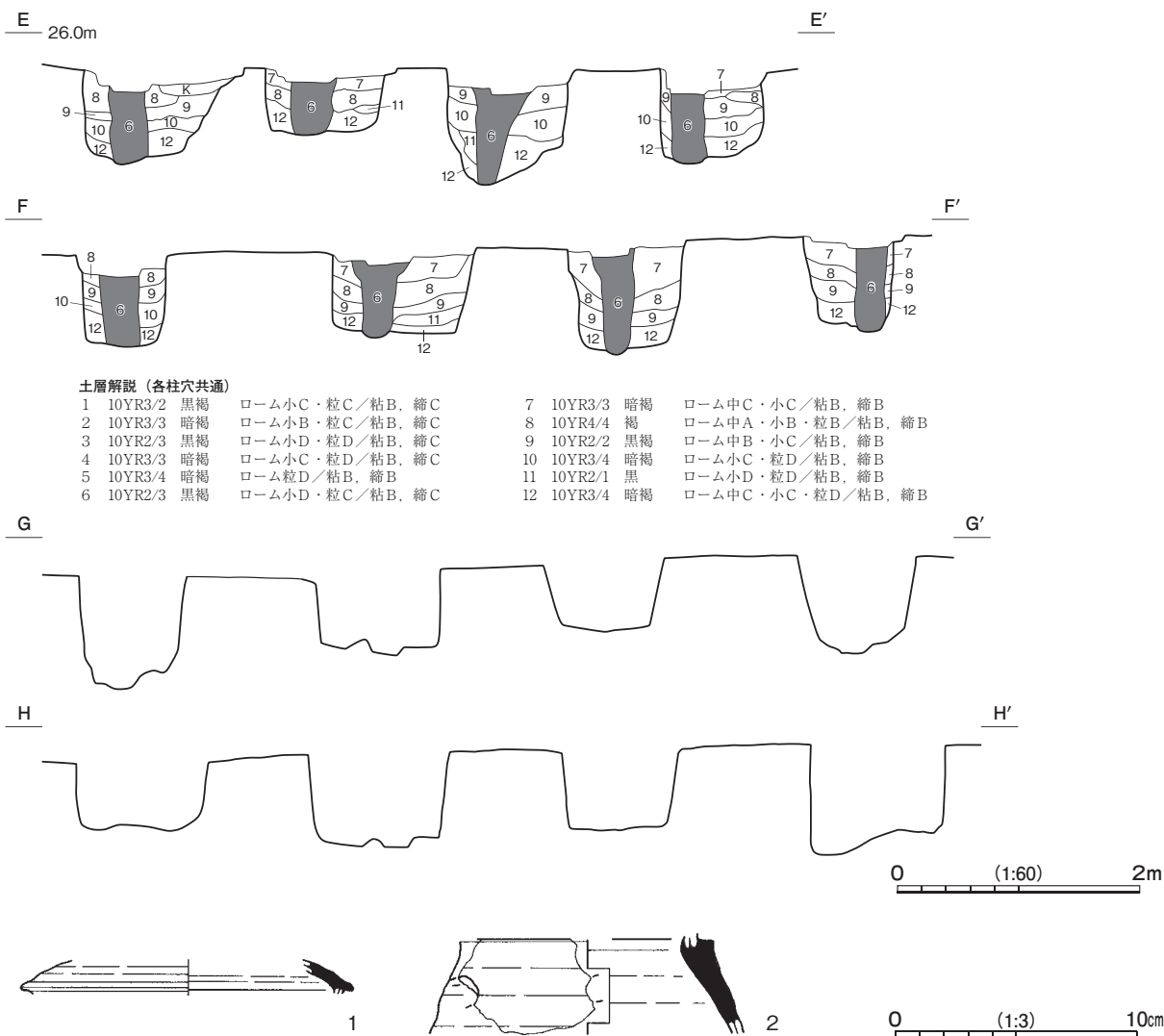
**柱穴** 16 か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で, 長軸 75 ~ 105 cm, 短軸 65 ~ 100 cm である。深さは 52 ~ 92 cm で, 掘方の断面は直立している。第 1 ~ 5 層は柱抜き取り後の覆土, 第 6 層は柱痕跡, 第 7 ~ 12 層は掘方への埋土で, 版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片 70 点 (坏 13, 椀 1, 埴 1, 高坏 1, 甕 54), 須恵器片 2 点 (蓋, 円面硯) が出土している。1・2 とともにそれぞれ P 10・P 7 の掘方埋土中から出土している。

**所見** 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8 世紀前葉と考えられる。



第133图 第20号掘立柱建物跡実測图



第 134 図 第 20 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 68 表 第 20 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	-	(1.4)	-	長石・赤色粒子	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P10埋土中	5%
2	須恵器	円面硯	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	脚部 円形の透かし孔	P7埋土中	5%

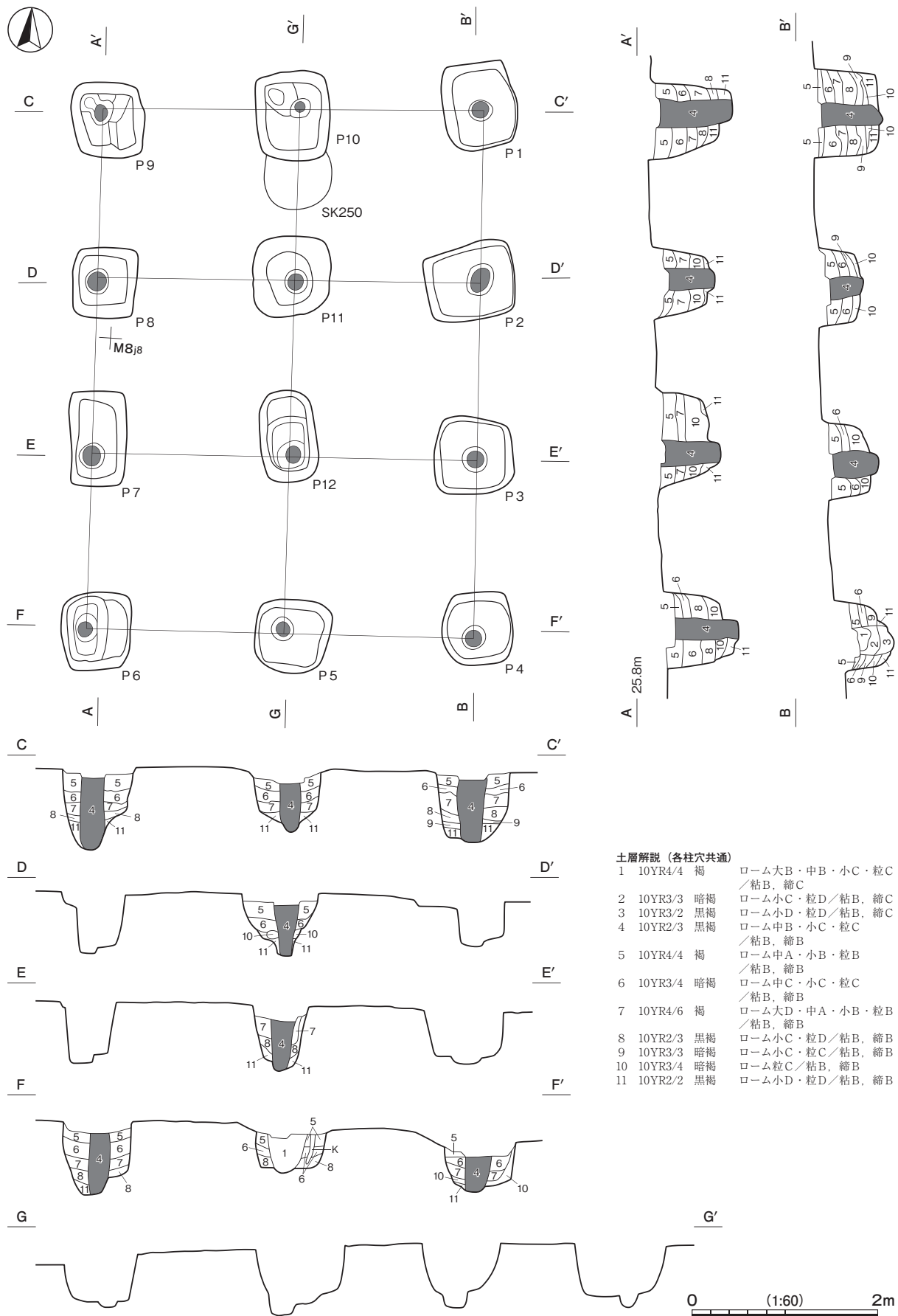
### 第 21 号掘立柱建物跡 (第 135・136 図 PL20)

**位置** 調査区南部のM8i8区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第250号土坑を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wの南北棟である。規模は桁行5.64m、梁行4.12mで、面積は23.24㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から1.90m(6尺)、梁行が2.00m(7尺)で、柱筋は揃っている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

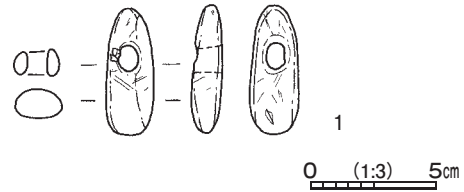
**柱穴** 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸40~52cm、短軸30~43cmである。深さは52~91cmで、堀方の断面は直立している。第1~3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5~11層は掘方への埋土で、版築状を呈している。



第 135 図 第 21 号掘立柱建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 14 点 (坏 11, 甕 3), 石製品 1 点 (垂飾り) が出土している。1 は P 10 の掘方埋土中より出土している。縄文時代の遺物が混入したものと考えられる。

**所見** 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8 世紀前葉と考えられる。



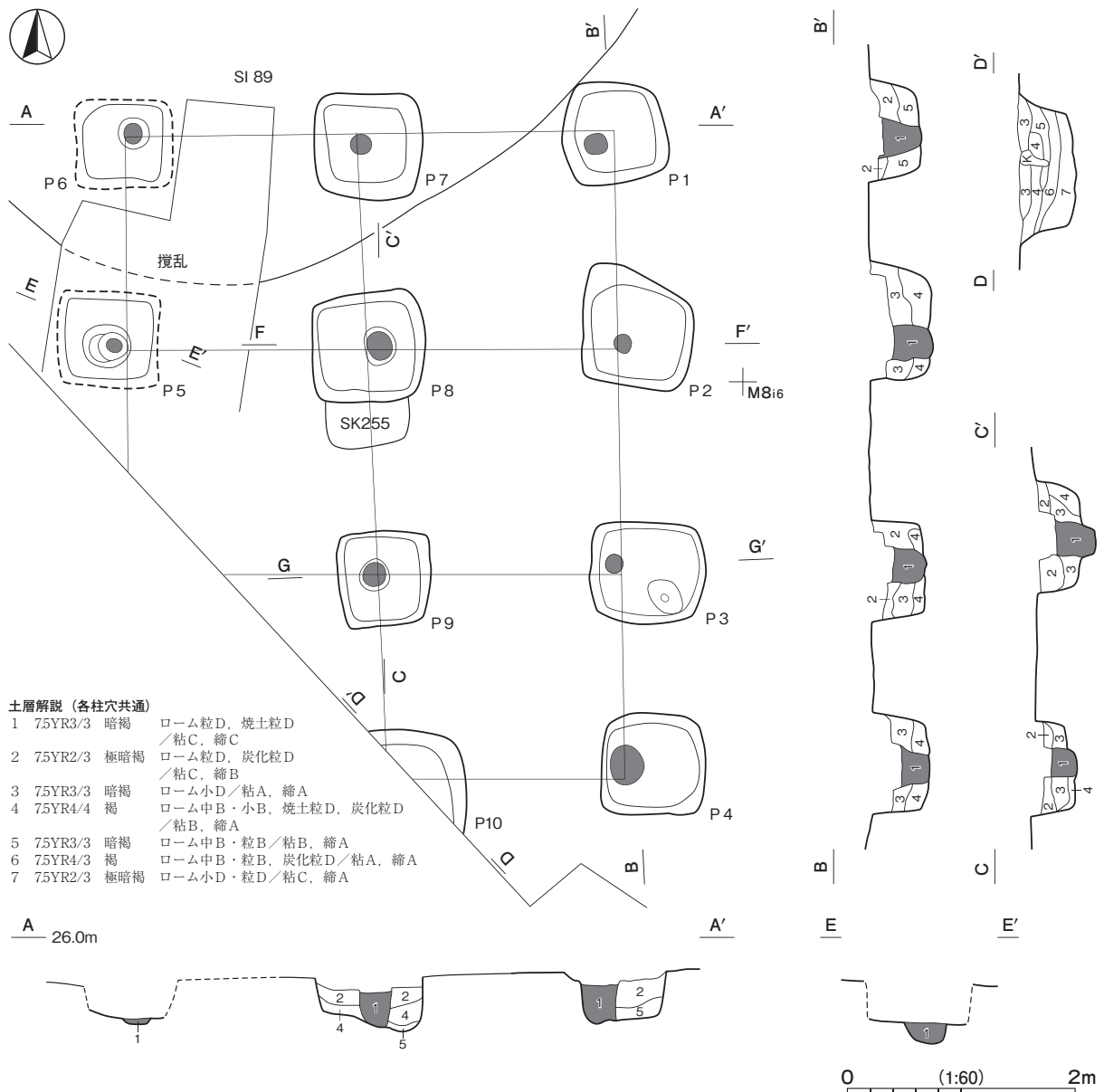
第 136 図 第 21 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 69 表 第 21 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

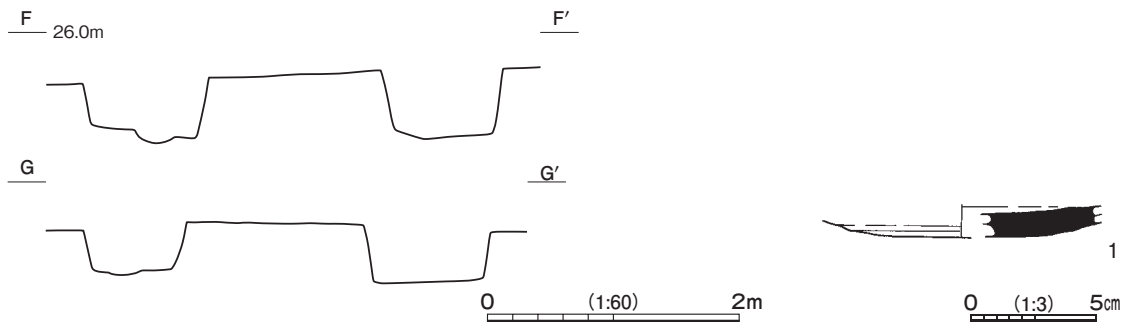
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	垂飾り	5.1	1.9	1.2	16.18	滑石	表面研磨精緻 孔径 0.8 ~ 1.1 cm	P10 埋土中	

第 22 号掘立柱建物跡 (第 137・138 図 PL21)

**位置** 調査区南部の M 8 i 5 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 137 図 第 22 号掘立柱建物跡実測図



第138図 第22号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

**重複関係** 第89号竪穴建物跡，第255号土坑を掘り込んでいる。

**規模と構造** 南西部が調査区域外に延びているため，すべての柱穴を確認することができなかった。桁行3間，梁行2間の総柱建物跡で，桁行方向がN - 3° - Wの南北棟と推定できる。規模は桁行5.45m，梁行4.43mで，面積は24.14㎡と推定できる。柱間寸法は，桁行が北妻から1.80m（6尺），梁行が2.20m（7尺）で，柱筋は揃っている。P10以外のピットの底面で，柱のあたりを確認した。

**柱穴** 10か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で，長軸85～105cm，短軸80～95cmである。深さは45～55cmで，掘方の断面は直立している。第1層は柱痕跡，第2～7層は掘方への埋土で，版築状を呈している。P5・P6の上層は攪乱により，柱痕跡の最下層のみが確認できた。

**遺物出土状況** 土師器片16点（坏8，甕8），須恵器片1点（坏）が出土している。1はP1の掘方埋土中から出土している。

**所見** 時期は，重複関係や主軸方向及び出土土器から，8世紀前葉と考えられる。

第70表 第22号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(0.9)	[9.0]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のナデ	P1埋土中	10% 新治窯

### 第23号掘立柱建物跡（第139・140図）

**位置** 調査区南部のN9f8区，標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第69・75号竪穴建物跡，第24号掘立柱建物跡，第222号土坑を掘り込み，第8号溝に掘り込まれている。

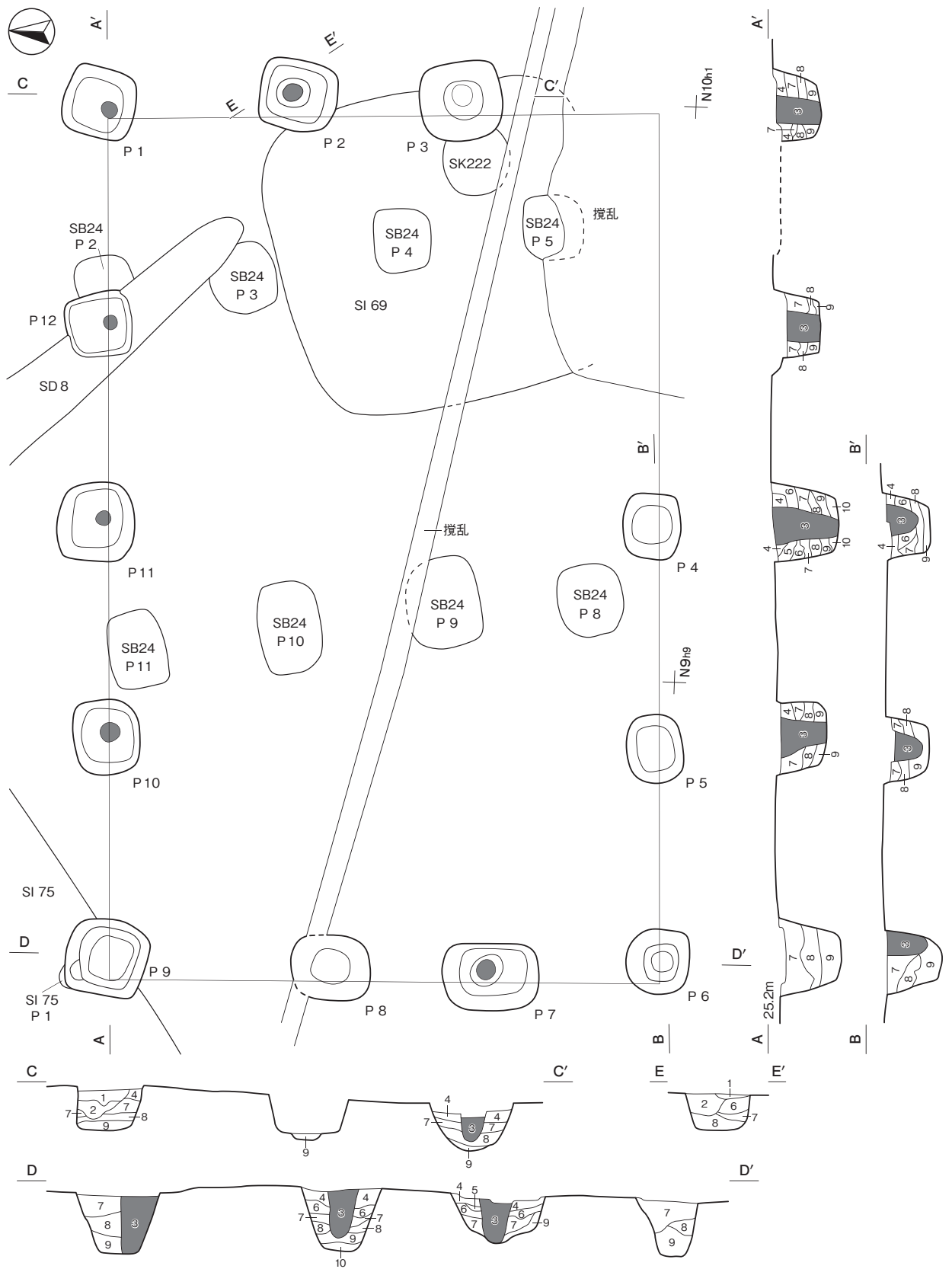
**規模と構造** 桁行4間，梁行3間の側柱建物跡で，桁行方向がN - 88° - Eの東西棟である。南東にある角柱は，後世の攪乱のために失われていた。規模は桁行12.00m，梁行7.80mで，面積は93.60㎡と推定できる。柱間寸法は，桁行が3.00m（10尺），梁行が2.40m（8尺）を基本とし，柱筋は揃っている。P1・P2・P7・P10～P12の底面で，柱のあたりを確認した。

**柱穴** 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で，長軸88～136cm，短軸80～112cmである。深さは48～92cmで，掘方の断面は外傾または直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土，第3層は柱痕跡，第4～10層は掘方への埋土で，版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片42点（坏10，高坏1，壺1，甕30），須恵器片16点（坏9，蓋1，甕6），鉄滓1点（15.71g）が出土している。1はP4の掘方埋土中，2・3はP1の覆土中から出土している。

**所見** 時期は，重複関係や主軸方向及び出土土器から，8世紀前葉と考えられる。





土層解説 (各柱穴共通)

- |               |                             |               |                          |
|---------------|-----------------------------|---------------|--------------------------|
| 1 75YR4/2 灰褐  | ローム粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A    | 6 75YR3/2 黒褐  | ローム大B・中B・小A/粘A, 締A       |
| 2 75YR3/3 暗褐  | ローム小B・粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締A | 7 75YR2/2 黒褐  | ローム中C・小B・粒B, 炭化粒D/粘A, 締A |
| 3 75YR2/2 黒褐  | ローム小B・粒B, 炭化粒C/粘A, 締B       | 8 75YR4/3 褐   | ローム中B・小B/粘A, 締B          |
| 4 75YR2/3 極暗褐 | ローム粒D/粘C, 締C                | 9 75YR2/3 極暗褐 | ローム粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘A, 締B |
| 5 75YR3/2 黒褐  | ローム小C・粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘A, 締A | 10 75YR4/4 褐  | ローム中A・小A/粘A, 締A          |

第 139 図 第 23 号掘立柱建物跡実測図



第140図 第23号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第71表 第23号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(2.0)	[7.6]	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P 4埋土中	5%
2	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P 1覆土中	5%
3	須恵器	甕	[16.0]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面ロクロナデ	P 1覆土中	5%

第24号掘立柱建物跡 (第141・142図 PL21)

**位置** 調査区南部のN 9 f9区、標高25 mほどの平坦な台地上に位置している。

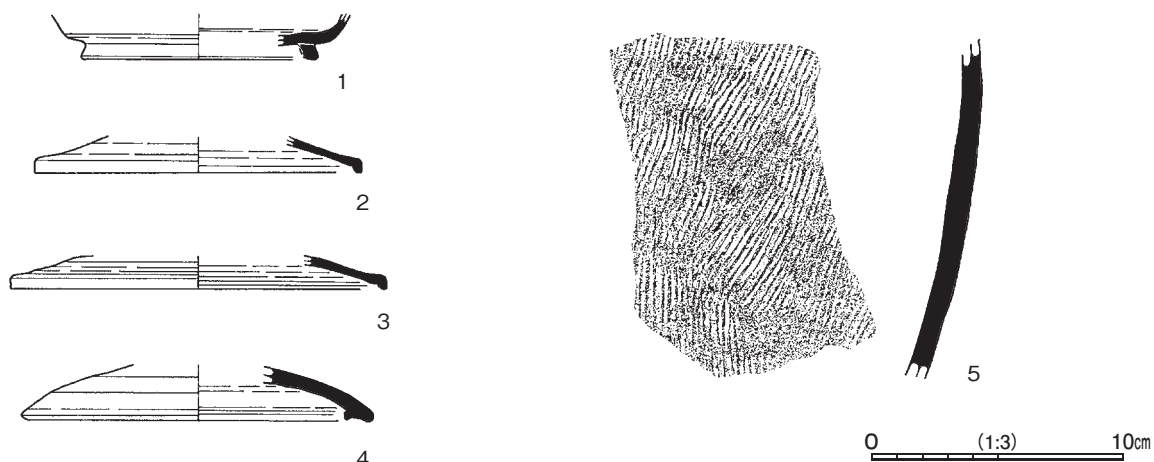
**重複関係** 第69号竪穴建物跡を掘り込み、第23号掘立柱建物、第8号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行5間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN - 8° - Wの南北棟である。南東部が攪乱を受けており、南東の角柱とP 5・P 6の一部を確認することができなかった。規模は桁行11.04 m、梁行4.92 mで、面積は54.32 m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.20 m (7尺)、梁行は2.60 m (9尺)を基本とし、柱筋は揃っている。P 1・P 2・P 4・P 5・P 7・P 9～P 11の底面で、柱のあたりを確認した。

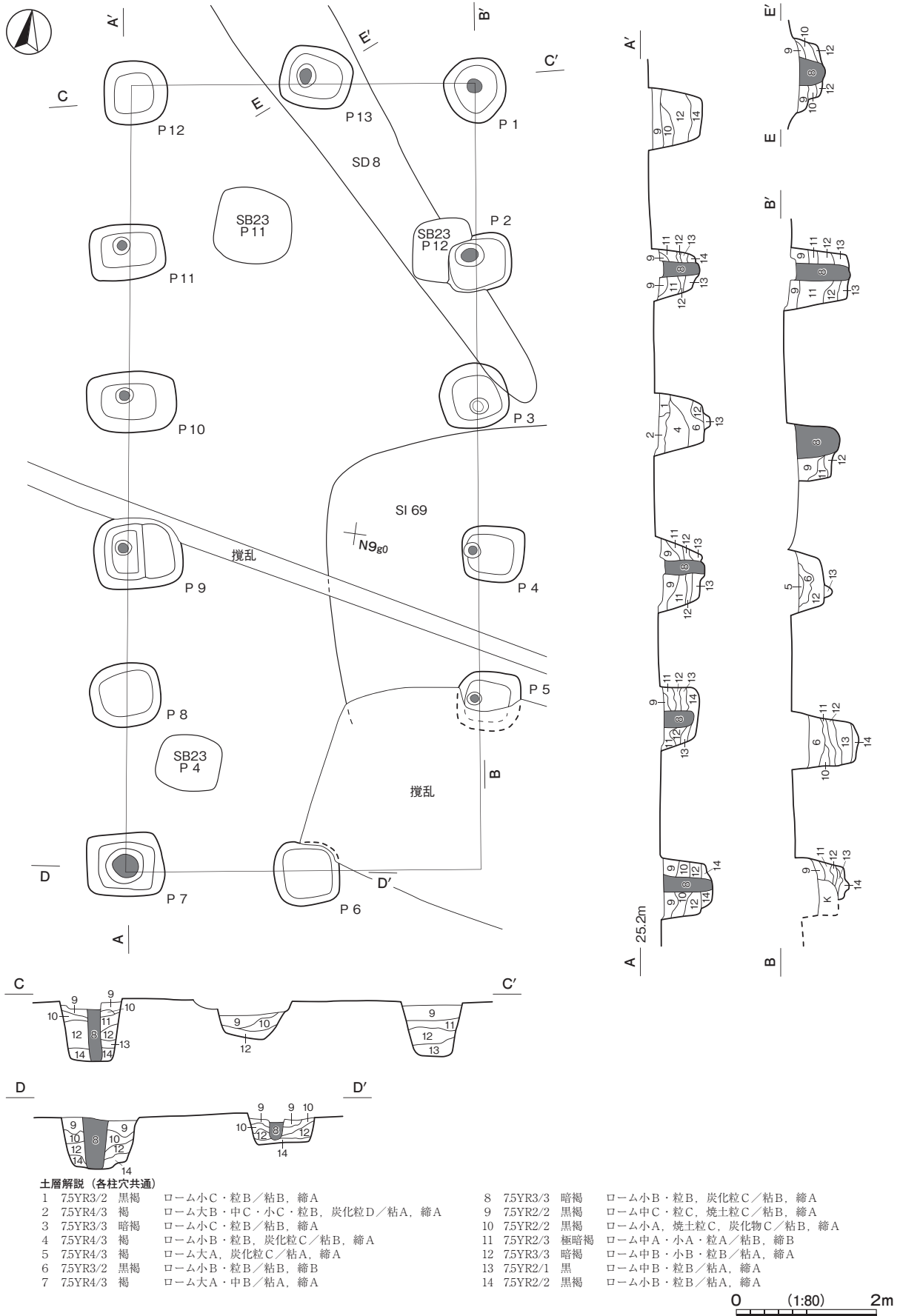
**柱穴** 13か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸88～128 cm、短軸80～104 cmである。深さは36～84 cmで、掘方の断面は直立している。第1～7層は柱抜き取り後の覆土、第8層は柱痕跡、第9～14層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片54点 (坏21, 鉢1, 甕32), 須恵器片14点 (坏4, 高台付坏1, 蓋6, 甕3), 鉄滓3点 (328.60 g) が出土している。1・3はP 12, 2・4・5はそれぞれP 2・P 11・P 13の掘方埋土中から出土している。

**所見** 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀初頭と考えられる。



第141図 第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図



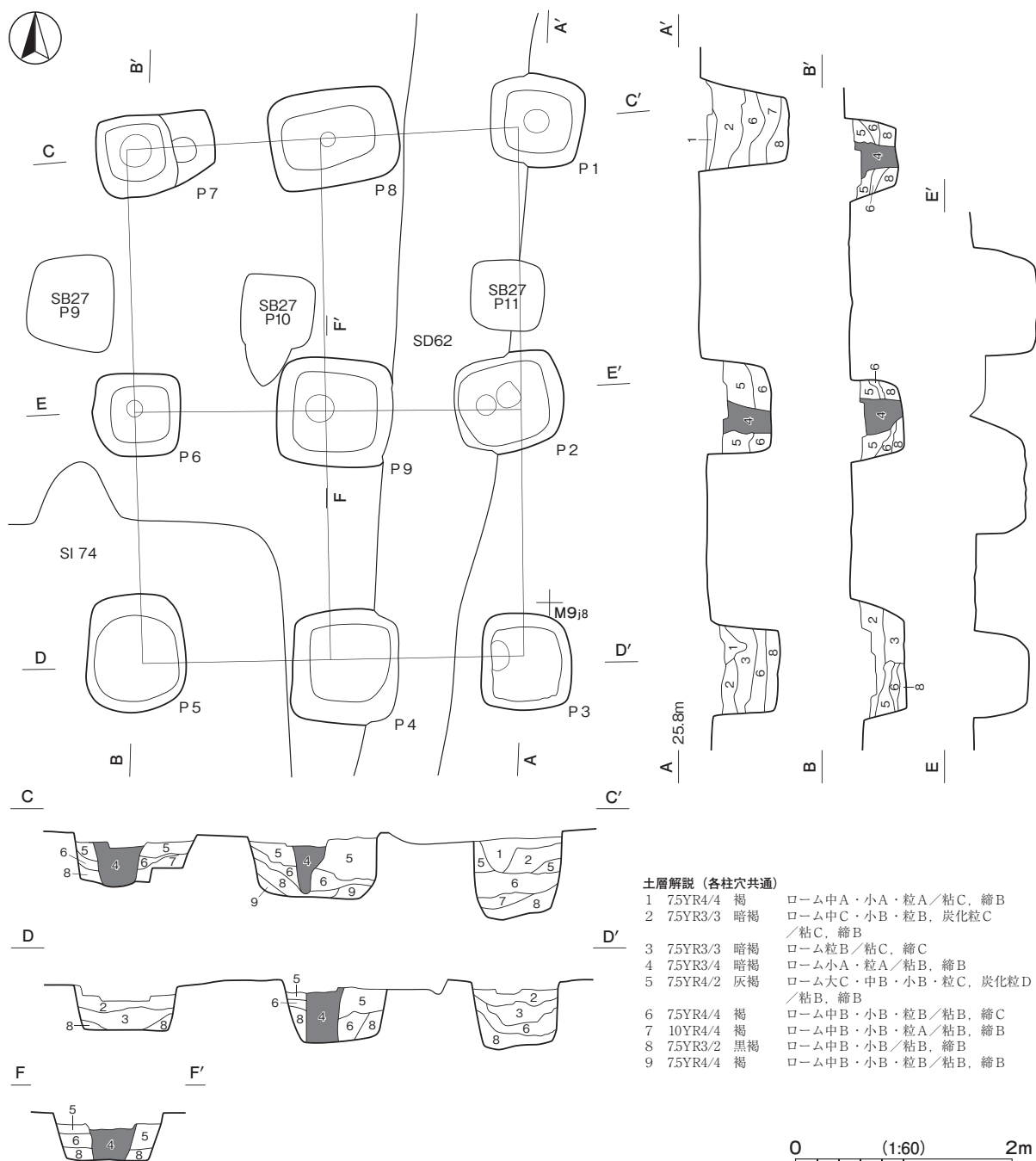
第 142 図 第 24 号掘立柱建物跡実測図

第 72 表 第 24 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	高台付坏	-	(18)	[9.2]	長石	褐灰	普通	体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り 後高台貼付	P12埋土中	5%
2	須恵器	蓋	[12.9]	(14)	-	砂粒	黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	P 2埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[14.8]	(13)	-	砂粒	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P12埋土中	5%
4	須恵器	蓋	[13.6]	(22)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P11埋土中	5%
5	須恵器	甕	-	(13.5)	-	長石	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面ナデ	P13埋土中	5%

第 25 号掘立柱建物跡 (第 143・144 図 PL21)

位置 調査区南部のM9i7区, 標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第 143 図 第 25 号掘立柱建物跡実測図

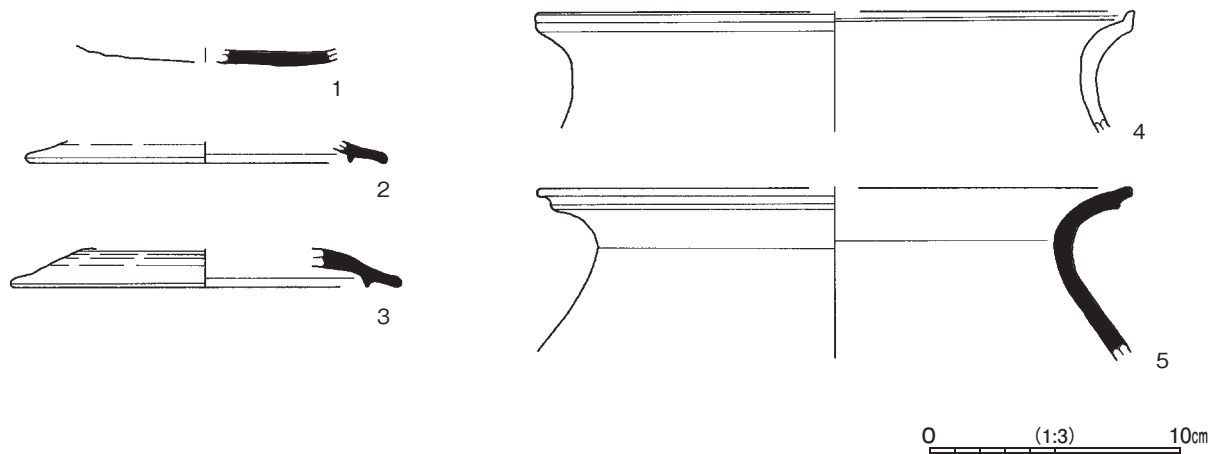
**重複関係** 第74号竪穴建物跡を掘り込み、第27号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。規模は桁行5.00m、梁行3.76mで、面積は18.80㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.60m（9尺）、2.30m（8尺）、梁行が1.80m（6尺）、1.90m（6尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸80～120cm、短軸75～100cmである。深さは45～85cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片76点（坏8、椀1、埴3、高坏9、鉢1、甕54）、須恵器片6点（坏3、蓋2、甕1）、土製品1点（羽口）、金属製品1点（釘）が出土している。また、付近に古墳時代の第1号鍛冶工房跡が存在することから、混入したとみられる椀形鍛冶滓1点（68.58g）と鉄滓11点（512.18g）を確認した。1はP7の覆土中から、2・3はそれぞれP9・P2の掘方埋土中から、4・5はP5の覆土中から出土した。

**所見** 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第144図 第25号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第73表 第25号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(0.8)	[10.3]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ切り	P7覆土中	5%
2	須恵器	蓋	[14.0]	(0.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	天井部回転ヘラ削り	P9埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[15.4]	(1.5)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P2埋土中	5%
4	土師器	甕	[23.8]	(4.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナデ	P5覆土中	5% 外・内面一部煤付着
5	須恵器	甕	[23.6]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ロクロナデ 内面ナデ	P5覆土中	5% 外面一部煤付着

**第26号掘立柱建物跡**（第145図 PL21・22）

**位置** 調査区南部のM9j5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

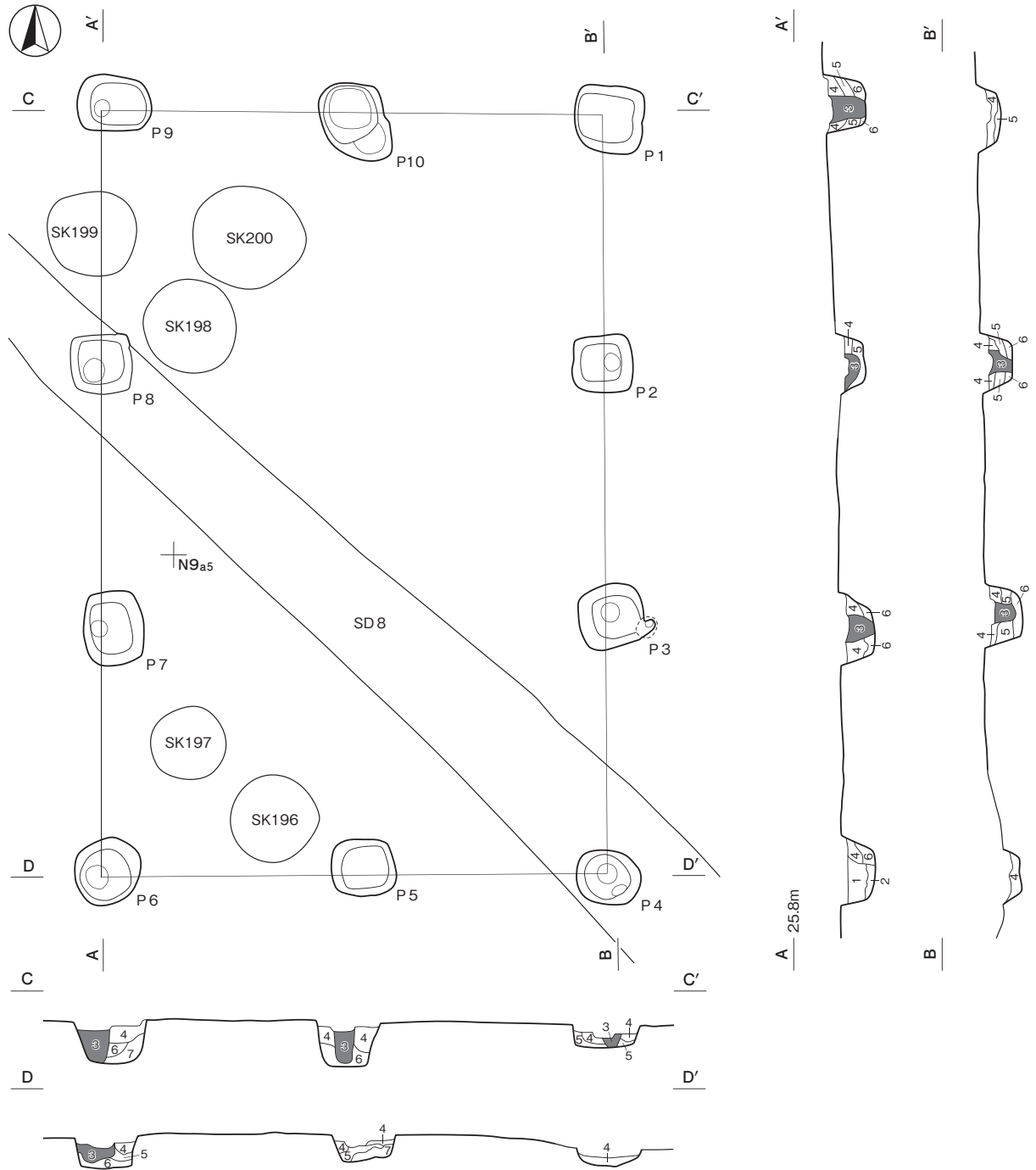
**重複関係** 第8号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第196～200号土坑が位置しているが、堆積状況での新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は桁行7.18m、梁行4.76mで、面積は34.18㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.40m（8尺）で、梁行は2.40m（8尺）と揃っている。

**柱穴** 10か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）55～85 cm、短軸（径）55～66 cmである。深さは20～45 cmで、掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～7層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片 27点（坏4，高坏3，甕20），土製品1点（羽口），鉄滓2点（22.33 g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



**土層解説（各柱穴共通）**

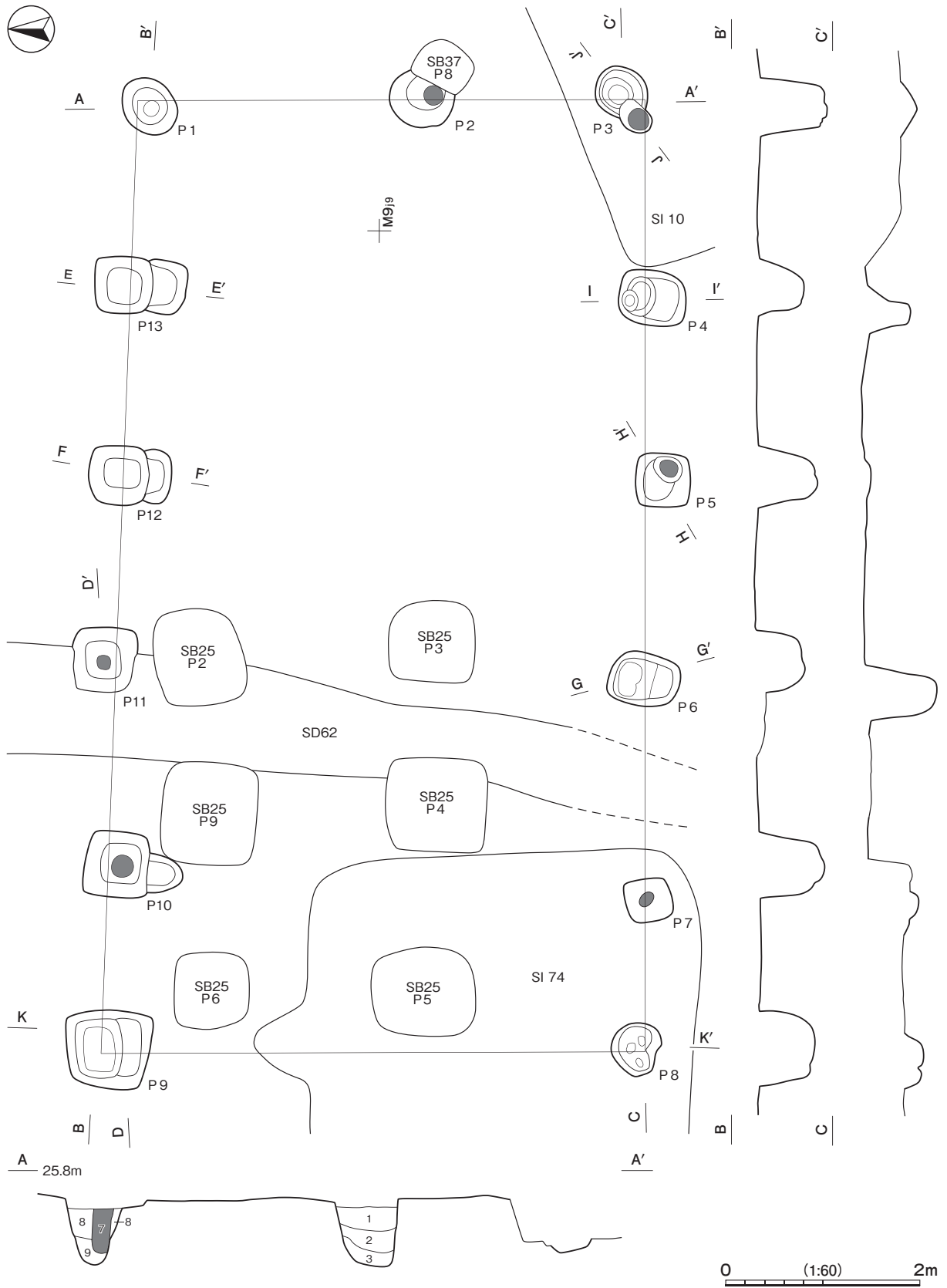
- |              |                             |             |                          |
|--------------|-----------------------------|-------------|--------------------------|
| 1 75YR4/2 灰褐 | ローム粒C/粘C, 締C                | 5 75YR4/6 褐 | ローム中B・小B・粒B, 炭化粒D/粘B, 締B |
| 2 75YR3/3 暗褐 | ローム粒B, 炭化粒D/粘C, 締B          | 6 75YR4/3 褐 | ローム小C・粒B/粘B, 締A          |
| 3 75YR3/4 暗褐 | ローム小B・粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 締B | 7 75YR4/4 褐 | ローム小C・粒A/粘A, 締A          |
| 4 75YR3/2 黒褐 | ローム中C・小B・粒B, 炭化粒D/粘C, 締B    |             |                          |

0 (1:60) 2m

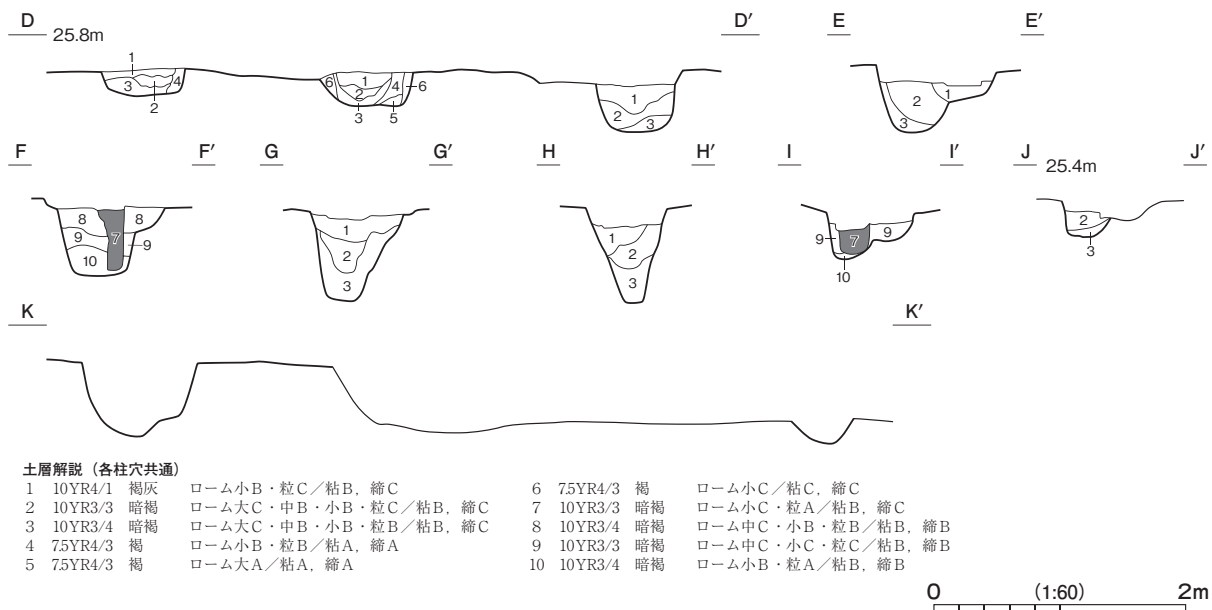
第145図 第26号掘立柱建物跡実測図

第 27 号掘立柱建物跡 (第 146・147 図 PL22)

位置 調査区南部のM9i7区, 標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第 146 図 第 27 号掘立柱建物跡実測図 (1)



第147図 第27号掘立柱建物跡実測図(2)

**重複関係** 第10・74号竪穴建物跡を掘り込み、第25・37号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行5間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-90°の東西棟である。規模は桁行9.82m、梁行5.46mで、面積は53.62㎡である。柱間寸法は、桁行が1.90m(6尺)、1.90m(6尺)、2.00m(7尺)、2.10m(7尺)、2.00m(7尺)で概ね揃っている。梁行は2.80m(9尺)、2.30m(8尺)で、西妻側はP8とP9の間の柱穴が確認できなかったため、P8-P9間が5.60m(19尺)で、概ね揃っている。P2・P3・P5・P7・P10・P11の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 13か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸(径)50~105cm、短軸(径)45~80cmである。深さは20~76cmで、掘方の断面は直立または外傾している。第1~6層は柱抜き取り後の覆土、第7層は柱痕跡、第8~10層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片16点(坏5, 小型甕1, 甕10), 須恵器片1点(坏), 鉄滓3点(107.24g)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

#### 第28号掘立柱建物跡 (第148~150図 PL22)

**位置** 調査区南部のN9c2区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第77・78・93・94号竪穴建物跡、第29号掘立柱建物跡、第213号土坑を掘り込み、第30号掘立柱建物、第215号土坑、第61・66号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第203・376号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行5間、梁行3間の身舎に、四面庇が付く側柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は身舎が桁行14.5m、梁行7.2mで、面積は104.4㎡である。庇の出は東西2.0m(7尺)、南北

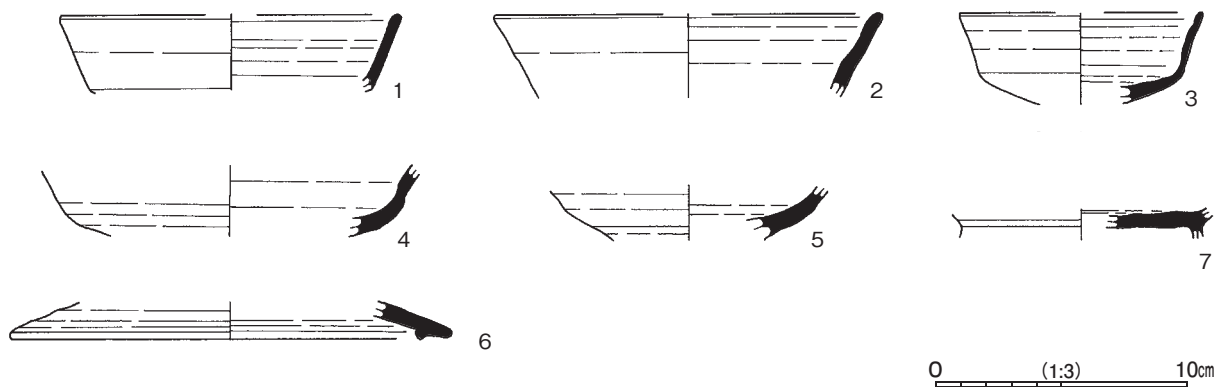


1.6 m (5 尺) で、庇を含めた桁行は 17.80 m、梁行は 10.50 m で、面積は 186.90 m<sup>2</sup> である。身舎の柱間寸法は、桁行が北妻から 3.00 m (10 尺)、梁行が 2.50 m (8 尺) を基本とし、揃っている。庇の柱間寸法は、桁行が北妻より 2.00 m (7 尺)、2.50 m (8 尺)、3.00 m (10 尺)、3.00 m (10 尺)、2.60 m (9 尺)、2.60 m (9 尺)、2.40 m (8 尺) と概ね揃っている。梁行は 2.70 m (9 尺)、2.20 m (7 尺)、2.40 m (8 尺)、1.70 m (6 尺)、2.00 m (7 尺) と概ね揃っている。P 1・P 11・P 14・P 16～P 20・P 22～P 24・P 27・P 30～P 33・P 36 の底面で、柱のあたりを確認した。なお、第 66 号溝によって P 36 の上層は削平を受けているが、形状や配列から、P 28 と同一の柱穴であったものと考えられる。

**柱穴** 36 か所。P 1～P16 は身舎の柱穴である。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸 (径) 100～180 cm、短軸 (径) 100～130 cm、深さは 70～100 cm で、掘方の断面は直立している。P 17～P36 は庇の柱穴である。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸 (径) 75～155 cm、短軸 (径) 80～120 cm である。深さは 30～90 cm で、掘方の断面は直立している。第 1～3 層は柱の抜き取り痕、第 4 層は柱痕跡、第 5～14 層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片 173 点 (坏 34, 高台付坏 1, 高坏 2, 鉢 1, 壺 1, 甕 133, 甑 1), 須恵器片 37 点 (坏 16, 高台付坏 1, 蓋 8, 盤 1, 甕 11), 鉄滓 5 点 (478.27 g) が出土している。1～7 はそれぞれ P 9・P 13・P 14・P 16・P 19・P 25・P 30 の掘方埋土中から出土している。

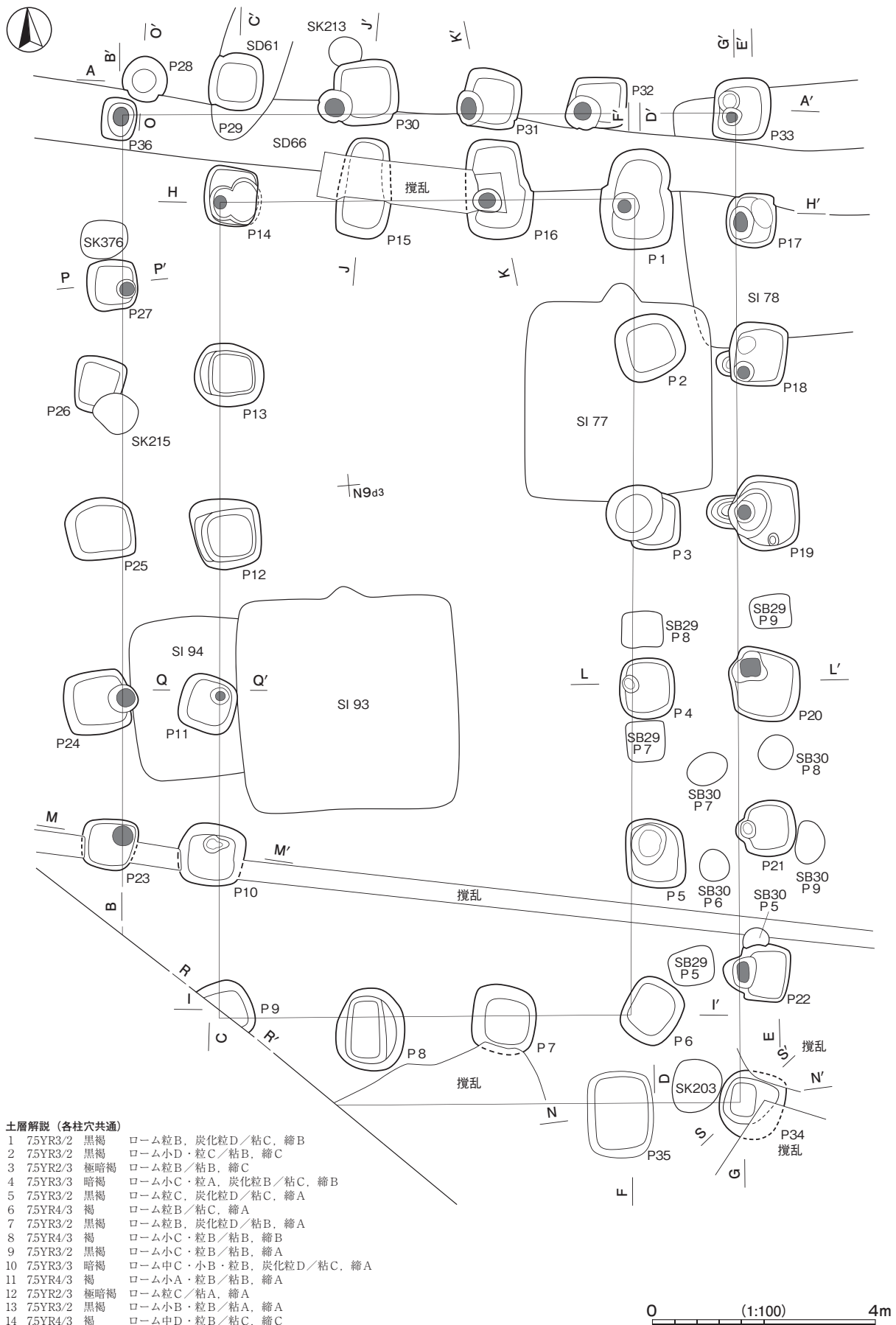
**所見** 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8 世紀中葉と考えられる。



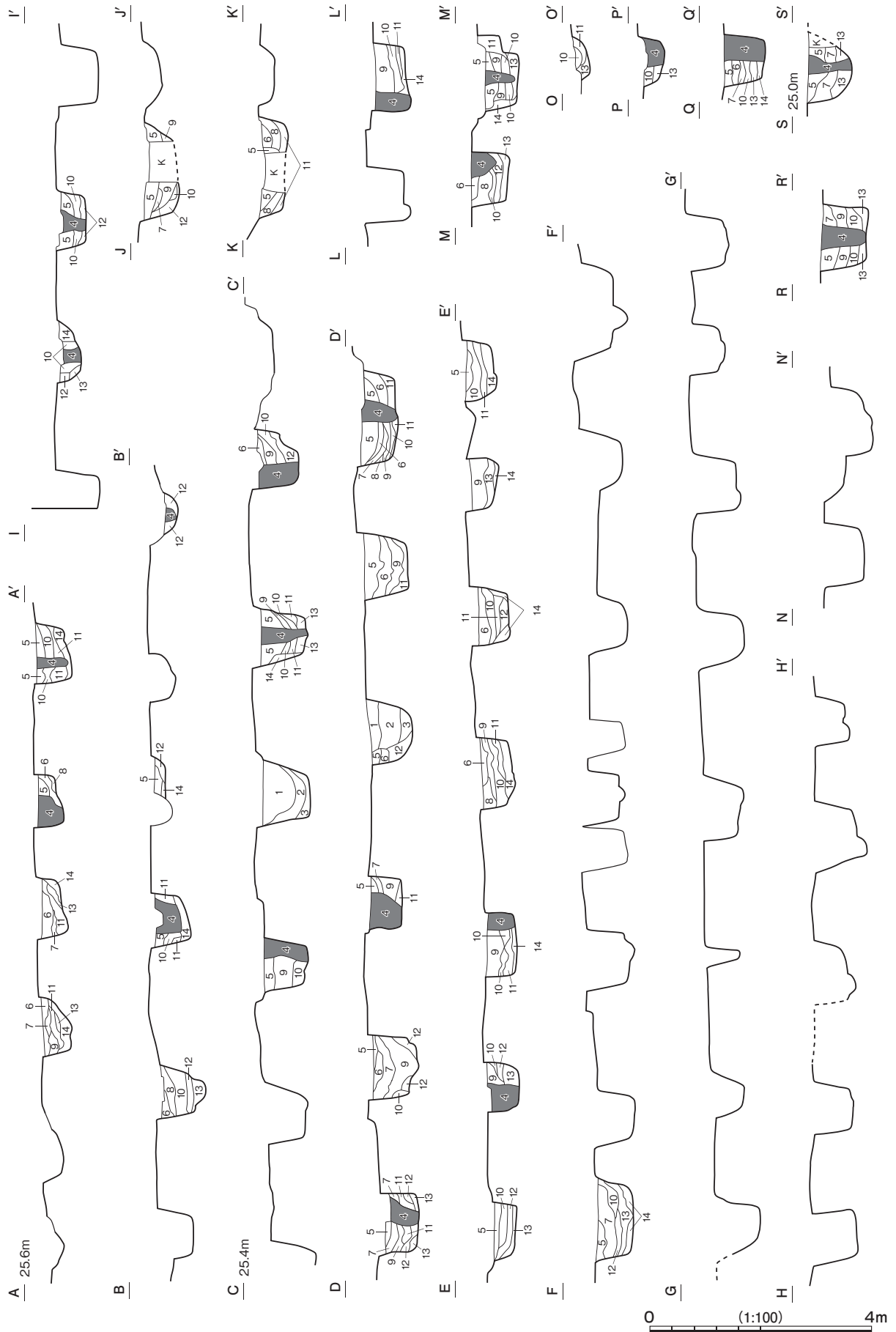
第 148 図 第 28 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 74 表 第 28 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.4]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部ロクロナデ	P 9埋土中	5%
2	須恵器	坏	[15.3]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ	P13埋土中	5%
3	須恵器	坏	[9.6]	3.6	[7.8]	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後多方向のナデ	P14埋土中	20%
4	須恵器	坏	-	(2.7)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り	P16埋土中	5%
5	須恵器	坏	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	体部ロクロナデ	P19埋土中	5%
6	須恵器	蓋	[17.4]	(1.5)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	P25埋土中	5%
7	須恵器	盤	-	(1.2)	-	長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼付け	P30埋土中	5%



第149図 第28号掘立柱建物跡実測図(1)



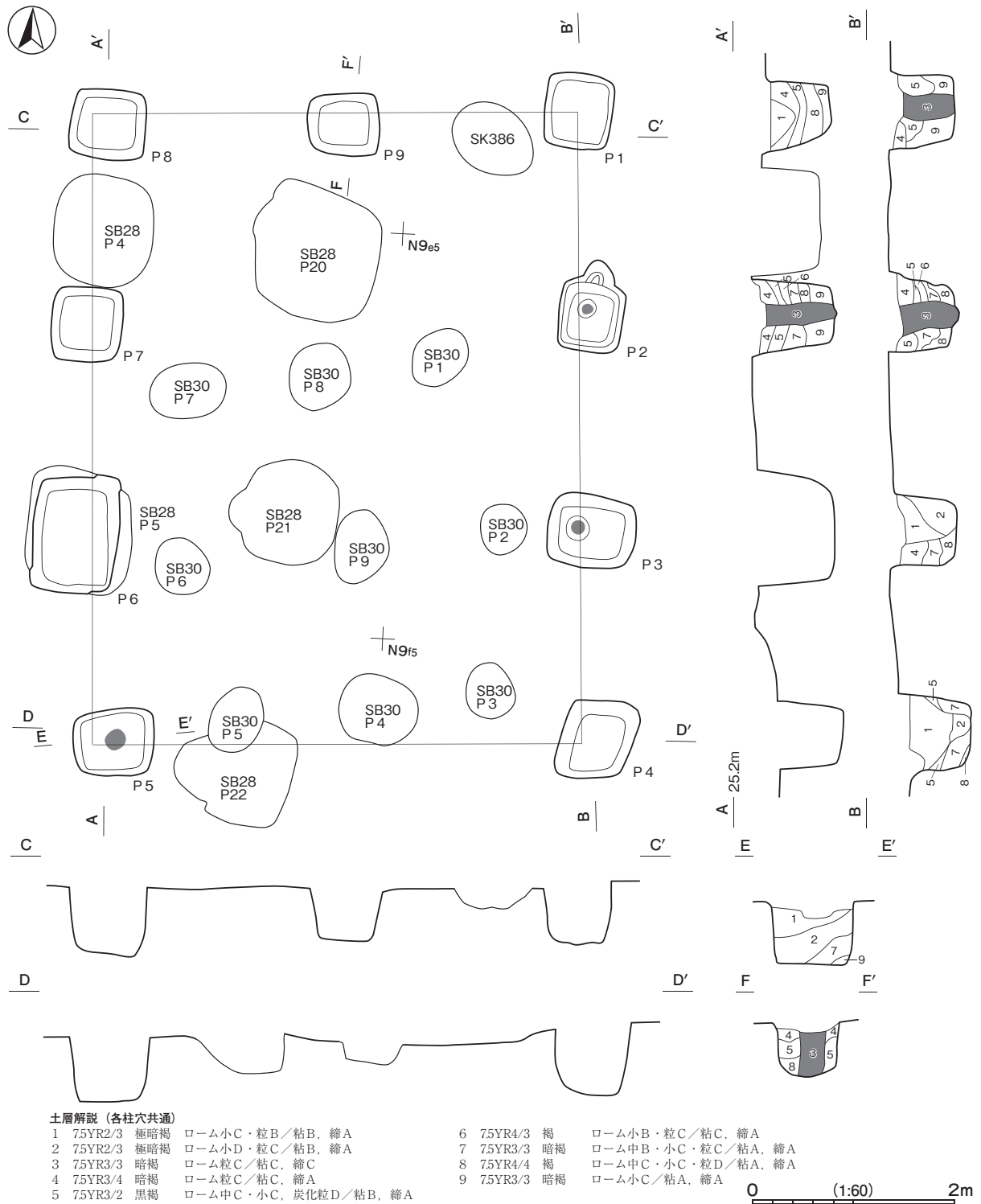
第 150 图 第 28 号掘立柱建物跡実測图 (2)

第 29 号掘立柱建物跡 (第 151・152 図 PL22)

位置 調査区南部の N9e4 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 28・30 号掘立柱建物に掘り込まれている。また, 本跡の範囲内に第 386 号土坑が位置しているが, 新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡で, 桁行方向が N - 4° - W の南北棟である。規模は桁行 6.20 m, 梁行 4.80 m で, 面積は 29.76 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行が北妻から 2.10 m (7 尺), 梁行は 2.40 m



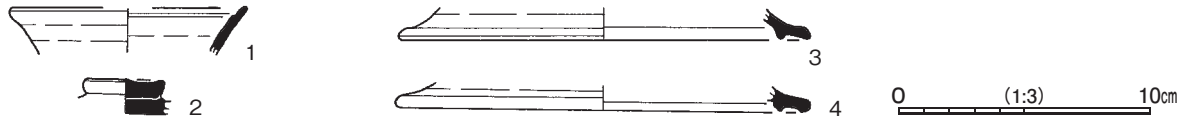
第 151 図 第 29 号掘立柱建物跡実測図

(8尺)と揃っている。P2・P3・P5の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸72～115cm、短軸63～90cmである。深さは48～80cmで、掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片40点(坏8, 椀3, 高坏2, 甕27), 須恵器片8点(坏5, 蓋3), 鉄滓1点(94.51g)が出土している。1はP7, 2はP2の掘方埋土中から, 3・4はP5の覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀初頭と考えられる。



第152図 第29号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第75表 第29号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[9.4]	(1.9)	-	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	P7埋土中	5%
2	須恵器	蓋	-	(1.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	P2埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[16.4]	(1.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	P5覆土中	5%
4	須恵器	蓋	[16.2]	(1.0)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	P5覆土中	5%

### 第32号掘立柱建物跡 (第153～155図 PL22・23)

**位置** 調査区南部のM9g4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第27・36号竪穴建物跡、第6・7号陥し穴を掘り込み、第35号掘立柱建物、第61号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第318・329号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Eの南北棟である。規模は桁行10.60m、梁行5.48mで、面積は58.09㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.80m(9尺)を基本とし、ほぼ揃っている。梁行は2.70m(9尺)を基本とし、揃っている。P2～P7, P9～P12の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸(径)75～110cm、短軸(径)65～85cmである。深さは20～36cmで、掘方の断面は直立している。第1層は柱痕跡、第2～4層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片21点(坏7, 甕14), 須恵器片4点(坏2, 蓋2), 鉄滓2点(125.61g)が出土している。1はP11, 2はP1のいずれも掘方埋土中から出土した。

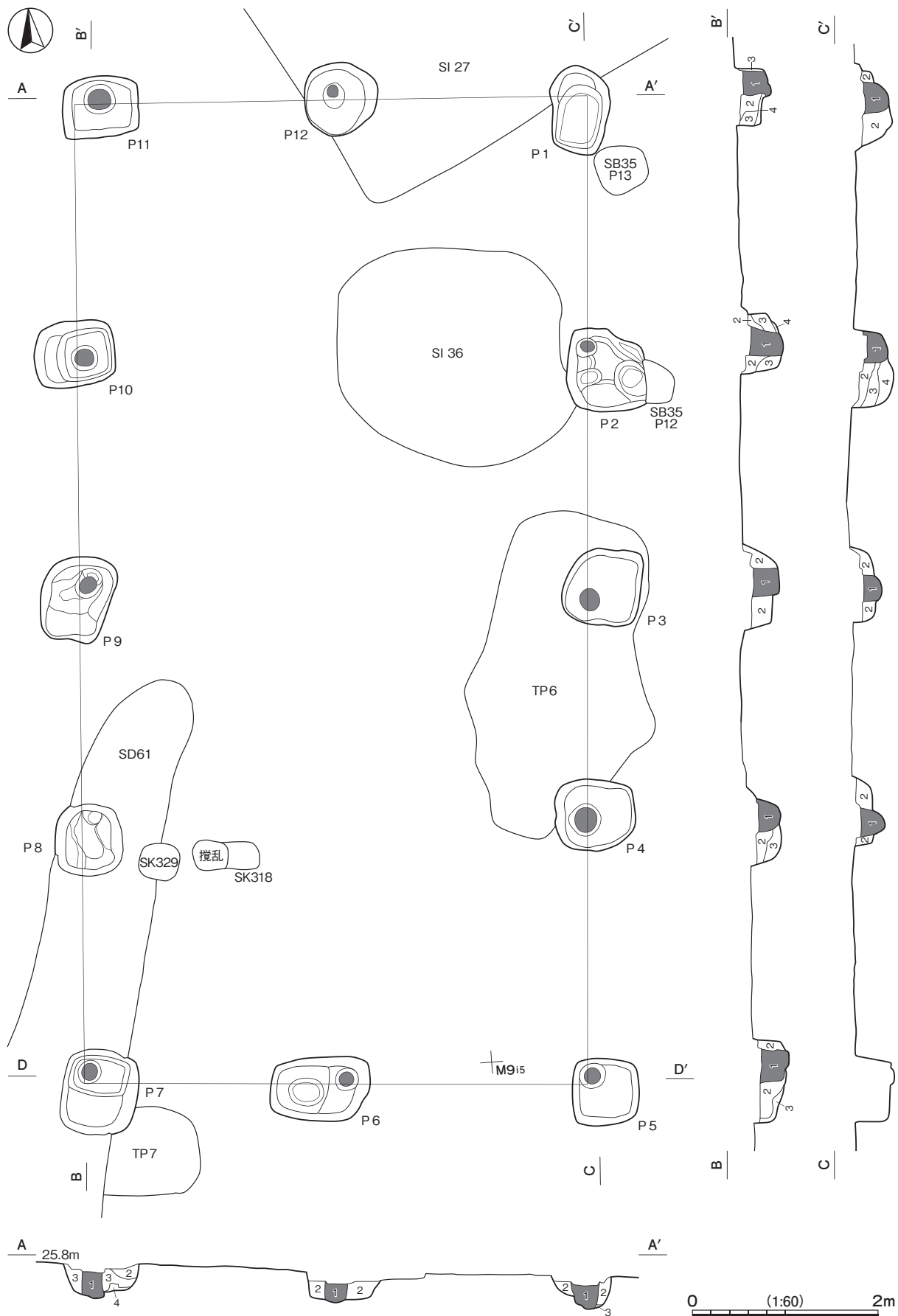
**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



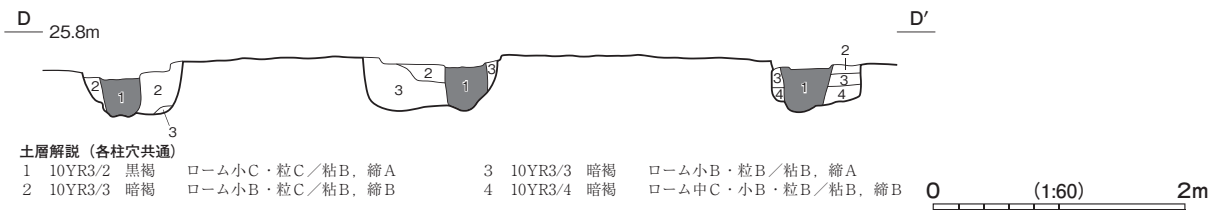
第153図 第32号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第76表 第32号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[9.0]	(2.2)	-	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ	P11埋土中	5%
2	須恵器	蓋	[15.6]	(0.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ	P1埋土中	5%



第 154 图 第 32 号掘立柱建物跡実測图 (1)



第 155 図 第 32 号掘立柱建物跡実測図 (2)

第 33 号掘立柱建物跡 (第 156 図)

位置 調査区南部のM9g7区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

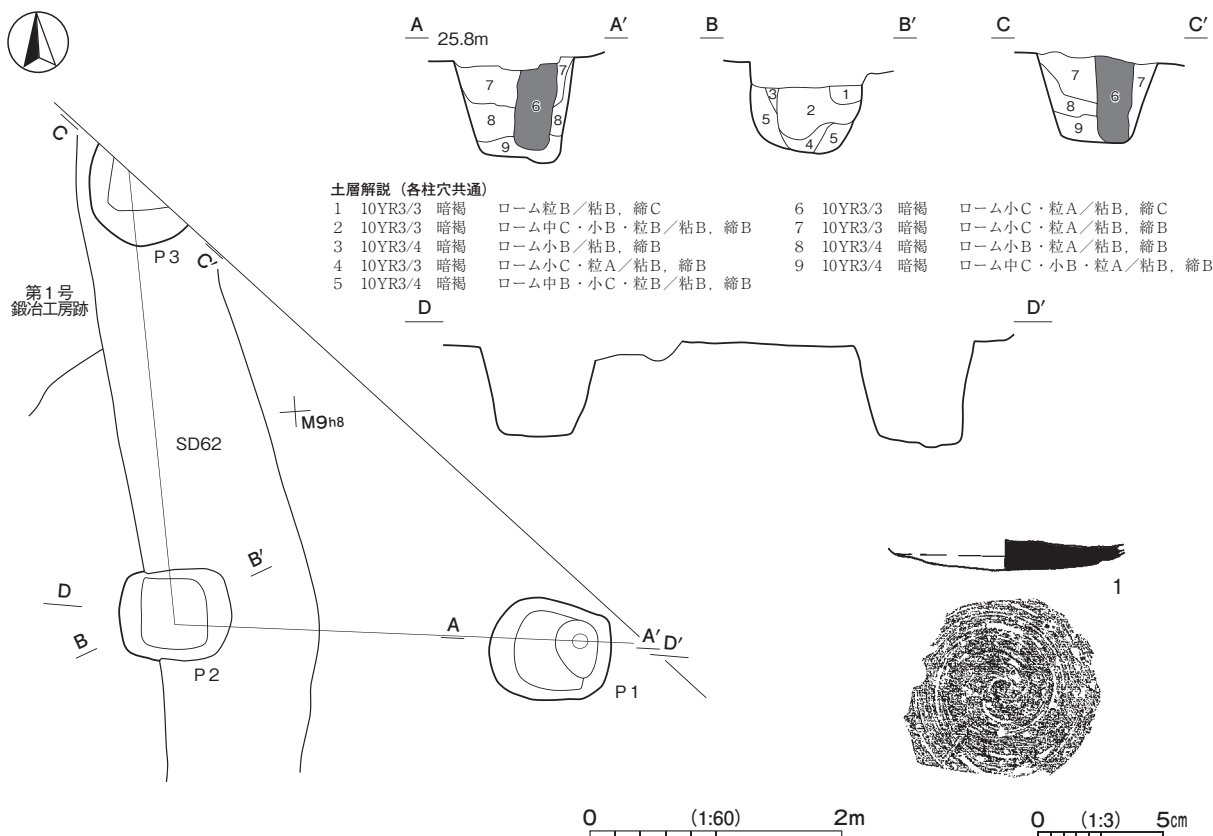
重複関係 第 1 号鍛冶工房跡を掘り込み, 第 62 号溝に掘り込まれている。

規模と構造 北部が調査区域外に延びているため, すべての柱穴を確認することができなかった。桁行, 梁行ともに不明で, 確認できた規模は南北 3.50 m, 東西 3.00 m で, 面積は 5.25 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, P1 - P2 間が 3.00 m (10 尺), P2 - P3 間が 3.50 m (12 尺) である。

柱穴 3 か所。掘方の平面形は隅丸長方形で, 長軸 90 ~ 100 cm, 短軸 75 ~ 80 cm である。深さは 58 ~ 80 cm で, 掘方の断面は直立している。第 1 ~ 5 層は柱抜き取り後の覆土, 第 6 層は柱痕跡, 第 7 ~ 9 層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片 3 点 (坏 1, 甕 2), 須恵器片 1 点 (坏), 鉄滓 2 点 (3.88 g) が出土している。1 は P1 の埋土中から出土している。

所見 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8 世紀中葉と考えられる。



第 156 図 第 33 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 77 表 第 33 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(12)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のナデ	P 1 埋土中	10%新治窯

第 34 号掘立柱建物跡 (第 157 図 PL23)

**位置** 調査区南部の M9d4 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

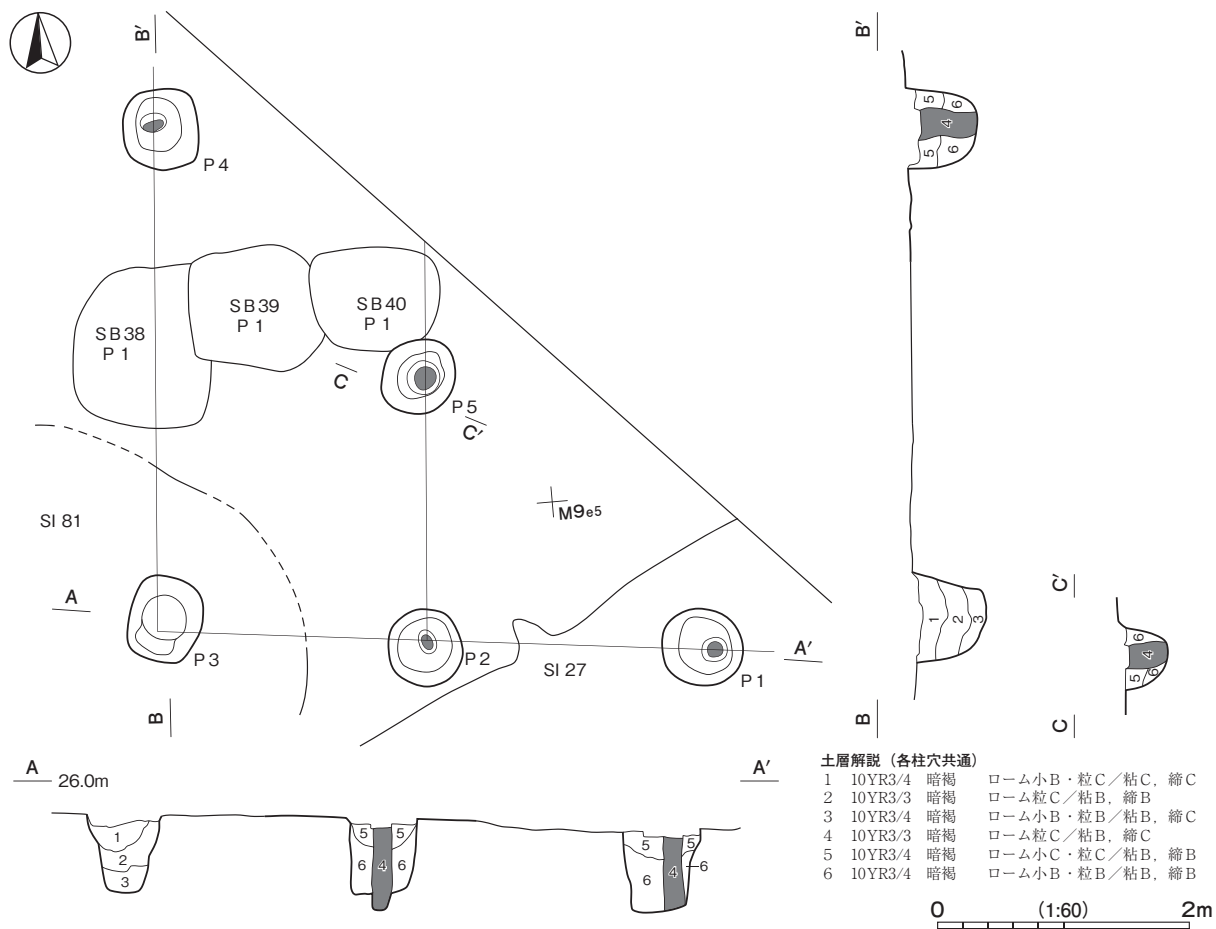
**重複関係** 第 27・81 号竪穴建物跡, 第 38～40 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため, 全ての柱穴を確認することができなかった。桁行, 梁行ともに不明だが, P 3 - P 4 の柱穴が第 38 号掘立柱建物に掘り込まれていると推定できることから, 桁行, 梁行ともに 2 間以上の東西棟の総柱建物跡と考えられる。確認できた規模は桁行 4.30 m, 梁行 4.00 m で, 面積は 8.60 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行, 梁行ともに 2.20 m (7 尺) を基本としている。P 1・P 2・P 4・P 5 の底面で, 柱のあたりを確認した。

**柱穴** 5 か所。掘方の平面形は円形または隅丸長方形で, 長軸 (径) 60～70 cm, 短軸 (径) 60～65 cm である。深さは 36～72 cm で, 掘方の断面は直立している。第 1～3 層は柱抜き取り後の覆土, 第 4 層は柱痕跡, 第 5・6 層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片 11 点 (甕), 鉄滓 1 点 (7.73 g) が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8 世紀中葉と考えられる。



第 157 図 第 34 号掘立柱建物跡実測図



第 36 号掘立柱建物跡 (第 158 図 PL23)

**位置** 調査区南部の N 10d4 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

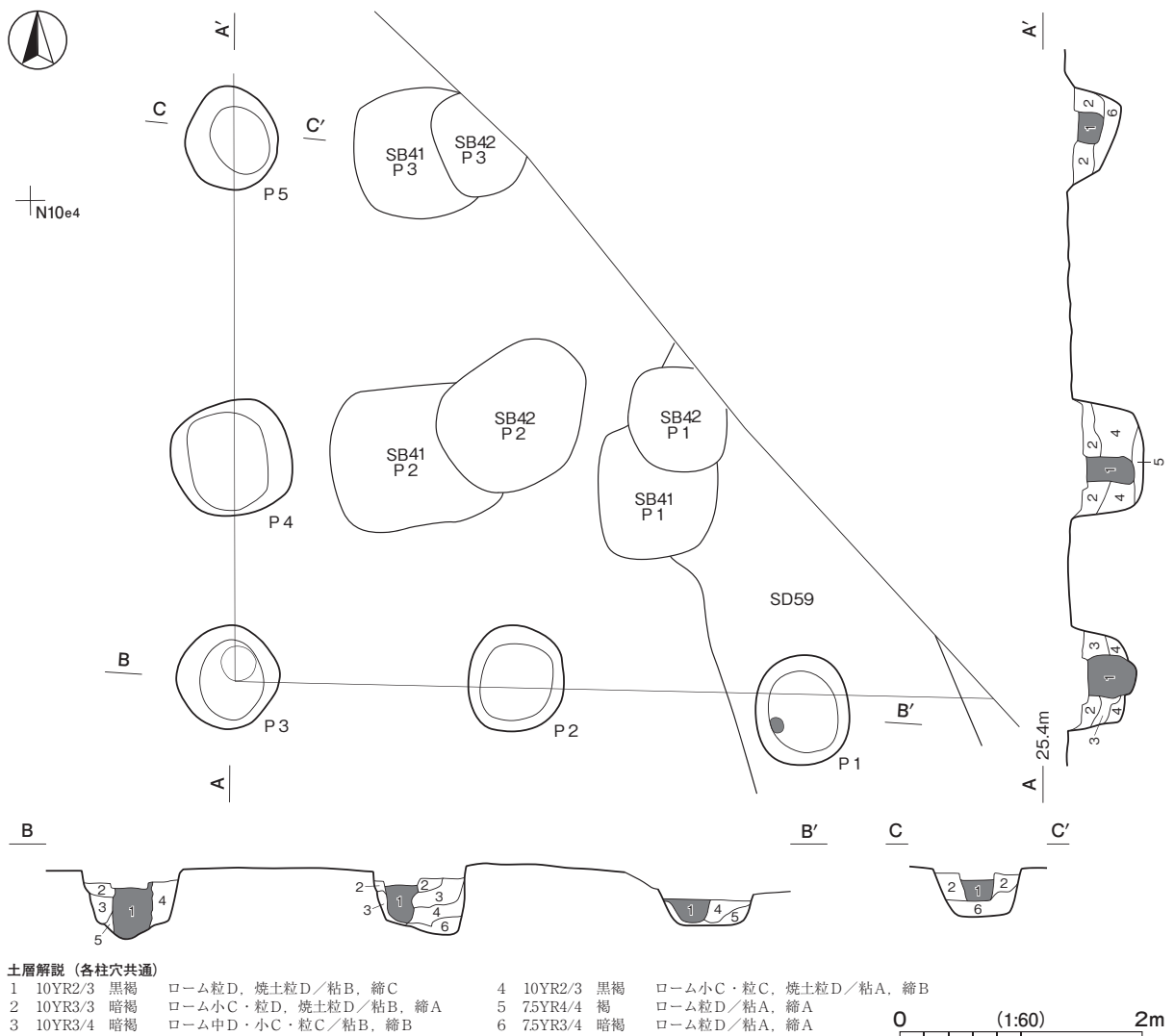
**重複関係** 第 59 号溝に掘り込まれている。また, 本跡の範囲内に第 41・42 号掘立柱建物跡が位置しているが, 新旧関係は不明である。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため, 全ての柱穴を確認することができなかった。桁行, 梁行ともに 2 間以上の東西棟の側柱建物跡と考えられる。確認できた規模は東西 4.80 m, 南北 4.50 m で, 面積は 10.80 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 東西が 2.40 m (8 尺) で, 南北が P 3 - P 4 間が 1.80 m (6 尺), P 4 - P 5 間が 2.70 m (9 尺) である。P 1 の底面で, 柱のあたりを確認した。

**柱穴** 5 か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で, 長軸 (径) 85 ~ 100 cm, 短軸 (径) 75 ~ 95 cm である。深さは 24 ~ 60 cm で, 掘方の断面は直立している。第 1 層は柱痕跡, 第 2 ~ 6 層は掘方への埋土で, 版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片 3 点 (坏 1, 甕 2) が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8 世紀中葉と考えられる。

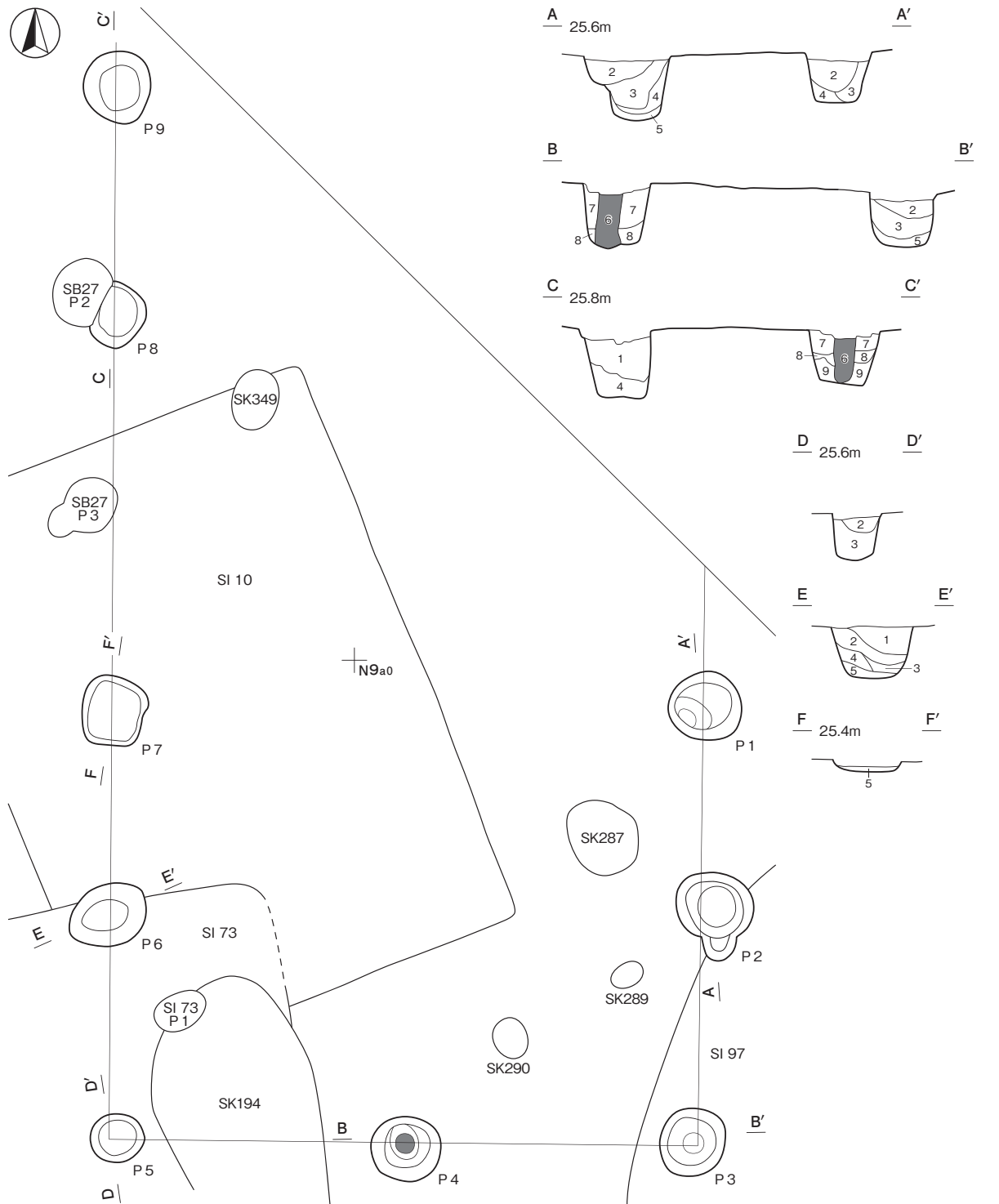


第 158 図 第 36 号掘立柱建物跡実測図

第 37 号掘立柱建物跡 (第 159・160 図)

位置 調査区南部のM9i9区, 標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 10・73・97号竪穴建物跡を掘り込み, 第 27号掘立柱建物に掘り込まれている。また, 本跡の範囲内に第 194・287・289・290・349号土坑が位置しているが, 新旧関係は不明である。



土層解説 (各柱穴共通)

- |              |                             |               |                 |
|--------------|-----------------------------|---------------|-----------------|
| 1 75YR4/3 褐  | ローム小B・粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘A, 縮B | 6 75YR3/2 黒褐  | ローム粒D/粘A, 縮A    |
| 2 75YR3/2 黒褐 | ローム粒C, 焼土粒C, 炭化粒C/粘A, 縮B    | 7 75YR2/3 極暗褐 | ローム小C・粒B/粘A, 縮A |
| 3 75YR3/2 黒褐 | ローム粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮C    | 8 75YR3/2 黒褐  | ローム小C・粒C/粘B, 縮B |
| 4 75YR3/3 暗褐 | ローム小B・粒B, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 縮C | 9 10YR3/4 暗褐  | ローム小B・粒A/粘B, 縮B |
| 5 75YR3/4 暗褐 | ローム粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B          |               |                 |

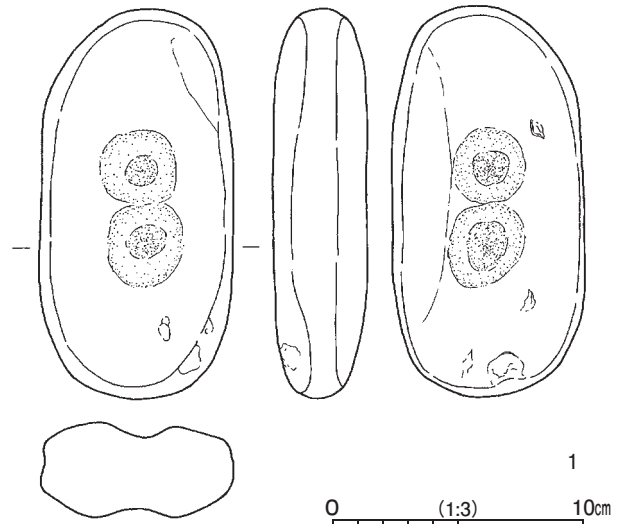
第 159 図 第 37 号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 北部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は桁行10.18m、梁行5.60mで、面積は57.01㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行が南妻から2.20m（7尺）を基本とし、ほぼ揃っている。P7-P8間のみが3.80m（13尺）であるが、第27号掘立柱建物によって間にあった柱穴が掘り込まれている可能性が高い。梁行は2.90m（10尺）と揃っている。P4の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）55～90cm、短軸（径）50～80cmである。深さは10～62cmで、掘方の断面は直立している。第1～5層は柱抜き取り後の覆土、第6層は柱痕跡、第7～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片6点（坏2、椀1、甕3）、石製品1点（凹石・砥石）、鉄滓2点（20.82g）が出土している。1は縄文時代の遺物であるが、P4の掘方埋土に混入していた。

**所見** 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第160図 第37号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第78表 第37号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	凹石・砥石	15.5	7.6	3.8	646.53	安山岩	表裏面に凹み痕 表裏に砥面	P4埋土中	PL47

### 第38号掘立柱建物跡（第161・162図 PL23）

**位置** 調査区南部のM9c2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

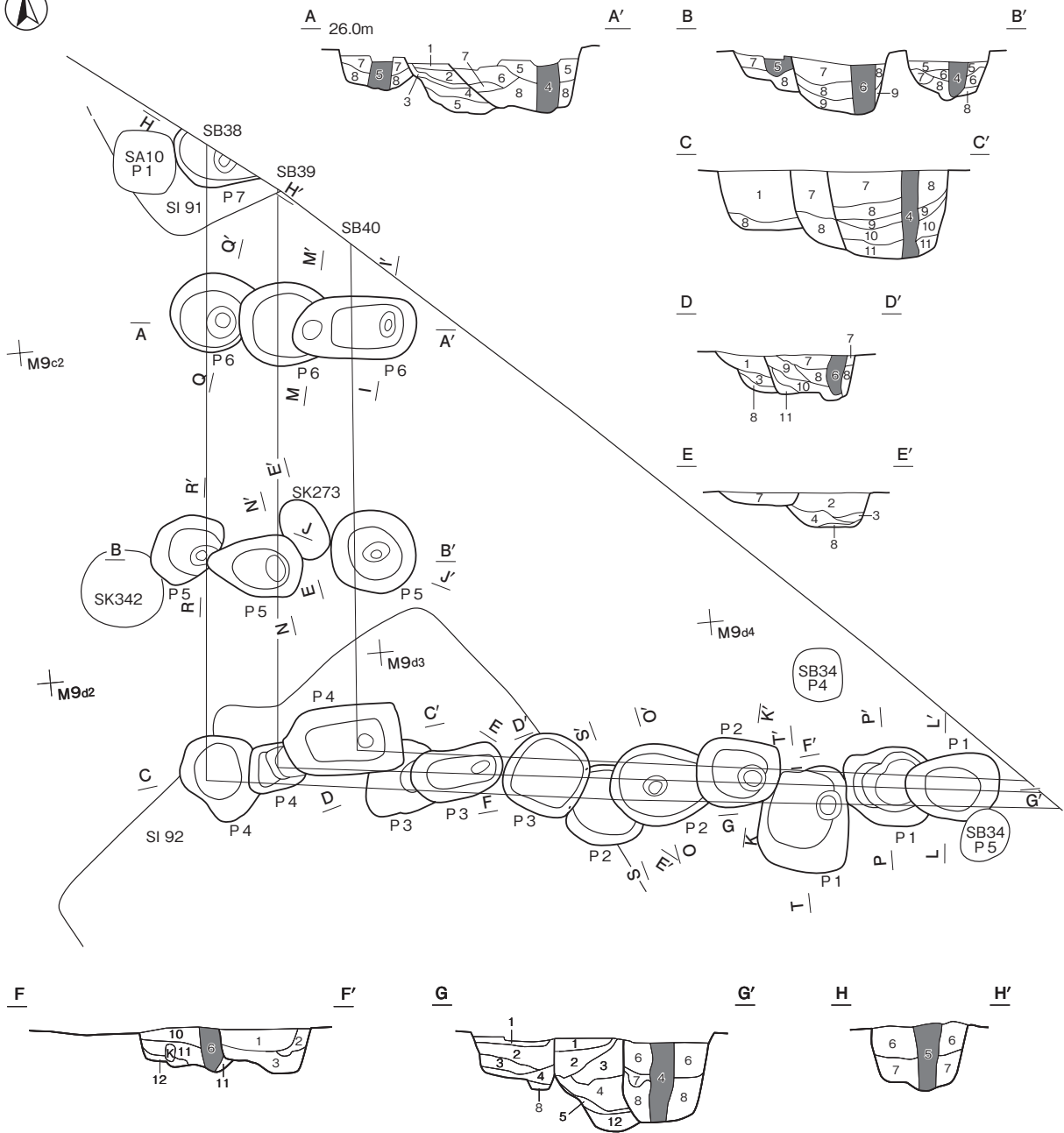
**重複関係** 第91・92号竪穴建物跡、第342号土坑を掘り込み、第34・39・40号掘立柱建物に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第273号土坑が位置しているが、堆積状況での新旧関係は不明である。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに3間以上の側柱建物跡で、桁行の方向がN-8°-Eの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西7.20m、南北7.60mで、面積は27.36㎡である。柱間寸法は、東西が2.40m（8尺）で、南北がP4-P5間が2.80m（9尺）、P5-P6間が2.80m（9尺）、P6-P7間が2.00m（7尺）である。P6の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 7か所。掘方の平面形は隅丸方形または不整楕円形で、長軸（径）96～130cm、短軸（径）72～110cmである。深さは40～80cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5層は柱痕跡、第6～8層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片15点（坏2、壺1、甕12）、須恵器片2点（甕）、土製品1点（羽口）、金属製品1点（不明）、鉄滓3点（138.05g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



**SB38 土層解説 (各柱穴共通)**

- |   |            |                    |
|---|------------|--------------------|
| 1 | 10YR4/4 褐  | □-△中C・小B・粒C/粘B, 締B |
| 2 | 10YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘B, 締C    |
| 3 | 10YR4/4 褐  | □-△中B・小B・粒B/粘B, 締B |
| 4 | 10YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘C, 締C    |

**SB39 土層解説 (各柱穴共通)**

- |   |            |                    |
|---|------------|--------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐 | □-△中B・小C・粒C/粘B, 締C |
| 2 | 10YR3/4 暗褐 | □-△小C・粒B/粘B, 締C    |
| 3 | 10YR4/4 褐  | □-△小B・粒A/粘B, 締C    |
| 4 | 10YR3/2 黒褐 | □-△小C・粒C/粘B, 締B    |
| 5 | 10YR3/4 暗褐 | □-△小C・粒B/粘B, 締A    |
| 6 | 10YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘C, 締C    |

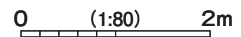
**SB40 土層解説 (各柱穴共通)**

- |   |             |                 |
|---|-------------|-----------------|
| 1 | 7.5YR4/3 褐  | □-△粒C/粘C, 締C    |
| 2 | 7.5YR3/4 暗褐 | □-△小C・粒C/粘C, 締C |
| 3 | 7.5YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘B, 締C |
| 4 | 10YR3/3 暗褐  | □-△小C・粒C/粘C, 締C |
| 5 | 10YR3/4 暗褐  | □-△小B・粒B/粘B, 締C |
| 6 | 10YR3/4 暗褐  | □-△小A・粒A/粘B, 締B |

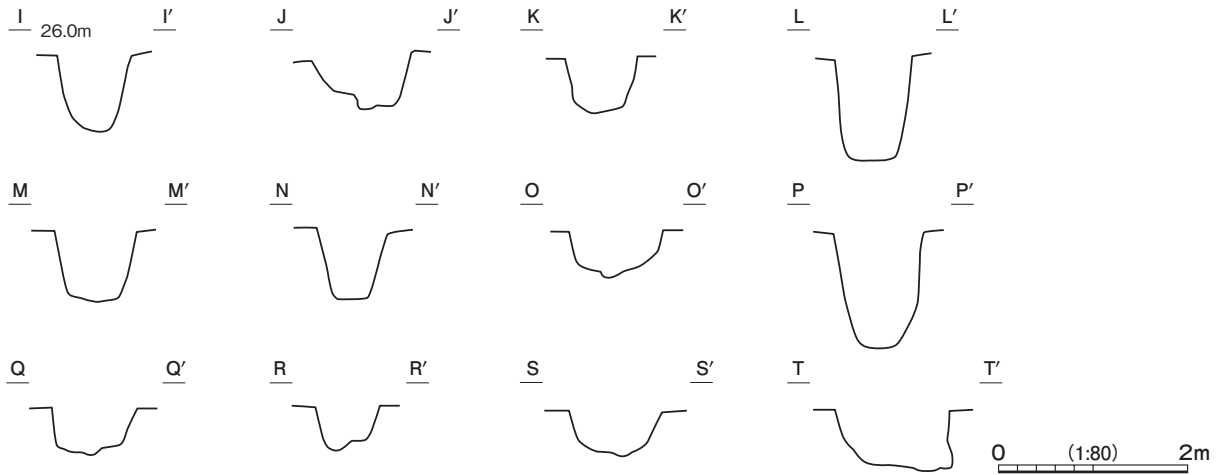
- |   |            |                    |
|---|------------|--------------------|
| 5 | 10YR3/3 暗褐 | □-△小B・粒C/粘B, 締C    |
| 6 | 10YR3/4 暗褐 | □-△小B・粒B/粘B, 締B    |
| 7 | 10YR4/4 褐  | □-△中B・小B・粒B/粘B, 締B |
| 8 | 10YR4/4 褐  | □-△中C・小A・粒A/粘B, 締B |

- |    |            |                    |
|----|------------|--------------------|
| 7  | 10YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘C, 締B    |
| 8  | 10YR3/4 暗褐 | □-△中C・小B・粒B/粘B, 締B |
| 9  | 10YR3/3 暗褐 | □-△小B・粒B/粘B, 締B    |
| 10 | 10YR4/4 褐  | □-△小A・粒A/粘B, 締B    |
| 11 | 10YR4/4 褐  | □-△中B・小A・粒A/粘B, 締C |
| 12 | 10YR3/3 暗褐 | □-△小C・粒C/粘C, 締B    |

- |    |            |                    |
|----|------------|--------------------|
| 7  | 10YR3/3 暗褐 | □-△小B・粒C/粘B, 締B    |
| 8  | 10YR4/4 褐  | □-△小B・粒A/粘B, 締B    |
| 9  | 10YR3/4 暗褐 | □-△中B・小C・粒C/粘B, 締C |
| 10 | 10YR3/3 暗褐 | □-△中C・小C・粒C/粘B, 締C |
| 11 | 10YR3/4 暗褐 | □-△小A・粒B/粘B, 締C    |



第161図 第38～40号掘立柱建物跡実測図(1)



第 162 図 第 38 ～ 40 号掘立柱建物跡実測図 (2)

### 第 39 号掘立柱建物跡 (第 161 ～ 163 図 PL23)

**位置** 調査区南部のM9c2区、標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 92 号竪穴建物跡、第 38 号掘立柱建物跡、第 273 号土坑を掘り込み、第 34・40 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行 3 間以上、梁行 2 間以上の側柱建物跡で、桁行方向が N - 8° - E の南北棟と考えられる。確認できた規模は東西 7.50 m、南北 5.40 m で、面積は 20.25 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は、東西が 2.40 m (8 尺) で、南北が 2.40 m (8 尺) である。P 6 の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 6 か所。掘方の平面形は楕円形で、長径 72 ～ 120 cm、短径 56 ～ 100 cm である。深さは 48 ～ 120 cm で、掘方の断面はほぼ直立している。第 1 ～ 5 層は柱抜き取り後の覆土、第 6 層は柱痕跡、第 7 ～ 12 層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片 11 点 (坏 2, 甕 9), 須恵器片 12 点 (坏 6, 蓋 4, 長頸瓶 1, 甕 1), 鉄滓 1 点 (13.70 g) が出土している。1・2 は P 6 の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8 世紀中葉と考えられる。



第 163 図 第 39 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 79 表 第 39 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.4]	(1.8)	-	長石	灰黄	普通	体部外・内面クロナデ	P 6 覆土中	5%
2	須恵器	蓋	[12.4]	(2.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	P 6 覆土中	5%

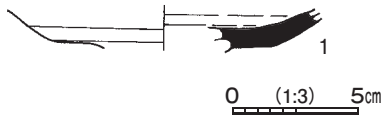
### 第 40 号掘立柱建物跡 (第 161・162・164 図 PL23)

**位置** 調査区南部のM9c2区、標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 92 号竪穴建物跡、第 38・39 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 34 号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行3間以上、梁行2間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-8°-Eの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西7.40m、南北5.00mで、面積は18.50㎡である。柱間寸法は、東西が2.50m（8尺）で、南北が2.40m（8尺）である。P6の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 6か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）100～152cm、短軸（径）72～104cmである。深さは16～104cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5～11層は掘方への埋土である。



**遺物出土状況** 土師器片15点（坏4、甕11）、須恵器片3点（蓋、高盤、鉢）、鉄滓2点（70.96g）が出土している。1はP6の掘方埋土中から出土している。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

第164図 第40号

掘立柱建物跡出土遺物実測図

第80表 第40号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	高盤	-	(1.8)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外・内面ロクロナデ	P6埋土中	5%

#### 第41号掘立柱建物跡（第165図 PL23）

**位置** 調査区南部のN10e4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第42号掘立柱建物、第59号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟と考えられる。確認できた規模は東西2.00m、南北2.50mで、面積は2.50㎡である。柱間寸法は、東西が2.00m（7尺）で、南北が2.50m（8尺）である。

**柱穴** 3か所。掘方の平面形は隅丸方形で、長軸110～130cm、短軸64～120cmである。深さは40～90cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～11層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片2点（甕）、礎盤1点（14.47g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

#### 第42号掘立柱建物跡（第165図 PL23）

**位置** 調査区南部のN10e5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

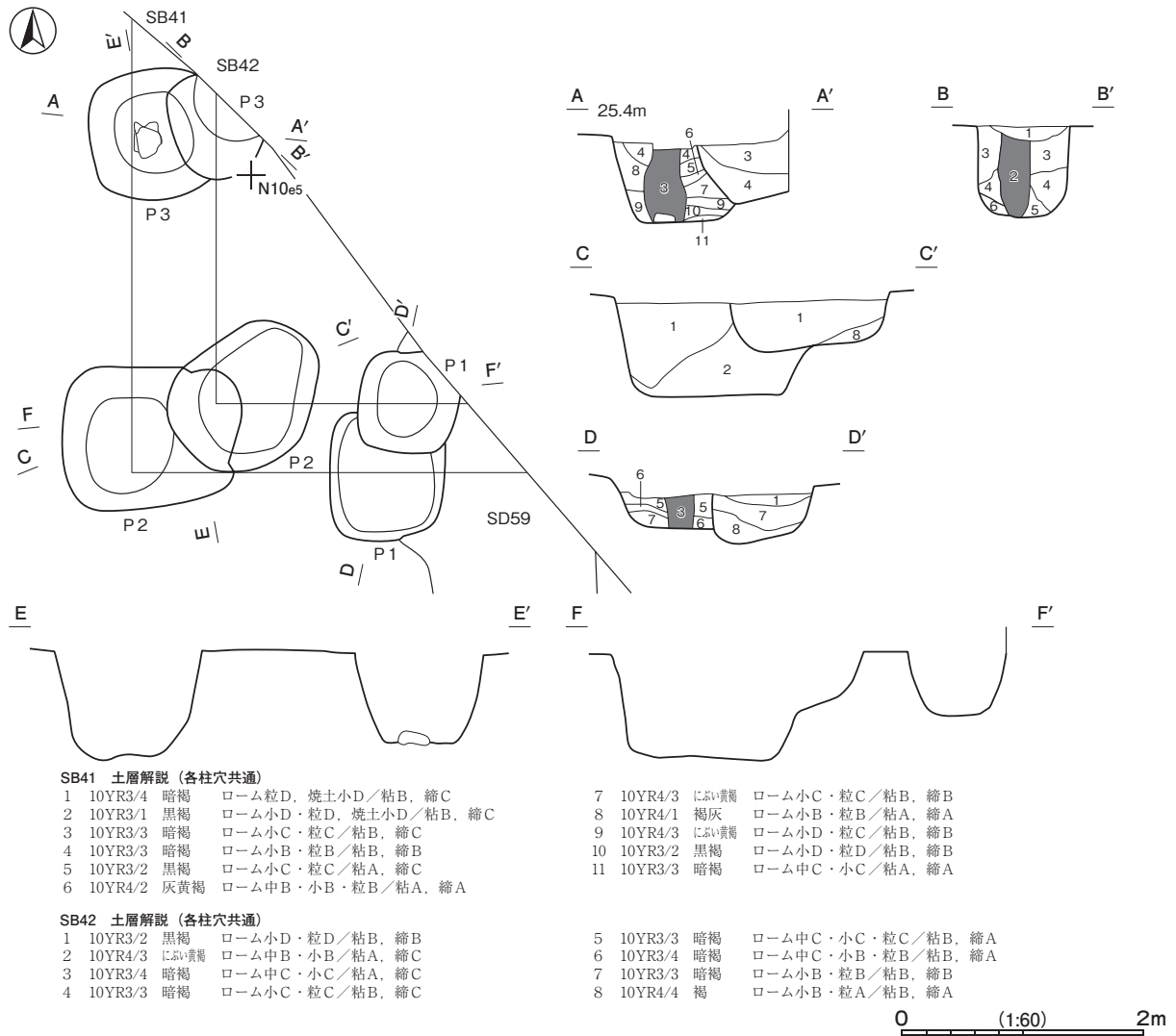
**重複関係** 第41号掘立柱建物跡を掘り込み、第59号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Wの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西1.40m、南北2.50mで、面積は1.75㎡である。柱間寸法は、東西が1.40m（5尺）で、南北が2.50m（8尺）である。

**柱穴** 3か所。掘方の平面形は隅丸方形で、長軸90～135cm、短軸70～108cmである。深さは40～75cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1層は柱抜き取り後の覆土、第2層は柱痕跡、第3～8層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片4点(甕), 須恵器片1点(甕)が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

所見 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8世紀中葉と考えられる。



第 165 図 第 41・42 号掘立柱建物跡実測図

第 81 表 奈良時代掘立柱建物跡一覧

番号	位置	桁行方向	柱間数		面積 (m <sup>2</sup> )	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考	
			桁 × 梁 (間)	桁 × 梁 (m)		桁間 (m)	梁間 (m)	構造	柱穴数	平面形				深さ (cm)
14	L 8 f1	N - 88° - E	3 × 2	6.16 × 4.28	26.36	1.76 ~ 2.16	1.72 ~ 1.88	側柱	9	円形・楕円形	8 ~ 28	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI64, SK190 → 本跡
16	M 8 a1	N - 2° - W	8 × 2	16.12 × 4.08	65.77	1.58 ~ 2.36	1.54 ~ 2.36	側柱	21	隅丸方形・楕円形	4 ~ 48	土師器	8世紀前葉	SI65 → 本跡
17	J 6 j4	N - 85° - E	4 × 3	8.92 × 5.04	44.96	2.00 ~ 2.40	1.44 ~ 1.80	側柱	14	隅丸方形・楕円形	30 ~ 55	土師器	8世紀初頭	
18	M 8 b7	N - 5° - W	3 × 3	6.40 × 4.80	30.72	1.90 ~ 2.33	1.40 ~ 1.70	総柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	60 ~ 97	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI86 → 本跡
19	M 8 d8	N - 3° - W	3 × 3	7.00 × 4.68	32.76	1.88 ~ 2.56	1.44 ~ 1.68	総柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	52 ~ 72	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI84・85, SK260 → 本跡
20	M 8 g8	N - 2° - W	3 × 3	6.16 × 4.76	29.32	1.40 ~ 1.72	1.76 ~ 2.36	総柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	52 ~ 92	土師器, 須恵器	8世紀前葉	本跡 → SK211・275, SK259 重複
21	M 8 i8	N - 3° - W	3 × 2	5.64 × 4.12	23.24	1.82 ~ 1.88	1.94 ~ 2.18	総柱	12	隅丸方形・隅丸長方形	52 ~ 91	土師器, 石製品	8世紀前葉	SK250 → 本跡
22	M 8 i5	N - 3° - W	3 × 2	5.45 × 4.43	[2414]	1.75 ~ 2.02	2.05 ~ 2.30	総柱	10	隅丸方形・隅丸長方形	45 ~ 55	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI89, SK255 → 本跡
23	N 9 f8	N - 88° - E	4 × 3	12.00 × 7.80	93.60	3.00 ~ 3.20	2.20 ~ 3.12	側柱	12	隅丸方形・隅丸長方形	48 ~ 92	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI69・75, SB24, SK222 → 本跡 → SD 8
24	N 9 f9	N - 8° - W	5 × 2	11.04 × 4.92	54.32	2.08 ~ 2.48	2.40 ~ 2.64	側柱	13	隅丸方形・隅丸長方形	36 ~ 84	土師器, 須恵器	8世紀初頭	SI69 → 本跡 → SE23, SD 8
25	M 9 i7	N - 2° - E	2 × 2	5.00 × 3.76	18.80	2.38 ~ 2.56	1.70 ~ 1.95	総柱	9	隅丸方形・隅丸長方形	45 ~ 85	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI74 → 本跡 → SE27, SD62

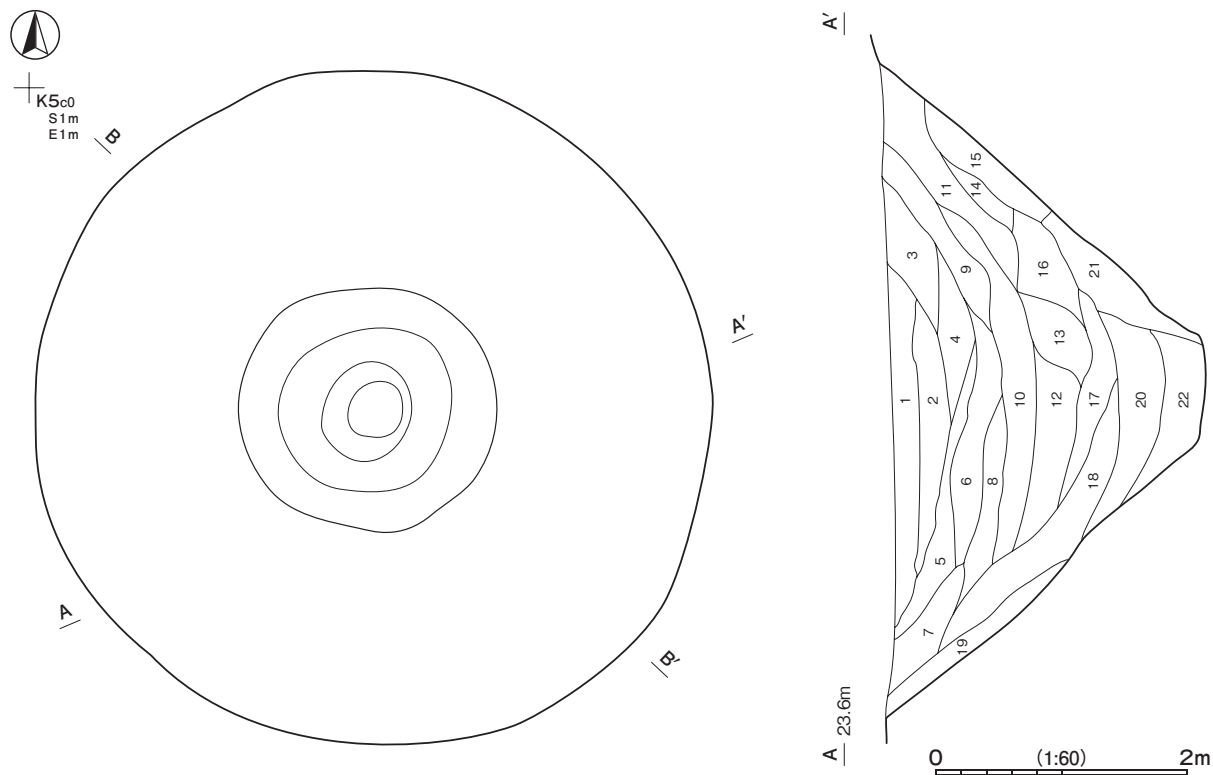
番号	位置	桁行方向	柱間数		規模	面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴				主な出土遺物	時 期	備 考
			桁 × 梁 (間)	桁 × 梁 (m)			桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ(cm)			
26	M9j5	N-0°	3 × 2	7.18 × 4.76	34.18	224 ~ 248	222 ~ 256	側柱	10	隅丸方形・ 楕円形	20 ~ 45	土師器	8世紀前葉	本跡→SD 8 SK196 ~ 200 重複	
27	M9i7	N-90°	5 × 2	9.82 × 5.46	53.62	165 ~ 220	230 ~ 280	側柱	13	隅丸方形・ 楕円形	20 ~ 76	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI10・74 → 本跡→ SB25・37, SD62	
28	N9c2	N-4°-E	7 × 5	17.80 × 10.50	186.90	170 ~ 300	210 ~ 260	四面庇	36	隅丸方形・ 楕円形	30 ~ 90	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI77・78・93・94, SE29, SK213 → 本跡→SB30, SK215, SD61・66 SK203・376 重複	
29	N9e4	N-4°-W	3 × 2	6.20 × 4.80	29.76	200 ~ 220	240 ~ 480	側柱	9	隅丸方形・ 隅丸長方形	48 ~ 80	土師器, 須恵器	8世紀初頭	本跡→SB28・30 SK386 重複	
32	M9g4	N-3°-E	4 × 2	10.60 × 5.48	58.09	240 ~ 280	240 ~ 320	側柱	12	隅丸方形・ 楕円形	20 ~ 36	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI27・36, TP 6・7 → 本跡 → SB35, SK329, SD63 SK308 重複	
33	M9g7	-	(1 × 1)	(3.50 × 3.00)	(5.25)	3.50	3.00	側柱	3	隅丸長方形	58 ~ 80	土師器, 須恵器	8世紀中葉	第1号鍛冶工房跡 → 本跡→SD62	
34	M9d4	-	(2 × 1)	(4.30 × 4.00)	(8.60)	4.30	4.00	総柱	5	隅丸長方形・ 円形	36 ~ 72	土師器	8世紀中葉	SI27・81, SB38 ~ 40 → 本跡	
36	N10d4	-	(2 × 2)	(4.80 × 4.50)	(10.80)	4.80	4.50	側柱	5	隅丸方形・ 楕円形	24 ~ 60	土師器	8世紀中葉	本跡→SD59 SB41・42 重複	
37	M9i9	N-0°	(4) × 2	(10.18) × 5.60	[57.01]	200 ~ 380	280 ~ 290	側柱	9	隅丸方形・ 楕円形	10 ~ 62	土師器	8世紀前葉	SI10・73・97 → 本跡→SB27 SK194・287・289・ 290・349 重複	
38	M9c2	N-8°-E	(3 × 3)	(7.60 × 7.20)	(27.36)	208 ~ 280	224 ~ 248	側柱	7	隅丸方形・ 不整楕円形	40 ~ 80	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI91・92, SK342 → 本跡→SB34・39・40	
39	M9c2	N-8°-E	(3 × 2)	(7.50 × 5.40)	(20.25)	224 ~ 280	240 ~ 296	側柱	6	楕円形	48 ~ 120	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI92, SB38, SK273 → 本跡→SB34・40	
40	M9c2	N-8°-E	(3 × 2)	(7.40 × 5.00)	(18.50)	240 ~ 264	232 ~ 280	側柱	6	隅丸方形・ 楕円形	16 ~ 104	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SI92, SB38・39 → 本跡→SB34	
41	N10e4	N-0°	(1 × 1)	(2.50 × 2.00)	(2.50)	2.50	2.00	側柱	3	隅丸方形	40 ~ 90	土師器	8世紀中葉	本跡→SB42, SD59	
42	N10e5	N-2°-W	(1 × 1)	(2.50 × 1.40)	(1.75)	2.50	1.40	側柱	3	隅丸方形	40 ~ 75	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SB41 → 本跡→ SD59	

### (3) 大型円形土坑

#### 第2号大型円形土坑 (第166・167図 PL23)

**位置** 調査区南部のK5c0区, 標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径5.48m, 短径5.28mの円形で, 深さ296cmの掘り鉢状である。壁は外傾している。底面は径2.07mの円形で, 中央部は径68cmの円形状に32cmほど掘り込まれている。



第166図 第2号大型円形土坑実測図



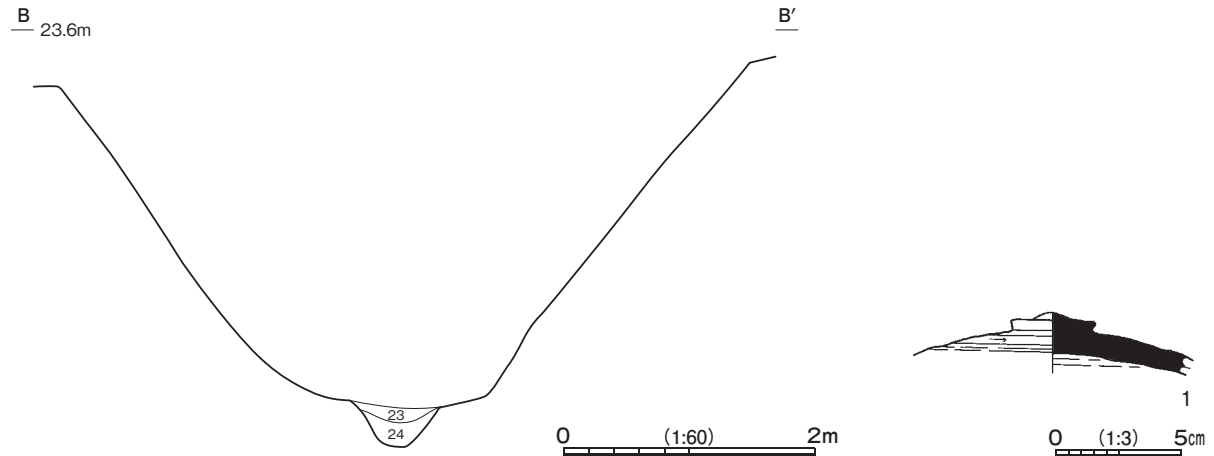
**覆土** 24層に分層できる。第1・2層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。第3～24層はロームブロックや焼土ブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片40点(坏5, 甕35), 須恵器片8点(坏2, 蓋2, 壺1, 甕2, 甑1), 鉄滓1点(11.56g)が出土している。1は覆土中から出土した。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。底面にくぼみをもつ掘り鉢状の大型の土坑である。性格は, 氷室や貯蔵施設, 井戸などが考えられるが, 詳細は不明である。埋め戻しの覆土は焼土や炭化物を含んでおり, 最終的に廃棄土坑として使用されたと考えられる。

**土層解説**

1	10YR3/2	黒褐	ローム粒C, 焼土粒D/粘B, 締B	13	10YR3/2	黒褐	ローム粒C, 焼土粒D, 炭化粒D, 粘土小C/粘B, 締B
2	10YR3/2	黒褐	ローム粒C, 焼土小D/粘B, 締B	14	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 粘土粒C/粘B, 締B
3	10YR3/2	黒褐	ローム粒C, 焼土粒D, 炭化物D/粘B, 締B	15	10YR3/3	暗褐	ローム小C, 焼土小D, 炭化物D/粘B, 締B
4	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 焼土粒D/粘B, 締A	16	10YR3/4	暗褐	ローム粒C, 炭化物D, 粘土粒C/粘B, 締A
5	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 締A	17	10YR5/6	黄褐	ローム小C, 粘土小B/粘B, 締B
6	10YR3/2	黒褐	ローム粒C, 焼土小D, 炭化物C/粘B, 締B	18	10YR3/3	暗褐	ローム小C, 炭化粒C, 粘土小B/粘B, 締B
7	10YR3/2	黒褐	ローム中C, 炭化粒D, 粘土粒B/粘B, 締B	19	10YR5/6	黄褐	ローム小C, 焼土小D, 粘土小B/粘B, 締A
8	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 炭化物C, 粘土小C/粘B, 締A	20	10YR3/4	暗褐	ローム小C, 炭化粒C, 粘土小C/粘B, 締A
9	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 炭化粒C, 粘土小C/粘B, 締A	21	10YR3/4	暗褐	ローム小C, 炭化粒C, 粘土小C/粘B, 締B
10	10YR3/3	暗褐	ローム小C, 焼土粒D, 炭化粒C, 粘土小D/粘B, 締A	22	10YR3/4	暗褐	ローム小C, 炭化粒D, 粘土粒C/粘B, 締B
11	10YR3/2	黒褐	ローム小C, 焼土粒D, 炭化粒C, 粘土小C/粘B, 締B	23	10YR3/3	暗褐	ローム粒C, 粘土小C/粘B, 締B
12	10YR3/2	黒褐	ローム粒D, 炭化粒C, 粘土小C/粘B, 締B	24	10YR5/3	におい黄褐	ローム粒C, 焼土小D, 炭化物D, 粘土粒C/粘B, 締B



第167図 第2号大型円形土坑・出土遺物実測図

第82表 第2号大型円形土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	20% 新治窯

(4) 土坑

第190号土坑(第168図 PL23)

**位置** 調査区中央部のL7f0区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

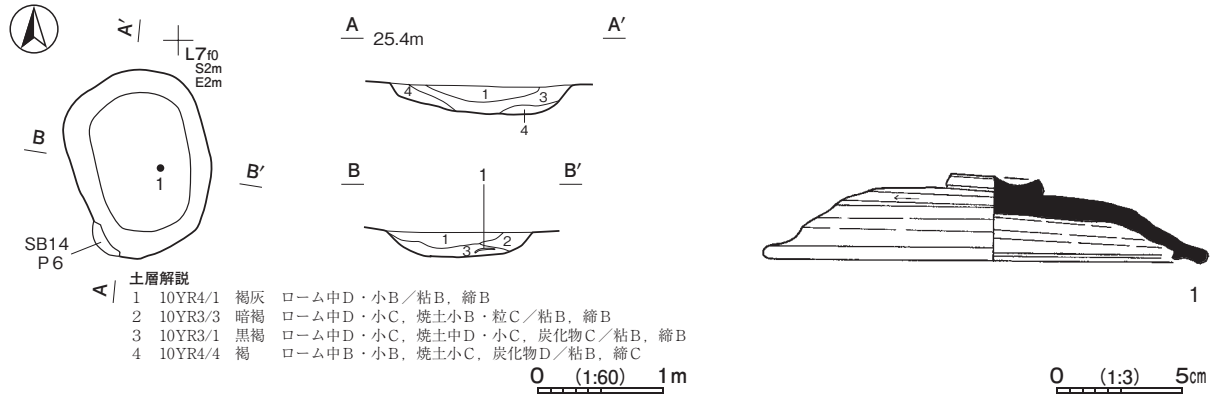
**重複関係** 第14号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.44m, 短径1.08mの楕円形で, 長径方向はN-8°-Wである。確認面からの深さは20cmである。底面は皿状で, 壁は外傾している。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックが含まれ, 不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片3点(坏1, 甕2), 須恵器片3点(蓋)が出土している。1は最下層の第3層から出土している。埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第168図 第190号土坑・出土遺物実測図

第83表 第190号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[17.1]	3.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	70% PL42 新治窯

**第213号土坑** (第169図 PL24)

**位置** 調査区南部のN9b3区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

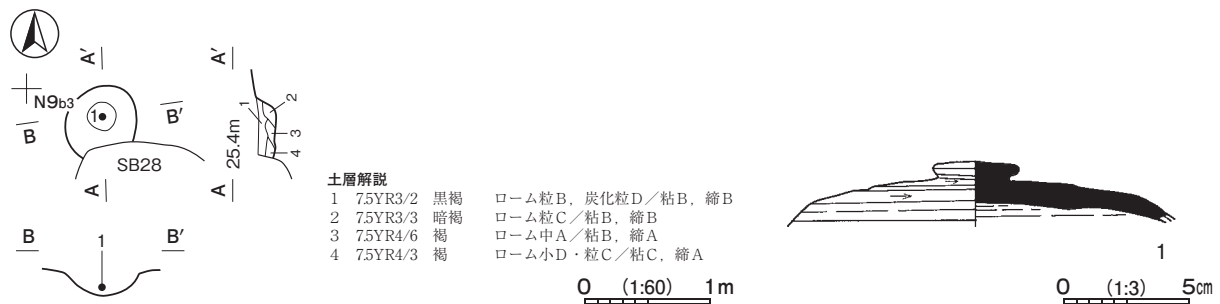
**重複関係** 第28号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.62m, 短径0.52mの楕円形で, 長径方向はN-47°-Eである。確認面からの深さは16cmである。底面は皿状で, 壁は緩やかに外傾している。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックを含み不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 須恵器片1点(蓋)が出土している。1は覆土下層から出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第169図 第213号土坑・出土遺物実測図

第84表 第213号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL42 新治窯

第 85 表 奈良時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
190	L 7 f0	N - 8° - W	楕円形	1.44 × 1.08	20	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器	本跡→SB14
213	N 9 b3	N - 47° - E	楕円形	0.62 × 0.52	16	外傾	皿状	人為	須恵器	本跡→SB28

(5) 柱穴列

第 9 号柱穴列 (第 170 図 PL24)

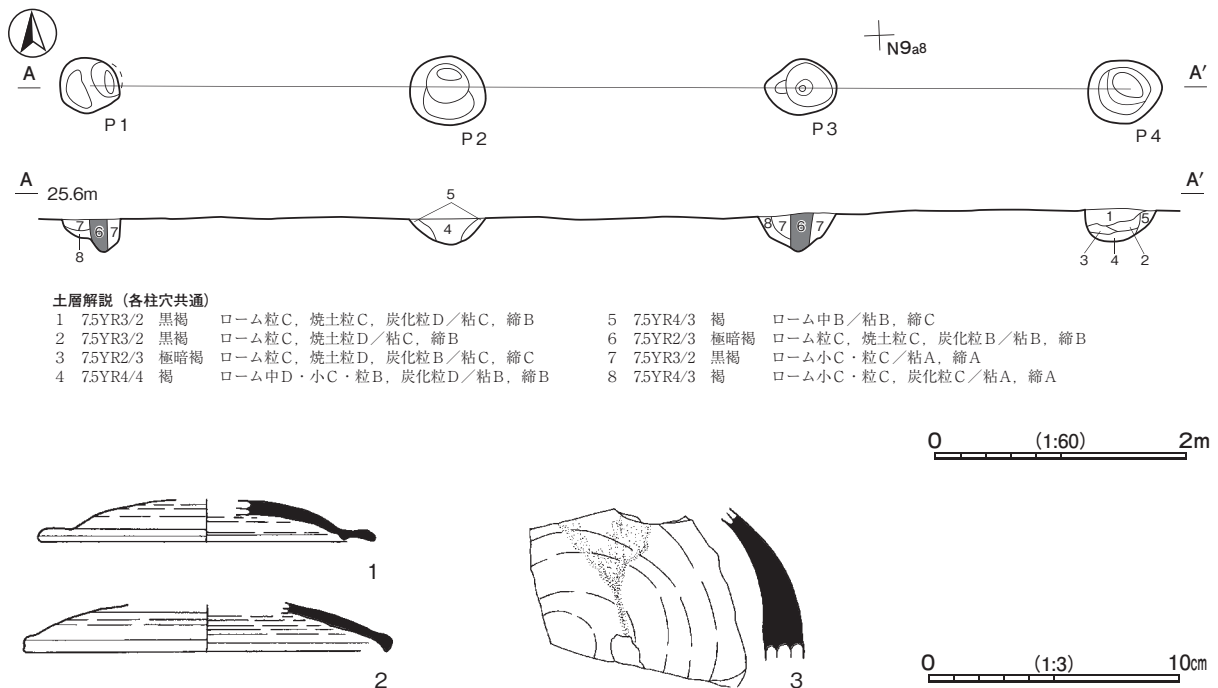
位置 調査区南部の N 9 a7 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と構造 東西方向 8.20 m の間に並ぶ柱穴 4 か所を確認した。配列方向は N - 88° - W である。柱間寸法は 2.80 m (9 尺) と等間隔である。

柱穴 4 か所。平面形は円形または楕円形で, 長径 47 ~ 60 cm, 短径 45 ~ 55 cm である。深さは 20 ~ 40 cm で, 掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。8 層に分層でき, 第 1 ~ 5 は柱抜き取り後の覆土, 第 6 層は柱痕跡, 第 7・8 層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片 6 点 (坏 2, 甕 4), 須恵器片 6 点 (坏 2, 蓋 3, 横瓶 1), 鉄滓 3 点 (48.87 g) が出土している。1 は P 1 の掘方埋土中から, 2 は P 2, 3 は P 4 の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉と考えられる。



第 170 図 第 9 号柱穴列・出土遺物実測図

第 86 表 第 9 号柱穴列出土遺物一覧

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
1	須恵器	蓋	[13.2]	(1.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	P 1 埋土中	5 %
2	須恵器	蓋	[14.4]	(1.9)	-	黒色粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	P 2 覆土中	5 %
3	須恵器	横瓶	-	(7.0)	-	長石	灰	普通	ロクロナア 自然釉	P 4 覆土中	5 %

第 10 号柱穴列 (第 171 図)

位置 調査区南部の M 9 b2 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

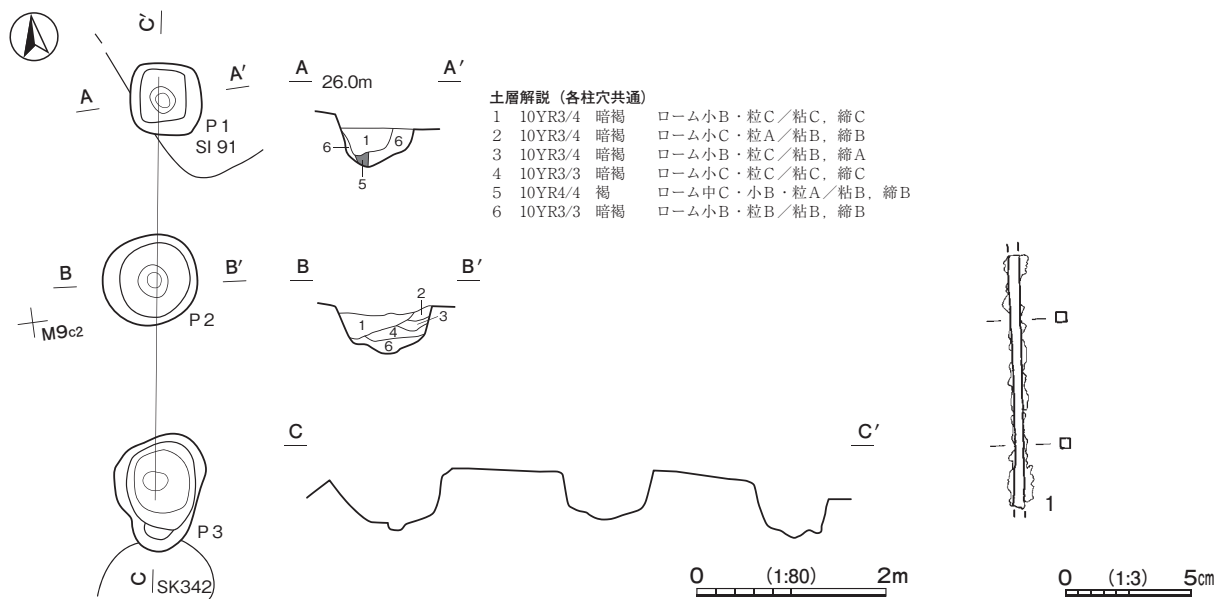
重複関係 第 91 号竪穴建物跡, 第 342 号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 南北方向 4.20 m の間に並ぶ柱穴 3 か所を確認した。配列方向は  $N - 9^\circ - E$  である。柱間寸法は 2.20 m (7 尺) と等間隔である。

柱穴 3 か所。平面形は方形または楕円形で, 長軸 (径) 76 ~ 128 cm, 短軸 (径) 75 ~ 96 cm である。深さは 36 ~ 52 cm で, 掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。6 層に分層でき, 第 1 ~ 4 は柱抜き取り後の覆土, 第 5 層は柱痕跡, 第 6 層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片 8 点 (甕), 金属製品 2 点 (釘, 不明), 鉄滓 2 点 (56.62 g) が出土している。

所見 時期は, 軸と出土土器から 8 世紀中葉と考えられる。



第 171 図 第 10 号柱穴列・出土遺物実測図

第 87 表 第 10 号柱穴列出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	不明鉄製品	(10.0)	0.4	0.4	(6.59)	鉄	断面正方形	P 2 覆土中	PL48

第 88 表 奈良時代柱穴列一覧

番号	位置	主軸方向	長さ(m)	柱間(m)	柱 穴				主な出土遺物	備考	
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)			深さ(cm)
9	N 9 a7	N - 88° - W	8.20	2.60 ~ 2.80	4	円形・楕円形	47 ~ 60	45 ~ 55	20 ~ 40	土師器・須恵器	
10	M 9 b2	N - 9° - W	4.24	2.00 ~ 2.24	3	方形・楕円形	76 ~ 128	75 ~ 96	36 ~ 52	土師器・金属製品	SI91, SK342 → 本跡

(6) 溝跡

第5号溝跡 (第172図 PL24)

位置 調査区中央部のL8j0～N8d0区, 標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

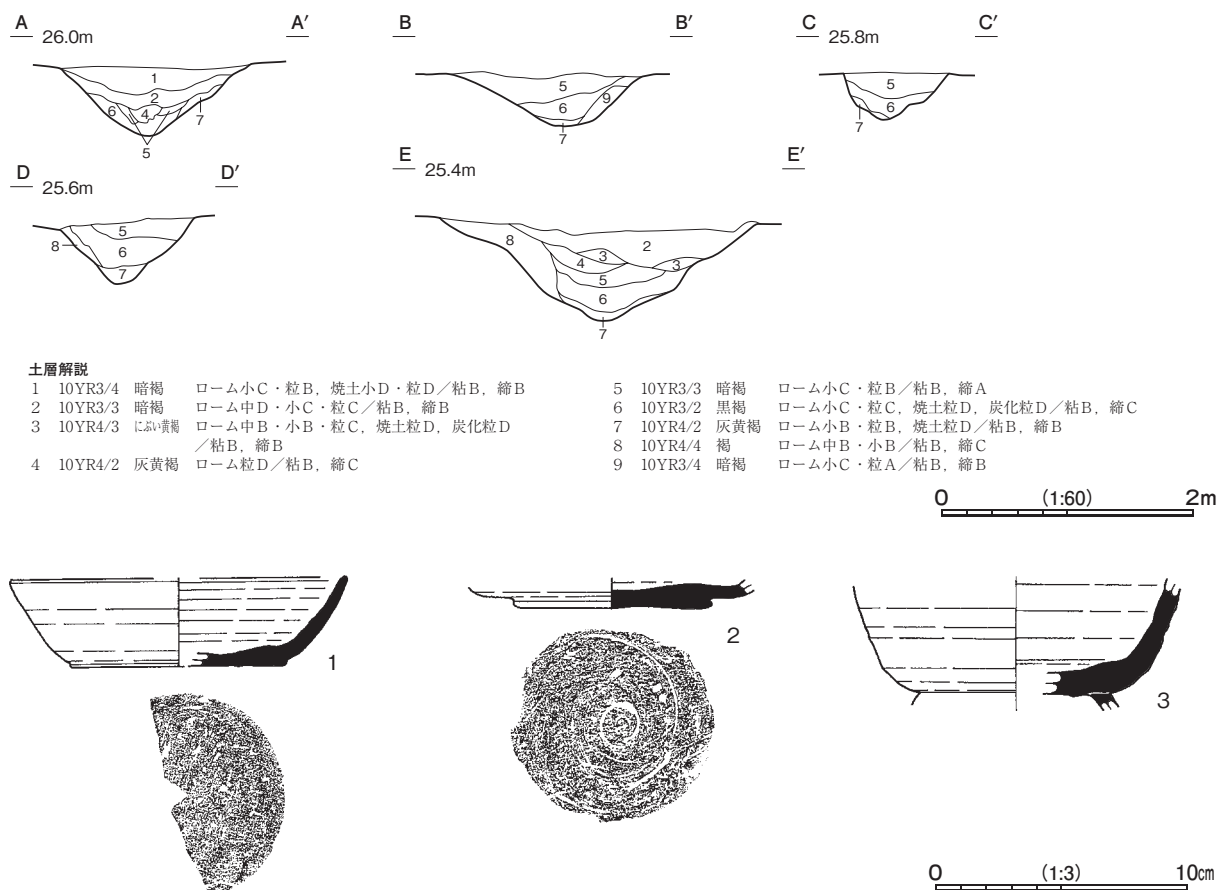
重複関係 第11・12・82号竪穴建物跡, 第362号土坑を掘り込み, 第66号溝に掘り込まれている。

規模と形状 L8i0区から南方向(N-173°-W)へ伸び, N8d0区まで至っている。確認できた長さは55.66mで, 上幅76～188cm, 下幅9～22cm, 深さ36～80cmである。断面形はV字状を呈している。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックが含まれ, 不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片66点(坏7, 甕59), 須恵器片16点(坏5, 鉢1, 瓶1, 甕9)が出土している。1～3はいずれも覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第172図 第5号溝跡・出土遺物実測図

第89表 第5号溝跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.2]	3.5	[8.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後多方向のナデ	覆土中	30% PL42
2	須恵器	坏	-	(1.2)	7.8	長石・石英	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ削り後多方向のナデ	覆土中	20%
3	須恵器	長頸瓶	-	(5.2)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼付	覆土中	10%

5 平安時代の遺構と遺物

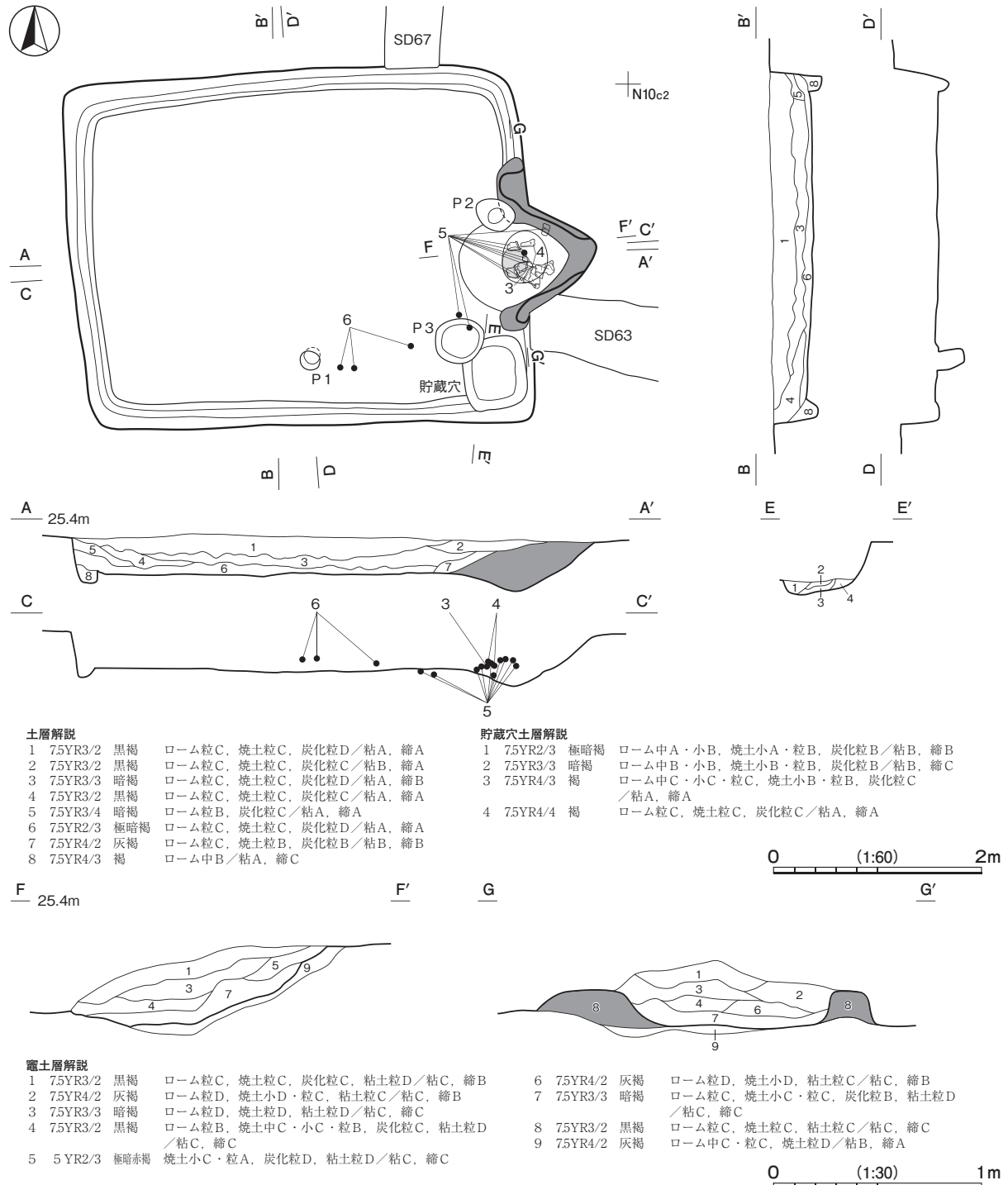
当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴建物跡

第24号竪穴建物跡 (第173～175図 PL24)

位置 調査区南部のN10c1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第63・67号溝に掘り込まれている。



第173図 第24号竪穴建物跡実測図

**規模と形状** 長軸 4.40 m，短軸 3.40 m の長方形で，主軸方向は N - 85° - E である。壁高は 32 cm ~ 40 cm で，直立している。

**床** 平坦で，明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

**竈** 東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 132 cm で，燃烧部の幅は 75 cm である。竈は焚口部から煙道部にかけて浅く掘りくぼめ，第 9 層を埋土して整地している。袖部は地山の上に粘土粒子を含む第 8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており，火床面は第 9 層上面で火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 67 cm ほど掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。第 6・7 層は，焼土粒子や粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。

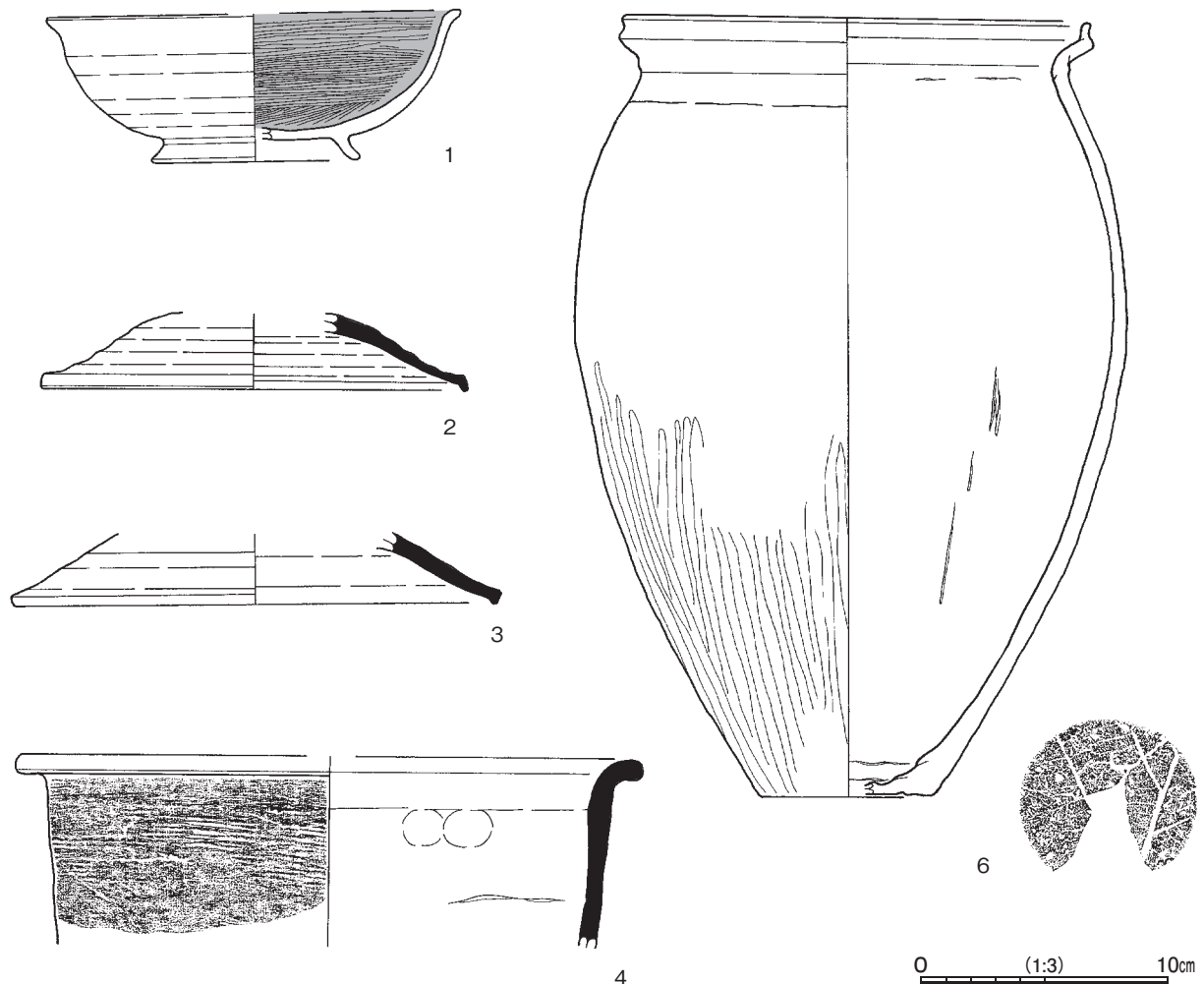
**ピット** 3 か所。P 1 ~ P 3 は深さ 10 ~ 28 cm で，いずれも性格は不明である。

**貯蔵穴** 南東コーナー部に位置している。長軸 70 cm，短軸 60 cm の長方形で，深さは 15 cm である。底面はやや凹凸があり，壁は外傾している。

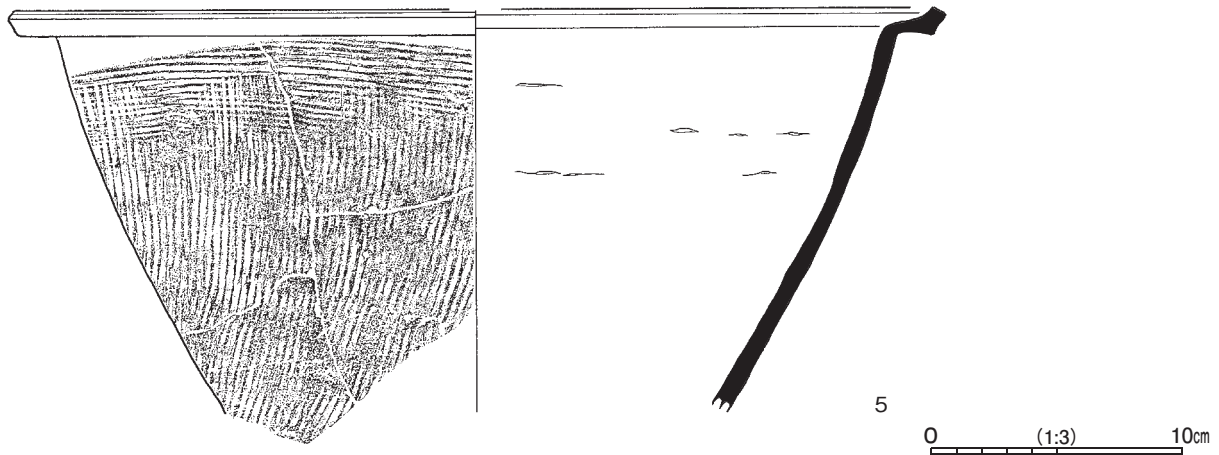
**覆土** 8 層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており，埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 79 点（坏 10，高台付坏 1，甕 68），須恵器片 58 点（坏 8，高台付坏 2，蓋 8，鉢 2，甕 38），石器 2 点（砥石・剥片），金属製品 1 点（不明），鉄滓 7 点（137.19 g）が出土している。3 ~ 6 はいずれも覆土下層または中層から出土しており，廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。



第 174 図 第 24 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 175 図 第 24 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 90 表 第 24 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	[16.6]	6.0	[8.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理 底部回転ヘラ削り後高台貼付	覆土中	40% 外面一部煤付着
2	須恵器	蓋	[17.2]	(3.1)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	20%
3	須恵器	蓋	[19.5]	(2.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	30% 新治窯
4	須恵器	鉢	[25.0]	(7.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位平行叩き 内面ナデ 指頭圧痕 輪積み痕	覆土下層	10% 新治窯
5	須恵器	鉢	[36.6]	(16.0)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位平行叩き 内面ナデ 輪積み痕	覆土下層	20% PL43 新治窯
6	土師器	甕	18.5	31.5	7.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 中位から下位縦 位のヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪積み痕 底部木葉痕	覆土下層～ 中層	70% PL43

#### 第 47 号竪穴建物跡 (第 176 ~ 178 図 PL24・25)

**位置** 調査区南部の N9d6 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 76 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸 5.29 m, 短軸 4.40 m の長方形で, 主軸方向は N - 94° - E である。壁高は 38 cm で, 直立している。

**床** 平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。壁溝は東壁と北壁, 南壁の一部に回っている。

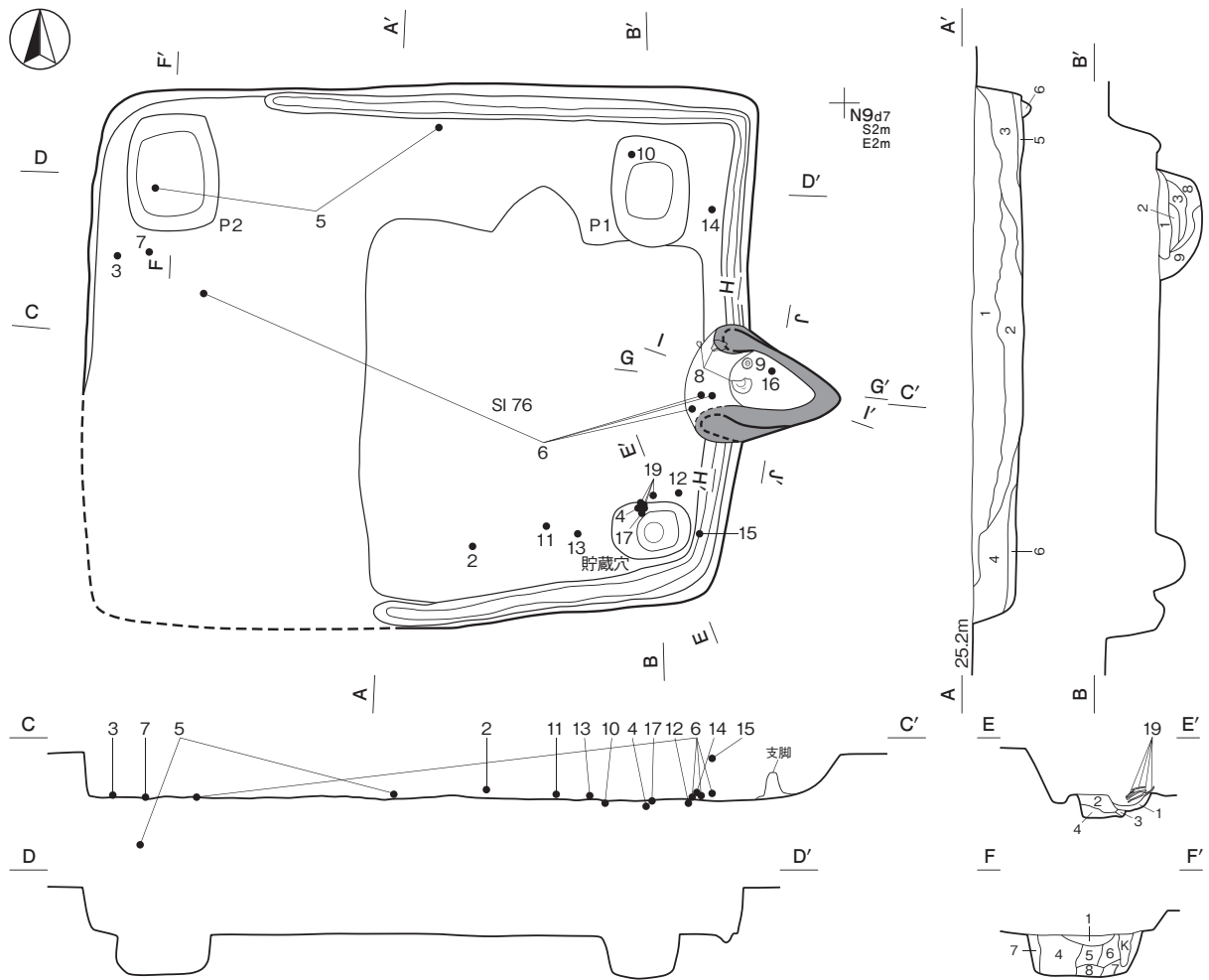
**竈** 東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 125 cm で, 燃焼部の幅は 45 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第 12 ~ 15 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており, 火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に 76 cm ほど掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 4・6 ~ 8・11 層は, 焼土ブロックや粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。竈中央部には熱を受けた痕跡のみられる雲母片岩 (27 cm × 19 cm × 5.65 cm 4.36kg, 16 cm × 15 cm × 13 cm 5.09kg) が 2 点確認でき, 横並び二つ掛け竈の支脚として使用されたと考えられる。

**ピット** 2 か所。P1・P2 はそれぞれ深さが 35 cm・30 cm で, 性格は不明である。

**貯蔵穴** 南東コーナー部に位置している。長軸 65 cm, 短軸 45 cm の隅丸長方形で, 深さは 20 cm である。底面はやや凹凸があり, 壁は外傾している。

**覆土** 6 層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから, 埋め戻されている。





**土層解説**

- |   |         |      |                                |
|---|---------|------|--------------------------------|
| 1 | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒B, 焼土粒D, 炭化粒C/粘C, 縮A       |
| 2 | 75YR2/2 | 黒褐色  | ローム大D・小B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘C, 縮B    |
| 3 | 75YR3/4 | 暗褐色  | ローム大D・中D・粒C, 焼土粒C, 炭化粒D/粘B, 縮B |
| 4 | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒C/粘B, 縮B                   |
| 5 | 75YR3/2 | 暗褐色  | ローム大B・中C・小C/粘B, 縮C             |
| 6 | 75YR2/2 | 黒褐色  | ローム粒C, 焼土粒C/粘B, 縮B             |

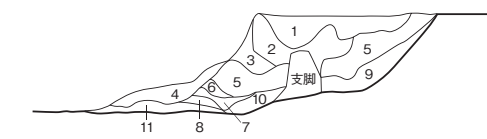
**貯蔵穴土層解説**

- |   |         |      |                                   |
|---|---------|------|-----------------------------------|
| 1 | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒D, 炭化粒C/粘B, 縮B                |
| 2 | 75YR3/4 | 暗褐色  | ローム小C・粒B, 焼土小C・粒C, 炭化物C・粒C/粘B, 縮B |
| 3 | 75YR3/2 | 黒褐色  | ローム小B・粒C, 焼土小B・粒C, 炭化粒C/粘B, 縮B    |
| 4 | 75YR3/3 | 暗褐色  | ローム小B・粒B, 焼土小B・粒C, 炭化物C・粒C/粘B, 縮B |

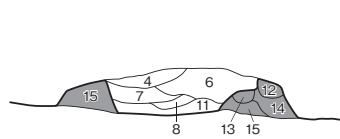
**ピット土層解説**

- |   |         |     |                                   |
|---|---------|-----|-----------------------------------|
| 1 | 75YR3/3 | 暗褐色 | ローム小C・粒C/粘C, 縮B                   |
| 2 | 75YR3/4 | 暗褐色 | ローム小C・粒B, 焼土小C・粒C, 炭化物C・粒C/粘B, 縮B |
| 3 | 75YR2/1 | 黒   | ローム粒D, 焼土小D, 炭化粒A/粘B, 縮C          |
| 4 | 75YR3/3 | 暗褐色 | ローム小B・粒B, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 縮B       |
| 5 | 75YR4/3 | 褐色  | ローム小B・粒B, 炭化粒D/粘C, 縮B             |
| 6 | 75YR4/2 | 灰褐色 | ローム小D・粒B, 炭化粒D/粘B, 縮B             |
| 7 | 75YR3/3 | 暗褐色 | ローム中D・粒B/粘B, 縮B                   |
| 8 | 75YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒C, 炭化粒D/粘B, 縮B                |
| 9 | 75YR4/3 | 褐色  | ローム小B・粒B/粘B, 縮B                   |

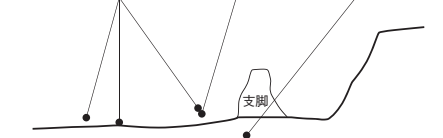
G 25.2m



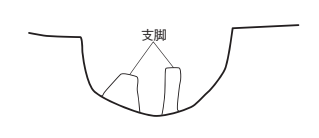
H 25.2m



I 25.2m



J 25.2m



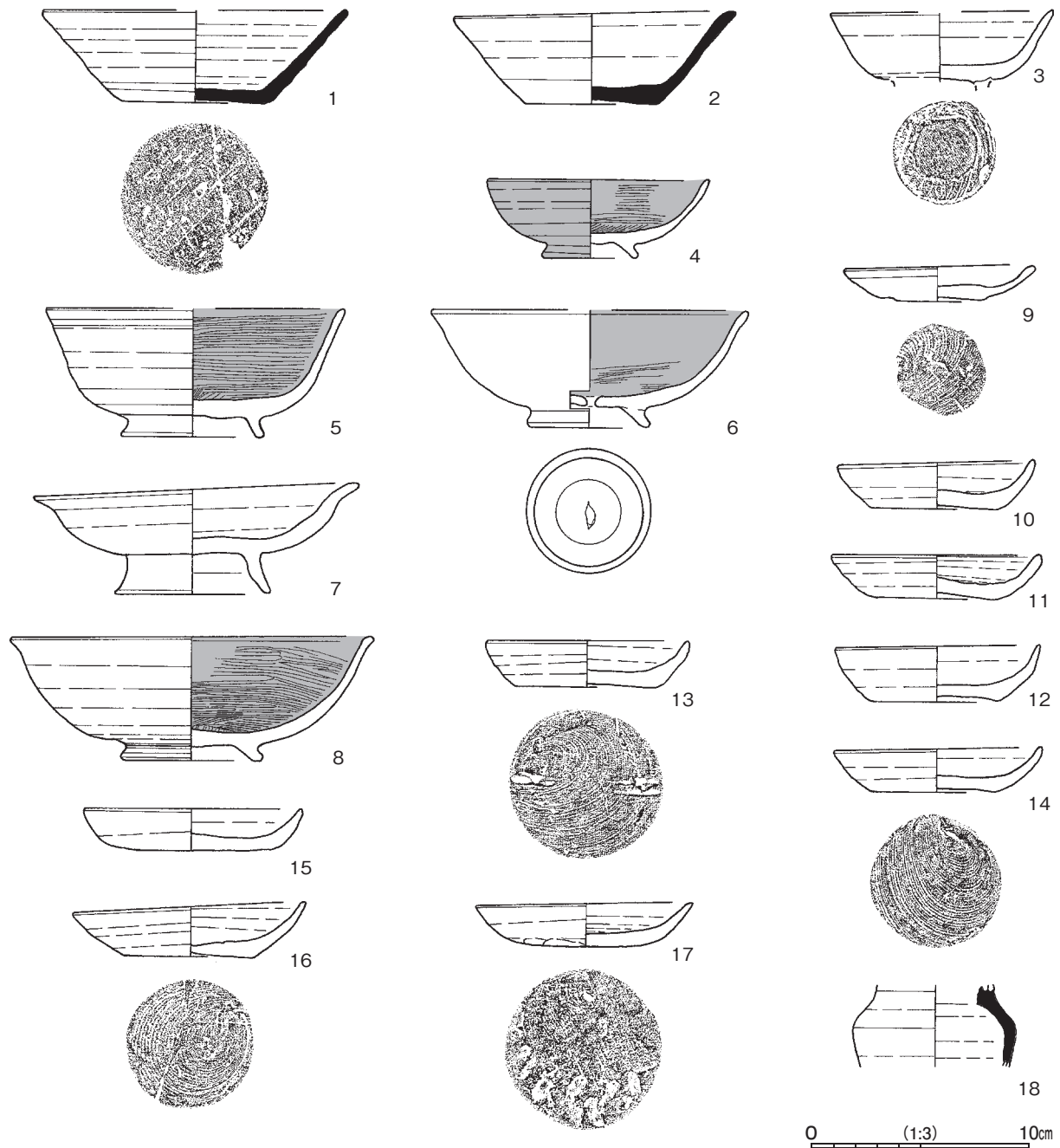
**竈土層解説**

- |    |         |      |                                      |
|----|---------|------|--------------------------------------|
| 1  | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒C, 焼土粒C/粘C, 縮B                   |
| 2  | 75YR3/2 | 黒褐色  | ローム粒D, 焼土粒C, 炭化粒C/粘C, 縮B             |
| 3  | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒B, 焼土粒B, 炭化粒D/粘A, 縮A             |
| 4  | 75YR2/2 | 黒褐色  | ローム粒C, 焼土小C・粒B, 炭化粒C/粘C, 縮B          |
| 5  | 75YR3/2 | 黒褐色  | ローム粒C, 焼土粒B, 炭化粒C/粘B, 縮B             |
| 6  | 75YR2/3 | 極暗褐色 | ローム粒C, 焼土小C・粒B, 炭化物C・粒C, 粘土粒D/粘B, 縮B |
| 7  | 75YR3/3 | 暗褐色  | ローム粒B, 焼土小B・粒B, 炭化物C・粒C, 粘土粒D/粘B, 縮B |
| 8  | 75YR3/4 | 暗褐色  | ローム粒C, 焼土小C・粒C, 炭化粒C, 粘土粒D/粘B, 縮B    |
| 9  | 75YR3/3 | 暗褐色  | ローム粒B, 焼土粒C/粘B, 縮B                   |
| 10 | 75YR3/4 | 暗褐色  | ローム粒C, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 縮B             |
| 11 | 75YR2/2 | 黒褐色  | ローム粒C, 焼土粒C, 炭化粒C, 粘土粒C/粘A, 縮B       |
| 12 | 75YR5/8 | 明褐色  | ローム大A・粒C, 焼土粒B, 炭化粒C, 粘土粒C/粘A, 縮A    |
| 13 | 75YR3/3 | 暗褐色  | ローム粒C, 焼土粒C, 炭化物C・粒C, 粘土粒C/粘B, 縮B    |
| 14 | 75YR3/3 | 暗褐色  | ローム粒C, 焼土小C・粒B, 炭化物C・粒C, 粘土粒C/粘B, 縮B |
| 15 | 75YR4/6 | 褐色   | ローム大A・粒C, 焼土粒C, 炭化粒C, 粘土粒C/粘A, 縮A    |

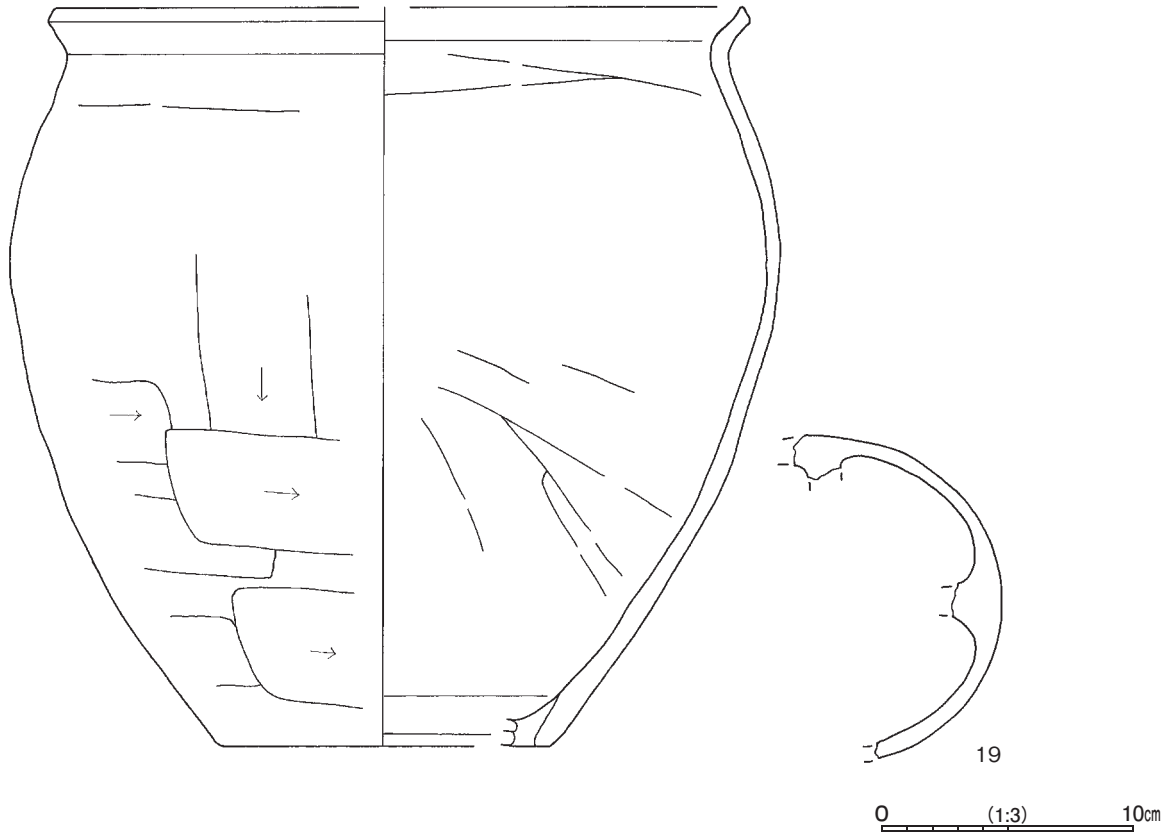
第 176 図 第 47 号 竪穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 167 点 (坏 22, 高台付坏 12, 小皿 13, 鉢 2, 甕 115, 甑 3), 須恵器片 36 点 (坏 8, 高台付坏 2, 蓋 15, 鉢 1, 壺 1, 甕 9), 石製品 3 点 (支脚), 金属製品 1 点 (刀子), 鉄滓 2 点 (672.03 g) が出土している。3～5・7・10・12・13・16・17 はいずれも床面から出土しており, 廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。2・6・8・9・11・14 は覆土下層から, 15 は覆土上層から出土しており, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 10 世紀後半と考えられる。



第 177 図 第 47 号 竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 178 図 第 47 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 91 表 第 47 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.2]	4.3	6.4	長石・石英・雲母・細礫	明赤褐	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部一方向のナデ	覆土中	30% 新治窯
2	須恵器	坏	12.8	4.3	6.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部一方向のナデ	覆土下層	95% 外・内面一部煤付着 新治窯
3	土師器	高台付坏	[10.1]	(3.3)	-	長石・石英・礫	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 高台部剥離	床面	50% 内面一部煤付着
4	土師器	高台付坏	10.0	3.6	4.3	長石・石英・雲母	黒	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 全面黒色処理	床面	60% PL43
5	土師器	高台付坏	[13.6]	6.9	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	床面	60%
6	土師器	高台付坏	[14.4]	5.4	5.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面劣化著しい 内面ヘラ磨き 黒色処理 底部穿孔	覆土下層	60% PL43
7	土師器	高台付坏	14.8	5.1	7.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り	床面	90% PL43 外・内面一部煤付着
8	土師器	高台付坏	16.4	5.7	6.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土下層	80% PL43
9	土師器	小皿	8.6	1.7	4.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	100% PL43
10	土師器	小皿	8.9	2.3	6.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	100% PL43
11	土師器	小皿	9.4	2.1	5.7	長石・石英・赤色粒子・礫	浅黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	95% PL43
12	土師器	小皿	9.3	2.6	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	100% PL43
13	土師器	小皿	9.2	2.1	6.5	長石・石英・赤色粒子・礫	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	100% PL43
14	土師器	小皿	9.4	2.1	5.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	100% PL43
15	土師器	小皿	10.0	2.0	6.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土上層	80% PL43
16	土師器	小皿	10.6	2.6	6.0	長石・石英・雲母・礫	にぶい赤橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	80% PL43
17	土師器	小皿	10.0	2.1	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り後ヘラ削り	床面	90% PL43
18	須恵器	壺	-	(3.8)	-	長石	灰白	普通	体部外・内面ロクロナデ	覆土中	5% PL43
19	土師器	甑	[27.3]	29.4	[13.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位の削り 下位横位の削り 内面ナデ 底部五孔式。	貯蔵穴上層	50% PL44

第76号竪穴建物跡 (第179図 PL25)

**位置** 調査区南部のN9e6区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第47号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 遺構上部が掘り込まれているため, 確認できた規模は, 長軸2.95m, 短軸2.69mの方形で, 主軸方向はN-4°-Eである。壁高は10cmで, ほぼ直立している。

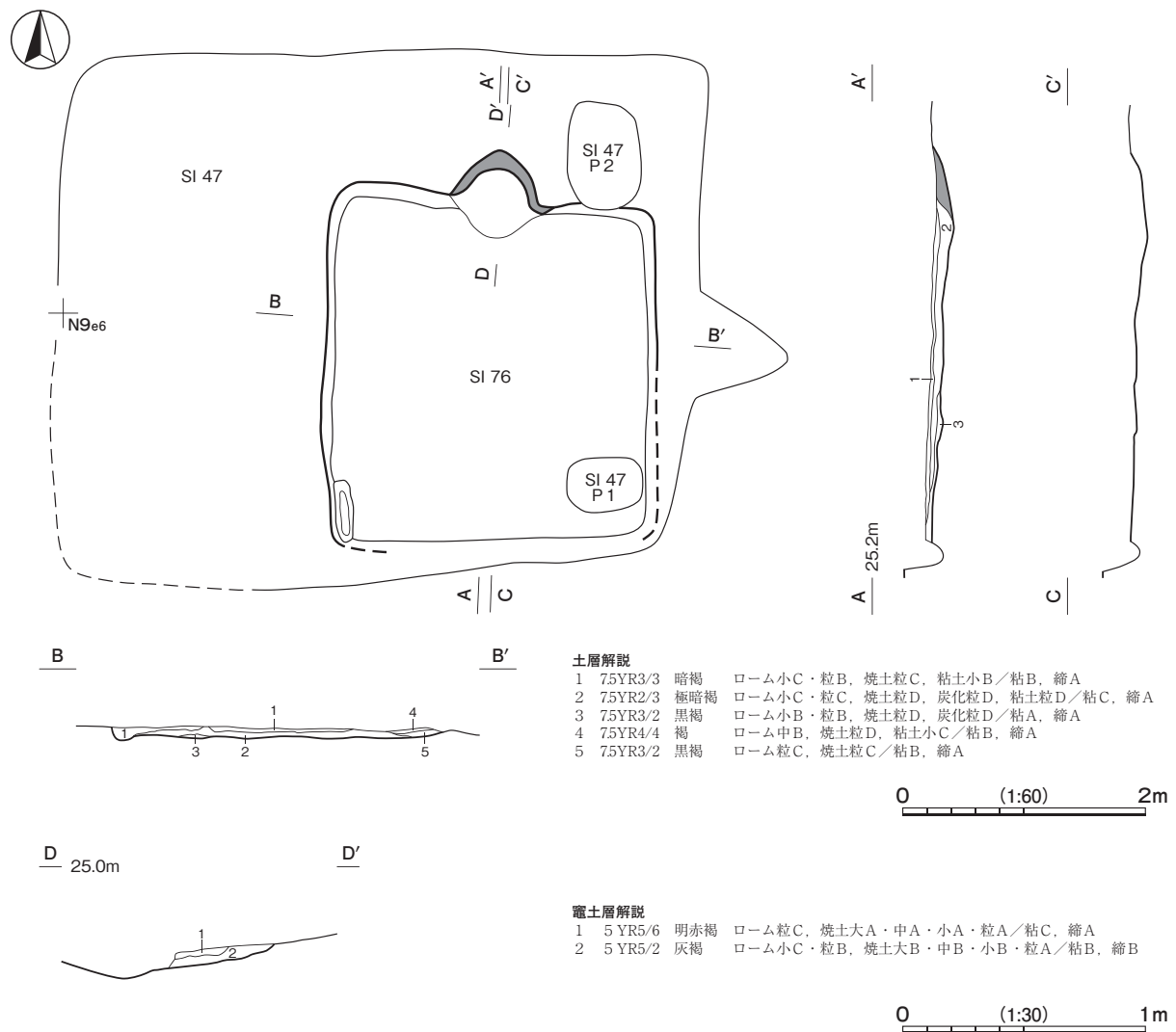
**床** 平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。西壁下の一部で壁溝を確認した。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで76cmで, 燃烧部の幅は50cmである。火床部は床面よりやや下がっており, 火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に41cmほど掘り込まれ, 火床部から緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片14点(坏2, 甕12), 須恵器片6点(坏1, 盤1, 長頸壺1, 瓶類1, 甕2)が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 出土土器や規模から, 10世紀前葉と考えられる。



第179図 第76号竪穴建物跡実測図

第 95 号竪穴建物跡 (第 180・181 図 PL25)

**位置** 調査区南部の N 10g5 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 68 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南北軸 2.40 m, 東西軸 1.60 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定され, 主軸方向は N - 89° - E と推定できる。壁高は 12 cm で, 直立している。

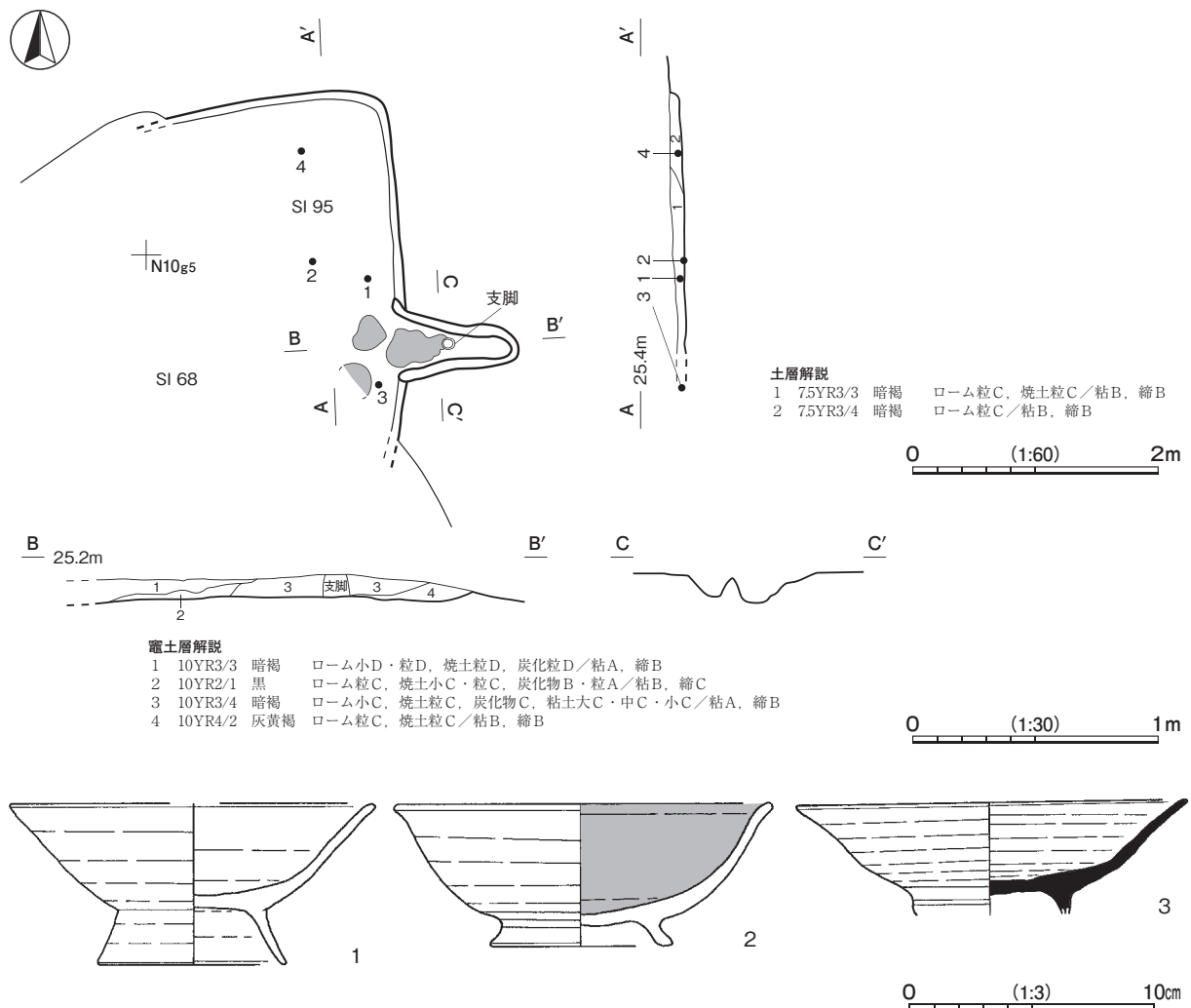
**床** 確認できた範囲では平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。

**竈** 東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 135 cm で, 燃焼部の幅は 40 cm である。火床部は床面よりやや下がっており, 火床部は床面とほぼ同じ高さを使用している。火床面は, 赤変硬化している。煙道部は壁外に 92 cm ほど掘り込まれ, 火床部からほぼ水平に延び, 奥壁で緩やかに立ち上がっている。竈中央部には支脚の一部が据えられた状態で確認できた。

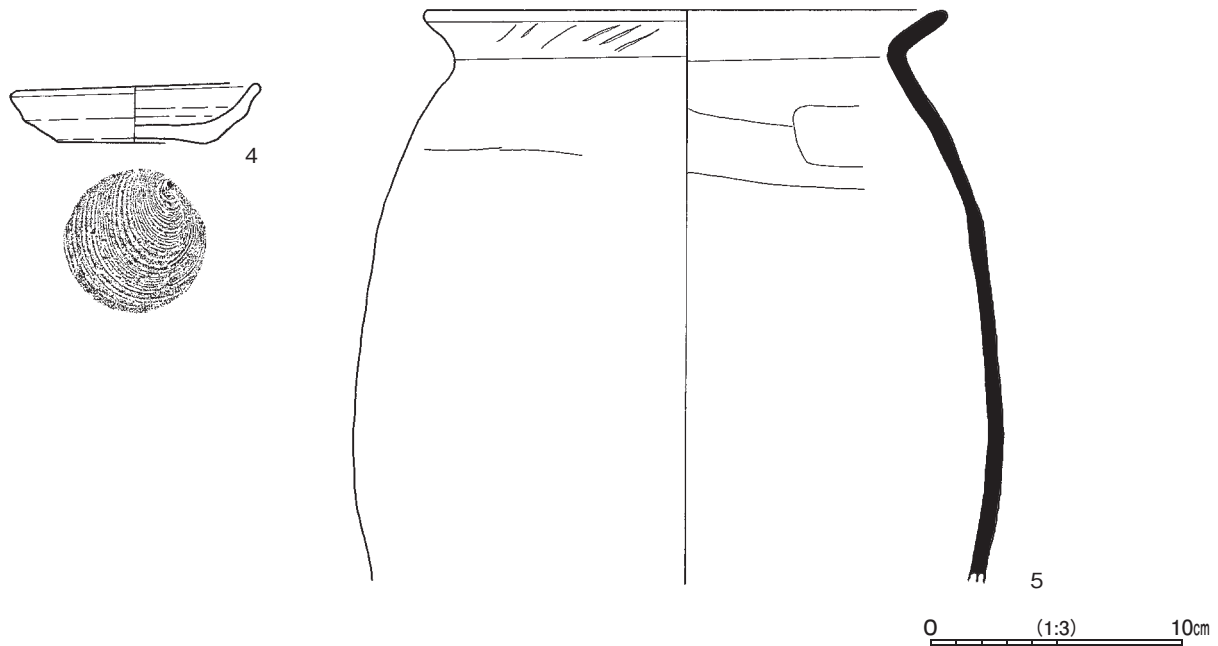
**覆土** 2 層に分層できる。ローム粒子や焼土粒子などが含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 8 点 (坏 4, 高台付坏 2, 小皿 1, 甕 1), 須恵器片 21 点 (高台付坏 2, 甕 19) が出土している。1 ~ 4 はいずれも床面から出土しており, 廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から 10 世紀後半と考えられる。



第 180 図 第 95 号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 181 図 第 95 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 92 表 第 95 号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	[14.8]	6.5	[7.5]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	床面	60% PL44
2	土師器	高台付坏	15.2	5.8	7.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き摩滅 黒色処理	床面	60% PL44
3	須恵器	高台付坏	15.8	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼付	床面	70% PL44 新治窯
4	土師器	小皿	9.5	2.4	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	床面	100% PL44
5	須恵器	甕	20.4	(22.8)	-	長石・石英・雲母	におい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面劣化により不明 内面横ナデ	覆土中	20% 新治窯

第 93 表 平安時代堅穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
24	N10c1	N - 85° - E	長方形	4.40 × 3.40	32 ~ 40	平坦	全周	-	-	3	東壁	1	人為	土師器, 須恵器	9世紀後葉	本跡→SD63・67
47	N9d6	N - 94° - E	長方形	5.29 × 4.40	38	平坦	一部	-	-	2	東壁	1	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	10世紀後半	SI76 → 本跡
76	N9e6	N - 4° - E	[方形]	(2.95 × 2.69)	(10)	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	10世紀前葉	本跡→SI47
95	N10g5	N - 89° - E	[方形・長方形]	(2.40 × 1.60)	12	平坦	-	-	-	-	東壁	-	人為	土師器, 須恵器	10世紀後半	SI68 → 本跡

## 6 中・近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡 4 棟，土坑 8 基，溝跡 3 条，道路跡 2 条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

### (1) 掘立柱建物跡

当遺跡は縄文時代から近世までの遺構が複合して同一面で確認されており，特に掘立柱建物跡の遺物は少量で，時期判断が困難であるため，位置や主軸方向，柱掘方の形状，出土遺物などから時期判断を行った。

第 15 号掘立柱建物跡 (第 182 図 PL25)

**位置** 調査区中央部の L 8 i1 区, 標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

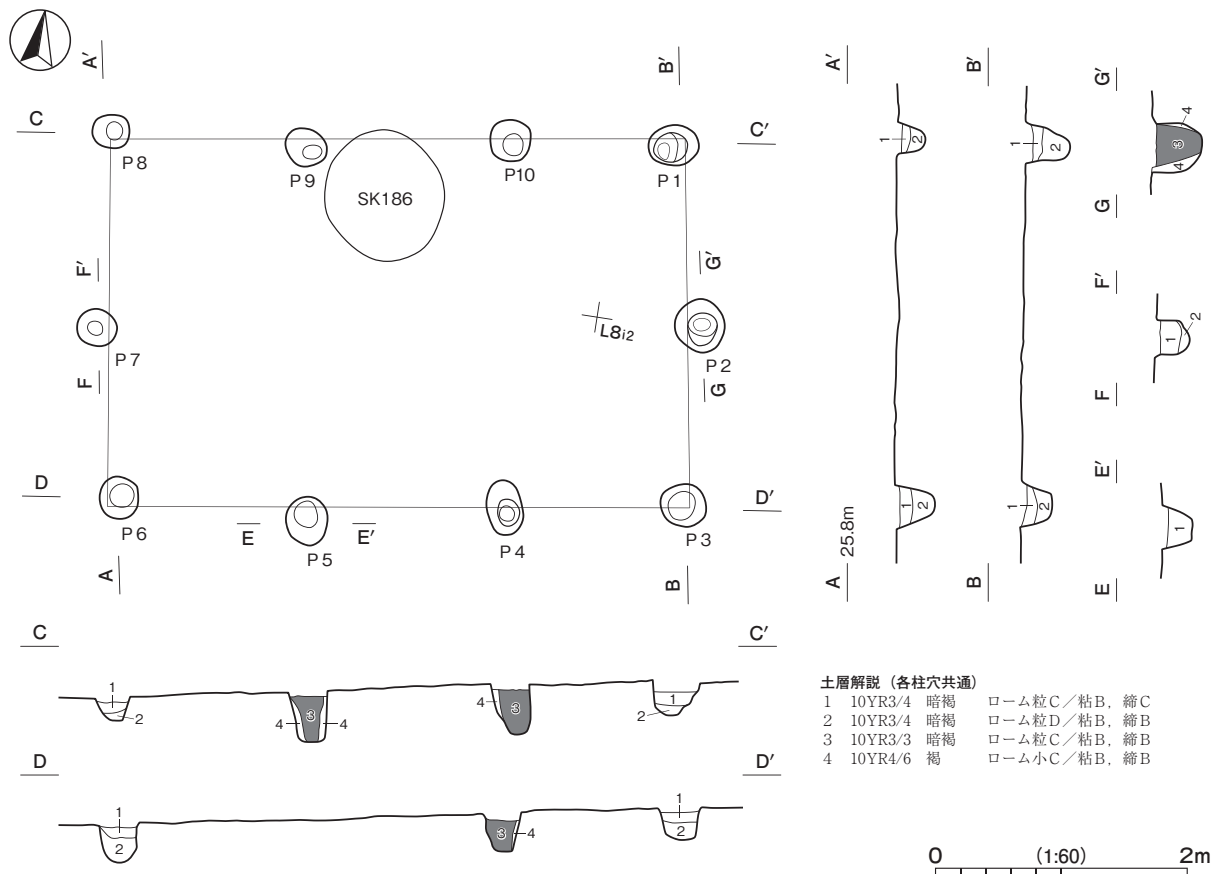
**重複関係** 本跡の範囲内に第 186 号土坑が位置しているが, 新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡で, 桁行方向が N - 80° - E の東西棟である。規模は桁行 4.40 m, 梁行 2.92 m で, 面積は 12.85 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行が 1.50 m (5 尺), 梁行が 1.40 m (5 尺) で, 柱筋は概ね揃っている。

**柱穴** 10 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で, 長径 30 ~ 45 cm, 短径 25 ~ 40 cm である。深さは 20 ~ 40 cm で, 掘方の壁はほぼ直立している。第 1・2 層は柱抜き取り後の覆土である。第 3 層は柱痕跡で, 第 4 層は掘方への埋土と考えられる。

**遺物出土状況** 土師器片 2 点 (甕), 陶器片 1 点 (碗) が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 陶器片が出土していることや掘方の規模などから, 中・近世に属すると考えられる。



第 182 図 第 15 号掘立柱建物跡実測図

第 30 号掘立柱建物跡 (第 183 図 PL26)

**位置** 調査区南部の N 9 e4 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

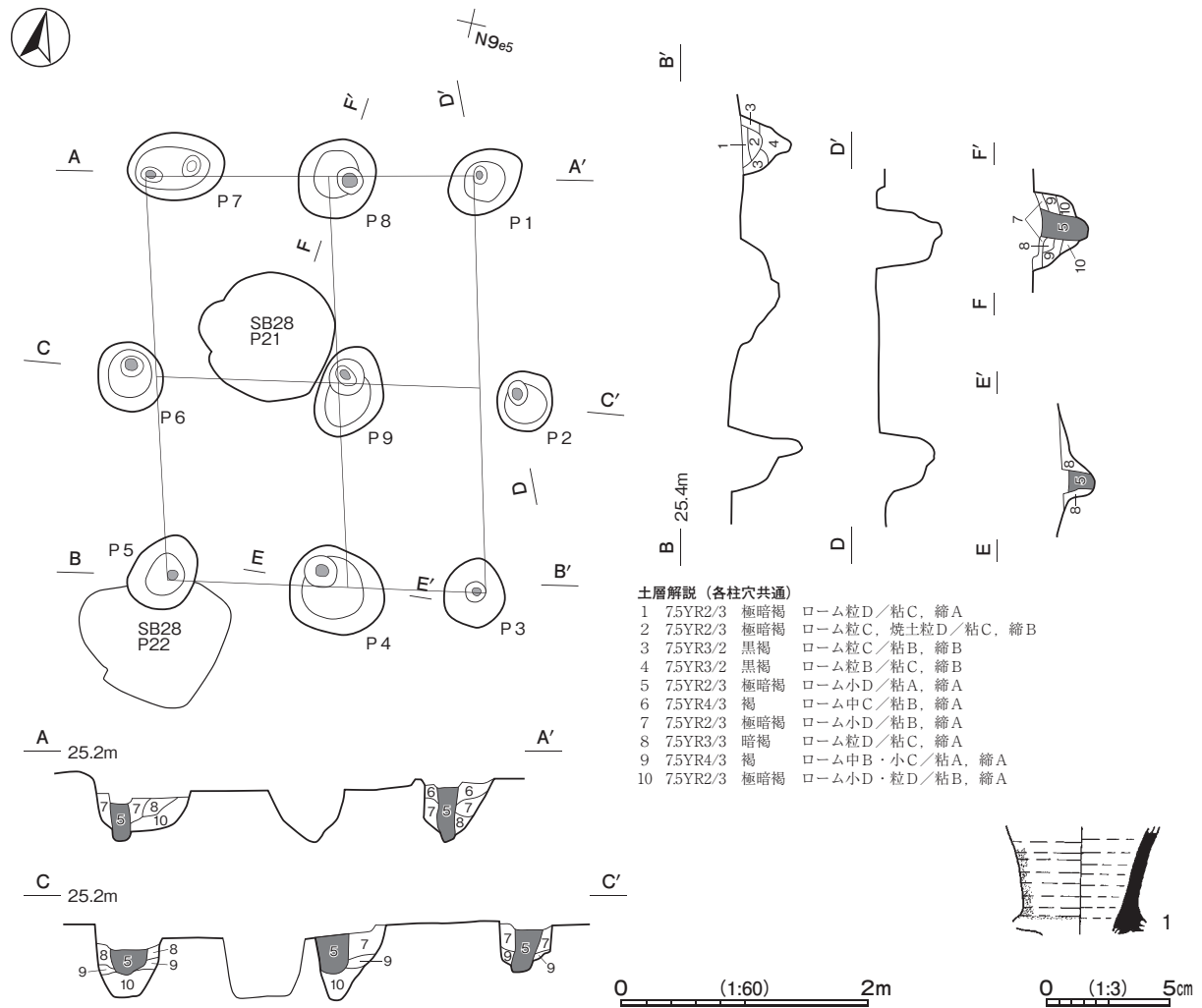
**重複関係** 第 28 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行 2 間, 梁行 2 間の総柱建物跡で, 桁行方向が N - 12° - W の南北棟である。規模は桁行 3.36 m, 梁行 2.52 m で, 面積は 8.47 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は, 桁行が北妻から 1.70 m (6 尺), 梁行が 1.20 m (4 尺) であり, P 2 と P 6 がややはずれている。全てのピットの底面で, 柱のあたりを確認した。

**柱穴** 9か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径50～80cm、短径45～70cm、深さは28～60cmである。第1～4層は柱の抜き取り痕、第5層は柱痕跡、第6～10層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片7点（坏4，甕3），須恵器片1点（長頸瓶）が出土している。1はP7の掘方埋土中から出土し、混入と考えられる。

**所見** 正方形に近く、総柱の倉庫と考えられる。時期は、掘方の規模や主軸方向から、中・近世に属すると考えられる。



第183図 第30号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第94表 第30号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	長頸瓶	-	(4.3)	-	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ 内面自然釉付着	P7埋土中	5%

**第31号掘立柱建物跡**（第184図 PL26）

**位置** 調査区南部のM8i7区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。規模は桁行7.76m、梁行4.85mで、面積は37.64㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.70m（9尺）、2.40m（8尺）、2.70m（9尺）で、梁行は2.30m（8尺）、2.50m（8尺）で、概ね揃っている。P1～P3・P6・P8・

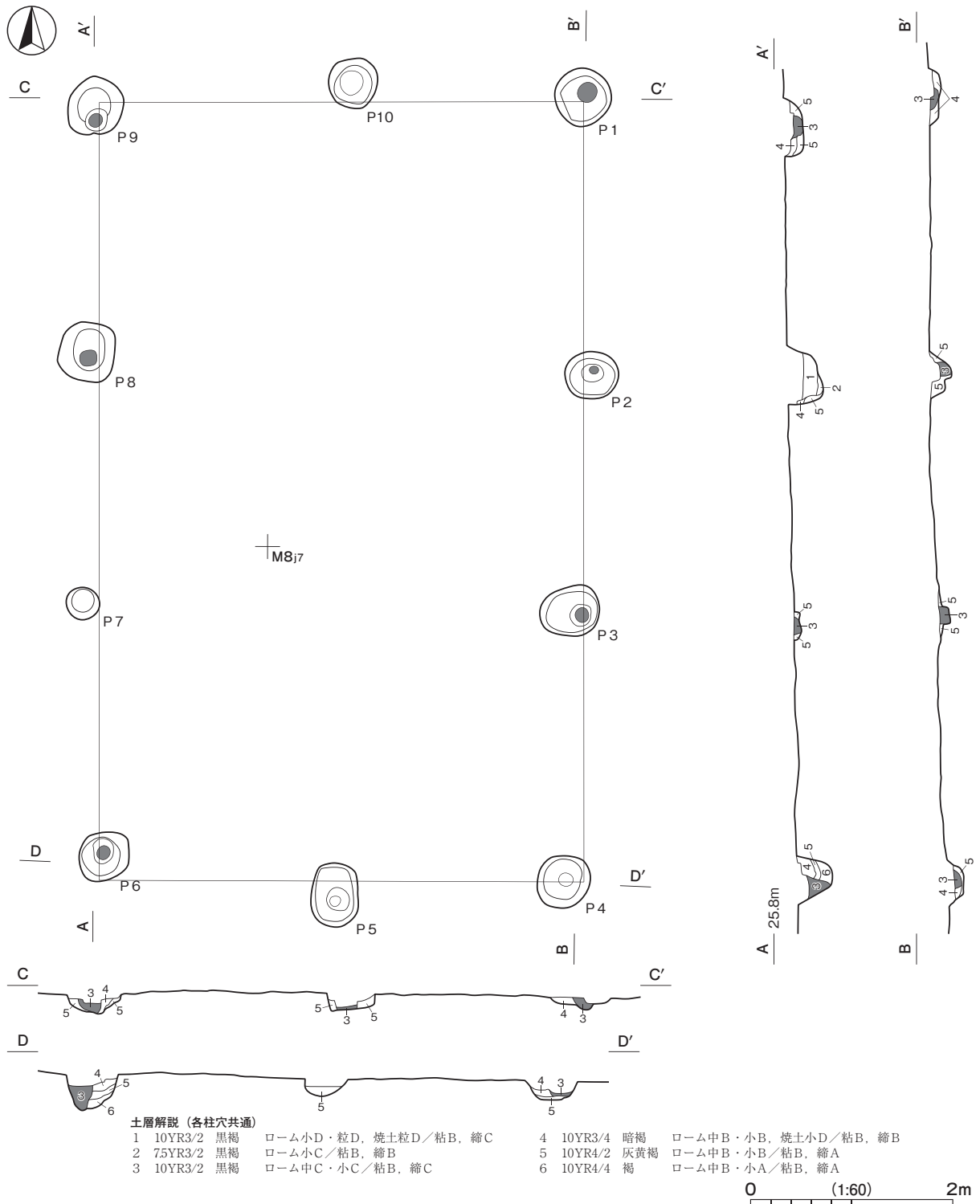


P 9の底面で、柱のあたりを確認した。

**柱穴** 10か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径35～65cm、短径30～60cmである。深さは8～36cmで、掘方の断面は直立または外傾している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～6層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

**遺物出土状況** 土師器片2点(埴, 甕)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

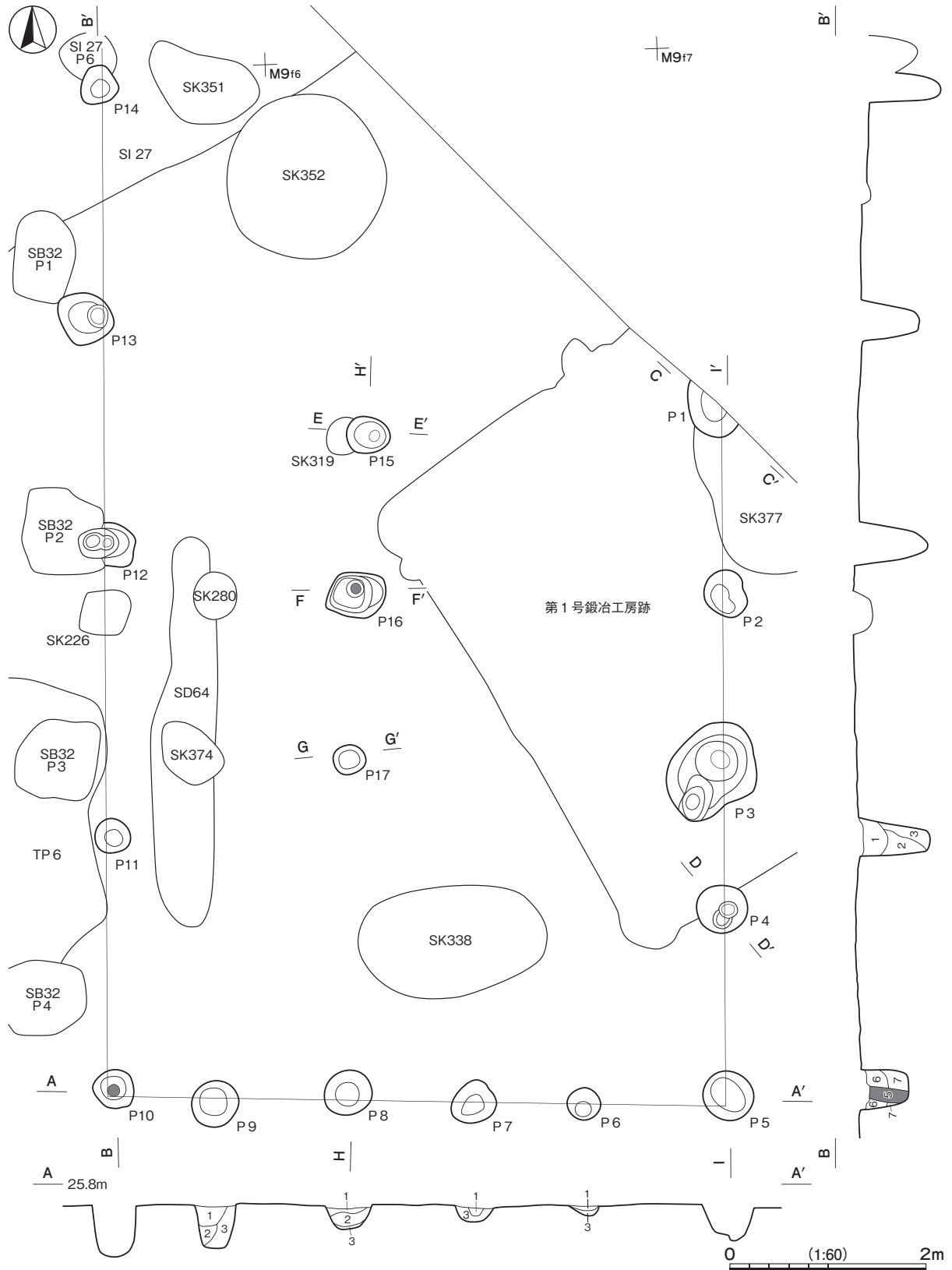
**所見** 時期は、掘方の規模や主軸方向から、中・近世に属すると考えられる。



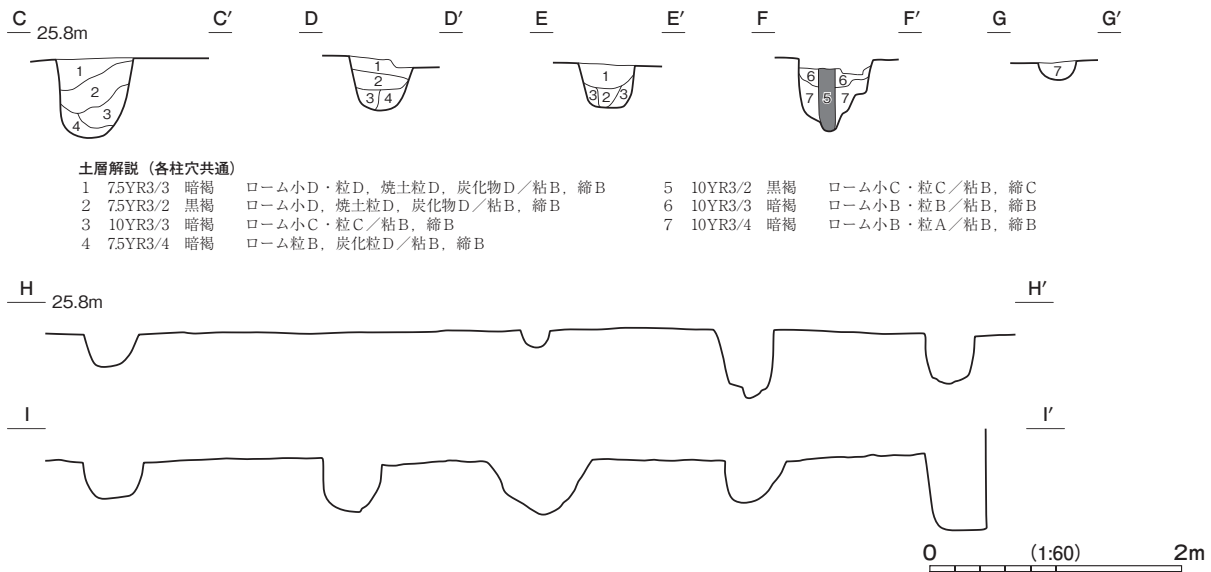
第184図 第31号掘立柱建物跡実測図

第 35 号掘立柱建物跡 (第 185・186 図)

位置 調査区南部のM9g6区, 標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第 185 図 第 35 号掘立柱建物跡実測図 (1)



第 186 図 第 35 号掘立柱建物跡実測図 (2)

**重複関係** 第 27 号竪穴建物跡, 第 32 号掘立柱建物跡, 第 1 号鍛冶工房跡, 第 319・377 号土坑を掘り込んでいる。また, 本跡の範囲内に第 226・280・338・351・352・374 号土坑, 第 64 号溝跡が位置しているが, 新旧関係は不明である。

**規模と構造** 北部が調査区域外に延びているため, 全ての柱穴を確認することができなかった。桁行は 4 間以上で, 梁行は 5 間の桁行方向が  $N-2^{\circ}-E$  の南北棟と推定できる。確認できた規模は桁行 10.16 m, 梁行 6.28 m である。P 8 から北に向かって間仕切柱穴 3 カ所が並んで配置されている。柱間寸法は, 西平側が南妻から 2.60 m (9 尺), 3.00 m (10 尺), 2.30 m (8 尺), 2.40 m (8 尺), 東平側が 1.90 m (6 尺), 1.40 m (5 尺), 1.90 m (6 尺), 1.90 m (6 尺) で, 柱筋はほぼ揃っている。南妻側が東平から 1.45 m (5 尺), 1.10 m (4 尺), 1.30 m (4 尺), 1.40 m (5 尺), 1.10 m (4 尺) である。間仕切柱穴は南妻より 3.50 m (12 尺), 1.70 m (6 尺), 1.70 m (6 尺) である。P 10, P 16 の底面で, 柱のあたりを確認した。

**柱穴** 17 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で, 長径 33~108 cm, 短径 30~90 cm, 深さは 10~85 cm である。第 1~4 層は柱抜き取り後の覆土, 第 5 層は柱痕跡, 第 6・7 層は掘方への埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片 2 点 (鉢, 甕), 土製品 1 点 (羽口), 鉄滓 2 点 (61.38 g) が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 掘方の規模や主軸方向から, 中・近世に属すると考えられる。

第 95 表 中・近世の掘立柱建物跡一覧

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁 (間)	規模		柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考	
				桁×梁 (m)	面積 (㎡)	桁間 (m)	梁間 (m)	構造	柱穴数	平 面 形				深さ (cm)
15	L 8 i 1	$N-80^{\circ}-E$	3×2	4.40×2.92	12.85	1.20~1.60	1.36~1.56	側柱	10	円形・楕円形	20~40	土師器	中・近世	SK186重複
30	N 9 e 4	$N-12^{\circ}-W$	2×2	3.36×2.52	8.47	1.52~1.84	1.12~1.40	総柱	9	円形・楕円形	28~60	土師器, 須恵器	中・近世	SB28→本跡
31	M 8 i 7	$N-2^{\circ}-E$	3×2	7.76×4.85	37.64	2.36~2.72	2.28~2.52	側柱	10	円形・楕円形	8~36	土師器	中・近世	
35	M 9 g 6	$N-2^{\circ}-E$	(4)×5	(10.16)×6.28	(63.80)	1.52~2.52	1.08~1.48	側柱	17	円形・楕円形	10~85	土師器	中・近世	SK27, SK32 第 1 号鍛冶工房跡, SK319・377→本跡 SK226・280・338・351・352・374, SK34 重複

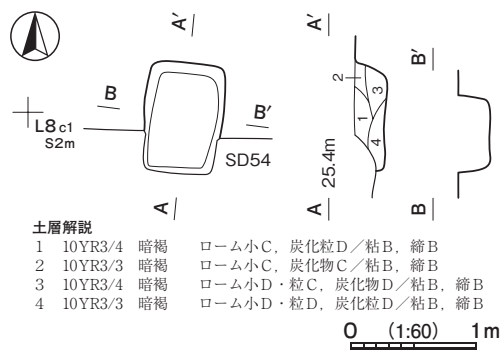
## (2) 土坑

中・近世の溝跡周辺で、形状が類似する土坑を8基を確認した。調査時に骨粉を確認していることから、墓坑の可能性が考えられる。ここではその特徴的なもの3基を取り上げて記述し、その他は図と一覧表で示すこととする。

### (ア) 特徴的な墓坑と考えられる土坑

#### 第151号土坑 (第187図 PL27)

**位置** 調査区中央部のL 8c1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



第187図 第151号土坑実測図

**重複関係** 第54号溝に掘り込まれている。

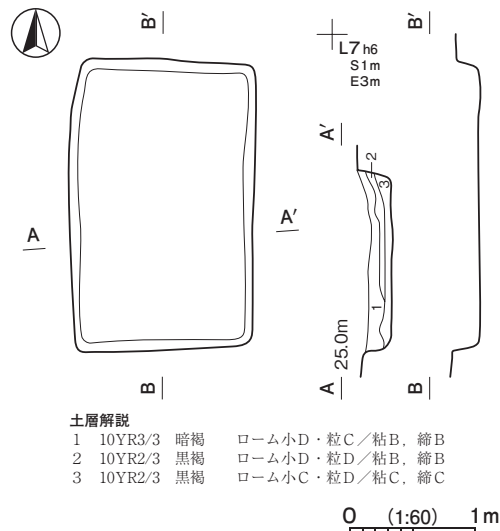
**規模と形状** 平面形は長方形で、主軸方向はN-6°-Eである。規模は、長軸0.88m、短軸0.64mで、確認面からの深さは24cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

**覆土** 4層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 底面付近から、骨粉が出土している。

**所見** 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状や第54号溝跡との重複関係から近世と考えられる。

#### 第160号土坑 (第188図)



第188図 第160号土坑実測図

**位置** 調査区中央部のL 7h6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 平面形は長方形で、主軸方向はN-0°である。規模は、長軸2.32m、短軸1.48mで、確認面からの深さは20cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

**覆土** 3層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 底面付近から、骨粉が出土している。

**所見** 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状から近世と考えられる。

#### 第178号土坑 (第189図 PL27)

**位置** 調査区中央部のL 7g7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

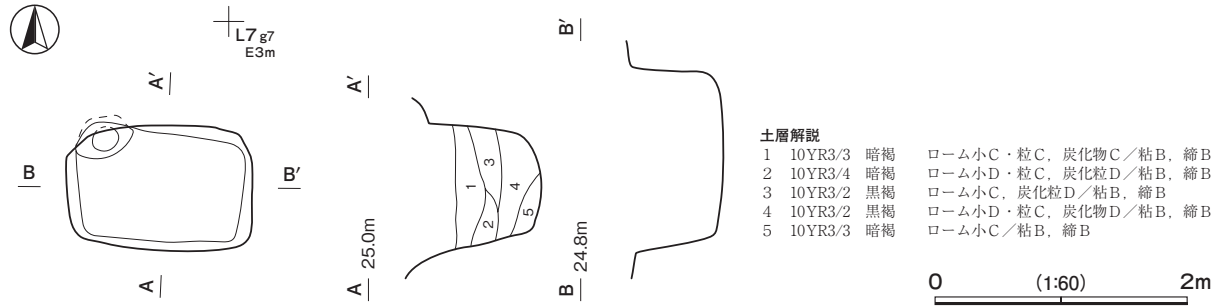
**重複関係** 第55号溝跡を掘り込んでいます。

**規模と形状** 平面形は長方形で、主軸方向はN-90°である。規模は、長軸1.47m、短軸0.98mで、確認面からの深さは76cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

**覆土** 5層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

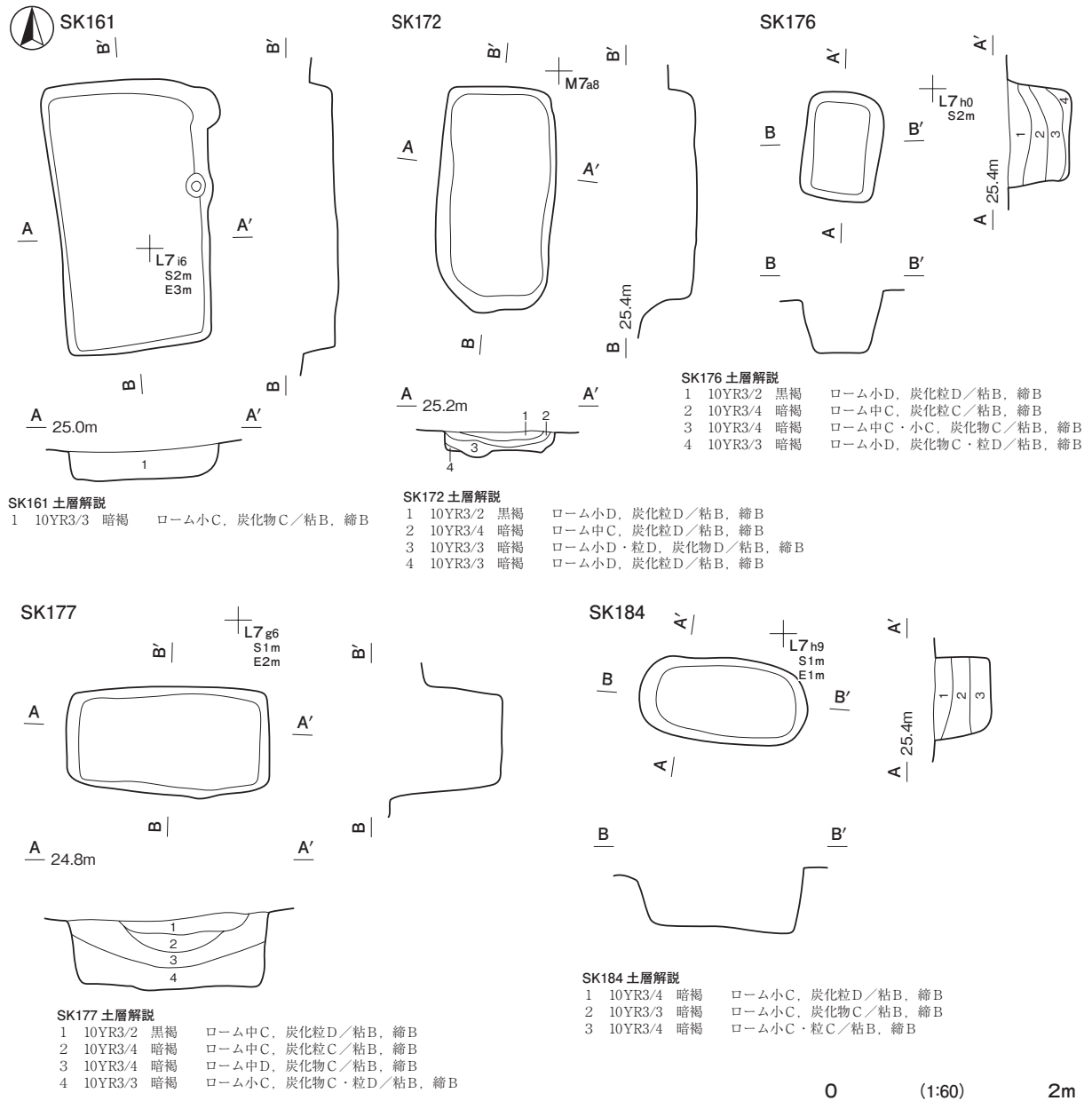
遺物出土状況 底面付近から、骨粉が出土している。

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状から近世と考えられる。



第 189 図 第 178 号土坑実測図

(イ) その他の墓坑と考えられる土坑 (第 190 図 PL27)



第 190 図 中・近世のその他の土坑実測図

第 96 表 中・近世の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
151	L 8c1	N - 6° - E	長方形	0.88 × 0.64	24	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	本跡→SD54
160	L 7h6	N - 0°	長方形	2.32 × 1.48	20	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	
161	L 7i6	N - 3° - W	長方形	2.44 × 1.44	28	直立	平坦	人為	骨粉	
172	M 7a7	N - 0°	長方形	2.12 × 1.06	44	直立	平坦	人為	骨粉	
176	L 7h9	N - 6° - E	長方形	0.96 × 0.68	56	直立	平坦	人為	骨粉	
177	L 7g6	N - 90°	長方形	1.80 × 0.98	75	直立	平坦	人為	骨粉	SD55 →本跡
178	L 7g7	N - 90°	長方形	1.47 × 0.98	76	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	SD55 →本跡
184	L 7h9	N - 85° - W	楕円形	1.52 × 1.16	56	外傾・直立	平坦	人為	骨粉	

(3) 溝跡

当遺跡の北西部には、当財団第 443 集に記載した、中世の屋敷に伴う区画溝や、江戸時代の性格不明の溝が確認されており、今回もそれらに関連すると思われる溝跡を確認した。

第 54 号溝跡 (第 191 図 PL26)

**位置** 調査区中央部の L 7c0 区～L 8c1 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

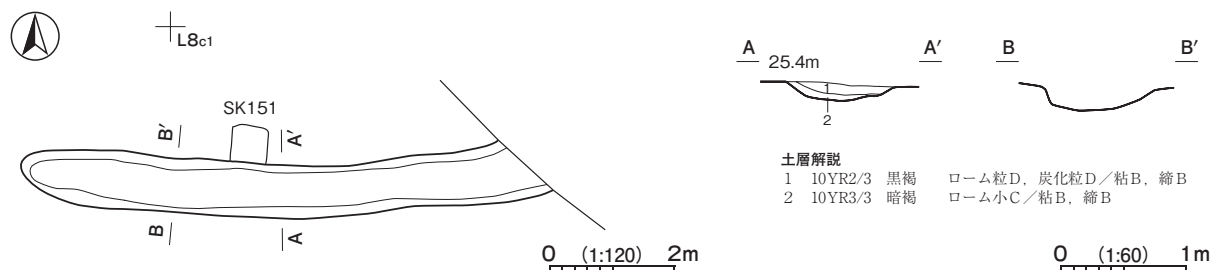
**重複関係** 第 151 号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** L 7c0 区から東 (N - 91° - W) へ直線的に L 8c2 区まで伸び、調査区域外へ至っている。確認できた長さは 8.4 m で、上幅 78 cm ～ 100 cm、下幅 44 cm ～ 64 cm、深さ 8 ～ 18 cm である。断面形は皿状である。

**覆土** 2 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 2 点 (坏, 甕), 須恵器片 1 点 (甕), 土師質土器片 1 点 (焙烙) が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は、重複関係や出土土器から、江戸時代と考えられる。



第 191 図 第 54 号溝跡実測図

第 55 号溝跡 (第 192 図 PL26)

**位置** 調査区中央部の L 7g4 区～M 7b8 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 56 号溝跡を掘り込み、第 177・178 号土坑に掘り込まれている。

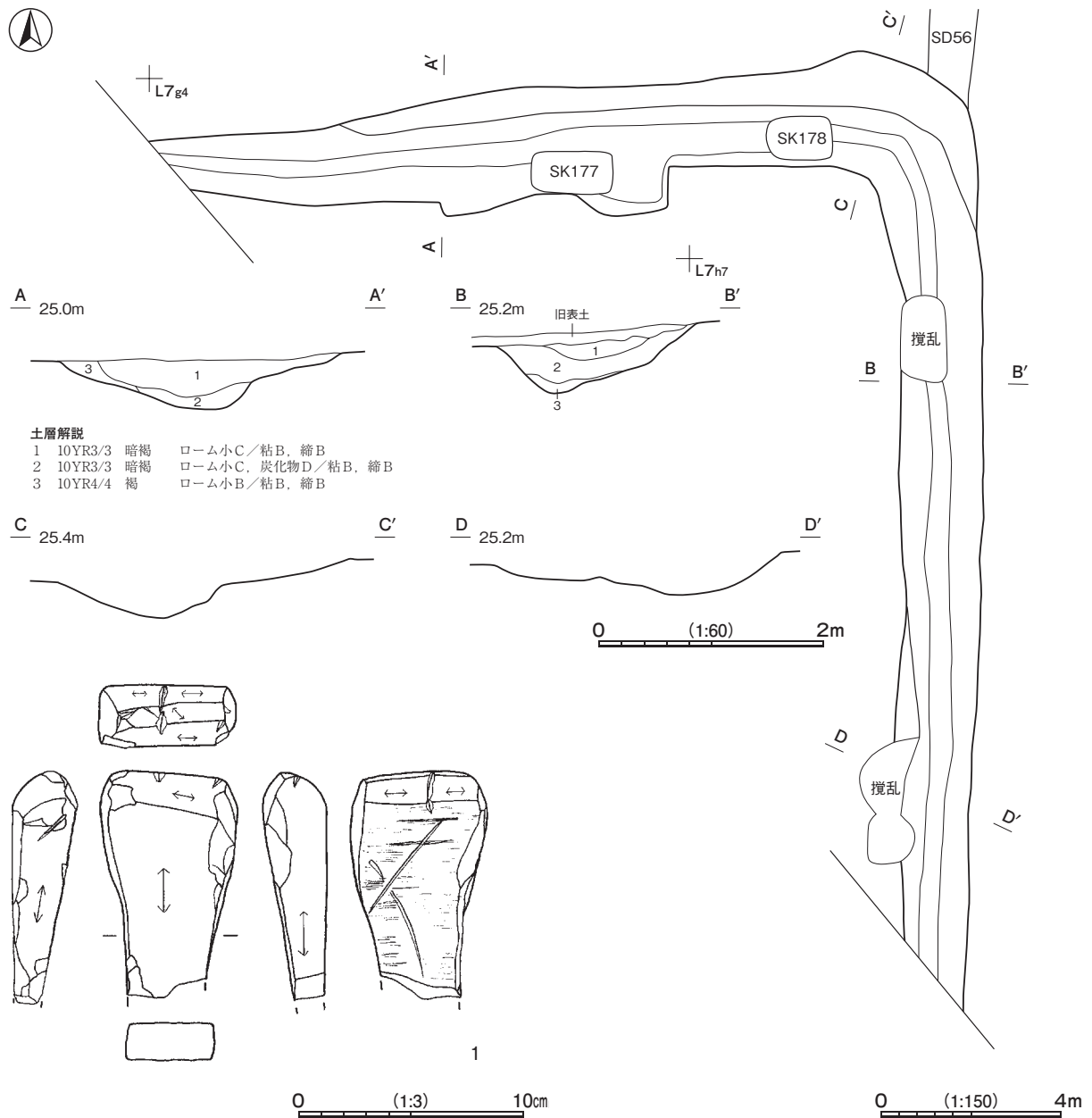
**規模と形状** M 7b8 から北方向 (N - 2° - E) へ直線的に伸び、L 7g8 から西方向 (N - 93° - W) へ L 字状に屈曲し、直線的に L 7g4 まで延びている。溝の先はいずれも調査区域外へ至っている。確認できた

長さは 29 m で、上幅 72 cm ~ 268 cm、下幅 24 cm ~ 170 cm、深さ 10 ~ 46 cm である。断面形は V 字状である。

**覆土** 3 層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 7 点 (鉢 1, 甕 6), 須恵器片 2 点 (甕), 陶器片 3 点 (碗), 磁器片 3 点 (碗), 石器 1 点 (砥石), 鉄滓 1 点 (22.37 g), 瓦片 3 点 (棧瓦) が出土している。1 は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、幅や深さの規模、断面の形状が当財団第 443 集で報告した溝跡と類似していることから、16 世紀代に造作され、19 世紀代に埋め戻された可能性が高い。



第 192 図 第 55 号溝跡・出土遺物実測図

第 97 表 第 55 号溝跡出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	砥石	(10.1)	6.1	2.8	(212.35)	砂岩	砥面 5 面	覆土中	PL47

第56号溝跡 (第193図 PL26)

**位置** 調査区中央部のL7c8区～L7g8区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

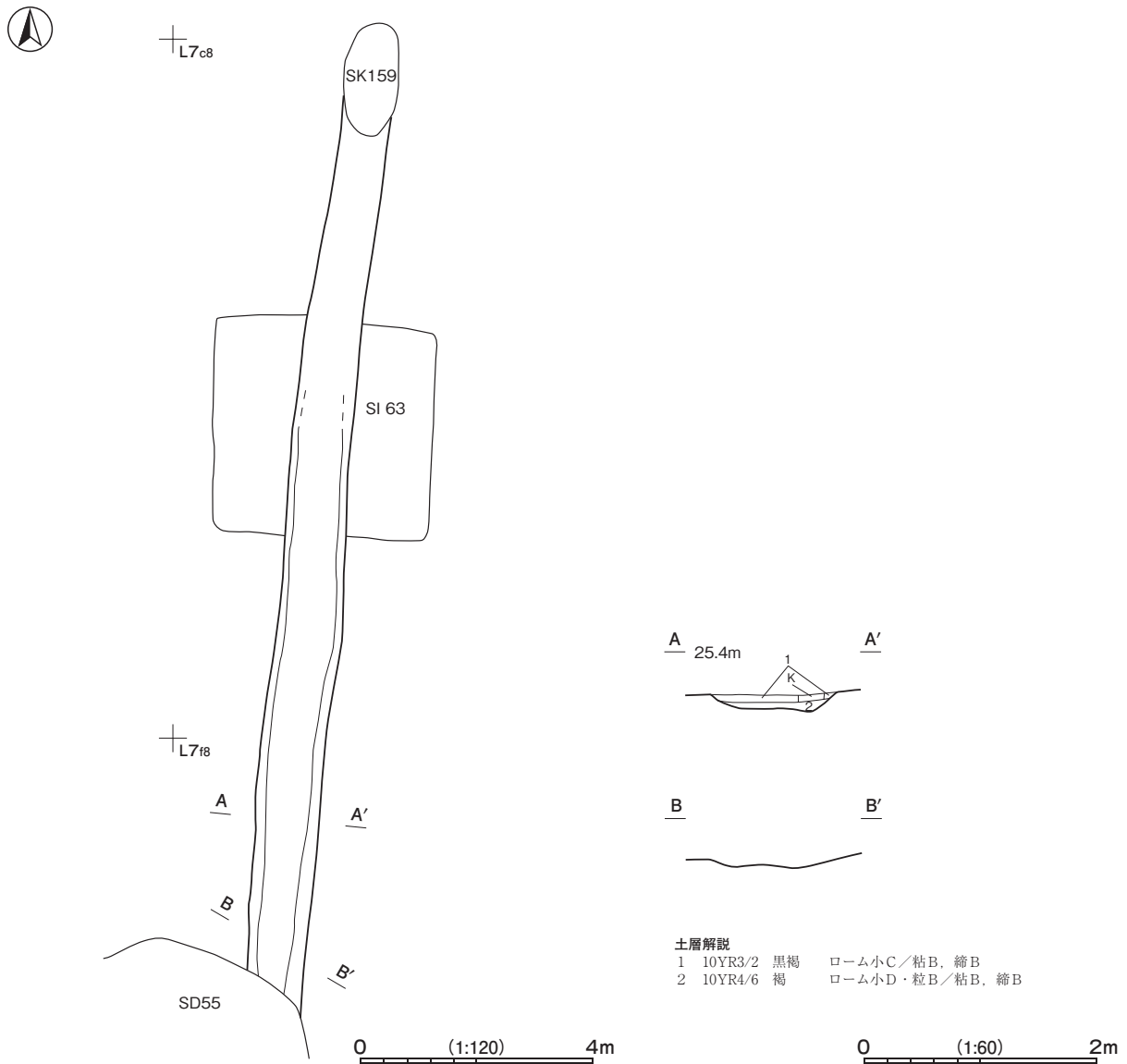
**重複関係** 第63号竪穴建物跡を掘り込み, 第159号土坑, 第55号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** L7c8区から南(N-175°-W)へ直線的にL7g8区まで伸びている。確認できた長さは15mで, 上幅97cm～113cm, 下幅44cm～84cm, 深さ7～12cmである。断面形は皿状である。

**覆土** 2層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片4点(坏1, 甕3), 須恵器片3点(坏1, 甕2), 陶器片2点(碗), 磁器片2点(碗), 瓦片5点(棧瓦)が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

**所見** 時期は, 重複関係から第55号溝跡同様16世紀代に造作されて, 19世紀代までに埋め戻されたものと考えられる。



第193図 第56号溝跡実測図



第 98 表 中・近世の溝跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
54	L7c0~L8c1	N-91°-W	直線状	8.4	78~100	44~64	8~18	皿状	緩斜	自然	土師器, 須恵器, 土師質土器	SK151 → 本跡
55	M7b8~L7g4	N-2°-E N-93°-W	L字状	29.0	72~268	24~170	10~46	V字状	緩斜	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SD56 → 本跡 → SK177・178
56	L7c8~L7g8	N-175°-W	直線状	15.0	97~113	44~84	7~12	皿状	緩斜外傾	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SI63 → 本跡 → SK159, SD55

(4) 道路跡

第 3 号道路跡 (第 194 図 PL27)

**位置** 調査区北部の K6h5~K8g4区, 標高24~25mほどの平坦な台地上に位置している。

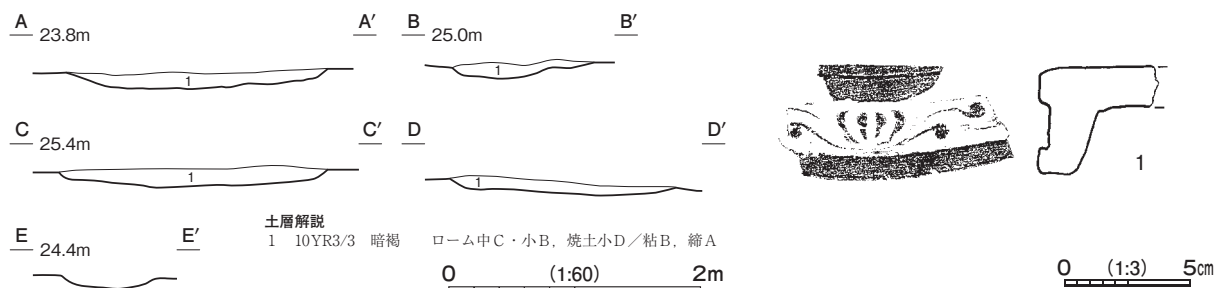
**重複関係** 第 4 号道路跡の上部に構築され, 第 380 号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** K6h5区から南東方向(N-103°-E)へ直線状に延び, K7j4区付近で緩やかに曲がりながら北東方向(N-71°-E)のK8g4区へ曲線状に延びて調査区域外へ至っている。確認できた長さは 77.5 mで, 上幅 0.64~3.58 m, 下幅 0.33~2.20 m, 深さ 10~28 cmである。断続的ではあるが, 硬化面が確認できた。路面の幅は 0.33~1.90 mである。

**覆土** 単一層の路面で, よく踏み固められている。

**遺物出土状況** 土師器片 3 点 (甕), 須恵器片 2 点 (坏), 土師質土器片 2 点 (播鉢, 壺), 陶器片 7 点 (碗), 磁器片 2 点 (碗), 瓦片 1 点 (軒平瓦) が出土している。1 は覆土中から出土している。

**所見** 時期は, 出土遺物から 18 世紀後半から 19 世紀代と考えられる。



第 194 図 第 3 号道路跡・出土遺物実測図

第 99 表 第 3 号道路跡出土遺物一覧

番号	器種	全長	全幅	巴部				軒平部				胎土・色調	文様・特徴	出土位置	備考	
				瓦当径	文様区径	珠径	珠数	文様区幅	文様区厚	上周縁幅	下周縁幅					瓦当厚
1	軒平瓦	(4.7)	(9.0)	-	-	-	-	(9.0)	1.7	1.0	0.9	2.3	長石・雲母 黄灰	唐草文「江戸式」模倣 表裏面雲母	覆土中	PL48

第 4 号道路跡 (第 195 図 PL27)

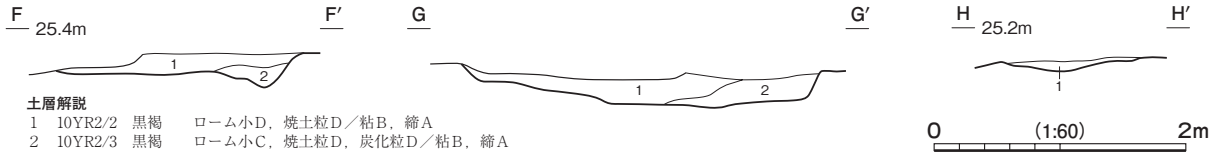
**位置** 調査区中央部の K8g4~K7j9区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第 379 号土坑に掘り込まれ, 第 3 号道路が上部に構築されている。

**規模と形状** K8g4区から南西方向(N-109°-W)へ直線状に延び, K7h9区付近で曲がり南方向(N-168°-W)のK7j9区へ曲線状に延びて調査区域外へ至っている。確認できた長さは 26.0 mで, 上幅 1.00~2.80 m, 下幅 0.90~2.60 m, 深さ 10~26 cmである。直線的に硬化面が確認できた。路面の幅は 0.90~2.60 mである。

**覆土** 2層に分層できる。底面が硬化している。

**所見** 時期は、出土遺物はないが第3号道路跡と重複する部分が多く、18世紀から19世紀代と考えたい。既存の溝の底を歩いたとみられ、調査区域内の溝につながっていた可能性が高い。



第195図 第4号道路跡実測図

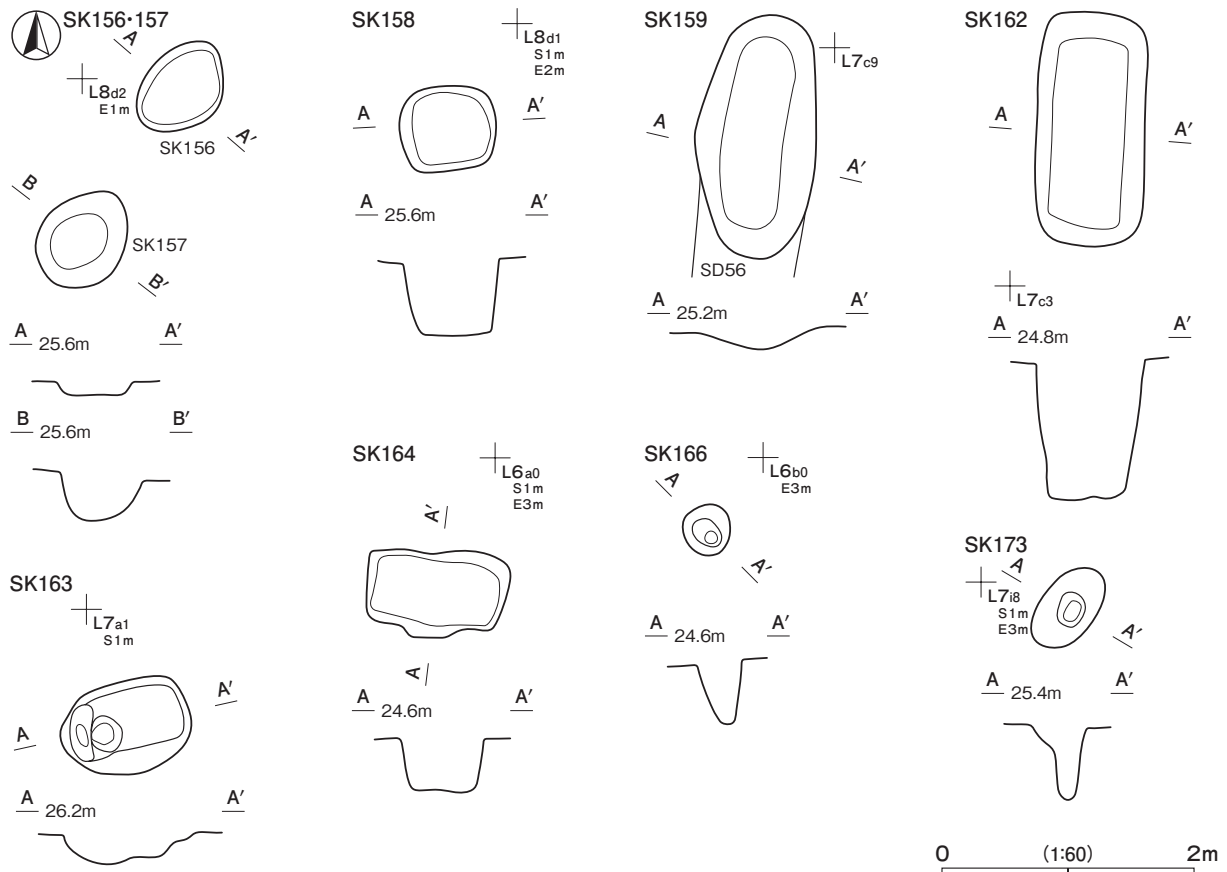
第100表 近世の道路跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
3	K 6 h5 ~ K 8 g4	N - 103° - E N - 71° - E	直線状 曲線状	(77.5)	0.64 ~ 3.58	0.33 ~ 2.20	10 ~ 28	皿状	緩斜	人為	陶器, 磁器, 瓦	SF 4 → 本跡 → SK380
4	K 8 g4 ~ K 7 j9	N - 109° - W N - 168° - W	直線状	(26.0)	1.00 ~ 2.80	0.90 ~ 2.60	10 ~ 26	皿状	外傾	人為		本跡 → SK379, SF 3

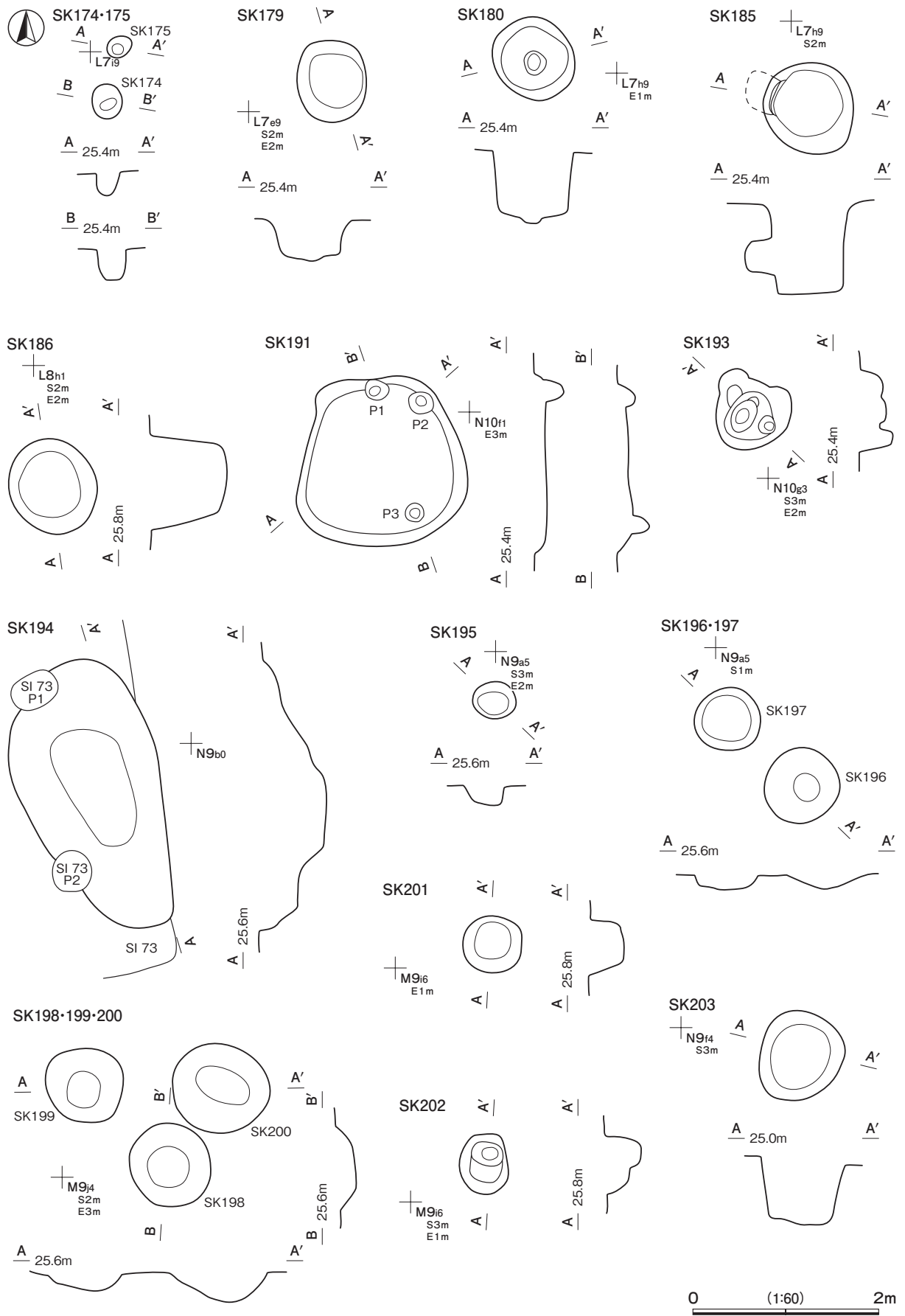
## 7 時期不明の遺構

時期が明確にできなかった土坑109基、溝跡9条の遺構について記述する。

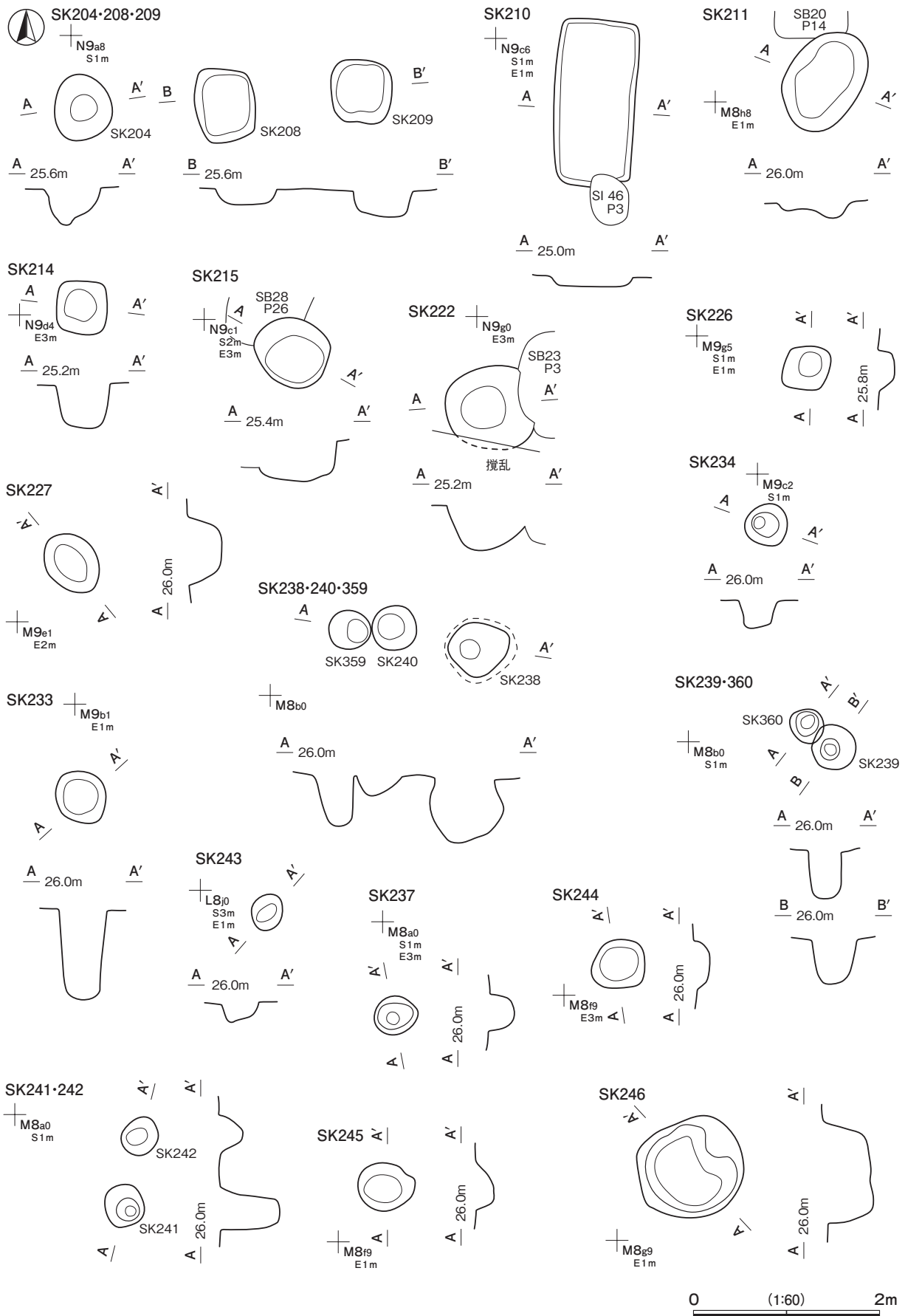
### (1) 土坑 (第196 ~ 201 図)



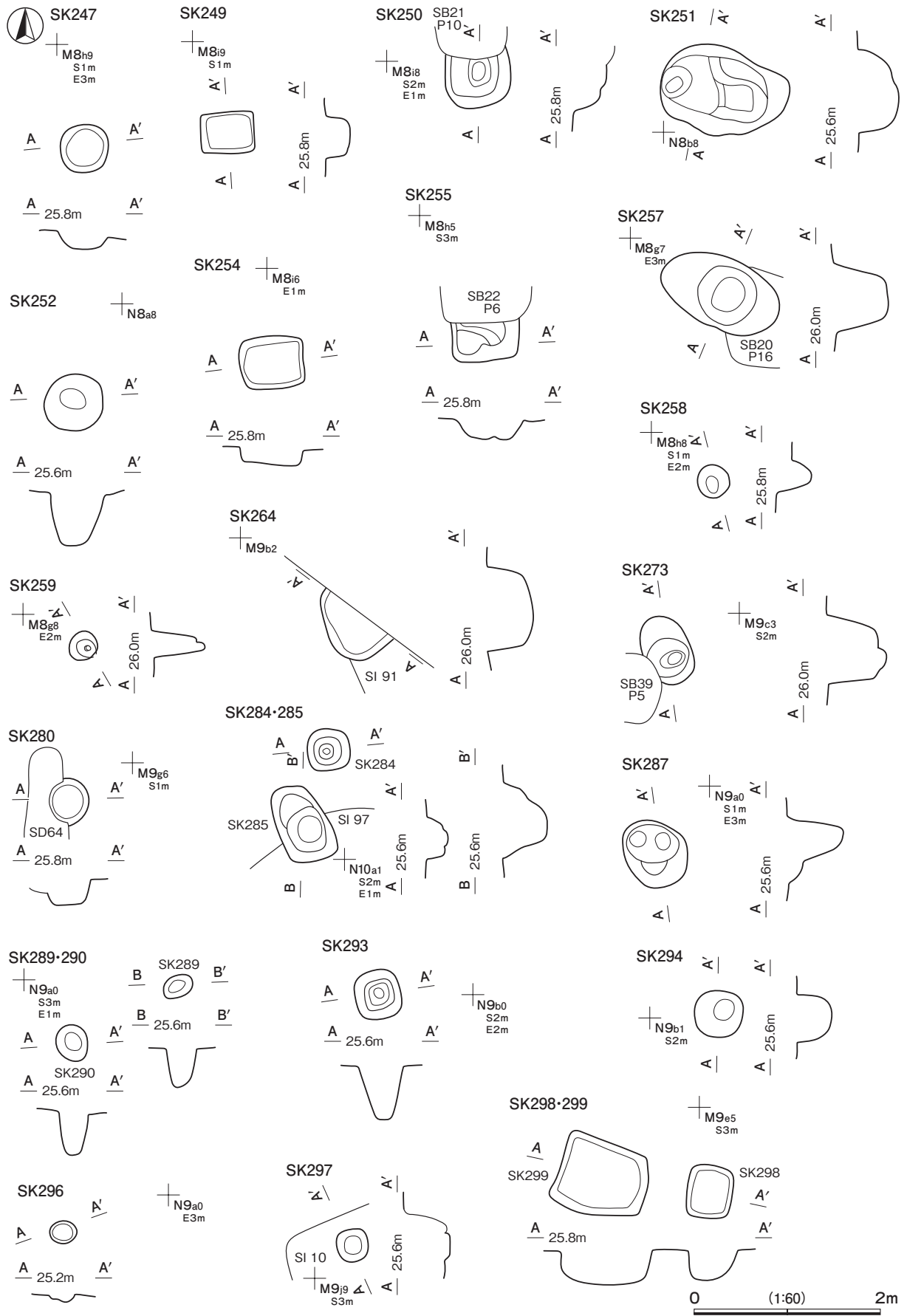
第196図 時期不明の土坑実測図(1)



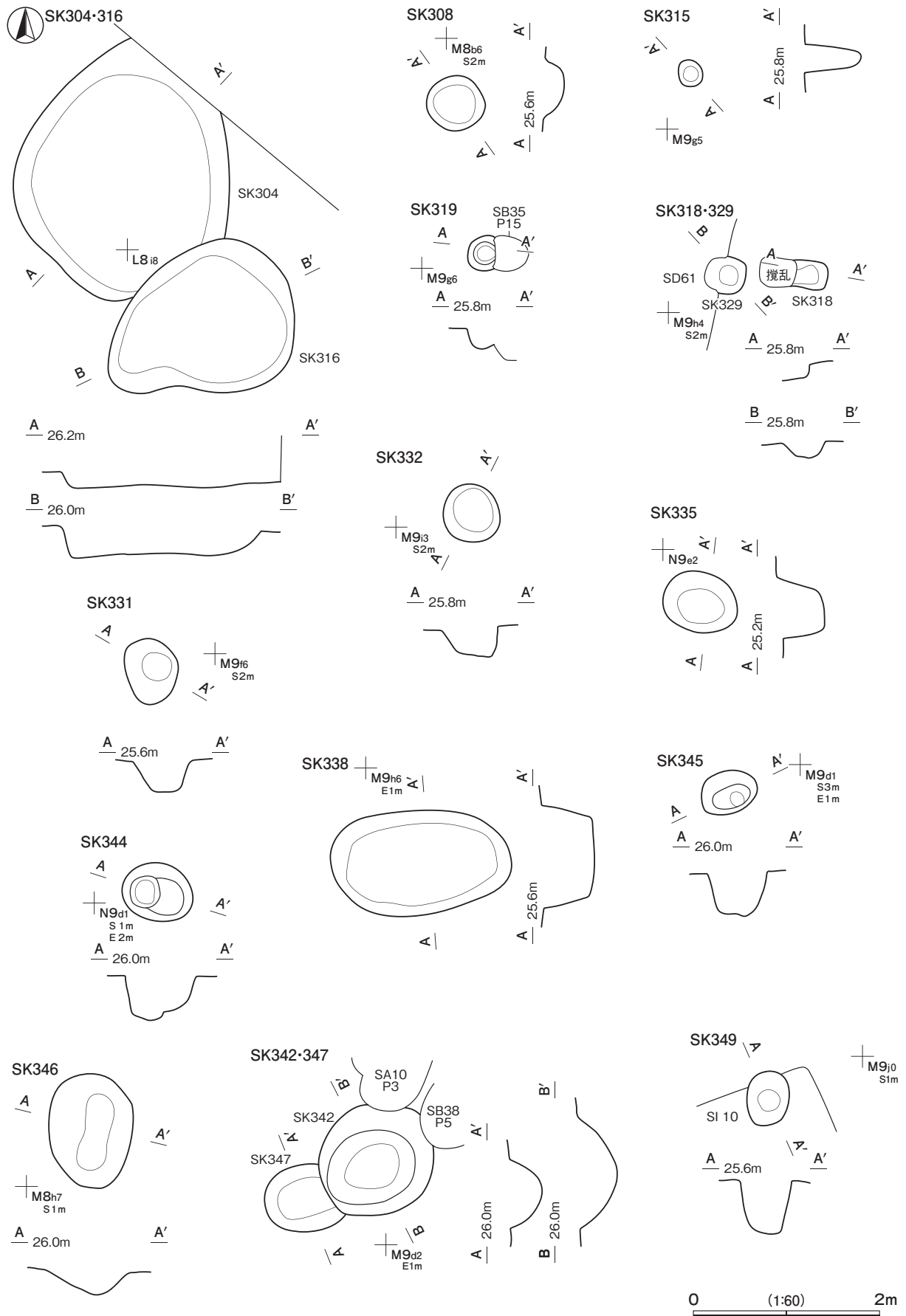
第 197 図 時期不明の土坑実測図 (2)



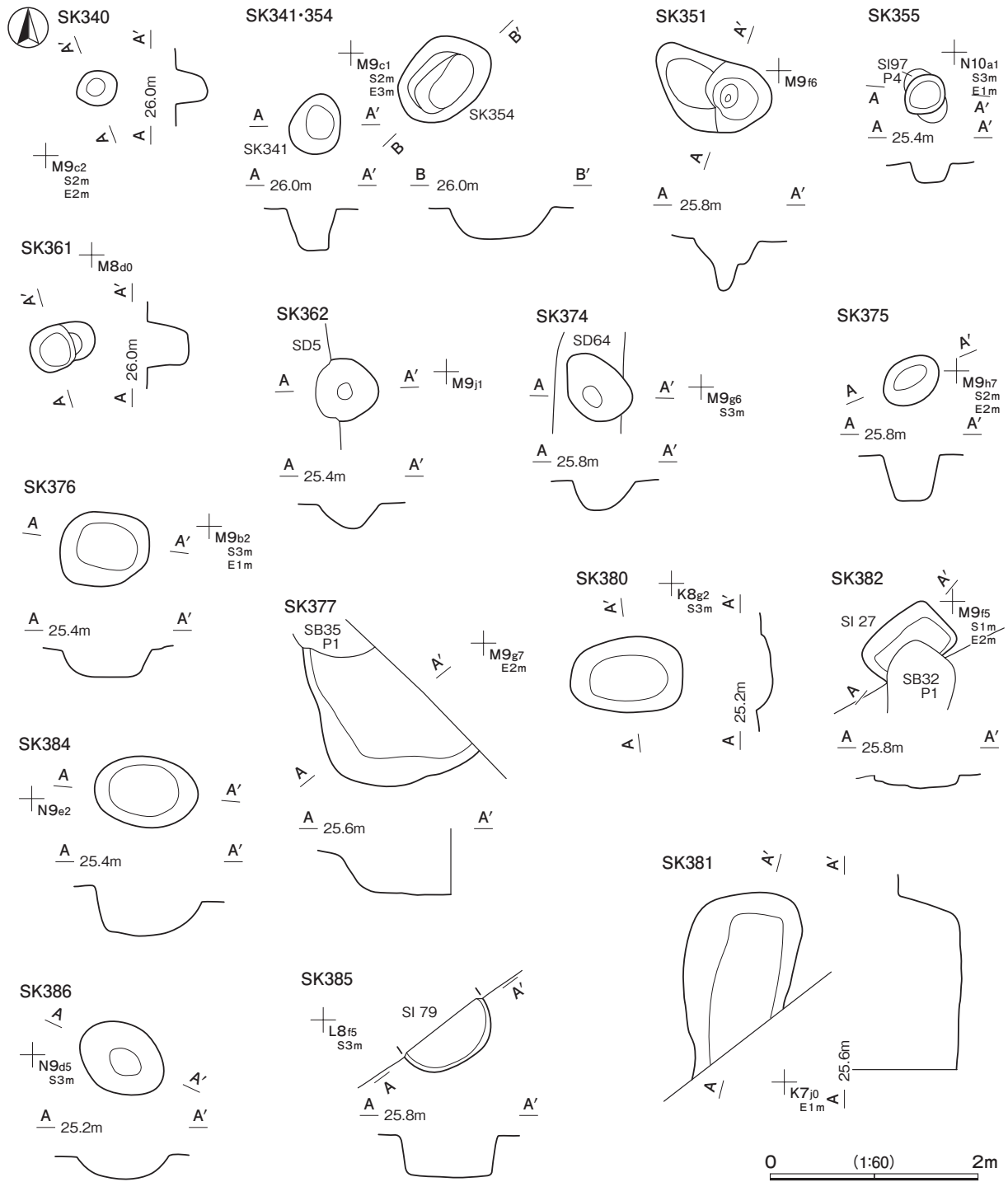
第 198 図 時期不明の土坑実測図 (3)



第 199 図 時期不明の土坑実測図 (4)



第 200 図 時期不明の土坑実測図 (5)



第 201 図 時期不明の土坑実測図 (6)

第 101 表 時期不明の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
156	L 8 d2	N - 44° - E	楕円形	0.84 × 0.60	12	外傾	平坦	人為		
157	L 8 d2	N - 38° - E	楕円形	0.84 × 0.68	36	外傾 ほぼ直立	皿状	人為		
158	L 8 d1	N - 86° - E	隅丸長方形	0.76 × 0.68	60	直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器, 陶器	
159	L 7 c8	N - 6° - E	楕円形	1.92 × 0.96	20	緩斜	皿状	人為	土師器, 須恵器	SD56 → 本跡
162	L 7 b3	N - 3° - E	隅丸長方形	1.84 × 0.87	112	直立	平坦	人為		

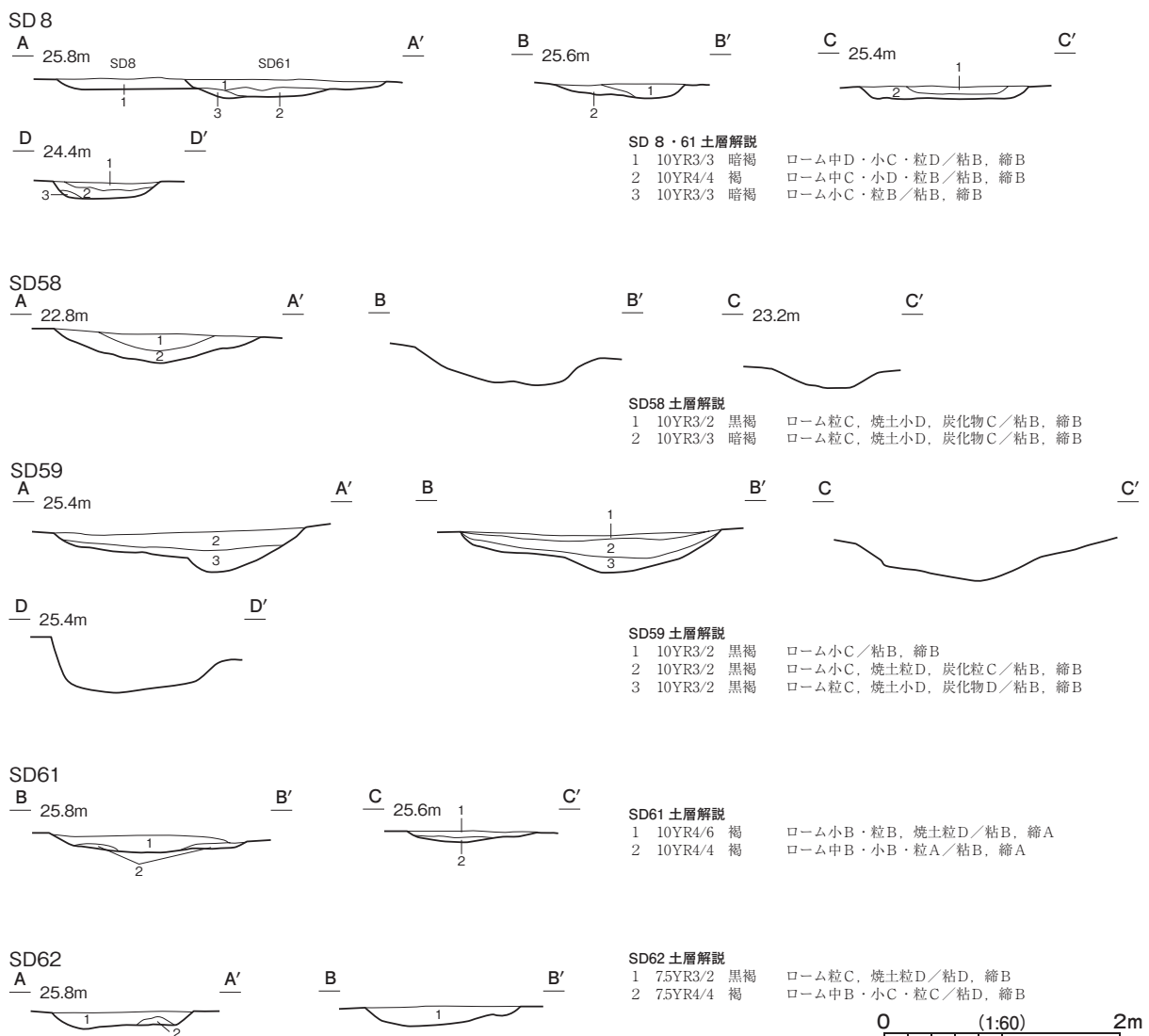
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
163	L 7 a1	N - 77° - E	隅丸長方形	1.04 × 0.72	24	緩斜	有段	人為		
164	L 6 a0	N - 84° - W	長方形	1.12 × 0.68	44	直立	平坦	人為		
166	L 6 b0	-	円形	0.40 × 0.39	50	直立	U字状	人為		
173	L 7 i8	N - 40° - E	楕円形	0.72 × 0.44	58	直立	U字状	人為	土師器	
174	L 7 i9	N - 20° - W	楕円形	0.36 × 0.32	32	直立	U字状	人為		
175	L 7 h9	N - 56° - E	楕円形	0.28 × 0.22	24	直立	U字状	人為		
179	L 7 g8	N - 0°	楕円形	0.88 × 0.74	44	ほぼ直立	凹凸	人為	縄文土器, 弥生土器, 陶器	
180	L 7 g9	N - 18° - W	楕円形	0.92 × 0.84	78	直立	凹凸	人為	縄文土器, 土師器, 陶器	
185	L 7 h9	-	円形	1.04 × 0.96	98	直立	平坦	人為		
186	L 8 h1	N - 8° - W	楕円形	1.04 × 0.92	80	直立	平坦	人為		SB15 と重複
191	N 0 f1	-	不整円形	2.00 × 1.96	30	外傾緩斜	平坦	人為	縄文土器, 土師器, 須恵器, 鉄滓	
193	N 0 g3	-	不整円形	0.88 × 0.86	36	外傾直立	凹凸	人為		
194	N 9 b9	N - 21° - W	楕円形	2.96 × 1.58	76	外傾緩斜	平坦	人為	縄文土器, 土師器, 鉄滓	SI73 →本跡
195	N 9 a5	N - 85° - W	楕円形	0.47 × 0.40	20	直立外傾	平坦	人為		
196	N 9 a5	-	円形	0.82 × 0.80	16	緩斜	平坦	人為	土師器, 須恵器	
197	N 9 a5	-	円形	0.72 × 0.68	15	緩斜外傾	皿状	人為		
198	M 9 j5	-	円形	0.92 × 0.84	19	緩斜外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	
199	M 9 j4	-	円形	0.88 × 0.84	18	緩斜	皿状	人為	鉄滓	
200	M 9 j5	-	円形	1.06 × 0.96	32	緩斜	皿状	人為	土師器	
201	M 9 h6	-	円形	0.67 × 0.66	38	外傾	平坦	人為		
202	M 9 i6	N - 2° - E	楕円形	0.64 × 0.52	39	緩斜外傾	有段	人為	土師器	
203	N 9 f4	N - 29° - E	楕円形	1.00 × 0.86	64	直立	平坦	人為		
204	N 9 a8	N - 3° - W	楕円形	0.72 × 0.61	38	外傾緩斜	有段	人為	縄文土器, 須恵器, 鉄滓	
208	N 9 a8	N - 5° - W	隅丸長方形	0.82 × 0.66	12	外傾緩斜	平坦	人為		
209	N 9 a8	N - 2° - E	隅丸長方形	0.68 × 0.65	24	直立	平坦	人為		
210	N 9 c6	N - 4° - E	長方形	1.80 × 0.84	12	外傾	平坦	人為	縄文土器, 須恵器	本跡 → SI46
211	M 8 g8	N - 28° - E	楕円形	1.36 × 0.80	16	緩斜	凹凸	人為	土師器	SB20 →本跡
214	N 9 c4	N - 6° - E	隅丸長方形	0.58 × 0.56	46	直立	U字状	人為		
215	N 9 c2	N - 61° - W	楕円形	0.88 × 0.72	72	直立	皿状	人為		SB28 →本跡
222	N 9 g0	N - 33° - E	[円形・楕円形]	0.94 ×(0.80)	44	外傾	皿状	人為		SI69 →本跡 → SB23
226	M 9 g5	N - 9° - E	方形	0.48 × 0.48	16	外傾	皿状	人為	土師器	
227	M 9 d1	N - 40° - W	楕円形	0.71 × 0.54	36	外傾	皿状	人為		
233	M 9 b1	N - 38° - W	楕円形	0.64 × 0.56	96	直立	U字状	人為		
234	M 9 c2	-	円形	0.45 × 0.44	30	外傾直立	皿状	人為	縄文土器	
237	M 8 a0	N - 80° - E	楕円形	0.48 × 0.41	68	外傾ほぼ直立	浅いU字状	人為		
238	M 8 a0	N - 76° - E	不整楕円形	0.67 × 0.60	68	内彎	凹凸	人為		
239	M 8 b0	N - 46° - W	[楕円形]	(0.48) × 0.42	48	直立	U字状	人為	土師器	SK360 と重複
240	M 8 a0	-	円形	0.48 × 0.47	24	外傾	皿状	人為		
241	M 8 a0	N - 13° - E	隅丸長方形	0.48 × 0.44	64	直立	U字状	人為	縄文土器, 土師器	
242	M 8 a0	N - 25° - E	楕円形	0.42 × 0.32	24	外傾	浅いU字状	人為		
243	L 8 j0	N - 26° - E	楕円形	0.40 × 0.30	21	外傾	浅いU字状	人為		
244	M 8 e9	-	不整円形	0.60 × 0.56	16	緩斜外傾	皿状	人為		
245	M 8 e9	N - 77° - E	楕円形	0.60 × 0.52	20	外傾緩斜	皿状	人為	縄文土器	
246	M 8 f9	-	不整円形	1.20 × 1.10	48	ほぼ直立	平坦	人為		
247	M 8 h9	-	円形	0.52 × 0.52	16	緩斜外傾	皿状	人為	土師器	
249	M 8 i9	N - 83° - E	長方形	0.58 × 0.45	27	直立	平坦	人為		



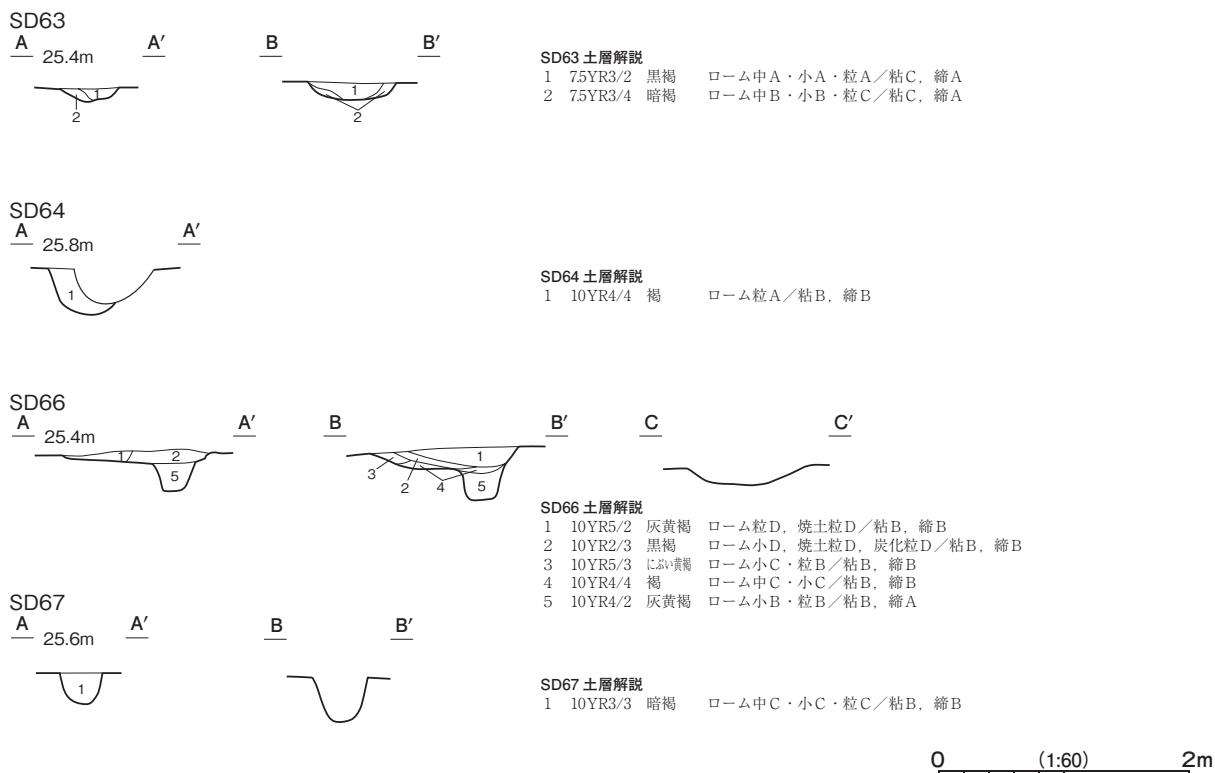
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
250	M 8 i 8	N - 86° - E	[方形・長方形]	0.71 × (0.54)	34	外傾	有段	人為		本跡→SB21
251	N 8 a 8	N - 75° - W	楕円形	1.38 × 0.97	42	外傾直立	凹凸	人為		
252	N 8 a 7	-	円形	0.65 × 0.61	56	外傾直立	皿状	人為	縄文土器, 土師器	
254	M 8 i 6	N - 83° - E	長方形	0.69 × 0.55	17	直立	平坦	人為		
255	M 8 i 5	N - 86° - E	[方形・長方形]	0.73 × (0.41)	22	外傾	凹凸	人為		本跡→SB22
257	M 8 g 7	N - 63° - W	楕円形	0.76 × 0.76	56	直立	皿状	人為		SB20 → 本跡
258	M 8 h 8	-	円形	0.36 × 0.35	36	ほぼ直立外傾	浅いU字状	人為	土師器	
259	M 8 g 8	-	円形	0.32 × 0.30	56	直立	有段	人為	土師器	
264	M 9 b 2	N - 25° - W	[円形・楕円形]	(0.83 × 0.48)	50	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 鉄滓	SI91 → 本跡
273	M 9 c 2	N - 33° - W	楕円形	0.74 × 0.46	50	ほぼ直立	U字状	人為	縄文土器	本跡→SB39
280	M 9 g 5	-	[円形]	0.48 × (0.44)	24	外傾	平坦	人為		本跡→SD64
284	N 10 a 1	N - 0°	方形	0.46 × 0.46	24	外傾	有段	人為		
285	N 10 a 1	N - 30° - W	隅丸長方形	0.86 × 0.56	48	外傾	有段	人為	縄文土器	SI97 → 本跡
287	N 9 a 0	N - 28° - W	楕円形	0.76 × 0.64	60	直立緩斜	有段	人為	土師器	
289	N 9 a 0	N - 53° - E	楕円形	0.32 × 0.24	42	直立	U字状	人為		
290	N 9 a 0	N - 20° - W	楕円形	0.40 × 0.32	48	直立	U字状	人為		
293	N 9 b 0	N - 13° - W	隅丸方形	0.54 × 0.50	56	ほぼ直立	U字状	人為	縄文土器, 土師器	
294	N 10 b 1	-	円形	0.52 × 0.48	40	外傾	浅いU字状	人為	縄文土器	SI97 → 本跡
296	N 9 a 9	N - 90°	楕円形	0.28 × 0.24	8	外傾	凹凸	人為		SI10 → 本跡
297	M 9 j 9	N - 66° - E	楕円形	0.34 × 0.28	6	緩斜	平坦	人為		SI10 → 本跡
298	M 9 e 5	N - 6° - E	長方形	0.56 × 0.48	33	直立	浅いU字状	人為	土師器, 須恵器	SI27 → 本跡
299	M 9 e 4	N - 76° - W	長方形	0.95 × 0.82	36	外傾	平坦	人為	弥生土器, 土師器	SI27 → 本跡
304	L 8 h 7	N - 6° - E	[楕円形]	2.80 × 2.32	19	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SK316
308	M 8 b 6	-	円形	0.62 × 0.60	20	緩斜外傾	皿状	人為		本跡→SI87
315	M 9 f 5	N - 43° - W	楕円形	0.30 × 0.27	58	直立	U字状	人為	縄文土器	
316	L 8 i 8	N - 59° - E	不整楕円形	2.18 × 1.65	34	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SK304 → 本跡
318	M 9 h 4	N - 81° - W	[隅丸方形・隅丸長方形]	0.32 × (0.34)	16	外傾	平坦	人為		
319	M 9 g 5	N - 0°	[円形・楕円形]	0.38 × (0.28)	22	ほぼ直立	浅いU字状	人為		本跡→SB35
329	M 9 h 4	N - 78° - W	隅丸方形	0.44 × 0.42	17	外傾緩斜	皿状	人為		SD61 → 本跡
331	M 9 f 5	N - 3° - W	楕円形	0.72 × 0.57	32	外傾直立	平坦	人為		
332	M 9 i 3	-	円形	0.64 × 0.62	32	外傾直立	平坦	人為	土師器	
335	N 9 e 2	N - 68° - W	楕円形	0.80 × 0.64	48	ほぼ直立	平坦	人為		SI94 → 本跡
338	M 9 h 6	N - 86° - W	楕円形	1.94 × 1.12	56	直立	平坦	人為	縄文土器	
340	M 9 c 2	N - 67° - E	楕円形	0.40 × 0.34	28	直立	U字状	人為	土師器	
341	M 9 c 1	N - 15° - E	楕円形	0.58 × 0.48	64	外傾直立	皿状	人為		
342	M 9 c 2	N - 53° - E	楕円形	1.35 × 1.20	42	緩斜	皿状	人為	縄文土器	SK347 → 本跡 → SB38, SA10
344	N 9 d 1	N - 72° - W	楕円形	0.76 × 0.66	48	直立	有段	人為	土師器	
345	M 9 d 1	N - 63° - E	楕円形	0.64 × 0.47	48	直立	U字状	人為	土師器, 不明鉄製品	
346	M 8 h 7	N - 7° - W	楕円形	1.22 × 0.90	30	緩斜	皿状	人為		
347	M 9 c 2	N - 70° - E	[楕円形]	(0.71) × 0.68	33	緩斜	皿状	人為		本跡→SK342
349	M 9 j 9	N - 4° - E	楕円形	0.56 × 0.44	58	直立	U字状	人為	土師器	SI10 → 本跡
351	M 9 f 5	N - 61° - W	不整楕円形	1.20 × 0.71	49	外傾緩斜	凹凸	人為	土師器	本跡→SI27
354	M 9 c 1	N - 50° - E	楕円形	0.98 × 0.72	32	外傾	皿状	人為		
355	N 10 a 1	N - 49° - E	楕円形	0.44 × 0.38	20	外傾	平坦	人為		SI97 → 本跡
359	M 8 a 0	N - 82° - W	楕円形	0.46 × 0.40	56	直立	U字状	人為		
360	M 8 b 0	N - 42° - W	楕円形	0.39 × 0.34	52	直立	U字状	人為		SK239 と重複

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
361	M 8 d9	N - 66° - E	楕円形	0.65 × 0.43	40	直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	
362	M 8 j0	-	[円形]	(0.62) × 0.60	22	緩斜	皿状	人為	弥生土器, 土師器	SI11, SD5 → 本跡
374	M 9 g5	N - 49° - W	楕円形	0.76 × 0.52	26	外傾 緩斜	皿状	人為		SD64 → 本跡
375	M 9 h7	N - 52° - E	楕円形	0.59 × 0.43	43	ほぼ直立	平坦	人為		
376	M 9 b2	N - 83° - W	隅丸長方形	0.86 × 0.72	26	外傾	平坦	人為	土師器	
377	M 9 g7	N - 45° - W	[円形・楕円形]	2.08 × (1.08)	40	外傾	平坦	人為		本跡 → SB35
380	K 8 g1	N - 85° - E	楕円形	1.08 × 0.73	30	緩斜	皿状	人為		本跡 → SF 3
381	K 7 i0	N - 5° - E	[楕円形]	(1.60) × 1.06	63	直立	平坦	人為	土師器, 剥片	
382	M 9 e5	N - 59° - E	長方形	0.84 × 0.56	12	外傾	平坦	人為		SI27 → 本跡 → SB32
384	N 9 d3	N - 82° - W	楕円形	1.00 × 0.68	44	直立 緩斜	皿状	人為		SI93 → 本跡
385	L 8 f5	N - 53° - E	[円形・楕円形]	0.92 × (0.42)	40	直立	平坦	人為		本跡 → SI79
386	N 9 d5	N - 65° - W	楕円形	0.88 × 0.68	20	緩斜	皿状	人為		

(2) 溝跡 (第 202・203 図)



第 202 図 時期不明の溝跡実測図 (1)



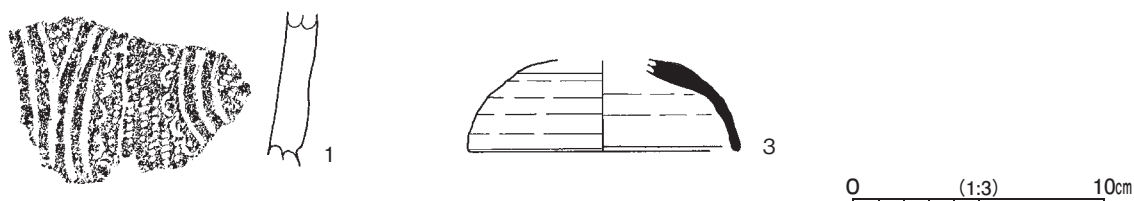
第 203 図 時期不明の溝跡実測図 (2)

第 102 表 時期不明の溝跡一覧

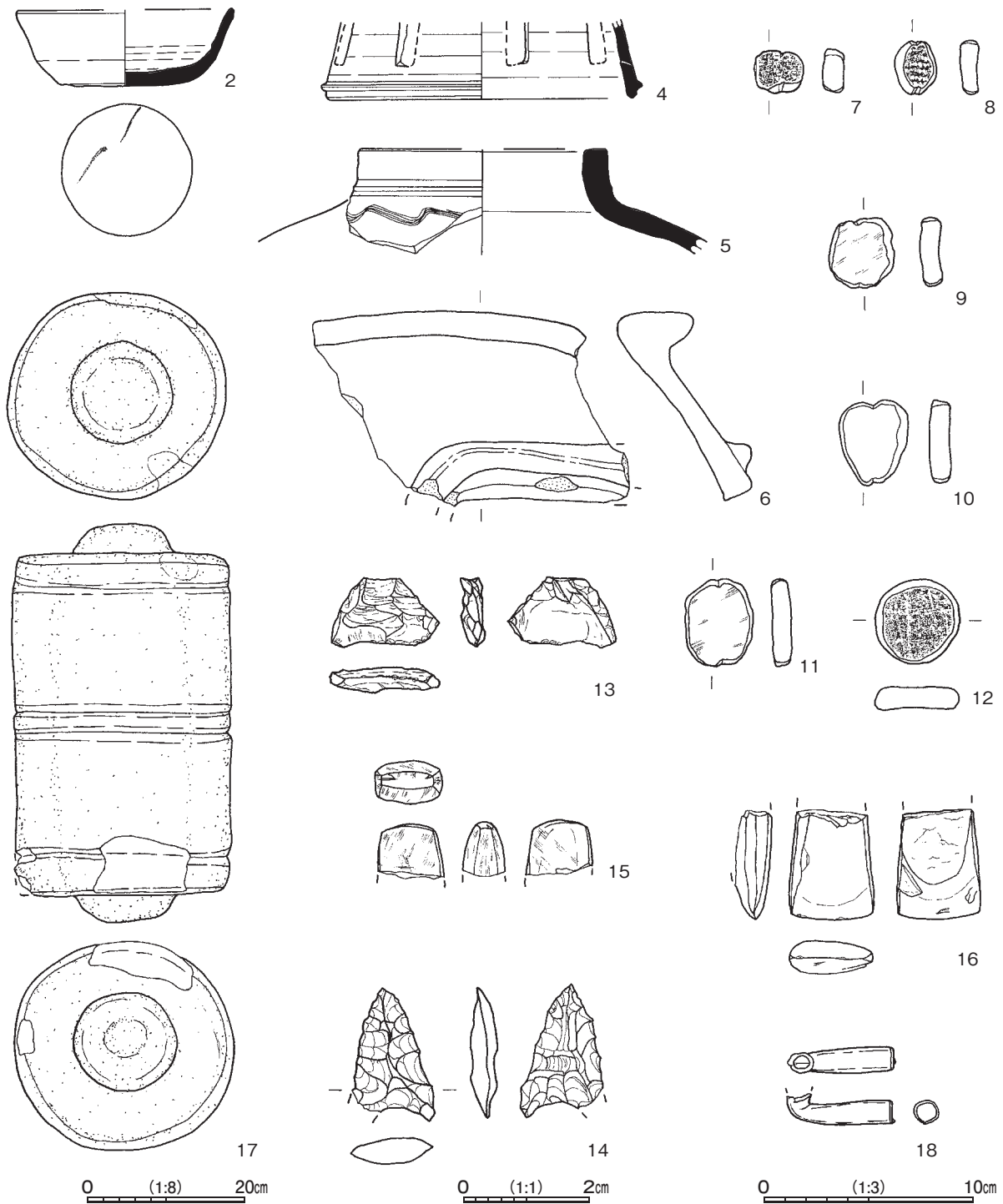
番号	位置	方向	平面形	規 模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅 (cm)	下幅 (cm)	深さ (cm)					
8	M9h2~N9f0	N-40°-W	直線状	23.16	40~84	24~60	4~16	皿状 平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器, 陶器	SI46・80, SB23・ 24・26→本跡 →SD61
58	J6f4~J6g6	N-58°-W	直線状	10.00	96~178	36~48	16~26	皿状	緩斜	人為	土師器, 須恵器	
59	N10e5~N10i5	N-19°-W N-17°-E N-80°-E	Y字状	20.60	116~216	20~74	8~44	皿状	緩斜 外傾	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 瓦	SB36・41・42 →本跡
61	M9g4~N9b2	N-160°-W	直線状	19.20	100~164	38~80	10~16	皿状	緩斜	人為	土師器, 陶器	SB28, SK329, SD8・66→本跡 →本跡
62	M9g7~M9j7	N-2°-E	直線状	(11.94)	80~124	60~94	8~16	平坦	緩斜	人為	土師器	SI28, SB25・33 →本跡
63	N10c2~N10c3	N-95°-E	直線状	8.40	48~76	24~32	11~12	皿状	緩斜	人為	土師器	SI24・71→本跡
64	M9g5~M9h5	N-178°-W	直線状	3.96	36~64	8~28	12~48	皿状 U字状	直立 緩斜	人為	土師器	SK280→本跡 →SK374
66	N8a9~N9c5	N-80°-W	直線状	(26.96)	92~124	12~20	22~40	有段	直立 緩斜	人為	土師器, 須恵器, 陶器	SI46・78・83, SB28, SD5→ 本跡→SD61
67	N10a1~N10b1	N-3°-E	直線状	6.12	28~56	16~24	24~29	浅いU字状	外傾	人為		SI24・97→本跡

8 遺構外出土遺物 (第 204・205 図 PL44~46・48)

ここでは、遺構に伴わない遺物について、実測図と出土遺物一覧で掲載する。



第 204 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 205 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

第 103 表 遺構外出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	地文に単節縄文 RL (縦)	表土	PL44
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	須恵器	坏	[10.2]	3.6	3.1	長石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部多方向のナデ 火襷痕	表土	50% PL44

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	須恵器	蓋	[10.6]	(3.6)	-	長石	灰黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	表土	10%
4	須恵器	円面碗	-	(3.7)	[14.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	脚部 方形の透かし孔	表土	5% PL44 新治窯
5	須恵器	短頸壺	[11.8]	(5.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 外面波状文	表土	10% PL44 新治窯
6	土師質土器	置き竈	-	(9.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 方形の窓	表土	5% PL44 外・内面煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	土器片錘	2.1	2.3	1.0	5.02	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	胴部片 周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
8	土器片錘	2.0	2.0	0.9	6.08	長石	橙	胴部片 周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
9	土器片錘	3.3	3.1	1.1	13.18	長石・石英	にぶい橙	胴部片 両端にキザミ目	表土	PL45
10	土器片錘	4.0	3.2	1.0	17.26	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	胴部片 周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
11	土器片錘	4.1	3.2	0.9	16.05	長石・石英	にぶい橙	胴部片 周縁部粗雑に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
12	土製円板	4.0	4.1	1.1	20.28	長石・石英	橙	胴部片 周縁部丁寧に研磨	表土	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	搔器	3.3	5.2	1.2	17.72	チャート	両面押圧剥離	表土	PL46
14	石鏃	2.1	(1.4)	0.4	(0.88)	黒曜石	茎部中央深く彎入 両面押圧剥離	表土	PL46
15	磨製石斧	(2.6)	(3.2)	(2.0)	(27.31)	緑色変成岩	小型 表裏面丁寧に研磨 側縁部に稜 刃部欠損	表土	PL46
16	磨製石斧	(5.3)	4.0	(1.6)	(49.46)	硬質砂岩	小型 表裏面丁寧に研磨 側縁部に稜 基部欠損 刃は表裏から研ぎ出す	表土	PL46

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
17	石幢	50.0	27.4	26.0	(58.40) kg	花崗岩	竿部 上下に半円形の柄	表土	平成28年度調査区 SD29周辺より出土

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
18	煙管	5.1	1.2	(1.5)	(8.97)	銅	雁首部	表土	PL48

## 第4節 総括

### 1 はじめに

金田西坪B遺跡は、1959年に現在のさくら学園つくば市立桜中学校校庭の拡張工事の際に総柱掘立柱建物跡が確認され、古代の河内郡衙の一部と考えられてきた。平成12年度に初めて確認調査が行われ、『茨城県教育財団文化財調査報告第195集』<sup>1)</sup>(以下『調査報告』)にて堅穴建物跡9棟、掘立柱建物跡3棟、礎石建物跡8棟、溝跡5条等が報告されている。また、再度平成13年度に確認調査が行われ、『調査報告第209集』<sup>2)</sup>で堅穴建物跡50棟、掘立柱建物跡3棟、溝跡3条等が報告されている。これらの調査により、かねてから河内郡衙跡比定地の一部を占めるとされてきた金田西坪B遺跡は、金田西遺跡、九重東岡廃寺を含めた河内郡衙関連遺跡とされ、その全体の変遷が示されることとなった。平成16年には、当遺跡と、隣接する金田西遺跡、九重東岡廃寺を含む一帯は、古代河内郡衙の推定地、「金田官衙遺跡」として国の史跡に指定されている。平成27・28・30年度には、当遺跡の発掘調査(第1区)が行われ、『調査報告第443集』<sup>3)</sup>で堅穴建物跡8棟、掘立柱建物跡10棟、溝跡32条等が報告されている。ここでは、中世の区画溝の内側に構築された小集落の屋敷跡の存在が明らかとなった。

今回の調査区(第2区)は、さくら学園つくば市立桜中学校から南へ350mの地点に位置する。今回報告する掘立柱建物跡群や堅穴建物跡を主とする奈良時代の遺構は、金田西遺跡の郡庁院をはじめとする金田官衙遺跡を構成するものである。そのほか、縄文時代から平安時代まで断続的に営まれた集落や中・近世の掘立柱建物跡、溝跡などを確認した。

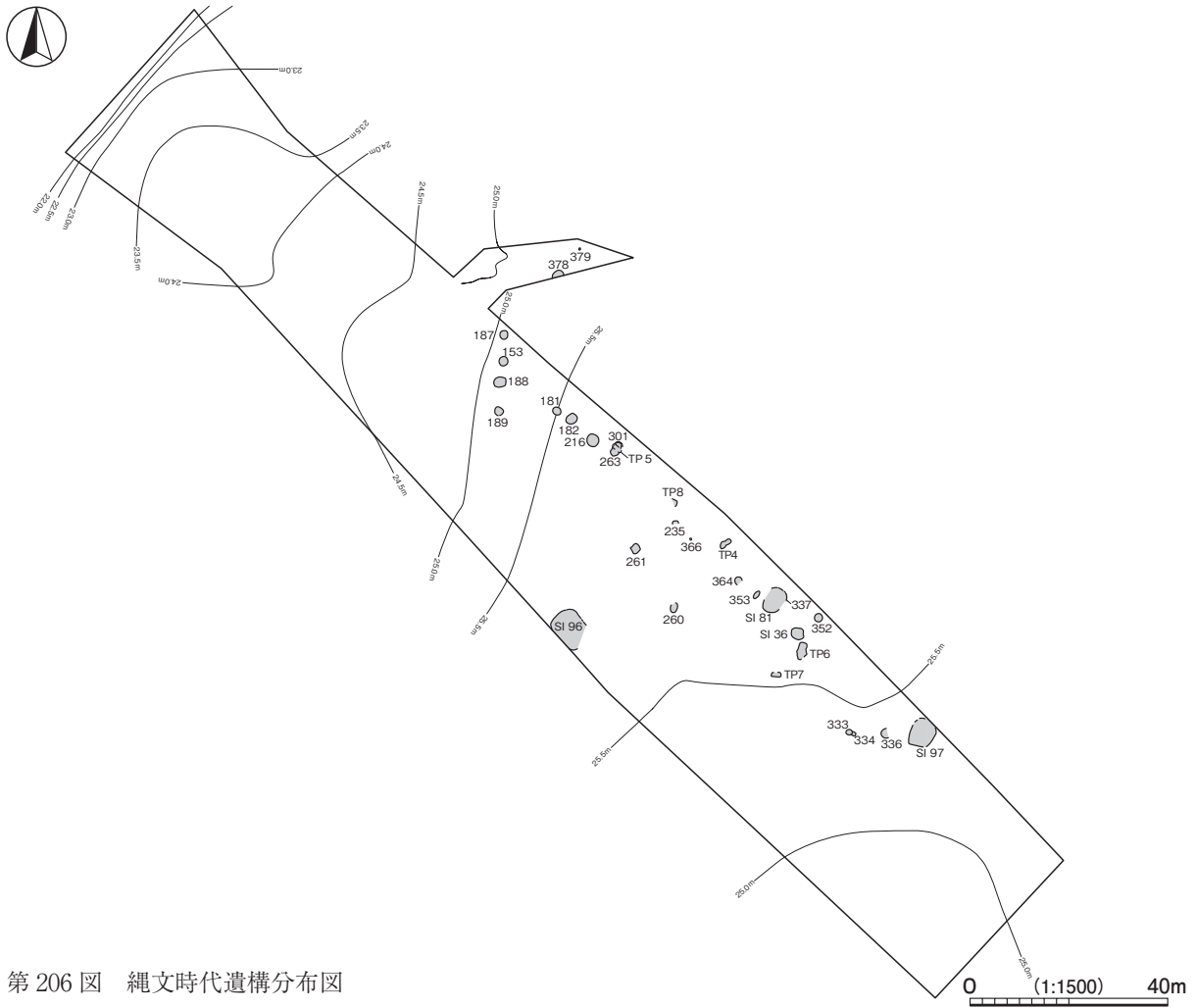
本節では、縄文時代から江戸時代までの様相について概観し、主に奈良時代の遺構と遺物を中心に若干の考察を加えて総括とする。

### 2 縄文時代(第206図)

当該期の遺構は、堅穴建物跡4棟と土坑22基、陥し穴5基である。中心時期は中期中葉で、出土土器などから阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曾利E1式期である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

堅穴建物跡は調査区中央部から南部にかけての平坦部に位置している。形状は、第96・97号堅穴建物跡が有段式堅穴建物跡で、第36・81号堅穴建物跡が楕円形の平面形をした堅穴建物跡である。有段式堅穴建物跡2棟は、いずれも平面形は上段・下段ともに隅丸長方形を呈しており、炉が付設されていない。第96号堅穴建物跡は上段と下段に部分的に壁溝が廻り、下段には4か所の支柱穴をもつ。規模や形状、出土遺物などから本県における有段式堅穴建物跡の様相の阿玉台Ⅲ式期に相当する<sup>4)</sup>。第97号堅穴建物跡は北東部が調査区域外へ延びており平面形が完全ではないが、上段はやや円形に近い隅丸長方形で、はっきりとした支柱穴をもたない。規模や形状から第96号堅穴建物跡と同時期か、やや古段階の阿玉台Ⅲ式期に比定される。楕円形の堅穴建物跡2棟には地床炉が付設されている。平面形が楕円形の堅穴建物跡が多く見られ、地床炉が付設されていることや出土土器などから、加曾利E1式期に比定される。

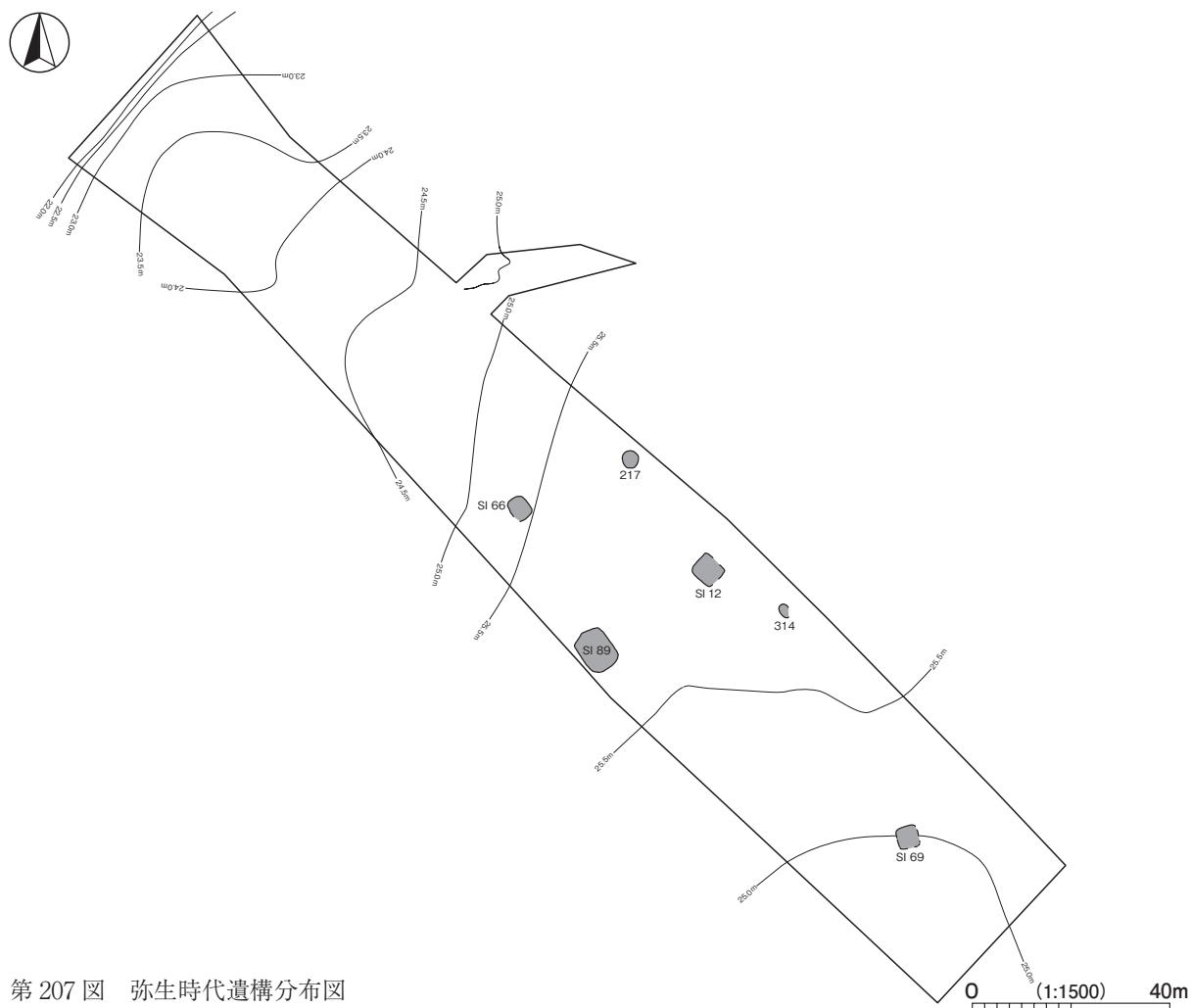
土坑は調査区中央部から南部の平坦部に位置している。時期が特定できたのは、早期1基、中期9基である。早期の土坑からは胎土に繊維を含む貝殻条痕文系土器が出土した。中期の土坑は開口部が円形または楕円形で、第181・182・188・261・336・352号土坑は袋状を呈している。第153・187・189号土坑は開口部が円形であるが、底面までが浅く、出土している土器の様相や壁面が外傾していることから袋状土坑の上部



第 206 図 縄文時代遺構分布図

が削平されたものと考えられる。出土土器は、中葉の阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曾利 E 1 式期が主体である。第 187 号土坑からは、口縁部と胴部が隆帯によって区画され、区画内には隆帯による渦巻き文が貼り付けてあり、胴部には頸部から垂下した蛇行沈線文が施されている加曾利 E 1 式土器が出土している（第 17 図 1）。さらに、第 336 号土坑からは、口縁部に交互刺突文による連続コの字文を有する中峠式土器の様相をもつもの（第 24 図 4）や口縁部に穿孔把手を有し、キザミ目のある隆帯が口縁部から頸部に施された勝坂式の影響を受けたと思われる土器が出土しており（第 25 図 9）、南関東の文化が流入していたものと推測される。また、平成 12 年度に実施された確認調査の際には、第 1 号埋蔵から加曾利 E 1 式土器が出土しており<sup>5)</sup>、当該期の集落はさらに北へ広がっていたものと推測される。

陥し穴 5 基は調査区中央部から南部に位置している。形状は、第 7 号陥し穴は長方形、第 5・8 号陥し穴は楕円形、第 4・6 号陥し穴は不整楕円形で、断面形は第 4・8 号陥し穴は V 字形でそのほかは U 字形である。また、第 4・5・7 号陥し穴はピットを伴っている。関東地方の早期後半から前期の陥し穴は、楕円形が顕著である<sup>6)</sup>。当遺跡の陥し穴も形態としては楕円型陥し穴に分類でき、出土土器や形状の特徴などからいずれも早期から前期の陥し穴と考えられる。これらはいずれも、南に向かって緩やかに下る下がり際に、間隔を空けて設けられており、当該期は当遺跡は獣道などを想定して陥し穴を配置した狩猟場であったと考えられる。



第207図 弥生時代遺構分布図

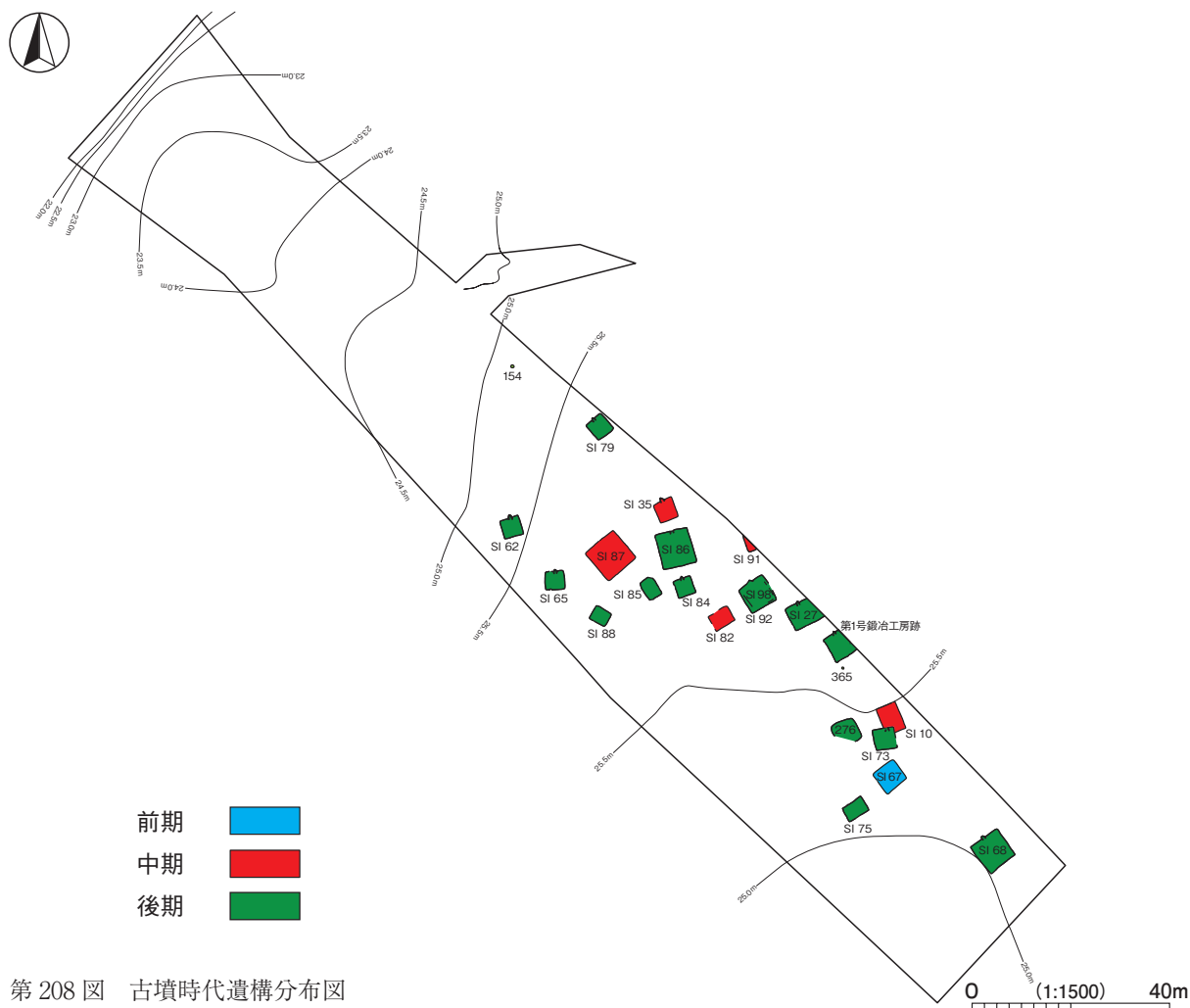
### 3 弥生時代 (第207図)

当該期の遺構は、竪穴建物跡4棟と土坑2基である(第207図)。時期はいずれも後期前半である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡は調査区中央部から南部の平坦部に位置している。形状は、第12・66・89号竪穴建物跡が隅丸長方形、第69号竪穴建物跡が隅丸方形の平面形をした竪穴建物跡である。出土土器は、第12号竪穴建物跡からは、体部に附加条一種(附加2条)を施しつつ口縁部が波状口縁の鉢(第36図1)や、頸部に櫛歯文を施すもの(第36図2)が、第89号竪穴建物跡からは複合口縁で頸部に櫛歯文を施すもの(第42図1)が確認されている。土器の様相は土浦市原出口遺跡から出土している上稲吉式の系譜の土器に類似している。また、第12・66・89号竪穴建物跡からは石英を含んだ礫がまとまって出土している。用途は不明であるが、土浦市西原遺跡<sup>7)</sup> やつくば市玉取向山遺跡<sup>8)</sup> からも同様の出土例が確認されている。これらは、県南地域の竪穴建物跡内から特徴的に出土することが知られており、様々な仮説が提示されている<sup>9)</sup>。当遺跡出土の石英を含む礫からは明確な被熱痕は確認しなかったが、破碎された痕跡があることから、何らかの生産に使用していた可能性が高いと考えられる。

土坑2基は、第217号土坑が調査区中央部、第314号土坑が南部の平坦部に位置している。平面形は第217号土坑が円形、第314号土坑が楕円形である。第217号土坑は11か所のピットが壁際に廻り、規模や形状から、炉は付設されていないが竪穴建物跡や貯蔵施設の可能性が考えられる。





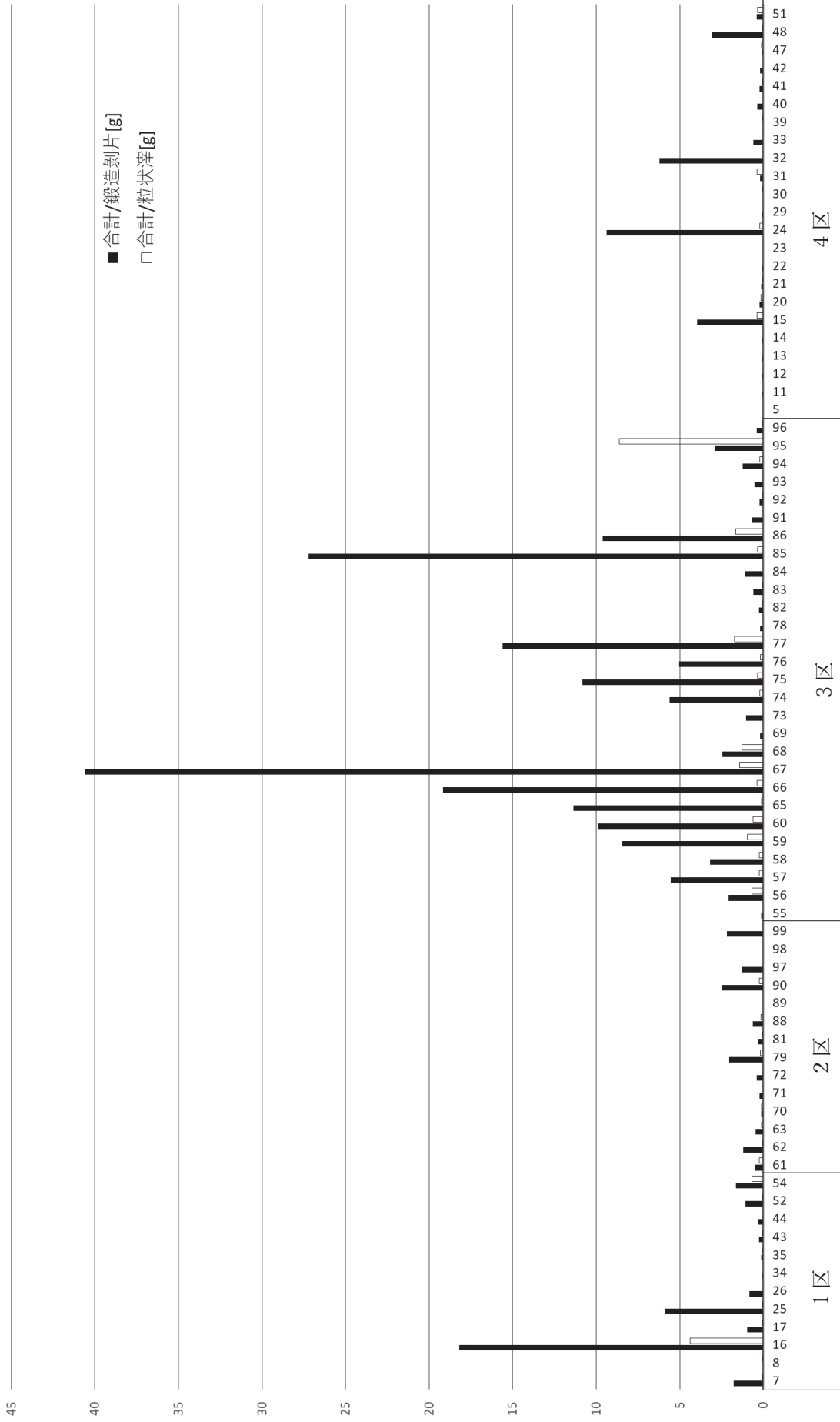
第 208 図 古墳時代遺構分布図

#### 4 古墳時代 (第 208 図)

当該期の遺構は、竪穴建物跡 19 棟と鍛冶工房跡 1 棟、土坑 3 基である。中心となる時期は中期から後期で、調査区中央部から南部にかけて分布している。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡は、前期 1 棟 (第 67 号竪穴建物跡)、中期 5 棟 (第 10・35・82・87・91 号竪穴建物跡)、後期 13 棟 (第 27・62・65・68・73・75・79・84～86・88・92・98 号竪穴建物跡) である。前期の第 67 号竪穴建物跡 (N - 51° - E) と、中期の第 82 号竪穴建物跡 (N - 62° - E) 以外、いずれもやや西に軸が傾いている (N - 3° ~ 58° - W)。竪穴建物跡の変遷からは、古墳時代前期後葉に集落が形成され始め、中期に集落が拡大していき、後期に隆盛する様子を見てとることができる。炉を備えた住居が 5 世紀後葉の竪穴建物跡から竈をもつようになる点や、伴う土師器が和泉式から鬼高式に断続的に変遷していく点など、古墳時代の一般的な集落の様相を示している。特徴的なのは、炉も竈も付設されていない竪穴建物跡が 6 棟存在することである。うち第 88・98 号竪穴建物跡の 2 棟は、後世の掘り込みにより竈が消滅している可能性もあるが、残りの 4 棟 (第 67・75・82・85 号竪穴建物跡) は炉ないし竈をもっていないことが確実である。これらの竪穴建物跡は、前期から後期までのどの時期にも存在し、台地の縁辺部の集落の中心からやや外れた所に位置する。これらの竪穴建物跡がどのような用途で使われたものなのかは断定することが難しいが、生活の場ではなく、簡易的な作業場や倉庫として用いられた可能性がある。

鍛冶工房跡 1 棟を、調査区南部で確認した。元々、竈を備えた一般的な竪穴建物跡であったものを、作業空間を広くするために柱を壁際に作りかえ、屋根を高くして作業効率を上げたものと考えられる。前述のと



第104表 第1号鍛冶工房鍛造剥片・粒状滓出土量グラフ

おり、鉄滓のほか、粒状滓や鍛造剥片が大量に出土した（第 48 表）。P 3・P 6 と 炉 1・2・5 からの出土重量が多く、特に炉 2 は不定形滓の重量が 300 g を超えており、比較的長期間に渡って操業していたと考えられる。一方、粒状滓と鍛造剥片の出土量は、下層から床面のグリッド別の分布<sup>10)</sup>をみると、3 区からの出土重量が突出している（第 104 表）。炉 1 と 炉 4 の間に大量の鍛造剥片が飛散しており、周辺で鍛錬鍛冶が行われたと考えられる。

また、鍛冶工房跡に関連する遺構として、第 276 号土坑を検出した。これは、鍛冶工房跡から南に約 20 m の地点で確認し、大量の鍛冶関連遺物が出土している。これらの鍛冶関連遺物の総重量は 4473.61 g に達し、古墳時代の原始的な鍛冶工房とはいえ、一定の期間操業していた様子が推測できる。そのほか、土坑 2 基を確認した。調査区中央部に位置する第 154 号土坑からは、一定量の鍛冶関連遺物が出土している。

以上、当遺跡の古墳時代は前期から後期にかけて連続して集落が営まれ、その規模を拡大していった様子が明らかになった。鍛冶工房跡の存在は注目され、過去の確認調査でも鉄滓が出土している<sup>11)</sup>ことから、今回の調査区より北側には他にも鍛冶工房跡が存在する可能性が高い。そして、これらの要素からは、古墳時代に継続的に営まれ、倉庫や鍛冶工房を備えた大規模な集落を想起できる。このような技術をもった集落の存在が、のちに官衙が置かれる一つの要因となっている可能性があると考えられる。

## 5 奈良時代（第 209～211 図・第 105 表）

当該期の遺構は、竪穴建物跡 13 棟、掘立柱建物跡 29 棟、大型円形土坑 1 基、土坑 2 基、柱穴列 2 条、溝跡 1 条である。中心となる時期は 7 世紀末葉から 8 世紀中葉である。以下、過去の金田官衙遺跡に関連する周辺遺跡の報告に基づいて時期を設定し<sup>12)</sup>、各時期の特徴について述べる。

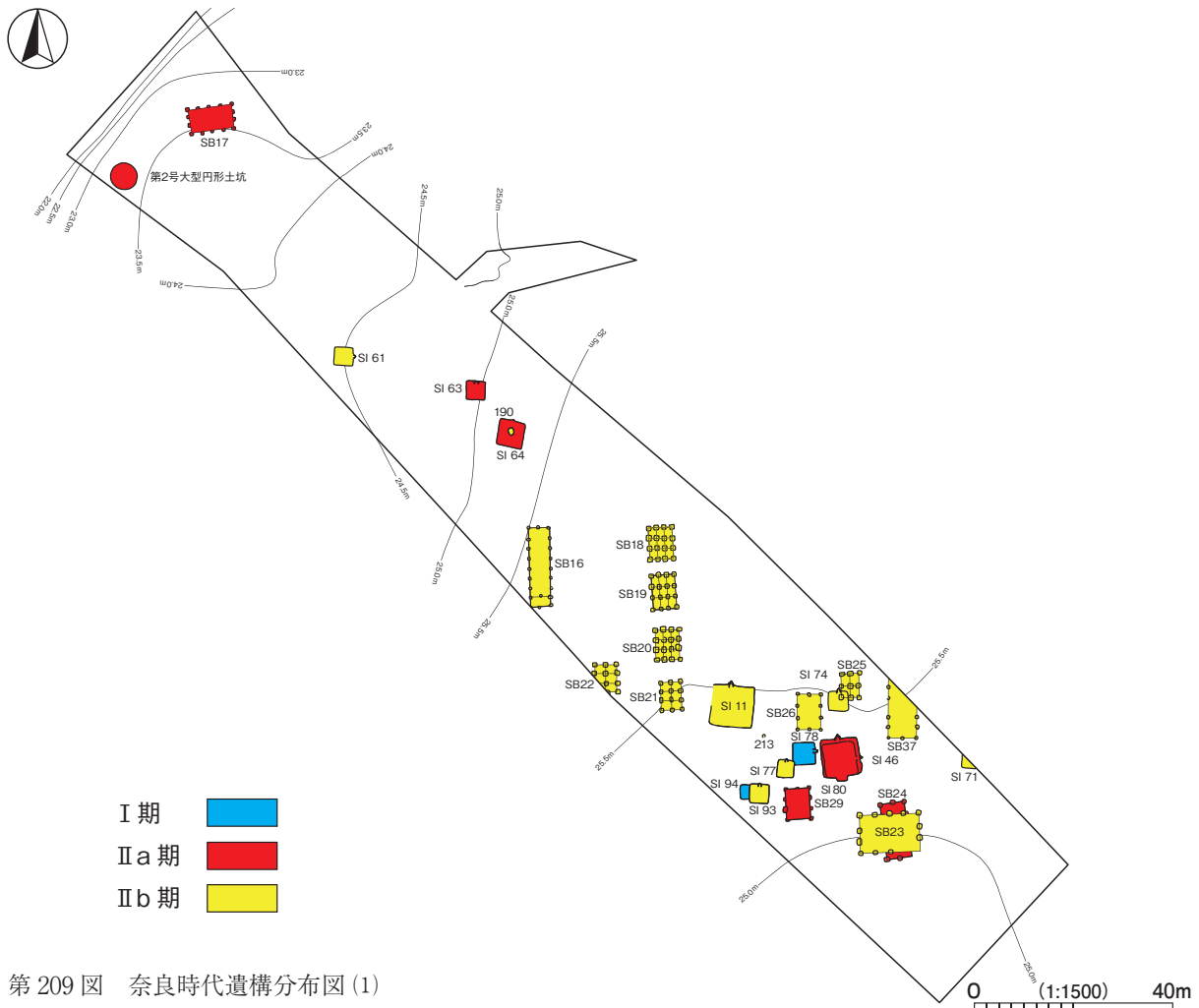
### (1) 建物群の変遷（第 209・210 図、第 105 表）

#### 第 I 期

本期は、河内郡衙展開前の前身集落が展開する時期である。今回の調査区では竪穴建物跡 2 棟（第 78・94 号竪穴建物跡）を確認した。第 94 号竪穴建物跡は第 93 号竪穴建物に掘り込まれており、竈の様相が明確ではないが、第 78 号竪穴建物跡同様、東に竈をもっていた可能性が高い。この二つの竪穴建物跡は大きさが若干異なるものの、主軸を同じくしており、出土する土器も 7 世紀末葉と古手である（第 117 図）。よって、この時期には、小規模な河内郡衙の前身集落が存在していたと考えられる。

#### 第 II a 期

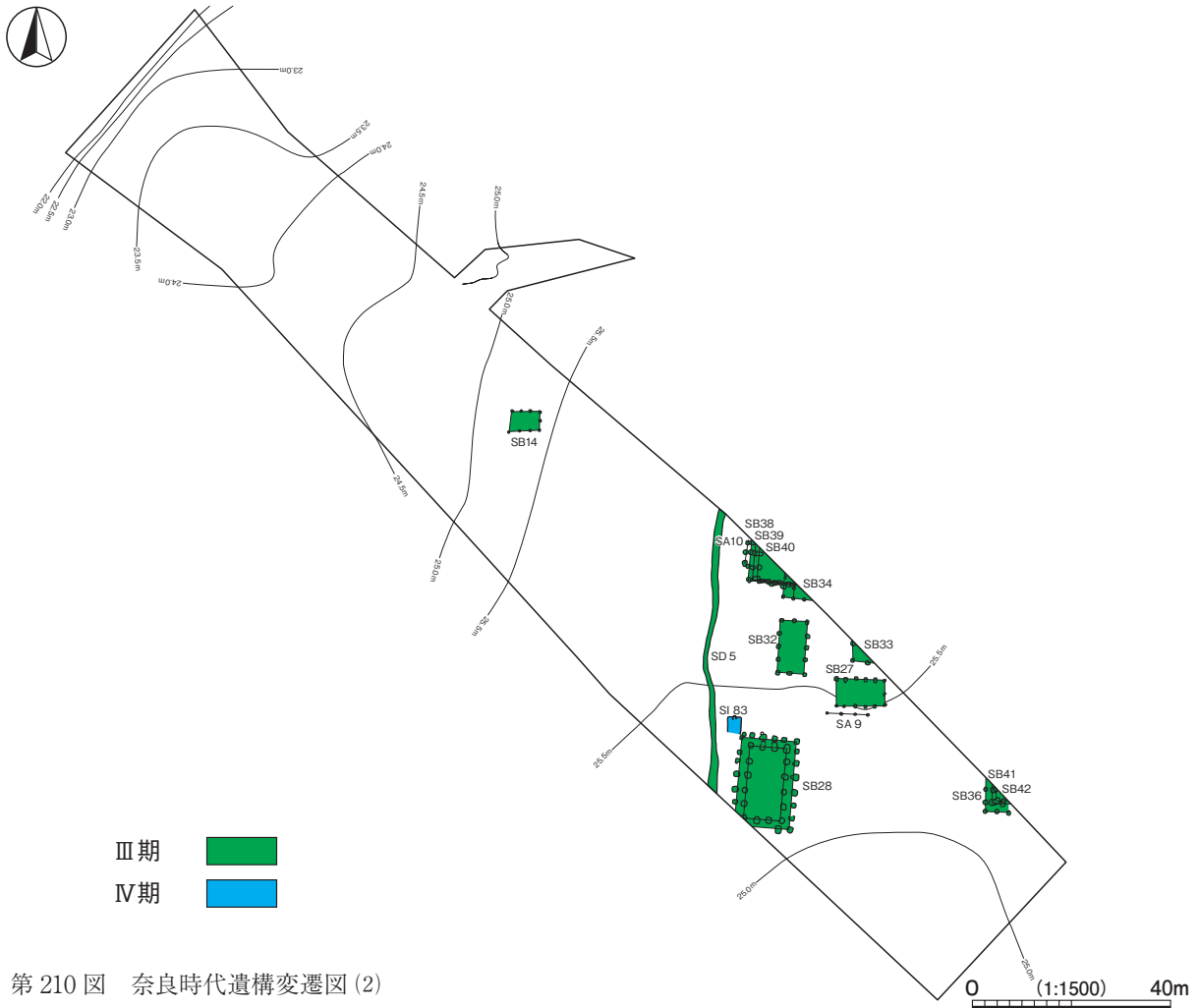
本期は、8 世紀前葉の郡衙の成立期のうち、より古い時期に位置付けられる。今回の調査区では II 期に突如として竪穴建物跡 10 棟、掘立柱建物跡 16 棟が造営されるが、そのうち、a 期としたものは竪穴建物跡 4 棟（第 46・63・64・80 号竪穴建物跡）と掘立柱建物跡 3 棟（第 17・24・29 号掘立柱建物跡）である。竪穴建物跡 4 棟のうち第 80 号竪穴建物跡のみが東竈であり、重複関係から第 46 号竪穴建物跡に先行する。この第 80 号竪穴建物跡とほぼ同じ場所に第 46 号竪穴建物跡が作られる。第 46 号竪穴建物跡は大型の竪穴建物跡で、出土遺物が質・量ともに他の竪穴建物跡と明らかに異なっている（第 104 図）。その他の 2 棟は離れた場所に並んで作られている。掘立柱建物跡は、第 24・29 号掘立柱建物跡の 2 棟とも南北棟で、傾きが西に若干振れている。また、第 17 号掘立柱建物跡は東西棟で、こちらも西に若干振れている。これは、隣接する大型円形土坑を管理する建物であった可能性がある。以上、この時期は竪穴建物跡が増加するとともに、掘立柱建物跡も出現する。また、大型竪穴建物跡である第 46 号竪穴建物跡と、隣接する掘立柱建物跡のセットから、有力者の存在が推定できる。



第 209 図 奈良時代遺構分布図 (1)

第 II b 期

本期は、8 世紀前葉の郡衙の成立期のうち、より後出する時期である。今回の調査区で b 期としたものは堅穴建物跡 6 棟（第 11・61・71・74・77・93 号堅穴建物跡）と掘立柱建物跡 10 棟（第 16・18・19・20・21・22・23・25・26・37 号掘立柱建物跡）である。堅穴建物跡 6 棟のうち第 61 号堅穴建物跡のみが東竈であり、その他の堅穴建物跡は北竈で真北か東に 3°～6° 振れる。注目されるのはやはり大型の堅穴建物跡で、第 11 号堅穴建物が II a 期の大型の堅穴建物跡である第 46 号堅穴建物跡の北西約 20 m の位置に造営される。これは、第 46 号堅穴建物に居住していた特別な立場の人物が居宅を建て替えたものと考えられる。II a 期に比べ、全体的に堅穴建物跡から出土する須恵器の量が増えている。なかには第 74 号堅穴建物跡出土の須恵器など（第 113 図 3）、東海地方からの搬入品も含まれており、他地域との交流をうかがうことができる。掘立柱建物跡は、10 棟とその棟数を大幅に増やす。主軸は真北を向くか、2°～5° 西に振れる。なかでも、第 11 号堅穴建物跡の西に築かれた総柱の第 18～22 号掘立柱建物跡は高床の倉庫であったと考えられる。これは、堅穴建物に付随する倉庫であり、間隔が揃っていないこと、遺物から大きな時期差が認められないこと、などから、倉庫が手狭になった際に順次増築していったものと考えられる。その他は第 23 号掘立柱建物跡のみが東西棟で、それ以外は南北棟である。馬小屋の可能性のある第 16 号掘立柱建物跡も確認したが、全体的に遺物の出土が少なく、得られた情報は極めて限定的である。この時期には、堅穴建物跡と掘立柱建物跡の数がそれまでと逆転し、掘立柱建物跡が多数を占めることとなる。また、有力者の住まいと考えられる堅穴建物跡が倉を伴うようになる。



第 210 図 奈良時代遺構変遷図 (2)

第Ⅲ期

本期は、8世紀中葉の郡寺・郡衙の展開期である。今回の調査区では竪穴建物跡はなくなり、掘立柱建物跡12棟（第14・27・28・32～34・36・38～42号掘立柱建物跡）が該当する。ほぼ東西を向く東西棟が2棟、2°～8°東に振れる南北棟が10棟である。中でも、第28号掘立柱建物跡は、桁行5間、梁行3間の身舎の四面に桁行7間、梁行5間の廂が付く側柱建物跡である。廂を含めると桁行18.0m（60尺）、梁行7.2m（24尺）で、面積は194.4㎡になる。身舎と廂の柱筋が一致しておらず、一体的に構築されていない。廂の柱穴は掘方がしっかりしており、床をもつ縁であった可能性もある。北には掘立柱建物が連続して建てられているが、10m以上離れている。また、第28号掘立柱建物跡の東側は建物がなく、大きな空間が設けられている。これは、それまで竪穴建物に居住してきた有力者が、この時期に掘立柱建物を居宅とするようになったためと考えられる。また、第38～40号掘立柱建物跡と第41・42号掘立柱建物跡は、東から西に建て替えられており、この場所に何度も立て替えられる同様の機能をもつ施設が存在した可能性が高い。主軸方向もそれぞれ一致しており、それほど時間を置かず建て替えられたと考えられる。以上、この時期は竪穴建物跡がみられなくなり、建物は掘立柱建物跡のみとなる。また、特別な建物である大型の四面廂建物が造営され、有力者の住まいとして機能したと推測できる。

第Ⅳ期

本期は、8世紀後葉の郡寺・郡衙の展開期で、河内郡衙が成熟し、最も隆盛する時期である。ところが、今回の調査区内で確認できた遺構は竪穴建物跡1棟（第83号竪穴建物跡）のみで、それまでの竪穴建物跡

時期 区分	年代	推定河内郡衙変遷	金田西坪B遺跡		
			第2区	正倉域	第1区
I期	7世紀 末葉	前身集落 郡衙関連施設展開の前段階	SI78・94		
II期 a	8世紀 前葉	九重東岡廃寺・郡衙の成立期	SI46・63・64・80 SB17・24・29	SD 3	SI53・57, SB11, SD21・23・51 SB 5・10
II期 b			SI11・61・71・74・77・93 SB16・18・19・20・21・22・23・25・26・37		
III期	8世紀 中葉	郡寺・郡衙の展開期 I	SB14・27・28・32・33・34・36・38・39・40・ 41・42 SD 5	SB 1・2・3	SD19
IV期	8世紀 後葉	郡寺・郡衙の展開期 II	SI83	SS 1・2・3・ 4・5・6・7 SD 1	
V期	9世紀 前葉	郡寺・郡衙の衰退期 I			SI55・56・60
VI期	9世紀 後葉	郡寺・郡衙の衰退II 一般集落化			SI51・52・58, SB 6, SD10

第105表 河内郡衙の遺構変遷

や掘立柱建物跡の遺物より一段階新しく位置付けられる。以上、この時期に当調査区では、掘立柱建物跡はひとつ残らず廃絶し、住んでいた有力者はその住まう場所を移したものと考えられる。

以上のことから、今回の調査区では、有力者の住まいが構成を変えながら継続して営まれていたことが明らかとなった。この有力者については、河内郡を治めた郡司層が想定できよう。そうすると、これらの建物跡群は郡司の居宅であったと考えられる。

(2) 河内郡衙関連遺跡からみた奈良時代の金田西坪B遺跡（第211図・第105表）

ここでは、河内郡衙全体における金田西坪B遺跡の性格について述べる。河内郡衙の変遷は、7世紀末に前身集落が営まれ（I期）、成立期（II期）・展開期（III期）・衰退期（IV期、V期）を経て9世紀後半には一般集落化することが報告されている<sup>13)</sup>。これは、河内郡衙が奈良時代8世紀前葉に成立し、平安時代の9世紀後半に郡衙としての機能を終えることを示している。金田官衙遺跡は広範囲に渡って当財団により調査が行われており、全体の配置が明らかになりつつある。金田西遺跡は東部が郡庁院、中央の北部が館、南部が居宅と推定されており<sup>14)</sup>、その西には仏教関連施設である九重東岡廃寺が位置する。また、金田西坪B遺跡については、平成12・13年度に確認調査が行われ、正倉院と推定される遺構群が確認されている。

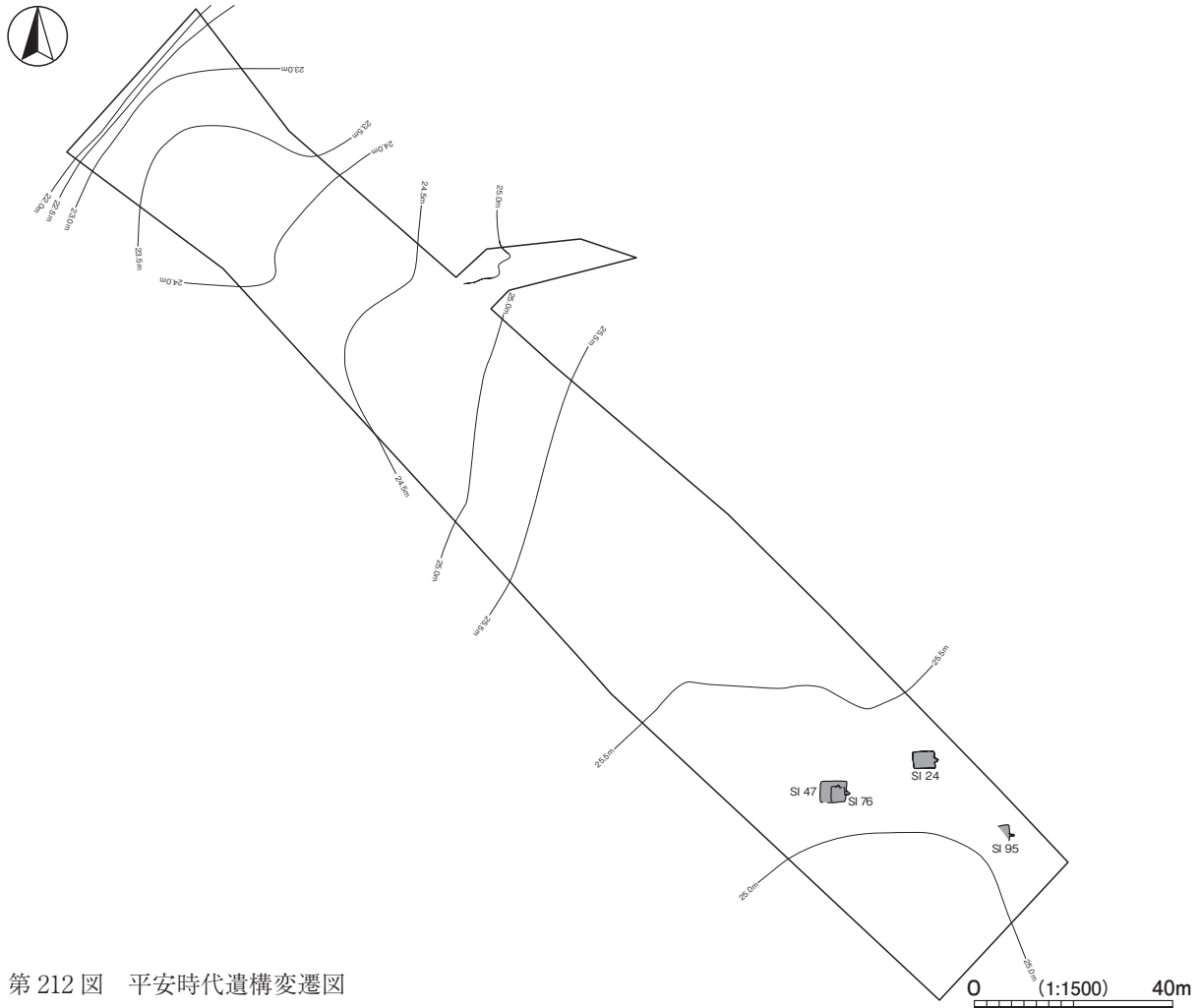
金田西坪B遺跡北部で確認されている正倉院は、建物の傾きや配列をもとに金田西遺跡の分析結果に照らし合わせて検討が行われている<sup>15)</sup>。正倉院区域からは8棟の礎石建物跡、3棟の掘立柱建物跡、3条の区画溝が確認されており、それらを今回の時期区分に当てはめると、第2・3号溝跡の時期は現状から決めるのが難しいが、どちらも正倉院の区画を囲んでおり、第3号溝跡が最も古く位置付けられる（第105表）。第1・2号溝跡の関係は結合する部分に土坑が重複しており新旧関係が不明であるが、第2号溝跡に区画された領域はここでは正倉域の拡張や別院との想定に従いたい<sup>16)</sup>。第1・2号溝跡の南北方向の溝は共有されており、新旧は有無も含めて不明であるが、大きな時期差なく機能したと考えられる。平成12・13年の確認調査の際には、正倉域のこれらの溝の南に第5号溝跡が確認されている。これは、第1・2号溝跡と並行する形で東西に延びており、今回の調査区と正倉域を区画している。つまり、既述のように、今回の調査区を居宅と考えると、その居宅の中心と正倉院の礎石建物群との距離は200mほどで、隣接して造営されており、居宅域、正倉域をそれぞれ第5号溝跡、第1・2号溝跡で区画している様子が分かる。

このように、金田西坪B遺跡は、居宅域と正倉域からなり、居宅域では郡司層の住まいの変遷を知ることができ、正倉域では部分的ではあるが河内郡正倉院の規模や配置を知ることができる。そして、それぞれの区域には少しずつ時期差が存在し、III期で掘立柱建物が積極的に作られる点は共通するものの、IV期に正倉



第 211 図 河内郡衙関連遺構群全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第 209 集 付図に加筆）

域で礎石建物が造営されるころには、当調査区の居宅は他の場所へ移っている点が注目される。



第 212 図 平安時代遺構変遷図

## 6 平安時代 (第 212 図)

今回の調査区で確認できた平安時代の遺構は、竪穴建物跡 4 棟である。中心となる時期は 10 世紀後半である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡はいずれも調査区南部の平坦面に位置している。4 棟のうち 3 棟が東竈であり、第 76 号竪穴建物跡のみ北竈である。竪穴建物跡の規模は、第 95 号竪穴建物跡が削平により全体の規模が不明であるものの、第 76 号竪穴建物跡のみが長軸、短軸ともに 3 m に満たない小型の竪穴建物跡となっている。いずれの竪穴建物跡も、明確な柱穴が確認できなかった。第 47 号竪穴建物跡の竈中央部では、火を受けた雲母片岩を 2 点確認した。二つ掛けの支脚と考えられ、異なる高さで土器を掛けられるように据えられていた。土器は、内面に黒色処理を行った高台付坏が全体的に確認できた。第 24 号竪穴建物跡からは外面下位に縦位のヘラ磨きが施された土師器の甕が出土しており (第 24 図 4)、この竪穴建物跡のみ 9 世紀代に入ると考えられる。また、第 47 号竪穴建物跡からは、土師器の小皿が 13 点出土している (第 24 図 4)。貯蔵穴周辺から出土したが、いずれも器高が低く扁平化が進んでいるため、10 世紀後葉と考えられる。

これら平安時代の竪穴建物跡は 8 世紀後半から 9 世紀にかけて継続する金田官衙遺跡群との関連が認められず、特に 9 世紀代はほぼ空白域であったと考えられる。よってこれらは、官衙が衰退した後に営まれた一般的な小集落と考えるのが妥当であろう。





第 213 図 中・近世遺構変遷図

7 中・近世 (第 213 図)

今回の調査区から確認できた中・近世の遺構は、掘立柱建物跡 4 棟、溝跡 3 条、土坑 8 基、道路跡 2 条である。中心となる時期は、15～16 世紀代と考えられる。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

溝は当遺跡の中央部に確認した。既に今回の調査区の北西に当たる平成 28 年度調査 (1 区) で中世の溝が 13 条確認されている<sup>17)</sup>。北西の調査区では、かわらけや内耳鍋などが大量に出土しており、それらの年代から 15 世紀中葉から 16 世紀後葉にかけて構築と廃絶が繰り返されている様相が明らかになった。報告されている溝の上幅は 0.28～4.64 m、下幅が 0.08～1.04 m、深さが 22～174 cm と、かなりの幅がある。断面形も逆台形、U 字状、V 字状とバリエーションがある。今回の調査区 (2 区) の第 55 号溝跡は上幅 0.72～2.68 m、下幅 0.24～1.70 m、深さ 30～46 cm、断面形は V 字状である。年代の決め手となる遺物が出土していないものの、方形に区画する形状などから、同時代に含まれる溝跡と考えられる。また、第 55 号溝跡に掘り込まれている第 54 号溝跡も同様と考えられる。なお、第 55 号溝跡で区画された内部には、今回の範囲では確認できなかったが、平成 28 年度調査区同様、屋敷域が形成されていた可能性が高い。

土坑は、上述した溝と同じ調査区中央部で確認した。骨粉が混じっており、墓坑の可能性が高い。軸方向は東西軸と南北軸の 2 種類ある。また、規模も大型 (長軸 1.9～2.4 m) と小型 (長軸 0.9～1.5 m) の 2 種類ある。深さは 25～90 cm と墓坑としては浅く、底部は平坦で断面形は U 字状を呈している。伴う遺物がないが、底面に骨粉がみられるものが多いことから墓坑と考えたい。このような土葬に伴う墓坑は、当遺跡の近隣に所在する上野陣場遺跡や上野古屋敷遺跡でも報告例がある<sup>18)</sup>。時代は江戸時代と推定できる。

最後に道路跡であるが、近年まで使われていた現代の道路の下から第3号道路跡を、それよりも古い第4号道路跡をその下層から確認した。第4号道路跡は、平成30年度調査区の西側で南に向かって曲がっているが、平成29年度調査区では確認できなかった。底面が硬化しているため道路跡としたが、本来溝として利用していたとみられ、調査区内の第8・54・66号溝等につながっていた可能性がある。また、第3号道路跡からは陶磁器片に混じって軒平瓦が出土した。「江戸式」の模倣で、雲母を含み、18世紀後半から19世紀中葉に在地で生産されたものである<sup>19)</sup>。その他、遺構に伴わないものの、石幢の竿部や煙管、置き竈など、概ね中世末から江戸時代の範囲内の遺物が出土した。

## 8 おわりに

金田西坪B遺跡の時代区分と遺構分布を中心に、遺構配置や出土遺物から集落の変遷や郡衙関連施設との関係のみてきた。その結果、縄文時代から江戸時代に渡る当遺跡の土地利用の実態が明らかになった。

特に本調査区で注目されるのは、奈良時代の掘立柱建物跡を中心とした遺構群である。8世紀前葉から8世紀中葉にかけて竪穴建物や掘立柱建物が繰り返し造営され、なかでも郡司層と思われる特別な立場の人物の居宅が、形態を変えながら建て替えられていることを確認した。これらの建物跡群は、極めて限定的な時期に営まれており、8世紀後葉以降は遺構数が急激に減少し、9世紀後半に一般集落化するまで約100年間の断絶がある。ここに居宅を構えていた人々がどこへ移ったのか、また、郡司層とした人物の具体的な実像など、残された課題も多いが、河内郡衙における建物の変遷が分かる重要な事例となるものと考ええる。

今後、河内郡衙全体像の解明のためには、金田西坪B遺跡と周辺遺跡とのより綿密な比較検討が必要である。そのためには、未報告である金田西遺跡北部の性格を検討した上で、官衙を支えた集落である東岡中原遺跡や郡寺と目される九重東岡廃寺、政庁域をはじめとした金田西遺跡を関連付けて総合的に判断していく必要があると考える。

註

- 1) 川上直登 長谷川聡 大塚雅昭 『金田西・西坪B遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI』茨城県教育財団文化財調査報告第195集 2002年3月
- 2) 白田正子 『金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII』茨城県教育財団文化財調査報告第209集 2003年3月
- 3) 野田良直 『金田西坪B遺跡 中根・金田台地区埋蔵文化財調査報告書XXII』茨城県教育財団文化財調査報告第443集 2020年3月
- 4) 縄文時代研究班 「関東地方における縄文時代中期の「有段式堅穴遺構」について」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 5) 註1に同じ
- 6) 中村信博 「関東地方の陥し穴」『縄文時代の考古学 5』同成社 2007年12月
- 7) 江幡良夫 『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書II 原田北遺跡 西原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第85集 1994年3月
- 8) 奥沢哲也 『玉取向山遺跡 県立つくば養護学校（仮称）整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第263集 2006年3月
- 9) a 註7に同じ  
b 小川和博・大淵敦史・鍛冶文博 『六十塚遺跡』土浦市遺跡調査会 1998年3月  
c 中村哲也 『野中遺跡 第2次調査報告書』美浦村教育委員会 2000年3月  
d 黒澤春彦 「土浦周辺における弥生時代後期の様相」『土浦市立博物館紀要』第11号 土浦市立博物館 2001年3月  
e 関口満・窪田恵一 『下郷遺跡・下郷古墳群』下郷古墳群遺跡調査会 2001年7月
- 10) 区は北方向から右回りで1～4区とし、グリッドは4区左上を起点として50cmで設定
- 11) 註2に同じ
- 12) a 註1に同じ  
b 註2に同じ  
c 荒井保雄 『九重東岡廃寺 金田西遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXI』茨城県教育財団調査報告書第435集 2019年3月  
d 註3に同じ
- 13) a 註2に同じ  
b 註11 cに同じ
- 14) 註2に同じ
- 15) 註2に同じ
- 16) 註1に同じ
- 17) 註3に同じ
- 18) a 三谷正 大塚雅昭 桑村裕 『上野古屋敷遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX』茨城県教育財団文化財調査報告第285集 2007年3月  
b 川井正一 『上野古屋敷遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X』茨城県教育財団文化財調査報告第307集 2008年3月
- 19) 桜井正広 瀬田正明 石川功 吉田恵二 加藤晃 神戸信俊 米川仁一 塩谷修 『茨城県指定史跡 土浦城址発掘調査報告書』土浦市教育委員会 1989年3月

## 参考文献

- ・増田精一 岩崎卓也 東和幸 谷延尚 桜井達彦 『東岡遺跡－九重廃寺跡調査報告－』 1984年3月 桜村教育委員会
- ・山中敏史 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書院 1994年8月
- ・成島一也 『中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原遺跡1』 茨城県教育財団文化財調査報告第155集 2000年3月
- ・成島一也 宮田和男 『中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原遺跡2』 茨城県教育財団文化財調査報告第159集 2000年3月
- ・高野節夫 白田正子 仲村浩一郎 島田和宏 『中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3』 茨城県教育財団文化財調査報告第170集 2001年3月
- ・白田正子 『九重東岡廃寺確認調査報告書1』 財団法人茨城県教育財団 2001年3月
- ・稲田義弘 『熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』 茨城県教育財団文化財調査報告第190集 2002年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』 2003年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』 2004年3月
- ・茨城県考古学協会シンポジウム実行委員会 『古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－』 茨城県考古学協会 2005年2月
- ・長谷川聡 田中幸夫 小野克敏 『大塚遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 茨城県教育財団文化財調査報告第242集 2005年3月
- ・佐々木義則 「常陸国河内郡における掘立柱建物跡群の展開」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会 2005年5月
- ・田中広明 『国司の館－古代の地方官人たち－』 学生社 2006年9月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『古代豪族居宅の構造と機能』 2007年12月
- ・清水哲 船橋理 『小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 茨城県教育財団文化財調査報告第346集 2011年3月
- ・小林和彦 宮崎剛 『宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第359集 2012年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『第15回古代官衙・集落研究会報告書 四面廂建物を考える 報告編 奈良文化財研究所研究報告 第9冊』 2012年12月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『第15回古代官衙・集落研究会報告書 四面廂建物を考える 資料編 奈良文化財研究所研究報告 第9冊』 2012年12月
- ・海老澤稔 「茨城県南部における弥生式後期前半の土器様相－新治台地における原出口1式・2式、松延1式・2式の設定－」『茨城県史研究』第97号 茨城県教育委員会 2013年3月
- ・藤木海 『南相馬に躍動する古代の郡役所 泉官衙遺跡』 シリーズ「遺跡を学ぶ」106 新泉社 2016年2月
- ・佐藤信 『古代の地方官衙と社会』 日本史リブレット8 山川出版社 2017年2月
- ・清水哲 内田勇樹 海老澤稔 仙波亨 『吉十北遺跡 勘十郎掘跡 東関東自動車道水戸線（鉦田～茨城空港北間）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第419集 2017年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『第20回古代官衙・集落研究会報告書 郡庁域の空間構成 報告編 奈良文化財研究所研究報告 第19冊』 2017年12月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 『第20回古代官衙・集落研究会報告書 郡庁域の空間構成 資料編 奈良文化財研究所研究報告 第19冊』 2017年12月

# 写真図版



平成29年度調査区 掘立柱建物跡群





平成28年度調査区遠景（南から）



平成29年度調査区遠景（北から）

PL2



平成28年度調査区全景





平成29年度調査区全景

PL4



第18~22・32号掘立柱建物跡



第28号掘立柱建物跡



第36号竖穴建物跡



第36号竖穴建物跡 炉



第81号竖穴建物跡 遺物出土状況



第81号竖穴建物跡 炉



第81号竖穴建物跡



第96号竖穴建物跡



第97号竖穴建物跡



第153号土坑 遺物出土状況

PL6



第153号土坑



第181号土坑 遺物出土状况



第181号土坑



第182号土坑 遺物出土状况



第182号土坑



第187号土坑 遺物出土状况



第188号土坑 遺物出土状况



第188号土坑



第189号土坑



第216号土坑



第235号土坑



第260号土坑



第261号土坑



第334号土坑



第336号土坑 遺物出土狀況 (1)



第336号土坑 遺物出土狀況 (2)

PL8



第352号土坑



第353号土坑



第364号土坑



第4号陷し穴



第5号陷し穴



第6号陷し穴



第7号陷し穴



第8号陷し穴



第12号竖穴建物跡 遺物出土状況



第12号竖穴建物跡 炉



第12号竖穴建物跡



第66号竖穴建物跡 烧土検出状況



第66号竖穴建物跡 炉



第66号竖穴建物跡



第69号竖穴建物跡



第89号竖穴建物跡 炉

PL10



第89号竖穴建物跡



第217号土坑



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (3)



第10号竖穴建物跡



第27号竖穴建物跡 竈



第27号竖穴建物跡





第35号竖穴建物跡 竈



第35号竖穴建物跡



第62号竖穴建物跡 遺物出土状況



第62号竖穴建物跡 竈



第62号竖穴建物跡



第65号竖穴建物跡 遺物出土状況



第65号竖穴建物跡 竈



第65号竖穴建物跡

PL12



第67号竖穴建物跡



第68号竖穴建物跡 竈



第68号竖穴建物跡



第73号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第73号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第73号竖穴建物跡 竈



第73号竖穴建物跡



第75号竖穴建物跡 遺物出土状況



第79号竖穴建物跡 竈



第82号竖穴建物跡



第84号竖穴建物跡 竈



第84号竖穴建物跡 遺物出土状況



第84号竖穴建物跡



第85号竖穴建物跡



第86号竖穴建物跡 竈



第86号竖穴建物跡

PL14



第87号竖穴建物跡 炉



第87号竖穴建物跡



第88号竖穴建物跡



第91号竖穴建物跡



第92号竖穴建物跡 竈



第92号竖穴建物跡



第1号鍛冶工房跡 炉(1)



第1号鍛冶工房跡 炉(2)



第1号鍛冶工房跡 炉 (3)



第1号鍛冶工房跡 炉 (4)



第1号鍛冶工房跡 炉 (5)



第1号鍛冶工房跡 (1)



第1号鍛冶工房跡 (2)



第154号土坑 遺物出土状況



第276号土坑 遺物出土状況



第276号土坑

PL16



第365号土坑



第11号竖穴建物跡 遺物出土状況



第11号竖穴建物跡 竈



第11号竖穴建物跡



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (3)



第46号竖穴建物跡 竈遺物出土状況



第46号竖穴建物跡 竈



第46号竖穴建物跡



第61号竖穴建物跡 遺物出土状況



第61号竖穴建物跡 竈



第61号竖穴建物跡



第63号竖穴建物跡 遺物出土状況



第64号竖穴建物跡 竈



第64号竖穴建物跡

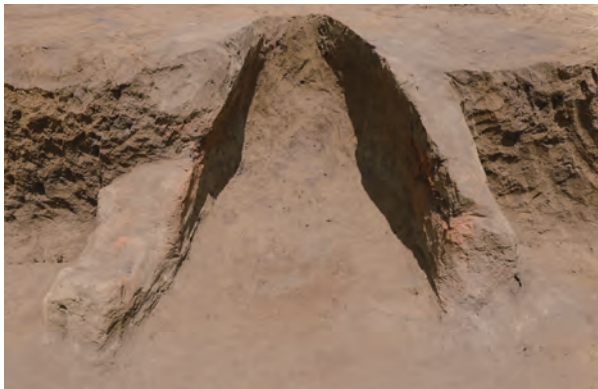
PL18



第71号竖穴建物跡



第74号竖穴建物跡 遺物出土状況



第74号竖穴建物跡 竈



第74号竖穴建物跡



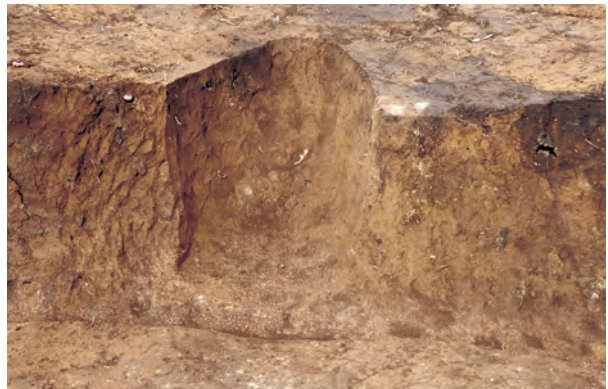
第77号竖穴建物跡 竈



第77号竖穴建物跡



第78号竖穴建物跡



第80号竖穴建物跡 竈





第80号竖穴建物跡



第83号竖穴建物跡 竈



第83号竖穴建物跡 遺物出土状況



第93号竖穴建物跡 竈



第93号竖穴建物跡



第94号竖穴建物跡



第14号掘立柱建物跡



第16号掘立柱建物跡

PL20



第17号掘立柱建物跡



第18号掘立柱建物跡 確認状況



第18号掘立柱建物跡



第19号掘立柱建物跡



第20号掘立柱建物跡 確認状況



第20号掘立柱建物跡



第21号掘立柱建物跡 確認状況



第21号掘立柱建物跡



第22号掘立柱建物跡 確認状況



第22号掘立柱建物跡



第23・24号掘立柱建物跡 確認状況



第23号掘立柱建物跡



第24号掘立柱建物跡



第25号掘立柱建物跡 確認状況



第25号掘立柱建物跡



第26号掘立柱建物跡 確認状況

PL22



第26号掘立柱建物跡



第27号掘立柱建物跡



第28号掘立柱建物跡 確認状況 (1)



第28号掘立柱建物跡 確認状況 (2)



第28号掘立柱建物跡



第29号掘立柱建物跡 確認状況



第29号掘立柱建物跡



第32号掘立柱建物跡 確認状況



第32号掘立柱建物跡



第34号掘立柱建物跡 確認状況



第34号掘立柱建物跡



第36・41・42号掘立柱建物跡



第38・39・40号掘立柱建物跡



第41号掘立柱建物跡 遺物出土状況



第2号大型円形土坑



第190号土坑 遺物出土状況

PL24



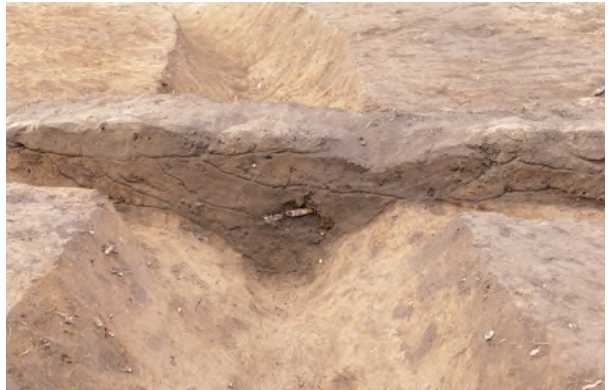
第213号土坑 遺物出土狀況



第9号柱穴列



第5号溝跡 (1)



第5号溝跡 (2)



第24号竖穴建物跡 遺物出土狀況



第24号竖穴建物跡



第47号竖穴建物跡 遺物出土狀況 (1)



第47号竖穴建物跡 遺物出土狀況 (2)



第47号竖穴建物跡 竈遺物出土状況



第47号竖穴建物跡 竈



第47号竖穴建物跡



第76号竖穴建物跡



第95号竖穴建物跡 遺物出土状況



第95号竖穴建物跡 竈



第95号竖穴建物跡



第15号掘立柱建物跡

PL26



第30号掘立柱建物跡 確認状況



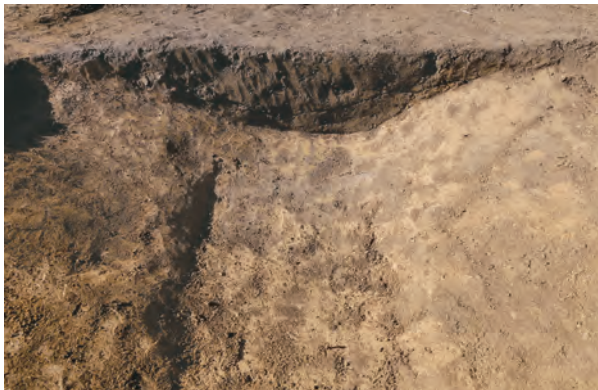
第30号掘立柱建物跡



第31号掘立柱建物跡 確認状況



第31号掘立柱建物跡



第55号溝跡 (1)



第55号溝跡 (2)



第56号溝跡



第54号溝跡





第151号土坑



第160号土坑



第161号土坑



第176号土坑



第177号土坑



第178号土坑



第184号土坑



第3・4号道路跡



第36·81·96·97号竖穴建物跡出土土器



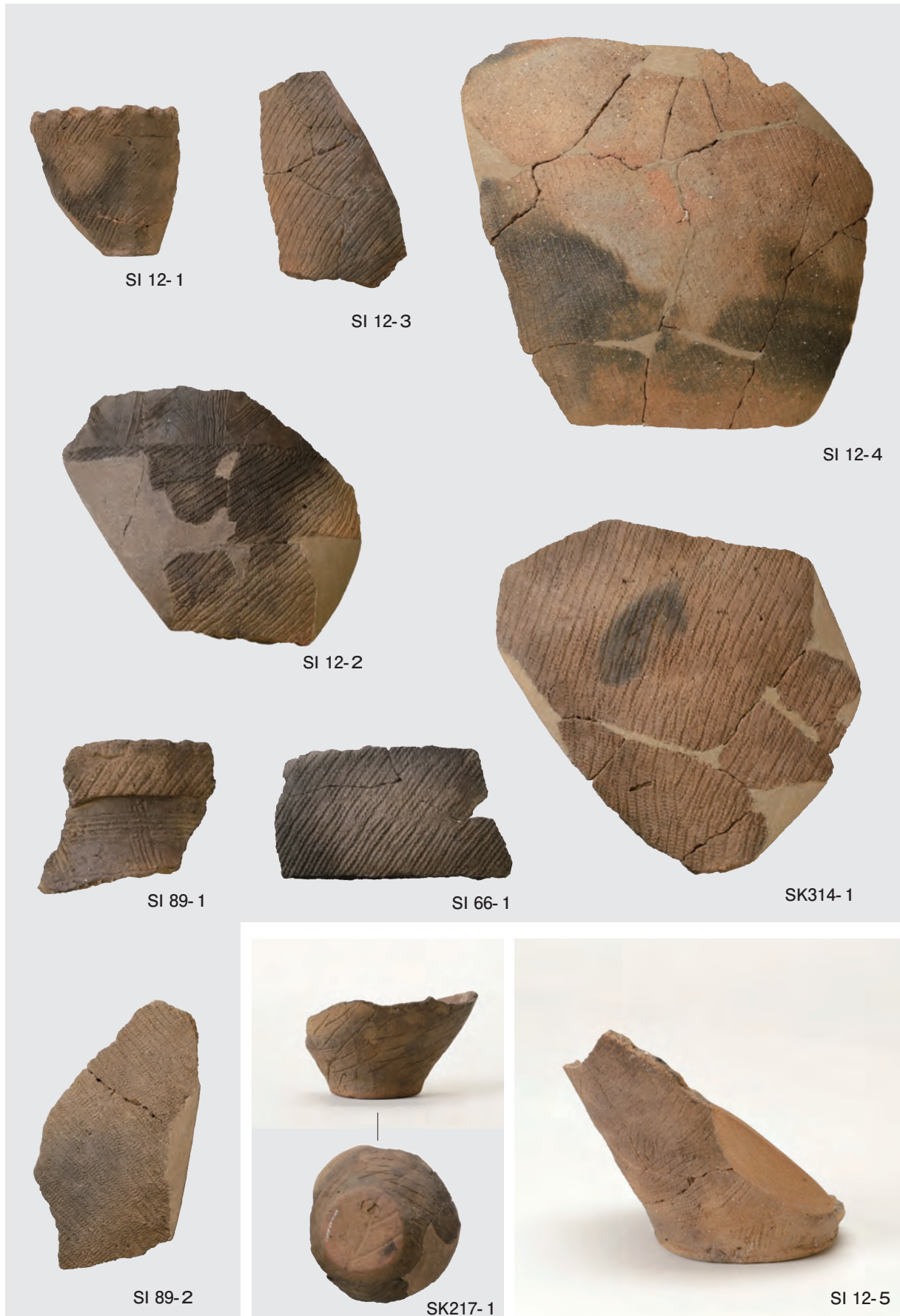
第187·188·216·336号土坑出土土器



第153·181·182·188号土坑出土土器



第216・336・352・364号土坑，第5・6号陷し穴出土土器



第12·66·89号竖穴建物跡，第217·314号土坑出土土器



第10・27号竖穴建物跡出土土器







SI 73-1



SI 75-2



SI 75-3



SI 75-1



SI 79-1



SI 79-2



SI 75-7



SI 75-6



SI 79-5



SI 79-3



SI 79-4

第73・75・79号竖穴建物跡出土土器

PL36



第84号竖穴建物跡出土土器



SI 84-1



SI 85-1



SI 86-4



SI 86-1



SI 86-3



SI 86-5



SI 86-2



SI 86-6



SI 84-2



SI 86-9



SI 86-7



SI 86-8



SI 86-13

第84~86号竖穴建物跡出土土器





第1号鍛冶工房跡-2



SK154-2



SK276-1



SK276-2



SK365-1



SI 11-2



SI 11-1



SI 11-4



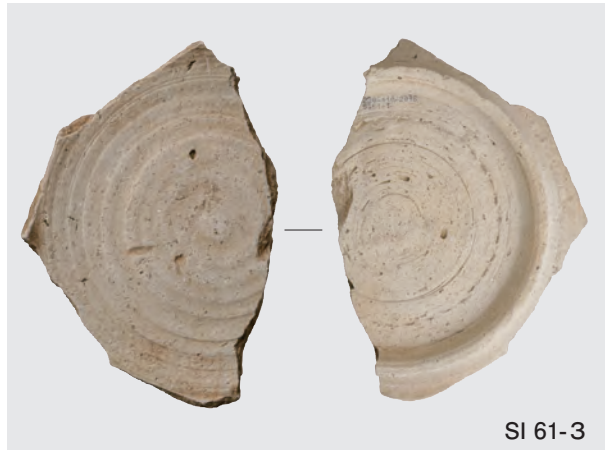
SI 11-5



SI 11-16

第11号竖穴建物跡，第1号鍛冶工房跡，第154・276・365号土坑出土土器

PL40



第11・61号竖穴建物跡出土土器



第46・63・64号竖穴建物跡出土土器

PL42



第74·77·78·93号竖穴建物跡, 第19号掘立柱建物跡, 第190·213号土坑, 第5号溝跡出土土器





第24・47号竖穴建物跡出土土器



SI 47-19



SI 95-1



SI 95-2



SI 95-3



SI 95-4



遺構外-2



遺構外-4



遺構外-1



遺構外-5



遺構外-6

第47・95号竖穴建物跡，遺構外出土土器



SI 86-14



SI 11-20



SI 75-8



SI 81-8



遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12



遺構外-7



遺構外-8



SI 89-4



第1号鍛冶工房跡-4



第1号鍛冶工房跡-3



SI 84-7



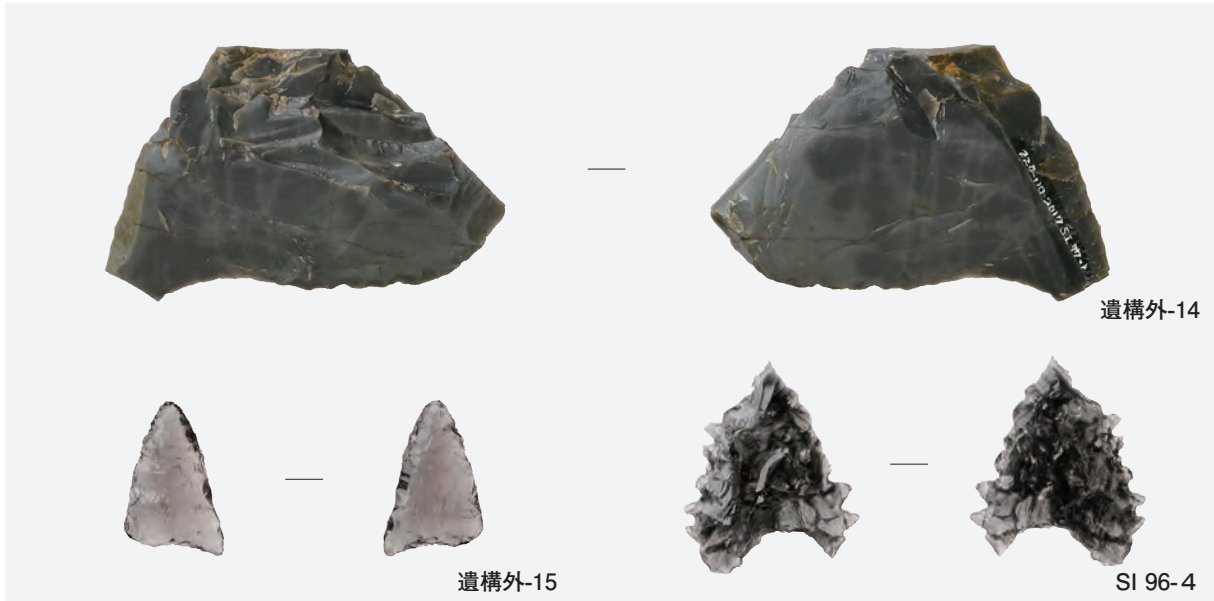
SI 79-6



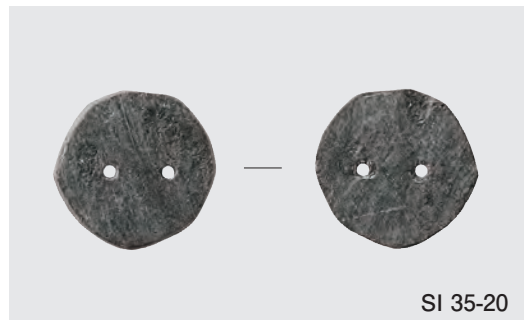
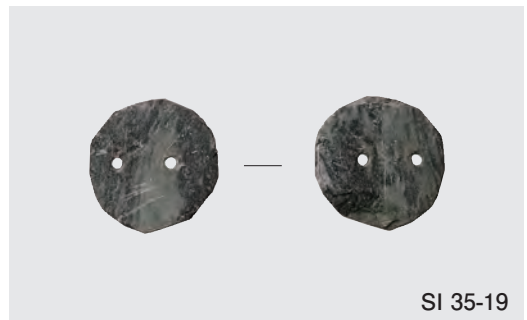
SI 73-2

第11・73・75・79・81・84・86・89号竖穴建物跡，第1号鍛冶工房跡，遺構外出土土製品

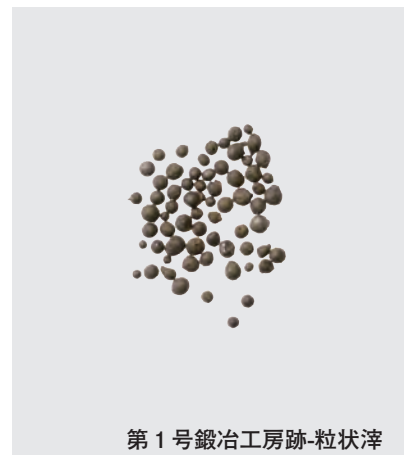
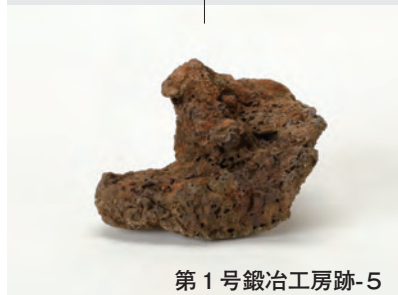
PL46



第81・96号竖穴建物跡，第216号土坑，遺構外出土石器



第35号竖穴建物跡出土石製品，第63・86号竖穴建物跡，第37号掘立柱建物跡，第182号土坑，第55号沟跡出土石器



第27・35・46・74号竖穴建物跡，第1号鍛冶工房跡，第10号柱穴列，遺構外出土金属製品，第3号道路跡出土遺物

# 抄 録

ふりがな	こんだにしつほびーいせき2							
書名	金田西坪B遺跡2							
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXIII							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第449集							
著者名	野内智一郎 齋藤貴稚 パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2021(令和3)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
こんだにしつほびー 金田西坪B 遺跡	いばらきけん 茨城県つくば市 こんだあざにほんまつだい 金田字二本松台 1626-1番地ほか	08220 - 110	36度 07分 05秒	140度 09分 58秒	24 ~ 26m	201601201 ~ 20170331  20170401 ~ 20170630  20180801 ~ 20180930	4,470㎡  4,247㎡  279㎡	中根・金田 台特定土地 区画整理事 業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
金田西坪B 遺跡	狩猟場 集落跡	縄文	竪穴建物跡 土坑 陥し穴	4棟 22基 5基	縄文土器(深鉢・浅鉢), 石器 (石鏃・磨製石斧・石皿・凹石)			
	集落跡	弥生	竪穴建物跡 土坑	4棟 2基	弥生土器(壺・鉢), 土製品(紡 錘車)			
		古墳	竪穴建物跡 鍛冶工房跡 土坑	19棟 1棟 3基	土師器(坏・碗・壺・埴・高坏・ 鉢・小型甕・甕・甌・手捏), 土 製品(土玉・羽口・支脚), 石製 品(白玉・有孔円板・剣形品), 金属製品(釘・轡)			
		奈良	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 大型円形土坑 土坑 柱穴列 溝跡	13棟 25棟 1基 2基 2条 1条	土師器(坏・碗・甕・甌), 須 恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・ 鉢・捏鉢・長頸壺・横瓶・甕・甌・ 円面硯), 石器(砥石), 金属製 品(刀子・鉄鏃)			
		平安	竪穴建物跡	4棟	土師器(坏・高台付坏・小皿・ 甕・甌), 須恵器(坏・高台付坏・ 蓋・盤・鉢・甕), 石器(砥石), 金属製品(刀子)			
		中・近世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 道路跡	4棟 8基 3条 2条	陶器(碗), 磁器(碗), 金属製 品(煙管), 瓦(軒平瓦)			
	その他	時期不明	土坑 溝跡	109基 9条	縄文土器(深鉢), 土師器(坏・ 甕), 須恵器(坏), 陶器(碗)			
要約	今回の調査では、古墳時代から奈良時代を中心とする竪穴建物跡44棟、掘立柱建物跡29棟、鍛冶工房跡1棟、大型円形土坑1基、溝跡13条、陥し穴5基などを確認した。調査区は、河内郡衙を構成する郡司層の居宅跡と考えられる。建て替えを繰り返しながら倉庫や広場を整備していく居宅の様子が明らかとなった。							

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign CC
	図版作成	Adobe Illustrator CC
	写真調整	Adobe Photoshop CC
	Scanning	RICOH MPW4002
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold 見出ミンMA31 Pro, 太ミンA101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー210線以上
印刷		印刷所へは, Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第449集

つくば市

### 金田西坪B遺跡2

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXIII

令和3(2021)年3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社

〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2

TEL 029-231-4241





